

# 安養寺森西遺跡 大館馬場遺跡 阿久津宮内遺跡

一般国道17号（上武道路）改築工事に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告書

（ 本 文 編 ）

1995

群 馬 県 教 育 委 員 会  
(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団  
建 設 省



# 安養寺森西遺跡 大館馬場遺跡 阿久津宮内遺跡

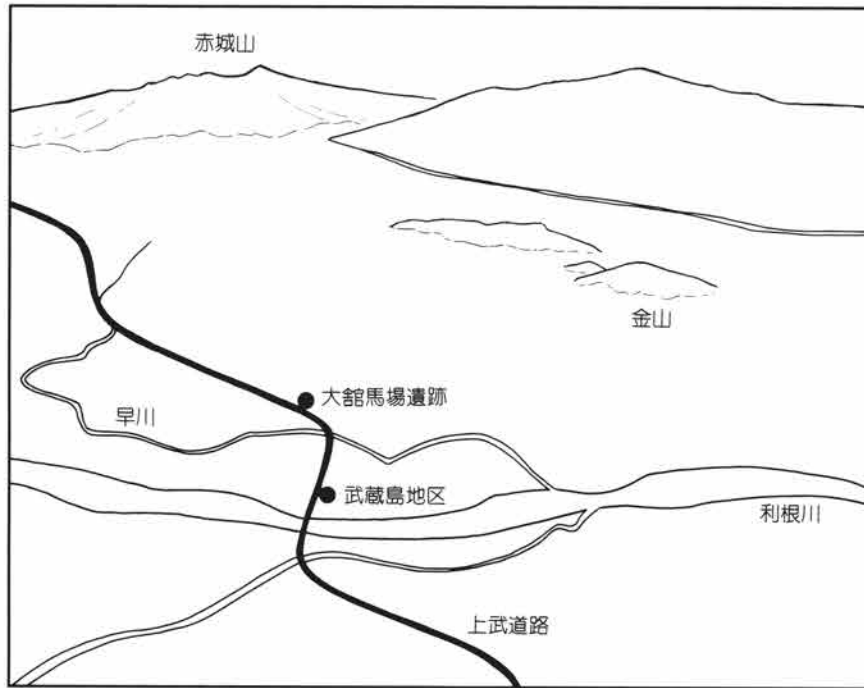
一般国道17号（上武道路）改築工事に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告書

（ 本 文 編 ）

1995

群 馬 県 教 育 委 員 会  
(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団  
建 設 省





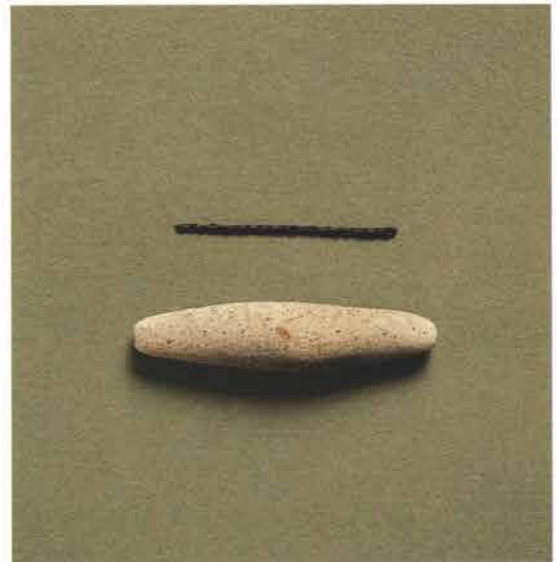
遺跡周辺を南側上空より望む



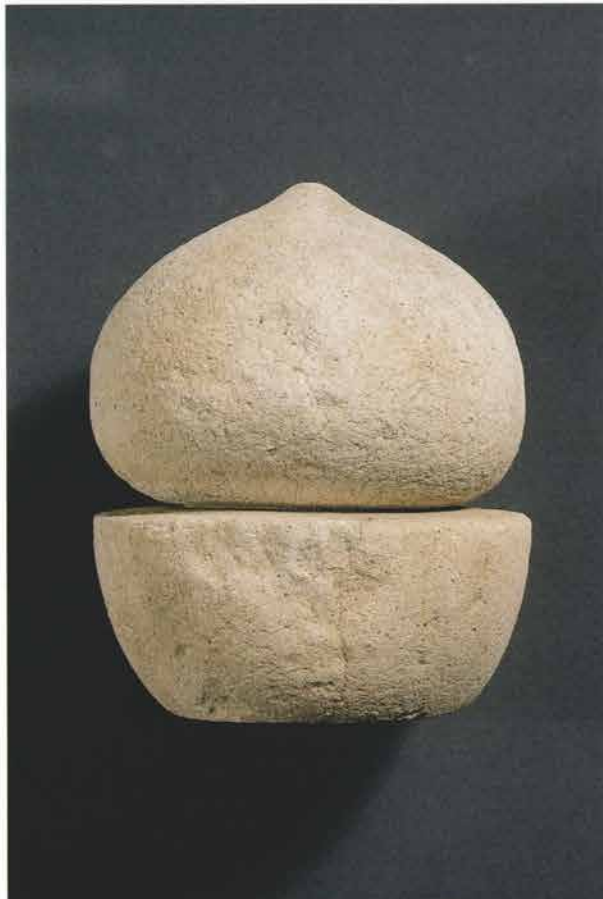
阿久津宮内遺跡の主な弥生時代遺物



AY-15号住居跡の奈良三彩小壺



AY-3号住居跡の土錐と炭化紐



AY-377号土坑の空風輪



主な船載磁器

## 序

上武道路は、東京日本橋から新潟に至る国道17号線の大規模バイパスの一環として、深谷バイパスから前橋市田口町の現道に接続する道路として計画されました。平成元年には国道50号線までのⅠ期工事が終了し、沿線地域の生活道として広く活用されています。

一方、この上武道路の通禍する地域は、群馬県内でも有数の埋蔵文化財包蔵地域であります。建設工事に先立ち、昭和48年度から15年間におよぶ発掘調査が行われ、また、整理事業も昭和53年度から着手されました。

本書は、昭和60～63年度にかけて、上武道路路線内の数多くの遺跡の中で最終の発掘調査遺跡となった安養寺森西遺跡・大館馬場遺跡・阿久津宮内遺跡の報告書ですが、竪穴住居跡、古墳、中世館跡など貴重な調査成果が報告されています。

発掘調査から報告書作成にいたるまで、建設省関東地方建設局、同高崎工事事務所、群馬県教育委員会、新田町教育委員会、地元関係者の皆さまには種々ご指導ご協力を賜りました。今回、報告書を上梓するに際し、これら関係者の皆さまに衷心より感謝の意を表し、併せて、本報告書が群馬県の歴史を解明する上で、広く活用されることを願い序とします。

平成7年3月

財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

理事長 **小寺弘之**

## 例 言

1. この報告書は、一般国道17号線(上武道路)改築工事に先行して行われた尾島遺跡群(安養寺森西遺跡・大館馬場遺跡・阿久津宮内遺跡)の発掘調査の記録である。
2. 安養寺森西遺跡は新田郡尾島町安養寺北原・西原・森西・森の内・森南・森東に、大館馬場遺跡は同町大館鍛冶屋・馬場に、阿久津宮内遺跡は同町阿久津宮内に所在し、現状は上武道路になっている。
3. 事業主体は建設省関東地方建設局である。
4. 発掘調査および整理事業は財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団が行った。
5. 発掘調査および整理事業の期間と体制は次のとおりである。

(発掘調査)

第1年度調査 昭和60年4月1日～昭和60年9月30日

担当 飯田陽一 新倉明彦 丸山公夫

第2年度調査 昭和62年8月1日～昭和63年3月31日

担当 飯島義雄 飯田陽一 大木紳一郎 坂井 隆 関根慎二 丸山公夫

第3年度調査 昭和63年4月1日～昭和63年9月30日

担当 飯田陽一 関根慎二 樋口康之

(整理事業) 平成5年10月1日～平成7年3月31日

担当 飯田陽一

市田武子 大塚とし子 金子ミツ子 坂庭常盤 須田はつ江 高橋裕美 新平美津子  
萩原由美子 橋爪美頼 長谷川公子 羽鳥望東子

遺物写真 佐藤元彦

保存処理 関 邦一 北爪健二 小材浩一

木器実測 当事業団スリースペース班

(事務局) 白石保三郎 邊見長雄 中村英一 井上唯雄 松本浩一 近藤 功 神保侑史 上原啓己

大沢秋良 田口紀雄 佐藤 勤 桜場一寿 能登 健 中東耕志

6. 本書の編集は飯田が現場担当者との協議のもとに行った。

本文の飯田以外の執筆者は本文目次に記した。

なお、国産陶磁器については大西雅弘、舶載陶磁器と木製品については大江正行、墨書釈文に高島英之の指導を得ている。

7. 人骨・獣骨の同定は宮崎重雄氏(群馬県立大間々高等学校)に、石材同定は飯島静男氏(群馬地質研究会)に依頼した。
8. 本遺跡の発掘調査および報告書作成にあたっては次の方々のご指導を得ている。  
金子規矩男氏 峰岸純夫氏 (故) 山崎 一氏
9. 調査記録、出土遺物などの資料は群馬県埋蔵文化財センターが保管し、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団が管理している。



10. 「本文編」に関する凡例は以下のとおりである。なお、遺物観察表の凡例については第2分冊「遺物観察表編・写真図版表」を参照されたい。

《遺構分類》遺構は竪穴住居、掘立柱建物、古墳、土坑墓、土器集石跡、溝の種類別に分類し、検出位置の区域毎に順を追って記載した。

それぞれの分類理由や特徴については各項で触れた。

《遺構番号》番号は竪穴住居跡、溝は各区毎、掘立柱建物、古墳、土坑墓、土器集石跡は調査区全体の通し番号とした。

《位置》遺構確認位置は、区とグリッド名で示し、全体の配置等については、各節のはじめに全体図を掲げて示した。

《平面形態》見かけ上の形状から、大まかに方形、長方形、楕円形、不定形に分類しており、これに隅丸、正、不整、等を付して個々の特徴を示した。厳密な規定を設けたわけではない。

《規模》確認面での長さ、幅、深さの最大値を計測して記した。ただし、竪穴住居跡については各辺の長さを記してある。

《面積》面積の記載のあるものは、原図上でデジタルプランメーターによる3回計測の平均値を記した。

《方位》挿図中の方位記号と本文の方位記載はすべて国家座標上の北を示している。

《遺物》出土遺物のうち、図示できるものは可能な限り掲載し、掲載できなかったものについては本文中に概要を記載した。

《重複遺構》調査段階の所見を元に、各遺構の新旧関係を示した。ただし、明らかな矛盾のあるものは整理段階で訂正を加え、調査所見と共に記載した。

《略称》重複する遺構については、記載スペースの都合上、「1号竪穴住居跡」を「1住」、「2号掘立柱建物跡」を「2掘立」、「ピット3」を「P3」のように略語を使用した。

《縮尺》遺構図版は竪穴住居跡を1/60、掘立柱建物跡を1/80、カマドを1/30に統一した。古墳と溝については遺構毎に異なるので、各図版のスケールを参照されたい。

遺物図版は大形土器1/4、小型土器・石製品・鉄製品1/3、石塔類・石臼1/6、内耳土器・瓦類1/5、縄文・弥生土器拓影1/2、その他小型品1/2～等倍を原則として掲載した。

《網掛け・墨潰し》遺構図で使用した網掛け部分は、焼土・粘土・灰の分布を示した。

遺物図の網掛け部分は、灰釉・緑釉等の施釉部分を示した。また縄文土器の網掛け部分は繊維の混入を示し、断面の墨潰し部分は遺物の種類や質とは無関係である。

# 目 次

序	96
例 言	97
第 I 章 調査の経緯と調査の方法	98
1 調査に至る経緯	100
2 調査の方法と遺跡の標準土層	101
3 調査日誌抄	102
4 整理作業の経緯と方法	102
第 II 章 遺跡周辺の地理的・歴史的環境	103
1 遺跡周辺の地理と地形 (丸山公夫)	104
2 周辺遺跡と歴史的環境 (丸山公夫)	106
第 III 章 調査された遺構と遺物	108
(1) 氾濫層上の調査	109
1 竪穴住居	111
AY-1号住居跡	112
AY-2号住居跡	113
AY-3号住居跡	114
AY-4号住居跡	114
AY-5号住居跡	115
AY-6号住居跡	117
AY-7号住居跡	118
AY-8号住居跡	119
AY-9号住居跡	119
AY-10号住居跡	120
AY-11号住居跡	120
AY-12号住居跡	121
AY-13号住居跡	122
AY-14号住居跡	122
AY-15号住居跡	123
AY-16号住居跡	123
AY-17号住居跡	123
AY-18号住居跡	124
AY-19号住居跡	124
AY-20号住居跡	124
AY-21号住居跡	125
AY-22号住居跡	126
AY-23号住居跡	126
AY-24号住居跡	127
AY-25号住居跡	128
AY-26号住居跡	129
AY-27号住居跡	129
AY-28号住居跡	130
AY-29号住居跡	131
AY-30号住居跡	131
AY-31号住居跡	132
AY-32号住居跡	132
AY-33号住居跡	133
AY-34号住居跡	133
AY-35号住居跡	134
AY-36号住居跡	135
AY-37号住居跡	136
AY-38号住居跡	137
AY-39号住居跡	137
AK-1号住居跡	138
AK-2号住居跡	138
2 館およびその上層の近世・近代遺物	139
3 掘立柱建物	140
AY-1号掘立柱建物跡	141
AY-2号掘立柱建物跡	142
AY-3号掘立柱建物跡	143
AY-4号掘立柱建物跡	143
AY-5号掘立柱建物跡	143
AY-6号掘立柱建物跡	143
AY-7号掘立柱建物跡	143
AY-8号掘立柱建物跡	143
AY-9号掘立柱建物跡	143
AY-10号掘立柱建物跡	143
AY-11号掘立柱建物跡	143
AY-12号掘立柱建物跡	143
AY-13号掘立柱建物跡	143
AY-14号掘立柱建物跡	143
AY-15号掘立柱建物跡	143
OT-1号掘立柱建物跡	143
OT-2号掘立柱建物跡	143
OT-3号掘立柱建物跡	143
OT-4号掘立柱建物跡	143
4 溝	143
AY-1号溝	143
AY-2号溝	143
AY-3号溝	143
AY-4号溝	143
AY-5号溝	143
AY-6号溝	143
AY-7号溝	143
AY-8号溝	143
AY-9号溝	143
AY-10号溝	143
AY-11号溝	143
AY-12号溝	143
AY-13号溝	143
AY-14号溝	143
AY-15号溝	143
AY-16号溝	143
AY-17号溝	143
AY-18号溝	143
AY-19号溝	143
AY-20号溝	143
AY-21号溝	143
AY-22号溝	143
AY-23号溝	143
AY-24号溝	143
AY-25号溝	143
AY-26号溝	143
AY-27号溝	143
AY-28号溝	143
AY-29号溝	143
AY-30号溝	143
AY-31号溝	143
AY-32号溝	143
AY-33号溝	143
AY-34号溝	143
AY-35号溝	143
OT-1号溝	143
OT-2号溝	143
OT-3号溝	143
OT-4号溝	143

OT-5号溝	144	AK-10号井戸	231
OT-6号溝	145	AK-11号井戸	231
AK-1号溝	146	AK-12号井戸	232
AK-2号溝	147	AK-13号井戸	232
AK-3号溝	149	AK-14号井戸	232
AK-4号溝	150	AK-15号井戸	233
AK-5号溝	151	AK-16号井戸	233
AK-6号溝	151	6 火葬土坑	234
AK-7号溝	152	1号火葬土坑	234
AK-8号溝	153	2号火葬土坑	235
AK-9号溝	153	3号火葬土坑	235
5 井戸	154	4号火葬土坑	235
AY-1号井戸	155	5号火葬土坑	236
AY-2号井戸	155	7 墓坑	237
AY-3号井戸	159	AY-1号墓坑	237
AY-4号井戸	160	AY-2号墓坑	237
AY-5号井戸	160	AY-3号墓坑	238
AY-6号井戸	161	AY-4号墓坑	238
AY-7号井戸	161	AY-5号墓坑	239
AY-8号井戸	177	AY-6号墓坑	239
AY-9号井戸	179	AY-7号墓坑	239
AY-10号井戸	190	OT-1号墓坑	240
AY-11号井戸	191	OT-2号墓坑	240
AY-12号井戸	202	AK-1号墓坑	240
AY-13号井戸	203	8 桶土坑	241
AY-14号井戸	203	1号桶土坑	241
AY-16号井戸	204	2~4号桶土坑	242
AY-17号井戸	209	5・6号桶土坑	242
AY-18号井戸	211	7~9号桶土坑	242
AY-19号井戸	212	9 土坑	243
AY-20号井戸	211	安養寺森西遺跡	244
AY-21号井戸	213	大館馬場遺跡	279
OT-1号井戸	216	阿久津宮内遺跡	288
OT-2号井戸	216	10 遺構外出土の遺物	324
OT-3号井戸	217	(2) 氈蓋層下	
OT-4号井戸	217	11 縄紋時代の遺物 (関根慎二)	326
OT-5号井戸	218	12 弥生時代の遺構と遺物	327
OT-6号井戸	218	土器	328
OT-7号井戸	219	石器 (岩崎泰一)	332
OT-8号井戸	219	13 氈蓋層下竪穴住居	368
OT-9号井戸	219	14 氈蓋層下壘	370
OT-10号井戸	222	(3) 武蔵島地区の試掘調査	384
OT-11号井戸	220	第IV章 自然科学的分析	386
OT-12号井戸	221	1 ブラント・オパール分析 (古環境研究所)	386
OT-13号井戸	222	2 花粉分析 (パリノ・ザーヴェイ)	388
OT-14号井戸	224	3 種子同定 (パリノ・ザーヴェイ)	389
OT-15号井戸	224	4 樹種同定 (藤根久)	390
OT-16号井戸	224	5 人骨・獣骨 (宮崎重雄)	396
OT-17号井戸	225	第V章 成果と問題点	403
OT-18号井戸	226	1 遺跡変遷の概要	403
OT-19号井戸	226	2 古代の特筆される遺物	403
OT-20号井戸	227	3 中世館跡と石造物 (新倉明彦)	405
OT-21号井戸	227	4 近世の遺構と遺物	406
AK-1号井戸	228	報告書抄録	
AK-2号井戸	228		
AK-3号井戸	228		
AK-4号井戸	229		
AK-5号井戸	229		
AK-6号井戸	229		
AK-7号井戸	230		
AK-8号井戸	230		
AK-9号井戸	231		

# 挿 図 目 次

第 1 図	遺跡位置図	1	第 61 図	AY-29号住居および出土遺物	63
第 2 図	調査範囲図	2	第 62 図	AY-30号住居および出土遺物	64
第 3 図	遺跡配置および調査区略図	3	第 63 図	AY-31号住居および遺物出土状態	65
第 4 図	グリッド表示図 (1:200)	4	第 64 図	AY-31号住居カマドおよび出土遺物	66
第 5 図	標準土層	4	第 65 図	AY-32号住居とカマドおよび出土遺物	67
第 6 図	尾島町の地形分類図 (澤口原図)	7	第 66 図	AY-33号住居	68
第 7 図	周辺字名	8	第 67 図	AY-33号住居遺物出土状態	69
第 8 図	周辺遺跡	10	第 68 図	AY-33号住居出土遺物(1)	69
第 9 図	安養寺森西遺跡住居配置図 (1)	13	第 69 図	AY-33号住居出土遺物(2)	70
第 10 図	安養寺森西遺跡・阿久津宮内遺跡 住居配置図	14	第 70 図	AY-34号住居および出土遺物	71
第 11 図	AY-1号住居および出土遺物	15	第 71 図	AY-35号住居および出土遺物	72
第 12 図	AY-2号住居および出土遺物	16	第 72 図	AY-36号住居および遺物出土状態	73
第 13 図	AY-3号住居および遺物出土状態	17	第 73 図	AY-36号住居出土遺物(1)	74
第 14 図	AY-3号住居出土遺物(1)	18	第 74 図	AY-36号住居出土遺物(2)	75
第 15 図	AY-3号住居出土遺物(2)	19	第 75 図	AY-37号住居およびカマド	76
第 16 図	AY-4号住居	20	第 76 図	AY-38号住居と灰分布図および出土遺物	77
第 17 図	AY-4号住居カマドおよび出土遺物	21	第 77 図	AY-39号住居およびカマド	78
第 18 図	AY-5号住居および出土遺物	22	第 78 図	AY-39号住居出土遺物	79
第 19 図	AY-6号住居	23	第 79 図	AK-1号住居および遺物出土状態	80
第 20 図	AY-6号住居カマド	24	第 80 図	AK-1号住居カマドおよび出土遺物	81
第 21 図	AY-6号住居出土遺物	24	第 81 図	AK-2号住居および焼土分布図	82
第 22 図	AY-7号住居および遺物出土状態	25	第 82 図	AK-2号住居遺物出土状態および出土遺物	83
第 23 図	AY-7号住居出土遺物	26	第 83 図	館跡想定図および館堀配置図	84
第 24 図	AY-8号住居およびカマド	27	第 84 図	館堀(北堀)と出土遺物	85
第 25 図	AY-8号住居出土遺物	28	第 85 図	館堀(南堀)	86
第 26 図	AY-9号住居	29	第 86 図	館堀(南堀)出土遺物	87
第 27 図	AY-9号住居出土遺物	30	第 87 図	館堀の堀上の近世・近代遺物(1)	88
第 28 図	AY-10号住居および出土遺物	31	第 88 図	館堀の堀上の近世・近代遺物(2)	89
第 29 図	AY-11号住居	32	第 89 図	館堀の堀上の近世・近代遺物(3)	90
第 30 図	AY-11号住居掘り方およびカマド	33	第 90 図	館堀の堀上の近世・近代遺物(4)	91
第 31 図	AY-11号住居出土遺物	34	第 91 図	安養寺森西遺跡掘立柱建物配置図	92
第 32 図	AY-12号住居および出土遺物	35	第 92 図	AY-1号掘立柱建物	93
第 33 図	AY-13号住居	36	第 93 図	AY-2号掘立柱建物	94
第 34 図	AY-13号住居カマドおよび遺物出土状態	37	第 94 図	AY-3号掘立柱建物	95
第 35 図	AY-13号住居出土遺物(1)	38	第 95 図	AY-4号掘立柱建物	96
第 36 図	AY-13号住居出土遺物(2)	39	第 96 図	AY-5号掘立柱建物	97
第 37 図	AY-14号住居	40	第 97 図	AY-6号掘立柱建物	98
第 38 図	AY-14号住居出土遺物	41	第 98 図	AY-6号掘立柱建物断面図	99
第 39 図	AY-15号住居	42	第 99 図	AY-7号掘立柱建物	100
第 40 図	AY-15号住居出土遺物	43	第100 図	AY-8号掘立柱建物	101
第 41 図	AY-16号住居および出土遺物	44	第101 図	AY-9号掘立柱建物	102
第 42 図	AY-17号住居および出土遺物	45	第102 図	AY-10号掘立柱建物	102
第 43 図	AY-18号住居および出土遺物	46	第103 図	AY-11号掘立柱建物	103
第 44 図	AY-19号住居およびカマド	47	第104 図	AY-12号掘立柱建物	104
第 45 図	AY-19号住居出土遺物	48	第105 図	AY-12号掘立柱建物断面図	105
第 46 図	AY-20号住居およびカマド	49	第106 図	AY-13号掘立柱建物断面図	106
第 47 図	AY-20号住居出土遺物	50	第107 図	AY-13号掘立柱建物	107
第 48 図	AY-21号住居および出土遺物	51	第108 図	AY-14号掘立柱建物	108
第 49 図	AY-22号住居および出土遺物	52	第109 図	AY-15号掘立柱建物	109
第 50 図	AY-23号住居および出土遺物	53	第110 図	大館馬場・阿久津宮内遺跡 掘立柱建物配置図	110
第 51 図	AY-24号住居	54	第111 図	OT-1号掘立柱建物	111
第 52 図	AY-24号住居カマド	55	第112 図	OT-1号掘立柱建物断面図	112
第 53 図	AY-24号住居出土遺物	55	第113 図	OT-2号掘立柱建物	112
第 54 図	AY-25号住居およびカマド	56	第114 図	OT-3号掘立柱建物	113
第 55 図	AY-25号住居出土遺物	57	第115 図	OT-4号掘立柱建物	114
第 56 図	AY-26号住居	58	第116 図	OT-5号掘立柱建物	114
第 57 図	AY-27号住居	59	第117 図	OT-6号掘立柱建物	115
第 58 図	AY-27号住居出土遺物	60	第118 図	AK-1号掘立柱建物	116
第 59 図	AY-28号住居	61	第119 図	AK-1号掘立柱建物断面図	117
第 60 図	AY-28号住居出土遺物	62	第120 図	AK-2号掘立柱建物	118
			第121 図	AY-1号溝および出土遺物	119

第122図	AY-2・3号溝	120
第123図	AY-4号溝	121
第124図	AY-5・6号溝	122
第125図	AY-7・8・9号溝	123
第126図	AY-10・11・12号溝	124
第127図	AY-13号溝	125
第128図	AY-14・15号溝	126
第129図	AY-16号溝および出土遺物	127
第130図	AY-17号溝	128
第131図	AY-18・19号溝	129
第132図	AY-20号溝および出土遺物	130
第133図	AY-21・22号溝	131
第134図	AY-23・24号溝	132
第135図	AY-25・26号溝および出土遺物	133
第136図	AY-27号溝および出土遺物	134
第137図	AY-28号溝	135
第138図	AY-29号溝および出土遺物	136
第139図	AY-30・31号溝および出土遺物	137
第140図	AY-32・33号溝	138
第141図	AY-34号溝	139
第142図	AY-35号溝	140
第143図	OT-1号溝	141
第144図	OT-2号溝	142
第145図	OT-3・4号溝および出土遺物	143
第146図	OT-5号溝および出土遺物	144
第147図	OT-6号溝および出土遺物	145
第148図	AK-1号溝および出土遺物	146
第149図	AK-2号溝	147
第150図	AK-2号溝出土遺物	148
第151図	AK-3号溝	149
第152図	AK-4号溝	150
第153図	AK-5・6号溝	151
第154図	AK-7号溝	152
第155図	AK-8・9号溝	153
第156図	安養寺森西遺跡井戸配置図	154
第157図	AY-1・2号井戸	155
第158図	AY-1号井戸出土遺物(1)	156
第159図	AY-1号井戸出土遺物(2)	157
第160図	AY-2号井戸出土遺物	158
第161図	AY-3号井戸および出土遺物	159
第162図	AY-4・5号井戸および出土遺物	160
第163図	AY-6・7号井戸および出土遺物	161
第164図	AY-7号井戸出土遺物(1)	162
第165図	AY-7号井戸出土遺物(2)	163
第166図	AY-7号井戸出土遺物(3)	164
第167図	AY-7号井戸出土遺物(4)	165
第168図	AY-7号井戸出土遺物(5)	166
第169図	AY-7号井戸出土遺物(6)	167
第170図	AY-7号井戸出土遺物(7)	168
第171図	AY-7号井戸出土遺物(8)	169
第172図	AY-7号井戸出土遺物(9)	170
第173図	AY-7号井戸出土遺物(10)	171
第174図	AY-7号井戸出土遺物(11)	172
第175図	AY-7号井戸出土遺物(12)	173
第176図	AY-7号井戸出土遺物(13)	174
第177図	AY-7号井戸出土遺物(14)	175
第178図	AY-7号井戸出土遺物(15)	176
第179図	AY-8号井戸および出土遺物(1)	177
第180図	AY-8号井戸出土遺物(2)	178
第181図	AY-9号井戸および出土遺物(1)	179
第182図	AY-9号井戸出土遺物(2)	180
第183図	AY-9号井戸出土遺物(3)	181
第184図	AY-9号井戸出土遺物(4)	182
第185図	AY-9号井戸出土遺物(5)	183

第186図	AY-9号井戸出土遺物(6)	184
第187図	AY-9号井戸出土遺物(7)	185
第188図	AY-9号井戸出土遺物(8)	186
第189図	AY-9号井戸出土遺物(9)	187
第190図	AY-9号井戸出土遺物(10)	188
第191図	AY-9号井戸出土遺物(11)	189
第192図	AY-10号井戸および出土遺物	190
第193図	AY-11号井戸および出土遺物(1)	191
第194図	AY-11号井戸出土遺物(2)	192
第195図	AY-11号井戸出土遺物(3)	193
第196図	AY-11号井戸出土遺物(4)	194
第197図	AY-11号井戸出土遺物(5)	195
第198図	AY-11号井戸出土遺物(6)	196
第199図	AY-11号井戸出土遺物(7)	197
第200図	AY-11号井戸出土遺物(8)	198
第201図	AY-11号井戸出土遺物(9)	199
第202図	AY-11号井戸出土遺物(10)	200
第203図	AY-11号井戸出土遺物(11)	201
第204図	AY-12号井戸および出土遺物	202
第205図	AY-13・14号井戸および出土遺物	203
第206図	AY-16号井戸	204
第207図	AY-16号井戸出土遺物(1)	205
第208図	AY-16号井戸出土遺物(2)	206
第209図	AY-16号井戸出土遺物(3)	207
第210図	AY-16号井戸出土遺物(4)	208
第211図	AY-17号井戸	209
第212図	AY-17号井戸出土遺物	210
第213図	AY-18・20号井戸および出土遺物	211
第214図	19号井戸および出土遺物	212
第215図	21号井戸および出土遺物	213
第216図	21号井戸出土遺物	214
第217図	大館馬場・阿久津宮内遺跡井戸配置図	215
第218図	OT-1・2号井戸	216
第219図	OT-3・4号井戸	217
第220図	OT-5・6号井戸	218
第221図	OT-7～9号井戸および出土遺物	219
第222図	OT-11号井戸および出土遺物	220
第223図	OT-12号井戸および出土遺物	221
第224図	OT-10号井戸	222
第225図	OT-13号井戸	222
第226図	OT-13号井戸出土遺物	223
第227図	OT-14～16号井戸および出土遺物	224
第228図	OT-17号井戸および出土遺物	225
第229図	OT-18・19号井戸	226
第230図	OT-20・21号井戸	227
第231図	AK-1～3号井戸および出土遺物	228
第232図	AK-4～6号井戸	229
第233図	AK-7・8号井戸	230
第234図	AK-9～11号井戸	231
第235図	AK-12～14号井戸	232
第236図	AK-15・16号井戸	233
第237図	火葬土坑配置図	234
第238図	OT-1号火葬土坑	234
第239図	OT-2・3・4号火葬土坑	235
第240図	OT-5号火葬土坑	236
第241図	OT-6号火葬土坑	236
第242図	AY-1・2号墓墳および出土遺物	237
第243図	AY-3・4号墓墳および出土遺物	238
第244図	AY-5～7号墓墳	239
第245図	OT-1・2号墓墳および出土遺物	240
第246図	AK-1号墓墳	240
第247図	桶土坑配置図	241
第248図	AY-1号桶土坑および出土遺物	241
第249図	AY-2～9号桶土坑	242

第250図	A区	AY-1~12号土坑	244	第307図	縄紋時代出土遺物	326
第251図	B区	AY-13~27号土坑	245	第308図	弥生時代出土土器(1)	328
第252図	B区	AY-28~44号土坑	246	第309図	弥生時代出土土器(2)	329
第253図	B区	AY-45~62号土坑	247	第310図	弥生時代出土土器(3)	330
第254図	B区	AY-63~78号土坑	248	第311図	弥生時代出土土器(4)	331
第255図	B区	AY-79~87号土坑		第312図	弥生時代出土土器(1)	335
	C区	AY-88~95号土坑	249	第313図	弥生時代出土土器(2)	336
第256図	C区	AY-96~109号土坑	250	第314図	弥生時代出土土器(3)	338
第257図	C区	AY-110~121号土坑	251	第315図	弥生時代出土土器(4)	339
第258図	C区	AY-122~133号土坑	252	第316図	弥生時代出土土器(5)	340
第259図	C区	AY-134~147号土坑	253	第317図	弥生時代出土土器(6)	341
第260図	C区	AY-148~157号土坑	254	第318図	弥生時代出土土器(7)	342
第261図	C区	AY-158~172号土坑	255	第319図	接合資料-1	344
第262図	C区	AY-173~184号土坑	256	第320図	接合資料-2	345
第263図	C区	AY-185~193号土坑	257	第321図	接合資料-3	346
第264図	C区	AY-194~203号土坑		第322図	接合資料-4	347
	D区	AY-204~207号土坑	258	第323図	接合資料-5	348
第265図	D区	AY-208~219号土坑	259	第324図	接合資料-6	349
第266図	D区	AY-220~232号土坑	260	第325図	接合資料-7	350
第267図	D区	AY-233~241号土坑		第326図	接合資料-8	352
	E区	AY-242~247号土坑	261	第327図	接合資料-9	353
第268図	E区	AY-248~263号土坑	262	第328図	接合資料-10	354
第269図	E区	AY-264~280号土坑	263	第329図	接合資料-11	355
第270図	E区	AY-281~297号土坑	264	第330図	接合資料-12	356
第271図	E区	AY-298~311号土坑	265	第331図	石器と土器の分布	359
第272図	E区	AY-312~330号土坑	266	第332図	土器と石器の垂直分布図	360
第273図	E区	AY-331~347号土坑	267	第333図	石材別分布	361
第274図	E区	AY-349~362号土坑	268	第334図	石器の分布	362
第275図	E区	AY-363~378号土坑	269	第335図	接合資料の分布(黒色安山岩)	363
第276図	E区	AY-379~393号土坑	270	第336図	接合資料の分布(チャート・黒色頁岩)	364
第277図	E区	AY-394~413号土坑	271	第337図	接合資料の分布(土器)	365
第278図	E区	AY-414~437号土坑	272	第338図	OT-1号住居遺物出土状態	368
第279図	E区	AY-438~456号土坑	273	第339図	OT-1号住居出土遺物	369
第280図	E区	AY-457~470号土坑	274	第340図	AY-C・D区氾濫層下第1面島	370
第281図	E区	AY-471~478号土坑		第341図	AY-C区氾濫層下第2面島	371
	F区	AY-479~486号土坑	275	第342図	AY-C・D区氾濫層下第3面島	371
第282図	F区	AY-487~508号土坑	276	第343図	AY-D・E区氾濫層下第1面島	372
第283図	F区	AY-509~523号土坑	277	第344図	AY-D区氾濫層下第2面島	373
第284図	F区	AY-524~535号土坑	278	第345図	AY-E区氾濫層下第2面島	373
第285図	F区	OT-1~13号土坑	279	第346図	AY-OT F区氾濫層下第1面島	374
第286図	F区	OT-14~27号土坑	280	第347図	AY-OT F区氾濫層下第3面島	374
第287図	F区	OT-28~43号土坑	281	第348図	OT-F・G区氾濫層下第1面島	375
第288図	F区	OT-44~59号土坑	282	第349図	OT-F・G区氾濫層下第3面島	375
第289図	F区	OT-60~75号土坑	283	第350図	OT-G・H区氾濫層下第2面島	376
第290図	F区	OT-76~92号土坑	284	第351図	OT-G・H区氾濫層下第3面島	
第291図	G区	OT-93~106号土坑	285		およびOT-H区氾濫層下第4面島	377
第292図	G区	OT-107~119号土坑	286	第352図	AK-H・I区氾濫層下第1面島	378
第293図	G区	OT-120~128号土坑		第353図	AY-D区氾濫層下第2面島遺物分布図	379
	H区	OT-129・130号土坑	287	第354図	AY-F区氾濫層下第2面島遺物分布図	380
第294図	H区	AK-1~11号土坑	288	第355図	氾濫層下島出土遺物(1)	381
第295図	H区	AK-12~23号土坑	289	第356図	氾濫層下島出土遺物(2)	382
第296図	H区	AK-24・25号土坑		第357図	氾濫層下島出土遺物(3)	383
	I区	AK-26~35号土坑	290	第358図	武蔵島地区試掘範囲図	384
第297図	I区	AK-36~43号土坑		第359図	土層柱状図	385
	J区	AK-44~46号土坑	291	第360図	土層断面図と分析試料の採取箇所	387
第298図	J区	AK-47~54号土坑	292	第361図	安養寺館と安養寺村絵図	404
第299図		土坑出土遺物(1)	293	第362図	蘇民将来と井戸模式図	407
第300図		土坑出土遺物(2)	294			
第301図		土坑出土遺物(3)	295			
第302図		土坑出土遺物(4)	296			
第303図		土坑出土遺物(5)	297			
第304図		土坑出土遺物(6)	298			
第305図		遺構外出土遺物(1)	324			
第306図		遺構外出土遺物(2)	325			

# 表 目 次

第 1 表	周辺遺跡一覧表	11
第 2 表	土坑一覧表 (安養寺森西遺跡)	299
	(大館馬場遺跡)	317
	(阿久津宮内遺跡)	322
第 3 表	石器・石材組成	332
第 4 表	器種別石材組成	332
第 5 表	石器・石材組成(位置不明)	333
第 6 表	機種別石材組成(位置不明)	333
第 7 表	石器計測値一覧	366
第 8 表	出土石器の接合資料	367
第 9 表	石器の組成	367
第 10 表	プラント・オパールの検出結果	387
第 11 表	花粉分析結果	388
第 12 表	検出種実個体数	389
第 13 表	木製品の樹種	394
第 14 表	木製品別の樹種	395
第 15 表	土坑出土人骨一覧	399
第 16 表	馬歯一覧	402
第 17 表	安養寺関係年表	406

# 遺物観察表・写真図版編 目次 (抄)

遺物観察表		PL-43	AY-11号井戸出土遺物
1	竪穴住居出土遺物……………	PL-44	AY-16号井戸出土遺物
2	館跡の掘出土遺物……………	PL-45	AY-17・21号井戸出土遺物
3	溝出土遺物……………	PL-46	OT-11・13・17号井戸 およびAK-3号井戸出土遺物
4	井戸出土遺物……………	PL-47	OT-1～6号火葬土坑
5	墓壇出土遺物……………	PL-48	AY-1～7号墓壇 OT-1・2号墓壇 AK-1号墓壇
6	桶土坑出土遺物……………	PL-49	AY-2・4号墓壇 およびOT-1号墓壇出土遺物
7	土坑出土遺物……………	PL-50	AY-1～9号桶土坑 およびAY-1号桶土坑出土遺物
8	遺構外の遺物……………	PL-51	AY-1～20号土坑
9	弥生時代の遺物……………	PL-52	AY-16～44号土坑
10	氾濫層下竪穴住居出土遺物……………	PL-53	AY-45～61号土坑
11	氾濫層下畝出土遺物……………	PL-54	AY-62～79号土坑
		PL-55	AY-83～116号土坑
		PL-56	AY-117～169号土坑
		PL-57	AY-170～193号土坑
		PL-58	AY-197～242号土坑
		PL-59	AY-247～263号土坑
		PL-60	AY-264～282号土坑
		PL-61	AY-283～307号土坑
		PL-62	AY-310～336号土坑
		PL-63	AY-337～355号土坑
		PL-64	AY-356～376号土坑
		PL-65	AY-377～400号土坑
		PL-66	AY-401～442号土坑
		PL-67	AY-443～464号土坑
		PL-68	AY-459～512号土坑
		PL-69	AY-486～512号土坑
		PL-70	AY-509～529号土坑
		PL-71	AY-509～535号土坑 OT-1～17号土坑
		PL-72	OT-18～40号土坑
		PL-73	OT-36～71号土坑
		PL-74	OT-72～99号土坑
		PL-75	OT-100～121号土坑
		PL-76	OT-122～130号土坑 AK-1～6号土坑
		PL-77	AK-7～21号土坑
		PL-78	AK-22～37号土坑
		PL-79	AK-36～53号土坑
		PL-80	土坑出土遺物(1)
		PL-81	土坑出土遺物(2)および遺構外の遺物
		PL-82	弥生時代の遺構
		PL-83	弥生時代の遺物 土器(1)
		PL-84	弥生時代の遺物 土器(2)
		PL-85	弥生時代の遺物 石器(1)
		PL-86	弥生時代の遺物 石器(2)
		PL-87	弥生時代の遺物 石器(3)
		PL-88	弥生時代の遺物 石器(4)
		PL-89	氾濫層下竪穴住居と出土遺物
		PL-90	氾濫層下畝(1)
		PL-91	氾濫層下畝(2)
		PL-92	氾濫層下畝(3)
		PL-93	氾濫層下畝出土遺物(1)
		PL-94	氾濫層下畝出土遺物(2)
		PL-95	花粉・種子同定資料
写真図版			
PL-1	遺跡全景		
PL-2	調査風景		
PL-3	AY-1～6・10号住居		
PL-4	AY-7～13号住居		
PL-5	AY-14～17号住居		
PL-6	AY-18～22号住居		
PL-7	AY-23～28号住居		
PL-8	AY-30～34号住居		
PL-9	AY-35～39号住居		
PL-10	竪穴住居出土遺物 (AY-1～3号住居)		
PL-11	竪穴住居出土遺物 (AY-4～7号住居)		
PL-12	竪穴住居出土遺物 (AY-8・9・11・13号住居)		
PL-13	竪穴住居出土遺物 (AY-14・15・19・20号住居)		
PL-14	竪穴住居出土遺物 (AY-21・23～25・27～29号住居)		
PL-15	竪穴住居出土遺物 (AY-31・33・35・36号住居)		
PL-16	竪穴住居出土遺物 (AY-36・38・39号住居)		
PL-17	AK-1・2号住居および出土遺物		
PL-18	中世館跡		
PL-19	中世館跡出土遺物および堀上の近世・近代遺物		
PL-20	AY-1～7号掘立柱建物		
PL-21	AY-8～13・15号掘立柱建物		
PL-22	OT-1～6号掘立柱建物 AK-1・2号掘立柱建物		
PL-23	AY-13・15・17～19号溝		
PL-24	AY-20・21・24・25号溝		
PL-25	AY-28～31号溝		
PL-26	AY-32～35号溝		
PL-27	OT-2～4号溝		
PL-28	OT-5・6号溝 AK-1・2号溝		
PL-29	AK-3～5号溝		
PL-30	AY-1・16号溝出土遺物 AK-1・2号溝出土遺物		
PL-31	AY-1～10号井戸		
PL-32	AY-11～13・15～21号井戸		
PL-33	OT-1～11号井戸		
PL-34	OT-12～21号井戸		
PL-35	AK-1～16号井戸		
PL-36	AY-2・6・7号井戸出土遺物		
PL-37	AY-7号井戸出土遺物		
PL-38	AY-7号井戸出土遺物		
PL-39	AY-7号井戸出土遺物		
PL-40	AY-8・9号井戸出土遺物		
PL-41	AY-9号井戸出土遺物		
PL-42	AY-9～11号井戸出土遺物		



# 第 I 章 発掘調査に至る経過と調査方法

## 1 調査に至る経緯

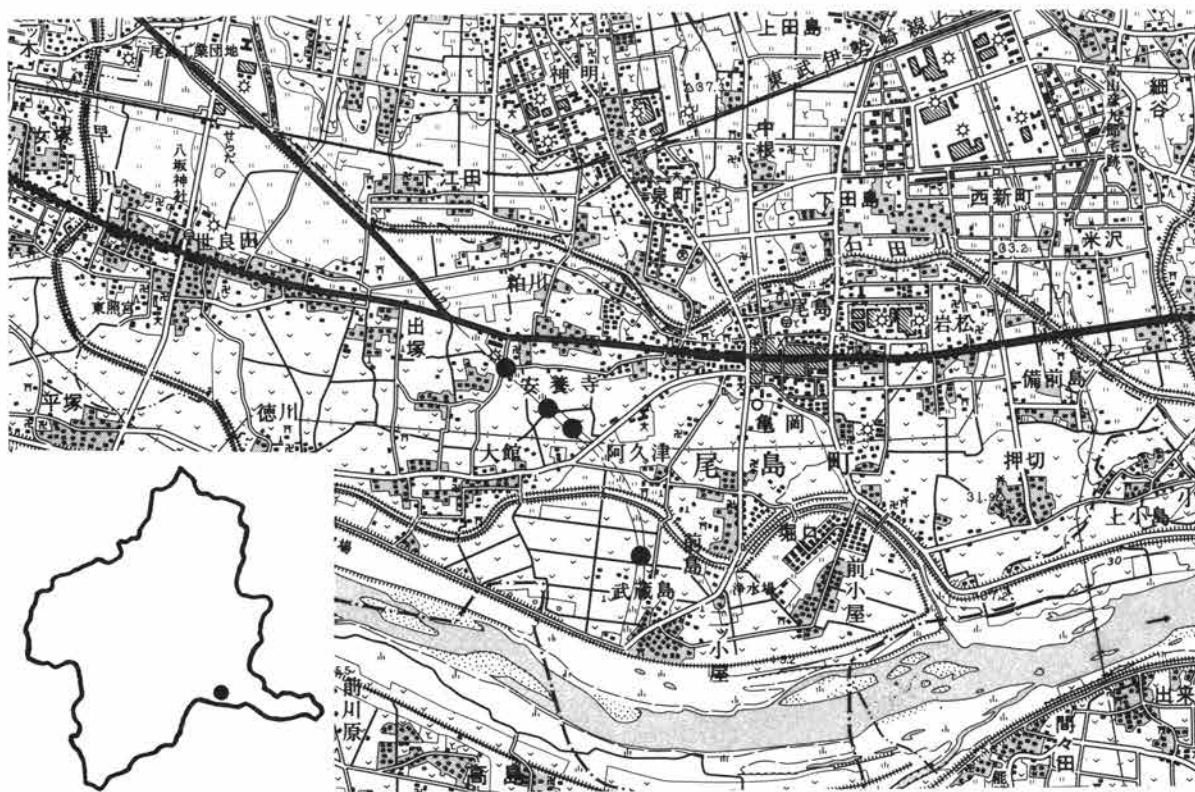
昭和46年建設省は、一般国道17号線の交通緩和のため、上武道路（国道17号線バイパス）の建設計画を発表した。計画路線は、埼玉県熊谷市で国道17号線と分岐し、利根川を渡り、群馬県に入る。県内では、新田郡尾島町・新田町、佐波郡境町・東村・赤堀町、伊勢崎市、前橋市、勢多郡富士見村を経て、前橋市田口町で再び国道17号線に接続される。この計画に伴い、上武道路が開通する地域の文化財保護と開発諸事業との調整をはかる資料作成のため、昭和46年度より埋蔵文化財分布調査が実施された。調査の結果、総数472件の埋蔵文化財対象地域が明らかになった。昭和46年11月に正式路線が発表され、昭和47年度尾島町から前橋市二之宮町の国道50号線間の埋蔵文化財対象地域について協議が行われ、昭和48年4月1日付で「一般国道17号線（上武道路）改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査の実施に関する

協定書」が締結された。これに基づき、昭和49年度から1班体制で県教育委員会により発掘調査は開始され、国道354号線以北は順次共用されてきた。

昭和53年に、県教育委員会は増大する埋蔵文化財発掘調査に対し、調査・研究および資料の保存・活用を目的として、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団を設置した。上武道路の伴う調査も、県教育委員会から本事業団が継続する事となった。調査は、工事の進捗に対応するよう昭和59年度から3班、昭和60年度から4班体制を取り、昭和63年度には国道50号線までの調査を終了した。

調査終了に伴って、工事は着工され、国道50号線から埼玉県までが開通した。

尾島遺跡群は国道354号線以南にあり、先の分布調査の結果、安養寺・大館・阿久津・武蔵島地内で、埋蔵文化財の分布が確認された。また、県道平塚尾



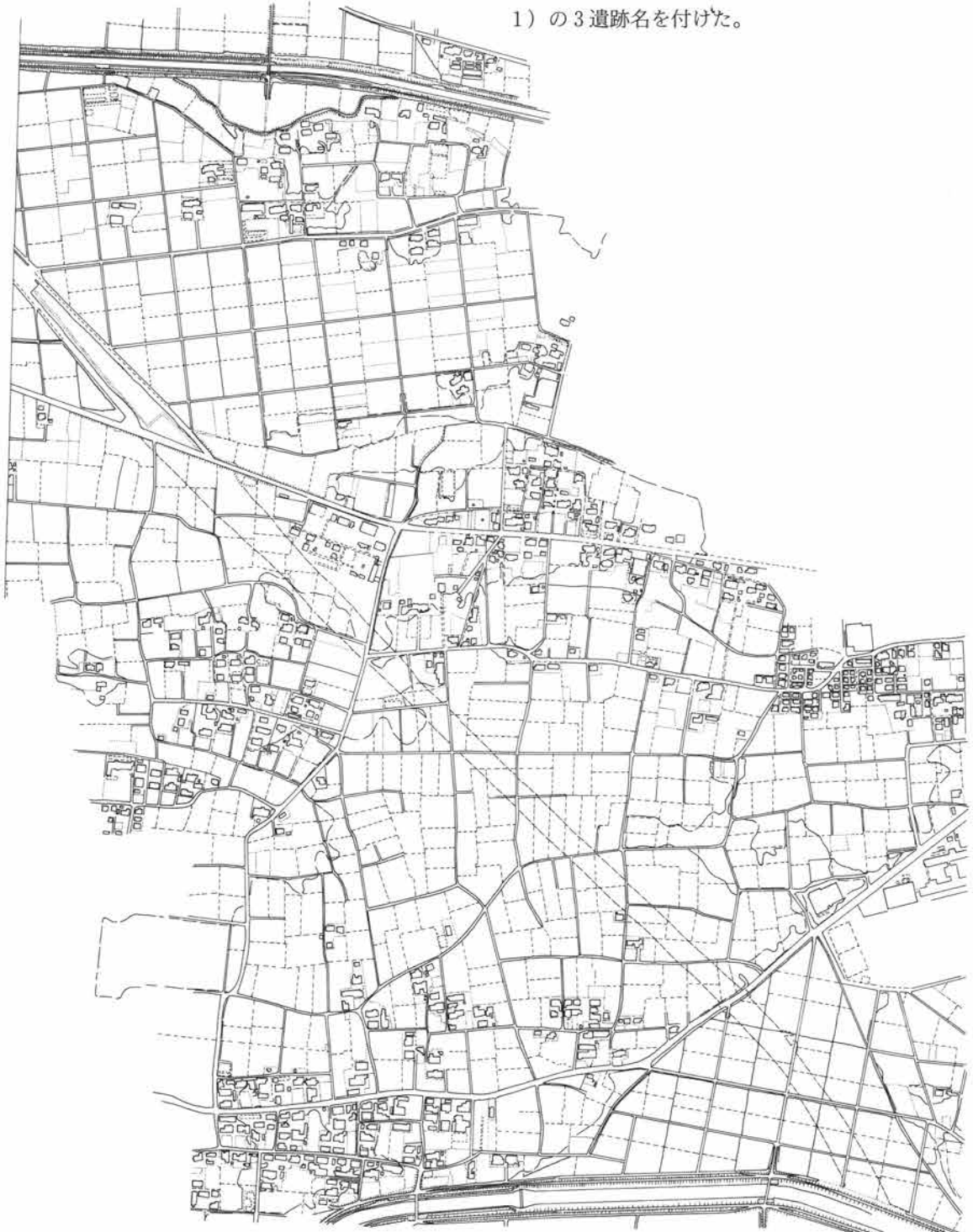
第 1 図 遺跡位置図

国土地理院 1：50000「深谷」

島線と早川の間は、群馬県教育委員会で行った試掘の結果、遺跡のないことがわかっていった。昭和60年度、本事業団で実施した試掘調査の結果、武蔵島地区では、遺構は検出されなかった。

本地域は、中世新田荘域に属し、新田氏関連の遺跡発見が期待された。

なお、遺跡名は、調査区を3つの大字に分け、それぞれの代表的な小字名を足して安養寺森西（JK03）・大館馬場（JK02-2）・阿久津宮内（JK02-1）の3遺跡名を付けた。



1 : 15000

第2図 調査範囲図

## 2 調査の方法と遺跡の標準土層

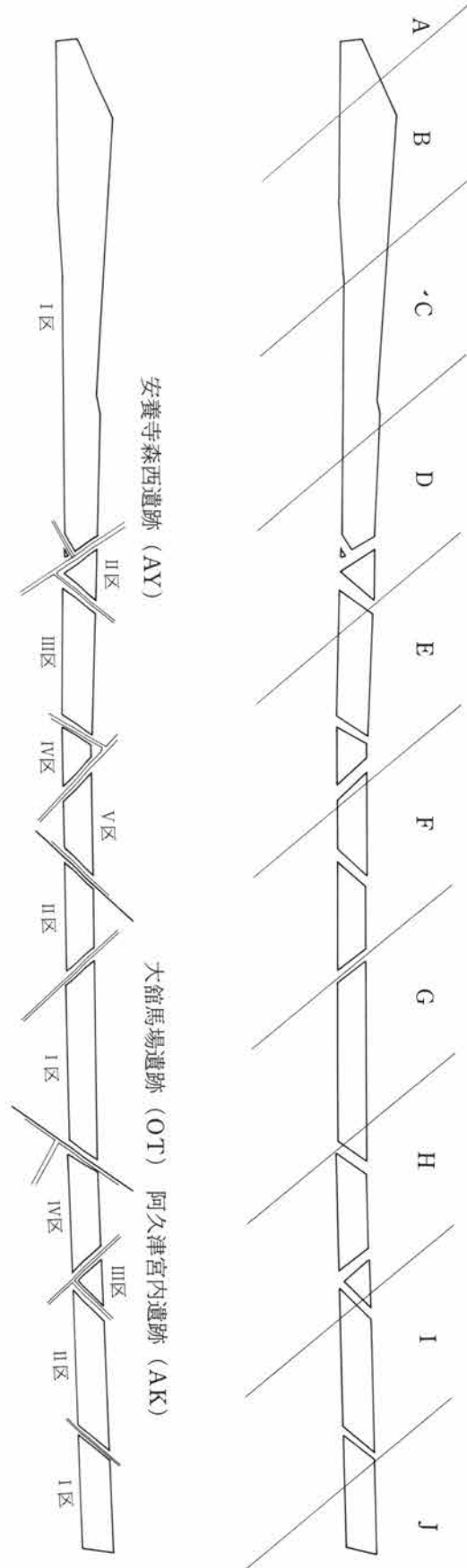
安養寺森西遺跡、大館馬場遺跡、阿久津宮内遺跡は、ステーションNo.74～No.135の範囲で、対象面積約25,000m<sup>2</sup>である。この地域は明治22年の迅速図では一面の桑園であるが、ヤマトイモやゴボウ等の根菜類の産地で、上武道路建設用地となる以前は、これらの畑地として利用されていた。表土下1mほどまでこれらの収穫時に使用されたトレンチャーの跡が数十cm間隔に東西に走り、遺構の遺存状態はあまりよくなかった。

調査区の設定は、調査時は第3図左のように、調査区を横断する道路をもとに区分した。しかし、調査が断続的に数次にわたって行われ、区の設定方法が不統一であったうえ、溝や畝など、遺跡をまたいでいる遺構が多いため、整理時に第3図右のように基準点測量を委託し、国家座標を用いた100m毎の区分に変更した。

安養寺森西遺跡、大館馬場遺跡、阿久津宮内遺跡はトレンチ調査で表土層を確認した後、重機による表土除去を行った。氾濫層下の畝調査時にも、一部重機を用いている。

遺構の調査はプラン確認後、セクションベルト設定または半截により、断面の記録に努めたが、埋没土が砂質土のため充分には調査できなかつものが多。井戸の調査は当初掘削委託により行ったが、安養寺森西遺跡B・C区の井戸は砂礫層内を掘込み構築されており、調査に危険を伴うため重機により半截し行った。また、畝跡の調査は、遺構調査のほかにプラント・オパール・種子分析を行った。

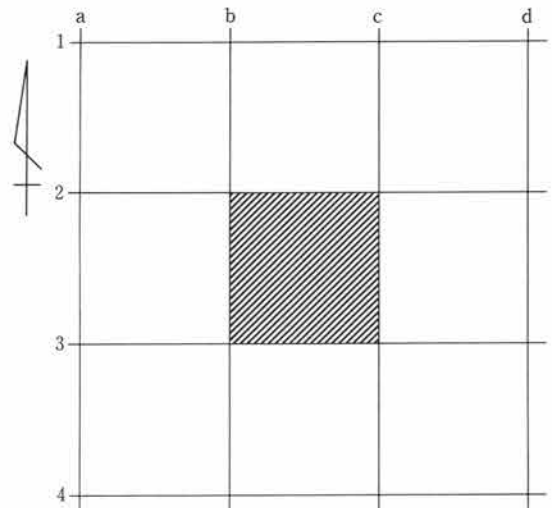
測量は、国家座標を基準に4×4mのグリッドを設け行った。グリッドの名称は、第4図のように北から南へ1・2・～24、西から東にA・B～Yとし、グリッド名は4×4mの北西交点で呼んだ。



第3図 遺跡配置および調査区略図

なお、第5図のとおり氾濫層が厚く堆積していて細かな分層の可能性だったE区 i・21グリッド東壁の断面を遺跡の標準土層とした。

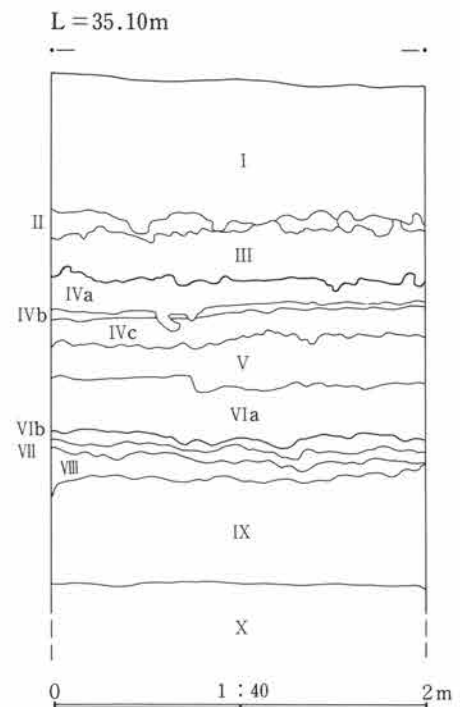
土坑の調査ではこれとは別に標準土層を作成している(243頁参照)。また、武蔵島地区の断面調査の記録も別に記載した(385頁参照)。



第4図 グリッド表示図 (1:200)

#### 標準土層説明

- I 暗褐色土層 硬くしめるが粘性は少ない。現在の耕作土で、耕耘が進み二ツ岳軽石等のバミスを含む。全体に均質。
- II におい黄褐色土層 硬くしまり粘性をもつ。シルト質。軽石の含有状態は1層と同じ。黄褐色斑文の濃淡がみられる。
- III 褐色土層 二ツ岳軽石等を混入する砂層。下位に大粒砂が堆積する。ラミナ状の堆積ではなく短時間で一気に堆積したと思われる。
- IVa 褐色土層 シルト層。二ツ岳軽石をわずかに含む。2~5mm大の点状の酸化鉄凝集がみられる。ほぼ水平の堆積を示す。
- IVb 灰黄褐色土層 シルト層。上位に黄橙の薄い(1cm以下)層が堆積する。4a、4cに比べ粘土質に近い。水平堆積。
- IVc におい黄褐色土層 シルト層。3枚の酸化鉄凝集の水平堆積層がはさまれる。4a層よりもやや粒子が粗い。
- V 暗褐色砂層 あずき大の二ツ岳軽石を含む層。全体的にラミナ状の堆積を示し、部分的にシルト質がみられ、この中に二ツ岳軽石が含まれる。
- VIa におい黄褐色土層 4cに比べやや灰色をおびる。4a~4cより粘土化が進む。水平堆積を示す藁が数本みられる。植物の茎あるいは根と思われる部分に鉄分が凝集し斑文(径2cm前後)となっている。軽石は含まない。
- VIb 黒褐色土層 粘土質。6aとほぼ同質で、7層との接触によって色調の変化をしたと思われる。
- VII 黒褐色土層 軟質で粘性が強い。粘土化は進んでいない。二ツ岳軽石を含む1~0.5cm大の細礫を含む。
- VIII 暗褐色砂層 5層とほぼ同質の砂を主体とし、1~5cm大の礫を含む。5層ほど顕著なラミナ状堆積はみられない。部分的に3mm大の二ツ岳軽石礫(いずれも楕円形)が集中して堆積する。
- IX 褐色砂層 砂を主体にし、1~2mm大の二ツ岳軽石礫(いずれも円、楕円形)をブロック状に含む。単位の大きいラミナ状の堆積を示す。その他チャート等榛名山以外の山体から供給された礫も含む。
- X 灰黄褐色土層 粘土化がかなり進んでいる。9層との間に酸化鉄凝集層を挟む。植物の茎、根等に凝集した酸化鉄による斑文が多くみられる。



第5図 標準土層

### 3 調査日誌抄

発掘調査は、昭和60年4月1日～昭和63年10月24日までの足かけ4年間、8人の担当者によって行われた。なお、昭和60年10月1日より昭和62年7月31日までの間は調査を中断している。

#### 昭和60年度

4月

遺跡群を利根川側より調査するため、阿久津宮内遺跡内にプレハブ事務所を設営する。発掘調査準備ならびに武蔵島地区の試掘調査を行う。

5月

作業員が始動する。武蔵島地区は、全域での試掘調査の結果遺跡なしと判断する。

阿久津宮内遺跡Ⅰ・Ⅱ区の表土掘削後、遺構確認を行い、井戸・土坑などの調査を始める。

6月

基準点測量委託を行い、阿久津宮内遺跡から安養寺森西遺跡までの基本杭を設定する。

Ⅱ区に2軒の竪穴住居を確認し、調査を進める。

7月

井戸掘削調査終了する。高所作業車により阿久津宮内遺跡全景写真撮影を行う。竪穴住居カマド調査。

Ⅰ、Ⅱ区を古墳時代畠上面まで重機により除去し、畠面調査及び測量を行う。

8月

安養寺森西遺跡Ⅰ区北側(S T-124~135)の表土を重機により掘削を開始し、遺構確認を行う。溝・井戸・土坑等の調査を行う。

高所作業車により安養寺森西遺跡Ⅰ区北側の全景写真撮影を行う。

9月

上旬、阿久津宮内遺跡の埋戻し完了する。

下旬、安養寺森西遺跡の埋戻しを終了して、今年度の調査を終了する。

#### 昭和62年度

7月

下旬、安養寺森西遺跡内にプレハブを設営し、阿久津宮内遺跡の残り大館馬場遺跡の調査準備を行う。

8月

10日、阿久津宮内遺跡Ⅲ・Ⅳ区の調査を開始する。重機による表土掘削後、遺構確認。溝・井戸・土坑を検出し、調査を進める。

阿久津宮内遺跡、通学路下未調査部分を夏休みを利用して調査し、古墳時代畠の範囲確認を行う。

9月

阿久津宮内遺跡、第1面の調査を終了し、第2面の調査を行う。弥生土器が出土する。

10月

大館馬場遺跡の調査を開始する。表土掘削後、遺構確認を行い、土坑を検出し調査を進める。土坑内より人骨・獣骨が出土する。

下旬、阿久津宮内遺跡の畠・弥生面を高所作業車により写真撮影を行い、下面に確認調査を行う。

11月

阿久津宮内遺跡の調査終了。

調査班増を行い2班体制で調査開始する。安養寺森西遺跡Ⅰ区南側の調査を行う。大館馬場遺跡の第1面調査を終了し、第2面の畠の調査を開始する。

調査の経過について、日誌をもとに着手から終了に至る経過を以下に示す。なお、調査区名の記述は、発掘調査時の呼称(第3図左)による。

12月

中旬、大館馬場遺跡の畠全景をバルーンにより写真撮影を行う。畠の土層断面はぎ取り転写を試みたが、シルト質土の粒子が細かすぎ、溶剤の吸収が不十分のため、成果は得られなかった。

1月

安養寺森西遺跡Ⅰ区南側で竪穴住居、掘立柱建物等多くの遺構を調査する。

大館馬場遺跡の第2面の畠のテフラを群馬大学新井房夫教授に同定依頼し、FAとの教示を得た。

2月

大館馬場遺跡第3面以下の調査を行う。

3月

大館馬場遺跡・安養寺森西遺跡の全景を高所作業車により写真撮影を行う。

安養寺森西遺跡Ⅰ区南側第1面の調査を終了し、第2面の畠調査のため、重機により土砂の除去を行う。

大館馬場遺跡、井戸底面の調査と、安養寺森西遺跡第2面以下を残し、今年度の調査を終了する。

#### 昭和63年度

4月

1班体制で調査を開始する。

大館馬場遺跡、井戸の調査を終え、遺跡の調査を終了する。

安養寺森西遺跡、第2面畠調査。Ⅱ区～Ⅴ区の表土を重機により掘削し、遺構確認を行う。

5月

安養寺森西遺跡、遺構確認の結果、Ⅱ・Ⅲ区より館の一部と思われる堀を確認し、調査を進める。

6月

安養寺森西遺跡、Ⅱ区～Ⅴ区の第1面の古代～近世面の遺構確認並びに調査。

7月

安養寺森西遺跡、2・3日現地説明会を開催し、見学者500名を数えた。その後、バルーンによる第1面の写真撮影を行う。

中旬、竪穴住居の調査を開始する。

8月

安養寺森西遺跡、Ⅲ～Ⅴ区第1面の調査を終了し、第2面の畠の調査を行う。

9月

安養寺森西遺跡、Ⅲ区第2面の畠の調査は、冠水のため調査に困難をきわめた。Ⅳ・Ⅴ区第2面調査を終了する。

10月

安養寺森西遺跡、Ⅲ～Ⅴ区第2面の畠をバルーンにより写真撮影を行う。畠土分析のため資料の最終を行う。Ⅱ区の下面調査を行うが流路によって壊されており遺構は検出されなかった。

11月

安養寺森西遺跡の埋戻しを終了して、本遺跡群の調査すべてを終了する。

## 4 整理作業の経緯と方法

尾島遺跡群（安養寺森西遺跡、大館馬場遺跡・阿久津宮内遺跡）の整理作業は、平成5年月より、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団において着手した。この年度は、継続事業として同じ上武道路の二之宮洗橋遺跡の整理作業を行っていたが、同事業の終了の後を受けて、同じスタッフにより事業を引き継いだ。

作業は遺物の復元、実測より着手した。実測は手実測による等倍実測を基本としたが、陶磁器の一部を本事業団の機械実測班が行った。また399号土坑出土五輪塔空風輪は写真実測によりコンタを加えた。また、木製品は主に本事業団木器班が実測した。

遺構については現場での番号に重複・欠番等の混乱があったため、番号の付け直しを行っている。

遺構遺物のトレースは整理班で行い、遺物の写真は本事業団写真室で撮影した。

整理作業中に、木製品の樹種同定、骨類の鑑定、

石製品の石材同定を委託している。舶載磁器については大江正行、国産陶磁器については大西雅広、呪符墨書については高島英之の指導を得ている。

なお、本遺跡の発掘調査から整理作業終了の間に、下記のような資料紹介や論考が加えられている。

- 『年報5』（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団 1986  
『年報7』 同 1988  
『年報8』 同 1989  
『群馬県の中世城館跡』山本隆志「安養寺館」1988  
『よみがえる中世5』峰岸純夫「浅間火山灰と中世の東国」平凡社 1989  
『尾島町誌』澤口 宏 「地理と地形」  
飯田陽一 「安養寺森西遺跡」  
峰岸純夫 「南北朝の動乱と新田庄」  
『木簡研究15』飯田陽一「安養寺森西遺跡」 1993

## 第II章 遺跡周辺の地理的・歴史的環境

### 1 遺跡周辺の地理と地形

尾島遺跡群は、新田郡尾島町大字安養寺・大館・阿久津に位置する。弥生時代から古墳・奈良・平安時代、そして、中・近世に至る複合遺跡である。

尾島町は、赤城山や足尾山地を望む、関東平野の北西部に位置する、利根川左岸の町である。利根川を隔てて埼玉県深谷市に接し、南東部は大里郡妻沼町と接する。北東部は太田市、北部は新田郡新田町、西部は佐波郡境町と接する。町境は、北側は石田川、南側は利根川で境される。しかし、利根川の旧河道や改修工事などで利根川右岸に尾島町の飛び地が、左岸に埼玉県妻沼町の飛び地がある。尾島町は、新田郡の最南端に位置し、中世には新田荘に属し、新田氏館跡と伝えられる総持寺や徳川氏ゆかりの東照宮・長楽寺・縁切寺で有名な満徳寺などがあり、豊

かな歴史的環境に恵まれており、平成6年当地を含む新田郡のほぼ全域と太田市の一部が新田荘遺跡として、国の史跡に答申された。

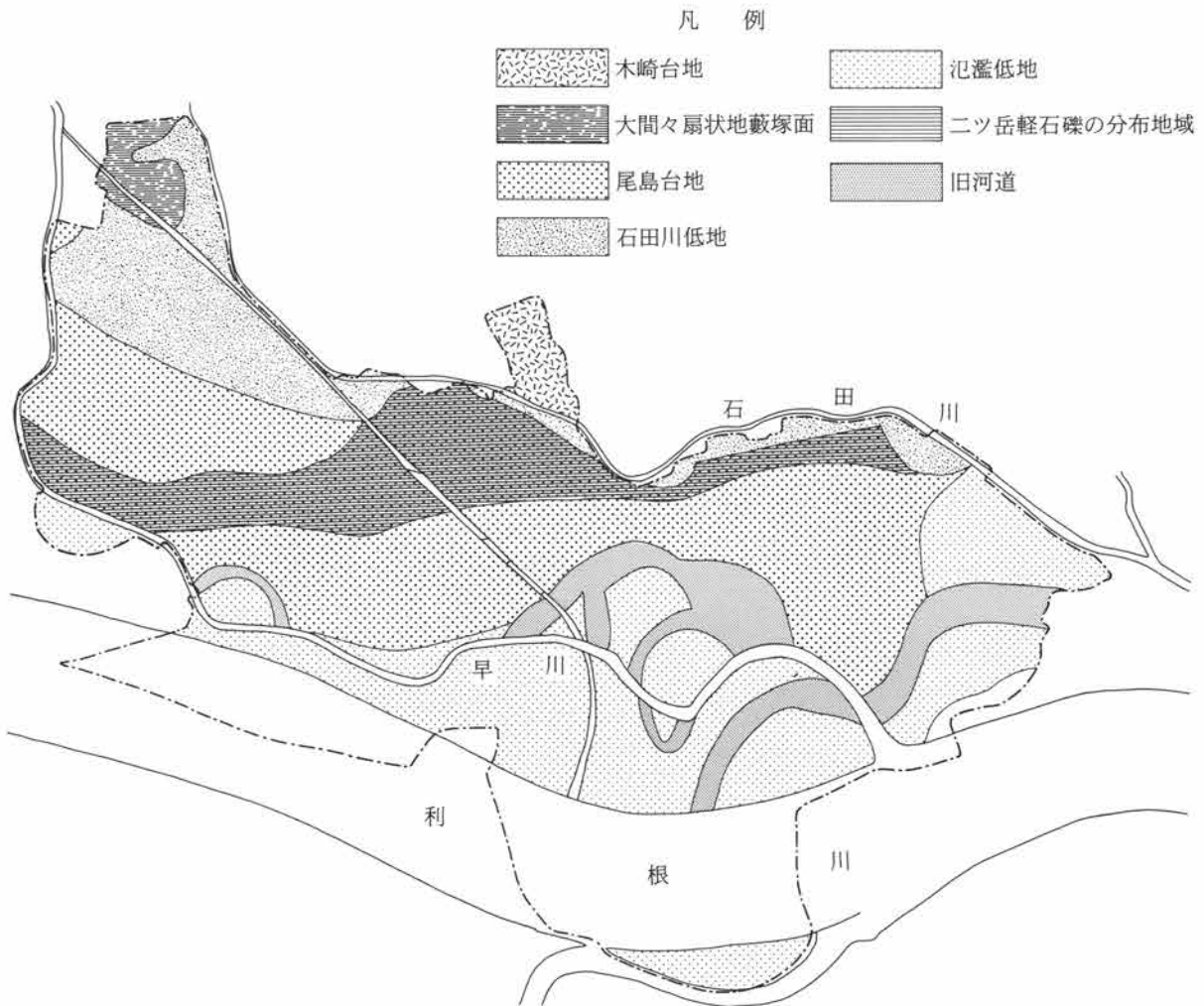
遺跡周辺は、肥よくな沖積土を利用して耕地が広がり、大部分が畑で、かつては桑畑であったが、1955年ころから野菜中心へと転換し、大和イモ・ネギ・ゴボウなどを主要作物としている。特に大和イモは、近郊農業作物として有名である。調査においても、沖積堆積土下まで耕作用トレンチャー痕が50cm間隔に入れ込んでいた。

尾島町の地形は、おおむね利根川の沖積作用によって形成された低平な平野で、利根川が運搬した肥沃な土壌が厚く堆積している。細かく見ると、微地形や表層の地質によって、第6図のように5分割さ

れる。第1の木崎台地は、新田町上江田から木崎を経て、尾島町北部に至る洪積台地である。町内の台地は、石田川の北側の山ノ神地区のみである。台地西縁が新田町との境界となり比高2mほどの緩斜状段丘崖で下江田の沖積低地と境される。山ノ神と新田町下田島との境界は、台地へ侵入した浅い浸食谷と一致する。

第2は、渡良瀬川により形成された大間々扇状地藪塚面である。大間々扇状地は、形成時代の異なる新旧二つの扇状地面からなる合成扇状地である。町内小角田地区は本扇状地の藪塚面の扇端から約2km南方に位置し、新田町下田中から続く微高地にあり、小角田遺跡や歌舞伎遺跡がある。なお、藪塚面を形成した扇状地礫層は、町内の地下では伊勢崎砂層に埋積されている。

第3の尾島台地は、尾島市街地から世良田地区にかけて東西6km、南北1kmにおよび、北は石田川低地、南は早川と利根川氾濫低地に挟まれ、町のほぼ半分を占めている。本遺跡群調査範囲は、県道徳川・平塚線から、国道354号線と交わる安養寺交差点までの1.2kmで、大字安養寺・大館・阿久津に所在し、地形的には、本台地にあたる地域である。台地と沖積低地との比高差は、市街地では明瞭であるが、西方へ不明瞭になっていく。また、大館東部より西では段丘崖は見られなくなり、台地と低地の境界を早川が流れる。この台地は、調査時は自然堤防と考えてきたが、尾島町誌編集委員会の調査により、台地であることが判明した。それは、この地形が、伊勢崎市街地から広がる広瀬川沖積低地より一段高い台地であり、本地域はその東端を占めると考えられる



第6図 尾島町の地形分類図 (澤口原図)

からである。この台地の地形は、伊勢崎砂層の特徴  
 (①火山灰(ローム)質な粗砂で、②細粒角礫や硬  
 質軽石の円磨礫を含み、③水平葉理が発達する④よ  
 く締まった地層で、⑤数枚の単層に区分できる)を  
 もって構成され、その表層には、関東ローム層が堆  
 積することから洪積台地と改められた。伊勢崎から  
 の台地の段丘崖は、境町米岡まで明瞭に連続するが、  
 早川を越えた世良田地区に入ると消滅する。これは、  
 利根川の氾濫堆積物により埋め立てられ、台地と氾  
 濫低地との段差が消失したものと考えられる。利根  
 川の氾濫は、世良田地区の南から出塚新田・安養寺  
 を経て、石田川へ流入したと考えられる。そのため  
 世良田から尾島市街地にかけての地域は、台地形成  
 層の上に氾濫堆積物が堆積している。つまり、尾島  
 台地は、上部ロームをのせた本来の台地面と、沖積  
 層に覆われた堆積台地との2つの地形面からなる。  
 本遺跡群周辺は、この堆積台地に立地する。この台  
 地の利根川氾濫堆積物には、軽石の円礫や水性堆積  
 の火山灰が含まれている。調査により、これらは、  
 古墳時代の榛名山二ツ岳の噴火により発生したもの  
 であることがわかった。この洪水FAは、吾妻川か  
 ら利根川に大洪水が発生し、その洪水流に乗って一  
 気に流下し、世良田南部から尾島台地へ乗り上げ、  
 石田川へ抜けたものと考えられる。調査により、安  
 養寺交差点付近は、利根川氾濫堆積物の砂礫層が2  
 m程あり、調査区を南下するにしたがい氾濫堆積物  
 は薄くなり、多くの遺構が確認された。

第4は石田川沿岸に形成された沖積低地の石田川  
 低地である。この低地は木崎台地と大間々扇状地及  
 び尾島台地の間に分布する。

第5の氾濫低地は、利根川沿岸の沖積低地で、町  
 の南半分を占めている。この地域は、利根川が乱流  
 した地域であり、利根川の旧河道である带状くぼ地  
 と旧中州の微高地が地形として残る。試掘調査によ  
 り、利根川と早川の間では、砂礫層や礫混じり粗砂  
 の上に3~4mの細砂を主体とする砂層が堆積して  
 いる。細砂層にはシルトの薄層があり、シルト薄層  
 が砂と互層状に堆積する。砂礫層は、河床堆積物で

あり、細砂やシルトの細粒物質は河道外にあふれた  
 洪水流に含まれていたものが沈殿・堆積した氾濫堆  
 積物である。このように、砂礫層に覆われており調  
 査対象の武蔵島地区では遺構は検出されなかった。

## 2 周辺遺跡と歴史的環境

本遺跡周辺は、新田荘遺跡として、国の指定を受け  
 ている地域であり、西にある字徳川の地は「徳川  
 氏発祥の地」とされている。

遺跡地の大字安養寺は、南北朝時代から文献に見  
 られ、観応元年(1350年)の足利尊氏下文写(正木  
 文書)に「新田庄内木崎村安養寺」が勲功の賞とし  
 て岩松頼有に宛行われた。小字には明王院のある呑  
 嶺とそのすぐ西に隣接する森ノ内を中心に、森東・  
 森南・西原・北原などがあり、森や原のつく呼称が  
 多い。字呑嶺にある明王院は、大字名の安養寺と称  
 する寺の一院であつたらしい。安養寺は、寺伝では



第7図 周辺小字名



慶平4年(1061)に頼空が開山し、源頼義が開基となって創建された。一時衰退したが、新田義重の時に中興された。本尊の不動明王は、元弘3年(1333)の新田義貞鎌倉攻めの際、山伏に化身して越後方面に新田一族に義貞拳兵のことを一夜のうちに触れて歩いたと伝えられ、新田触不動尊と呼ばれる。中世末期は普門寺の末寺、近世には総持寺の末寺になった。境内には、延享4年(1747)造立の千体不動、12坊の經典を埋めたという経塚、康永元年(1342)銘の義貞の弟脇屋義助供養板碑などがある。また不動堂裏には南北朝期新田氏一族のものと思われる五輪塔の一部が集められている。

大字大館は、平安末期から室町時代に見られる郷名でもある。仁安3年(1168)の新田義重置文に新田荘空閑の郷々19ヶ所の1つに「おゝたち」がみえる。字名には、天台宗東楊寺のある御堀、同寺が管理する阿弥陀堂のある御坊、八幡宮のある吹上や御蔵がある。その他馬場、鍛冶屋、笠屋、茶洗屋など商業関連の字名もみられる。

大字阿久津は、はじめ元地(現荒久)にあったが、利根川の洪水により元和年間岩松村と替地をして移転したという。小字名の宮内は、戦国時代、天正15年の北条氏直判物写に「宮内郷」が見られる。江戸時代は、利根川の洪水により阿久津の集落が元地から岩松との替地に移転すると、元地字宮内の地はのち阿久津村から分村して宮内村として成立した。しかし、当村は無民家のため阿久津村の管理下にあったという。

以上、遺跡群周辺の大字名を中心に見てきたが、小字名を中心に周辺を見ると、安養寺字森ノ内を中心に館に係わる居立や御堀・御蔵などの地名が広がり、南に馬場・鍛冶屋・笠屋など商業に係わる地名が見られる。さらにこれらを取りまくように稲荷・権現・大日など寺社関係の地名が分布している。

周辺に見られる遺跡を時代を追ってみよう。  
旧石器・縄文時代 遺跡の分布は、大間々扇状地を中心に、沖積地が入り込む扇端部の台地上に濃密である。尾島町域では、旧石器時代の遺跡は確認され

ていないが、木崎台地などの地域に遺跡の可能性が考えられる。縄文時代の遺跡としては、尾島工業団地遺跡があり、木崎台地や大間々扇状地・尾島台地での遺跡の可能性も高く、今後の発掘調査が期待される。埼玉県においても、榎挽台地を中心に、台地先端部の低地との境に分布している。

弥生時代 前橋市南部から太田市域にわたる東毛平野部には、弥生時代遺跡の分布は少ない。尾島町地内においても阿久津宮内遺跡をはじめ、尾島工業団地遺跡・長楽寺遺跡・常木遺跡などでわずかに確認されているにすぎない。弥生中期の遺跡は、伊勢崎市域や赤城南麓地域で集落遺跡の調査例はあるが、近隣には見あたらない。また、西毛では弥生後期前半に集落遺跡の急増と拡大がみられるが、この時期の東毛はむしろ空白地域ではないかと思われるほど、遺跡は少ない。一方、埼玉県では、後背湿地を抱えた自然堤防上に遺跡の分布が見られ、上敷免遺跡などで集落や再葬墓が確認されている。両県ともに、後期になると、地域間交流が激しくなり、阿久津宮内遺跡などのように他地域の土器様相の混在が見られる。

古墳時代 古墳前期になると、集落遺跡の急増と大規模化には著しいものがある。尾島工業団地遺跡の44軒をはじめ、歌舞伎遺跡・水久保遺跡などで確認されている。この時期の集落の分布傾向は扇端部に沿った台地縁辺に濃密に分布しており、粕川、広瀬川、利根川の左岸の後背地の比較的広い帯状の沖積地に面している。また、これらの集落に対応することが想定される、4世紀代が明らかな古墳は近隣には見られない。しかし、やや離れた大間々扇状地の東縁辺部に面して、金山丘陵西麓から蛇川左岸に沿って、北から南へ寺山古墳、八幡山古墳、頼母子古墳、朝子塚古墳などの、4世紀末から5世紀初頭に相当する大規模な前方後円墳、前方後方墳が立ち並ぶ。古墳中期の集落の立地状況は、前代から目立った変化は認められないが、尾島工業団地遺跡では、前期に44軒であったのが中期には115軒に増える。この軒数は中期としては県内最大規模である。また、大

館馬場遺跡では5世紀末から6世紀中頃に噴火した榛名山の火砕流や軽石に覆われた畑跡が検出し、生活の場、生産の場の様相が解明されつつある。また、尾島工業団地遺跡より同時代の古墳も検出されている。古墳後期の集落遺跡は、立地状況は前代と目立った変化はない。古墳時代後期の遺跡、住居の数量的な増大については、前期・中期のおよそ倍近い継続期間を考慮しなければならないが、尾島工業団地遺跡では717軒を数え、歌舞伎遺跡・小角田前遺跡・水久保遺跡でも50軒近くを検出している。また、当時の古墳は尾島工業団地遺跡の円墳や、小角田前古墳群・矢抜神社前古墳が挙げられる。

埼玉県でも、古墳時代前期では、集落として大規模な展開を見ることはできないが、東海系のいわゆるS字甕に反映される、大きな土器の動きは、随所に認めることができる。特に方形周溝墓や古墳などでは、その傾向が強くみられる。中期の遺跡として、新屋敷東遺跡など妻沼低地でも大きく広がっている。また戸森松原遺跡では、方形周溝墓が調査されている。清水上遺跡では、水田跡が確認されている。集落が大規模に展開するのは、群馬県同様後期の段階からである。新屋敷東遺跡・本郷前東遺跡・上敷免遺跡に見られるように、急速に沖積地の開発が進展する。この古墳時代後期集落の変動と、自然堤防上への積極的な進出は、一方で、後期古墳の造墓活動というかたちで考えられる。しかし、妻沼低地周辺には、後期の巨大な前方後円墳はなく、十数基単位の古墳群が、櫛挽台地の縁辺部や自然堤防上に立地している。立地条件や古墳の構築材に若干の相違はあるが、6世紀から8世紀初頭にかけて形成された古墳群と考えられる。

奈良・平安時代 前代に引き続き、集落遺跡の調査例は多い。各遺跡において竪穴住居に併せ、掘立柱建物の増加が目立っている。小角田前遺跡で46軒、尾島工業団地遺跡での214軒をはじめ、安養寺森西遺跡など多くの遺跡が確認されている。出土遺物では、尾島工業団地遺跡の9世紀中葉の住居跡より出土した土製紡錘車に「矢田衆人即□矢田公子□字□

と刻まれていることや、10世紀代の墨書土器に「高生」の文字が記されていた。また、安養寺森西遺跡においても紡錘車に「長区」「法厳」などの文字が刻まれていた。この時代この地域も律令制下に組み込まれ新田郡であった。「和名抄」の訓は爾布太、管郷は新田・沢野・石西・祝人・淡甘・駅家の六郷である。うち淡甘は、正倉院御物の租庸調関係の墨書銘に天平勝宝4年(752)「上野国新田郡淡甘郷戸主矢田部根麻呂」が布を納め、国司阿部朝臣息通、郡司他田部君足人が担当したとある。このことは尾島工業団地遺跡出土の先の紡錘車刻字と墨書土器と関連し、遺跡地およびその周辺が、古代新田郡淡甘郡に比定できることを示唆し、この郷内に「矢田」という人物が存在していたことを示すと考えられる。また、小角田前遺跡では、仏教の浸透を促す瓦塔片が出土している。

埼玉県では、妻沼低地の砂田前遺跡・上敷免遺跡などは、古墳時代以来の竪穴住居からなる集落で、一部掘立柱建物跡を含み、それぞれ各河川の側に立地する水田経営を基本とした集落である。8世紀に入ると、妻沼低地周辺も律令制社会の枠組みに組み入れられていった。大同4年(809)には、播羅郡から米五斗が、多賀城に送られていたことを示す木簡が見ついている。9世紀前葉の播羅郡の文献資料は豊富で、他にも、弘仁9年(818)武蔵国大地震の記載や、承和元年(834)の播羅郡の荒廃田123町が、冷然院へ寄進される記事などがある。

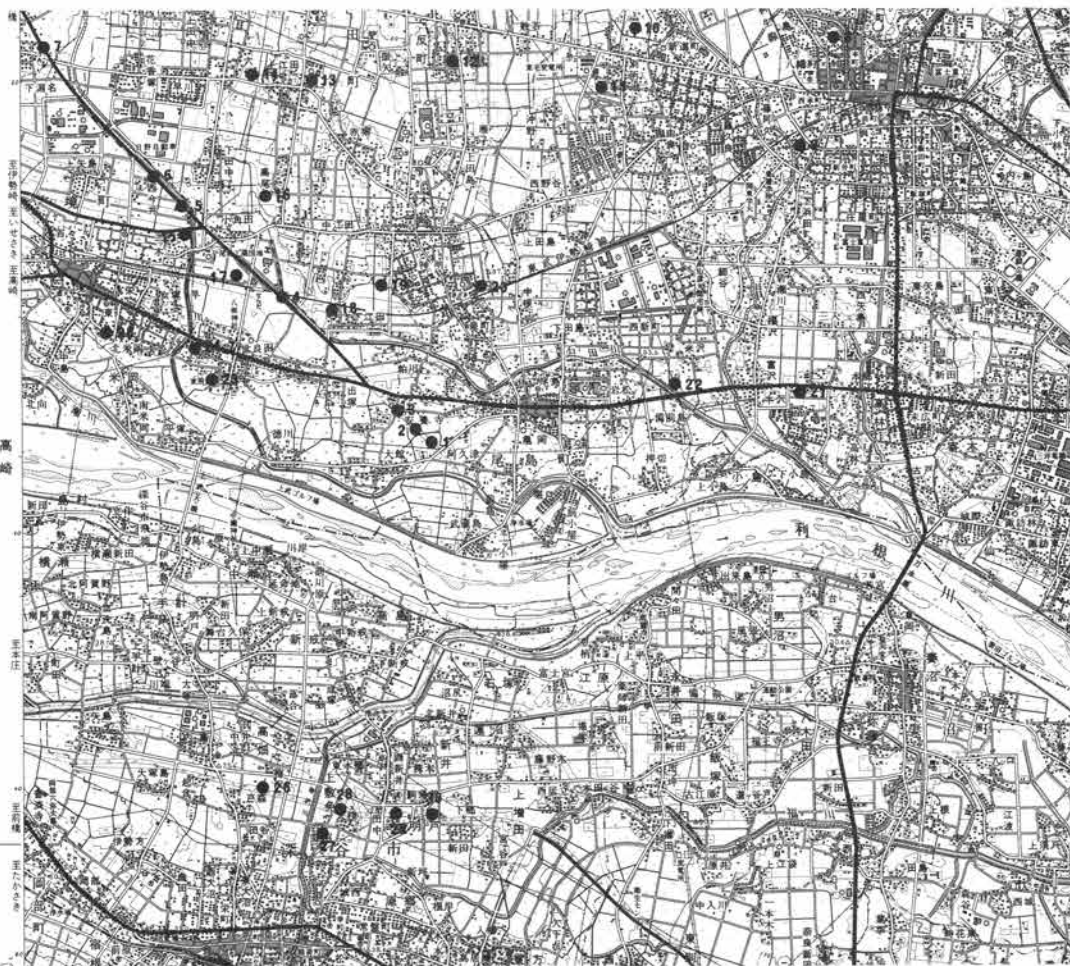
中・近世 尾島町は新田氏による新田荘の南西部を占め、長楽寺・世良田東照宮、縁切寺満徳寺遺跡・宝積院跡・安養寺館跡などの寺社や新田氏一族の館跡である新田館跡・岩松陣屋跡・船田館跡・大館館跡などの遺跡が数多くある。新田荘は、古代律令制下により編成された地方政治組織の国郡里(郷)制により成立した新田郡が基盤である。10世紀末から12世紀中頃には、古代律令制の崩壊とともに荒廃を続けていた当地周辺を新田義重が再開発を行った。仁安3年(1168)「新田義重讓状」によると、新田荘内の6郷(女塚・押切・世良田・上平塚・下平塚・

三ツ木)を義季に譲り渡したとされる。長楽寺は、新田荘開発者新田義重の子義季を開基とし、臨済宗開祖栄西の高弟栄朝を開山に招き、承久3年(1221)に創建され、顕密禅(臨済禅と密教)兼修の寺院として栄えたと伝えられる。また、当寺を中心に門前集落(世良田宿)が形成された。「長楽寺文書」の中には「四日市場」「六日市」などの定期市が開かれ、経済の中心地であった事もうかがえる。南北朝・室町時代には、当所領を岩松氏が保護し、室町幕府は当寺を関東十刹の第7位にあげ、十方住持制により歴代住職を求め任命した。戦国時代には荒廃したが、慶長8年(1603)徳川家康は天海僧上に当寺復興と東照宮移築を命じ、自ら寺領百石を寄進する。慶長17年(1612)天台宗に改められ、以後勅使門・三仏堂・太鼓門・本堂・開山堂を中心に寺中塔頭・東照宮などを含む大寺院となった。埼玉県は、平安時代末以降、武蔵七党などの中世武士団に象徴される「吾妻鏡」の世界が、繰り広げら

れていたと思われる。14世紀末になると、深谷上杉氏の祖である上杉憲英が、庁鼻和城を現在の国済寺に築いた。康正2年(1456)、上杉憲英の曾孫、房憲が、深谷城を築くと、その周辺に出城的な中世城郭が多く造られた。天正18年(1590)、豊臣秀吉の関東攻めにより、深谷上杉氏は、小田原北条氏と命運を共にした。かわって松平康長が、徳川家康にともない深谷に一万石で陣屋を構えた。中・近世の遺構は、在地武士の居館跡をはじめ、寺跡などが新屋敷東遺跡周辺に見られる。別府氏城・西別府館・東方城・庁鼻和城・伝播羅太郎館・皿沼城などである。

参考文献

尾島町誌編纂委員会 尾島町誌通史編上巻  
 平凡社地方資料センター 1987  
 群馬県の地名 日本歴史地名大系第10巻  
 角川日本地名大辞典編纂委員会 1988  
 角川日本地名大辞典 10群馬県



- 1 阿久津宮内遺跡
- 2 大館馬場遺跡
- 3 安養寺森西遺跡
- 4 歌舞伎遺跡
- 5 小角田前遺跡
- 6 西今井遺跡
- 7 下淵名塚越遺跡
- 8 八幡山古墳
- 9 浜町屋敷内遺跡
- 10 脇屋義助館
- 11 新田氏累代の墓
- 12 反町城
- 13 東田遺跡
- 14 江田城
- 15 三ツ木越戸遺跡
- 16 台遺跡
- 17 尾島工業団地遺跡
- 18 矢抜神社古墳
- 19 花園遺跡
- 20 下田遺跡
- 21 朝子塚古墳
- 22 石田川遺跡
- 23 長楽寺
- 24 新田館
- 25 北米岡遺跡
- 26 戸森松原遺跡
- 27 皿沼城
- 28 上敷免遺跡
- 29 本郷前東遺跡
- 30 新屋敷東遺跡

第1表 周辺遺跡一覧表

No	遺跡名	備考	所在地	出典
4	歌舞伎遺跡 (上武道路)	古墳時代から平安時代の大集落 中世舶載磁器の出土も多い。	新田郡尾島町世良田	『歌舞伎遺跡』 群馬県埋蔵文化財調査事業団
5	小角田前遺跡 (上武道路)	古墳時代から平安時代の大集落	新田郡尾島町世良田	『小角田前遺跡』 群馬県埋蔵文化財調査事業団
6	西今井遺跡 (上武道路)	古墳時代から平安時代の大集落	佐波郡境町西今井	『西今井遺跡』 群馬県埋蔵文化財調査事業団
7	下瀧名塚越遺跡 (上武道路)	古墳群・中世館跡 古墳時代から平安時代の大集落	佐波郡境町下瀧名	『下瀧名塚越遺跡』 群馬県埋蔵文化財調査事業団
9	浜町屋敷内遺跡	中世～近世の屋敷跡か	太田市浜町	『浜町屋敷内遺跡C地点』 群馬県埋蔵文化財調査事業団
3	東田遺跡	中世屋敷跡 古墳時代集落	新田郡新田町上江田	『東田遺跡』 1987 新田郡新田町教育委員会
17	尾島工業団地 遺跡	古墳～平安の大集落 古墳群、中世～近世	新田郡尾島町世良田	『世良田諏訪下遺跡』 1994 新田郡尾島町教育委員会 その他
20	下田遺跡	縄文時代時代中～後期と 古墳時代の豊富な木製品	新田郡新田町金井	『下田遺跡』 1994 新田郡新田町教育委員会
22	石田川遺跡	「石田川式土器」のタイプサイト 遺構は不明瞭	太田市米沢	『石田川』 1968 『石田川』 刊行会
23	長楽寺	鎌倉十刹のひとつ	新田郡尾島町世良田	『長楽寺』 1978 『長楽寺遺跡』 1993 新田郡尾島町教育委員会
26	戸森松原遺跡	古墳～平安集落 周溝墓	深谷市戸森	『森下・戸森松原・起会』 1995 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
28	上敷免遺跡	古墳～平安の大集落 縄文後・晩期の包含層	深谷市上敷免	『上敷免遺跡』 1995 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
29	本郷前東遺跡	縄文後・晩期 古墳～平安大集落	深谷市本郷前	『新屋敷東・本郷前東』 1992 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
30	新屋敷東遺跡	上に同じ	深谷市明戸	上に同じ

その他に、山崎 一『群馬県古城址の研究』、

群馬県教育委員会『群馬県遺跡地図』を参照している。

### 第Ⅲ章 調査された遺構と遺物

#### (1) 氾濫層上の調査

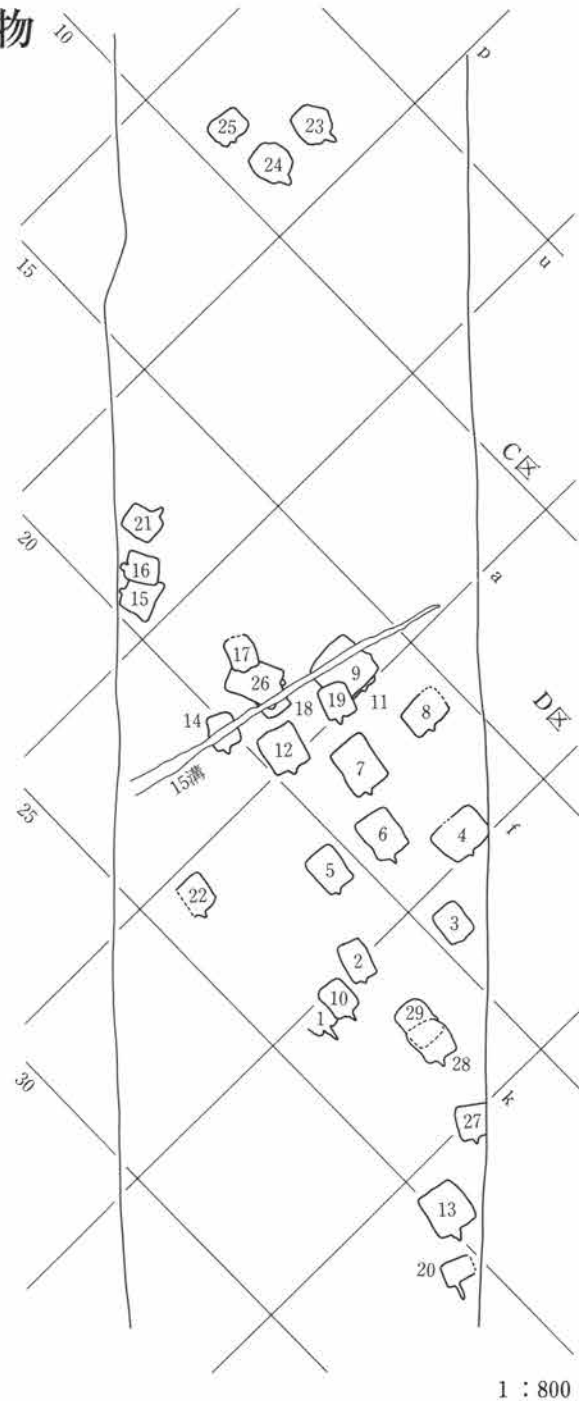
安養寺森西・大館馬場遺跡・阿久津宮内遺跡の発掘調査は調査地域のほぼ全域を覆う古墳時代の氾濫層をはさんで、上下2面の調査を行った。第3章は上面の調査結果を1の竪穴住居以降10項までに、下面の結果を11～15項に別けて報告する。

#### 1 竪穴住居

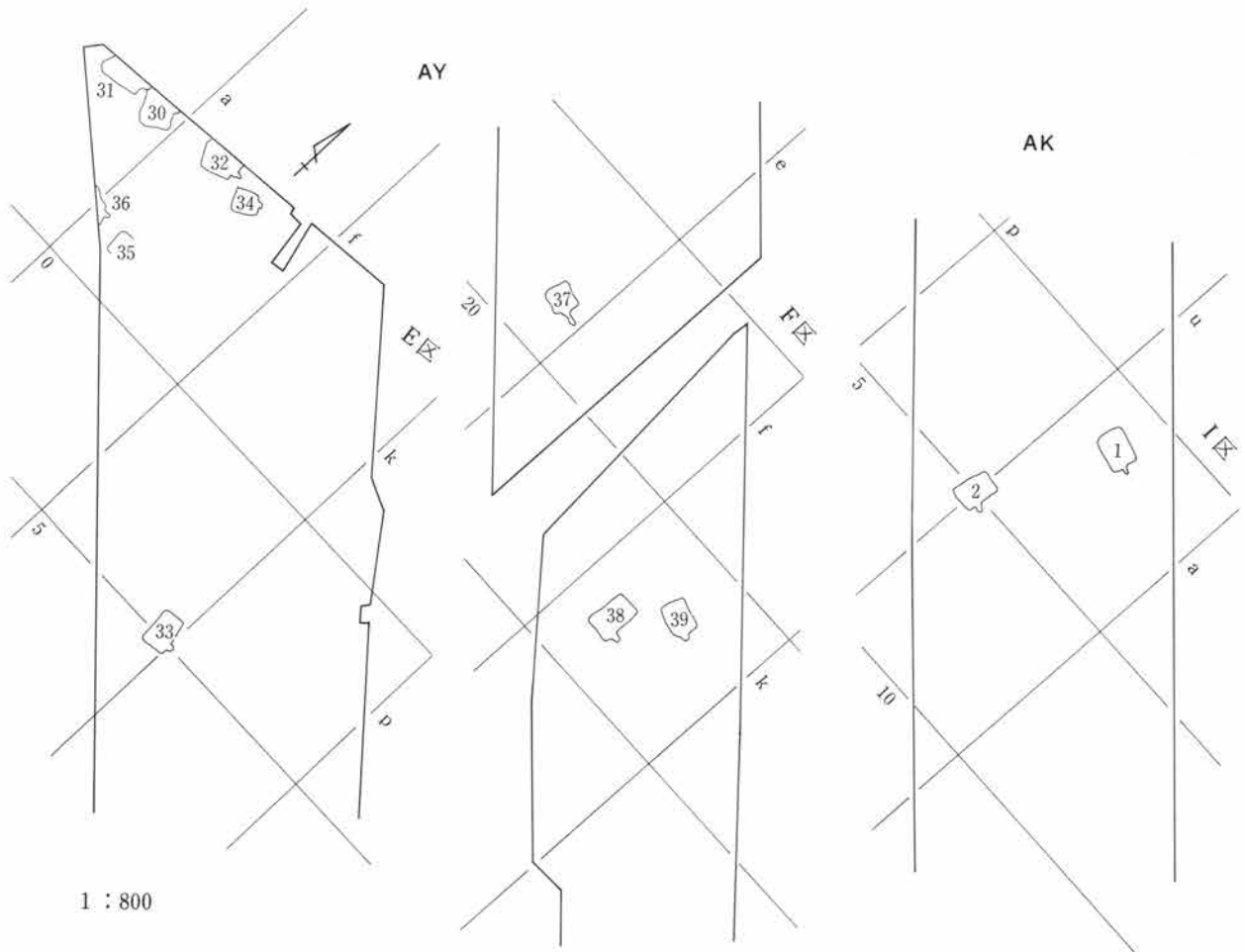
古墳時代の畠を覆う氾濫層上では41軒の竪穴住居を調査した。安養寺森西遺跡C・D区の29軒が中心で、このうち12軒が住居間で重複している。北西隅にやや離れて占地する3軒(23～25住)のさらに北西側は、旧流路によって大きく削られており、集落はこの部分へ広がる可能性がある。E区の7軒(30～36住)がこれに続くが、両地点の間には後世の流路により削られた部分がある。26住を除く6軒の住居まで、本来は連続する居住域であった可能性がある。D区の流路跡から、摩滅していない土器がまとまって出土していること(第305図1～11、16～19)も証左となろう。両地点の住居は古墳時代末から奈良時代にかけてが中心で、この一帯が居住域として安定した時期が、7世紀以降であることが判る。

平安時代9世紀代の住居は少なく、10世紀以降は1軒もない。なお、安養寺森西遺跡34・35住など、竪穴住居とするには問題の残るものもや、安養寺森西遺跡11住のように数軒の重複の可能性がある遺構も含まれている。

その他に安養寺森西遺跡E区1軒(37住)、F区2軒(38・39住)、阿久津宮内遺跡2軒(1・2住)の竪穴住居が散在して調査されたが、いずれも平安時代後半のものであった。数軒のグループからなるものと思われ、C・D区の集落と様相を異にしており、集落の占地に大きな変化のあったことが看取できる。



第9図 安養寺森西遺跡住居跡配置図



第10図 安養寺森西・阿久津宮内遺跡住居跡配置図

各地点の竪穴住居はいずれも浅いうえに攪乱が多く、地山も極めて軟弱な砂質土で、検出しにくいものが大半であった。柱穴・壁溝等の施設が確認できたものも僅かで、旧状を確実に復元できなかったようだ。

この時期の他の遺構は少なく、確実に時期決定ができるのは阿久津宮内遺跡2号溝のみで、安養寺森西遺跡6号掘柱や16号溝・155号土坑などが可能性のある遺構である。

反面、遺物の種類は豊富であった。総数248点を図示したが、土錘の出土する住居の多さが目立ち、14軒の住居から25点出土している。鉄製品の出土は

12点だが、安養寺森西遺跡3住・33住の出土品は良好な資料である。また、安養寺森西遺跡13住の須恵器双耳杯、15住の奈良三彩小壺、33住の線刻のある石製紡錘車などの特殊遺物の出土も特筆される。

AY-1号住居跡 (第11図 PL-3・10)

**位置** D区 f-23・24グリッド。重複や攪乱の多い場所であり、カマド周辺以外は残存していない。

**重複** 10号住居と重複、21号溝に先行する。

**主軸方向** (N-101°-E)

**形態** 縦長長方形と思われる。

**規模** 溝の下から南東隅が確認できた。北東隅付近まで残存していると推定したが明瞭ではない。東壁は2.7m以上ある。南北辺は2.9m以上あることが部分的に残存している床面から確認できた。

**壁** 旧状が明瞭に残っている箇所はない。東壁は最大で35cmの壁高がある。

**カマド** 残存する東壁のほぼ中央にある。煙道の壁外への張出しは1.2mある。燃焼部も縦に長く、甕を複数かけることが可能である。火床は平坦で、煙

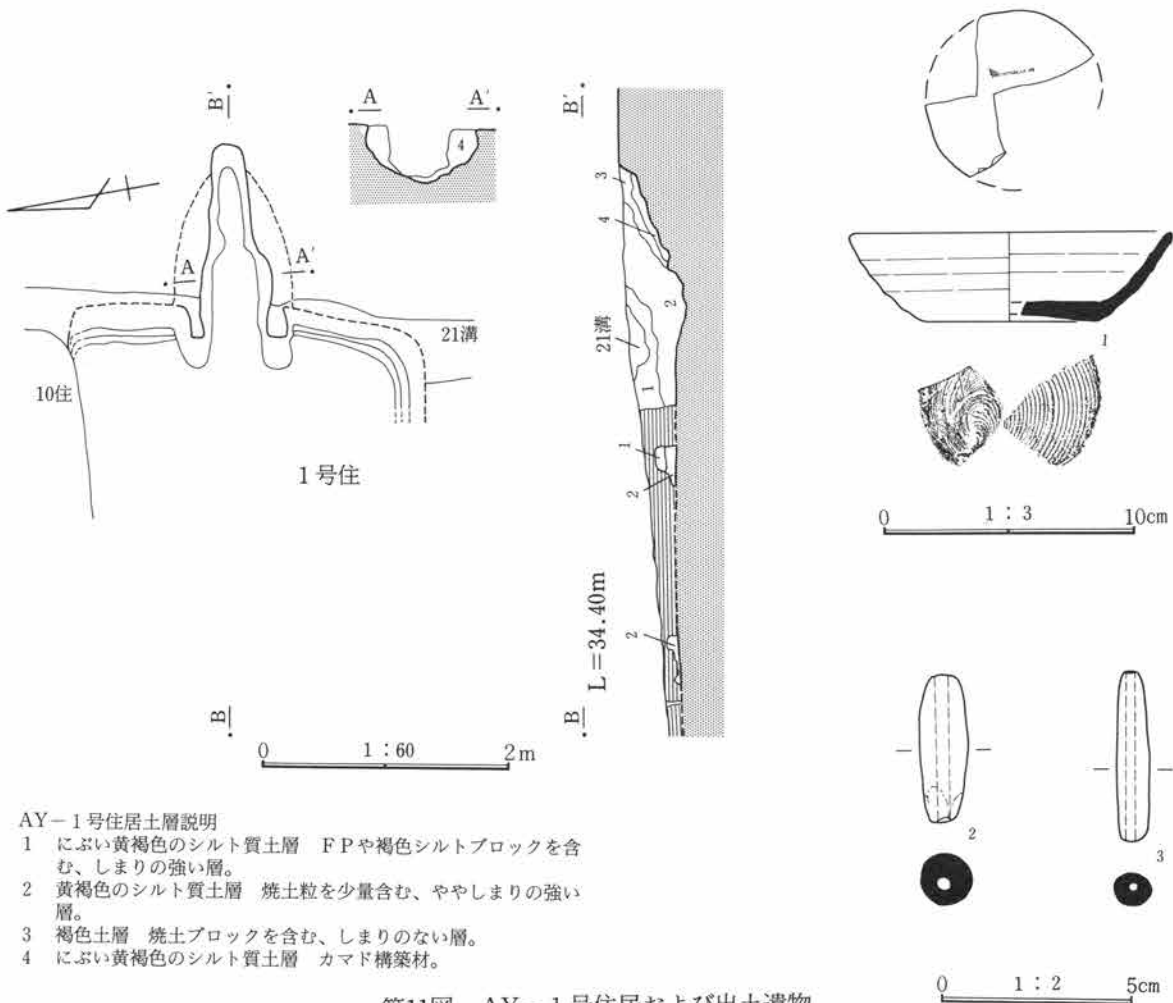
道部は緩やかに立ち上がっていた。煙出し部分を土器片で補強していた。

**内部施設** 東壁直下に深さ2~4cmで幅狭の壁溝がある。本来はカマド下を除いて全周するものと思われる。

**床** 残存部分では黄褐色シルト質地山をそのまま床面としており、貼り床は見つからなかった。

**遺物の出土状態** 1・3はカマド燃焼部内から出土した。2はカマド北袖の西端の床直上で出土した。カマド煙道部東端からは土師器長胴甕の胴部破片がまとまって出土している。その他に土師杯約30片、土師甕約110片、須恵杯5片があるが、本住居に確実に伴う遺物かは不明である。

**時期** 8世紀か。



AY-1号住居土層説明

- 1 にぶい黄褐色のシルト質土層 FPや褐色シルトブロックを含む、しまりの強い層。
- 2 黄褐色のシルト質土層 焼土粒を少量含む、ややしまりの強い層。
- 3 褐色土層 焼土ブロックを含む、しまりのない層。
- 4 にぶい黄褐色のシルト質土層 カマド構築材。

第11図 AY-1号住居および出土遺物

AY-2号住居跡 (第12図 PL-3・10)

位置 D区 e・f-19・20グリッド

重複 南側に隣接している10号住居と重複はないが、同時存在は不可能な至近の位置にある。

主軸方向 N-107°-E 床面積 10.5m<sup>2</sup>

形態 長辺4.1m、短辺2.6mの縦長長方形を呈している。カマドを挟んで東壁はやや食い違っている。南東と南西の隅付近は攪乱のため不明瞭である。

壁 ドラダラと立ち上がっていて旧状はとどめていない。残存壁高は3~27cmである。

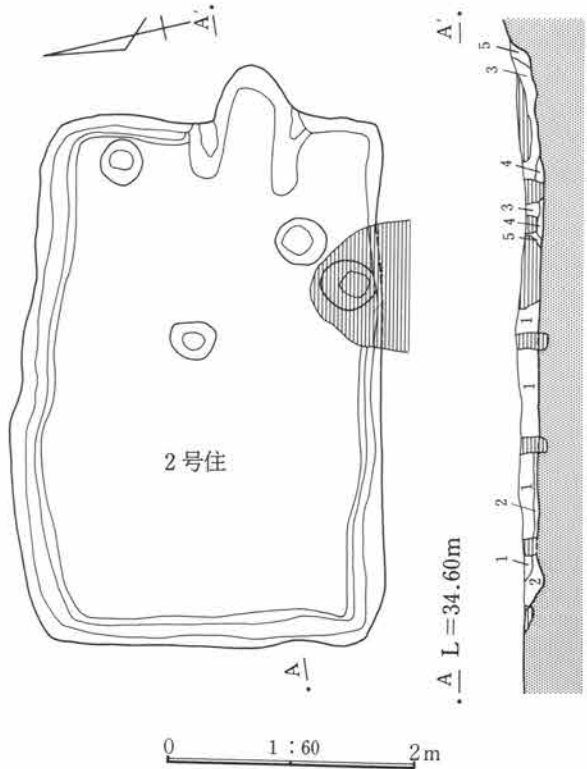
カマド 東壁の中央やや南寄りにある。燃烧部はほぼ平坦で、火床は住居床と同レベルにある。火床下には地山と似たシルト質土で厚さ2~4cmほどの埋め戻しを行っている。煙道部は残存していない。両袖も痕跡程度しか残っていない。

内部施設 幅太の壁溝がカマド下と攪乱で不明瞭な南東隅付近を除いて巡っている。床面からの深さは2~5cmである。本来はカマド下を除いて全周していたと思われる。床面からの深さが10~24cmの4基のピットがあったが、いずれも本住居に後出するものと思われる。

床 黄褐色シルト質土地山をそのまま床面としている。細かな凹凸が多いが、ほぼ水平な床である。

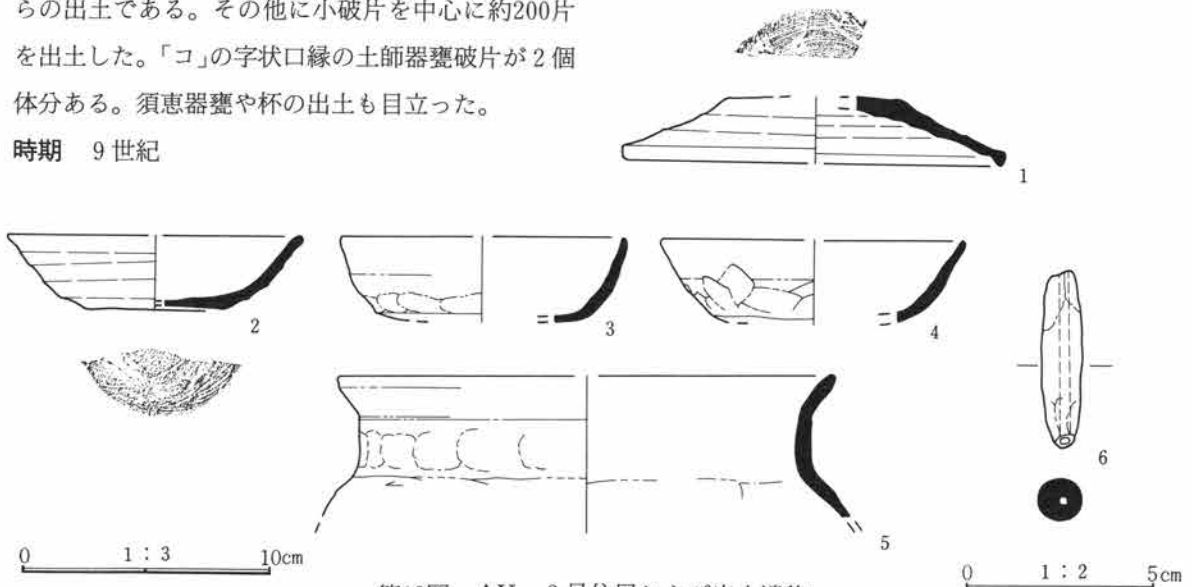
遺物の出土状態 図示した遺物はいずれも埋没土からの出土である。その他に小破片を中心に約200片を出土した。「コ」の字状口縁の土師器甕破片が2個体分ある。須恵器甕や杯の出土も目立った。

時期 9世紀



AY-2号住居土層説明

- 1 にぶい黄褐色のシルト質土層 褐色のシルトブロックを少量含む、ややしまり欠く層。
- 2 にぶい黄褐色のシルト質土層 褐色のシルトブロックを多量に含む、ややしまりの強い層。
- 3 黒褐色土層 カーボン粒・焼土粒の混入の多い、しまり欠く層。
- 4 暗褐色土層 カーボン粒等を少量含む、踏み固められ層。
- 5 暗褐色土層 カマド下の埋め戻し土。焼土を少量含む。しまり欠く。



第12図 AY-2号住居および出土遺物



AY-3号住居跡 (第13図 PL-3・10)

位置 D区 f・g-19・20グリッド

重複 218号土坑に先出。

主軸方向 N-98°-E 床面積 11.0㎡

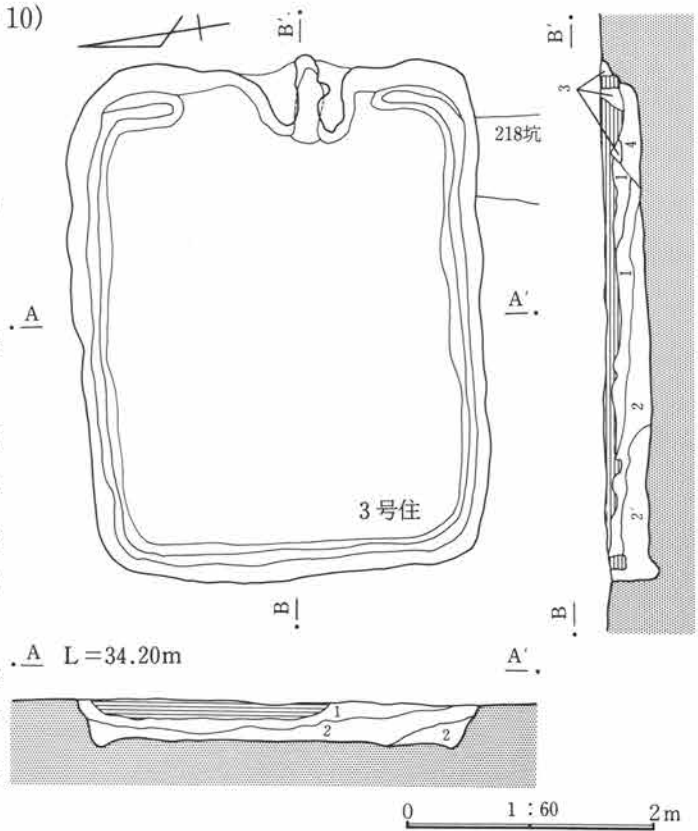
形態 長辺3.7m、短辺2.9mの隅丸縦長長方形を呈している。

壁 残存壁高は30~35cmある。上方に大きく開いているが、軟弱な壁が崩れたもので本来は垂直に近い立ち上がりの壁と思われる。

カマド 東壁中央やや南寄りにある。燃焼部は住居内にある。煙道は張出し部分を攪乱で壊されており、10cm程しか確認できない。壁面は被熱により赤変硬化している。カマド前面の床面に焼土やカーボンの散布が目立つ。

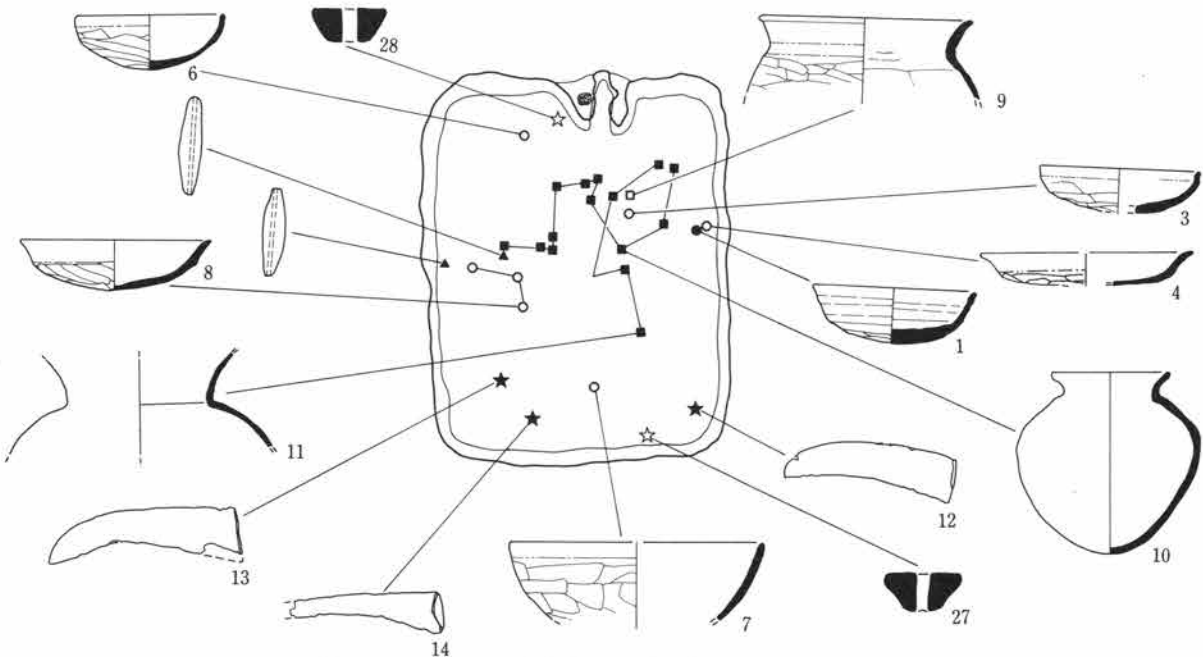
内部施設 深さ2~7cmのやや幅太の壁溝が東壁中央下を除いて全周している。南西壁下に深さ3cmの不明瞭なピットがあるが、本住居に伴うものかは不明である。

床 地山の黄褐色シルト質土をそのまま床面としている。北西側がやや深く、南壁下と5cm前後の比高差がある。

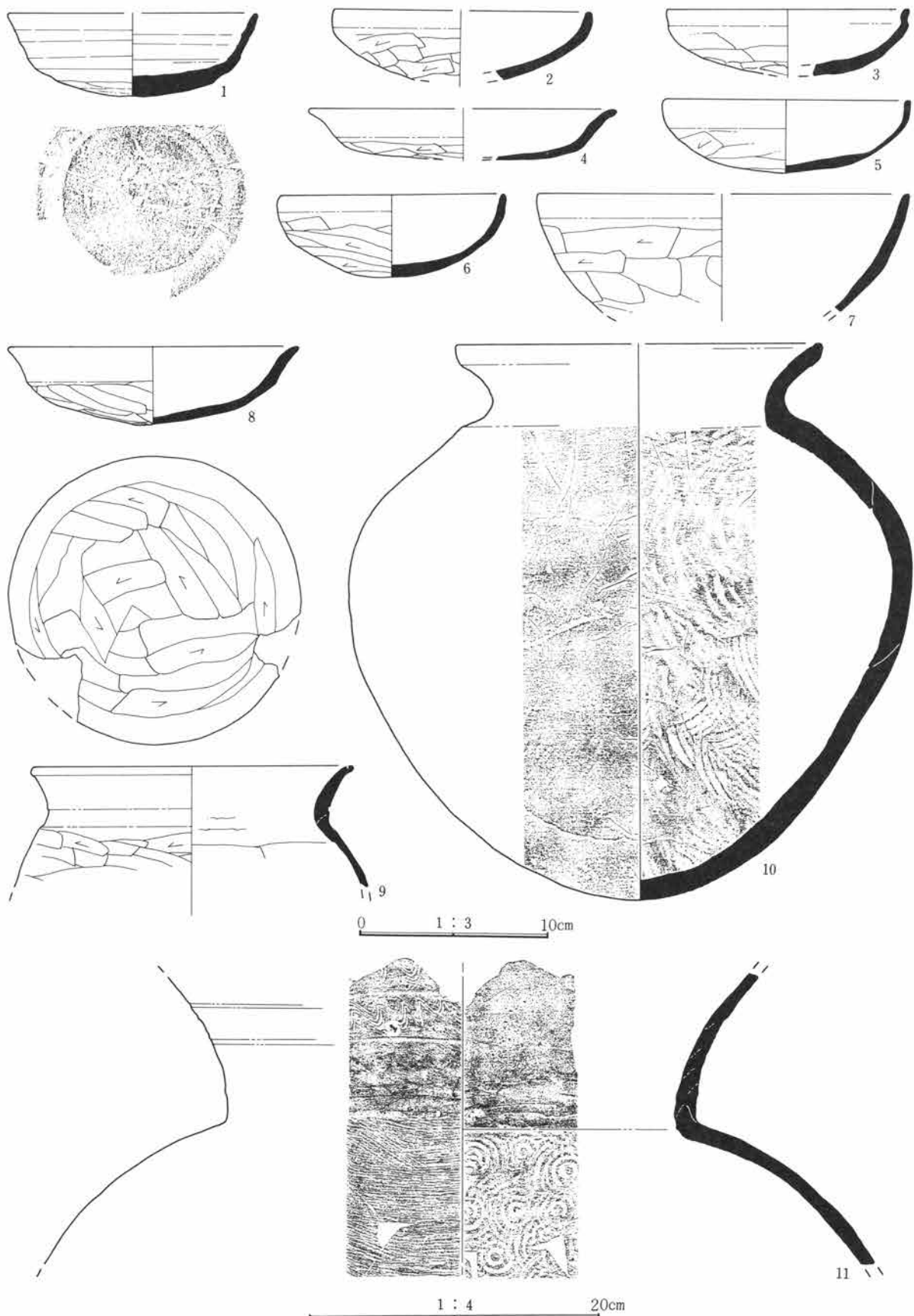


AY-3号住居土層説明

- 1 褐色シルト質土層 炭化物を含む、ややしまり強い層。
- 2 にぶい黄褐色のシルト質土層 シルト質土はスロック状に混入。  
2'は炭化物の面が多い。
- 3 褐色土層 焼土粒を若干含む、しまりの強い層。
- 4 暗褐色土層 黄褐色の粘土ブロック、焼土ブロックを多量に含む。



第13図 AY-3号住居および遺物出土状態



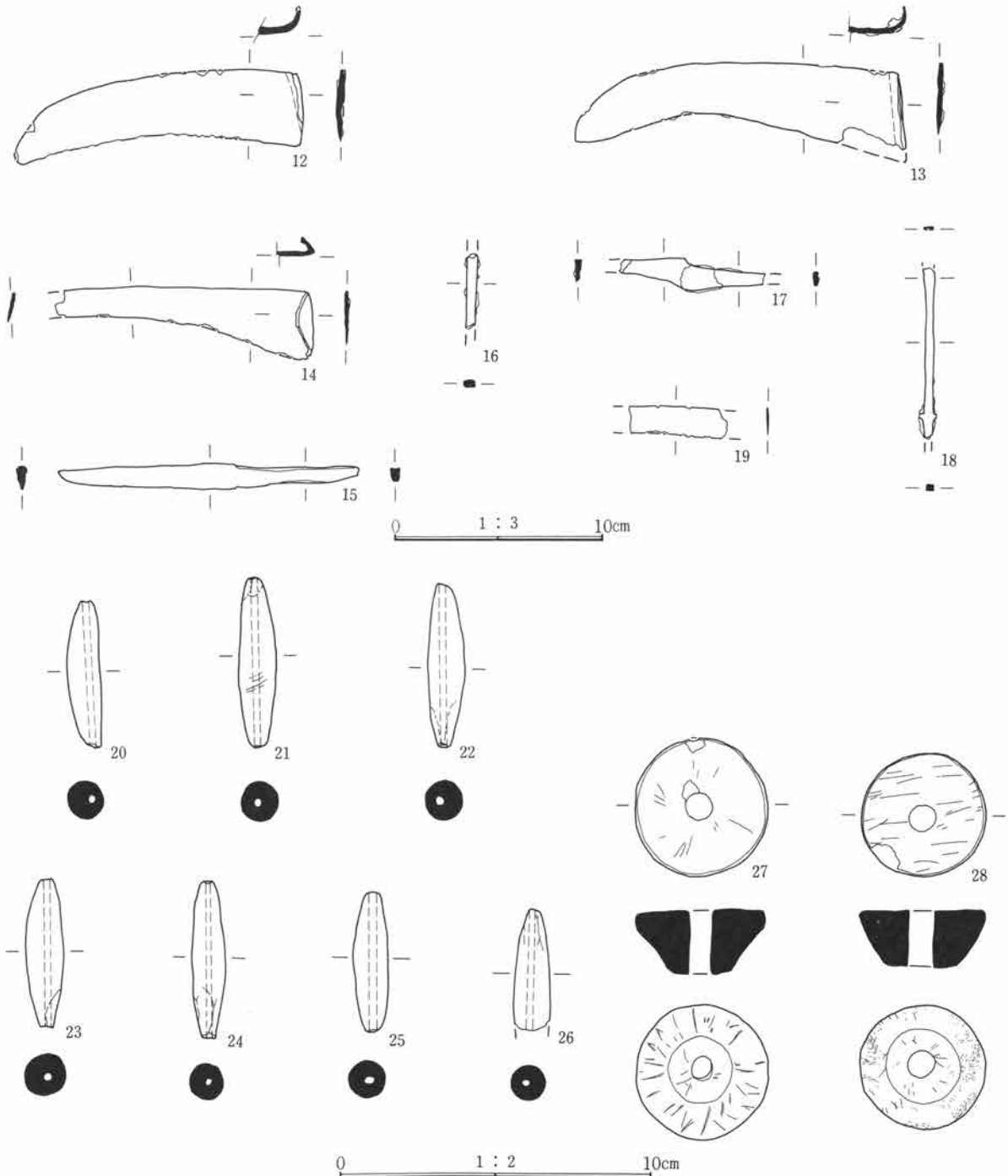
第14図 AY-3号住居出土遺物(1)

**遺物の出土状態** 鉄器を中心に紡錘車・土錘等、多様な遺物を多数出土した。このうち28点を図示したが、これらの遺物はみな床面から5～8cm浮いた状態であった。出土位置は鉄器が住居の西側に、土器はカマド前から住居中央に偏る傾向がある。須恵器大甕は図示した2点以外にも破片の出土が多く、こ

れら以外にも2個体以上あった可能性がある。土師器の破片は約300片あったが、杯甕ほぼ同数で、図示した以外でも杯類の多さが目立った。

なお、整理作業中に土錘21の孔内から炭化した紐を検出した。

**時期** 7世紀



第15図 AY-3号住居出土遺物(2)

AY-4号住居跡 (第14図 PL-3・11)

位置 D区d・e-17・18グリッド

重複 204号土坑に先出する。

主軸方向 N-89.5°-E 床面積 17.4㎡

形態 東辺が短い横長長方形を呈している。

規模 東壁推定4.7m、西壁5.7m、南壁3.7m  
北壁3.6m。

壁 軟弱な地山のため崩落が著しく、残存する壁は全体に緩やかな立ち上がりだが、壁溝直上では垂直に近い。壁高は30~40cmある。

カマド 東壁の南寄りにある。燃烧部は壁外にあり、袖は短い。火床は住居床面より5cm高いが、火床下の掘り方は床面レベル以下である。煙道は燃烧部か

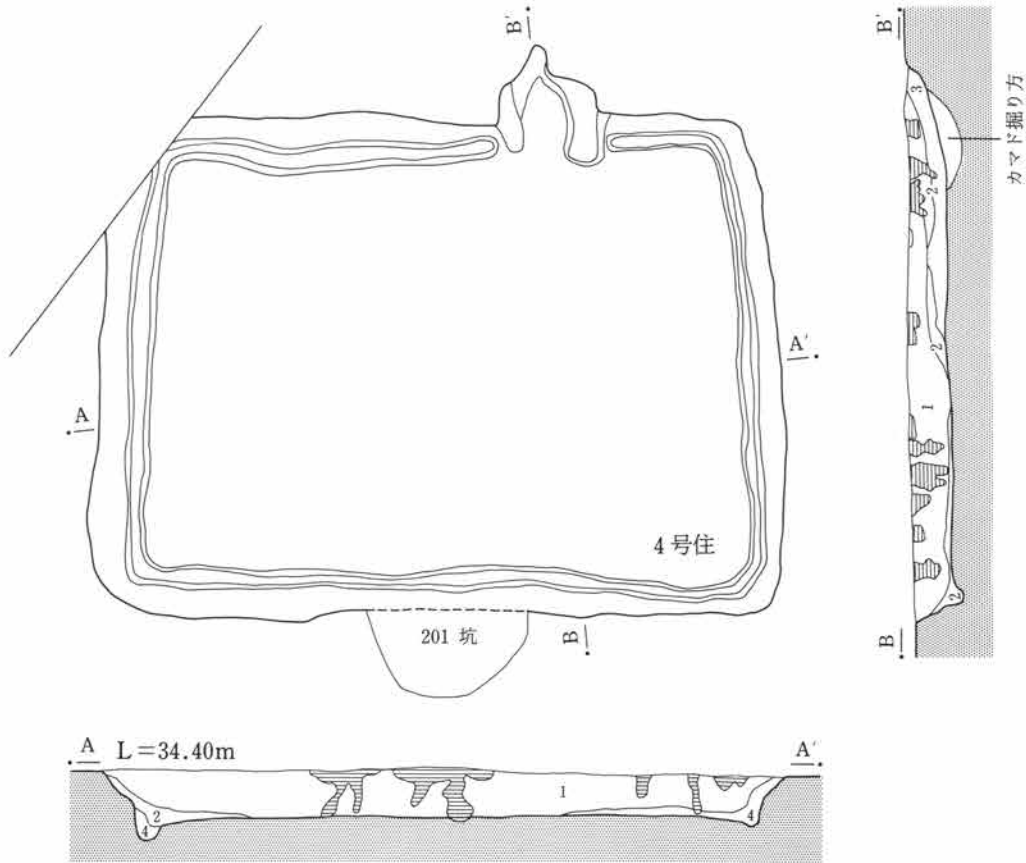
ら緩やかに立ち上がり、壁外へ65cm張出している。

内部施設 幅10~18cm、深さ5~12cmの明瞭な壁溝がカマド下を除いて全周している。

床 地山の黄褐色シルト質土をそのまま床面としている。細かな凹凸の多い不整な床である。

遺物の出土状態 4の鉢がカマド内、5の杯がカマド北脇床直上、8の甕が南壁下床直上から出土した。これ以外は埋没土中の出土である。図示した以外には約90片の土器があるが、薄手の土師器甕の破片が多く、丸胴甕の大破片が混じっていた。

時期 7世紀末から8世紀初頭。

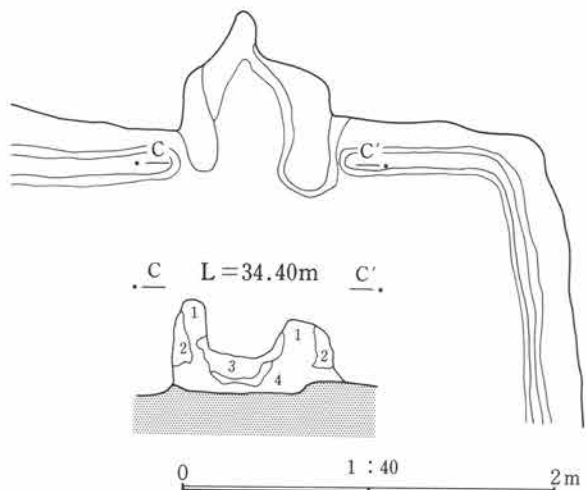


AY-4号住居土層説明

- 1 暗褐色シルト質土層 ブロック状の土からなる人為的な埋め戻し土層。
- 2 暗灰褐色土層 床面直上を覆うやや砂質な土層。
- 3 暗黄褐色土層 シルト質土中に、焼土・カーボン粒を含む。
- 4 暗褐色土層 壁溝内に見られるシルト質土。黒色土をブロック状に混入。

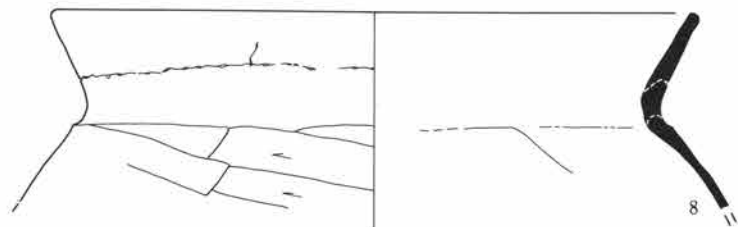
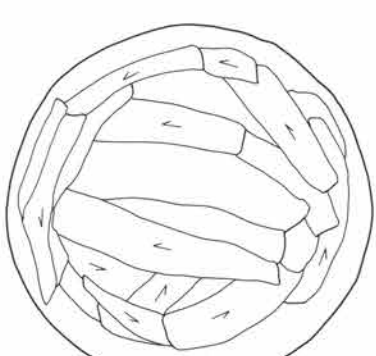
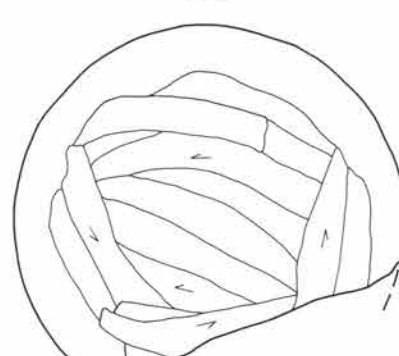
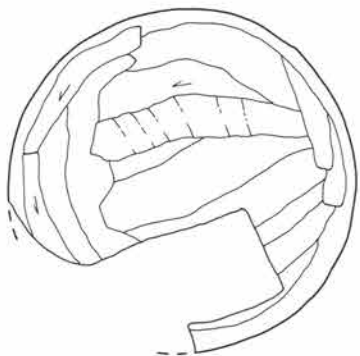
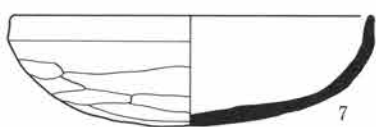
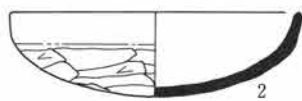
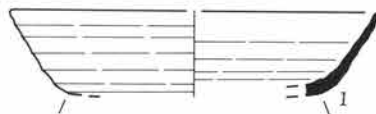
0 1:60 2m

第16図 AY-4号住居

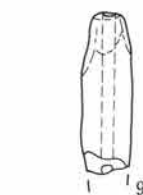


AY-4号住居カマド土層説明

- 1 暗黄褐色土層 焼土粒・白色粘土等を含むシルト質土。下層は粘土主体。
- 2 灰黄褐色土層 しまりの強い粘性土。上層ほど粘土質。
- 3 暗赤褐色土層 焼土ブロック・カーボン粒の多い土層。
- 4 暗褐色土層 粘土ブロックを少量含むシルト質土。



0 1:3 10cm



0 1:2 5cm

第17図 AY-4号住居カマドおよび出土遺物

AY-5号住居跡 (第18図 PL-3・11)

位置 D区b・c・d-20・21グリッド

重複 11号井戸にカマド煙道先端部付近を大きく切られている。

主軸方向 N-97°-E 床面積 15,8㎡

形態 東辺3,2m、西辺3,4m、南辺4,6m、北辺4,3mのやや不整な縦長長方形を呈している。

壁 軟弱な地山のため掘り過ぎた箇所が多いが、断面からオーバーハング気味の壁が確認できる。

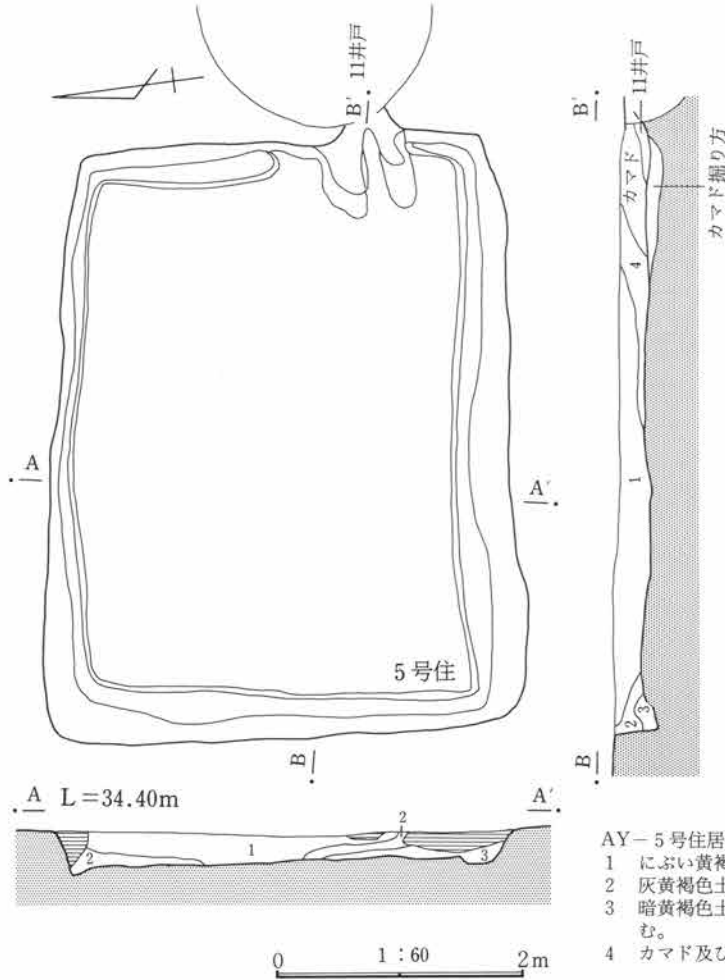
カマド 東壁南隅にある。燃焼部は住居内にあり、火床下に広い掘り方がある。

内部施設 幅10~24cm、深さ5~11cmの不整な壁溝がカマド下を除いて全周している。

床 地山の黄褐色シルト質土をそのまま床面としている。凹凸の多い不整な床である。

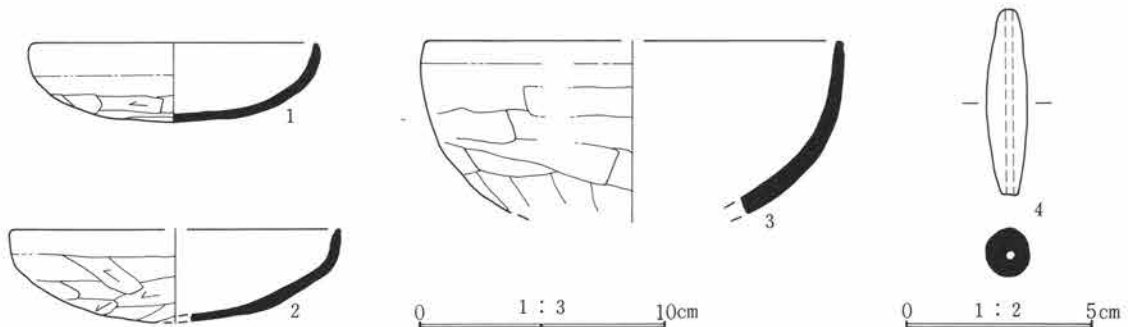
遺物の出土状態 1の杯はカマド前面、3は西寄りの北壁直下のそれぞれ床直上から出土した。他は埋没土内の出土である。図示した以外の土器はいずれも小破片で総約80片と少なかった。薄手の土師器長胴甕底部片、叩きのある須恵器大甕破片等が含まれている。

時期 8世紀前半か。



AY-5号住居土層説明

- 1 におい黄褐色シルト質土層 粘性なく、しまりも弱い。
- 2 灰黄褐色土層 シルト質。焼土粒・カーボン粒を少量含む。
- 3 暗黄褐色土層 壁溝埋没土。暗褐色のシルトブロックを多く含む。
- 4 カマド及びカマド崩落土層。



第18図 AY-5号住居および出土遺物

AY-6号住居跡 (第19図 PL-3・11)

位置 D区c・d-18・19グリッド 5号住居と形状が類似し、同住居の北側に軸方向を揃えるようにして並んでいる。

主軸方向 N-100°-E 床面積 16,0㎡

形態 東・西辺3,5m、南辺4,5m、北辺4,7mで、南辺のやや短い縦長長方形を呈している。カマドを挟んで東辺が若干食い違っている。

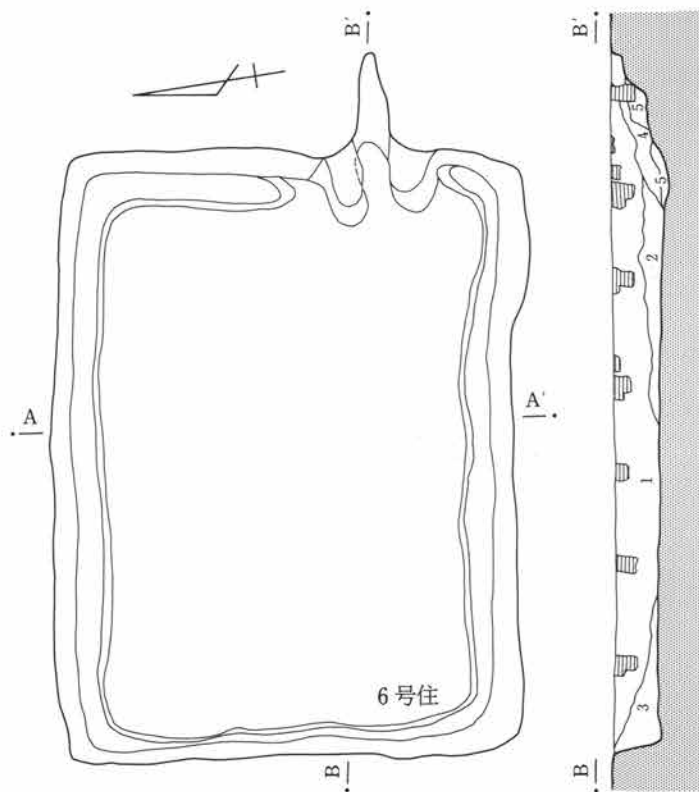
壁 軟弱な地山の壁で崩落部分が多いが、断面からは垂直に近い立ち上がりが復元できる部分もある。残存壁高は32~38cmである。

カマド 東壁下南寄りにある。燃焼部は壁直下にあ

り、火床は住居床面より5cm低い。火床と袖部の下に深さ30cmの広い掘り方があるが、中心は北側にそれている。煙道は階段状に立ち上がり、壁外に80cm張出している。

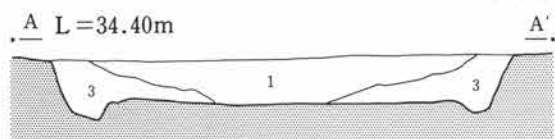
内部施設 幅12~35cm、深さ4~11cmの壁溝がカマド下と周辺を除いて全周している。西壁下北側が著しく幅狭で浅く、不明瞭になっている。

床 黄褐色シルト質土地山をそのまま床面としている。平坦だが南側へ僅かに傾斜しており、北隅より3cmほど低くなっている。



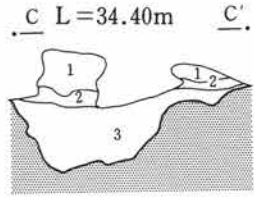
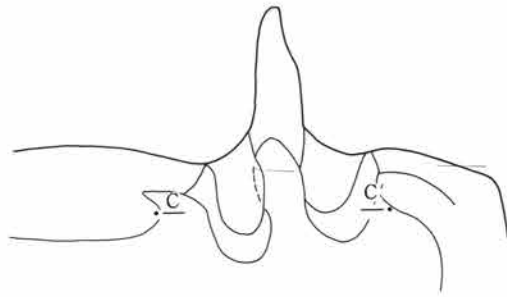
AY-6号住居土層説明

- 1 におい黄褐色土層 しまりの弱いシルト質土層。
- 2 暗褐色土層 焼土粒・カーボン粒を少量含む、ややしまりの強い土層。
- 3 褐色土層 1・2の混合土層。
- 4 におい黄褐色土層 ややしまりの強い弱粘性土層。壁側では焼土・灰の混入多い。
- 5 暗赤褐色土層 焼土粒・焼土ブロック主体のカマド火床面。



0 1 : 60 2m

第19図 AY-6号住居



0 1 : 40 2m

第20図 AY-6号住居カマド

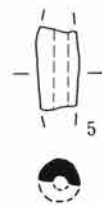
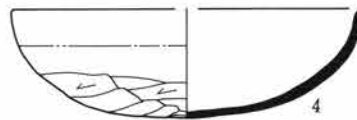
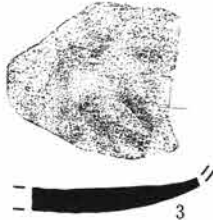
**遺物の出土状態** 出土遺物は少なかった。杯類を中心に5点を図示したがいずれも1/2個体以下である。

1の須恵器杯は南壁直下の壁溝上で床面上15cmのレベルから出土した。他は埋没土内の出土である。図示した以外は小破片で約80片ある。そのうち約50片が土師器杯類で、杯類の多さがやや目立つ。土師器甕類は薄手の胴部破片のみで、丸胴気味と長胴気味の双方が含まれている。須恵器大甕の胴部破片も少量出土している。

**時期** 8世紀前半か。

**AY-6号住居カマド土層説明**

- 1 におい黄褐色土層 ややしまりの強い弱粘性土層。
- 2 黒褐色土層 カーボン粒を多量に含む粘性土層。灰白色粘土が下層に多い。
- 3 暗褐色土層 1と2の混泥土層。掘り方埋め戻し土。



0 1 : 3 10cm

0 1 : 2 5cm

第21図 AY-6号住居出土遺物



AY-7号住居跡(第22図 PL-4・11)

位置 D区a・b-17・18グリッド

主軸方向 N-93°-E 床面積 20,9m<sup>2</sup>

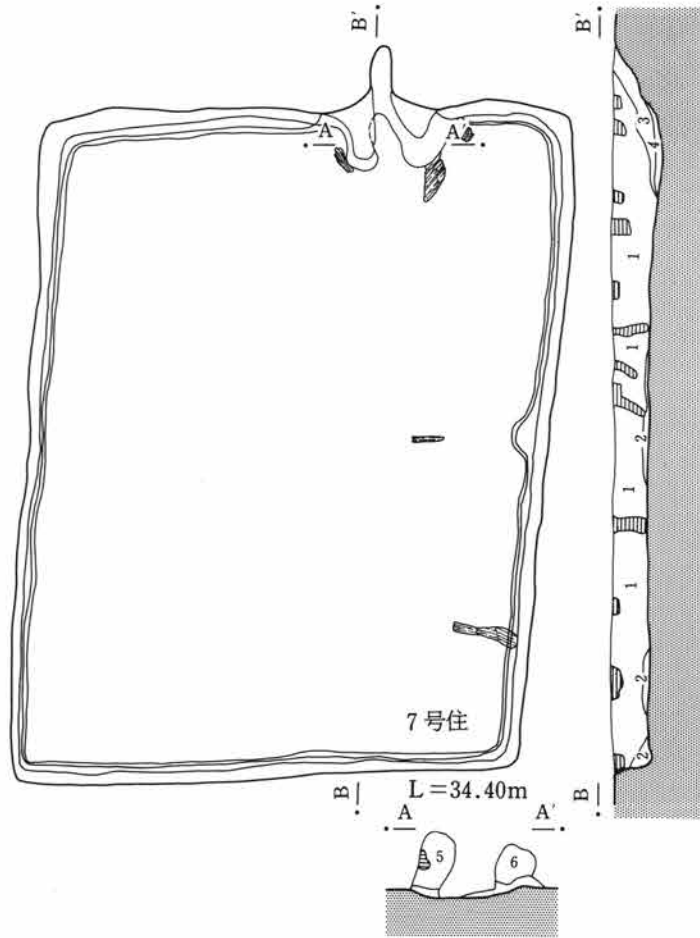
形態 東辺4,1m、西辺4,0m、南北辺5,1mの平行四辺形状にやや歪んだ縦長長方形を呈している。

壁 垂直に近い壁が残存している。最も良好なカマド付近で40cm近い壁高がある。

カマド 東壁下南寄りにある。燃焼部は壁直下で、火床は住居床面と同一レベルにある。煙道は北側に曲がり壁外へ60cm張出している。両袖部には粘土を主体とする芯材を使用している。

内部施設 幅7cm、深さ3~7cmの整った壁溝がカマド下を除いて全周している。

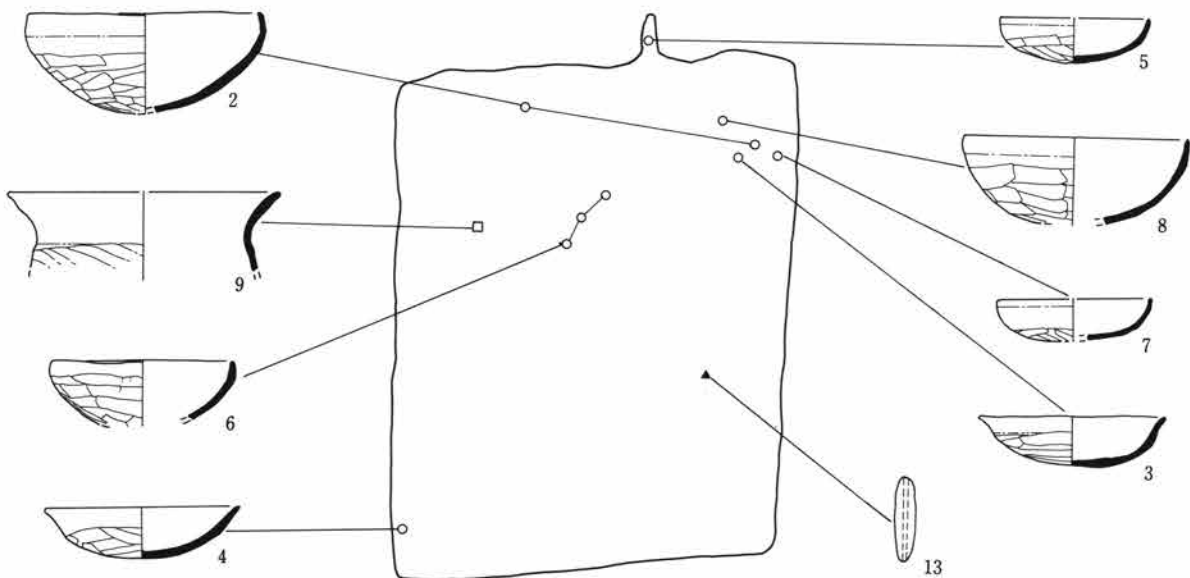
床 地山の黄褐色シルト質土をそのまま床面としている。住居中央がやや高くなり、壁際と最大4cmの比高差がある。



AY-7号住居土層説明

- 1 におい褐色土層 しまりのないシルト質土層。下層ほどブロック状の混入となっている。
- 2 黒褐色土層 カーボン粒を多量に含む層。焼土粒散見。
- 3 におい黄褐色土層 シルト質土中に焼土・カーボン粒を多量に含む層。

- 4 黒褐色土層 灰が互層状に堆積するしまりの強い層。
- 5 褐色粘性土層 白色粘土粒のまじるしまりの強い層。焼土・カーボンを散見するカマド袖構築材。
- 6 黒色土層 カーボン・灰主体の層。

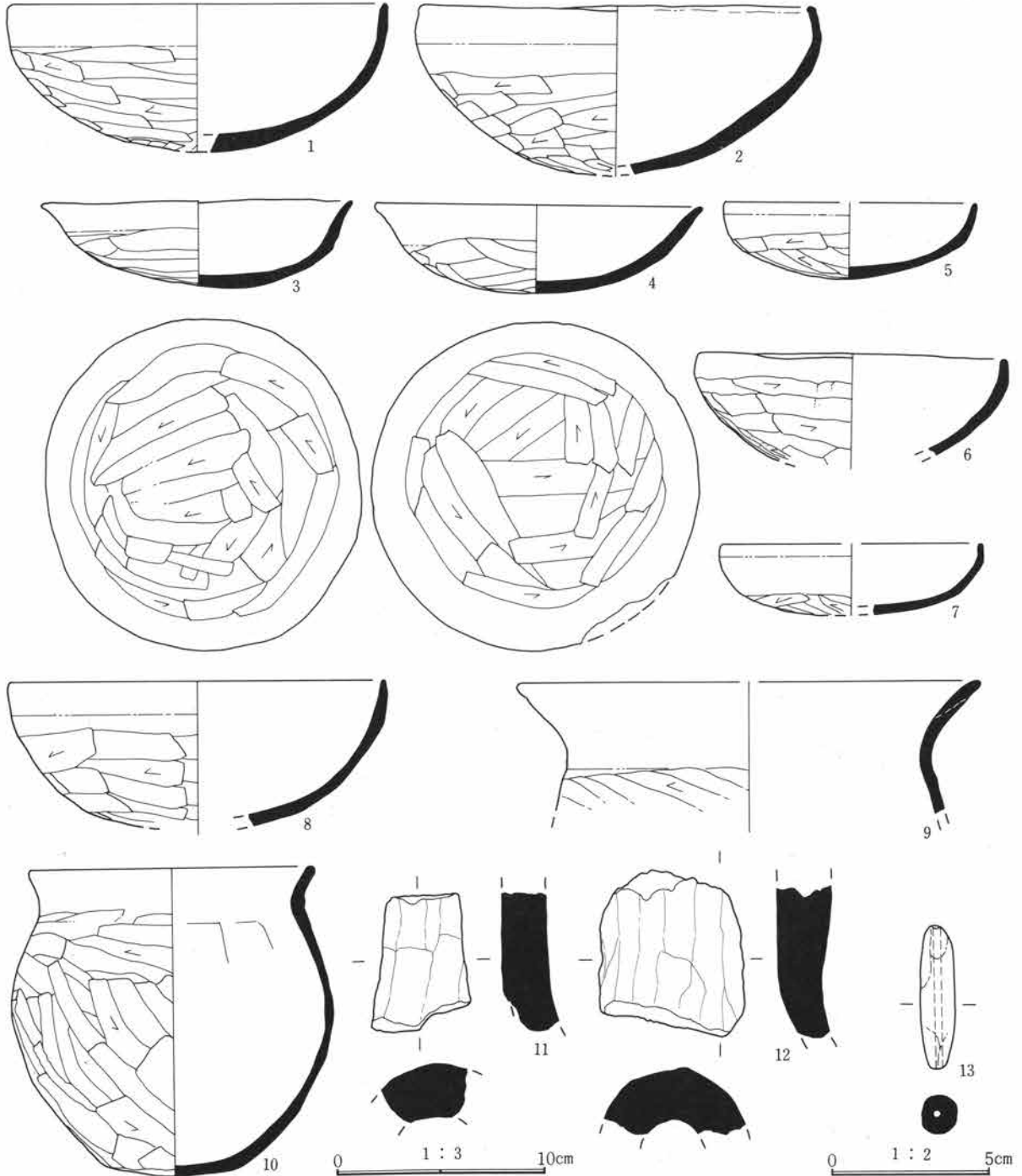


第22図 AY-7号住居および遺物出土状態

**遺物の出土状態** 火災住居と思われる、カマド付近や南壁直下から炭化材が出土している。土師器杯類を中心に13点の遺物を図示した。カマド前面から住居中央にかけての床直上から2・3・6・8・9等、遺物の出土が多い。2点の羽口破片の他に、スラグ

の出土もあり、鍛冶関連遺構の可能性もある。図示した以外の遺物は少なく、破片総数で約60片である。長胴気味の土師器甕胴部破片が目立った。須恵器大甕の胴部破片も含まれている。

**時期** 8世紀前半



第23図 AY-7号住居出土遺物

AY-8号住居跡 (第24図 PL-4・12)

位置 D区 a・b-15・16グリッド

重複 208号土坑に先出し、北西隅付近を大きく壊されている。

主軸方向 N-91,5°-E 床面積 12,6m<sup>2</sup>

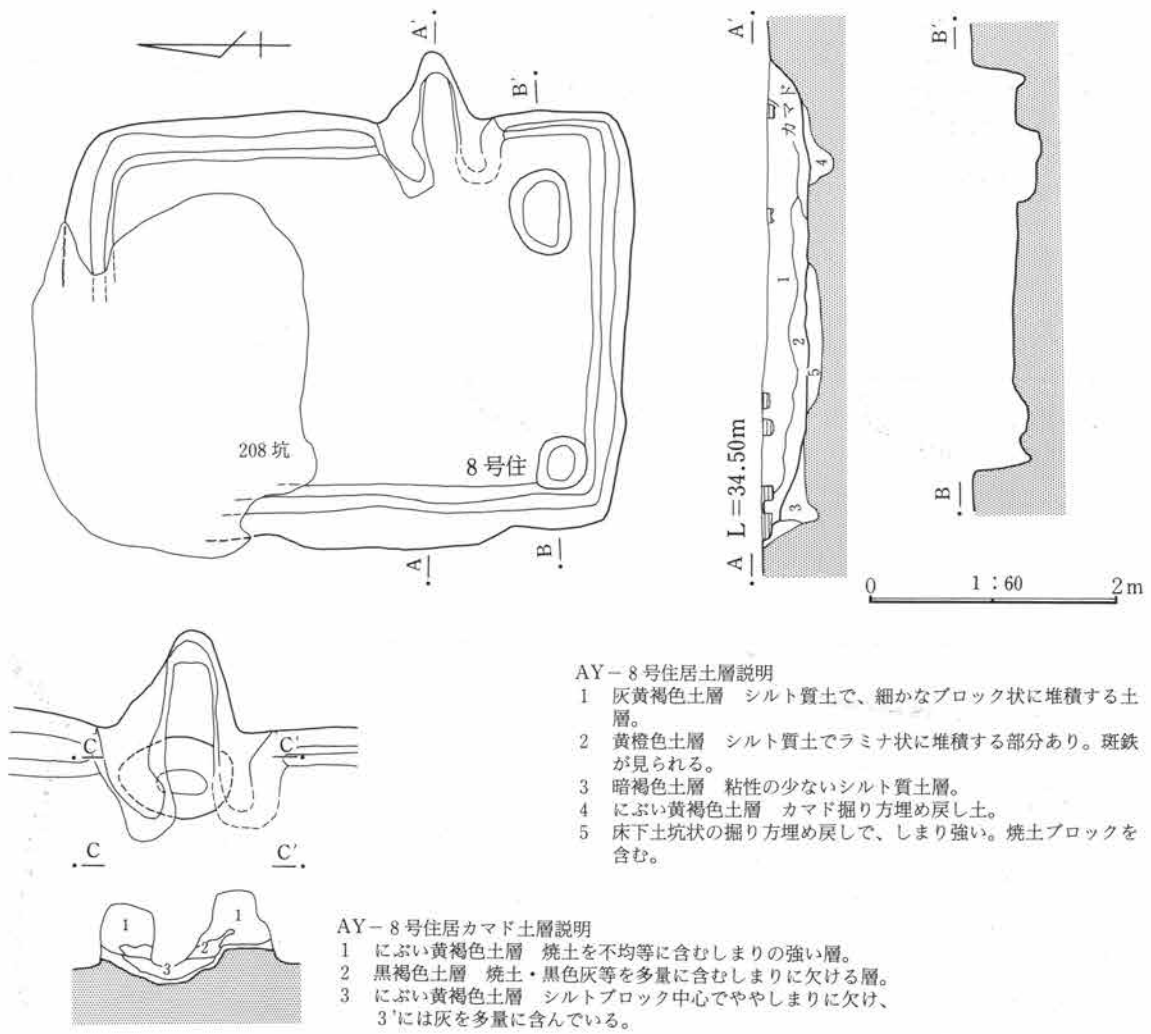
形態 東・西辺4,2m、南・北辺3,2mで比較的整った横長長方形を呈している。

壁 東・南辺に垂直に近い壁が残存している。壁高は30~40cmである。

カマド 東壁南寄りにある。燃焼部は縦長で壁直下であり、煙道は壁外に45cm張出している。燃焼部直下には深さ20cmの楕円形の掘り方がある。

内部施設 幅18~25cm、深さ10~14cmの壁溝がカマド直下を除いて全周するものと思われる。また、南西隅では柱穴状のやや浅い窪みが床下調査時にみつかった。南東隅下の通常貯蔵穴のある位置からも、不明瞭な落込みが見つまっている。

床 住居粗掘り時の窪みを埋め戻す程度で、地山をほぼそのまま床面としている。凹凸の多い床である。住居中央の床下には、深さ8cmの土坑状の窪みがあり、上面は堅く踏み固められていた。



AY-8号住居土層説明

- 1 灰黄褐色土層 シルト質土で、細かなブロック状に堆積する土層。
- 2 黄橙色土層 シルト質土でラミナ状に堆積する部分あり。斑鉄が見られる。
- 3 暗褐色土層 粘性の少ないシルト質土層。
- 4 におい黄褐色土層 カマド掘り方埋め戻し土。
- 5 床下土坑状の掘り方埋め戻して、しまり強い。焼土ブロックを含む。

AY-8号住居カマド土層説明

- 1 におい黄褐色土層 焼土を不均等に含むしまりの強い層。
- 2 黒褐色土層 焼土・黒色灰等を多量に含むしまりに欠ける層。
- 3 におい黄褐色土層 シルトブロック中心でややしまりに欠け、3'には灰を多量に含んでいる。

0 1:40 2m

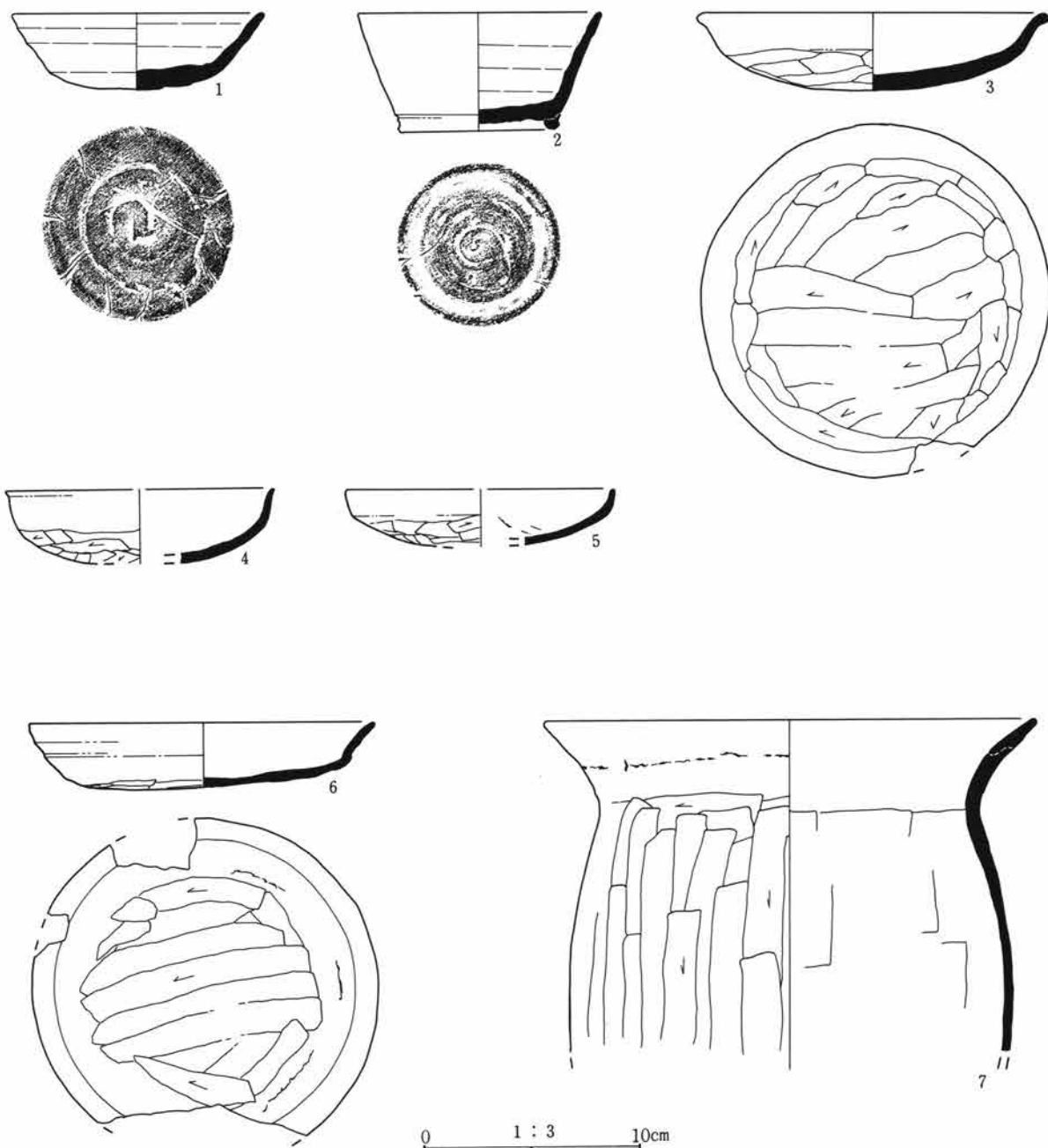
第24図 AY-8号住居およびカマド

**遺物の出土状態** 杯類を中心に7点を図示した。遺物は住居内の全域から出土しているが、図示したものはカマドから離れて出土したものに偏ってしまった。1の須恵器杯は住居中央南西寄り、2の高台付き須恵器杯は南壁直下、7の甕は西壁直下でいずれも床面直上レベルで出土した。他は埋没土内の出土である。図示した以外の遺物は小破片が中心だが、接合するものが多かった。土師器甕は100片以上あ

り、長胴、丸胴とも破片の量が多い。7とは別個体の長胴甕の胴部片がカマド内から多量に出土した。土師器杯は大型にものが中心であった。

なお、重複する208号土坑からも同時期の遺物の出土が多く、本住居に伴う土器が流れ込んだものと思われる。

**時期** 8世紀前半。



第25図 AY-8号住居出土遺物

AY-9号住居跡 (第26図 PL-4・12)

位置 C区x・y-16・17グリッド

重複 11号住居に後出し19号住居に先行する。18・19号溝に先行する。6・8号掘立とも重複する。

主軸方向 N-3°-w前後か

床面積 (28,4) m<sup>2</sup>

形態 南・東辺が不明瞭だが、部分的に残存する壁溝から推定すると、南辺が北辺より短い逆台形を呈するものと思われる。

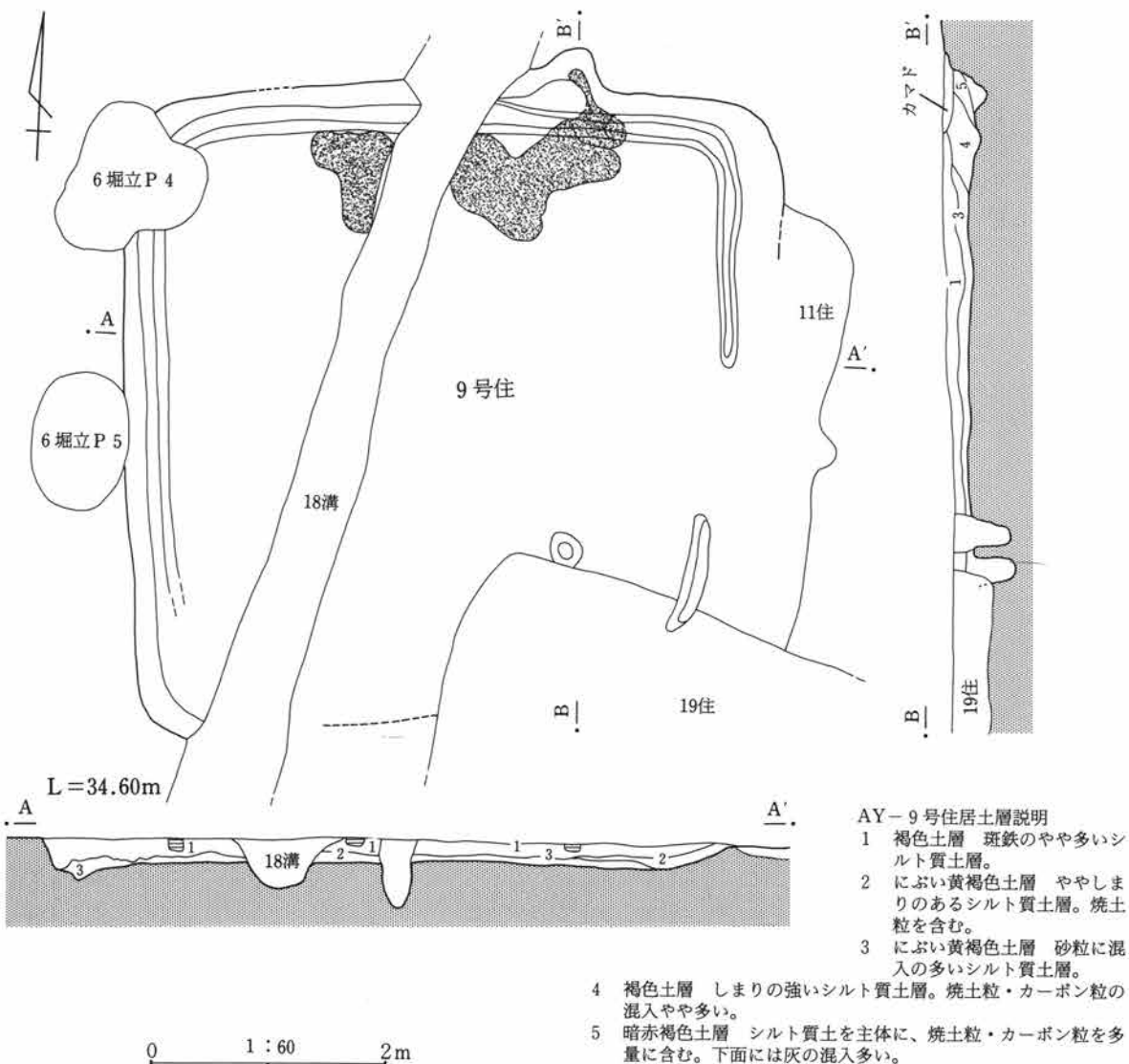
規模 北・西辺約5,1m、南・東辺約4,6m。

壁 残存する部分では20~27cmの壁高がある。

カマド 北壁東寄りにカマドの痕跡と思われる掘り込みがあり、壁面の一部が強く被熱している。推定される燃焼部の位置は住居内にあたる。袖は全く残っていない。北壁直下にはカマド崩落によると思われる灰やカーボン粒が床直下に散っていた。

内部施設 壁溝が全周するものと思われるが、南・東壁下では不明瞭である。特に東壁下で痕跡と思われる部分を図示したが、他の部分と比べて形状が異なり、壁溝と断定できない。

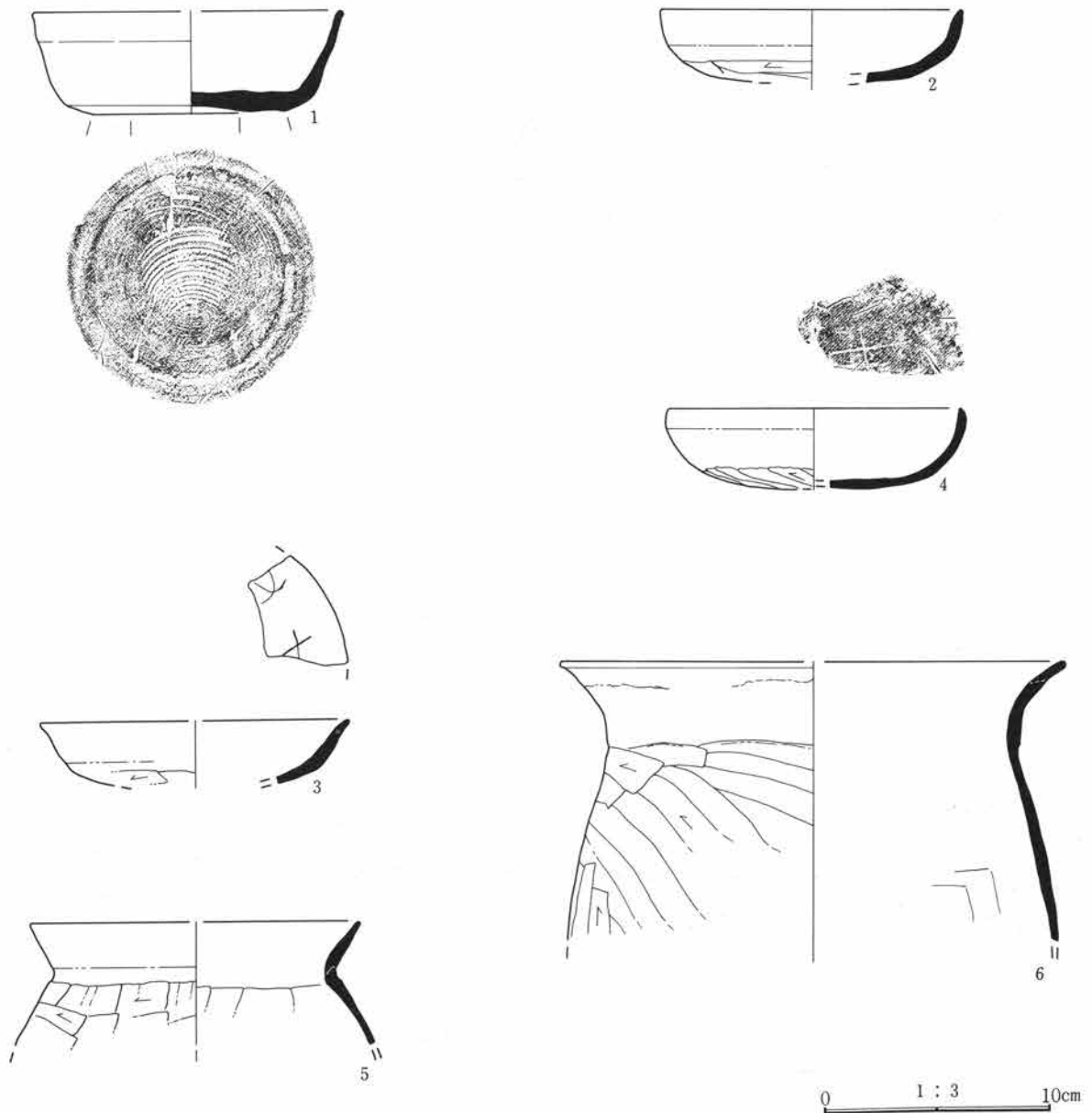
床 大半が11号住居の埋没土上にあるが、踏み固めや炭化物粒の拡がりから区別した。



第26図 AY-9号住居

**遺物の出土状態** 6点を図示した。重複する11号住居の遺物がかなり混入しているが、カマド前面からまとめて出土した土器が良好な資料で、4の杯と6の甕が灰・カーボン層内の床面直上遺物である。1の須恵器杯も南東隅直下に見られた灰・カーボン層内の床面直上遺物である。他は埋没土内の遺物である。図示した以外の出土遺物は破片数で約400点

と多かった。土師器甕が中心で、やや丸胴気味の甕の大破片が目立ち、図示した以外にも複数個体あったようである。須恵器は少ないが、杯底部破片はいずれも1同様に回転ヘラ削りの調整を加えたものである。高台部分や甕の小破片も少量混じていた。  
**時期** 8世紀。



第27図 AY-9号住居出土遺物

AY-10号住居跡 (第28図 PL-4)

位置 D区 e・f-22・23グリッド

重複 1号住居に後出するようだが攪乱が多く、不明確。21号溝、211号土坑に先行する。

主軸方向 N-94°-E 床面積 10,0m<sup>2</sup>

形態 やや不整な縦長長方形。重複する1号住居と類似し、東壁は2軒ともほぼ同一のライン上にあり建て替え住居の可能性もある。

規模 攪乱や重複が多く不明瞭だが、北辺で3,8m、東辺で2,8mある。

壁 遺存状態の最も良い北壁でも、最大20cm程度の壁高である。

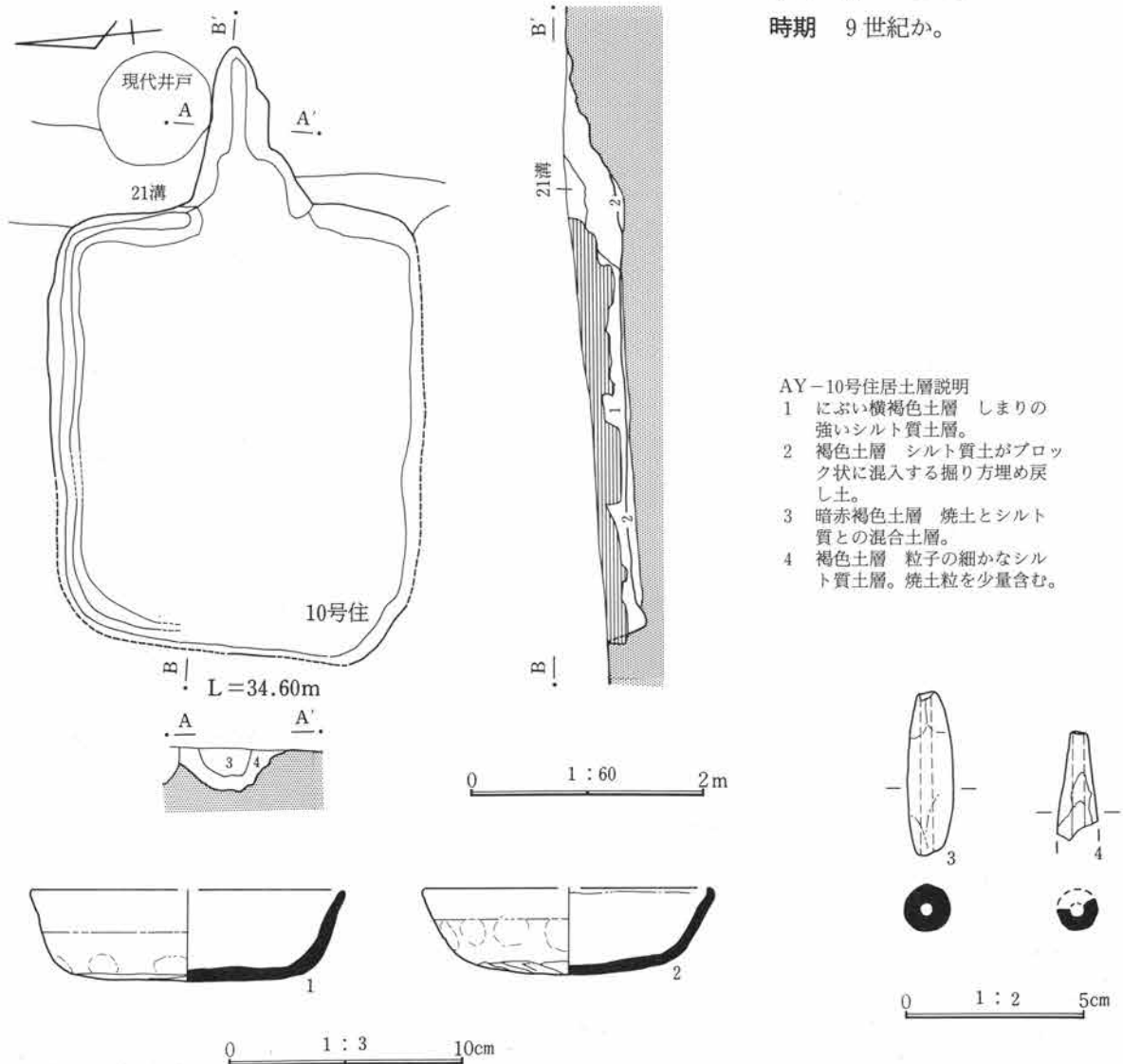
カマド 東壁中央にある。燃焼部は壁外にあり火床は床面レベルにある。煙道は緩やかに立ち上がり壁外へ135cm張出ししている。袖は残存しない。

内部施設 残存状態の良い北側で壁溝が巡っており本来は全周するものと思われる。床面からの深さは3~10cmである。

床 明瞭な床ではなかった。床下のほぼ全面に深さ3~8cmの掘り方がある。

遺物の出土状態 4点を図示した。2の杯がカマド内から出土した以外は、埋没土内の遺物である。図示した以外は破片数約40点と少ない。土師器甕の胴部片が殆どである。

時期 9世紀か。



AY-10号住居土層説明

- 1 におい横褐色土層 しまりの強いシルト質土層。
- 2 褐色土層 シルト質土がブロック状に混入する掘り方埋め戻し土。
- 3 暗赤褐色土層 焼土とシルト質との混合土層。
- 4 褐色土層 粒子の細かなシルト質土層。焼土粒を少量含む。

第28図 AY-10号住居および出土遺物

AY-11号住居跡 (第29図 PL-4・12)

位置 C区x・y-16・17グリッド

重複 9・19号住居、18・19号溝に先出する。6・7・8号掘立とも重複する。

主軸方向 N-88°-E 床面積 23,2㎡(上面)

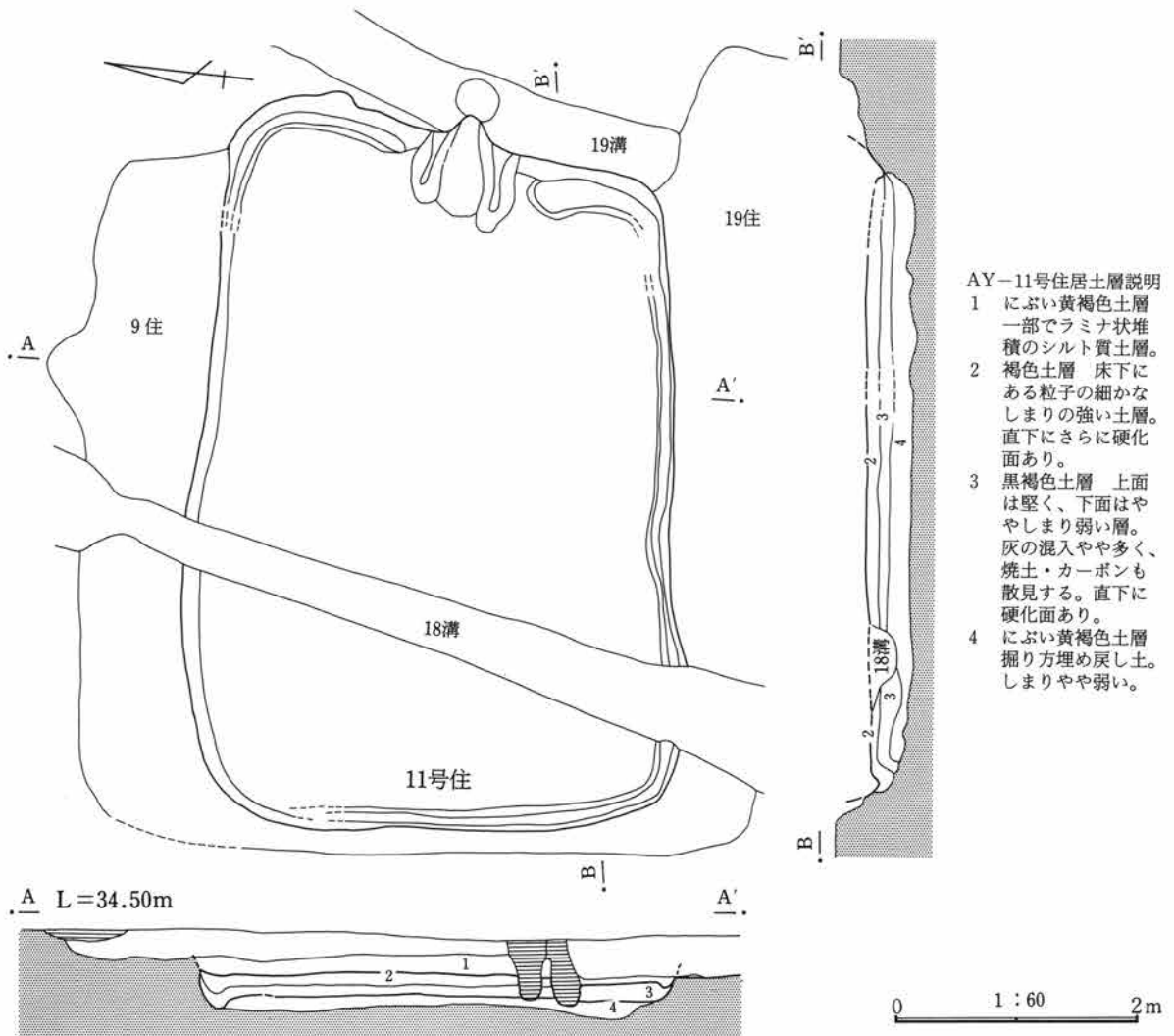
形態 重複が著しく、不明瞭だが不整縦長長方形になりそうである。発掘調査段階で本住居に伴うものとして3枚の硬化面を確認し、いずれも床面と想定しているが、毎回僅かずつ規模を拡大しながら床面を10cmほど盛り上げていく再構築方法には無理がありそうだ。上面の第1面(第29図)はカマド前面の床が明瞭である。中間の第2面は第1面の床構築時の踏み固めではなかろうか。下面の第3面(第30図)

の床は灰等の散布が顕著で遺物の出土もあり、生活面と想定できそうである。これより、1回の建て替え(2軒の住居の可能性あり)を想定した。

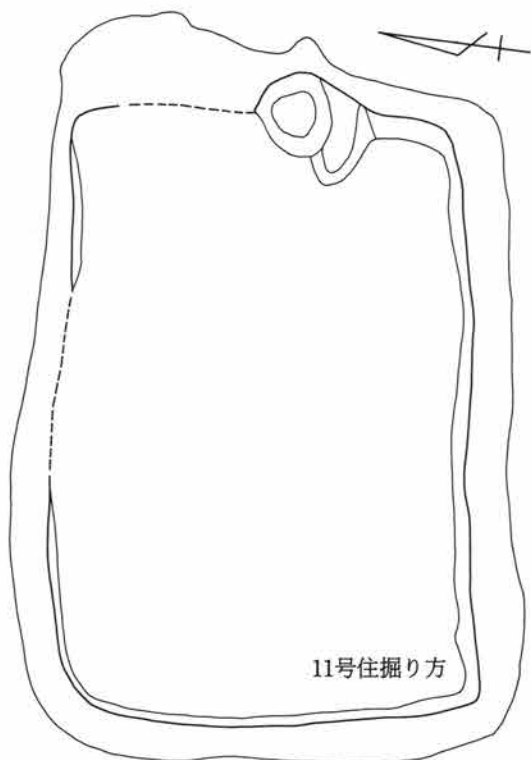
規模 上面は北辺5,3m、南辺4,5m、東辺3,1m、西辺3,4m。下面は北辺4,5m、南辺4,3m、東辺2,9m、西辺3,2m。

壁 2軒の住居と溝に切られており、本住居の壁は東壁北隅以外殆ど残存していない。西壁は9号住居とほぼ同じ位置にある。

カマド 東壁中央やや南寄りにある。基部しか残存しておらず不明瞭だが重複する2つのカマドとなりそうである。上面カマドの燃焼部は住居内にあり、火床は住居床面レベルにある。火床下には深さ20cm







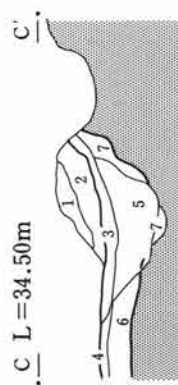
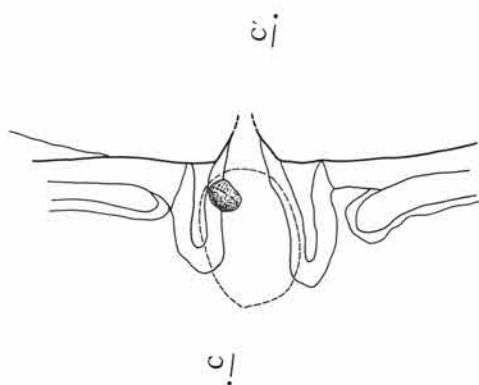
の掘り方がある。下面カマドは上面カマドと同位置にあり、上面カマドの掘り方に燃烧部や袖の一部を壊されている。残存状態が悪く不明瞭だが、下面も火床下に掘り方を持つようだ。

**内部施設** 上面住居に伴う壁溝が北壁下とカマド下を除いて巡っている。深さは5～20cmで形状も一定でない。

**床** 上面は堅く踏み固められた床であるが、凹凸が大きい。東西両壁下は住居中央に比べて3～6cm低くなっている。

**掘り方** 歪んだ上面住居のプランに比べ、整った長方形プランの掘り方である。下面住居のプランと一致するが、上面住居床面からは約40cm、3枚目の硬化面（下面住居床）からでも18cm前後に深さである。

0 1 : 60 2m



0 1 : 40 2m

**AY-11号住居カマド土層説明**

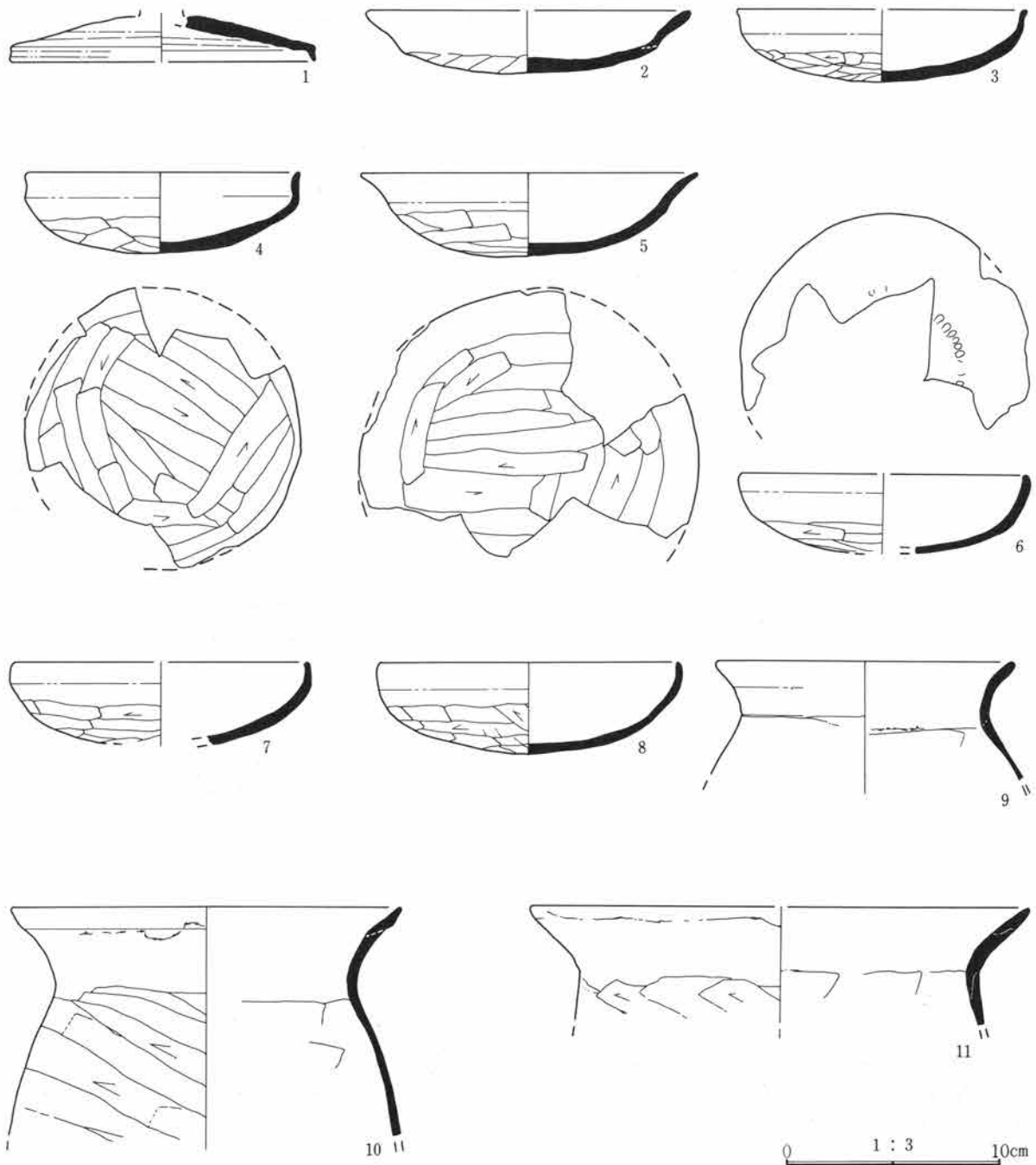
- |  |   |
|--|---|
| <p>1 におい黄褐色土層 しまり強い粘性土層で、天井崩落土がまじり、焼土粒が散見する。</p> <p>2 褐色土層 焼土粒の混入多く、灰も目立つ粘性土層。</p> <p>3 黒褐色土層 カーボン粒の混入の多い、しまりのないカマド掘り方埋め戻し土。</p> <p>4 におい黄褐色土層 焼土粒・カーボン粒が少量まじる貼り床。</p> | <p>5 におい黄褐色土層 焼土粒の少量まじるしまり強い土層。上面カマドの掘り方と思われる。</p> <p>6 黒褐色土層 カーボン粒の混入の多い土層。上面は踏み固められ、床直上ではしまり欠く。</p> <p>7 褐色土層 焼土の混入やや多いしまりの弱い土層。カマド掘り方埋め戻し土と思われる。</p> |
|--|---|

第30図 AY-11号住居掘り方およびカマド

遺物の出土状態 11点の土器を図示した。上面の住居はカマド周辺からの出土遺物が多い。5の杯と9の甕はカマド火床上、10の甕は北袖前面の床直上遺物である。1の須恵器蓋、2の杯もカマド周辺の遺物であるが、9号住居に伴う可能性もある。他は下

面住居の遺物と思われ、床下から一括して取り上げたものである。図示した以外にも土師器の大型杯、「く」の字状に屈曲する甕口縁破片等の出土土器は多く、総数で300点を超過している。

時期 8世紀。



第31図 AY-11号住居出土遺物

AY-12号住居跡 (第32図 PL-4)

位置 C区x・y-18・19~D区a-19グリッド。

18号住居が西側1,1mの位置に隣接している。竪穴住居とするには問題のある遺構である。

主軸方向 N-105,5°-E 床面積 16,2m<sup>2</sup>

形態 やや不整な縦長長方形で、東辺はカマドを挟んでやや食い違っている。

規模 北辺4,5m、南・西辺4,1m、東辺3,9m。

壁 15~30cmの残存壁高である。形状は一定していない。

カマド 東壁中央にカマド煙道状の張出し部があるが、被熱の痕跡や、袖・掘り方等の施設がない。焼土・灰・炭化物粒やカマド構築材粘土の散布も観察されず、この部分をカマドとする根拠は見いだせな

かった。

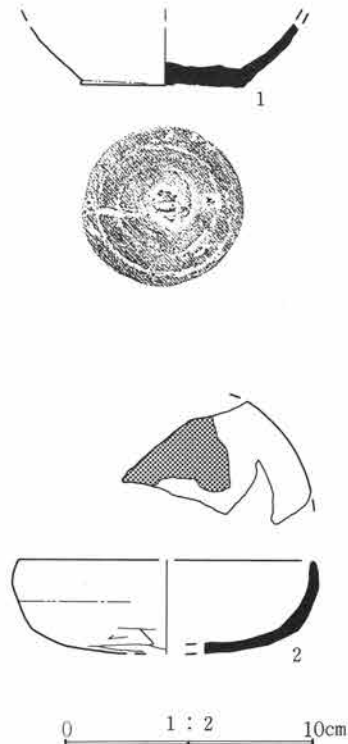
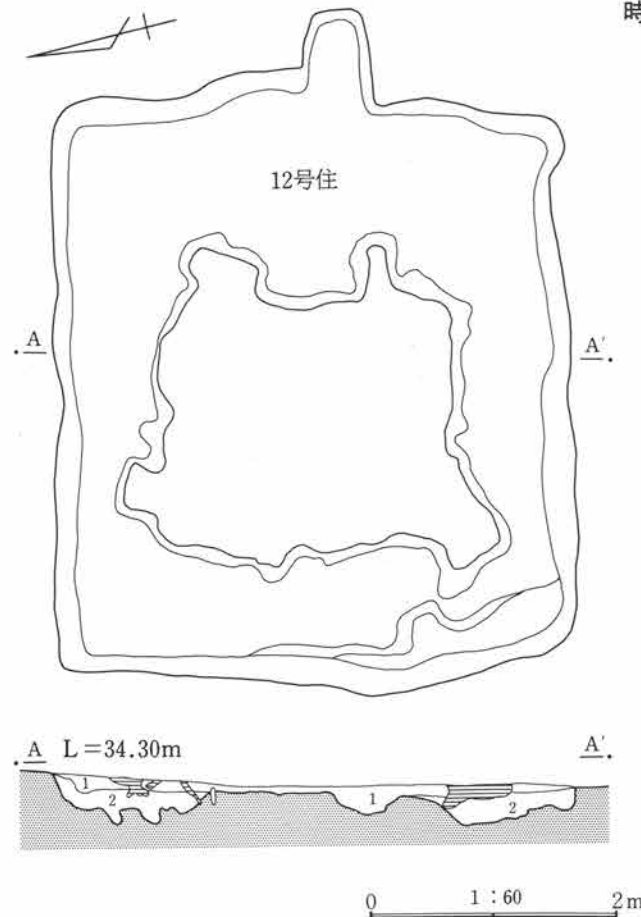
床 調査段階で掘り方まで一気に下げてしまい、セクションベルト内以外の床面を検討できなかった。

踏み固めや汚れのある明瞭な床面はないようである。

掘り方 住居中央と西壁下を除いて、深さ3~24cmの凹凸の多い掘り方があり、ほぼ単一の土で埋め戻していた。

遺物の出土状態 杯を2点図示した。遺物はすべて埋没土内の出土である。図示した以外にも大破片の出土はない。総数100点以上の土器があるが、時期は混在している。須恵器では長頸壺の口縁破片や大型の高台付き杯片などがある。土師器甕類の少なさが目立った。

時期 9世紀代の遺物が最も多かった。



AY-12号住居土層説明

- 1 褐色土層 シルト質土が小ブロック状に混入し、焼土粒を散見する。
- 2 暗褐色土層 シルト質土層。斑鉄が見られる。

第32図 AY-12号住居および出土遺物

AY-13号住居跡 (第33図 PL-4・12)

位置 D区k・i-24・0グリッド

主軸方向 N-101°-E

床面積 20,5m<sup>2</sup>

形態 やや縦長の長方形。

規模 南北辺は5,0m。東辺は4,4mで西辺より50cmほど長くなり、逆台形気味になっている。

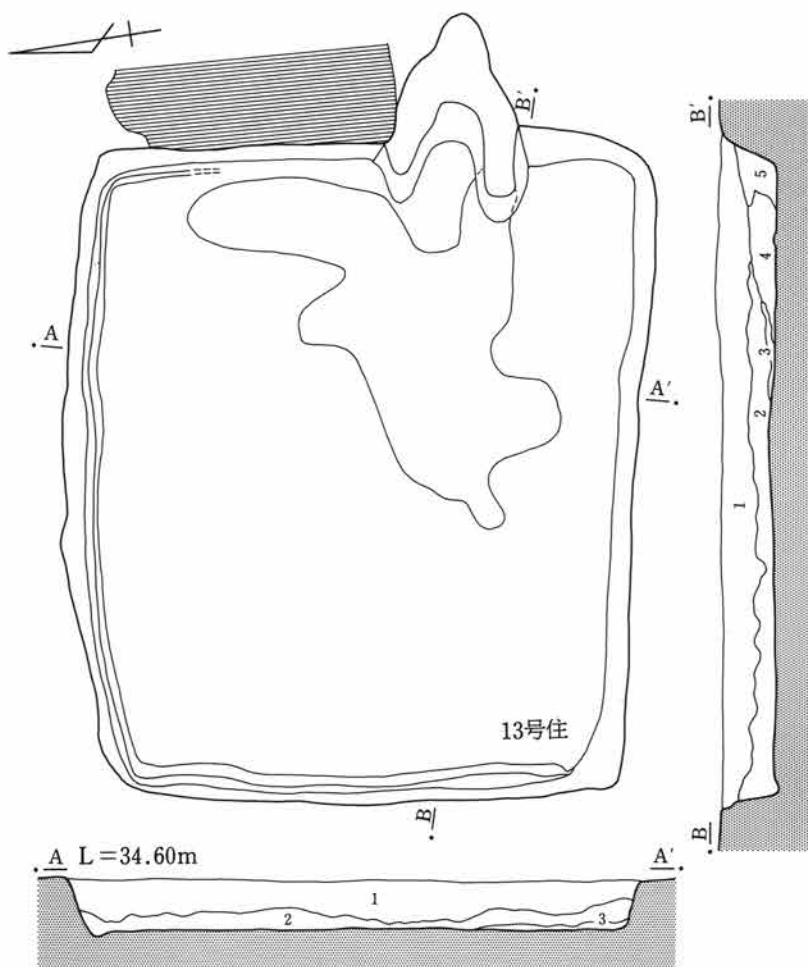
壁 東壁北半が攪乱により大きく壊されれているが、他の部分では垂直に近い壁が最大約40cmの高さで残存している。

カマド 東壁中央南寄りにある。燃烧部は壁外にある、火床は住居床面より若干低くなっている。煙道

は比較的緩やかに立ち上がっていて、壁外への張出しは約110cmである。袖は不明瞭だが住居埋没土下層に粘土の混入が多く、構築材のほとんどは崩れたようだ。燃烧部下に小さな掘り方があるが、埋め戻し土は不明瞭である。

内部施設 幅狭の壁溝が住居北西側半分に巡っている。深さは3~8cmで不明瞭なものである。

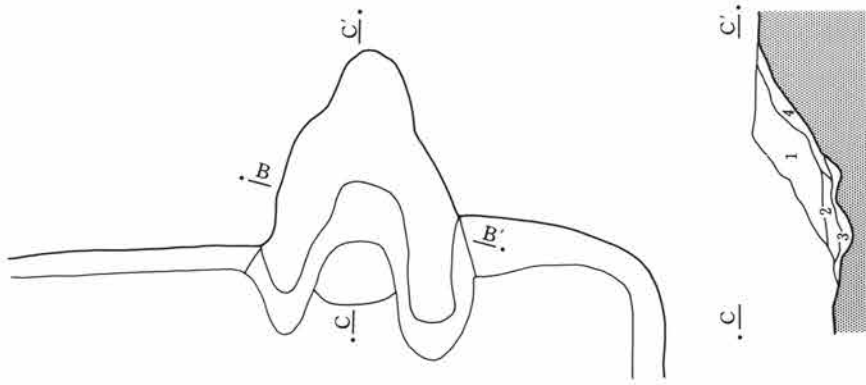
床 カマド前面・東壁下から住居中央にかけて細かな凹凸のある踏み固め面がある。



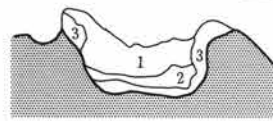
AY-13号住居土層説明

- 1 黄褐色土層 FPらしい大粒のパミスを含むやや砂質土層。
- 2 におい黄褐色土層 粒子の細かな砂質土層で、小粒のFPを散見する。しまりやや強い。
- 3 暗褐色土層 粘土粒の混入の多い土層。焼土粒・カーボン粒を含む。
- 4 黒褐色土層 焼土粒・灰等を多く含むしまりのない土層。
- 5 褐色土層 粘土主体にシルトを多く含むカマド袖構築材。

第33図 AY-13号住居



B L=34.60m B'

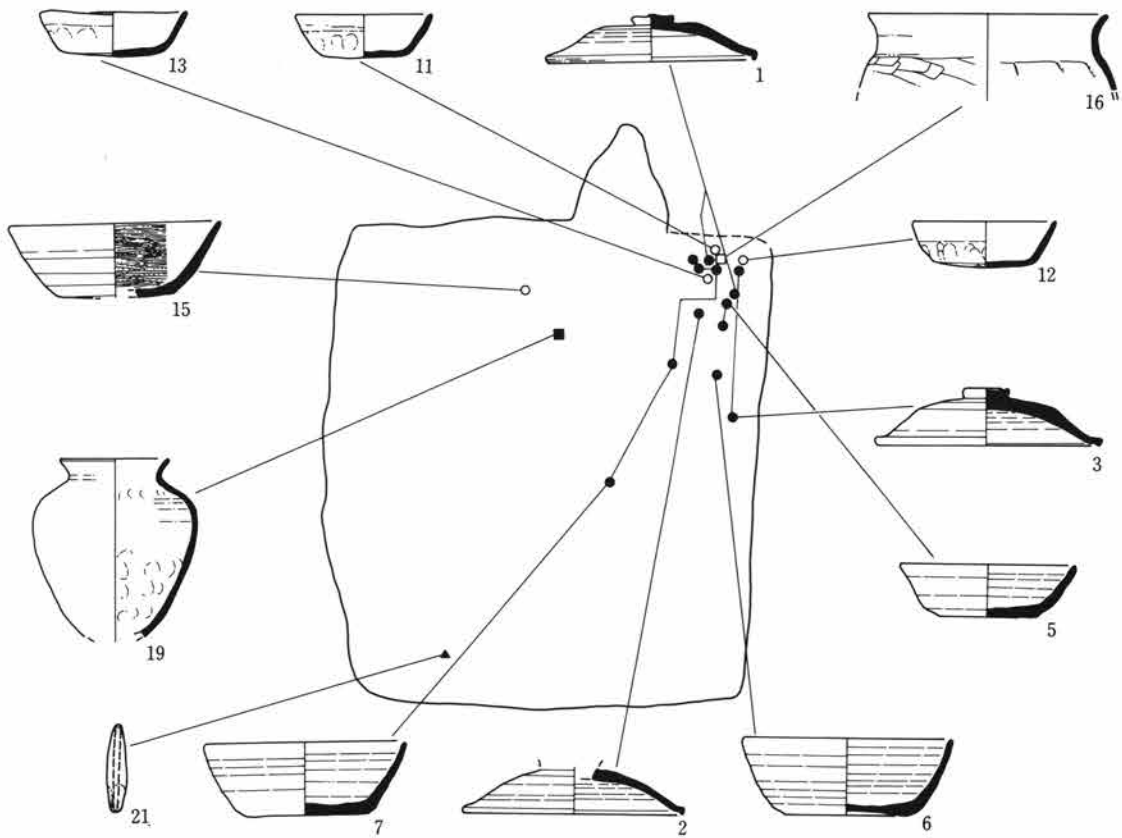


0 1:40 2m

AY-13号住居カマド土層説明

- 1 暗赤褐色土層 シルト質土に多量の焼土を混入する。
- 2 褐色土層 灰・カーボン粒・焼土を含む層。
- 3 にぶい黄褐色土層 地山に類似したシルト質土で、焼土粒をやや多く混入する。
- 4 にぶい黄褐色土層 焼土粒・灰を多量に含むシルト質土層。

L=34.60m

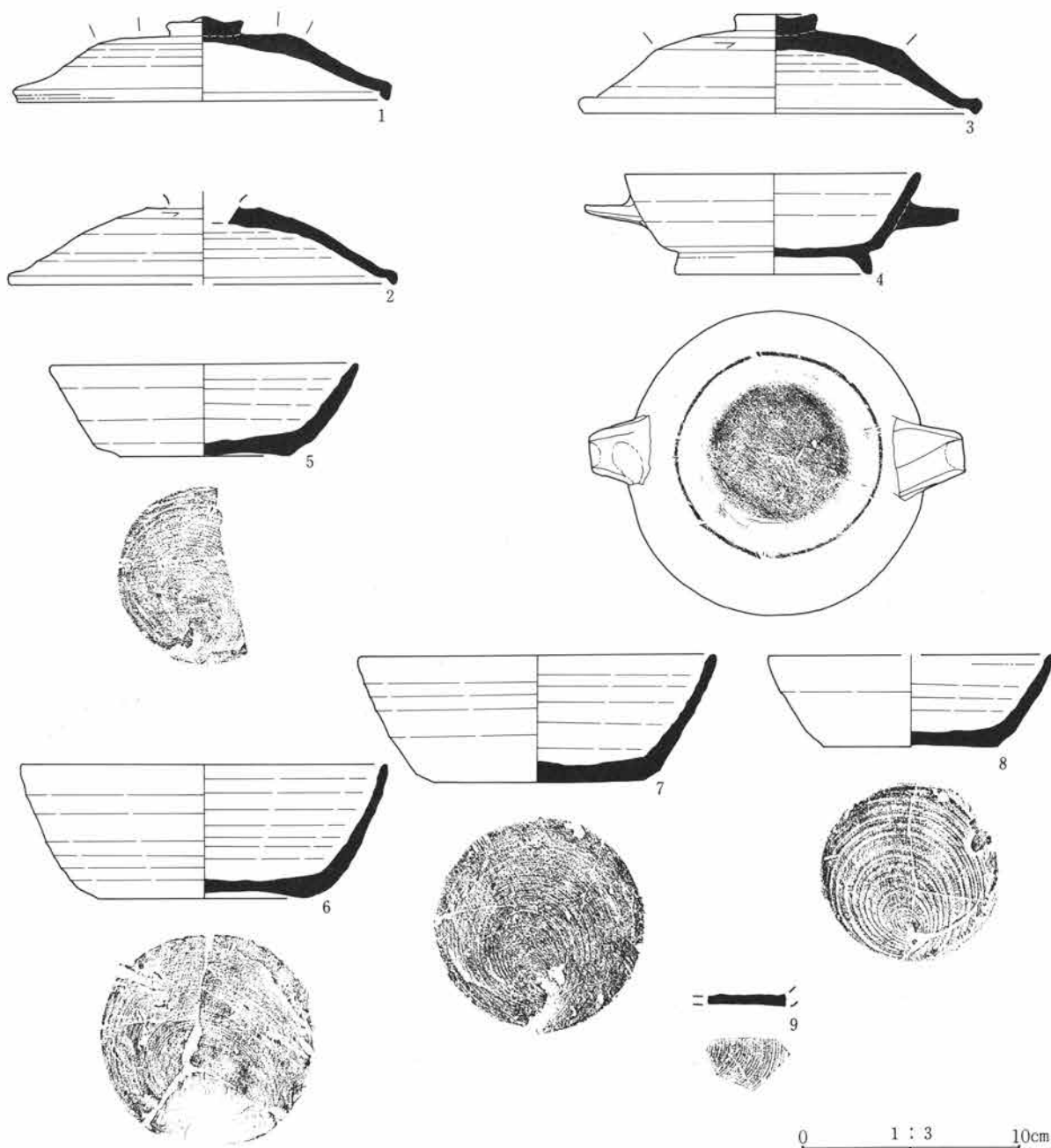


第34図 AY-13号住居カマドおよび遺物出土状態

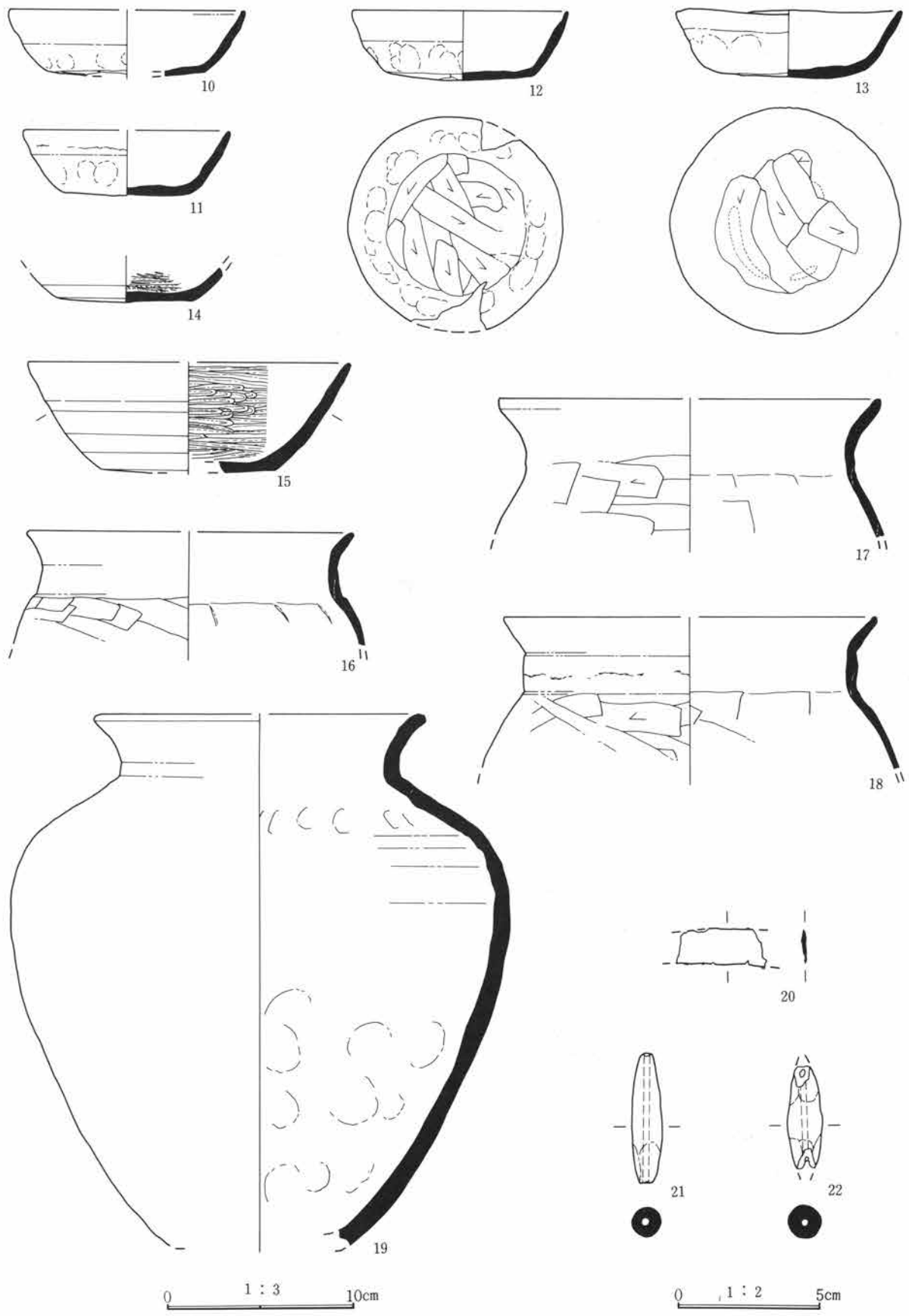
**遺物の出土状態** 南東隅付近の床直上を中心に、多量の遺物が出土し、22点を図示した。4の須恵器双耳杯が特筆される。1～3、5～7、11～13、18が南東隅付近に集中していた。15の土師器杯が東壁下、21の土錘が北西壁下で、他の遺物と離れて出土した。甕類ではカマド内から出土したのは16のみである。その他は埋没土内の遺物である。なお19の須恵器甕は東側に隣接する20号住居埋没土出土破片と

接合している。図示した以外にも須恵器杯など大破片の出土は多い。土師器甕類は破片総数約250片であるが、カマド内出土は僅かである。土師器では内面黒色処理した杯類がめだった。この他に須恵器長頸壺の底部片もある。須恵器碗など後世の混入品も含まれている。

**時期** 9世紀。



第35図 AY-13号住居出土遺物 (1)



第36图 AY-13号住居出土遗物 (2)

AY-14号住居跡 (第37図 PL-5・13)

位置 C区w・x-19・20グリッド

重複 18号溝に先出する。197号土坑とも重複。

主軸方向 N-113,5°-E 床面積 9.5m<sup>2</sup>

形態 不整な縦長長方形。特に南辺西側の歪みが大きい。各隅の形状も異なる。

規模 南辺3,6m、北辺3,1m、東辺2,7m、西辺2,5mとまちまちである。

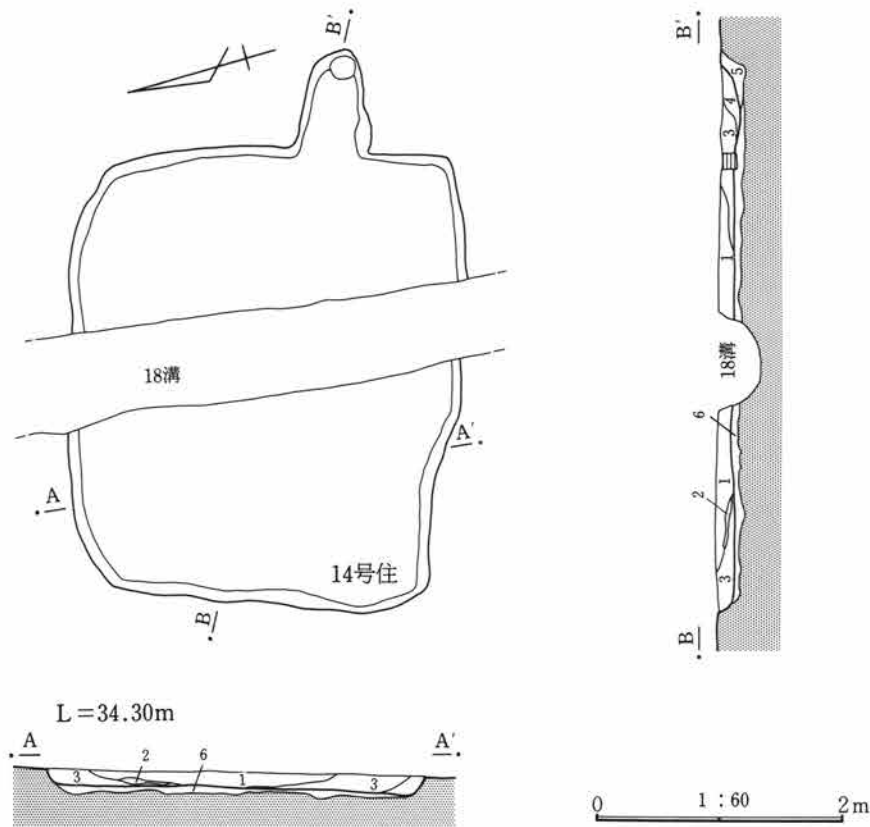
壁 浅い住居で残存壁高は8~15cmである。立ち上がり部分も緩やかで、旧状を残していないようだ。

カマド 東壁下南寄りにある。燃烧部は壁外にあり

火床は住居床面より7cmほど低くなっている。煙道は燃烧部との境が不明瞭だが、壁外へ80cm張出していて、先端部の底面はピット状に窪んでいた。袖部は残存しない。

床 踏み固めは不明瞭である。南側へ低く傾斜しており、北壁直下と3~10cmの比高差がある。北・西側の埋没土中に多量の炭化物粒が含まれていたが、床面直上では僅かしか見られない。

掘り方 床面下の全域に深さ4~20cmの凹凸の大きな掘り方があり、粘質土で埋め戻していた。



AY-14号住居土層説明

- 1 褐色土層 しまり強く、混入物の少ない粘性土層。
- 2 黒褐色土層 多量のカーボン粒を含む弱粘性土層。
- 3 にぶい黄褐色土層 斑鉄の見られるシルト質土層。3'では砂質土の混入多い。

- 4 褐色土層 カマド断面で、上半はしまりのあるシルト質土、下半はしまりの弱い粘性土で焼土の混入が多い。
- 5 褐色土層 混入物の少ない粘性土で、カマド掘り方埋め戻し土である。
- 6 にぶい黄褐色土層 掘り方の埋め戻し土層で、焼土・カーボン粒を含む粘性土層。

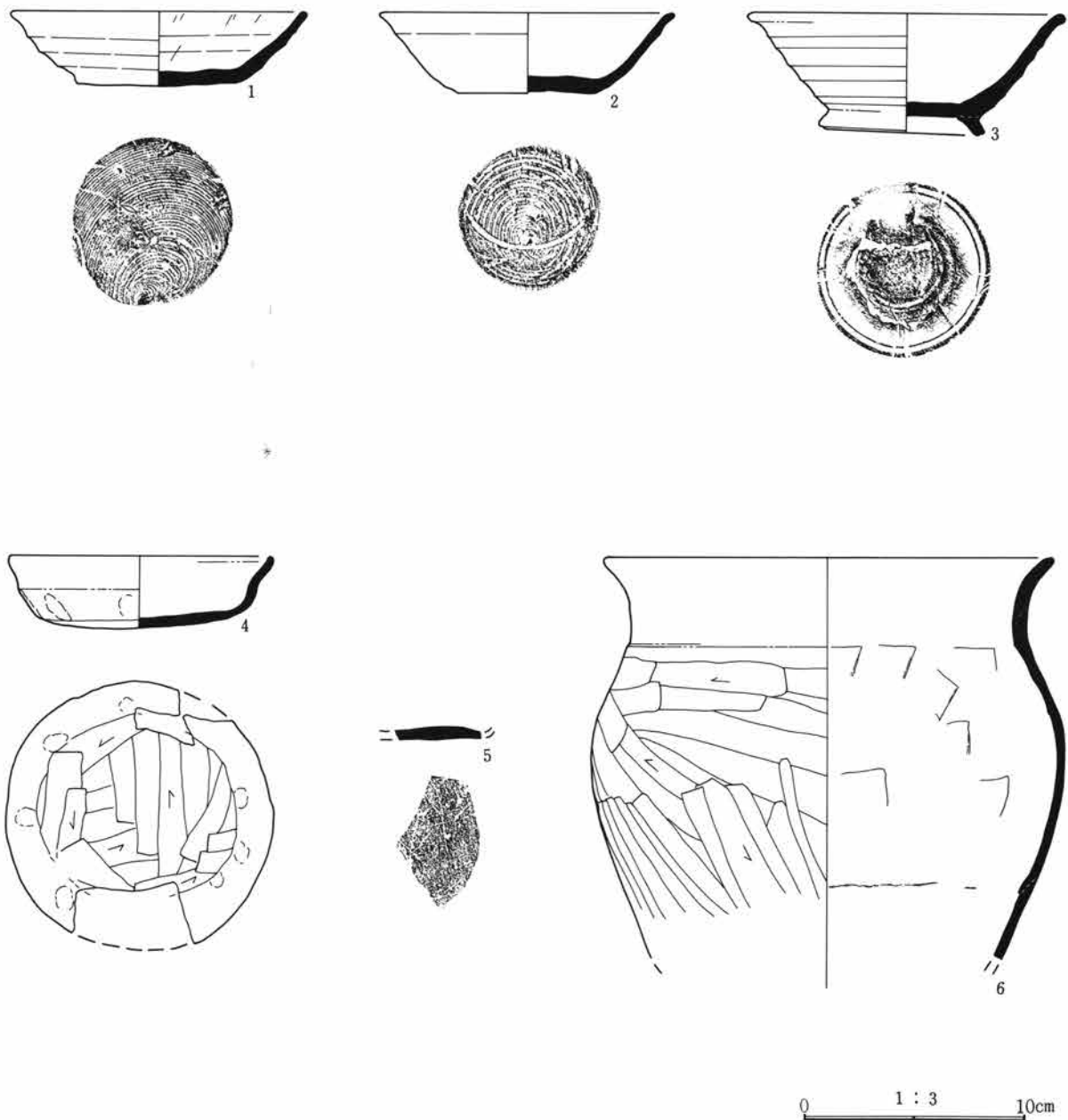
第37図 AY-14号住居



**遺物の出土状態** 出土総量は少なかったが6点を図示した。杯類はいずれも埋没土内出土の破片を接合したものである。6の土師器甕は30片以上のカマド内出土破片を接合した。図示できたのは須恵器杯類にやや偏ったが、それ以外では土師器小破片の出土が中心で、土師器長胴甕の胴部・底部が目立った。

カマド内で出土した甕類破片の中には口縁部の「コ」の字がもう少ししっかりした破片も含まれていた。土師器杯類の破片は約40片出土したが、いずれも細片であった。

**時期** 9世紀



第38図 AY-14号住居出土遺物

AY-15号住居跡 (第39図 PL-5・13)

位置 C区s・t-18・19グリッド

重複 16号住居と重複している。発掘調査段階では新旧関係を確実にできなかったが、本住居北西隅の壁溝上に16号住居の床面とカマド崩落土があるようで、本住居が16号住居に先出すると考えた。

主軸方向 N-108,5°-W 床面積 12,1m<sup>2</sup>

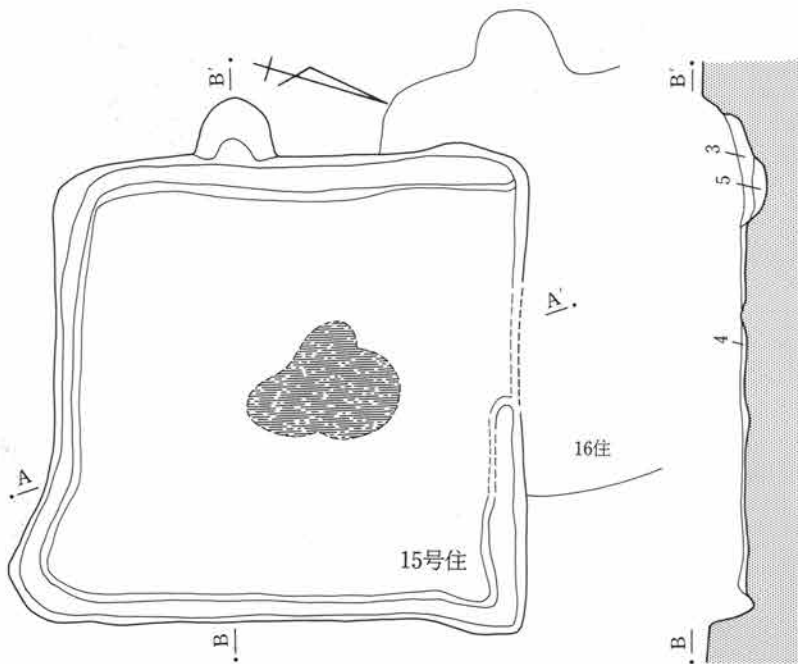
形態 一辺3,8mのほぼ正方形を呈すと思われるが、東側の両隅が外方へ小さく突出していて、やや不整なプランとなっている。

壁 残存状態の良い部分で約30cmの壁高があり、垂直に近い立ち上がりとなっていた。

カマド 西壁中央やや南寄りにカマドの痕跡と思わ

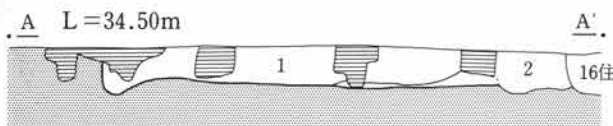
れる掘り込みがあるが、被熱の痕跡は明瞭でなかった。本遺跡で西壁カマドは重複する16号住居にしか例はなく、本住居では壁溝がカマド想定部分の壁直下にも巡っている等、他のカマドとは異なっている。火床部分の掘り方は壁溝との区別が難しく、袖部も見つからなかった。これらの点からこの痕跡をカマドと想定するのは難しい。北辺にあったカマドが16号住居に壊された可能性もあろう。

内部施設 16号住居との重複部分では不明瞭だが、深さ7~12cmの壁溝が全周するものと思われる。



AY-15号住居土層説明

- 1 褐色土層 しまりの強いシルト質土層。
- 2 黒褐色土層 カーボン粒を多量に含むしまりに欠ける土層。



0 1:60 2m

第39図 AY-15号住居

床 壁際がやや低くなり、住居中央に比べ2～5cmの比高差がある。なお、平面図には住居中央の床直上に灰の散る範囲を示した。

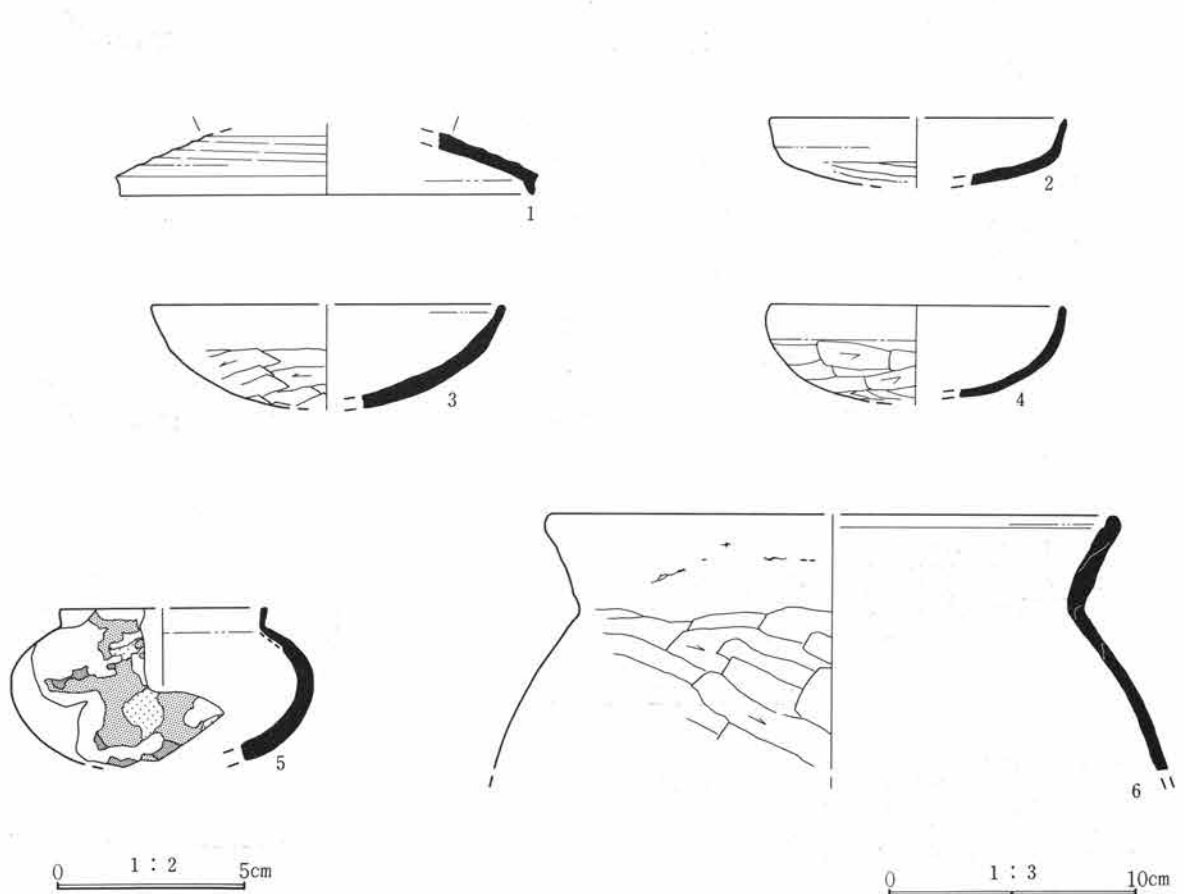
掘り方 深さ2～5cmの浅い掘り方が、所々で見つかった。住居粗掘り時の凹凸を埋め戻す程度の簡略な貼り床を作っている。

遺物の出土状態 大破片の土器の出土は少なかったが、6点を図示した。5の奈良三彩小壺が特筆される遺物で、埋没土中の2片を接合したものである。図上の濃いトーン部分は赤色、中間を緑色、薄い部分は白色の釉を示し、トーンのない部分は釉の剥落部分を示している（口絵参照）。

1の須恵器蓋は北壁下の床上10cmの高さで出土したが、16号住居との重複部分に近く、所属を決められない。2～4の土師器杯は埋没土内の出土である。図示した土師器甕類は東壁下床直上出土の6だけだが、これ以外にやや厚手で長胴気味の甕胴部・底部破片の出土量は多く、約120片ある。土師器杯は約20片だが口径の大きな土器が目立つ。須恵器は10片で叩きのある甕の胴部破片がある。

なお、カマドと想定した掘り込み部分からは1片の遺物も出土していない。

時期 8世紀。



第40図 AY-15号住居出土遺物

AY-16号住居跡 (第41図 PL-5)

位置 C区 s・t-18・19グリッド

重複 15号住居に後出すると思われる。

主軸方向 N-115°-E 床面積 8,4m<sup>2</sup>

形態 不明瞭な部分が多いが、南・北辺3,0m、東西辺2,4mほどの不整な縦長長方形と思われる。西辺がカマドを挟んで大きくズレている。

壁 攪乱のため上面は殆ど失われ、壁高は残存状態の良いカマド周辺でも20cmしかない。

カマド 西壁下やや南寄りにある。燃焼部は壁直下にあり、火床は住居床面より3cmほど高くなっている。火床下には深さ10cmの掘り方がある。煙道は見つからず、後世の削平を受けたものと思われる。カ

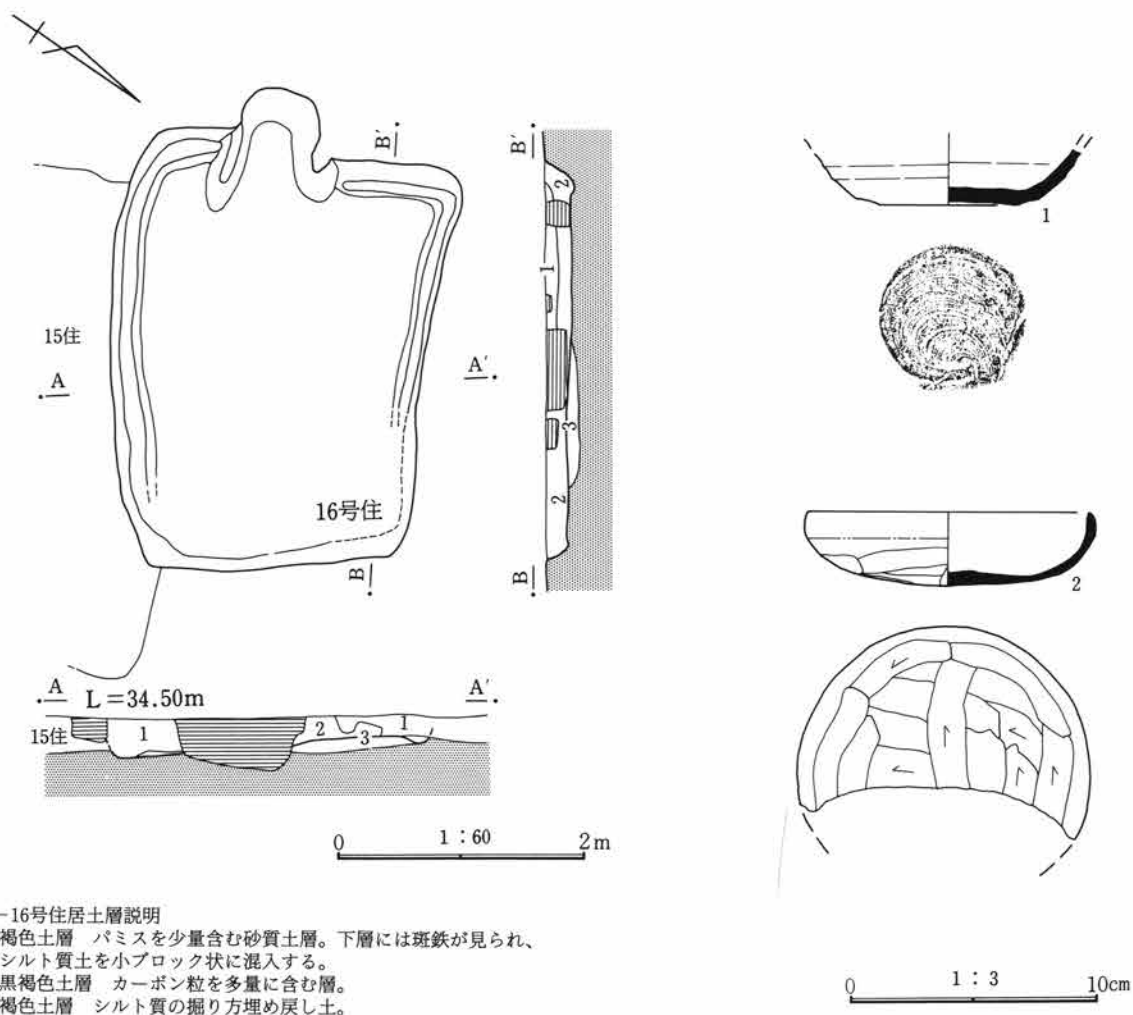
マド構築材にはシルト質土を使用しているが、袖部分は不明瞭である。

内部施設 東壁下は不明瞭だが、深さ4~8cmの壁溝がカマド下を除いて全周するものと思われる。

床 凹凸の多い軟弱な床で不明瞭であった。床面掘り下げ時の窪みを埋め戻す程度の貼り床が所々で見られた。

遺物の出土状態 2の土師器杯は北西隅の壁溝上床面レベルで出土した。1は埋没土内の遺物である。図示した以外には、土師器長胴甕の胴部破片の出土がある。

時期 9世紀。



AY-16号住居土層説明

- 1 褐色土層 パミス少量含む砂質土層。下層には斑鉄が見られ、シルト質土を小ブロック状に混入する。
- 2 黒褐色土層 カーボン粒を多量に含む層。
- 3 褐色土層 シルト質の掘り方埋め戻し土。

第41図 AY-16号住居および出土遺物

AY-17号住居跡 (第41図 PL-5)

位置 C区v・w-18グリッド

重複 9号井戸に先出し、26号住居に後出する。

主軸方向 N-107°-E 床面積 (8,3)m<sup>2</sup>

形態 上面は歪みが大きいですが、床面では比較的整った隅丸の縦長長方形を呈している。

規模 南北辺3,8m、東西辺2,7m。

壁 20~40cmの壁高がある。

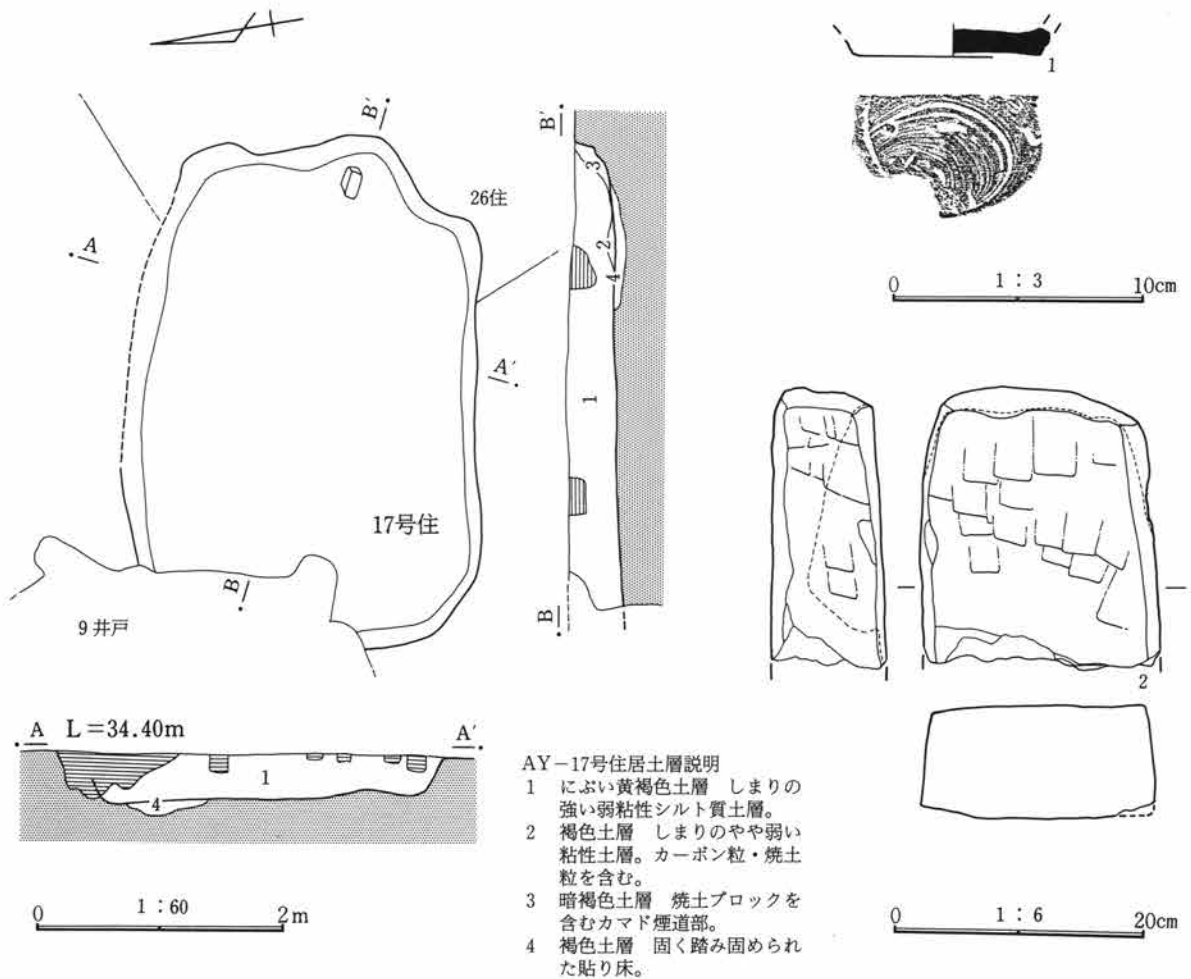
カマド 東壁中央やや南寄りに被熱の痕跡が残っている。残存状態は極めて悪いが、北袖の芯材に用いたと思われる角礫が据えてあった。燃焼部は住居内にある。煙道は基部しか確認できないが、壁外へ40cm張出している。

床 凹凸の多い不整な床である。

掘り方 住居掘り下げ時の窪みを埋め戻す程度の貼り床が所々で見られる。

遺物の出土状態 1の須恵器杯は埋没土内から出土した。2の角礫はカマド袖の芯材で北袖の位置に立てて据えられていた。図示した以外に薄手の土師器長胴甕胴部破片が約50点、土師器杯細片が5点出土している。いずれも埋没土内の出土である。

時期 出土遺物が少なく不明確であるが、9世紀以降である。



第42図 AY-17号住居および出土遺物

AY-18号住居跡 (第43図 PL-6)

位置 C区w・x-18・19グリッド

重複 11号住居に後出し、14号溝に先行する。7号掘立との新旧は不明だが、本住居確認段階で掘立のプランは検出できなかった。

主軸方向 N-10°-E 床面積 11.1m<sup>2</sup>

形態 横長長方形か。重複する遺構にカマドと壁の大半を壊され、不明瞭である。

規模 南・北辺4.2m、東・西辺2.7mの横長長方形。

壁 残存状態が最も良い東壁でも、壁高は約15cmで、西側半分では殆ど残っていない。

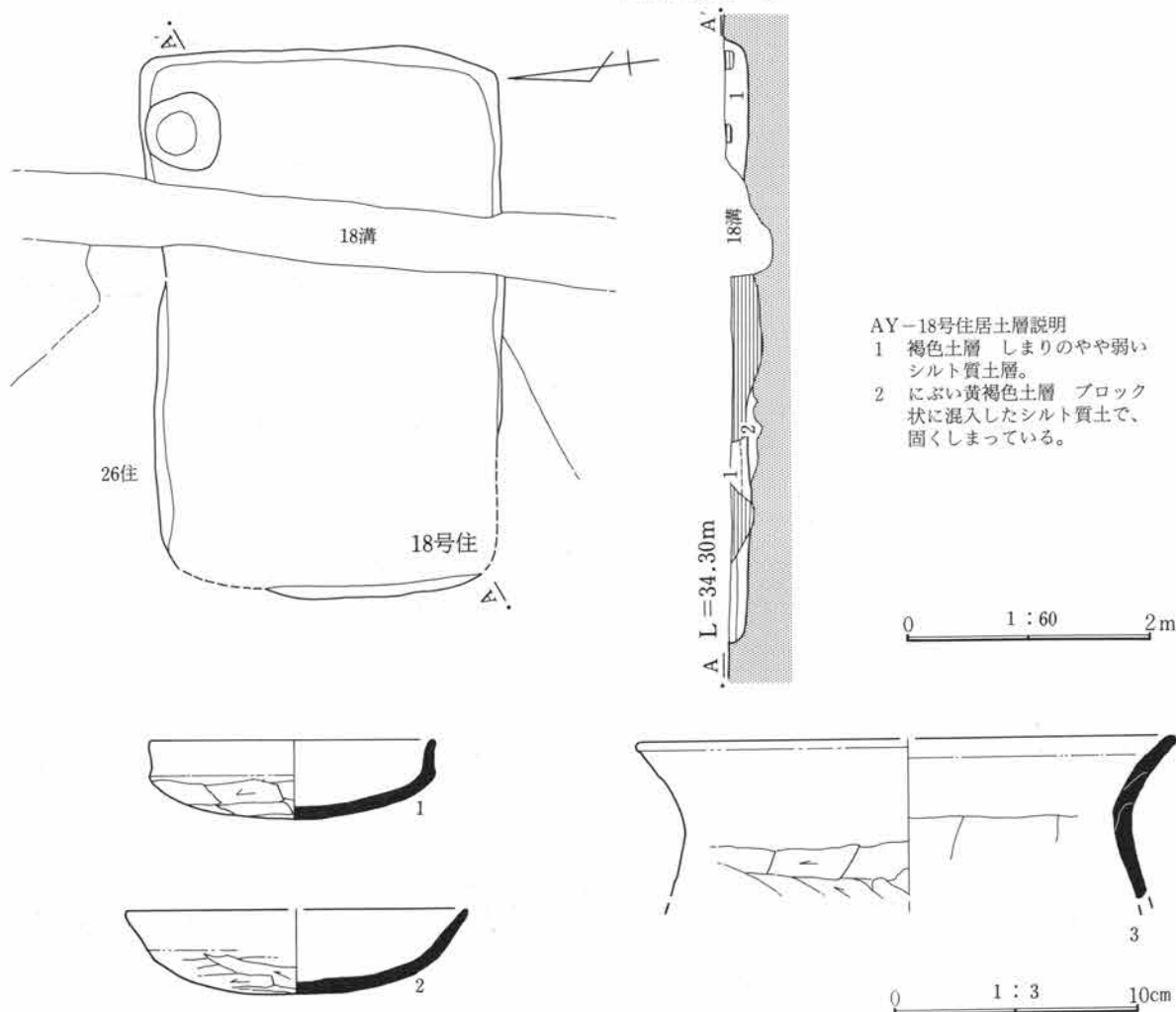
カマド 北壁の東寄りがあると想定するが、溝に大半を壊され、ほぼ同じ位置に26号住居のカマドがあるため、痕跡は殆ど残っていない。

内部施設 貯蔵穴と思われる底面がすり鉢状のピットが北東隅にある。開口面での規模は63×57cmで、床面からの深さは27cmである。

床 攪乱が多いうえに凹凸のある不明瞭な床だが、焼土や灰が直上に散っていた。5cmほどの掘り方が見られる部分がある。

遺物の出土状態 図示した3点の土師器は埋没土出土である。それ以外に約70片あるが、土師器丸胴甕の胴部小破片が中心であった。

時期 7世紀の遺物が多いが、28号住居の遺物との区別が難しい。



第43図 AY-18号住居および出土遺物

AY-19号住居跡 (第44図 PL-6・13)

位置 C区x・y-17グリッド

重複 11号住居に後出し、14号溝に先行する。7号掘立との新旧は不明だが、本住居確認段階で掘立のプランは検出できなかった。

主軸方向 N-109°-E

床面積 9,2m<sup>2</sup> (張出し部分は除く)

形態 縦長長方形

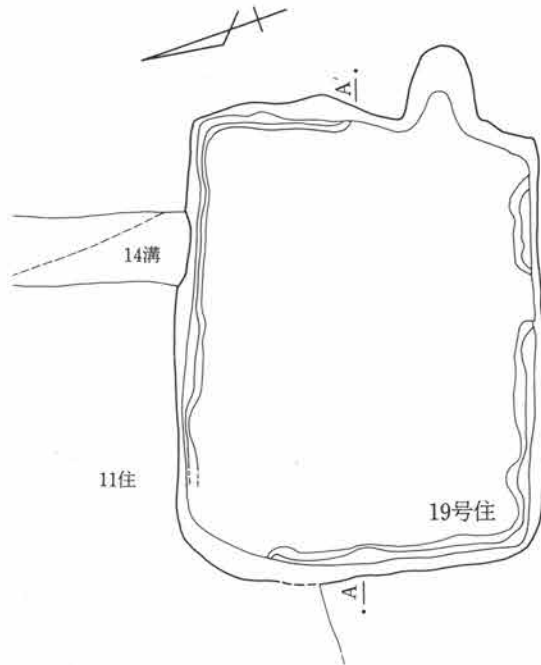
規模 東辺2,7m、西辺2,8m、南北辺3,3m。

壁 残りの良い北壁で30cm、他では22cm前後の壁高がある。

カマド 東壁の南寄りにある。燃焼部は壁直下であり、灰が厚くたい積していた。煙道は壁外に65cm張出している。火床下には深さ15cmの掘り方がある。袖は残存していない。

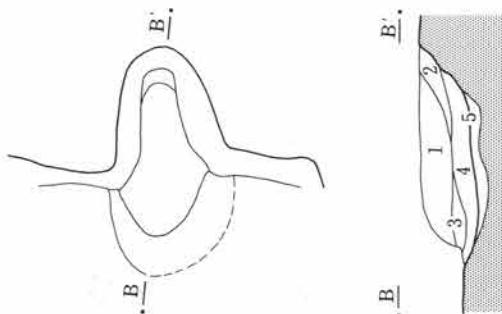
内部施設 深さ3~6cmの壁溝がカマド周辺と南壁下の一部を除いて巡っているが、北西隅では不明で、南壁下もかなり判りにくい。

床 ほぼ水平な床である。



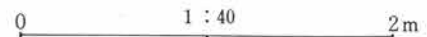
AY-19号住居土層説明

- 1 褐色土層 ややしまりのある弱粘性シルト質土層。
- 2 灰黄褐色土層 斑鉄の多い粘性土層。
- 3 にぶい黄褐色土層 小ブロック状に堆積したシルト質土層。
- 4 にぶい黄褐色土層 ブロックのシルト質土を踏み固めた掘り方埋め戻し土。



AY-19号住居カマド土層説明

- 1 にぶい黄褐色土層 地山によく似たシルト質土層。しまり強く、カーボン粒を散見する。
- 2 暗赤褐色土層 カマド煙道天井部の崩落した焼土主体の層。
- 3 にぶい黄褐色土層 カマド構築材と思われる粘性土だが、混入物を殆ど含まない。
- 4 灰褐色土層 煙道側では灰、住居側では焼土・カーボンの多いしまりに欠ける土層。
- 5 にぶい黄褐色土層 シルト質の掘り方埋め戻し土層。

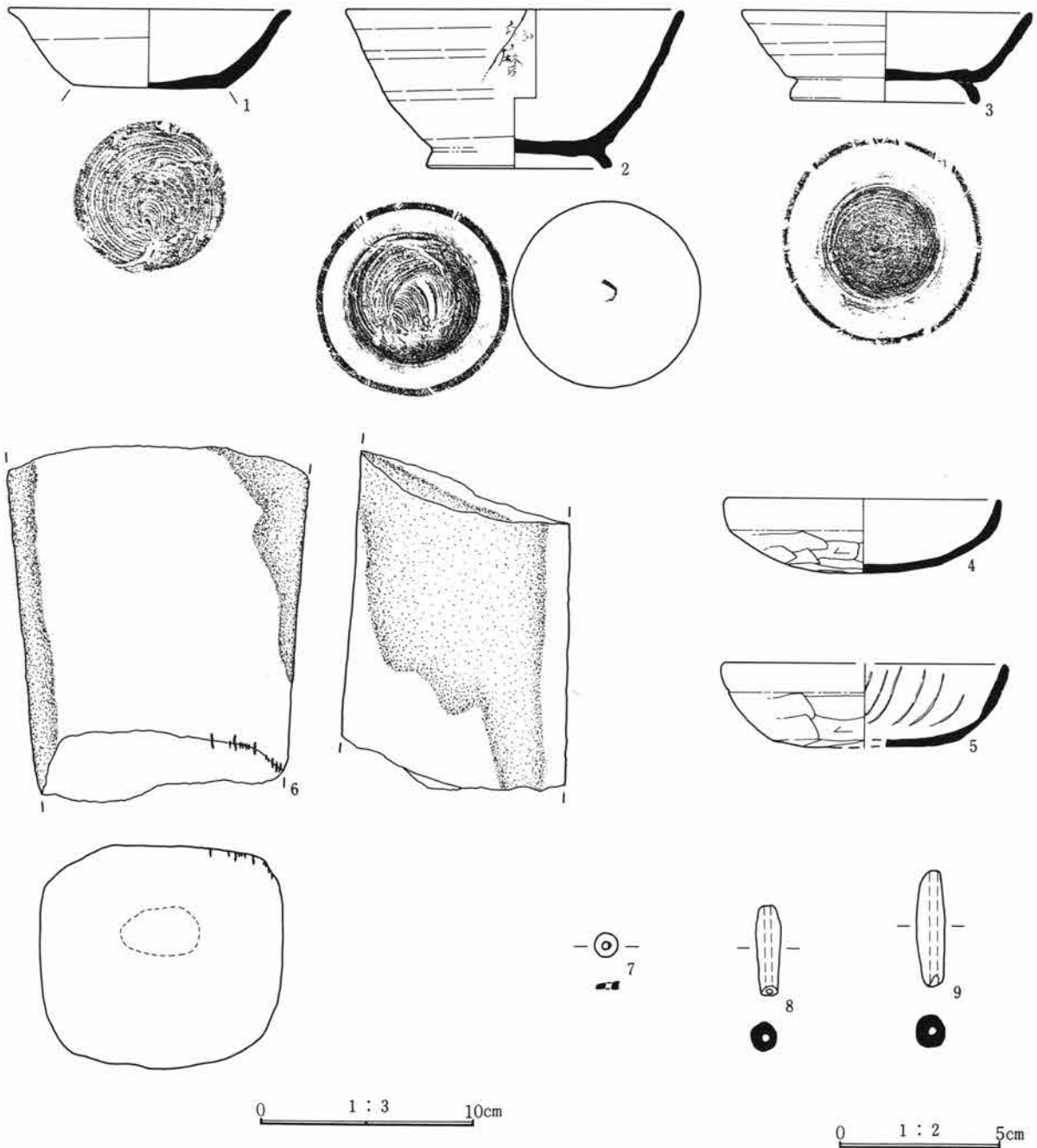


第44図 AY-19号住居およびカマド

**遺物の出土状態** 9点を図示した。1はカマド前面の床直上、2は南壁下壁溝下の床面レベル出土で、口縁外面に「口磨」の人名墨書がある。3はカマド内とカマド前面床直上の接合資料である。5は掘り方内出土である。6は台石状の礫で南西隅の床上4cmの高さで出土した遺物で、被熱痕がありカマド構築材の可能性はあるが、縁部に強い傷がある。他は

埋没土内の出土である。図示した以外は、小破片が中心で約300点あった。小型の須恵器長頸壺胴部破片、細かい叩きのある須恵器大甕胴部破片が含まれている。また底部全面回転ヘラ削りの須恵器杯など混入品も多い。

**時期** 9世紀。



第45図 AY-19号住居出土遺物



AY-20号住居跡 (第46図 PL-6・13)

位置 D区n・o-0・1グリッド。安養寺森西遺跡の旧I区29軒の住居中、最東に位置している。

主軸方向 N-112,5°-E

床面積 6.4㎡(推定) 形態 横長長方形

規模 北側に大きく攪乱を受け全容は不明だが、南辺が2.4mなのに対し、東・西辺は床面でも3.0以上ある。

壁 緩やかに立ち上がっていて、残存壁高は25~30cmである。

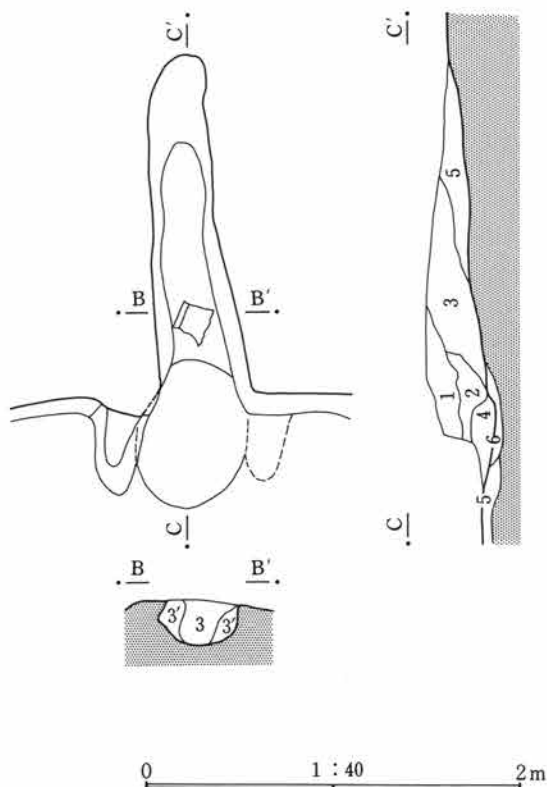
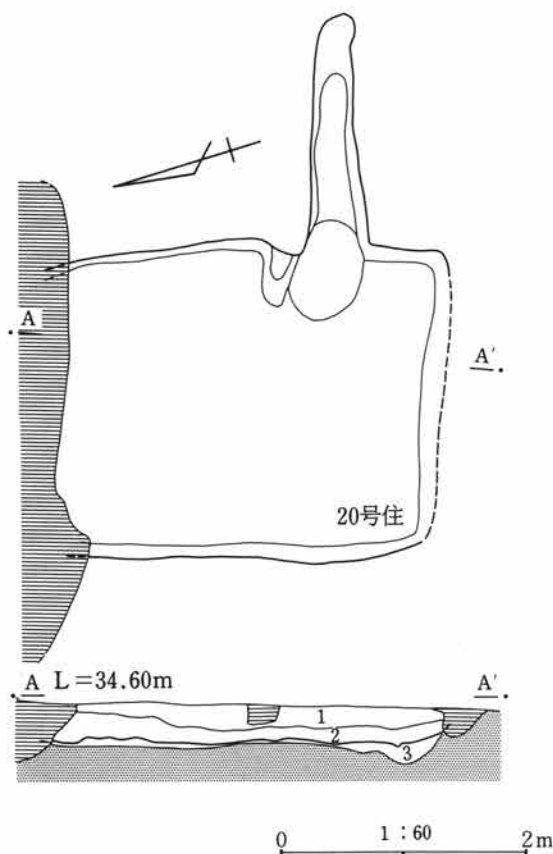
カマド 東壁下南寄りにある。燃烧部は壁直下にあ

り、火床は住居床面より5cm低い。南袖は残存していない。煙道の長いことが特徴的で、緩やかに立ち上がって壁外へ1.8m張出している。

内部施設 南壁下の掘り方調査時に幅20cm程の窪みが見つかり、壁溝のあった可能性がある。

床 カマド直面から住居中央にかけてやや高く、壁直下と3cmほどの比高差がある。

掘り方 凹凸の多い床面である。全面に2~5cm程の掘り方がある。住居掘り下げ時の窪みを埋め戻したものであろう。



AY-20号住居土層説明

- 1 褐色土層 粘性・しまりに欠けるシルト質土層。
- 2 におい黄褐色土層 粘性・しまりとも強いシルト質土層。
- 3 におい黄褐色土層 シルト質土ブロックと砂粒を踏み固めた掘り方埋め戻し土層。

AY-20号住居カマド土層説明

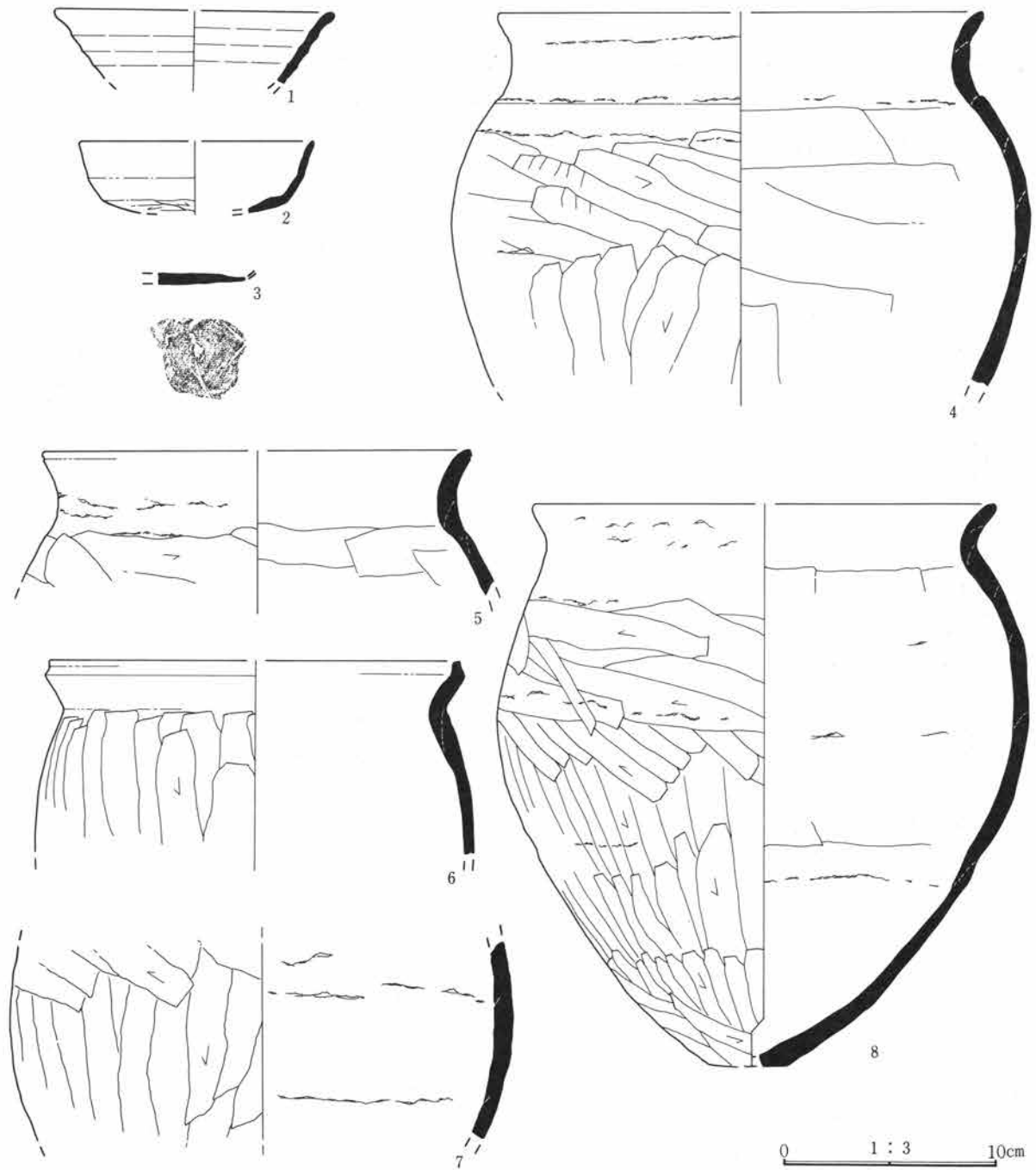
- 1 におい黄褐色土層 カーボン粒・焼土粒を少量含むシルト質土。
- 2 暗褐色土層 カマド構築材と思われる粘性の強いシルト質土。焼土ブロックを含む。
- 3 褐色土層 やや焼シルト質の弱粘性土層。焼土粒を含む。3'では焼土はブロック状。
- 4 黒褐色土層 灰・カーボン粒・焼土粒を多量に含むしまりに欠ける土層。
- 5 におい黄褐色土層。焼土粒を少量含むシルト質土層。
- 6 褐色土層 シルト質土のカマド掘り方埋め戻し土で、ブロック状の粘土を含む。
- 7 住居第3層に同じ。

第46図 AY-20号住居およびカマド

**遺物の出土状態** 厚手の土師器甕類を中心に8点を図示した。8の甕はカマド煙道内から出土した大破片と埋没土内の多数の小破片が接合した。4、5の甕もカマド内の出土で、他は埋没土内の出土である。図示した以外の破片は約350点ある。やや厚手の土

師器甕胴部破片が中心で大破片も含まれる。杯類は少ないが、内黒土器漆附着の土器が混じっている。須恵器は約30点あるが小破片中心で、蓋等の混入品が多い。

**時期** 10世紀。



第47図 AY-20号住居出土遺物

AY-21号住居跡 (第48図 PL-6・14)

位置 C区 r・s-17・18グリッド

主軸方向 N-12°-W 床面積 9,5m<sup>2</sup>

形態 横長長方形

規模 南・北3,4m、東・西2,8m

壁 垂直に近い立ち上がりをしている。15~26cmの残存壁高である。

カマド 北壁東寄りにある。燃烧部は壁直下から壁外にかけてで、火床は住居床面と同レベルにある。

両袖は痕跡のみである。煙道は壁外に110cm張出す。

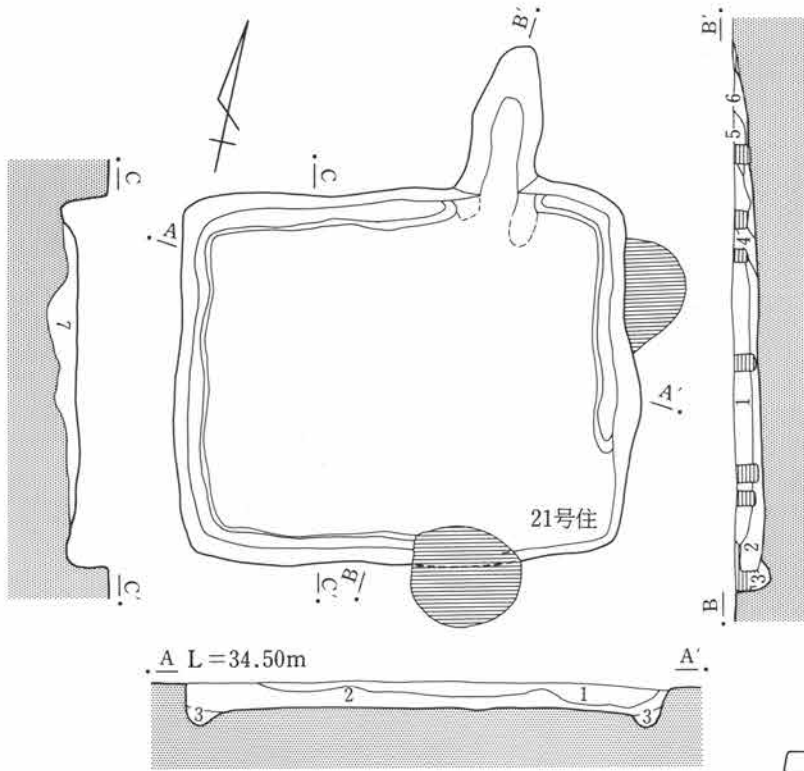
内部施設 南東隅付近で不明瞭だったが、壁溝がカ

マド下を除いて全周するものと思われる。

床 カマド前面以外は、踏み固めの弱いわかりにくい床であった。掘り方が床下全面にあり、最深部で30cm埋め戻していた。

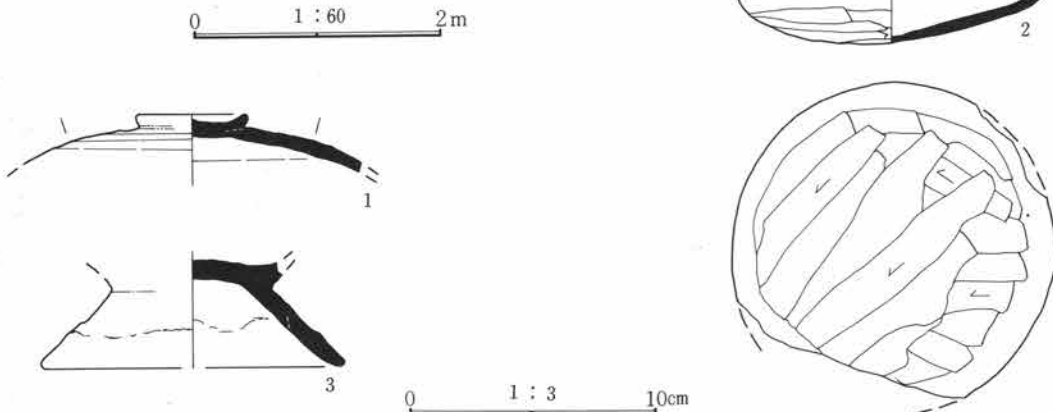
遺物の出土状態 3点を図示した。3の台付甕は住居中央の床上3cmで出土した。1は掘り方内、2は埋没土内の遺物である。図示した以外には奈良時代と平安時代後半の土器約40片が混在していたが、外底全面回転ヘラ削りの須恵器杯や薄手の土師器甕など奈良時代の遺物が多かった。

時期 8世紀。



AY-21号住居土層説明

- 1 褐色土層 地山に似たしまりやや欠けるシルト質土層。
- 2 にぶい黄褐色土層 シルト質土層。しまりやや欠ける。
- 3 暗褐色土層 3mm大のシルト粒中心の壁溝埋没土。
- 4 褐色土層 焼土粒・カーボン粒の混じるシルト質土層。
- 5 褐色土層 しまりの強いシルト質土。カマド構築材。
- 6 暗赤褐色土層 カマド燃烧部にあたり、焼土粒を多量に含む土層。カーボン粒もやや多い。
- 7 にぶい黄褐色土層 シルト質土で、掘り方埋め戻し土としてはしまりに欠ける。



第48図 AY-21号住居および出土遺物

AY-22号住居跡 (第49図 PL-6)

位置 D区 a・b-23・24グリッド。地山は南側へ低く傾斜していて、北側と15cmの比高差がある。

主軸方向 N-94°-E

床面積 8,5m<sup>2</sup> (検出面のみ)

形態 南側を攪乱によって大きく壊されていて全容は不明だが、正方形に近いプランが想定される。

規模 北辺は約3,3mある。東・西辺は床面で3,0m以上ある。

壁 きわめて浅い住居で、最深部の北壁でも10cm以下の残存壁高である。

カマド 東壁下で南寄りにあると思われる。燃焼部は壁直下であり、煙道は壁外に65cm張出している。

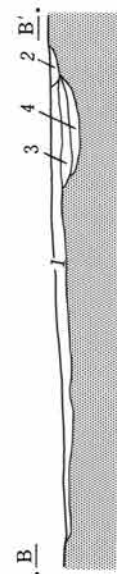
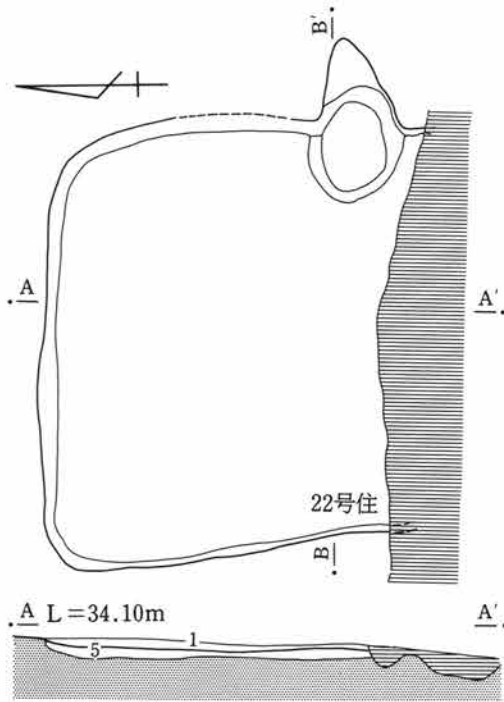
火床は住居床面より10cm低い。両袖は残存していない。火床下に円形の掘り方がある。

床 軟弱な床で調査時に掘り方まで抜いてしまい、大半を失ってしまった。

遺物の出土状態 遺物は少なく、図示できたのも2点だけである。2の甕はカマド火床上で出土した。

1の杯は埋没土内の土器である。図示した以外に約30片の薄手の土師器甕があり、2とは別個体のカマド内出土の土師器長胴甕胴部片が含まれる。杯類はいずれも細片であった。

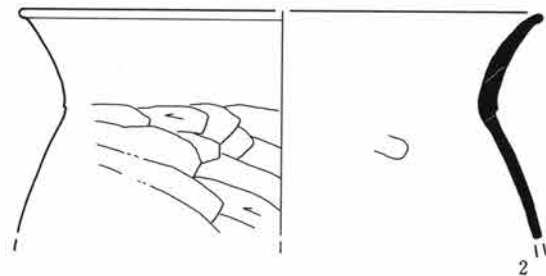
時期 8世紀。



AY-22号住居土層説明

- 1 におい黄褐色土層 しまりのあるシルト質土層。
- 2 におい黄褐色土層 シルト質土による掘り方埋め戻し土層。固くしまっている。
- 3 暗赤褐色土層 焼土粒の混入の多い土層で上半はしまり、下半は軟弱である。
- 4 暗褐色土層 焼土・灰・カーボン粒の混入の多い、しまりない土層。

0 1 : 60 2m



0 1 : 3 10cm

第49図 AY-22号住居および出土遺物

AY-23号住居跡 (第50図 PL-7・14)

位置 C区m・n-6・7グリッド

重複 127号土坑に先出する。

主軸方向 N-81°-E 床面積 9,0m<sup>2</sup>

形態 開口部分は不明瞭だが、床面では比較的整った縦長長方形を呈している。

規模 床面から推測すると長辺3,5m、短辺2,5m程になると思われる。

壁 深い遺構であり、壁高は40cm前後あるが、地山が砂質で軟弱なため崩落がすすみ、旧状を殆どとどめていない。

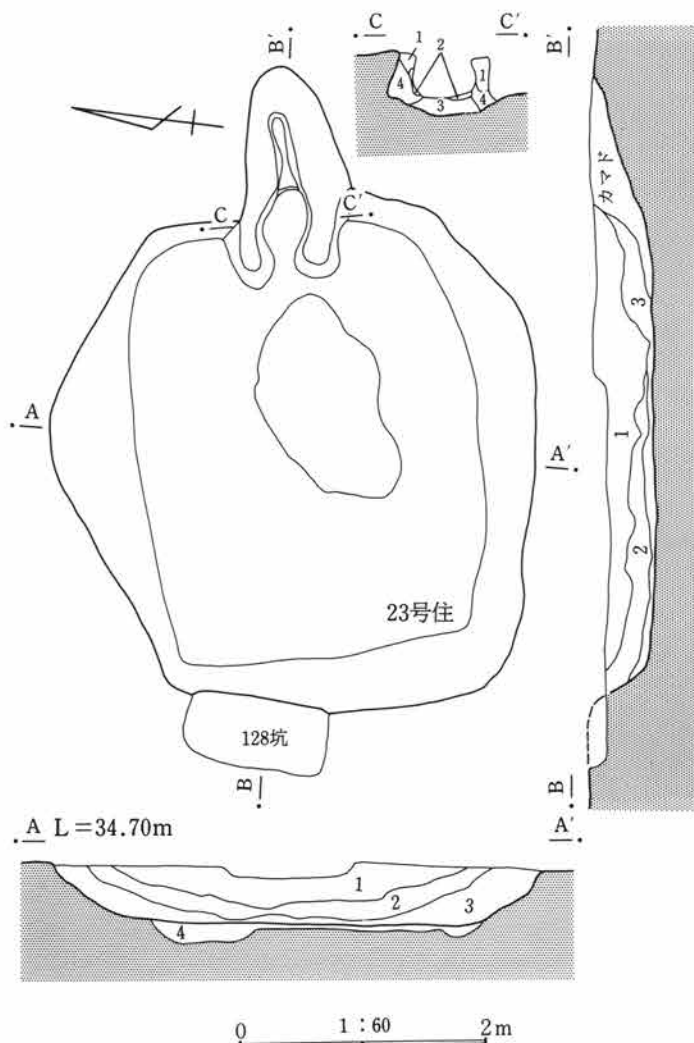
カマド 東壁のほぼ中央にある。燃焼部は壁直下であり、火床は床面と同レベルにある。煙道は緩やかに立ち上がっており、壁外へ110cm張出している。

構築材に焼土粒の混入が多く、赤色味をおびたカマドであった。

床 カマド前面から住居中央にかけて硬化面があるが、他は不明瞭な床だった。西壁下が高く、南壁下と10cm近い比高差がある。

遺物の出土状態 遺物は少なく図示したのは1点だが、ほぼ完形土師器杯がカマド南袖脇の床直下から出土した。その他に約40片の破片が出土したが、やや薄手の土師器長胴甕が大半である。カマド煙道部出土の大破片が含まれる。埋没土内からは3住出土の須恵器大甕と同一個体らしい胴部破片が見つかった。

時期 7世紀か。

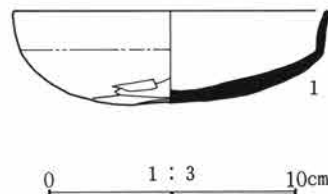


AY-23号住居土層説明

- 1 褐色土層 粒子の粗い砂質土層。小円礫を少量含む。
- 2 におい黄褐色土層 小円礫を少量含む砂質土層。
- 3 暗褐色土層 拳大のバミスの混入やや多い。焼土粒を散見する。
- 4 におい黄褐色土層 小円礫まじりの砂質土による掘り方埋め戻し土層。

AY-23号住居カマド土層説明

- 1 黄褐色土層 粘土小ブロック、焼土粒を少量含む粒子のやや粗い土層。
- 2 におい黄褐色土層 粘土弱く、粒子の細かなカマド構築材。
- 3 赤褐色土層 焼土小ブロック中心の硬化面。
- 4 暗褐色土層 掘り方埋め戻し土で、焼土粒、カーボン粒のやや多い、しまりに欠ける土層。



第50図 AY-23号住居および出土遺物

AY-24号住居跡 (第51図 PL-7・14)

位置 C区m・n-8・9グリッド

重複 132号土坑に先行。

主軸方向 N-169,5°-E 床面積 9.9m<sup>2</sup>

形態 縦長長方形。南辺は歪んでいる。

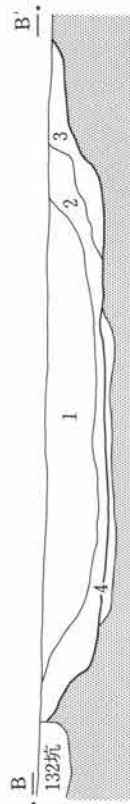
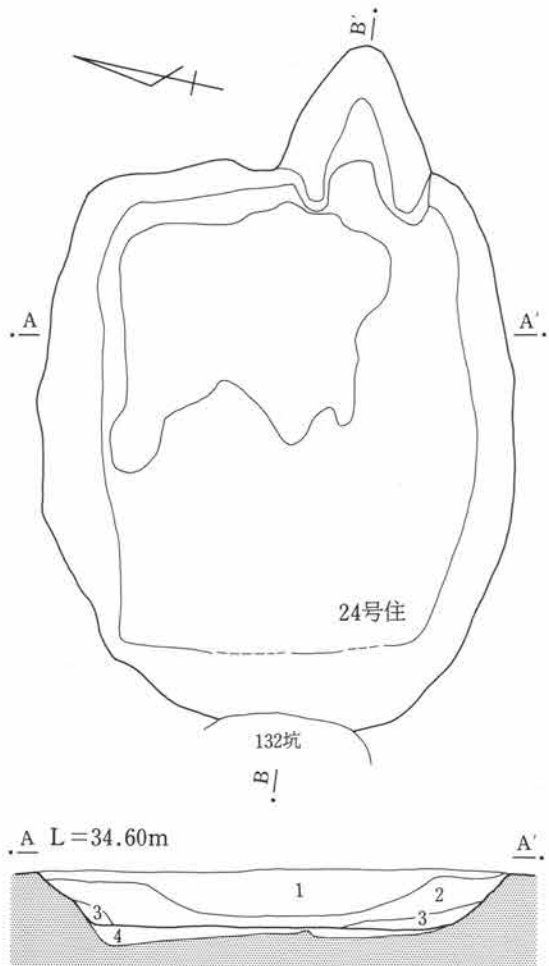
規模 壁の崩落が著しく、上面の規模は正確に測れないが、南北辺が約3.9m、東辺3.0m、西辺2.6mである。

壁 地山が砂質土のため、残存状態は極めて悪く旧状はとどめていないが壁高は35~51cmある。

カマド 東壁下南隅にある。燃烧部は壁直下であり、

火床は床面と同レベルであった。火床下の掘り方は認められない。煙道は燃烧部奥の段の後に緩やかに立ち上がっている。壁外への張出しは95cmである。床 凹凸のある不整な床である。南側へ低く傾斜しており、北壁直下と南壁直下では最大8cmの比高差がある。カマド前面から北壁下にかけて広がる比較的明瞭な硬化面を図示した。

掘り方 床下のほぼ全面に掘り方があり、シルト質土で埋め戻していた。

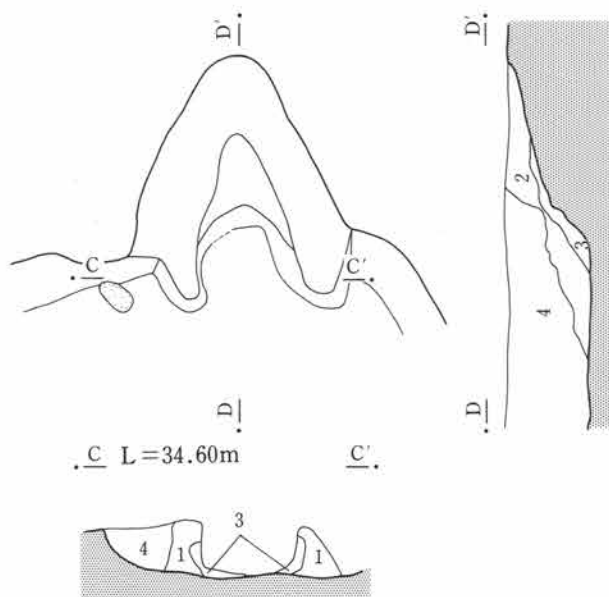


AY-24号住居土層説明

- 1 にぶい黄褐色土層 非粘性・しまり強いシルト質土層。FPらしいバミスの混入やや多い。
- 2 褐色土層 しまりやや弱い砂質土層。焼土を散見する。
- 3 にぶい黄褐色土層 シルト質土と砂質土との混合土層。
- 4 にぶい黄褐色土層 しまりの強いシルト質土層。掘り方埋め戻し土。

0 1 : 60 2m

第51図 AY-24号住居



- AY-24号住居カマド土層説明
- 1 褐色土層 カマド構築材の粘性土。
  - 2 暗赤褐色土層 焼土・カーボン粒まじりのややしまり弱い層。
  - 3 赤褐色土層 火床・煙道部分で、焼土ブロックを多量に含む。

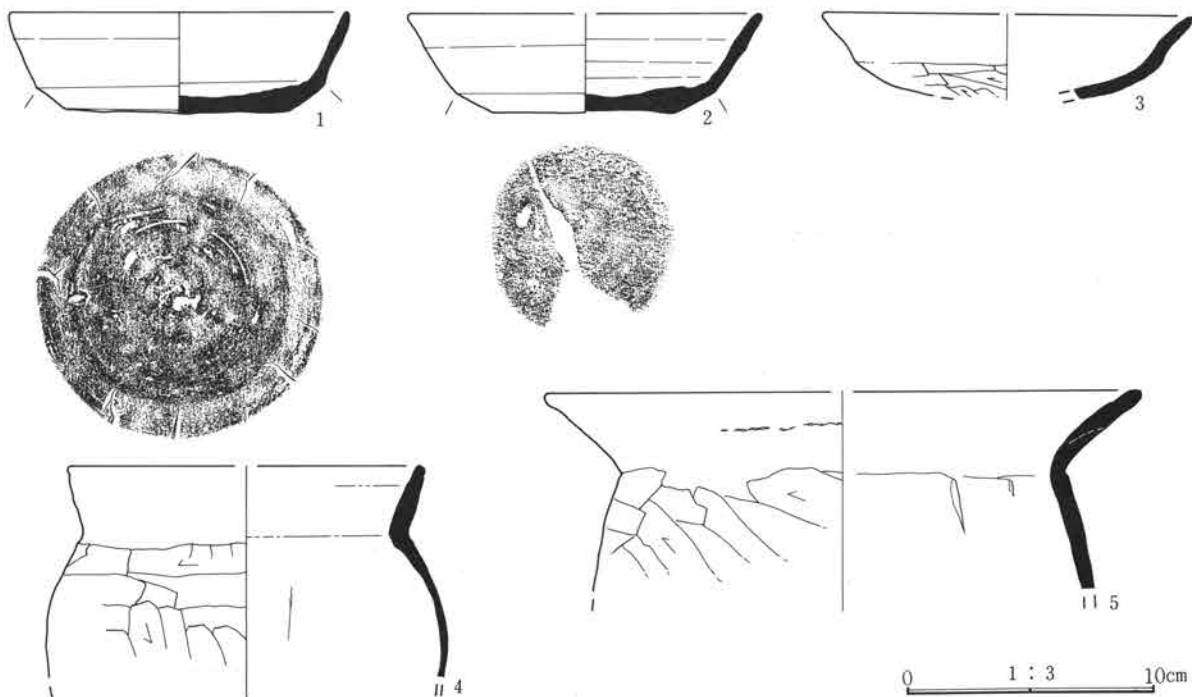
0 1 : 40 2m

第52図 AY-24号住居カマド

**遺物の出土状態** 5点を図示した。1は南壁下中央の床直上から、2は住居中央の床直上から出土した。他の土器は埋没土内の遺物である。図示した以外にも遺物は多く約300片ある。カマド内から出土した薄手の土師器長胴甕下半の大破片がめだつ。また、

須恵器甕部破片、土師器台付き甕台部破片等の出土がある。なお、25号住居埋没土出土の破片と接合した土師器甕胴部破片があった。その他にこも編み石状の礫が3点、カマド脇などの床直上から出土している。

**時期** 8世紀。



第53図 AY-24号住居出土遺物

AY-25号住居跡 (第54図 PL-7.14)

位置 C区1・m-10・11グリッド

主軸方向 N-88°-E 床面積 5.9㎡

形態 南側が広い不整な横長長方形。

規模 壁の崩落が著しく、上端でのプランは不明瞭だが、おおよそ北辺2.5m、南辺2.8m、東辺、西辺3.5mである。

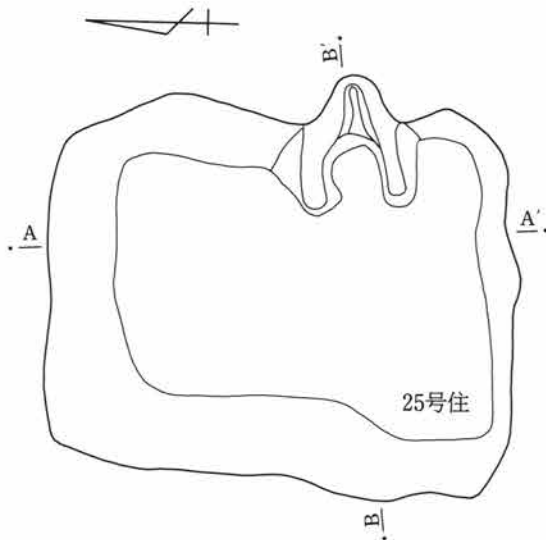
壁 地山が砂質土のため崩落が進んでいるが、下半で垂直に近い立ち上がりの部分もある。深い遺構で、全体に50cm以上の壁高がある。

カマド 東壁下南寄りにある。燃烧部は壁直下にあ

り、火床は住居床と同じレベルにある。火床下に掘り方があるが、袖と同じカマド構築材で埋め戻している。煙道は燃烧部奥で段を作って壁外へ30cm張出している。

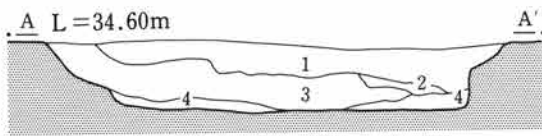
内部施設 南壁下に壁溝状のシミがあることが調査時の所見に記されているが、不明瞭で、断面調査時にも確認できなかった。

床 凹凸のある不整な床で、住居中央が深くなる傾向があり、壁際より5~8cm低い。住居掘り下げ時の窪みを埋め戻す程度の不明瞭な貼り床がある。

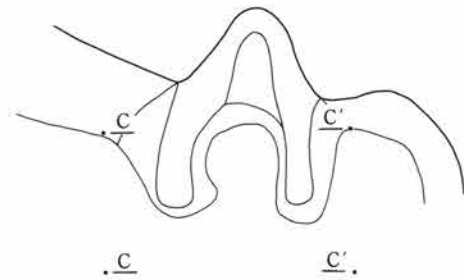


AY-25号住居土層説明

- 1 褐色土層 FPらしいパミスを含む砂質土層。
- 2 にぶい黄褐色土層 拳大のパミスを含む砂中心の土層。
- 3 褐色土層 砂礫層。
- 4 暗褐色土層 焼土粒・カーボン粒のやや多い砂質土層。

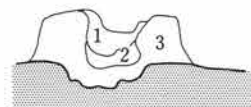


0 1:60 2m



AY-25住カマド土層説明

- 1 暗赤褐色土層 シルト質土中に多量の焼土ブロックを含む。
- 2 褐色土層 パミスまじりの粘土層。
- 3 にぶい黄褐色土層 砂礫・シルト質土・粘土の混合土層。



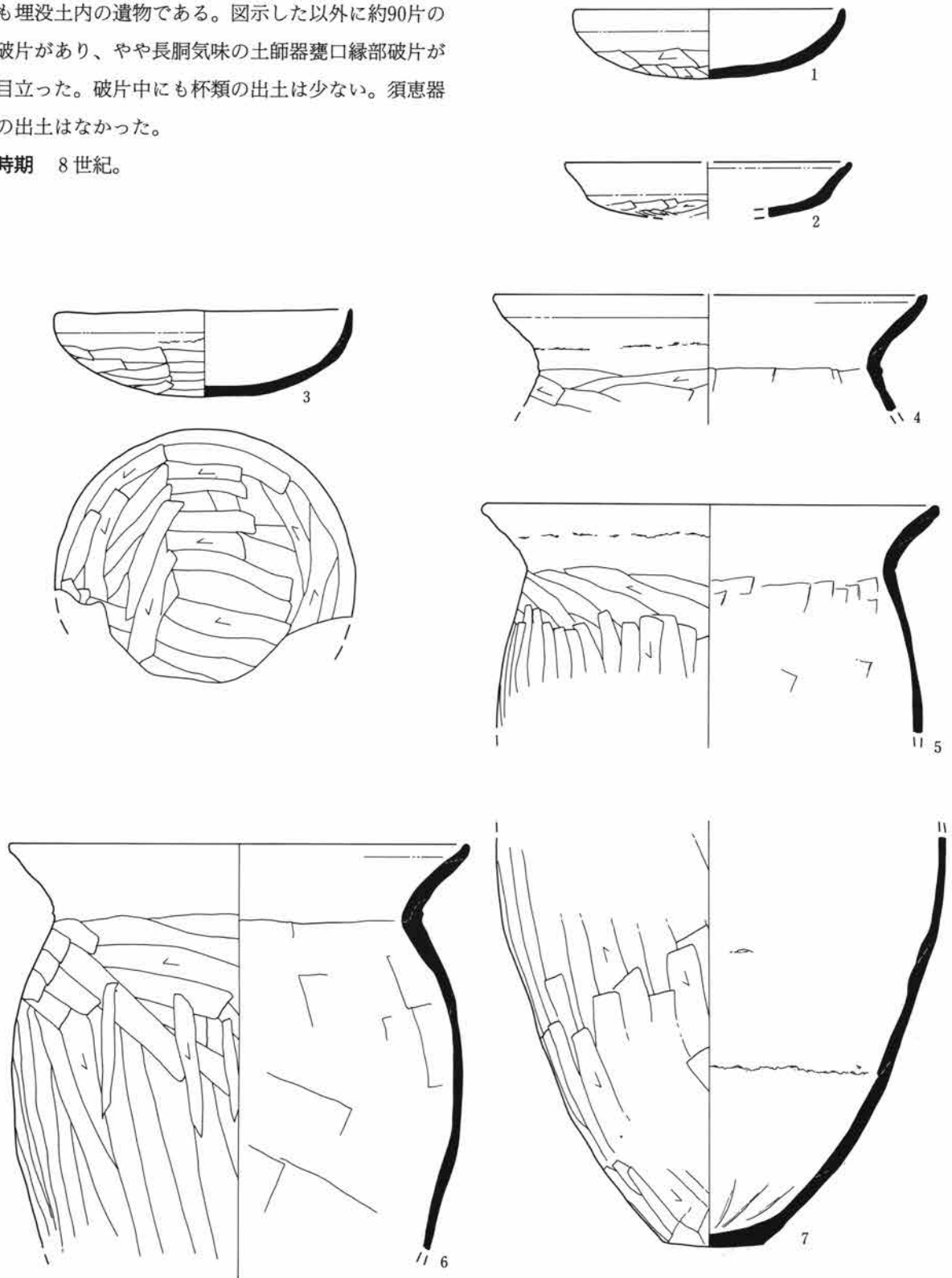
0 1:40 2m

第54図 AY-25号住居およびカマド



遺物の出土状態 7点の土師器を図示したがいずれも埋没土内の遺物である。図示した以外に約90片の破片があり、やや長胴気味の土師器甕口縁部破片が目立った。破片中にも杯類の出土は少ない。須恵器の出土はなかった。

時期 8世紀。



第55図 AY-25号住居出土遺物

AY-26号住居跡 (第56図 PL-7)

**位置** C区v・w・x-18・19グリッド。重複と攪乱の著しい地点にあり、当初、住居の存在に気づかず掘り下げたため、図面、写真に不備な点が多い。

**重複** 17号住。18号溝に先行。18号住居に後出か。掘立柱などとも重複。

**主軸方向** N-67°-E

**床面積** 22.2㎡ (推定)

**形態** 縦長長方形と思われる。

**規模** 北東・南西辺4.1m、北西・南東辺5.5mが想定できる。

**壁** 4～6cmの高さしか残存していない。

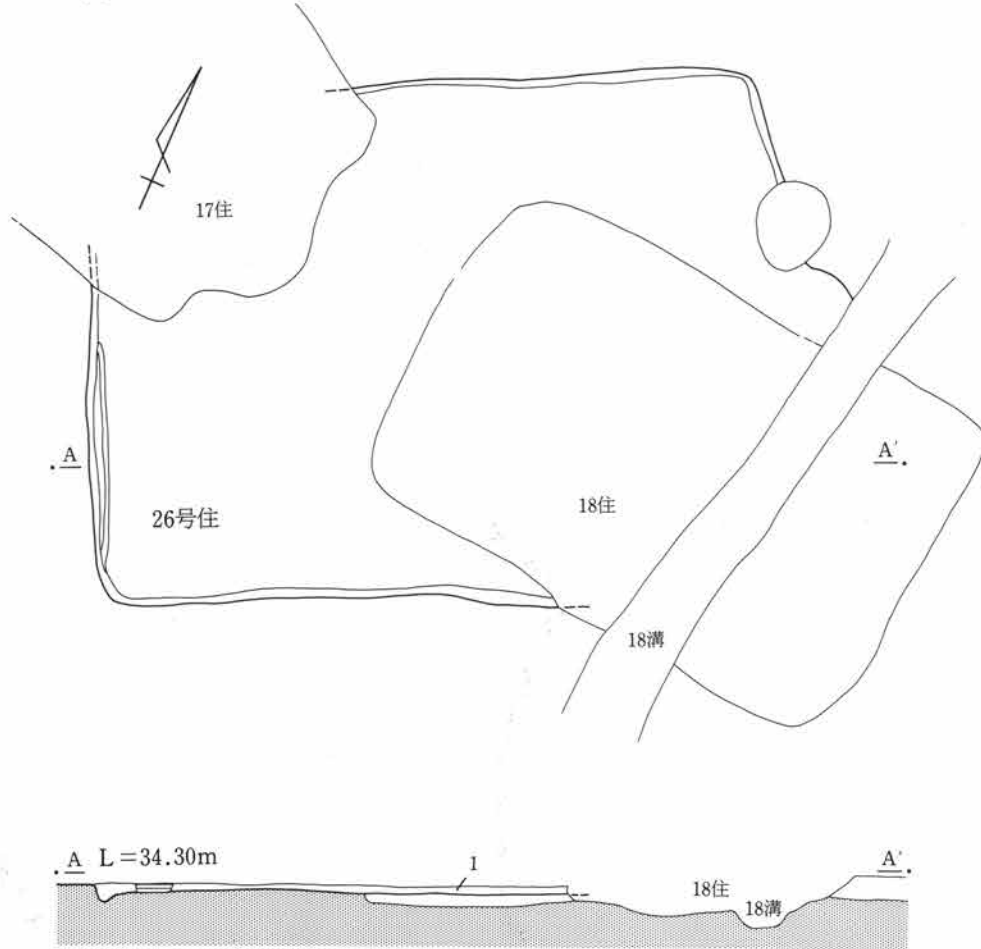
**カマド** 北東壁下のほぼ中央にあるようだが、18号溝に切られ、18号住居のカマドとも重複して不明瞭である。

**内部施設** 壁溝状の窪みが南東辺南隅にある。

**床** 踏み固めのない不明瞭な床である。掘り方まで掘り過ぎた可能性もある。

**遺物の出土状態** 1点の出土もなかった。17・18号住居の出土遺物の中に本住居の遺物が含まれているはずである。

**時期** 7～8世紀か。



AY-26号住居土層説明

1 におい黄褐色土層 しまりの強いシルト質土層。

0 1 : 60 2m

第56図 AY-26号住居

AY-27号住居跡 (第57図 PL-7・14)

位置 D区 j・k-22・23グリッド

重複 223・225号土坑に先行。

主軸方向 N-123°-E

床面積 9,1m<sup>2</sup> (検出部分のみ)

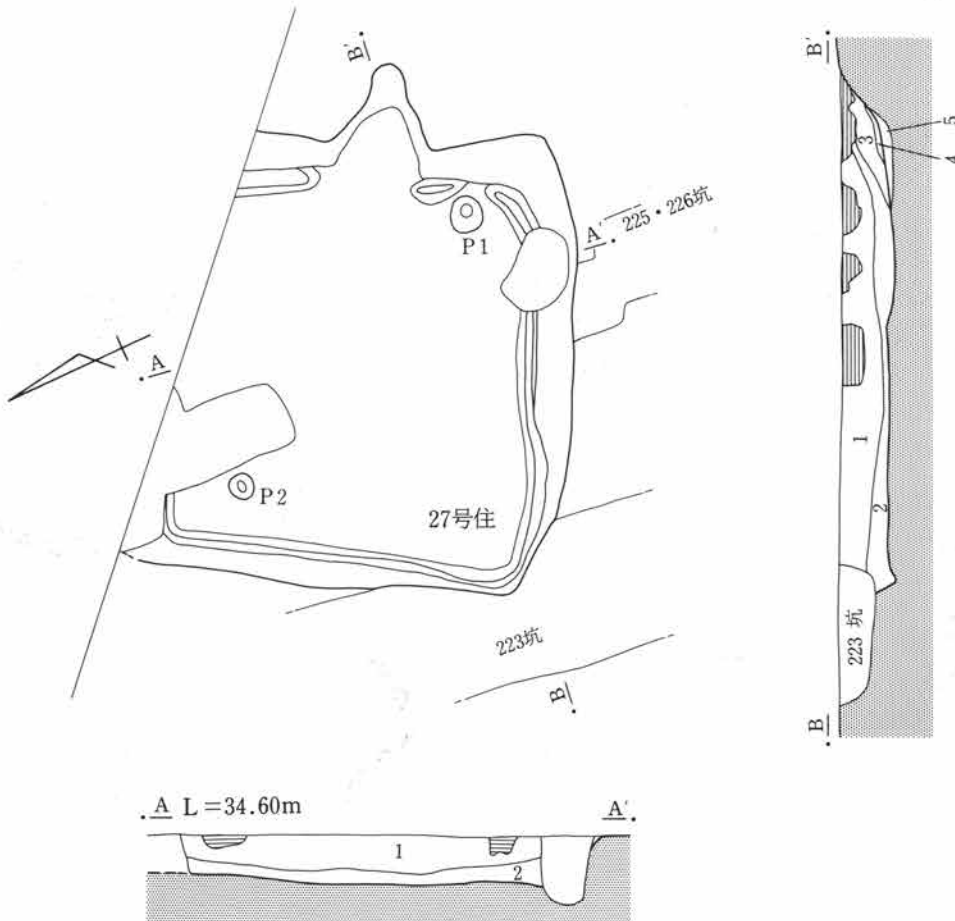
形態 重複や攪乱が多いうえに、北辺は調査区域外だったため全容は不明だが、北西隅の壁溝が正しければ正方形に近いプランと思われる。

規模 南辺で3,4mあり、西辺で3,1mほどと推定できる。

壁 上面の崩落がすすみ、旧状は不明である。最大で38cmの壁高がある。

カマド 東壁下のほぼ中央にあると思われる。燃焼部は壁外にあり、煙道の壁外への張出しは60cmある。火床は住居床面と同レベルにある。火床下に掘り方がある。袖部は残存していない。

内部施設 深さ3~6cmの壁溝がカマド下を除いて全周するようだがカマド南脇では不明瞭になっている。ピット状の掘り込みが2基あったが、本住居に確実に伴うものかは不明である。P1は深さ8cmで貯蔵穴の可能性もある。P2も深さ13cmと浅い。



AY-27号住居土層説明

- 1 にぶい黄褐色土層 しまりやや弱いシルト質土層。
- 2 にぶい黄褐色土層 シルト質土は小ブロック状に混入。
- 3 褐色土層 焼土粒を含むシルト質土層。カマド構築材としてはしまり弱い。
- 4 灰褐色土層 灰主体のしまりに欠ける土層。
- 5 にぶい黄褐色土層 カマド掘り方埋め戻し土層。シルト質土はブロック状に混入。

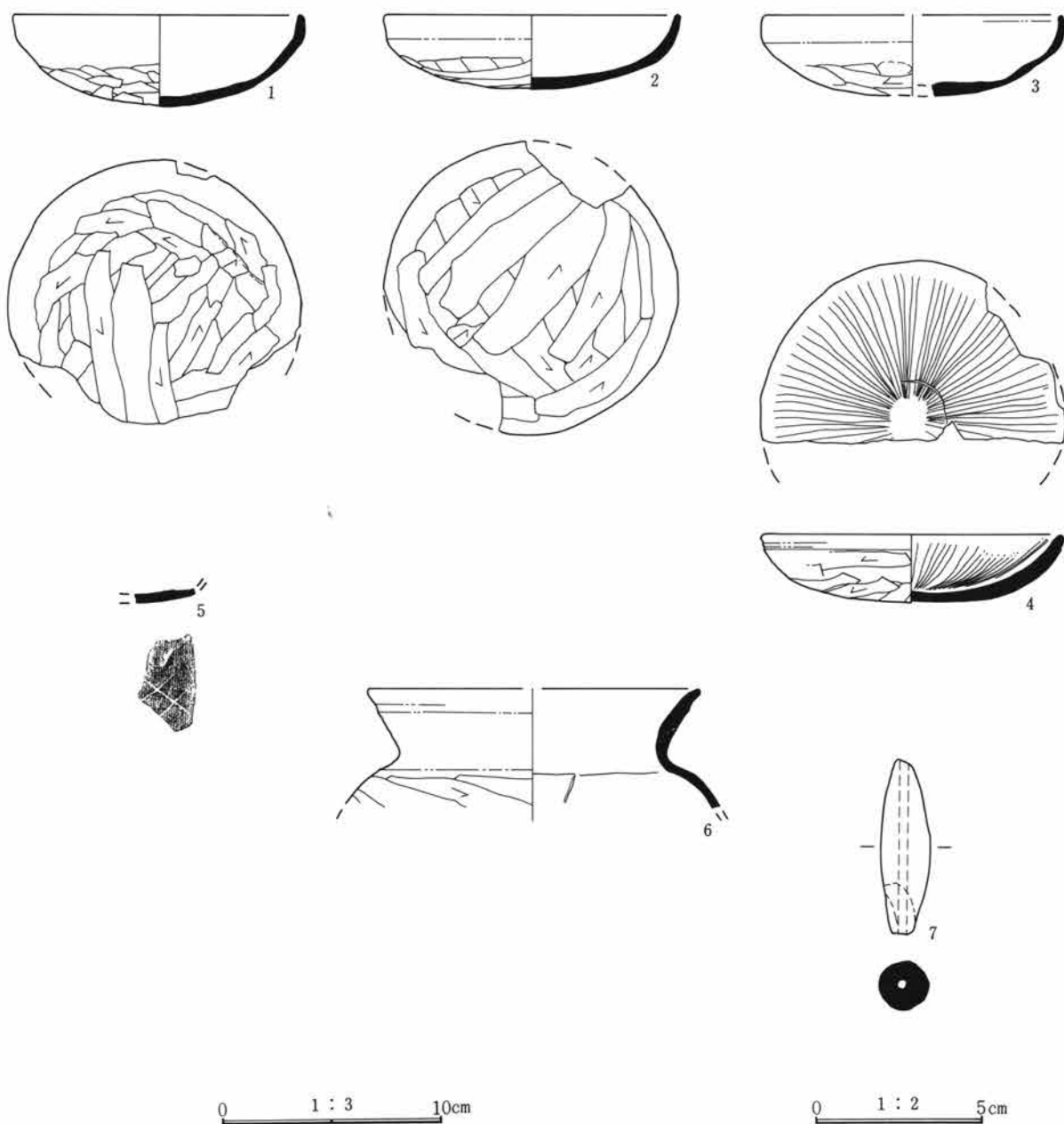
第57図 AY-27号住居

床 地山をそのまま床面としているようだ。凹凸のある床面で、カマド南脇と住居中央が他の壁直下より3～5cmほど低くなっている。

遺物の出土状態 土師器杯類を中心に遺存状態の良い遺物があり7点を図示した。1の杯は南西隅の床直上、2の杯と6の甕は住居中央の床直上、7の土錘はカマド北脇の壁溝底面直上から出土した。その

他の遺物は埋没土内の出土である。図示した以外には、土師器杯約40片、甕約70片がある。杯類は口径の大きなものが目立った。甕類は薄手の土師器丸胴甕の大破片が目立った。カマド内出土の破片は僅かであった。なお、須恵器の出土はなかった。

時期 8世紀。



第58図 AY-27号住居出土遺物

AY-28号住居跡 (第59図 PL-7・14)

位置 D区h・i-21・22グリッド

重複 29号住居と重複している。断面の土層観察からは本住居のほうが当たりしそうだと思われていたが、明確ではない。これは29号住居の壁溝の一部が本住居の床下精査時に見つかったことによるが、床面の差違が最も把握し易い29号住居カマド前面(本住居の北西隅付近)で切り合いが不明で、カマド崩落土が流れ込んでいた。29号住居のカマド構築時に古い住居の埋め戻し土のある東壁をきらって、北側へカマドを築いたと想定したい。本住居が先行する可能性もある。

主軸方向 N-94°-E

床面積㎡ 12,4 (推定)

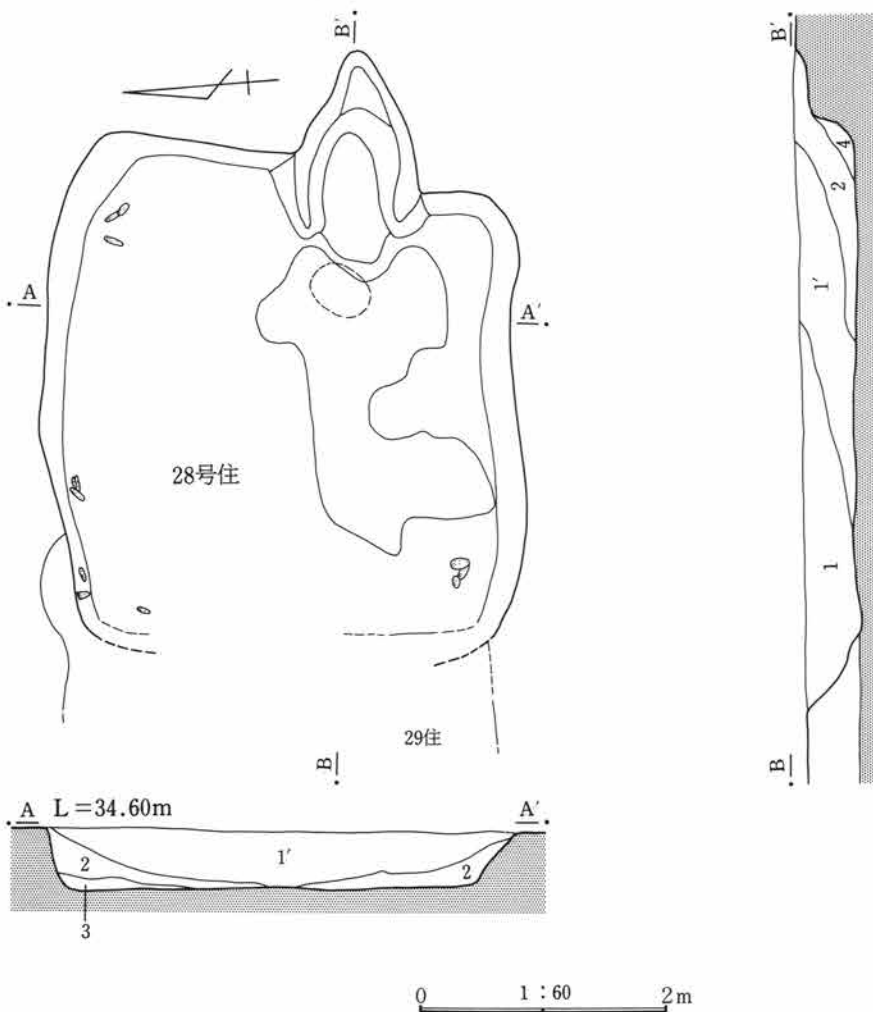
形態 やや不整な縦長長方形

規模 東辺が3,3m、他は不明である。

壁 カマド周辺から北東隅にかけて43~56cmの残存壁高がある。

カマド 東壁下南隅にある。燃焼部は壁直下であり、火床は住居床面より3cm低くなっている。煙道は燃焼部奥から段を作って緩やかに立ち上がり、壁外へ105cm張出している。

床 地山をそのまま床面としている。カマド前から住居南半に踏み固められた硬化面があり、実線で図示した。また、カマド前面に焼土・灰の散る範囲を破線で図示した。床面は凹凸が大きく、住居中央は壁直下より5~9cm高くなっている。



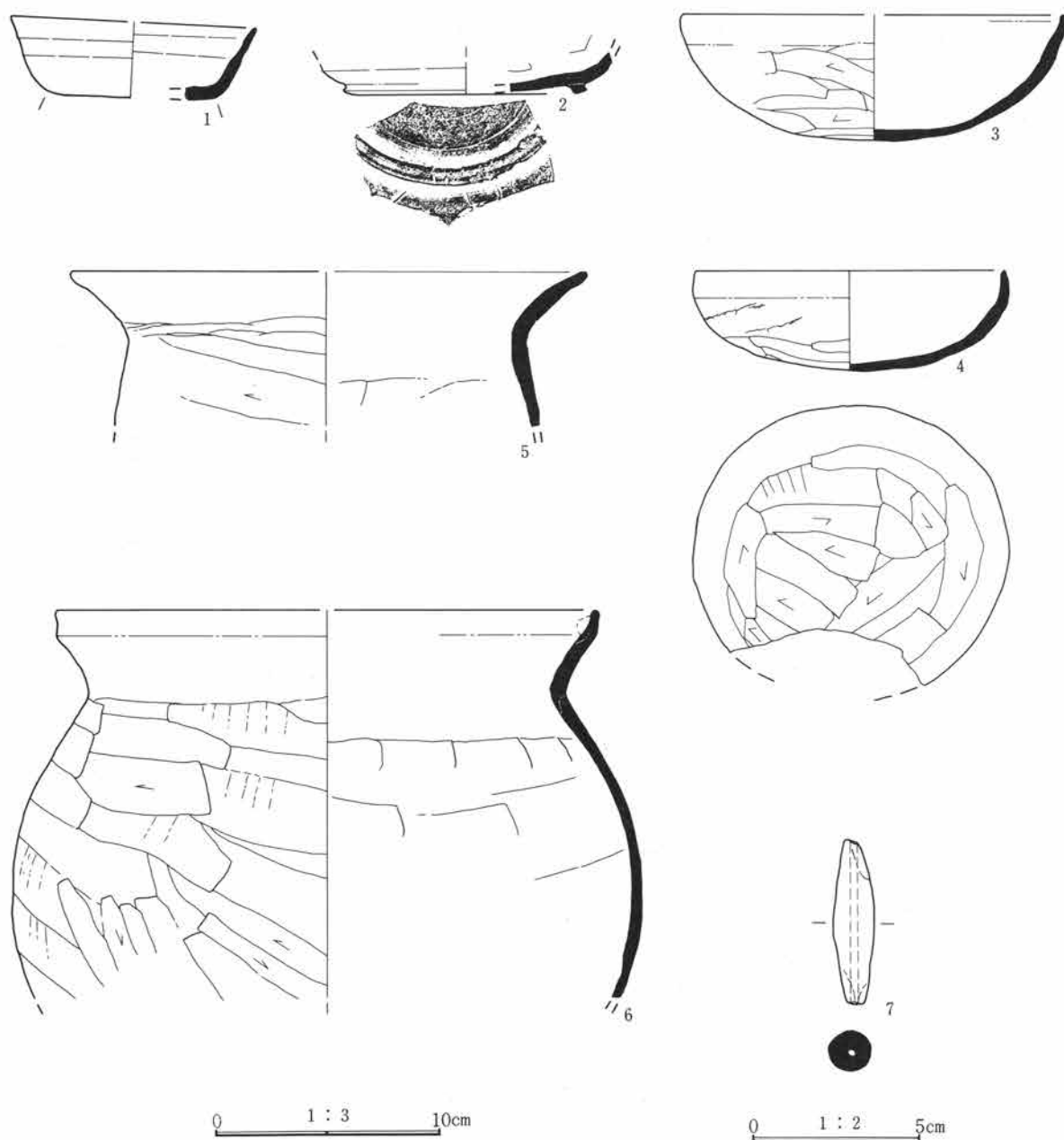
AY-28号住居土層説明  
 1 粘性・しまりとともに欠けるシルト質土層。  
 1' には黄褐色土層が混入するシルトが大粒になる。  
 2 黄褐色土層 しまりの弱いシルト質土層。焼土・灰を含む。  
 3 には黄褐色土層 プロック状に混じったシルト中心の土層。  
 4 暗赤褐色土層 灰・プロック状の焼土中心のややしまりに欠ける土層。

第59図 AY-28号住居

**遺物の出土状態** 7点を図示した。2は北壁下の床直上、3は住居中央床直上、4・5は南東隅壁直下の床直上の出土である。6の甕は北隅の29号住居との所属が微妙な位置にある。床上4cmの高さであった。その他は埋没土内の遺物である。図示した以外に杯類40片、甕類80片がある。杯類は須恵器5点を含む小破片中心であった。底径の大きな高台付き杯

がある。甕類はすべて土師器で、やや長胴気味の甕が大半であった。南東隅を除いた3隅で長さ14cm前後のこも編み石状の礫が出土しており、総数で10点になる。これらの遺物の中には29号住居の遺物もかなり含まれているようだ。

**時期** 8世紀



第60図 AY-28号住居出土遺物

AY-29号住居跡 (第61図 PL-14)

位置 D区g・h-21・22グリッド

重複 28号住居と重複。前後関係は不明。カマドを通した断面に切り合いは表れず、本住居が後出するものと想定したい。

主軸方向 N-16°-E

床面積 8,3㎡ (検出部分のみ)

形態 横長長方形か

規模 西辺3,2m、北辺は3,6m以上。

壁 残存部分では40cm前後の壁高がある。

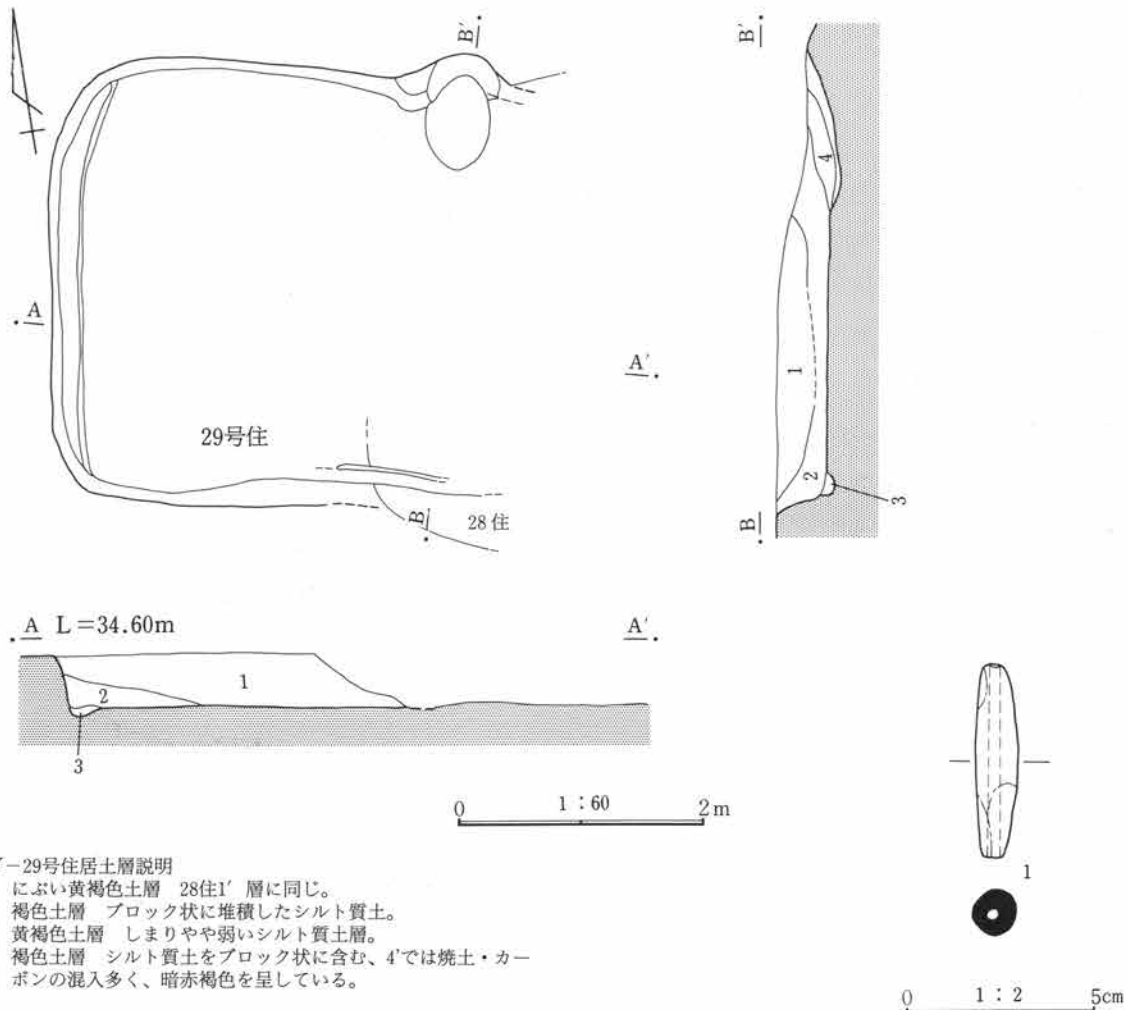
カマド 北辺の東隅に位置すると思われる。燃焼部奥が残存し、煙道は不明瞭だが壁外の張出しは30cmほどである。燃焼部は住居内にあったようで、火床下に深さ5cmの掘り込みがある。西袖の一部が残存していた可能性もある。

内部施設 壁溝が西壁下など一部で認められたが、埋没土は地山に近く、不明瞭な部分が多い。

床 比較的平坦だが、やや軟弱な床である。

遺物の出土状態 重複する28号住居の掘り下げ時に一括して取り上げられたため、本住居に確実に伴う遺物は中央北寄りの床直上で出土した土錘1点のみである。28号住居出土の甕は本住居に伴う可能性もある。

時期 不明。8世紀か。



AY-29号住居土層説明

- 1 におい黄褐色土層 28住1'層に同じ。
- 2 褐色土層 ブロック状に堆積したシルト質土。
- 3 黄褐色土層 しまりやや弱いシルト質土層。
- 4 褐色土層 シルト質土をブロック状に含む、4'では焼土・カーボンの混入多く、暗赤褐色を呈している。

第61図 AY-29号住居および出土遺物

AY-30号住居跡 (第62図 PL-8)

位置 D区x・y-19・20グリッド

主軸方向 N-34°-W 床面積 (7,9) m<sup>2</sup>

形態 北西隅は調査範囲外であった。残存部分から長辺3,2m、短辺2,4mの長方形が復元できる。

壁 約10cmの残存壁高があるが、床面を掘り過ぎた可能性があり、明瞭でない。

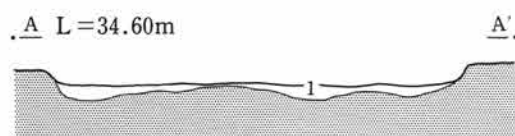
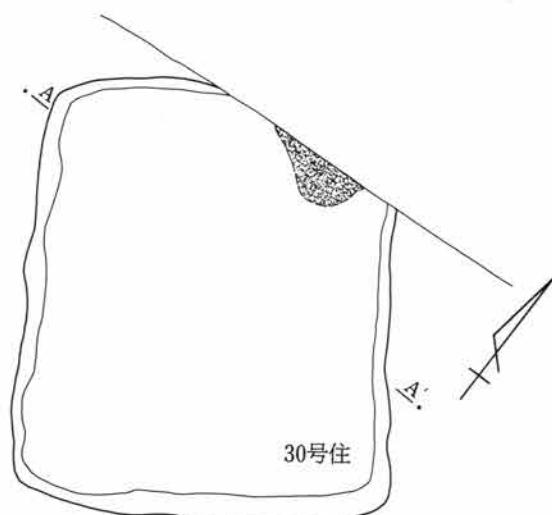
カマド 調査範囲では発見できなかったが、北東隅付近の床直上に黒色灰やカーボンが多く、散布域をトーンで示した。北壁東隅にカマドがあったものと想定できる。

床 やや粒子の粗い黄褐色土地山の中にあり踏み固めや灰散布のある明瞭な床面は検出できなかった。遺物の大半は想定した床面より5cm浮いた状態で出土している。図示した床面は掘り方まで達している可能性もある。

掘り方 前記の理由から、図示した床面は掘り方に近いものと思われる。北壁下を除く壁下がやや深くなっていた。

遺物の出土状態 出土遺物は少なく、破片2点を図示した。1は住居南隅の床面上5cmに散らばっていた破片から接合復元した。2は住居中央のほぼ床直上の出土である。図示した以外に45点の土器を出土したが、すべて土師器であった。杯は12点で、図示したものと同様に口径の大きなものである。甕類には丸胴の胴部破片が含まれている。

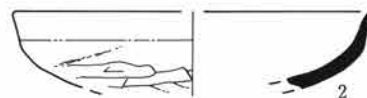
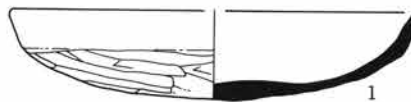
時期 8世紀前半か。



0 1:40 2m

AY-30号住居土層説明

1 黄褐色土層 地山に似た粒子の粗い土層。



0 1:3 10cm

第62図 AY-30号住居および出土遺物



AY-31号住居跡 (第63図 PL-8・15)

位置 D区w・x-19・20グリッド 北側は調査区域外にあり、南側半分のみを調査した。

主軸方向 N-77°-E 床面積 (9,1) m<sup>2</sup>

形態 遺構確認段階では不整で台形気味に歪んだプランを想定した。掘り上がりから南西隅付近に土坑状の重複遺構があるものと想定したが、プランは歪んだままである。埋没土から遺構間の重複を確認することもできなかった。

規模 南辺は4,4m前後か。西辺は2,4m以上。

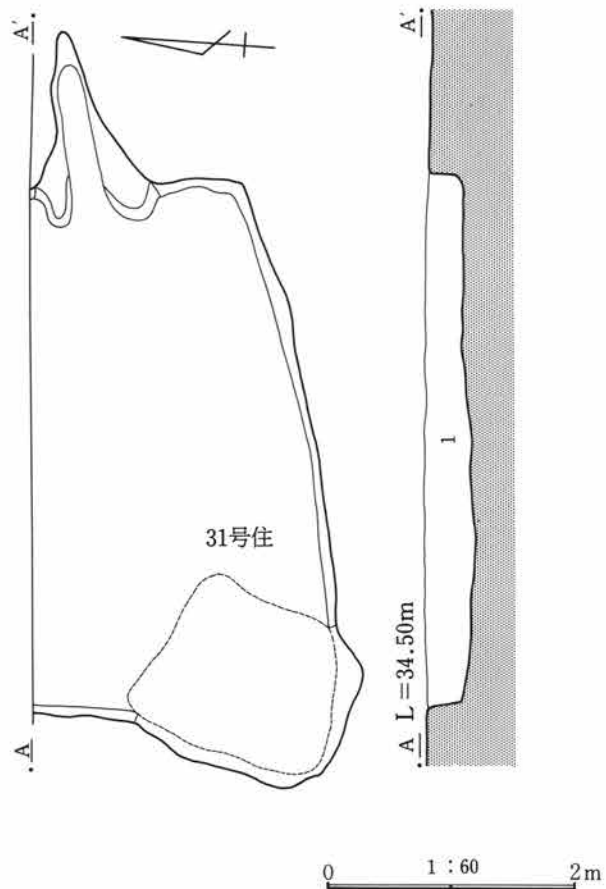
壁 垂直に近い立ち上がりの壁が最大29cm、平均25cmほど残存している。

カマド 東壁南寄りにある。燃焼部は壁外にあり、縦長で複数の甕を掛けることが出来そうである。火床は住居床面と同レベルにあり、明瞭な硬化面が認められた。煙道は緩やかに立ち上がり、壁外に90cm張出している。

床 地山をそのまま床とした細かな凹凸のある、踏み固めのあまり明瞭でない床面であった。南東隅直下が住居中央に比べて3cmほど低くなっていた。土坑状の重複遺構底面も住居床と同レベルにあり、床面からの新旧関係は確認出来なかった。

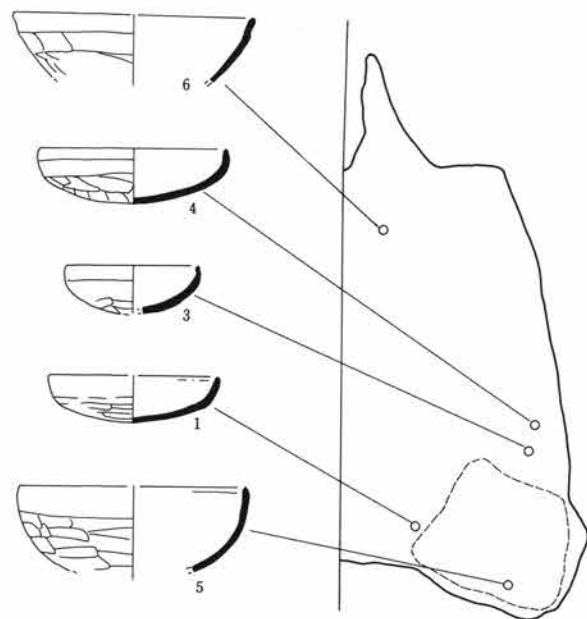
遺物の出土状態 遺物は住居の全域に散らばるようにして出土し、杯類を中心に7点の土師器を図示した。床直上の遺物は3と6で、3はカマド出土内の破片と接合している。7はカマド内の遺物である。1と4は床面より15cm以上浮いた状態だった。2は土坑状遺構との重複部分との出土である。図示した以外には土師器杯約50片、同甕約90片、須恵器3片が出土している。

時期 8世紀か。

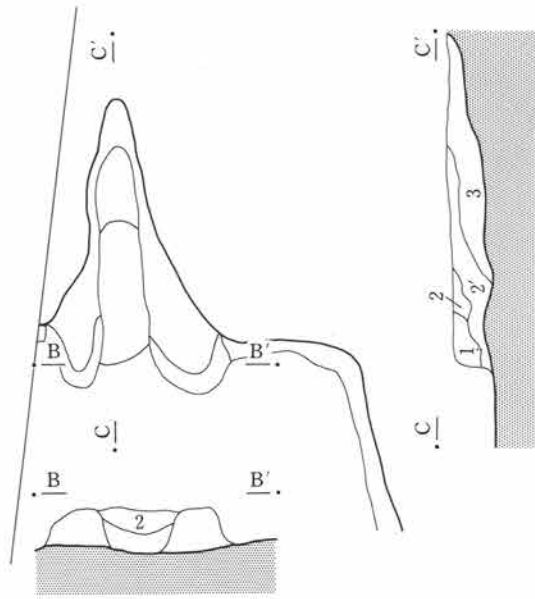


AY-31号住居土層説明

1 暗褐色土層 混入物の少ないやや砂質土層。下層へ向かうほど明度が高くなる。



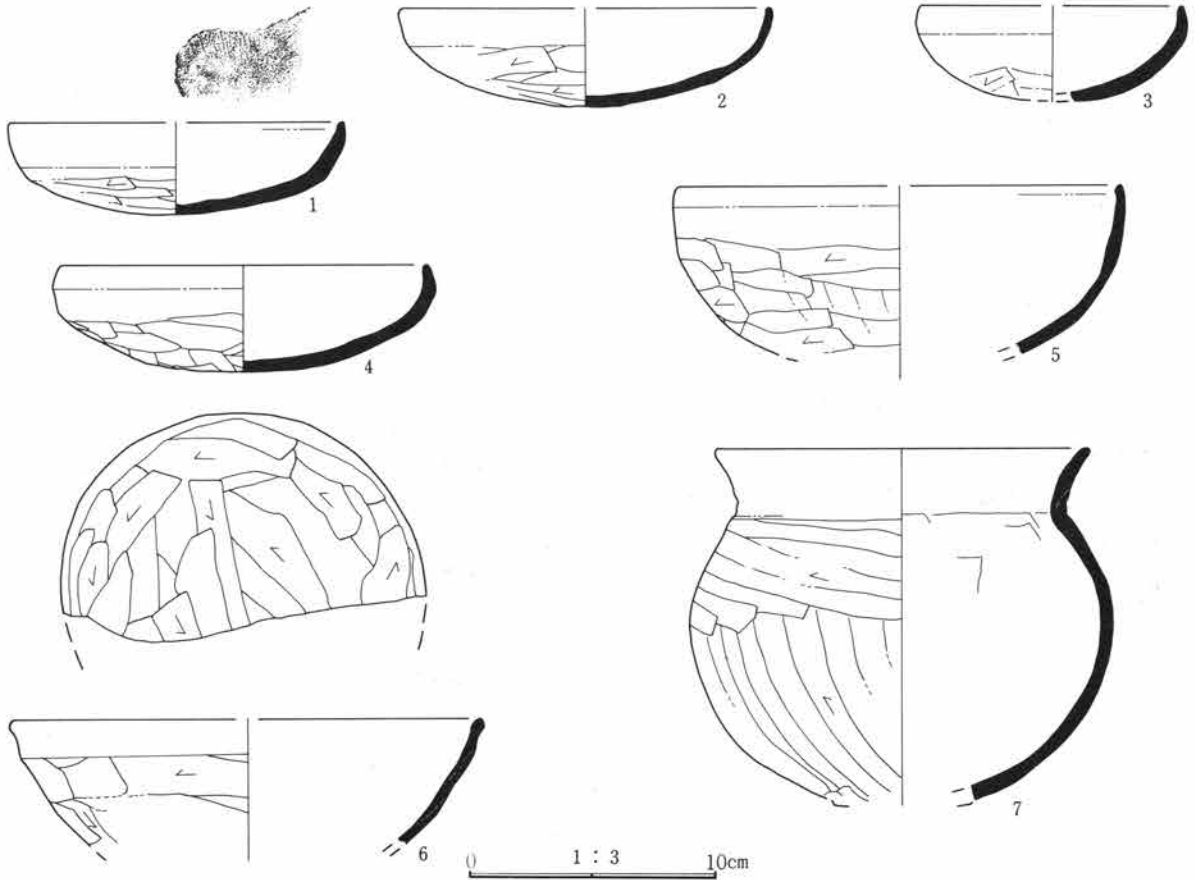
第63図 AY-31号住居および遺物出土状態



0 1 : 40 2m

AY-31号住居カマド土層説明

- 1 暗黄褐色土層 住居埋没度と同じ砂質土層。下層に比べ焼土・カーボンの混入少ない。
- 2 黒褐色土層 粒子の細かなやや腐食土状の土層。カーボン粒の混入多く、焼土を散見する。2'では黒色味さらに強い。
- 3 暗(灰)褐色土層 やや砂質でしまり欠く土層。白色灰の混入多く、焼土も均等に含んでいる。



第64図 AY-31号住居カマドおよび出土遺物

AY-32号住居跡 (第65図 PL-8)

位置 E区b・c-19・20グリッド 北壁部分が調査範囲外であった。

主軸方向 N-73°-E 床面積 (9,8)㎡

形態 一辺3,4m前後のほぼ正方形のプランになると思われるが、東辺はカマドを挟んで食い違っており、歪みも大きい。南西隅のみ直角に近く、掘り過ぎている可能性がある。

壁 15cm前後の残存壁高がある。

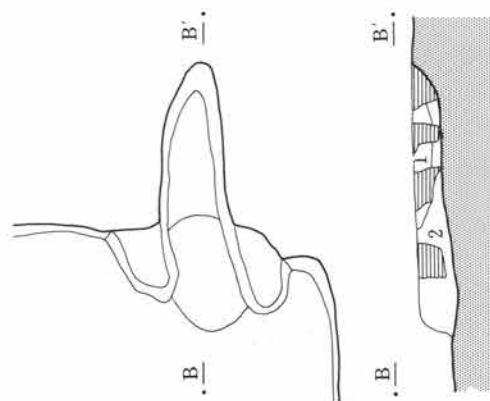
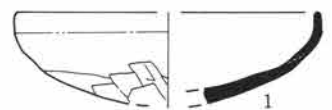
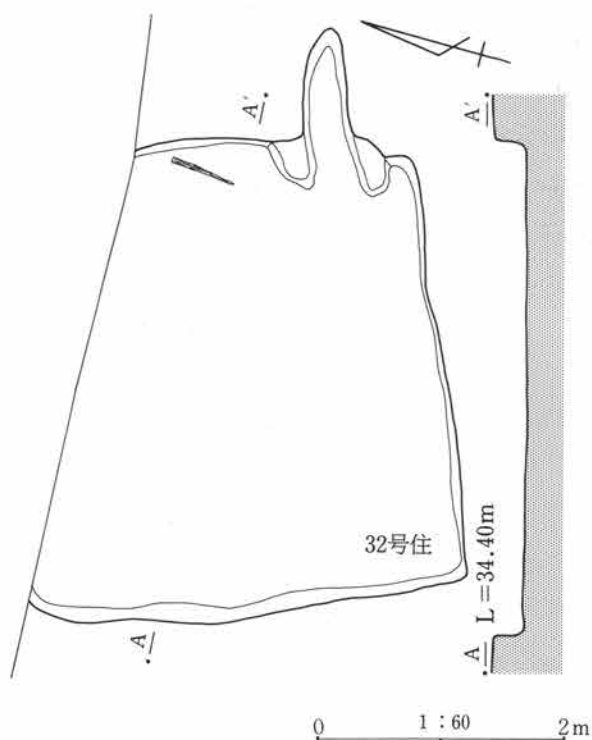
カマド 東壁下南隅にある。燃烧部は壁直下であり、火床は住居床面より3cm低くなっていた。煙道は燃烧部から同レベルでつながり、区別が難しかったが、先端は壁外へ90cm張出していた。

内部施設 西壁直下に僅かな窪みがあり、部分的に壁溝が巡っていた可能性がある。

床 地山をそのまま床面としている。西側が高く、東壁直下と8cmの比高差があった。凹凸の大きい不明瞭な床であった。

遺物の出土状態 土師器杯2点を図示した。1はカマド内、2は南西隅の床上8cmから出土した。図示した以外には土師器杯15片、土師器甕20片、須恵器杯1片がある。土師器甕は丸胴甕の底部付近大破片が含まれる。須恵器杯は外底にヘラ削りを施す丸底気味の底部破片であった。

時期 7世紀



第65図 AY-32号住居とカマドおよび出土遺物

AY-33号住居跡 (第66図 PL-8・15)

位置 E区j・k-4・5グリッド

重複 396号土坑と14号掘立に先行していることを遺構検出時に確認している。

主軸方向 N-85°-E 床面積 (10,8) m<sup>2</sup>

形態 西辺を396号土坑によって大きく壊されているが、比較的隅のしっかりした横長長方形を呈すと思われる。西辺がやや短くなって、逆台形状のプランとなる可能性もある。

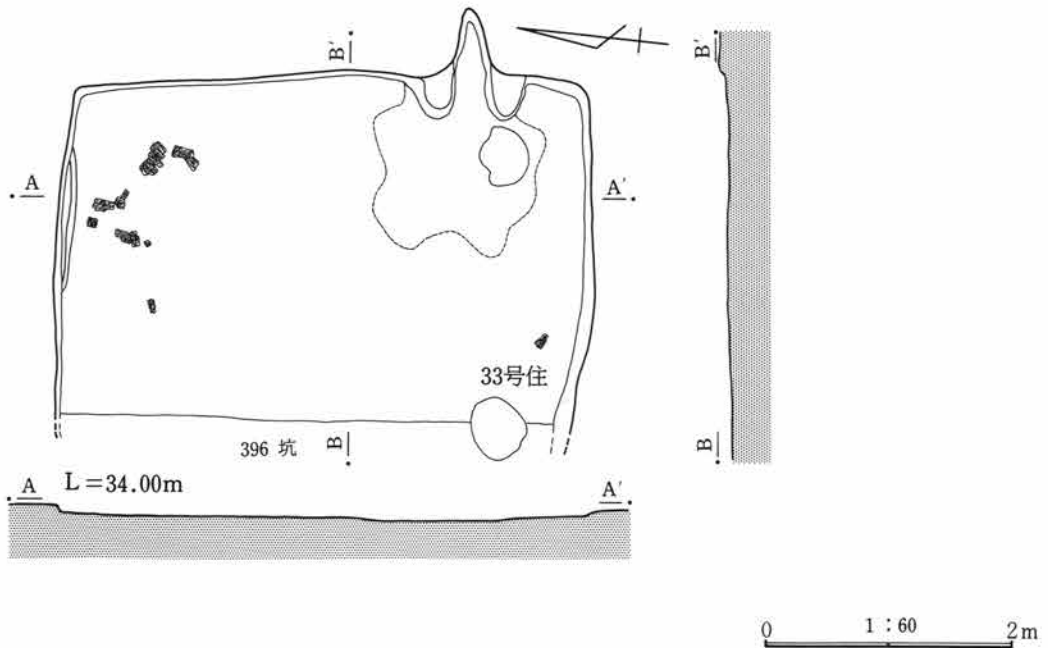
規模 東辺4,0m、南辺2,7m以上。

壁 極めて浅い住居で、緩やかな立ち上がり部分しか残存していない。壁高は最大でも7cm、平均で2~4cm程度である。

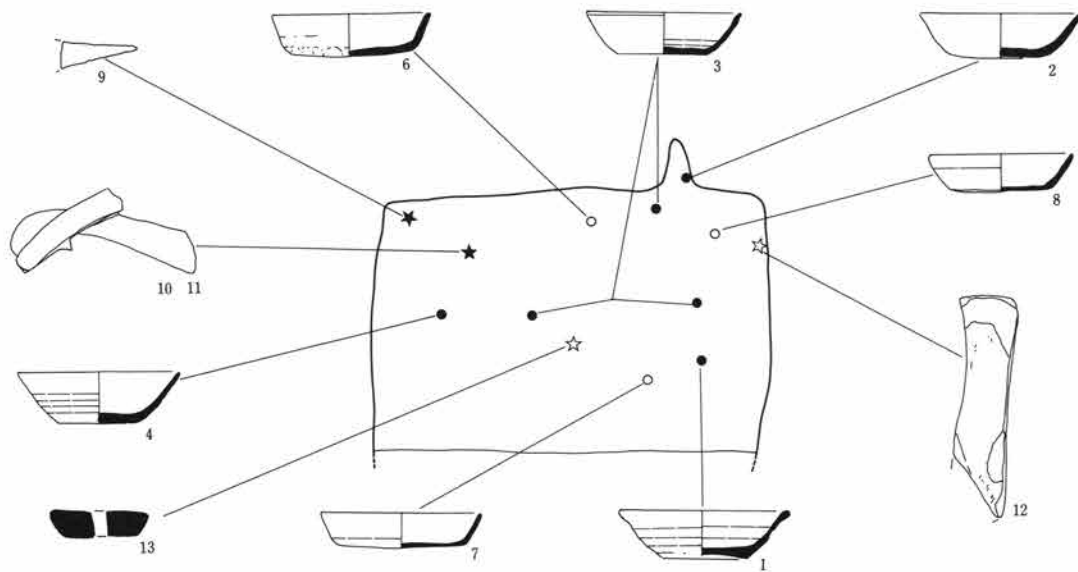
カマド 東辺南寄りにある。燃烧部は壁直下であり、縦長で複数の甕を掛けることが出来る。火床は住居床面と同レベルにある。掘り方は見られない。煙道は燃烧部との区別が難しいが、先端は壁外は50cm張出している。袖部には特別な構築材は使用せず、住居埋没土との区別が難しかった。

内部施設 深さ2cm程の壁溝状の不明瞭な窪みが、北壁直下にのみ見られた。

床 地山をそのまま床面としている。カマド前面の踏み固めの強い部分を破線で示した。この部分以外は平坦だが軟弱である。焼失住居と思われ、北壁下を中心に細かな炭化材が多量に見られ、焼土の散布もやや多かった。この部分をトーンで示した。散布物がなければ判りにくい床と思われる。



第66図 AY-33号住居

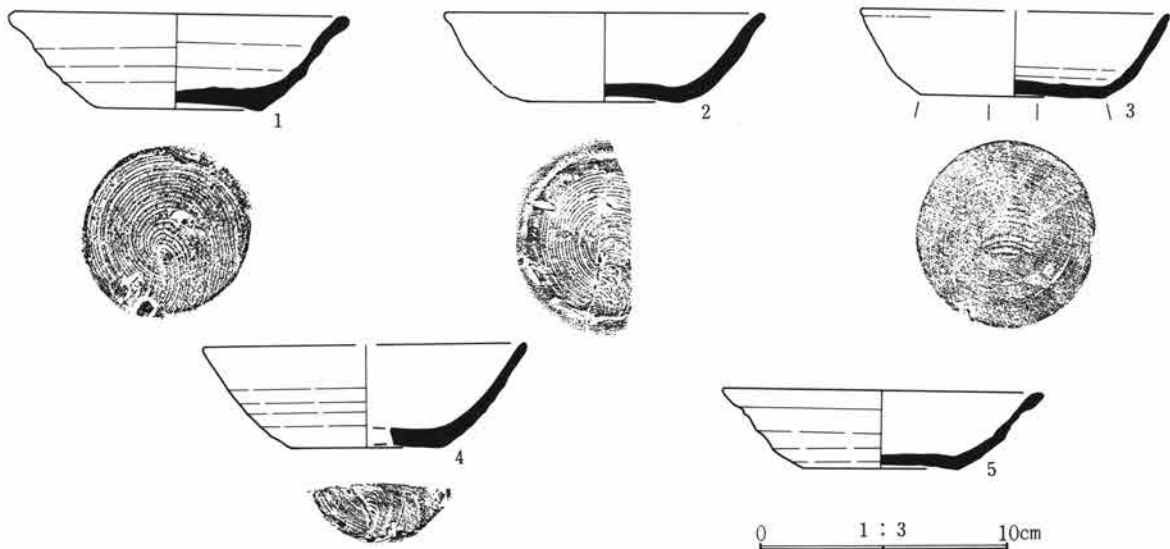


第67図 AY-33号住居遺物出土状態

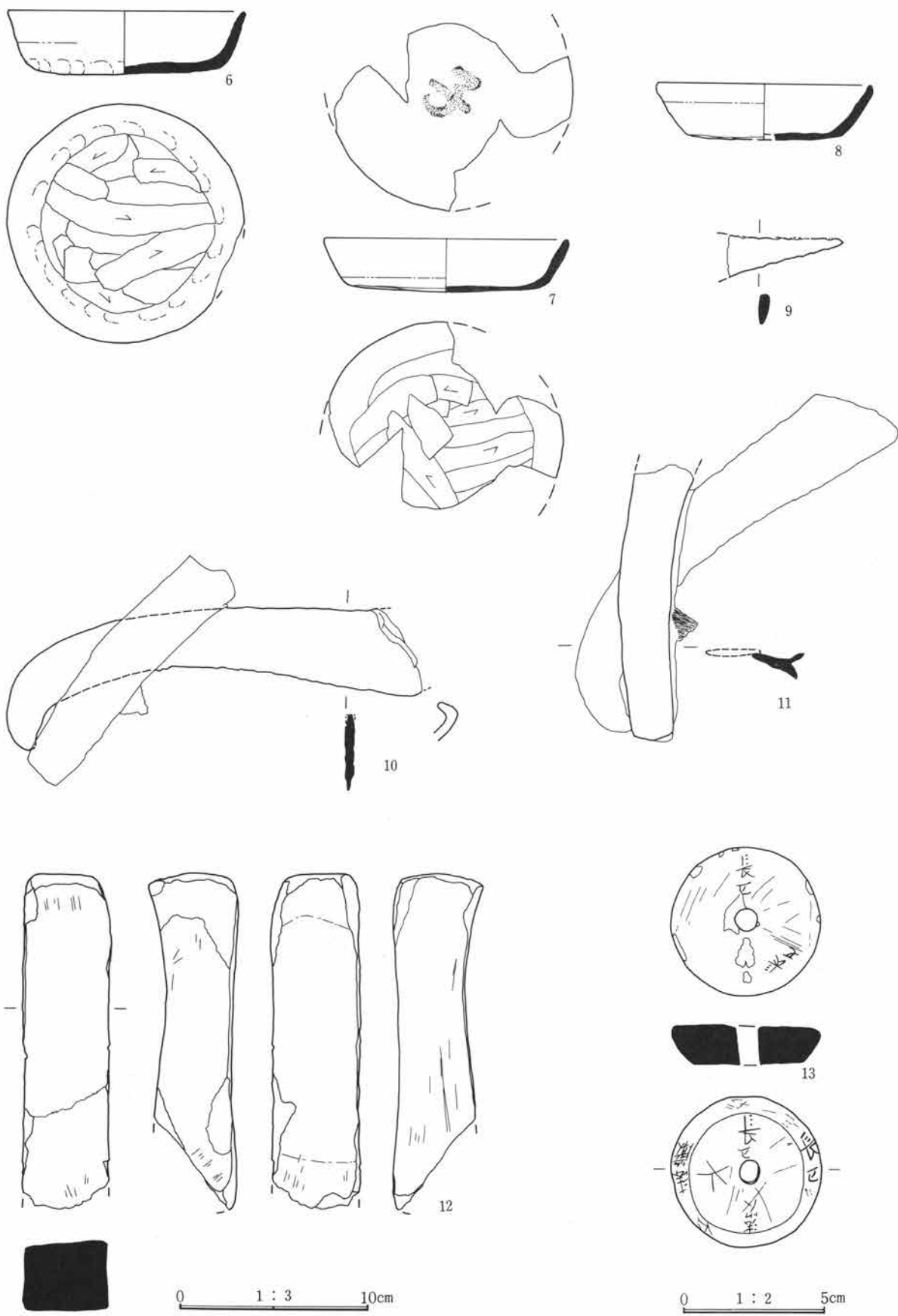
**遺物の出土状態** 浅い住居だが出土遺物は豊富で、須恵器杯類を中心に、鉄製品・石製品など13点を図示した。遺物は住居全域の床面直上に散らばるようにして出土した。カマドとその周辺では杯類が多く、2・3・6。8がこれにあたる。鉄器は9が北東隅直下、10・11が東下北寄り住居の一隅に偏っていたが、12の砥石は南壁直下東寄り、鉄器と離れて出土している。なお10・11は完形の鎌と鋤先破片

が密着していたものである。13の紡錘車は住居中央の出土である。5は遺構確認前のグリッド調査時に取り上げたものだが、本住居の上から出土したと判別できた遺物である。図示した以外には土師器長胴甕の小破片約60片、須恵器杯・蓋10片、須恵器甕胴部片5片などがある。その他に近世遺物の混入も多かった。

**時期** 8世紀。



第68図 AY-33号住居出土遺物 (1)



第69図 AY-33号住居出土遺物 (2)

AY-34号住居跡 (第70図 PL-8)

**位置** E区c・d-19・20グリッド カマド等の施設が一切なく、遺物も極めて少なく、竪穴住居とするには問題のある遺構である。

**主軸方向** N-58°-E (長軸方向を主軸とした)

**床面積** 7.8

**形態** 南・北辺3.1m、東辺2.2m、西辺2.4mの隅の丸い歪んだ長方形を呈している。

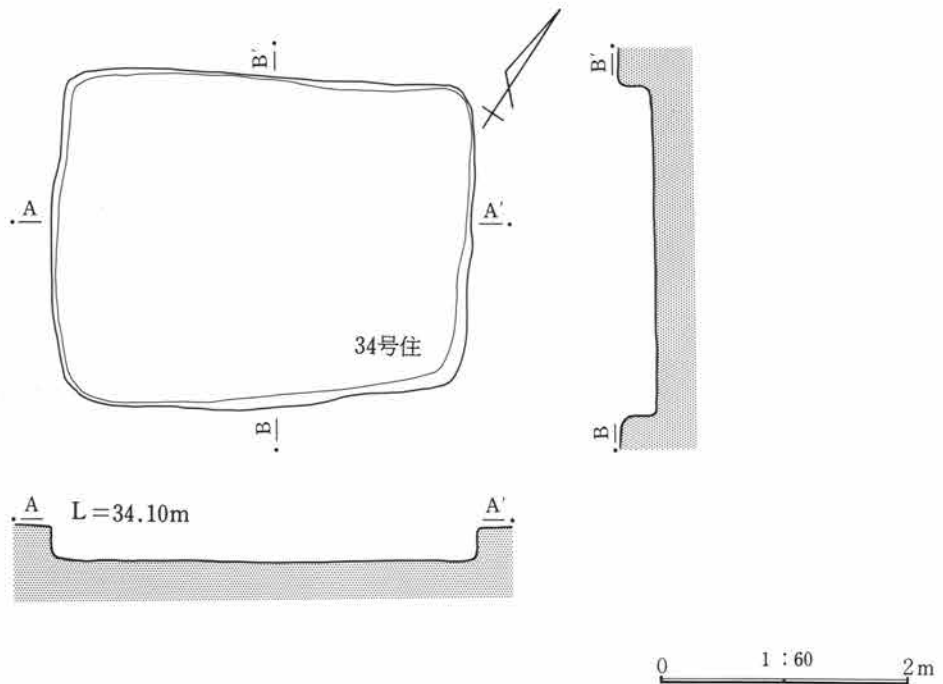
**壁** 残存壁高は10~16cmで、垂直に近い立ち上がりをしている。

**内部施設** カマドを含め、竪穴住居的な施設は何も見つかっていない。

**床** 地山をそのまま床面としている。踏み固めは弱い。住居中央が深くなる傾向があり、壁直下と5cm前後の比高差がある。また緩やかな凹凸がある。

**遺物の出土状態** 出土遺物は少なく、いずれも小破片であったが、土師器杯2点を図示した。1は北壁下の床直上、2は東壁下の床上10cmで出土したものである。図示した以外の遺物もすべて土師器で、杯類が10片、甕類が12片ある。

**時期** 8世紀か。



第70図 AY-34号住居および出土遺物

AY-35号住居跡 (第71図 PL-9・15)

**位置** E区b-23グリッド 当初、25号溝に北壁部分が重複するプランを想定したが、攪乱が多い上に掘り上げて住居と確認出来なかった遺構である。西壁下と想定した位置からは遺物がまとまって出土したので、竪穴住居として扱った。

**重複** 25号溝

**主軸方向** 残存する西辺より、おおよそ西側へ5度または東側へ85度前後の軸方向が推定できる。

**形態** 西辺南側の1,3m分と南西隅付近が判るだけだが、これより方形に近いプランを推定することも出来そうである。

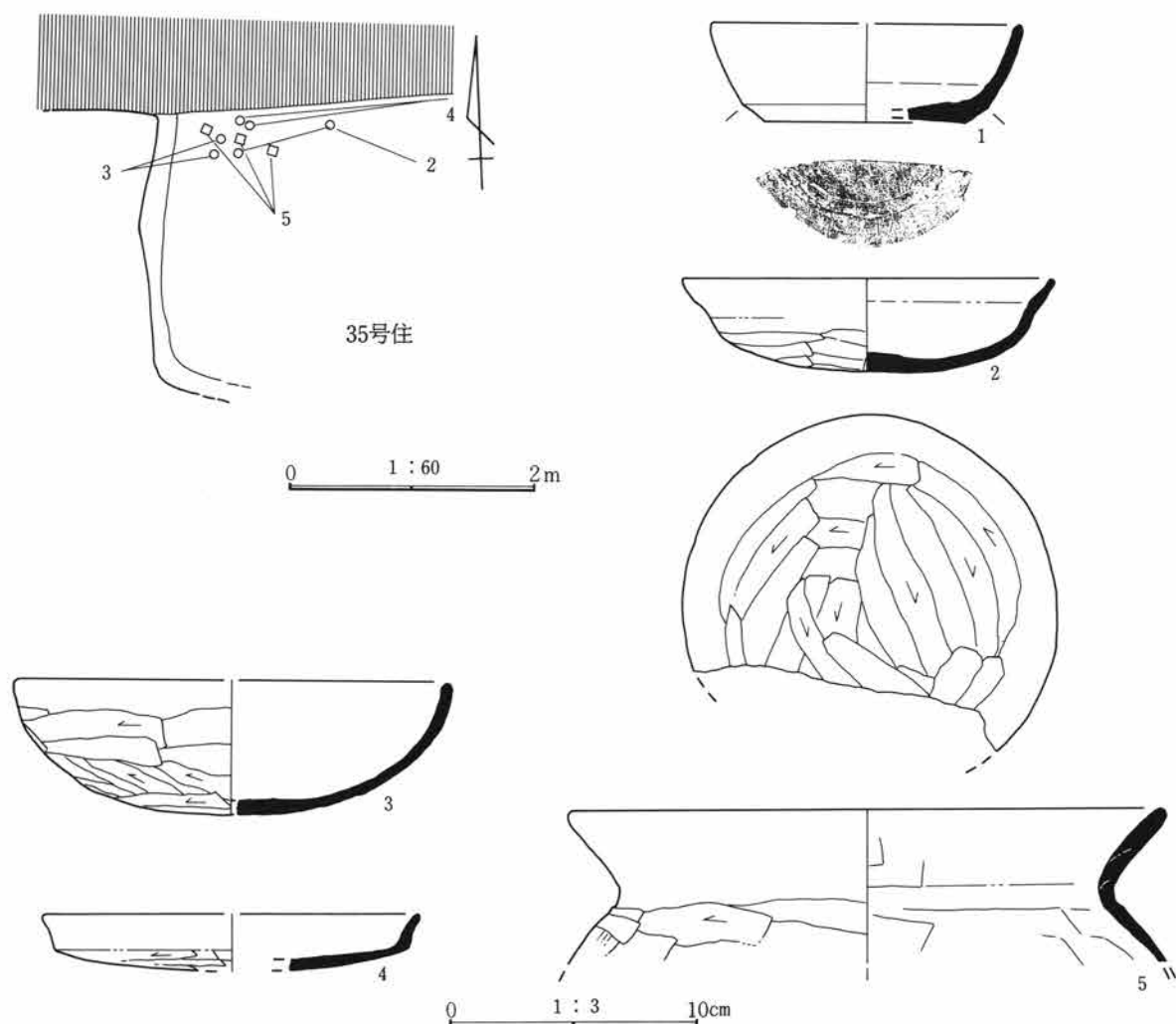
**壁** 遺物のレベルより20cm前後の壁高があったものと推定している。

**内部施設** カマドを含め、竪穴住居的な施設は確認出来なかった。カマドの痕跡は残存部分に一切見られず、存在するなら北辺の攪乱内と思われる。

**床** 貼り床や踏み固め、焼土や灰の散布等、何も確認できず、明瞭な床は見つからなかった。

**遺物の出土状態** 5点を図示した。2・4・5は床面と推定したレベルの出土である。3はそれより10cm以上高い位置で、1は埋没土内の出土である。図示した以外には約100片の土師器甕、約40片の土師器杯、5片の須恵器杯があるが、いずれも小破片である。

**時期** 8世紀か。



第71図 AY-35号住居および出土遺物



AY-36号住居跡 (第72図 PL-9・15・16)

位置 D区Y・E区a-22・23グリッド 当初の発見が遅れ、下面調査の移る時点で区域隅からカマド部分を確認した遺構である。そのため失ってしまった部分が広い。

主軸方向 N-47°-E前後か

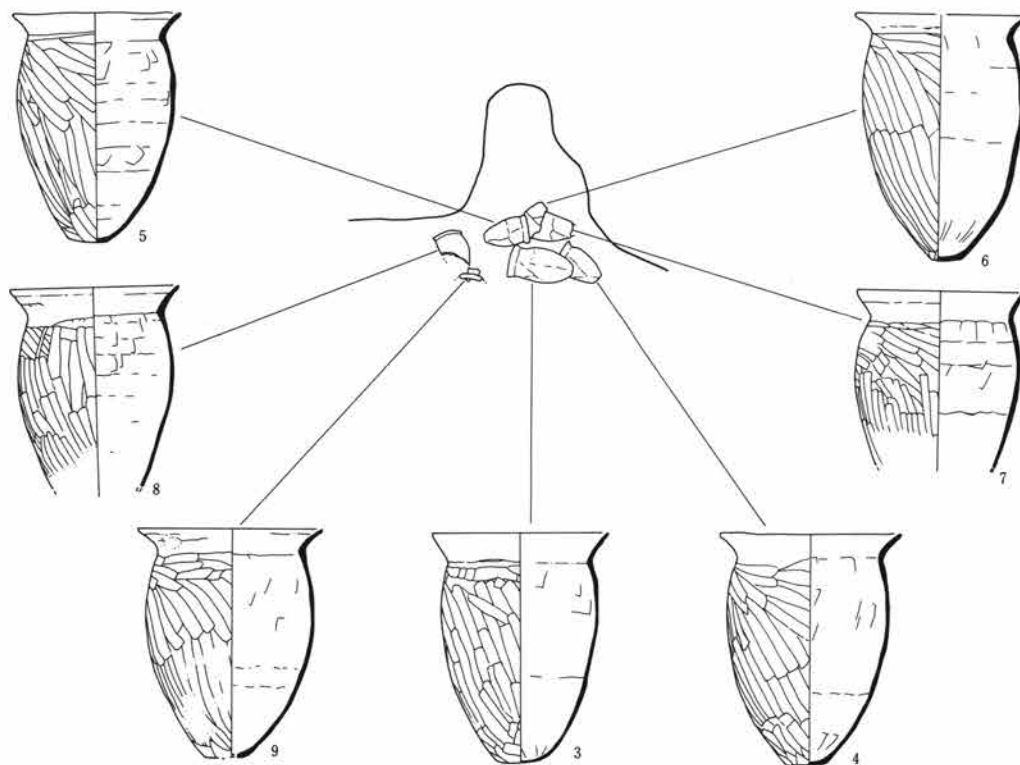
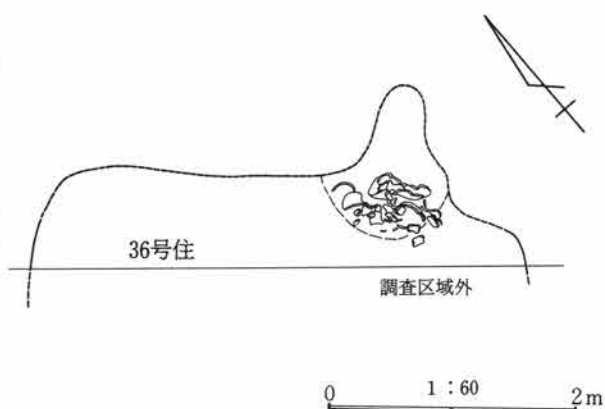
形態 残存するカマドや南辺東隅・北辺東隅から想定すると、東辺が3.5m前後となる。横長長方形を呈すものと思われる。

壁 調査前にほとんどを失ってしまった。断面からも観察することは出来ない。

カマド 東壁の南寄りにあったものと思われる。煙道は先端部を若干欠いているが残存する範囲でも壁外へ70cm張出している。焚き口部分の芯材に土師器甕を入れ子状にして使用していた。

内部施設 カマド以外の施設は見つかっていない。

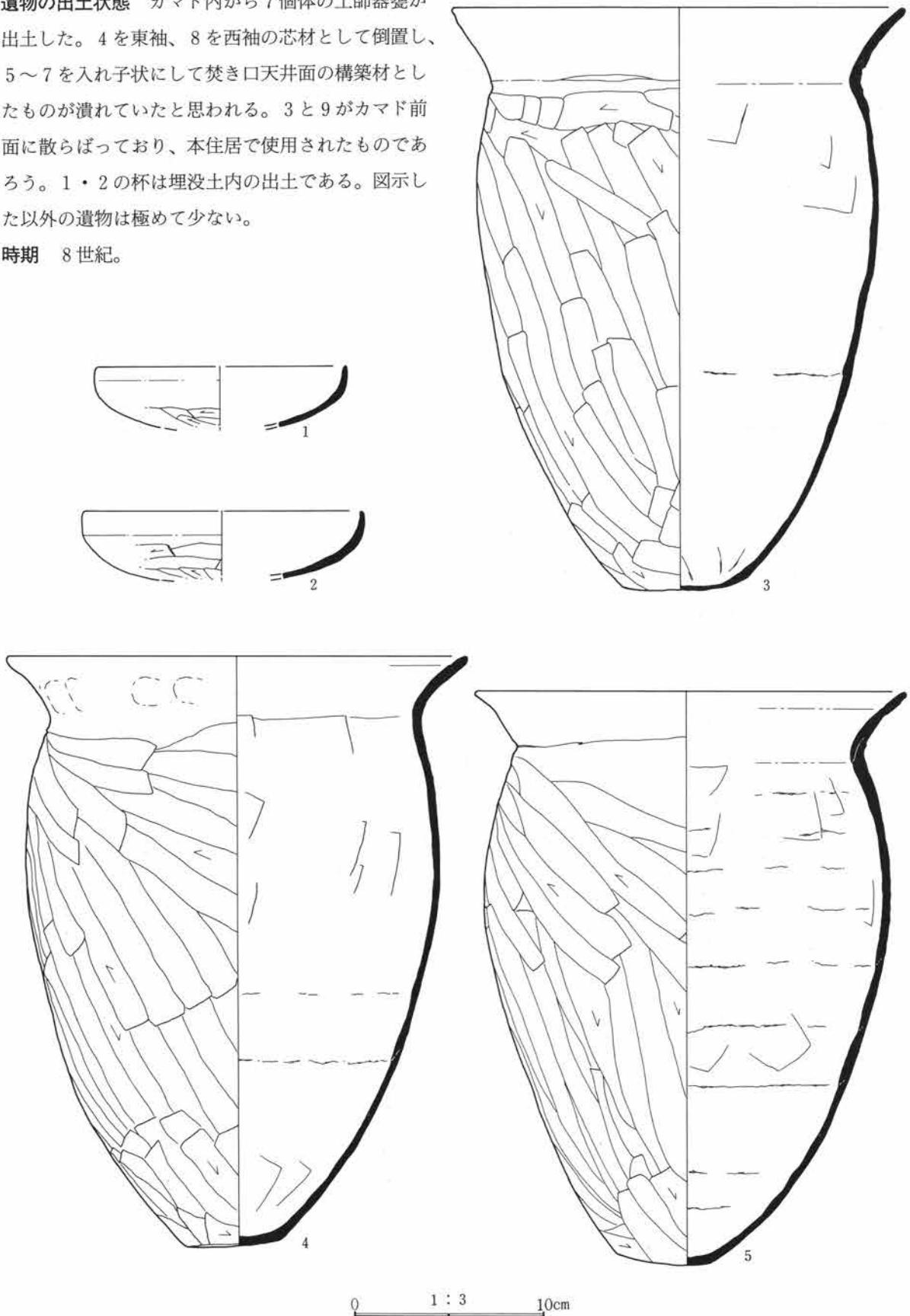
床 全体に軟弱で明瞭な床は壁同様にみつからなかった。掘り方も不明である。



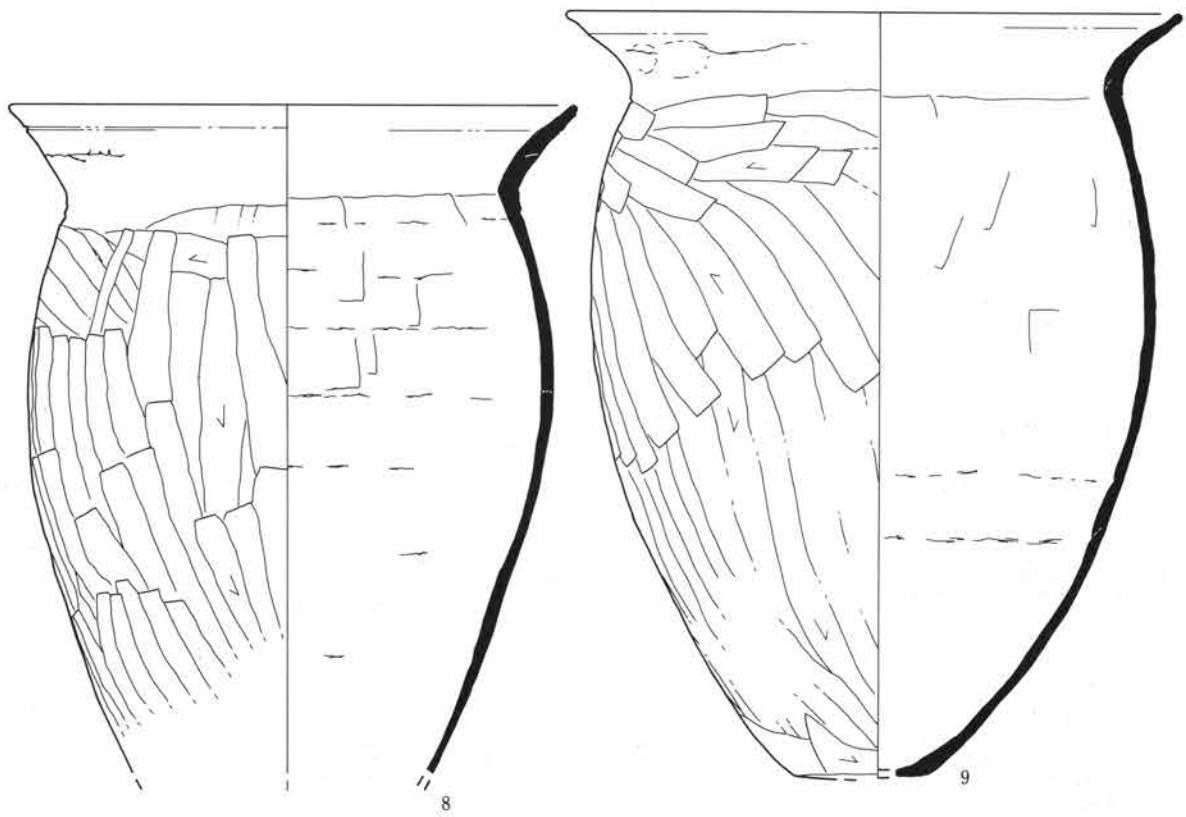
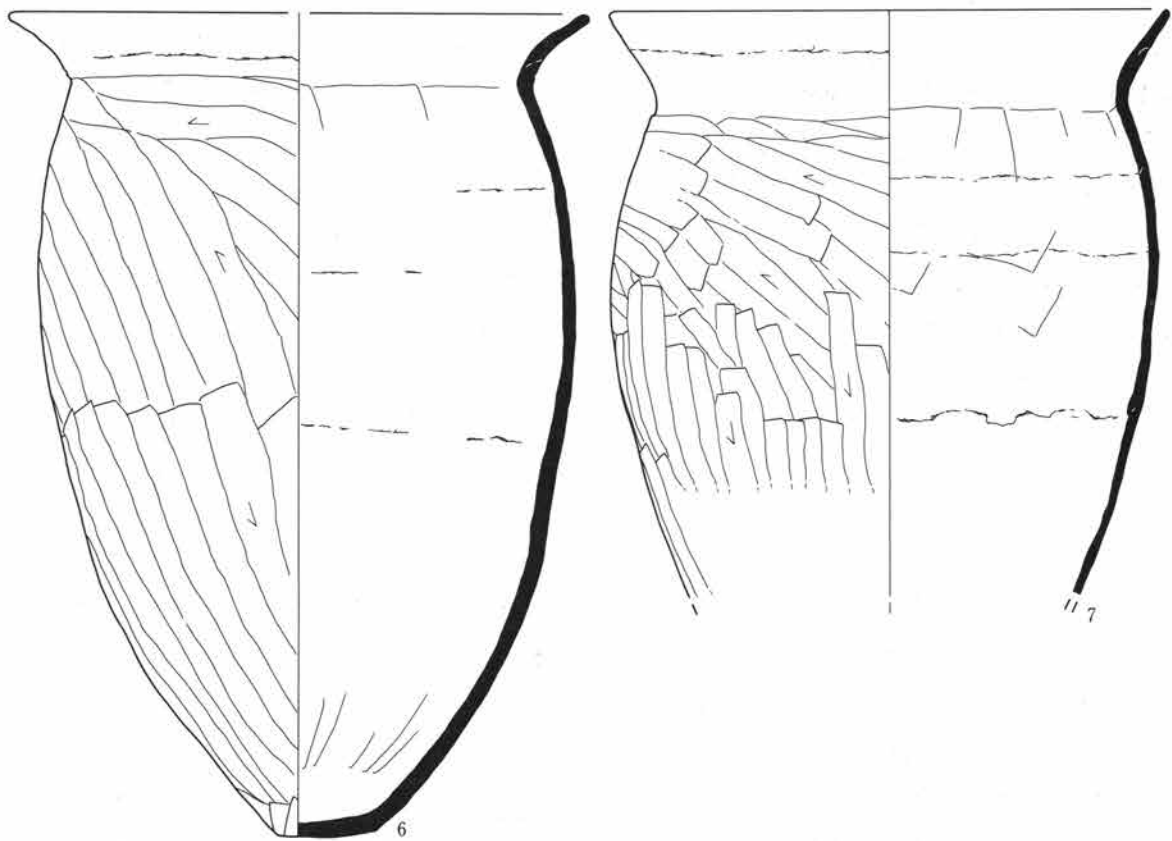
第72図 AY-36号住居および遺物出土状態

**遺物の出土状態** カマド内から7個体の土師器甕が出土した。4を東袖、8を西袖の芯材として倒置し、5～7を入れ子状にして焚き口天井面の構築材としたものが潰れていたと思われる。3と9がカマド前面に散らばっており、本住居で使用されたものであろう。1・2の杯は埋没土内の出土である。図示した以外の遺物は極めて少ない。

**時期** 8世紀。



第73図 AY-36号住居出土遺物 (1)



0 1 : 3 10cm

第74図 AY-36号住居出土遺物 (2)

AY-37号住居跡 (第75図 PL-9)

位置 E区x・y-17・18グリッド

主軸方向 N-100°-E 床面積 81.2m<sup>2</sup>

形態 カマド周辺が歪んでやや五角形に近いプランだが、各隅が整った美しい住居である。縦長長方形の範疇に含めて良いと思われる。

規模 北辺3.0m、南辺2.6m東・西辺2.7m。

壁 各辺とも垂直に近い立ち上がりで、残存壁高は12~18cmである。

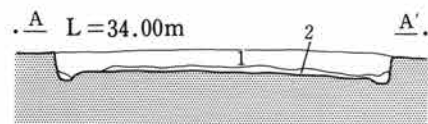
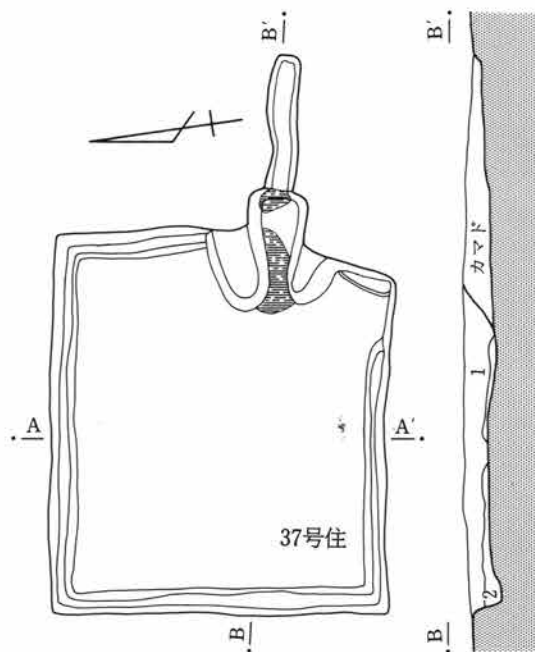
カマド 東辺中央南寄りにある。燃烧部は壁直下付近にあるが、縦長で複数の甕を掛けることができる。火床は住居床面より3cmほど低くなっている。煙道は長く、壁外へ150cmは張出している。袖部には暗褐色粘性土主体の構築材を使用している。

内部施設 深さ4~11cm、幅13~18cmの壁溝がカマド下と南辺東隅を除いて巡っている。

床 適度に踏み固められた良好な床で、所々に黒色土を埋め戻した僅かな貼り床が認められる。床面には多少凹凸があり、カマド前面と南壁下がやや低くなっている。

遺物の出土状態 遺物は極めて少なく、灰釉陶器碗の口縁小片1点が埋没土から出土しただけである。

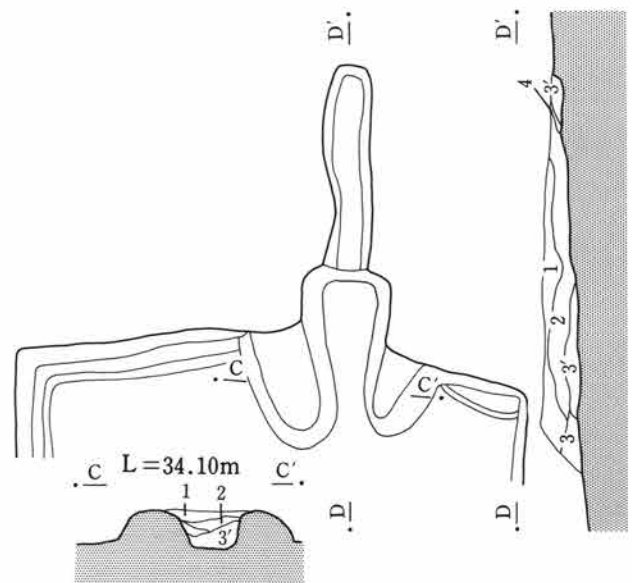
時期 不明。



0 1:60 2m

AY-37号住居カマド土層説明

- 1 灰(黄)褐色土層 住居の1層に同じ。
- 2 暗褐色土層 粒子の細かな粘性土層。焼土、カーボン散見。2'はカマド構築材である暗褐色粘性土の混入多い。
- 3 灰褐色土層 1に近いが灰の混入多い。3'は2との漸移層。
- 4 黒褐色土層 カーボン主体で灰の混入も多い。



0 1:40 2m

第75図 AY-37号住居およびカマド

AY-38号住居跡 (第76図 PL-9・16)

位置 F区g・h-22・23グリッド

重複 519号土坑に先出。34号溝と重複。

主軸方向 N-96°-E 床面積 13.7㎡

形態 南辺がやや開く台形気味であるが、各隅が整い、各辺も直線的な横長長方形を呈している。

規模 全辺の長さが異なる。北辺2.5m、南辺3.0m、西辺4.6m、東辺4.9m。

壁 各辺とも垂直に近い立ち上がりをしている。残存壁高は40cm~49cmある。

カマド 東辺南隅にある。燃焼部は壁直下付近にあ

り、縦長で複数の甕を掛けることができる。火床は住居床面より10cm低くなっている。煙道は緩やかに立ち上がって壁外へ130cm張出している。

内部施設 貯蔵穴と思われる外径60×50cm、深さ26cmのピットが南東隅壁直下にある。また、幅12~20cm、深さ4~9cmの壁溝がカマド下と貯蔵穴周辺を除いて巡っている。

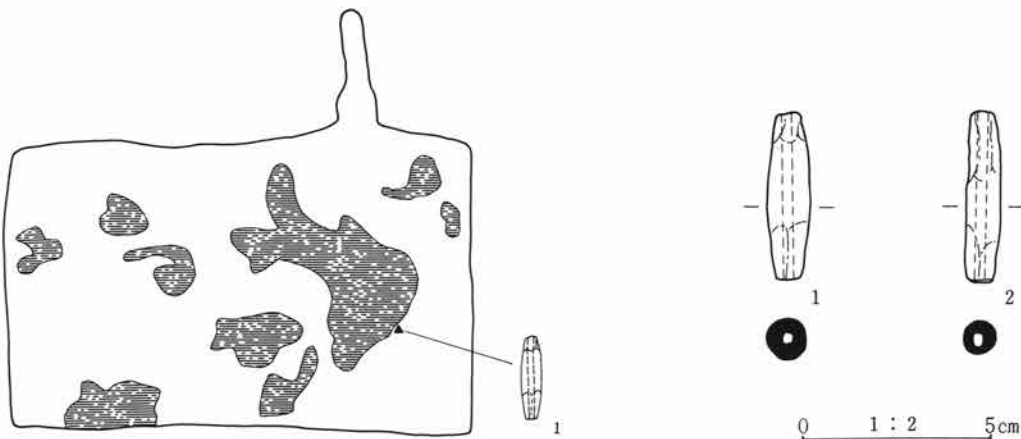
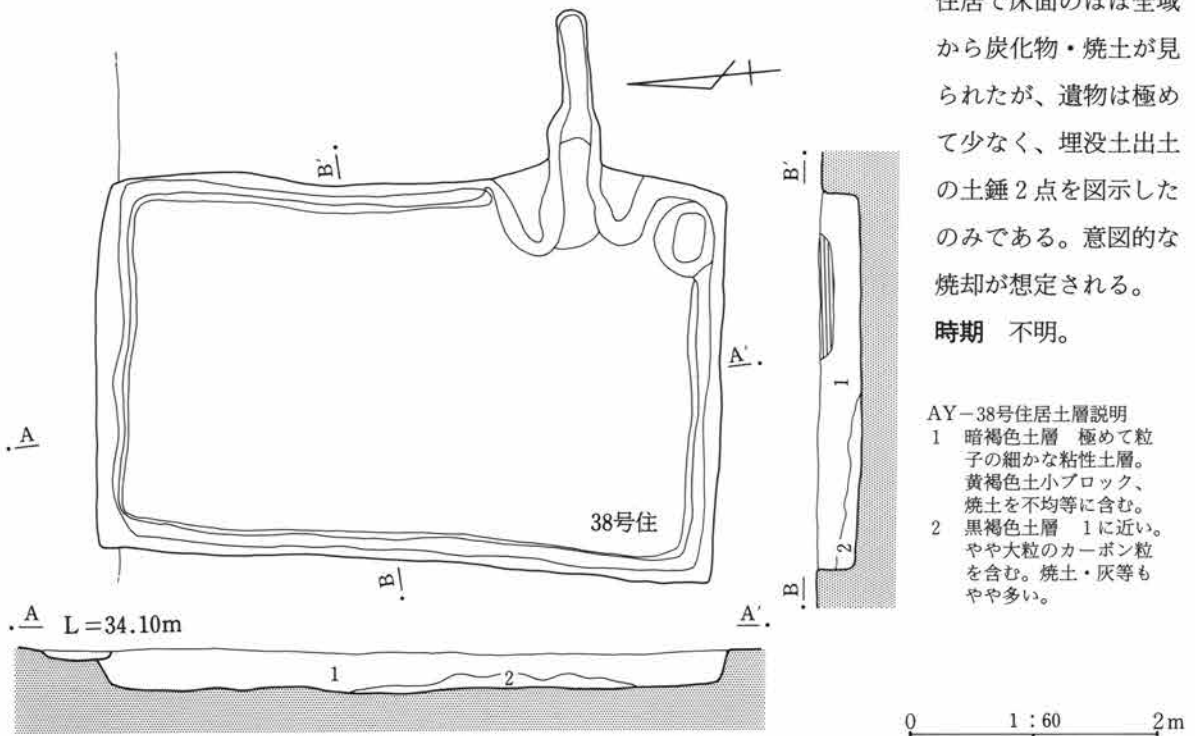
床 掘り下げ面をそのまま踏み固めた明瞭な床で、住居中央が高く、壁際と5~8cmの比高差があった。

遺物の出土状態 火災住居で床面のほぼ全域から炭化物・焼土が見られたが、遺物は極めて少なく、埋没土出土の土錘2点を図示したのみである。意図的な焼却が想定される。

時期 不明。

AY-38号住居土層説明

- 1 暗褐色土層 極めて粒子の細かな粘性土層。黄褐色土小ブロック、焼土を不均等に含む。
- 2 黒褐色土層 1に近い。やや大粒のカーボン粒を含む。焼土・灰等もやや多い。



第76図 AY-38号住居と灰分布図および出土遺物

AY-39号住居跡 (第77図 PL-9・16)

位置 F区h・i-21・22グリッド

重複 当初西側に張出しのある遺構を想定したが、床面のレベルが合わず、埋没土も若干異なるようで、土坑状の重複遺構が後出していると判明した。

主軸方向 N-105°-E 床面積 9.4m<sup>2</sup>

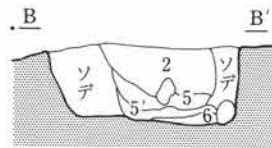
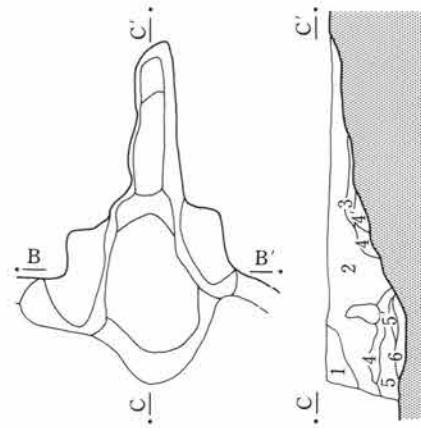
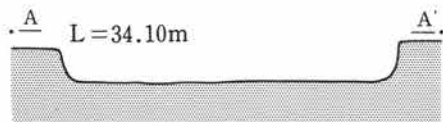
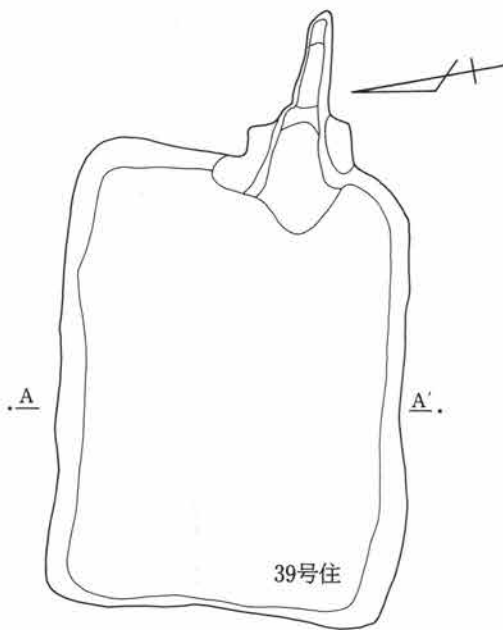
形態 北辺3.6m、南辺3.5m、東・西辺2.5mの縦長長方形を呈している。南東隅の歪みが大きく、プランは整っていない。

壁 直線的にやや開いて立ち上がっていた。壁高は40cm前後である。

カマド 東壁中央南寄りにある。燃烧部は壁直下であり、火床は住居床より5cm低くなっている。煙道は緩やかな階段状に立ち上がり、壁外へ120cm張出している。内側面は強い火熱を受けて硬化していた。

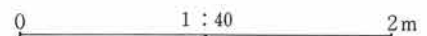
内部施設 カマド以外の諸施設は見られなかった。

床 細かな凹凸のある比較的踏み固められた明瞭な床であった。住居粗掘り時の凹凸を地山と同じ土で埋め戻す程度の、不明瞭で薄い貼り床があった。



AY-39号住居カマド土層説明

- 1 暗(黄)褐色土層 住居埋没土。
- 2 暗褐色土層 粒子の細かな粘性土層。黄褐色土粒・カーボン等を不均等に含む。
- 3 黒褐色土層 粒子の細かな非粘性土層。黄褐色土小ブロックを不均等にやや多量に含む。
- 4 灰褐色土層 やや粒子の粗い弱粘性土層。天井の崩落土か。焼土粒を散見する。4'には暗褐色土が混入する。
- 5 赤褐色土層 硬化した焼土層。5'にはカーボンも多い。
- 6 黒色土層 カーボン粒と黒色灰の混合層。
- 7 暗褐色土層 地山に近似した粘性土層。焼土・カーボン等を少量含む。カマド袖の芯材。



第77図 AY-39号住居およびカマド

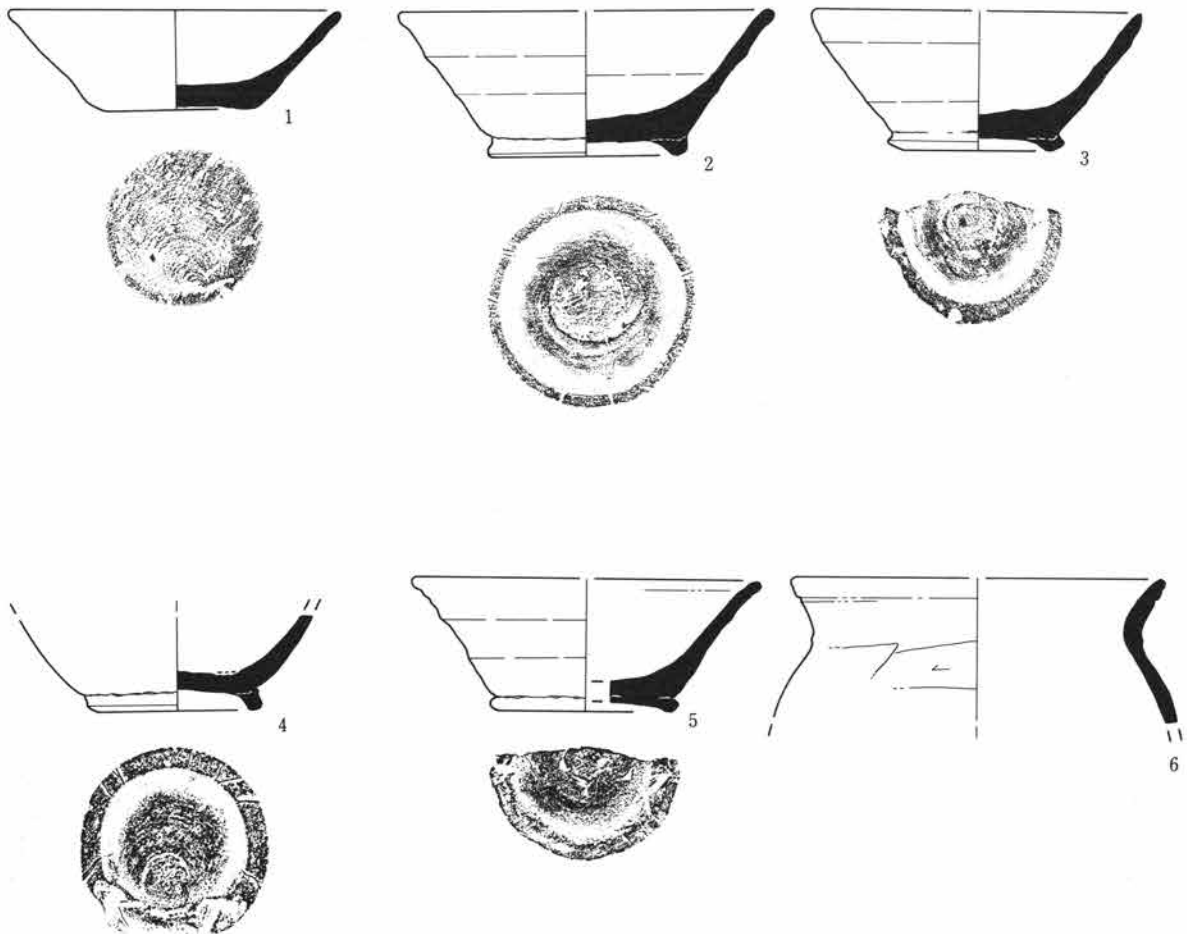
**遺物の出土状態** 出土遺物の総数は少なかったが、厚手の杯類を中心に6点を図示した。1・4の須恵器碗は北壁直下床直上、2はカマド内、3は住居中央の床上15cm、5・6の碗と甕は埋没土内の出土遺物である。

図示した以外には30片の出土しかなく、杯類・甕類ほぼ半数である。杯類には比較的大破片が多い。

甕類はすべて胴部破片であった。

住居の全域に散らばるような出土状態で、特に甕類がカマド内や周辺から出土していないことが特徴であった。

**時期** 10世紀。



0 1 : 3 10cm

第78図 AY-39号住居出土遺物

AK-1号住居跡 (第79図 PL-17)

位置 I区v・w-1・2グリッド

主軸方向 N-93°-E 床面積 12,56㎡

形態 南・北辺4,0m、東辺2,8m、西辺3,1mで、隅の整った縦長長方形を呈している。

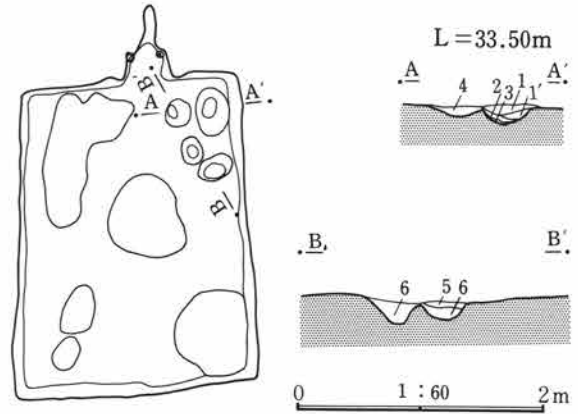
壁 残存壁高は15~31cmで、垂直に近い立ち上がりをしている。

カマド 東壁中央やや南寄りにある。燃焼部は壁外にあり、火床は住居床面より5cmほど高くなっている。両袖基部には河原石を据えてある。燃焼部奥の両隅では火床下の小ピットを検出している。また支脚にも河原石を使用していた。煙道部は燃焼部奥から段を作って壁外へ95cm張出している。

内部施設 掘り方調査時に南東隅でピット状の落ち込みを確認した。古い時期の竪穴住居であれば貯蔵穴のある位置だが、いずれも浅いもので、住居の掘り方と区別できなかった。

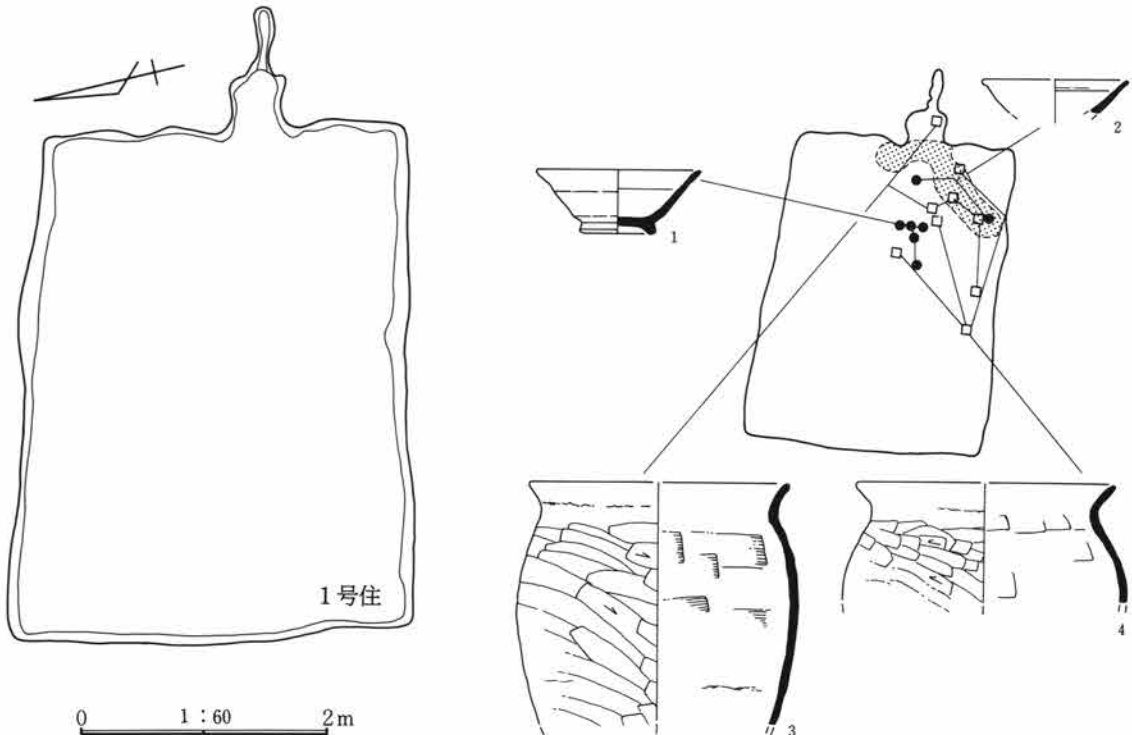
床 凹凸の大きな床で、住居中央が壁際より5cm前後低くなっていた。また、カマド前面にある炭化物粒・焼土、灰の散布範囲を図示した。

掘り方 小ピットを重ねたような深さ5~20cmほどの掘り方を、南東隅付近で確認した。



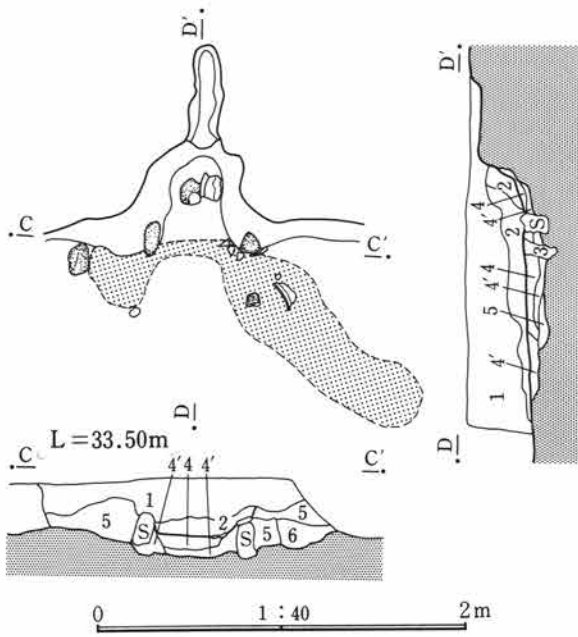
AK-1号住居床下ピット土層説明

- 1 褐色土層 ややしまりある非粘性土で、焼土・カーボンを少量含む。1'ではカーボン多い。
- 2 暗黄褐色土層 ややしまりに欠ける非粘性土でカーボンの混入多く、下層では灰が多くなる。
- 3 灰褐色土層 地山粘性土と2層土の混合土層。
- 4 暗褐色土層 暗褐色土と地山粘性土小ブロックの混合土層。
- 5 暗褐色土層 カマド埋没土と似た、焼土・灰・カーボン等を多量に含む層
- 6 褐色土層 住居掘り方埋没土に同じ。地山のシルト質土をブロック状に含み、焼土を散見する。



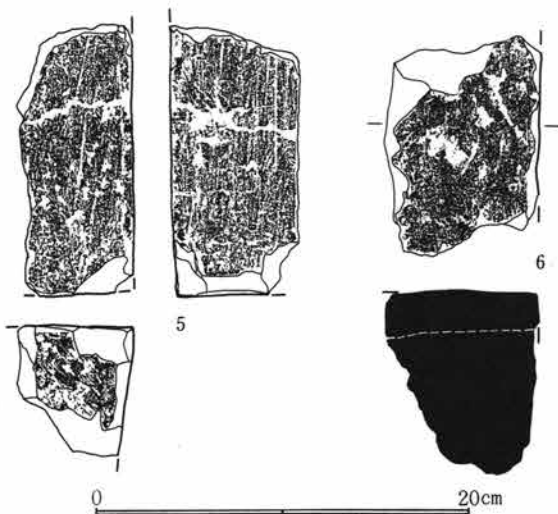
第79図 AK-1号住居および遺物出土状態





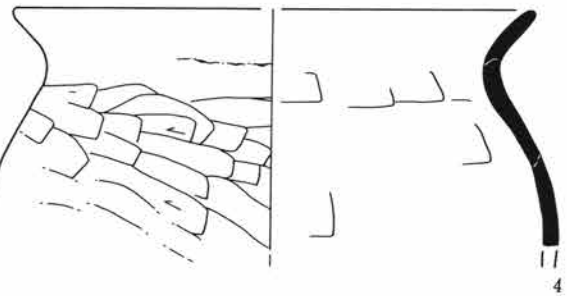
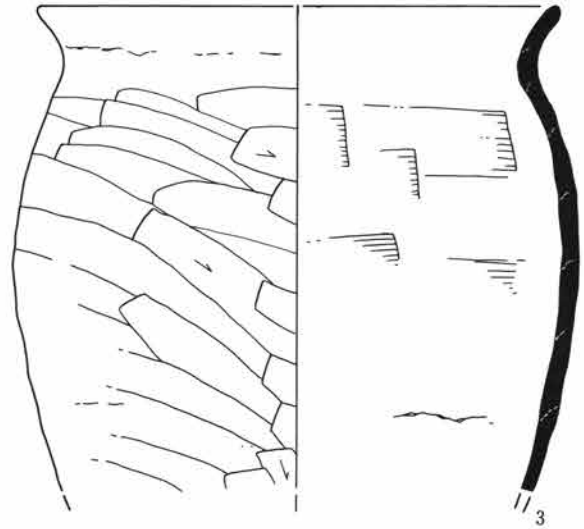
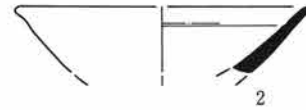
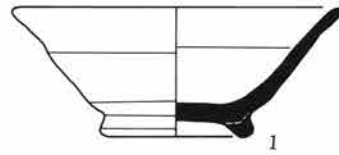
AK-1号住居カマド土層説明

- 1 暗黄褐色土層 しまりの強い非粘性土で、住居埋没土に同じ。
- 2 暗黄褐色土層 ややしまりの強い弱粘性土層で、焼土粒・カーボン粒等を含む。2'は天井や壁の崩落土らしい焼土ブロックがまじる。
- 3 暗褐色土層 支脚を抜いた痕らしいしまりに欠ける層。
- 4 暗赤褐色土層 直上に灰層が確認できる火床面。下層ではやしまりに欠ける。4'では灰の混入多く、カマド再構築時に壊された1次火床面の可能性のある層。
- 5 暗黄褐色土層 しまりの強い土層でカマド袖構築材と思われる。焼土粒散見するがカーボン粒は含まない。5'は地山との区別難しい。
- 6 暗褐色土層 カマド掘り方時の小ピットの1つか。やや大粒のカーボン粒を含む。



遺物の出土状態 カマド前面から南壁付近に偏って出土しており、そのうち6点を図示した。土器はいずれも床直上出土であるが、カマドから床面に流れ込んだような状態であった。3・4の甕は広く散っていたものを接合した。1・2は上層の出土で、本住居に確実に伴う遺物とは決められない。図示した以外に約50片の破片がある。杯類は8片で大破片が含まれる。甕類は厚手の胴部破片のみであった。

時期 10世紀。



第80図 AK-1号住居カマドおよび出土遺物

AK-2号住居跡 (第81図 PL-17)

位置 I区t・u-4・5グリッド

主軸方向 N-115°-W (カマド)

N-92°-W (東壁)

床面積 11,55m<sup>2</sup>

形態 北辺2,6m、南辺2,9m、東・西辺3,6mの歪んだ横長方形を呈している。特に東辺はカマドを挟んで食い違っていた。

壁 遺存状態はやや悪く、残存壁高は6~25cm程で、立ち上がりも緩やかになっている。

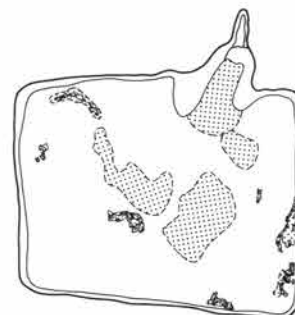
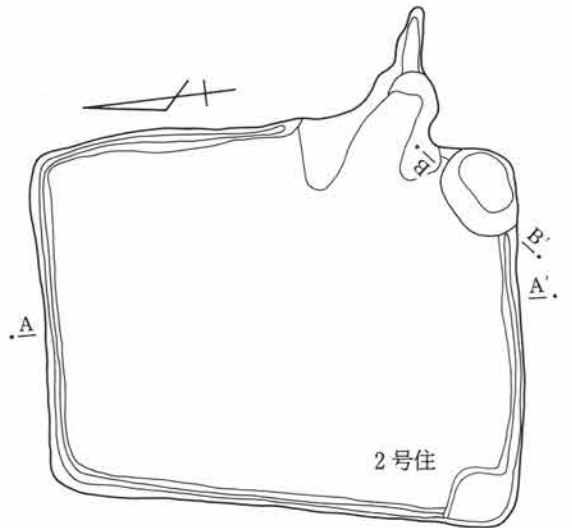
カマド 東壁南隅にある。燃焼部は壁外にあり、煙道は燃焼部から段を作って立ち上がり壁外へ85cm張出している。火床は住居床面より5cm低い。掘り上がりの状態では、燃焼部・袖とも軸方向が東壁の直行方向から大きく南へ傾いているが、対面の西壁とは直行に近づく。両袖基部に河原石を据えてある。支脚と思われる礫が燃焼部中央から外れた北隅に据えてあり、傾いたカマド同様の齟齬となっている。

内部施設 南東隅壁直下に床面からの深さ34cmの貯蔵穴状のピットがある。南西隅にも深さ5cmの不明瞭な落ち込みがある。また、壁溝がカマド下やピット周辺を除いて巡っている。幅は10cm前後で、整っており、深さは3~7cmである。

床 掘り下げ面をそのまま床としているが、踏み固めは弱く、あまり明瞭な床ではなかった。火災住居と思われ、炭化物や焼土・黒色灰が住居床面直上全域に見られた。

遺物の出土状態 床面中央からカマド前面にかけて散らばるようにして出土し、甕類を中心に5点を図示した。図示した以外には約120片の破片が出土している。杯類は15片で土師器は含まれていない。甕類はすべて厚手で、土釜状の口縁が目立った。

時期 10世紀。



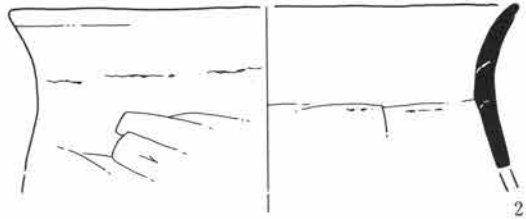
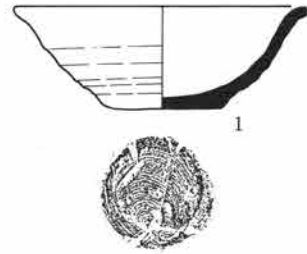
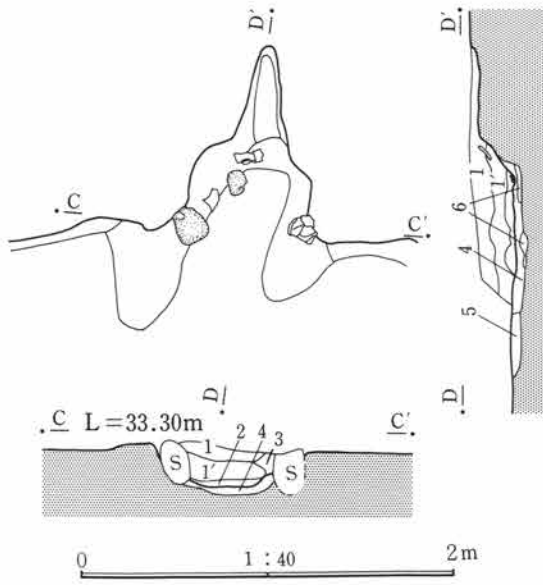
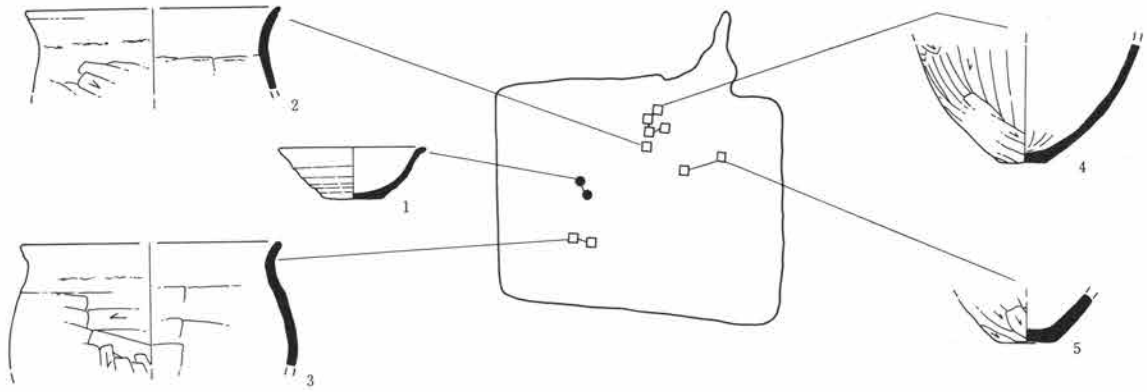
AK-2号住居土層説明

- 1 暗(黄)褐色土層 粒子の粗い非粘性土。やや大粒のカーボン・パミスを霜降り状に含んでいる。
- 2 暗褐色土層 しまりの強い非粘性土で、パミスを少量含んでいる。2'には焼土・カーボン粒散見。地山土をブロック状に含んでいる。



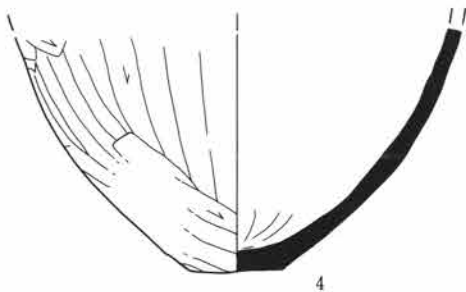
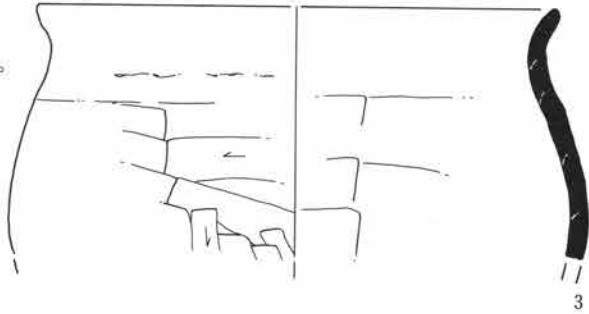
0 1:60 2m

第81図 AK-2号住居および焼土分布図



AK-2号住居カマド土層説明

- 1 暗褐色土層 しまりの強い非粘性土で住居埋没土の同じ。I'は焼土粒・カーボン粒を少量含む。
- 2 暗赤褐色土層 焼土小ブロック・カーボン粒等を多量に含む、しまりにかける層。
- 3 暗黄褐色土層 地山のシルト質土主体の袖構築材でしまり強い。被熱していない。
- 4 黒色土層 カーボン・黒色灰主体の火床下土。焼土散見。
- 5 暗灰褐色土層 黒色灰主体の火床下土。
- 6 焼土ブロック。



0 1:3 10cm

第82図 AK-2号住居遺物出土状態および出土遺物

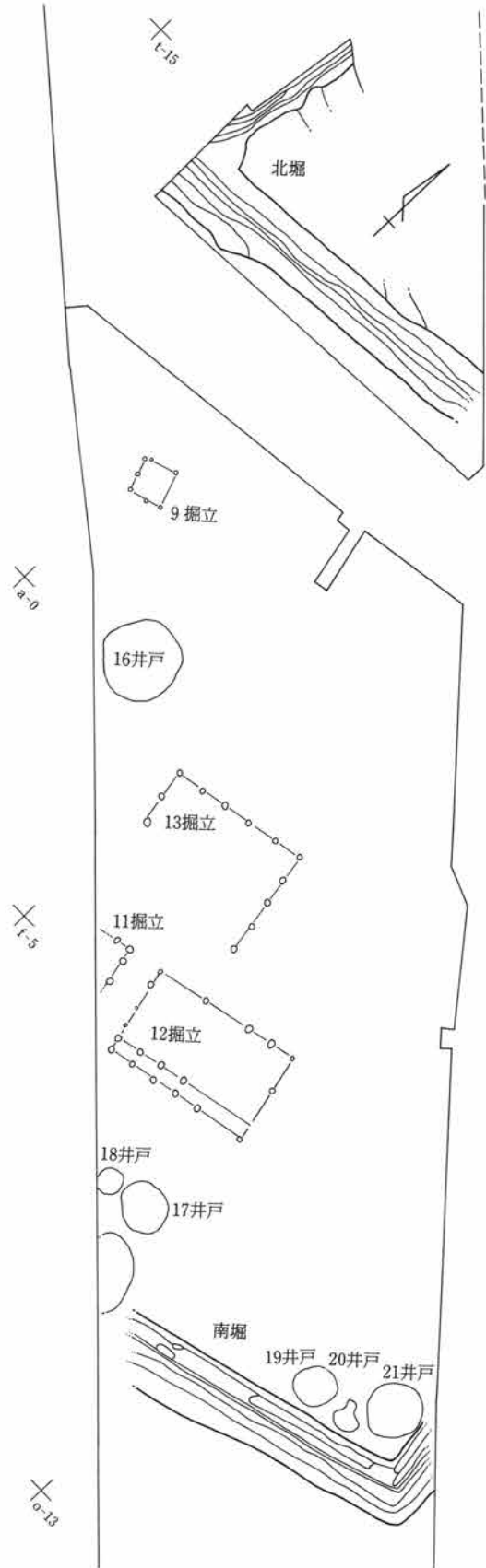
## 2 中世館跡

安養寺森西遺跡D区-9ラインを中心に、L字状の屈曲する溝（南堀）と、堀の区画の内部から大型掘立柱建物群や井戸を発見し、中世館跡の一部と想定したが、後にC区-16ラインを中心にさらに大規模な溝（北堀）が見つかった。この堀の東側延長部分は明王院山門前に東西方向につながる道路の北側で、道路に平行して現地形が約200mの長さで僅かに窪んでいることがわかった。

これらの資料を持って城館跡研究者の故山崎一氏をお訪ねしたところ、即座に明王院を中心とする南側に広い台形状を呈した「方二丁」の縄張図（未発表）を提示して頂いた。

その後、尾島町誌編纂室から近世の絵図（404頁・361図）の存在の御教示を受け、近世まで堀割が残存していたことと、南堀の区画も館に伴うらしいことが判った（下図左・破線部分）。

なお、昭和63年7月に実施した現地説明会の資料を、右図のように修正したい。



第83図 館跡想定図および館配置図

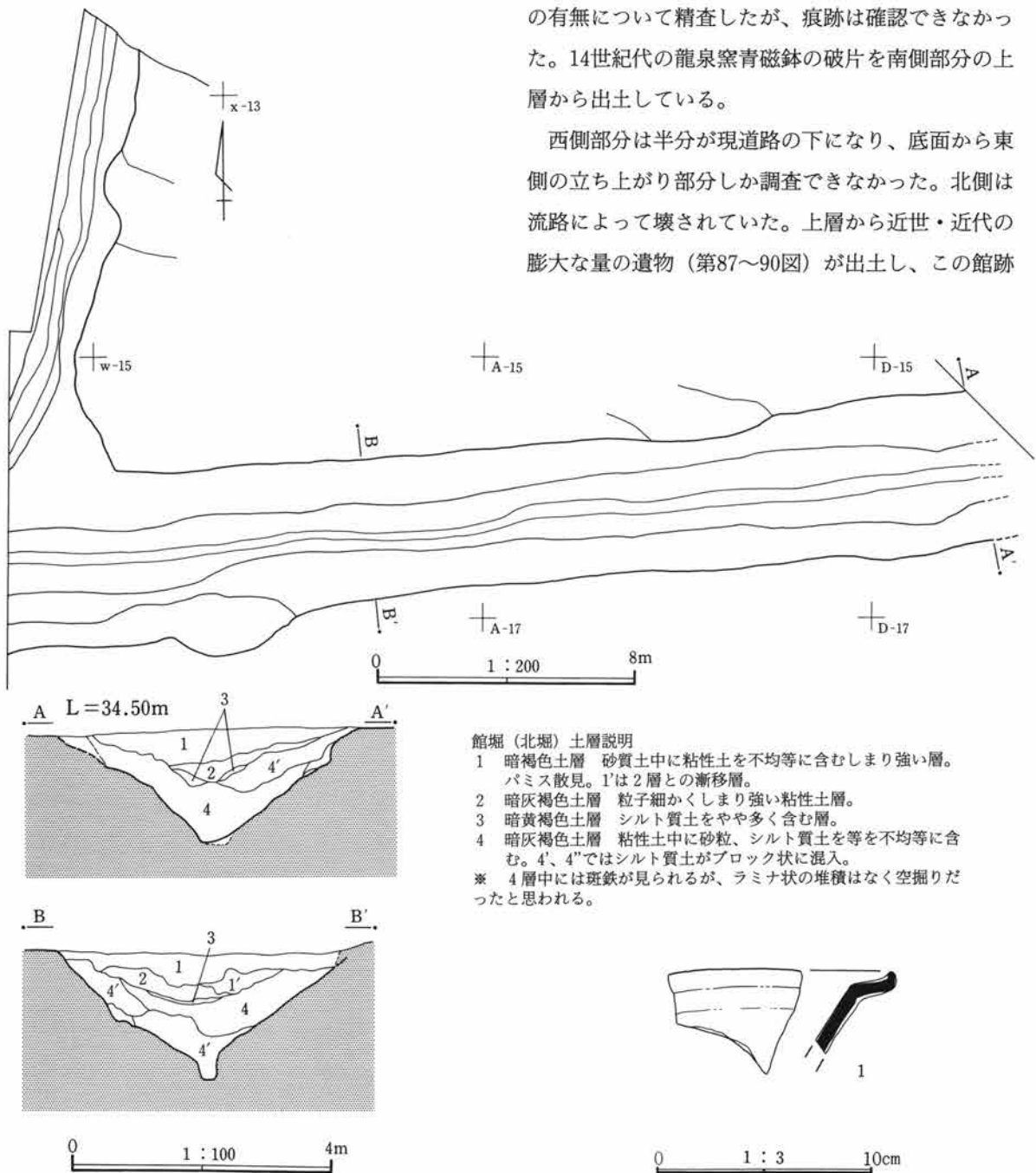
館堀（北堀）（第84図 PL-18・19）

上面幅5,6~4,2、深さ2,1mの、本遺跡群で際だつ規模の堀である。当初w-15杭付近で多量の近代遺物の出土した西側の溝を別溝と推定したため、南堀を併せて方3/4丁の館区画の北側を造る堀と考えたため、館跡の全容を把握するのが遅れたが、前記のような助言を得て、この堀は方二丁の区画の南西

隅と判明した。

北堀の南側部分は調査範囲で全長30m、走向N-86°-Eである。掘り込みは中段に明瞭な稜を持たず、底部付近のみ深さ10~30cmの2重の底面があり、断面葉研状となっている。土層断面の観察からは、2重底の原因を掘り直しによるものとする痕跡は不明である。調査範囲の東隅のA-A'断面付近で土塁の有無について精査したが、痕跡は確認できなかった。14世紀代の龍泉窯青磁鉢の破片を南側部分の上層から出土している。

西側部分は半分が現道路の下になり、底面から東側の立ち上がり部分しか調査できなかった。北側は流路によって壊されていた。上層から近世・近代の膨大な量の遺物（第87~90図）が出土し、この館跡



館堀（北堀）土層説明

- 1 暗褐色土層 砂質土中に粘性土を不均等に含むしり強い層。パミス散見。1'は2層との漸移層。
  - 2 暗灰褐色土層 粒子細かくしり強い粘性土層。
  - 3 暗黄褐色土層 シルト質土をやや多く含む層。
  - 4 暗灰褐色土層 粘性土中に砂粒、シルト質土等を不均等に含む。4'、4''ではシルト質土がブロック状に混入。
- ※ 4層中には斑鉄が見られるが、ラミナ状の堆積はなく空掘りだったと思われる。

第84図 館堀(北堀)と出土遺物

が近年まで窪地状になっていたことが窺える。発掘調査で確認できた範囲では、長さ14m、走向N-12°-Eで、南隅は西側へ開いている。中層以下からの遺物の出土は殆どなかった。

南側部分と北側部分の交わる地点は現道路の下になり、調査できなかったが、両部分の底面は同レベルにあり、同時存在を想定するのに齟齬は生じない。推定70度前後の鋭角で両部分が交わるものと思われる。

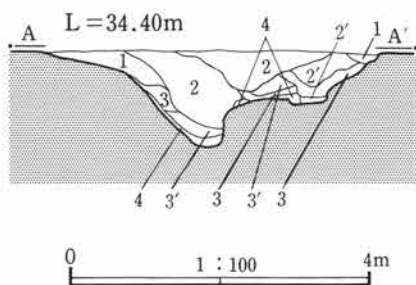
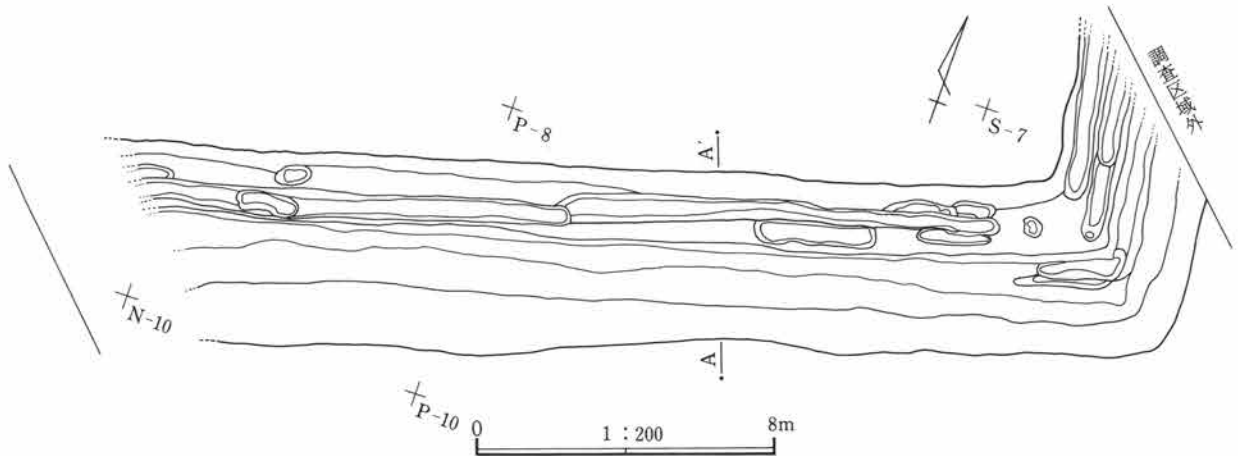
り直しの結果、広がったものと判明した。調査区の両端で堀上面の土層断面の精査を行ったが、土塁の痕跡は認められなかった。

南堀は底部付近の平面で幅40cm前後の細長い掘り込みの重複が確認でき、部分的な掘り直しが繰り返されたことが判る。

調査範囲内での規模は、南側部分で長さ28m、走向N-75°-E、東側部分で長さ9m、走向N-9°-Wである。

館堀（南側）（第85・86図 PL-18・19）

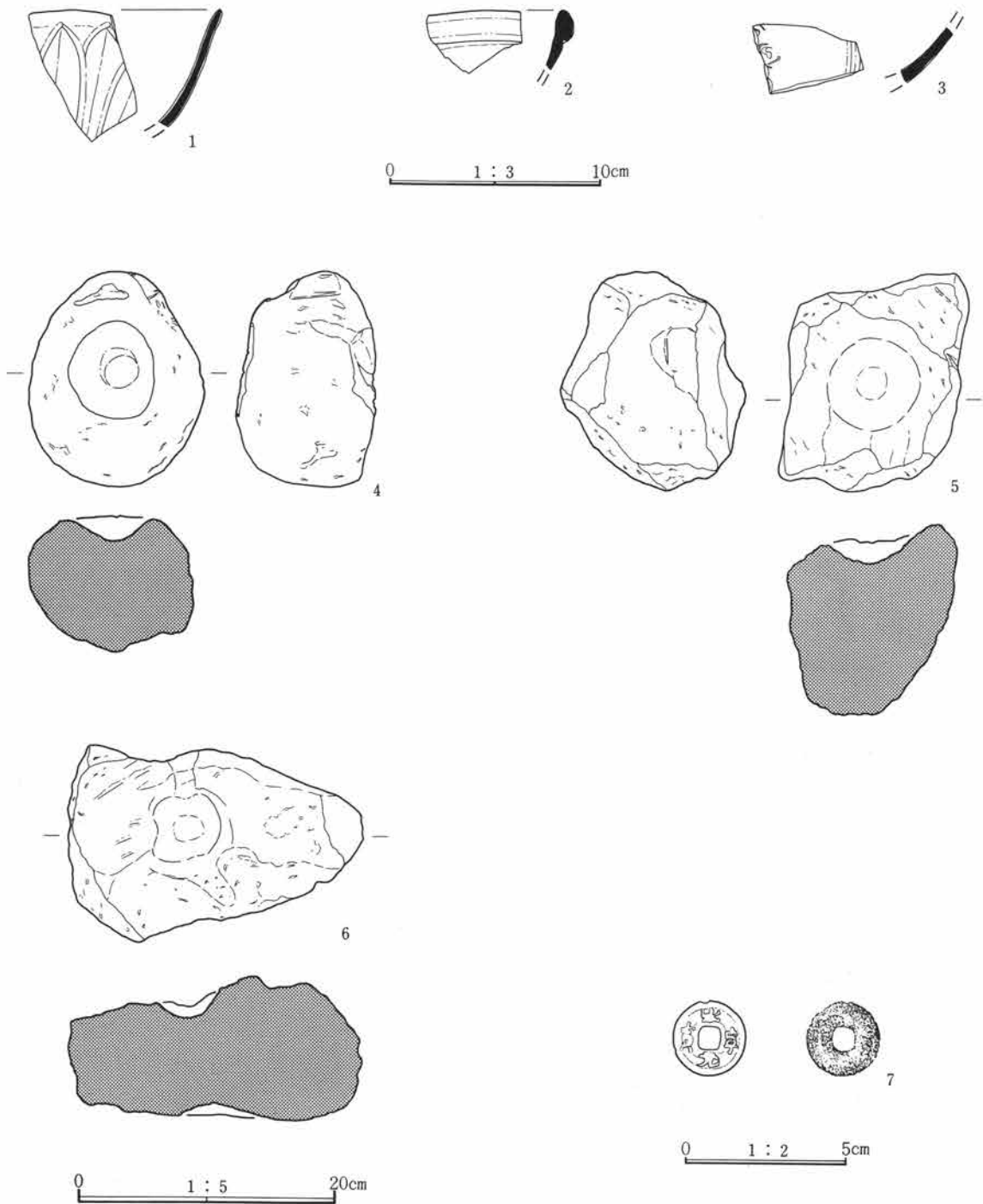
遺構確認段階で上面幅5.1mという規模の大きな堀であった。南東隅の直角に近い屈曲部分までが確認できた。この堀の北側と西側のそれぞれの延長線は小字の境界となっており、当初より館の一画と想定していた。堀断面の調査から、上面幅は数次の掘



館堀（南堀）土層説明

- 1 暗黄褐色土層 シルト質土を含む。
- 2 暗褐色土層 シルト質土粒を若干含む強い層。2'は混入物やや多い。
- 3 黒褐色土層 混入物の少ないやや腐植土質の層。3'はシルト質土小ブロックを少量含む。
- 4 暗黄褐色土層 黄色味をおびるシルト質土中心の粘性土層。

第85図 館堀（南堀）



第86図 館堀(南堀)出土遺物

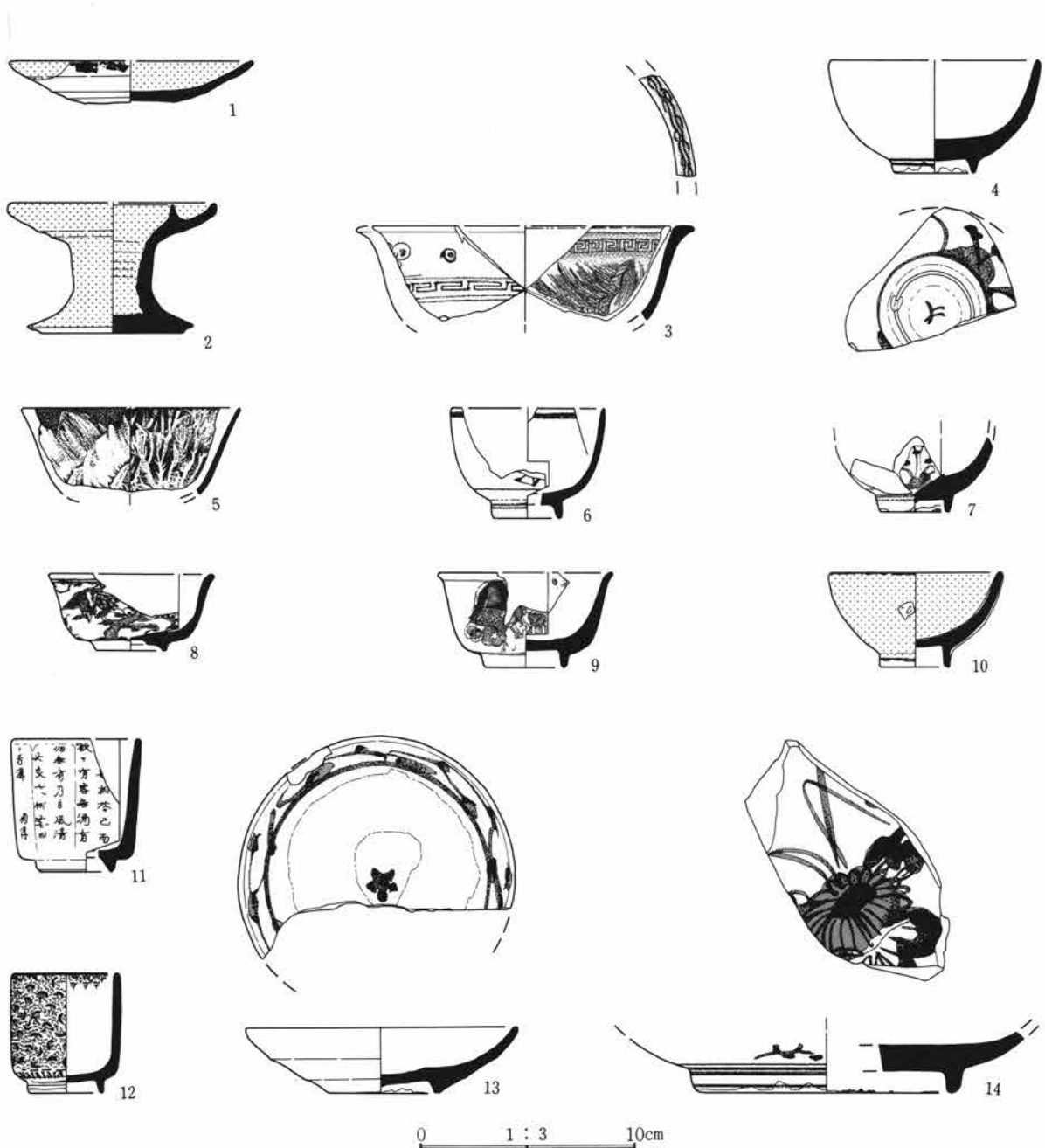
図示できた出土遺物には舶載磁器破片3点と、凹石状の不明軽石製品3点、北宋銭1枚がある。古銭はX線写真を元に「熙寧元寶」と判読した。図示した以外にも径5～30cm大の軽石類が底面直上から河

原石とともに100点以上出土している。埋没土内からは常滑甕や板碑の小破片が土師器・須恵器の混入品とともに若干出土している。この他に上層からは獣骨の出土もある。

北堀上層の近世・近代遺物（第87～90図 PL-19）

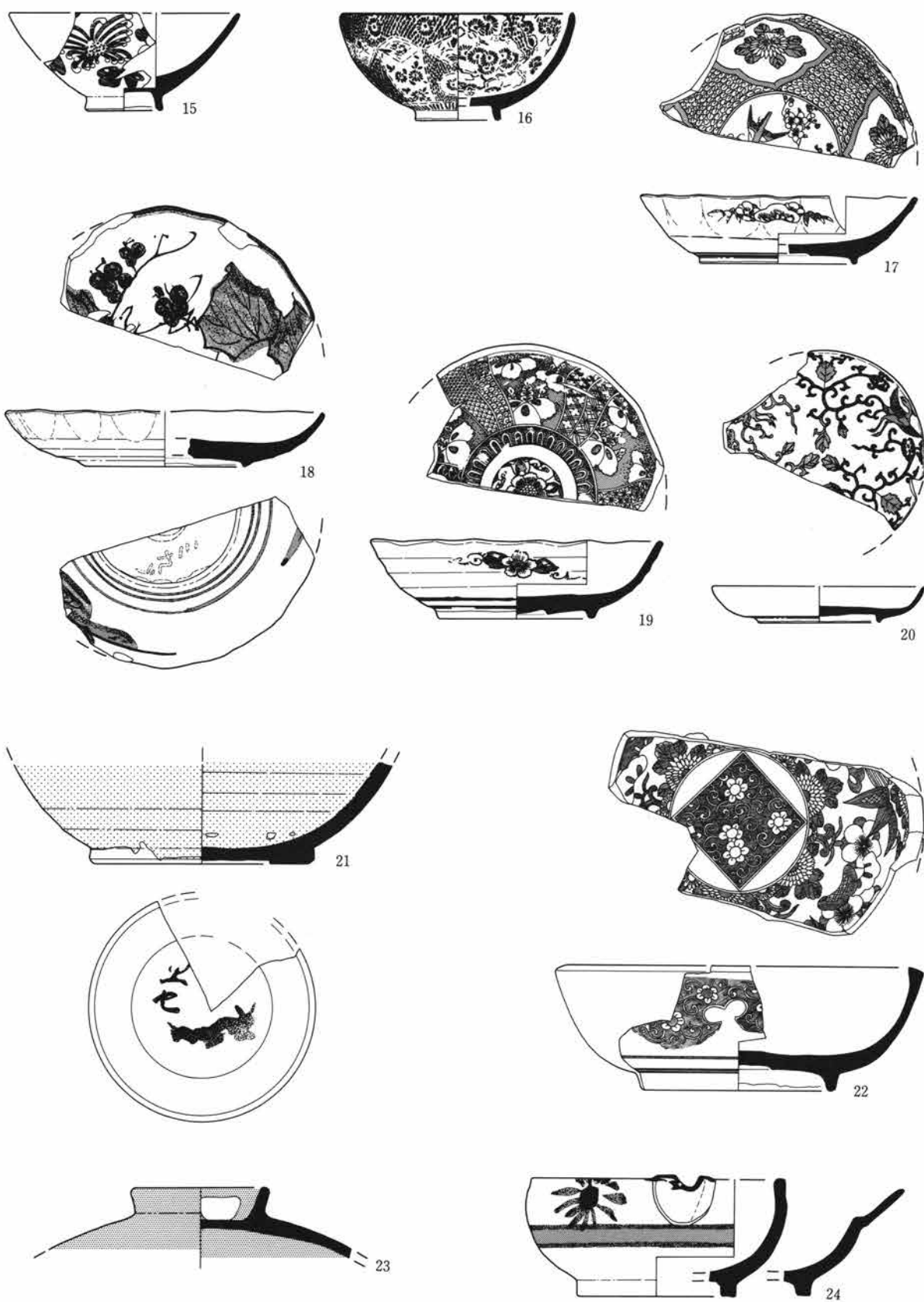
方二丁の館区画（第84図）の南西隅からやや北寄り、D区x-15グリッド付近から、近世・近代の陶磁器と軟質陶器を中心に多量の遺物を出土している。遺物の時期は最も新しいものは大正・昭和期まで下る。遺物は総量で重量約80kgにおよぶ。堀の最上層からの出土で、中世館跡とは直接結びつかない遺物

なので、この項に代表的なものを示した。陶磁器に重点を置いて図示したため、実際の出土傾向とは異なる内容となった。出土量の最も多いのは軟質陶器類で、鍋・焙烙の他にコンロの破片等もある。陶磁器類も印判に代表される明治期以降のものが中心である。この時期の瓦の量も多く、重量で19kgあった。

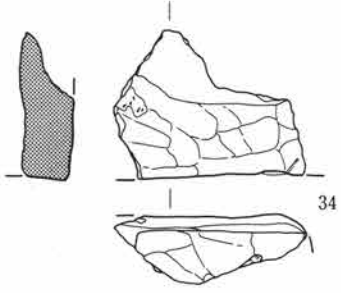
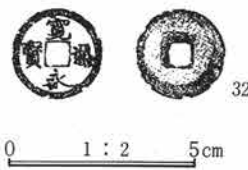
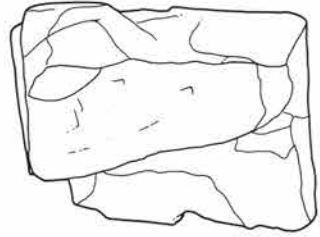
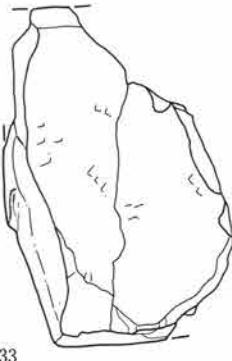
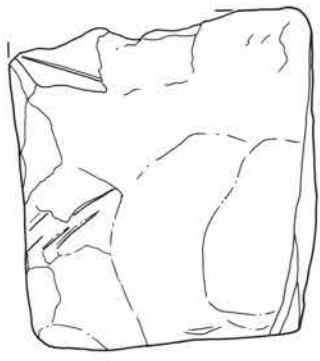
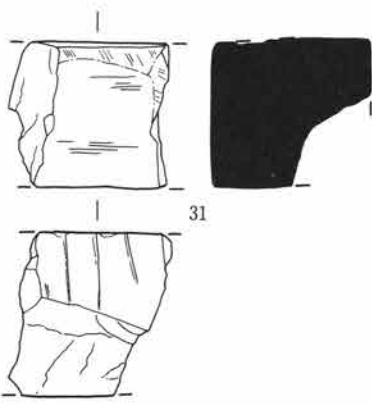
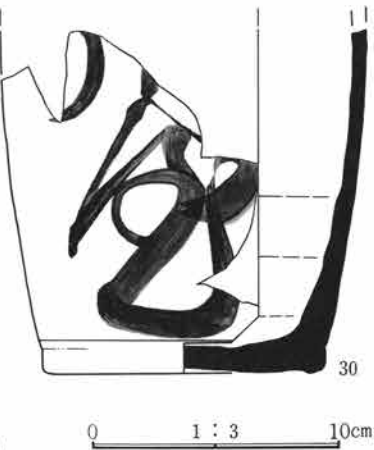
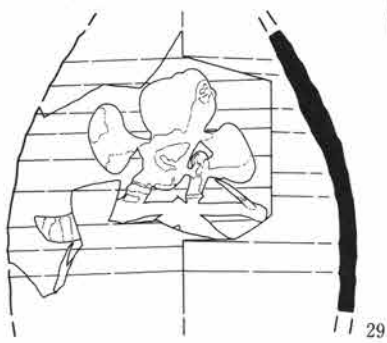
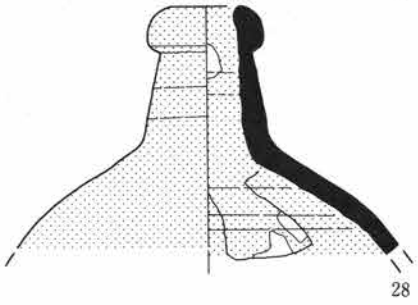
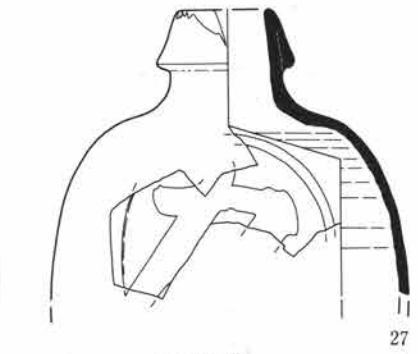
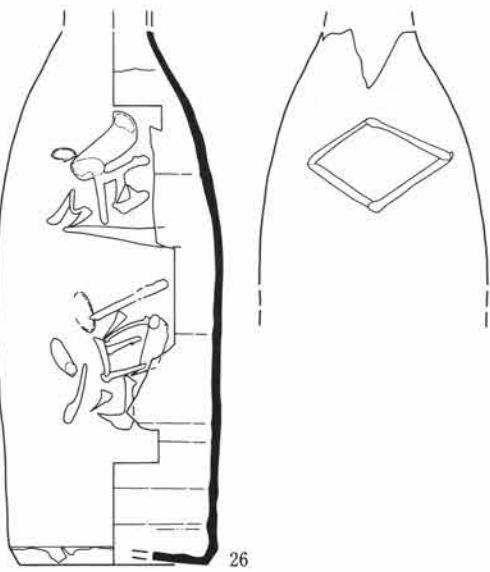
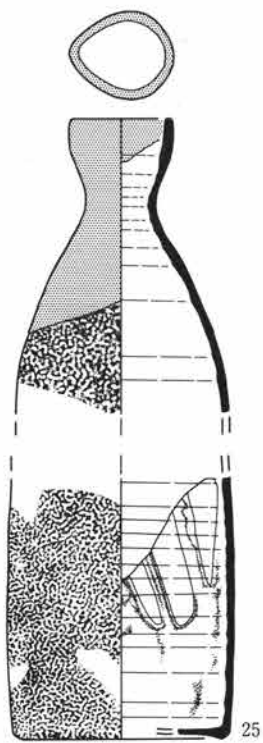


第87図 館堀の堀上の近代遺物（1）



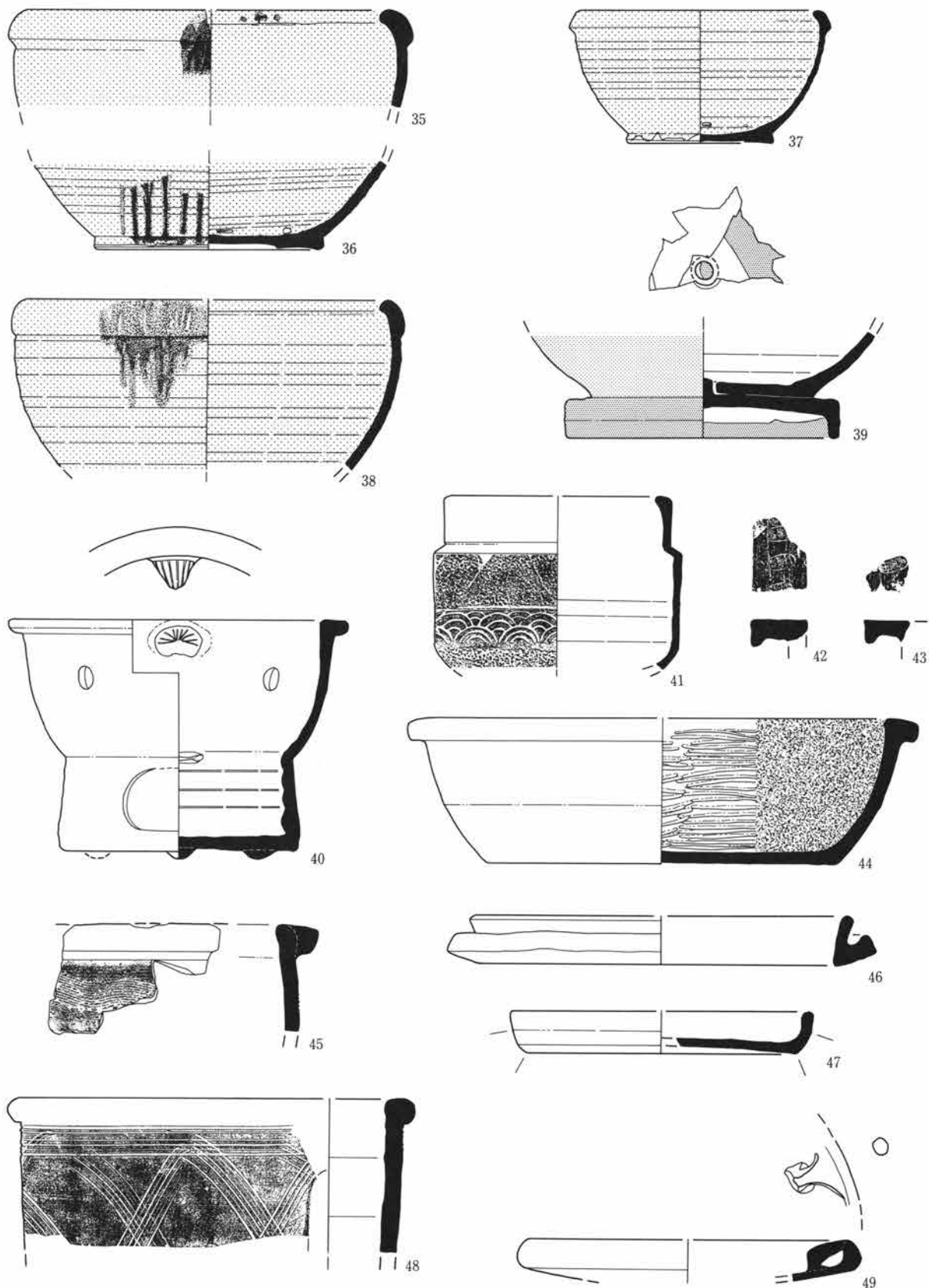


第88図 館堀の堀上の近代遺物 (2)



0 1 : 5 20cm

第89図 館堀の堀上の近代遺物 (3)



0 1 : 5 20cm

第90図 館堀の堀上の近代遺物 (4)

### 3 掘立柱建物

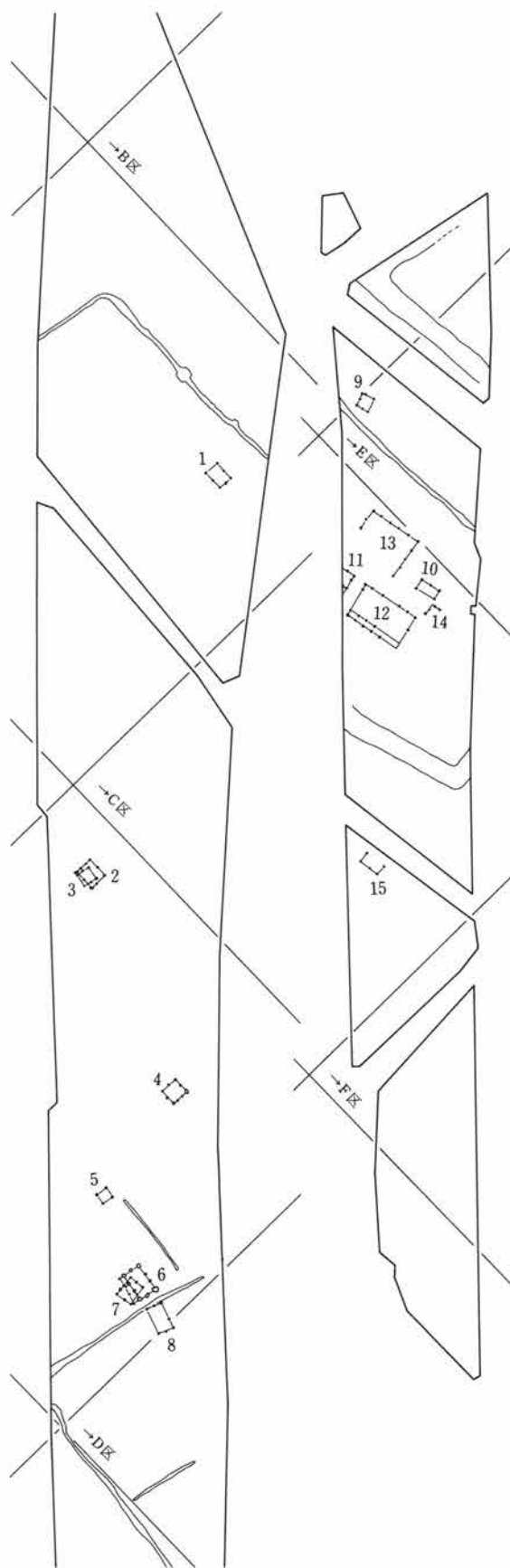
古墳時代の氾濫層上から、安養寺森西遺跡で15棟、大館馬場遺跡で6棟、阿久津宮内遺跡で2棟、合計23棟の掘立柱建物を調査した。7世紀以降の竪穴住居数41軒、井戸58基などの遺構数や、古代から近世まで長い時期の遺物が採取されることを勘案すると、建物の数はやや少なく感じられる。柱穴状のピットは多数調査されており、攪乱や後世遺構に壊されて全容の判らない建物がその他にも存在すると思われる。

掘立柱建物では確実な遺物を伴うものではなく、時期を決定できない。規模では2×2間、2×1間の小型の建物が大半である。掘立柱建物の配置は、安養寺森西遺跡を第91図に、大館馬場遺跡・阿久津宮内遺跡を第110図に示した。

安養寺森西遺跡ではC区とE区にやや集中して建物が分布している。C区は竪穴住居の多い一角であり、6号掘立柱建物は企画性のある古代の遺構と考えても齟齬はない。

E区の方3/4丁区画内（南堀区画内）には中世館跡に伴うと思われる大形建物群があり、11～13号の建物は配置から同時存在と考えられる。14号建物は一部だけの調査で不確定だが、柱穴内に11・12号建物同様の礎石状の礫が据えられている。

掘立柱建物間で重複があるのは本遺跡群中でも安養寺森西遺跡の2・3号間と6・7号間の2例のみである。そして安養寺森西遺跡からは総柱の建物は見つかっていない。



第91図 安養寺森西遺跡掘立柱建物配置図

AY-1号掘立柱建物 (第92図 PL-20)

位置 B区q・r-7・8グリッド 他の建物からは北西に大きく離れた位置にある。

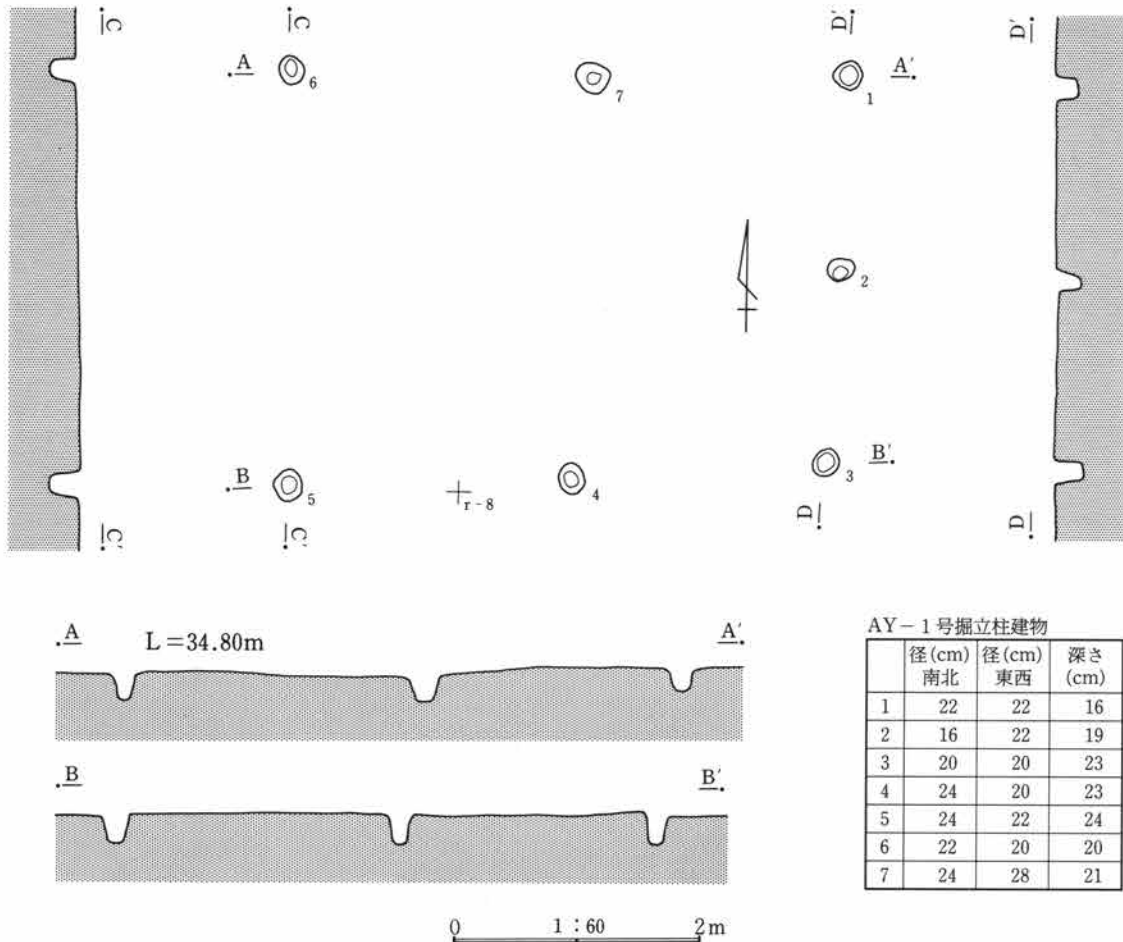
規模 桁行3,25m (西側) × 梁行4,45m (北側)

軸方向 N-1°-W

備考 砂質の軟弱な地山に黒色味の強い埋没土の落ち込みとして確認した。西側中央の柱穴を確認できなかったが、東西方向に広い2間×2間の南面建物と思われる。軸方向はほぼ真北を指している。P3が北方へ20cmずれており、東側のラインはやや北に向かって開いている。P7はP6-P1間中央より20cm東へずれているが、P2とP4はそれぞれのコーナー柱穴からのほぼ等距離にある。

地山は砂質土で壁の保持力は弱い。柱穴は建物の規模に比べて極めて小さくて浅い。これらのことより、遺構は杭を打ち込んだ簡易の建物の土台部分と考えられるが、柱痕は不明である。

付近は遺構の少ない一画であり、本建物に近接する近世以前の生活址はない。8m北側に4号溝があり、18~19世紀の遺物を出土する井戸群は25m南西に離れている。本建物は時期決定の根拠を全く持たないが、近世後葉以降の可能性が高い。



AY-1号掘立柱建物

	径(cm)		深さ (cm)
	南北	東西	
1	22	22	16
2	16	22	19
3	20	20	23
4	24	20	23
5	24	22	24
6	22	20	20
7	24	28	21

第92図 AY-1号掘立柱建物

AY-2号掘立柱建物 (第93図 PL-20)

位置 C区d・e-2・3グリッド

規模 桁行4,75m (南側) × 梁行4,10m

軸方向 N-3°-W

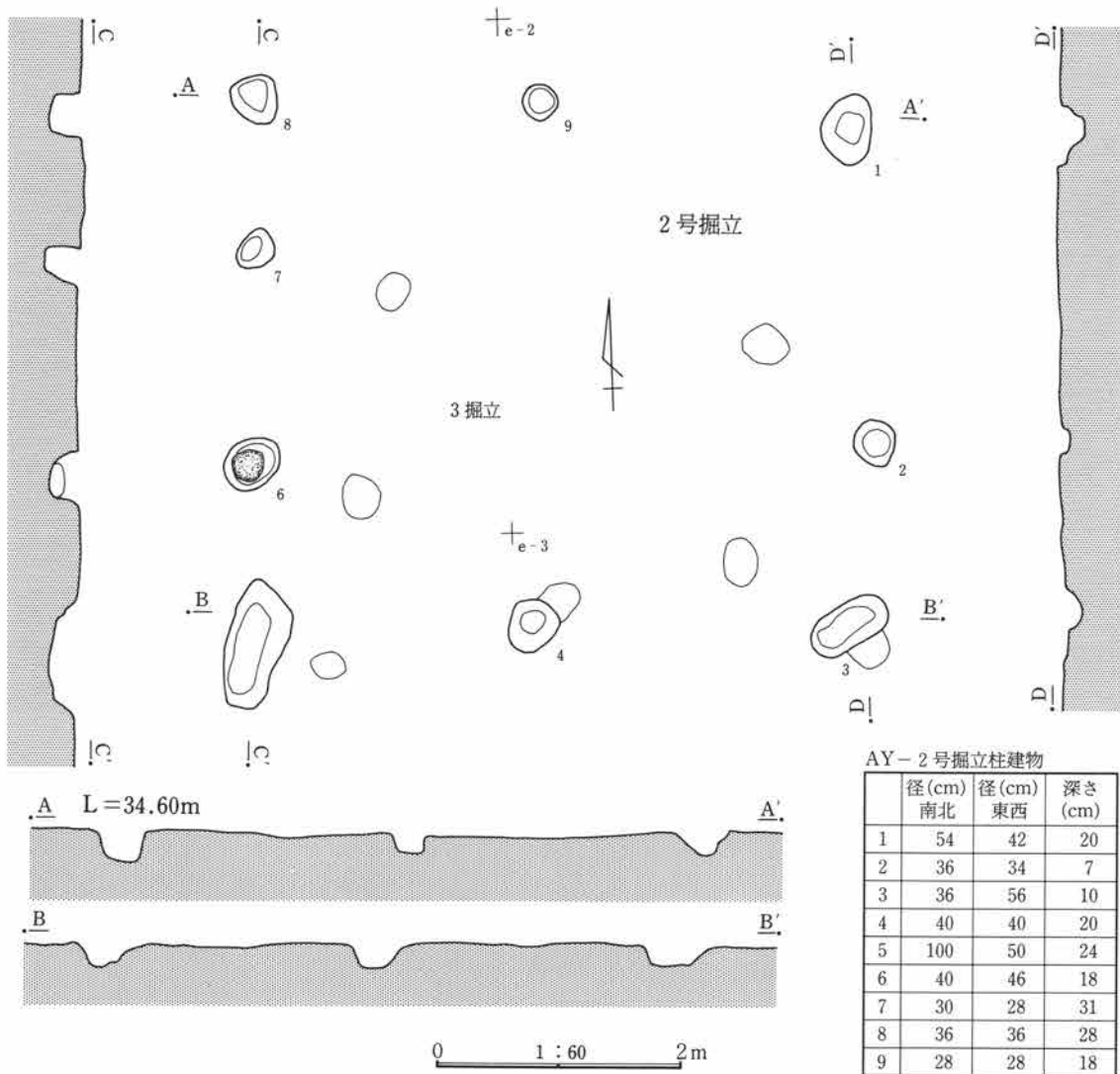
重複 3号掘立柱建物

備考 西側は3間、他の3面は2間という変則的な建物であるが、P1とP2の間に確認出来なかった柱穴があり、2間×3間の西面建物となる可能性がある。P6-P7間は両脇よりやや広く、西側に入り口のある建物と思われる。P3-P4間、P9-P1間間は2,5mなのに対し、P4-P5間、P8-P9間は2,2mと南・北両面の柱穴配置は規則的で

ある。南側の3本の柱穴はいずれも双円形から楕円形状の平面を呈しており、建て直しをしている可能性がある。

角柱穴の断面は開口部に向かって大きく広がっているものが多いが、地山が砂質土であるために壁の崩落がすすんだものと思われる。

P6の底面には径25cmの扁平な河原石が置かれていた。各柱穴は比較的浅く、底面はいずれも平坦であり、それぞれに礫が置かれていた可能性もある。



第93図 AY-2号掘立柱建物

AY-3号掘立柱建物 (第94図 PL-20)

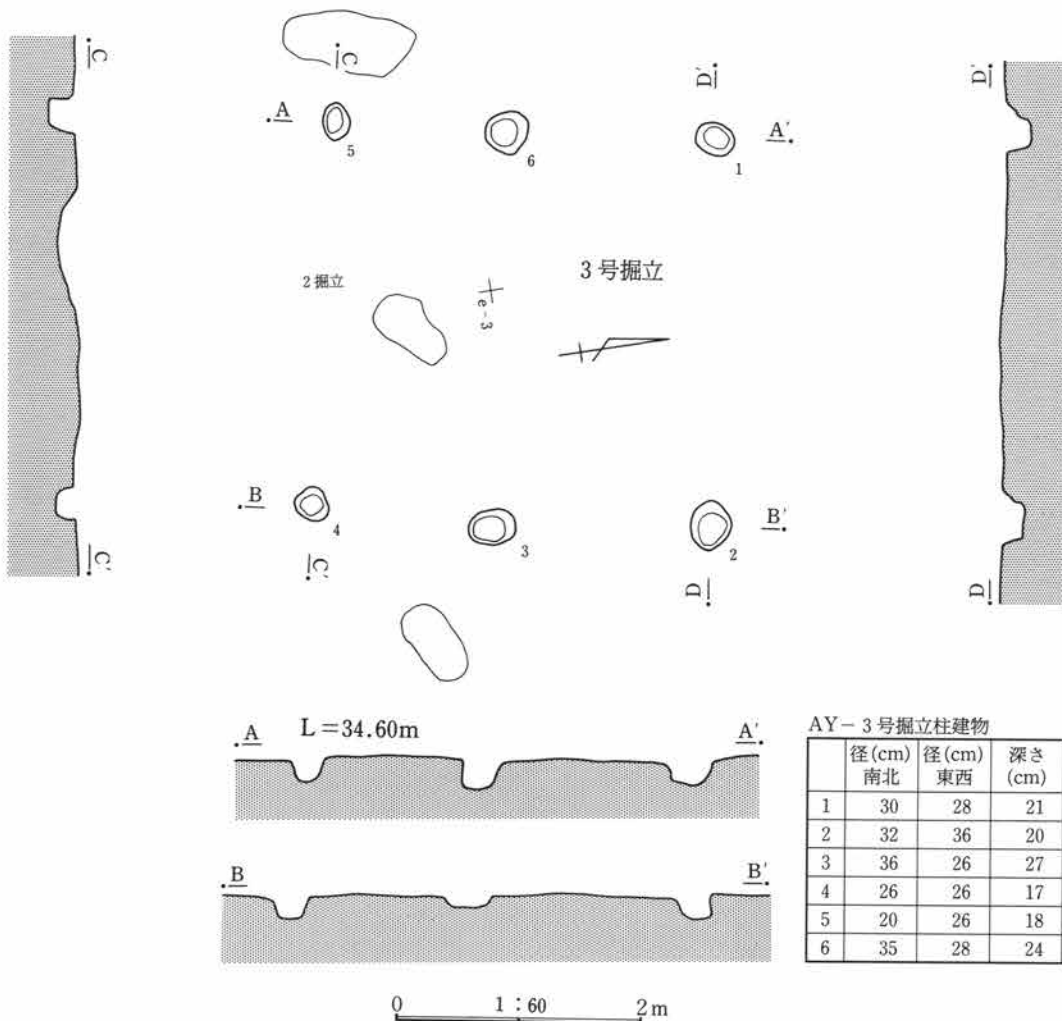
位置 C区d・e-2・3グリッド この一面には重複する建物以外の柱穴状落ち込みが多数あり、別の建物が存在する可能性もある。

規模 桁行3,10m×梁行3,05m

軸方向 N-79°-W

重複 2号掘立柱建物 各柱穴の重複はない。

備考 1間×2間の整った小型の建物である。東西どちらに面するかは根拠がない。P1-P2間、P4-P5間は3,1m、P2-P3、P6-P1間は1,7m、P3-P4間は1,7mで規則的な柱穴配置になっている。底面は浅く平坦で、2号掘立柱建物との共通点も多い。礎石状の礫が置かれていた可能性もあろう。



第94図 AY-3号掘立柱建物

AY-4号掘立柱建物 (第95図 PL-20)

位置 C区P・q-7・8グリッド C区は掘立柱建物の最も多い一画だが、本遺構は他の建物から離れている。

規模 桁行、梁行とも3,80mで、平面はほぼ正方形を呈している。

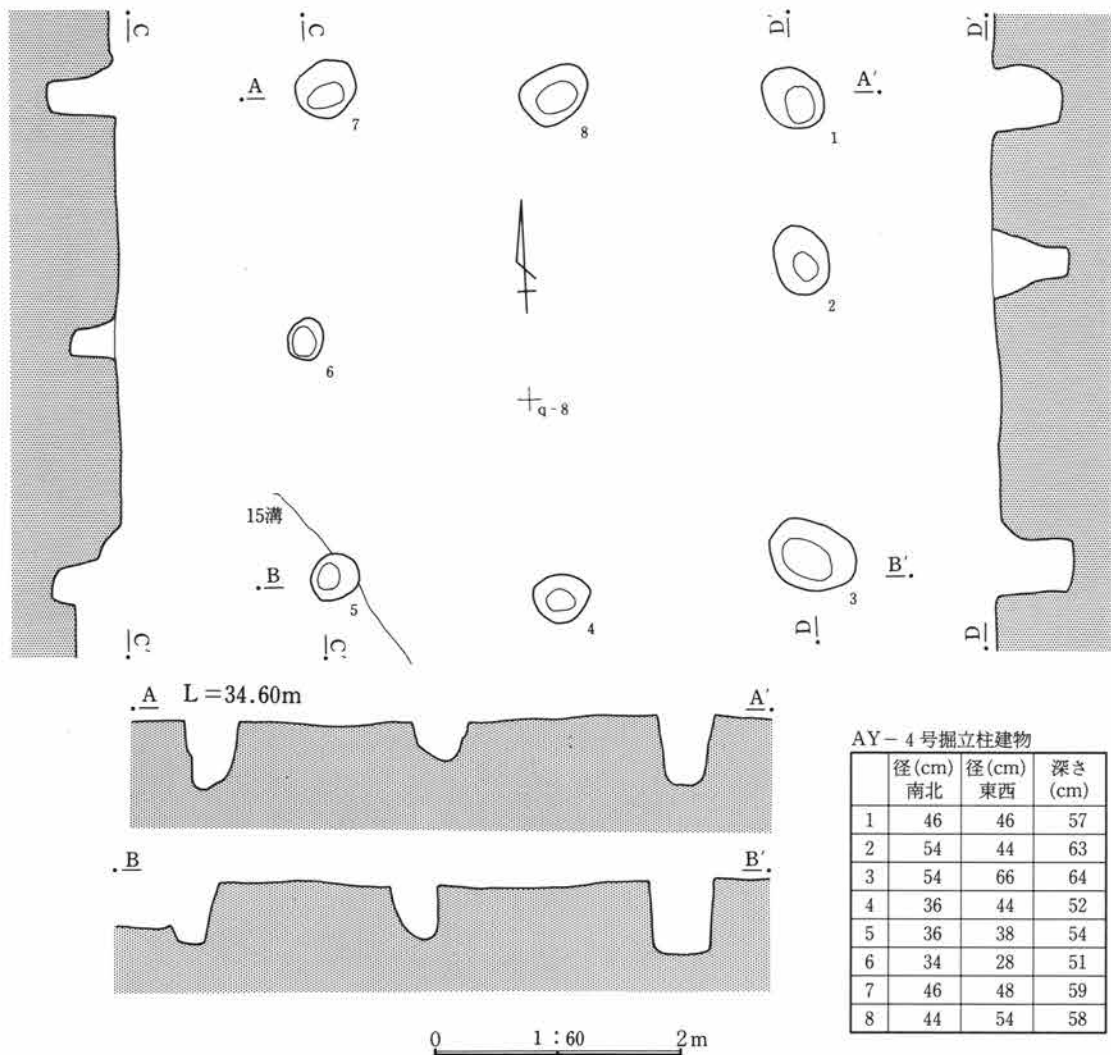
軸方向 N-2°-W

重複 15号溝に先出する。

備考 2間×2間の側柱建物である。東側の柱穴配置が変則で、P1-P2間は1,4m、P2-P3間は2,4mとなっている。他の3辺は1,9m前後の柱間

距離で、規則的な配置となっている。東側の柱穴配置の齟齬は、入り口部分にあたる可能性もあろう。

P4とP6は僅かに外側へそれている。各柱穴の埋没土はにぶい黄褐色を呈した砂質土で、FPに似たパミスを含んでいた。標準土層のII層とIII層の間的な土であり、古代の竪穴住居の埋没土とは異なる。柱痕は見つからなかった。



AY-4号掘立柱建物

	径 (cm)		深さ (cm)
	南北	東西	
1	46	46	57
2	54	44	63
3	54	66	64
4	36	44	52
5	36	38	54
6	34	28	51
7	46	48	59
8	44	54	58

第95図 AY-4号掘立柱建物



AY-5号掘立柱建物 (第96図 PL-20)

位置 C区 r-14・15グリッド C区東隅の掘立柱建物の集中地点の西方6mの地点にある。

規模 2,75m×2,35m

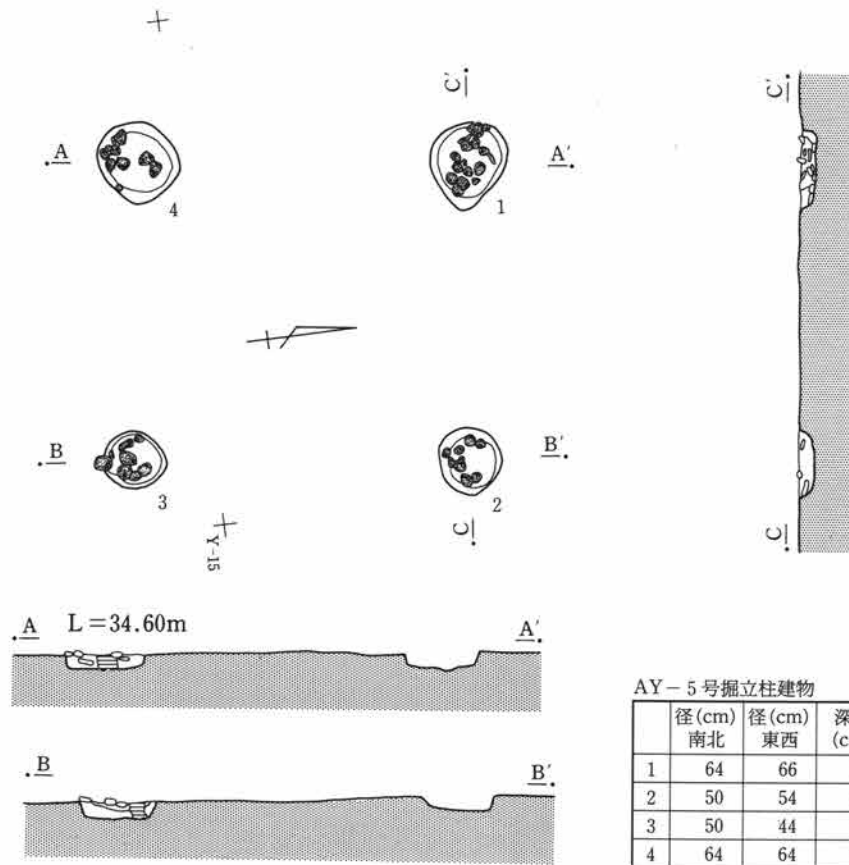
軸方向 N-83°-W

備考 1間×1間の建物だが、南北方向にやや広い。どちらの方向に面していたかは根拠を持たない。4本の柱穴ともに径は50cm以上と広いが、確認面からの深さは15cmに満たない。各柱穴の底面は平坦で、底面から少し浮いた状態で径5～15cm大の軽石を中心とした扁平な円礫を多量に含んでいた。柱の周りに根固めをした様相を呈しているが、脆い軽石を使用したのは不自然である。また、P2を除いて柱穴中央にも礫が見られ、根固めと同時に礎石状の使

用も考えられ。ただし、これらの礫には破損が少なく、礎石状の使用による重量負荷の痕跡は見当たらない。

各柱穴から出土した礫の数は、P1が82点、P2が39点、P3が13点、P4が16点である。

※ 各柱穴の埋没土は、いずれもにぶい黄褐色を呈した砂質土で、下層にはシルト質土をブロック状に含むものがあつた。



第96図 AY-5号掘立柱建物

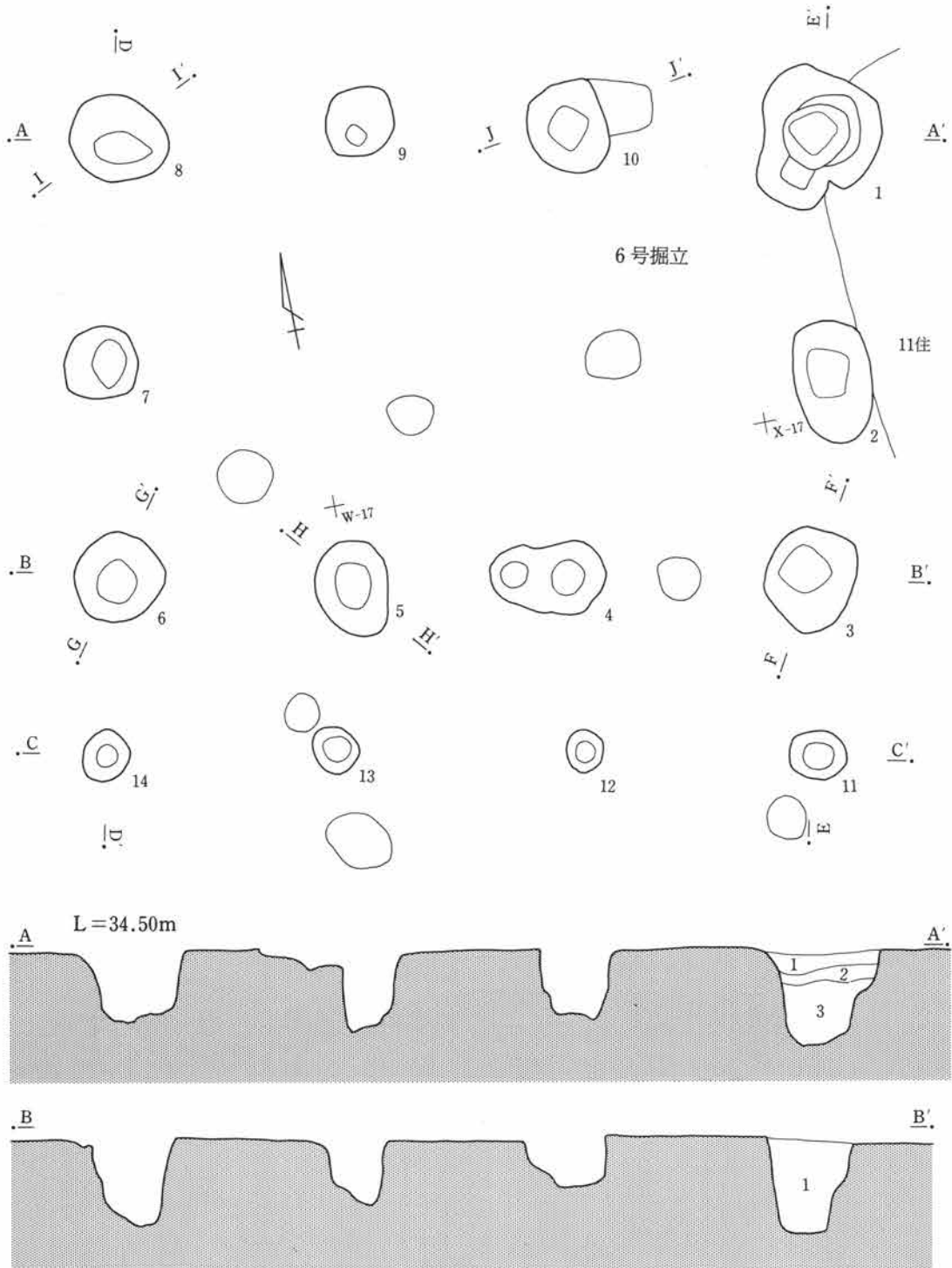
AY-6号掘立柱建物 (第97・98図 PL-20)

位置 C区v・w・x-16・17グリッド 竪穴住居の多い一画にある。南側に17・26号住居が隣接し、東側に11号住居が僅かに重複する。

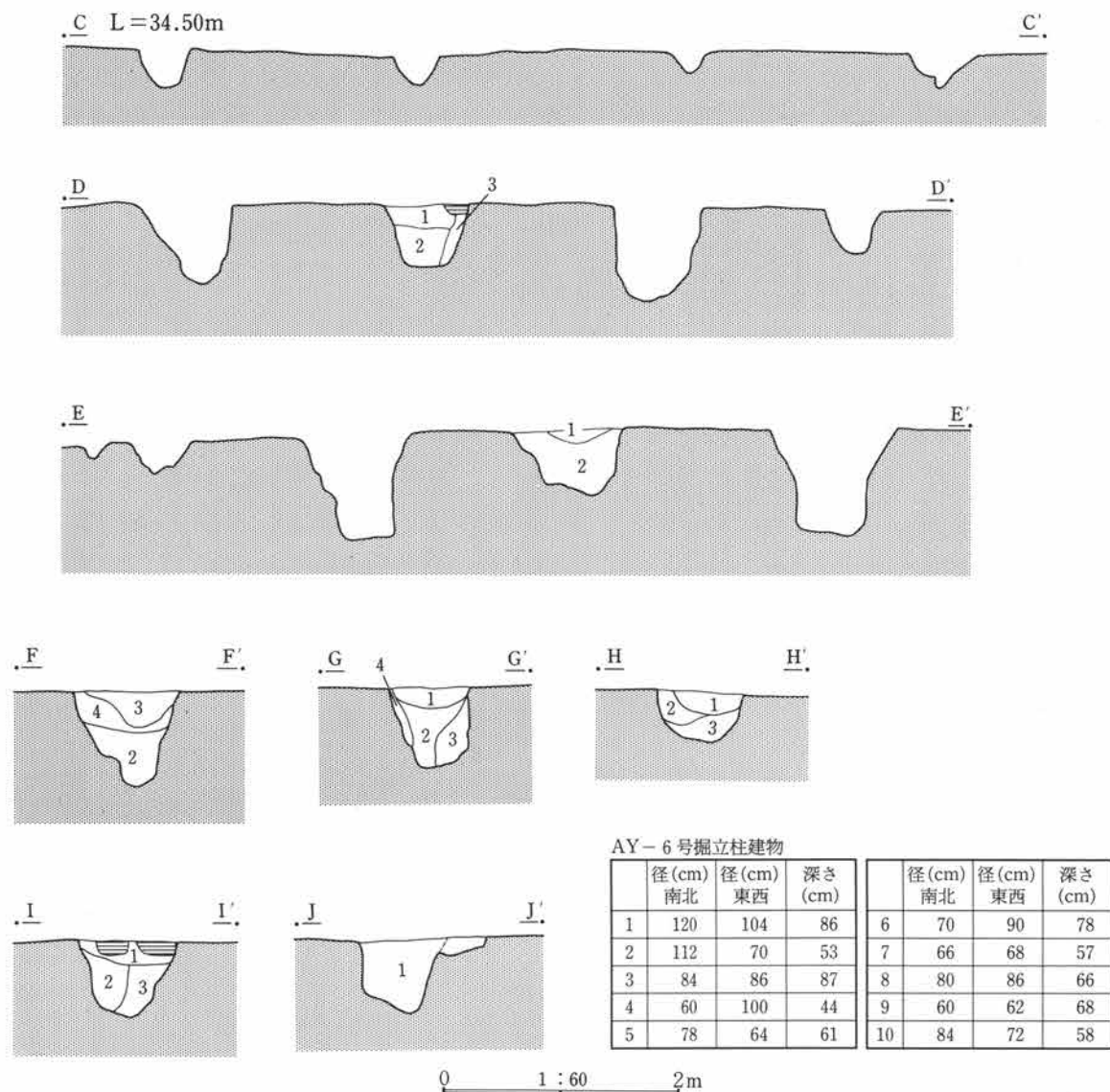
規模 桁行6.45m×梁行3.95m (庇部を除く)

軸方向 N-11°-E

重複 11号住居・7号掘立柱建物



第97図 AY-6号掘立柱建物



AY-6号掘立柱建物

	径(cm)		深さ (cm)	径(cm)		深さ (cm)	
	南北	東西		南北	東西		
1	120	104	86	6	70	90	78
2	112	70	53	7	66	68	57
3	84	86	87	8	80	86	66
4	60	100	44	9	60	62	68
5	78	64	61	10	84	72	58

AY-6号掘立柱建物土層説明

- 1 暗褐色砂質土層 しまりの強い層。粒子やや粗く、3～5mm大のシルト粒を含む。
- 2 暗褐色土層 やや粘性の強い層。粒子は細かくややしまりに欠ける。
- 3 褐色シルト質土層 しまりの強い粒子のかまかな層。5cm大のシルトブロックをやや多量に含む。
- 4 にぶい黄褐色シルト質土層 シルト質土を主体とするしまりの強い層。

**備考** 南面に庇のある2間×3間の建物である。庇は小規模で浅く不明瞭だが、規則的な配置である。四隅の柱穴が深くなる傾向がある。柱間は梁方向ではほぼ均等で芯々距離で約2mであるが、棟方向では中央にあたるP4-P5間、P9-P10間でやや狭くなる傾向がある。庇の張り出しは1,7mほどで

梁方向の柱間より狭くなる。P1とP4は重複のあるような平面形となったが、他の柱観察断面より、建て替えがあったとは考えにくい。P6・P7の土層断面から柱痕や根固めの痕跡を確認できる。整った形状より奈良・平安時代の建物の可能性がある。

第98図 AY-6号掘立柱建物断面図

AY-7号掘立柱建物 (第99図 PL-20)

位置 C区v・w-16・17・18グリッド

規模 桁行4,60m (西側) × 梁行3,75m (南側)

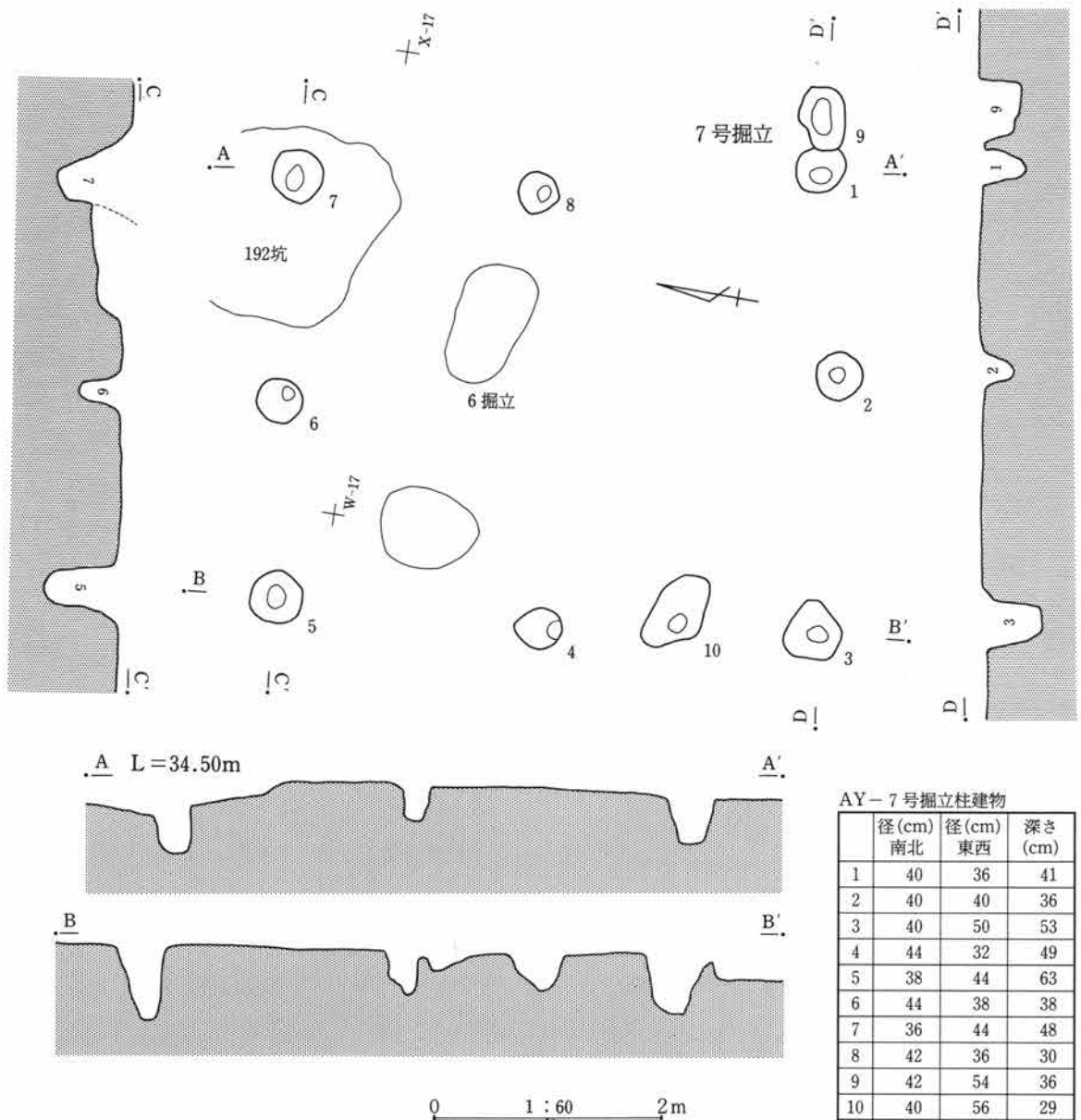
軸方向 N-6°-E

重複 192号土坑に先行。6号掘立柱建物と重複。

17・26号住居とも接しており、重複と捉えられる。

備考 南側に開いた変則的な建物である。柱間距離もまちまちのうえ、P2・P6の底面も梁や桁の軸線に乗ってこない。P9、P10が本建物に確実に伴うかは不明で、横長の2間×2間の建物となろう。

四隅の柱穴が規模が大きく、深くなっている。南北方向に長いので、西向きの建物として掲載したが、他に根拠はない。抜柱や建て替えの痕跡は見られなかった。



第99図 AY-7号掘立柱建物

AY-8号掘立柱建物 (第100図 PL-21)

位置 C区x・yD区a-16・17・18グリッド

規模 梁行3・50m×桁行6・08m

軸方向 N-20°-E

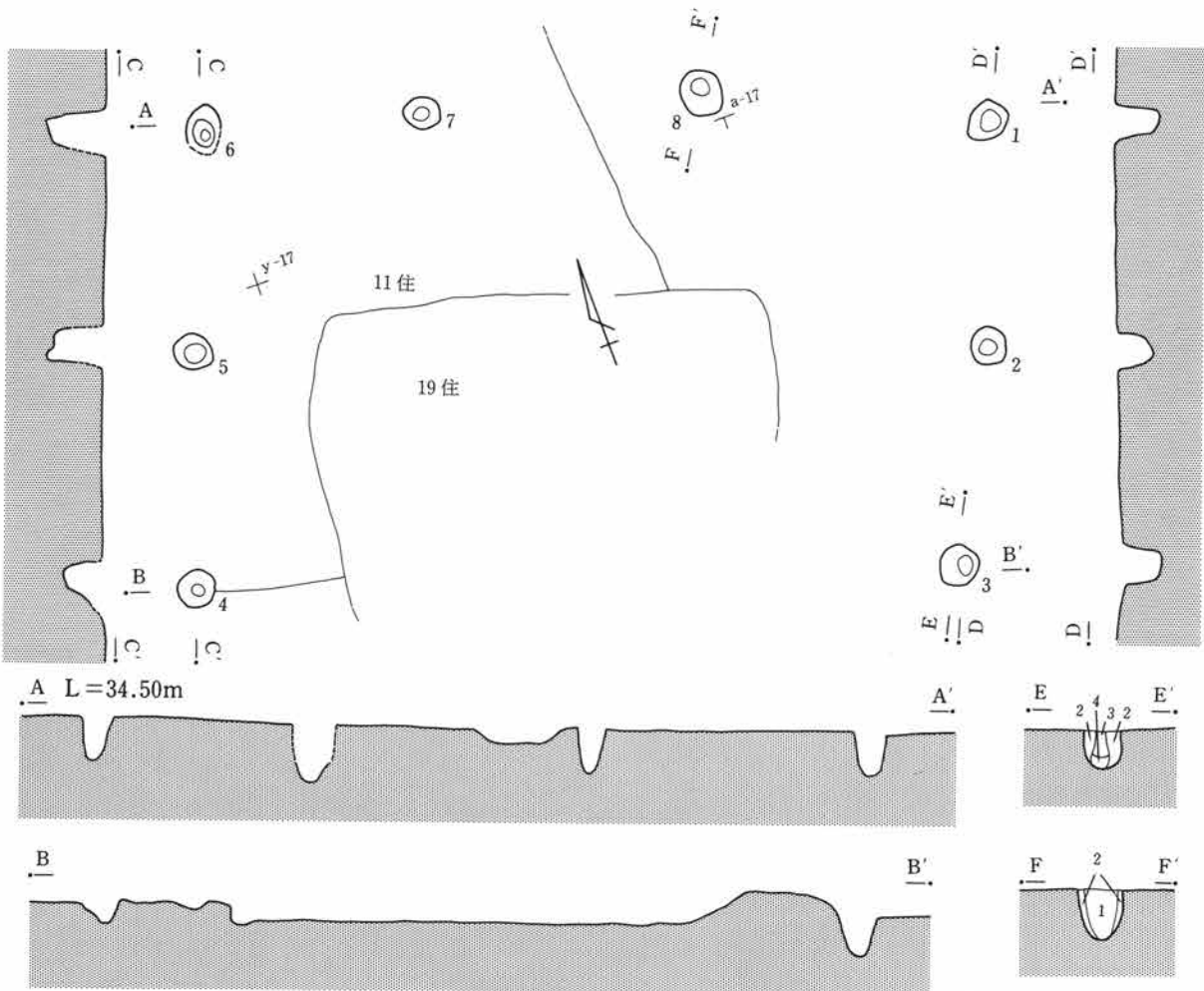
重複 9・11・19・号住居に後出し、18・19号溝に重複する。

備考 竪穴住居との重複部分が広く、南側の柱穴は確認できなかった。またP7も住居の床面調査段階で確認できたものである。2間×3間の南面の建物と思われるが、北側、西側が開く変則的なプランである。

あると思われるが、北側、西側が開く変則的なプランである。

AY-8号掘立柱建物

	径(cm)		深さ(cm)
	南北	東西	
1	30	36	33
2	30	26	28
3	32	32	53
4	30	30	23
5	28	28	19
6	32	30	47
7	27	30	17
8	36	34	40



AY-8号掘立柱建物土層説明

- 1 暗褐色土層 粒子細かく、ややしまりの強い層。焼土粒・カーボン粒を少量含む。
- 2 にぶい黄褐色土層 シルト質土と粘性土の混合土層。しまりやや強い。
- 3 褐色粘性土層 柱痕か。しまりにやや欠ける。
- 4 灰褐色シルト質土層 しまりなし。底面付近は粘性土多い。

0 1:60 2m

第100図 AY-8号掘立柱建物

AY-9号掘立柱建物 (第101図 PL-21)

位置 E区 a・b-21・22 他の掘立柱建物から離れている。

規模 梁行2.85m×桁行2.94m

軸方向 N-72°-E

備考 北側に上屋柱のない、変則的な1間×2間の小型建物か。各柱穴は小さく浅いが、落ち込みは明瞭に確認できた。納屋のような施設か。

AY-10号掘立柱建物 (第102図 PL-21)

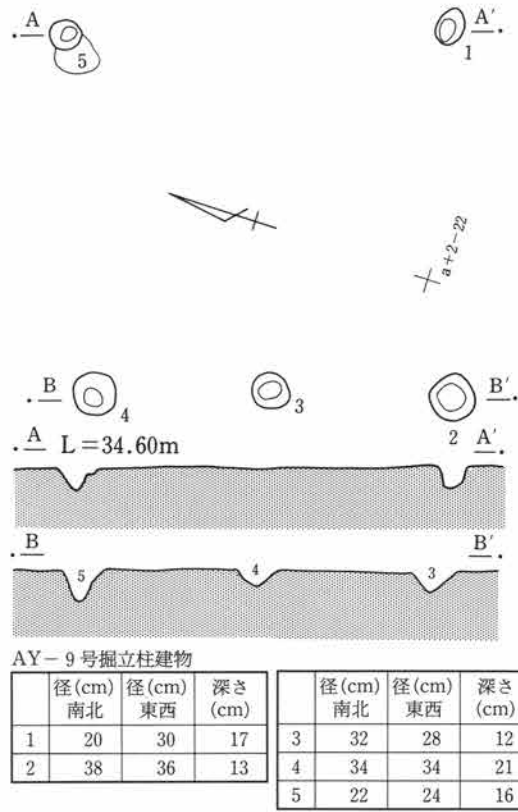
位置 E区 j・k・1-1グリッド 館の南側施設 3/4丁区画内のほぼ中央にあり、大型建物や礎石状の土台のある柱穴の多い一画であるが、土坑との重複が多く、不明瞭な部分も多かった。性格不明のピットも極めて多い一画で、多数の建物が重複して存在した可能性もある。

規模 梁行2.25m以上×桁行4.65m

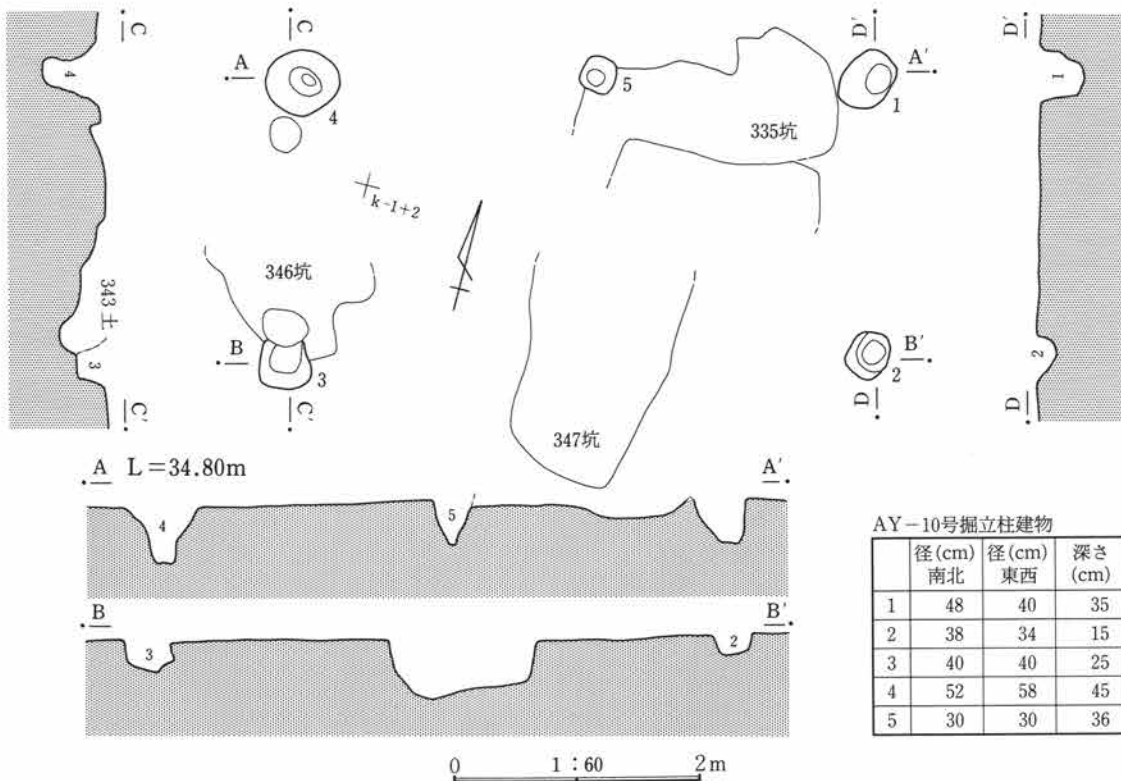
軸方向 N-15°-W

重複 335・346・347号土坑

備考 図示できたのは5基の柱穴であるが、南側に続くものと思われ、全容は明瞭でない。



第101図 AY-9号掘立柱建物



第102図 AY-10号掘立柱建物

AY-11号掘立柱建物 (第103図 PL-21)

位置 E区g・h-3・4グリッド

規模 梁行6,90m以上×桁行12,08m以上

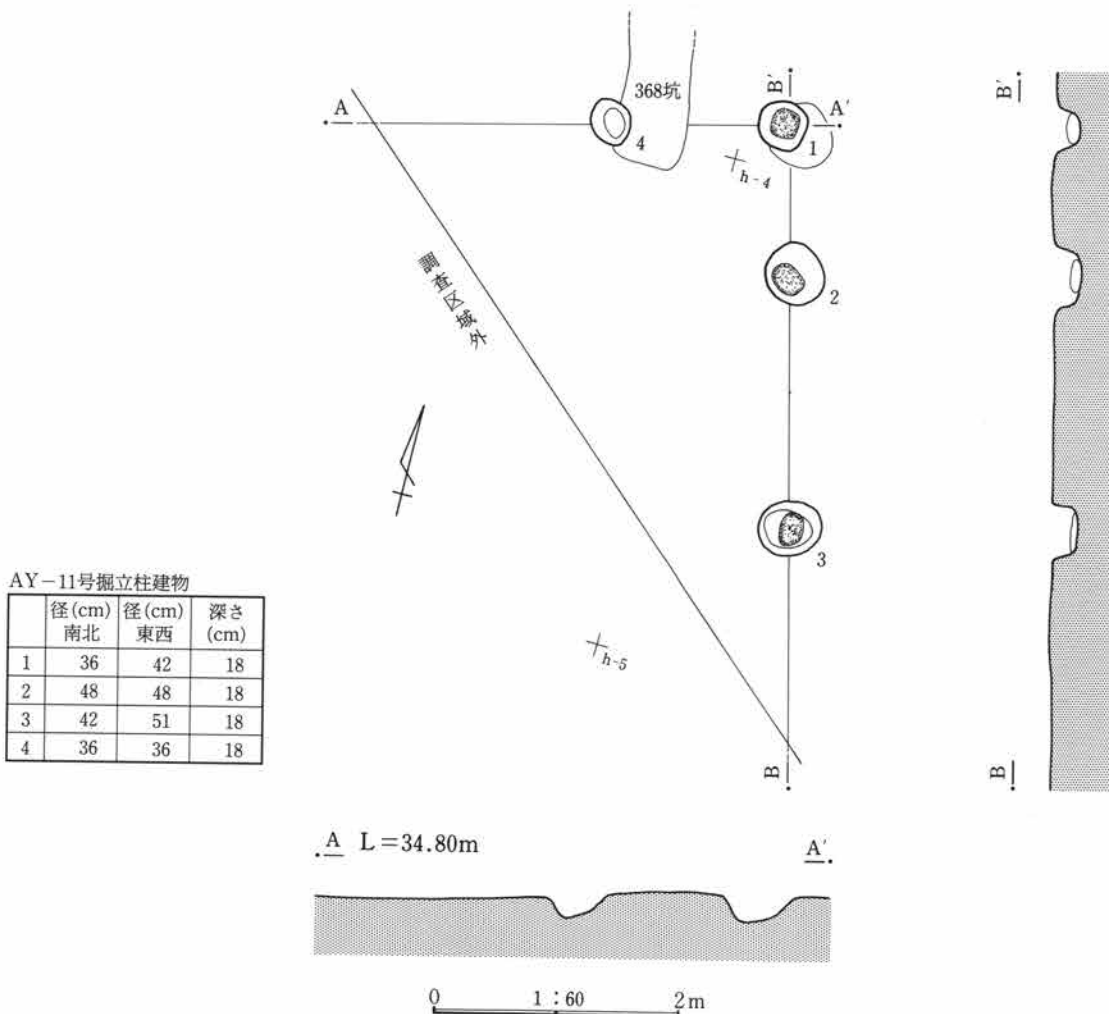
軸方向 N-11°-W

重複 368号土坑

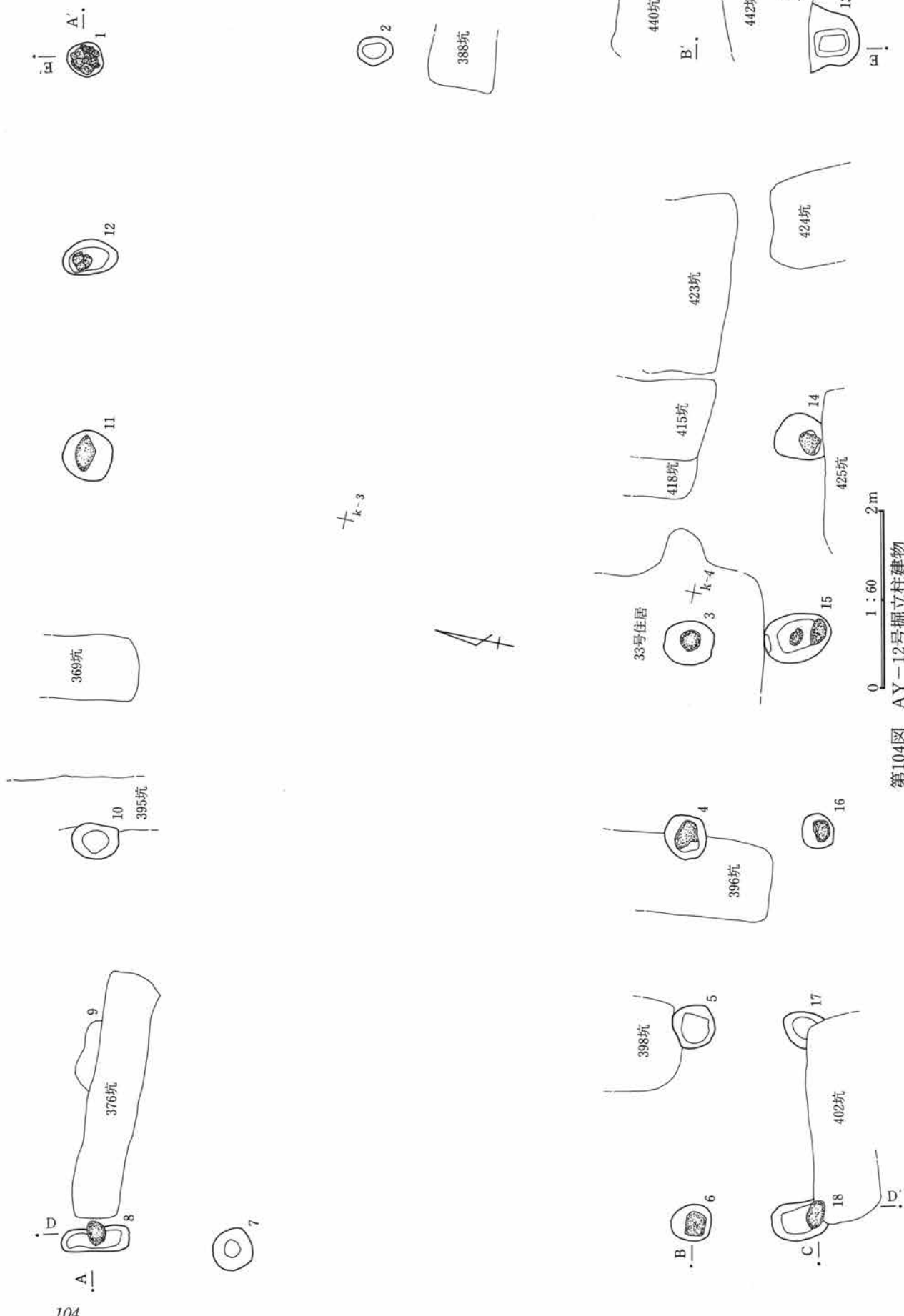
備考 12号掘立柱建物の北側柱列確認中にP1を発見した。12号掘立の北側の側柱ラインに沿うもので、当初12号掘立柱建物の一部、西側の庇と考えたが、柱間距離や配置が不規則であり、隣接する別の建物とした。柱穴はいずれも浅く、P1からP3までの

間は径20~25cmの扁平な礫が梁線上に並んでいる。礫はいずれも柱穴底面に密着する状態で置かれていた。

P1-P2間1,2m、P2-P3間は2,2m、P4-P1間1,4mと柱間距離には差が大きい。4基の柱穴を確認したのみだが、12号掘立柱建物と類似点が多く、同建物同様の大型建物になると思われ、同時存在で軒を並べていたと推定したが、柱穴配置の明瞭な12号建物と比べると不自然な点が多い。

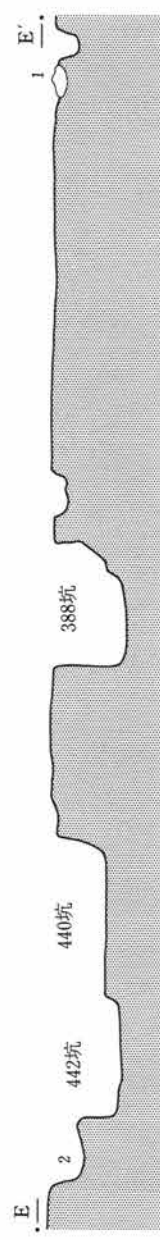
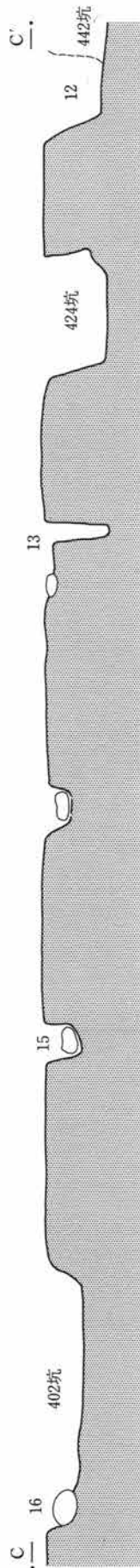
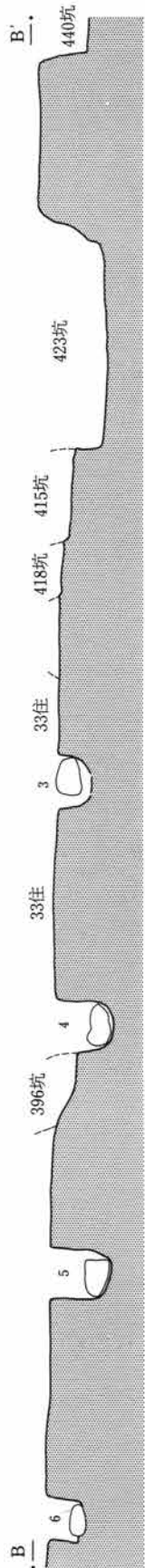
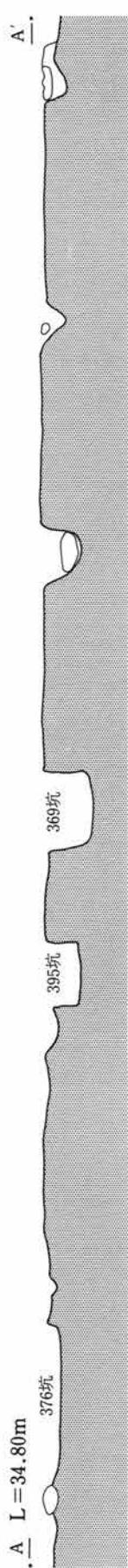


第103図 AY-11号掘立柱建物



第104图 AY-12号掘立柱建物





AY-12号掘立柱建物

	径 (cm)		深さ (cm)	径 (cm)		深さ (cm)
	南北	東西		南北	東西	
1	40	40	18	54	40	34
2	40	32	12	11	56	34
3	56	50	30	12	58	40
4	48	48	48	13	60	24
5	46	48	58	14	58	10
6	44	40	38	15	70	22
7	44	48		16	38	28
8	72	28	18	17	30	42
9	24	78	4	18	60	44

第105図 AY-12号掘立柱建物断面図

0 1 : 60 2 m

AY-12号掘立柱建物（第104・105図 PL-21）

位置 E区h・i・j-1・2・3・4・5  
グリッド

規模 梁行6,69m(8,13m)×桁行13,08m

( )内は庇を含んだ長さ

軸方向 N-12°-W

重複 33号住居に後出。369・376・388・395・396・398・402・415・418・423・424・425・440・442号土坑と重複。各土坑に先出か。

備考 後出する土坑のため壊された部分が極めて多かったが、礎石状の礫の据えられた柱穴列が確認され、南側に庇のある2間×6間（東の梁より推定）または3間×6間（西の梁より推定）の、本遺跡中最大規模の掘立柱建物となることが分かった。礫の

形状はまちまちで、11・14号建物のように扁平なものを選んでいないが、上面が平坦になるものを使用していた。柱穴の底面に礫が置かれているもの（P5、P6等）と、少し浮いた状態のもの（P3、P14等）が混在していた。また、P1・P12内の礫は重量を受けて崩れていた。棟方向では柱穴は規則的に並んでおり、柱間は芯々距離で2・10mになる。庇の張り出しは1,4~1,5mである。庇の柱穴にも礫を据えていたが、柱穴の規模、礫の大きさともにやや小型である。

AY-13号掘立柱建物（第106・107図 PL-21）

位置 E区f-g-h-i-24・0・1・2  
グリッド

規模 梁行6,70m×桁行13,10m

軸方向 N-118°-W

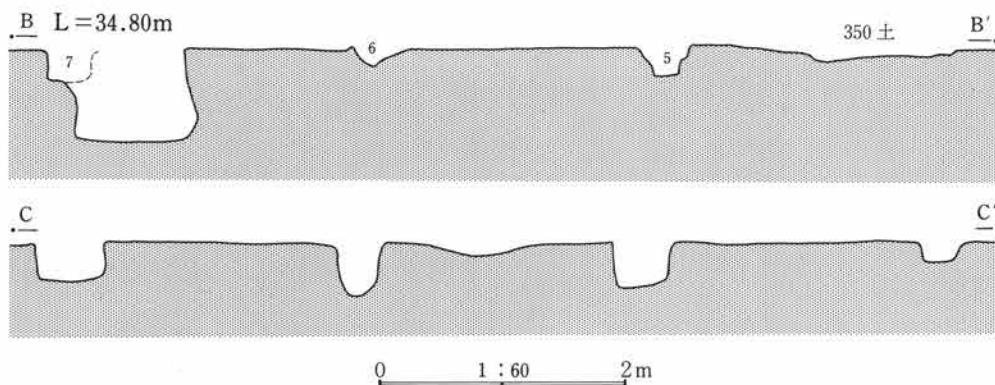
重複 329・330・349・350号土坑

備考 個々の柱穴平面形状は円形に近く、比較的確認し易い遺構であった。南側は精査にもかかわらず柱穴を確認できず全容は不明だが、北側は5間、東側は3間以上の大型建物である。12号掘立柱建物とおおよそ棟方向を揃えており、11号掘立柱建物とともに「品」の字型の建物配置だった可能性もある。ただし、本建物の柱穴には礎石状の礫は見られない。

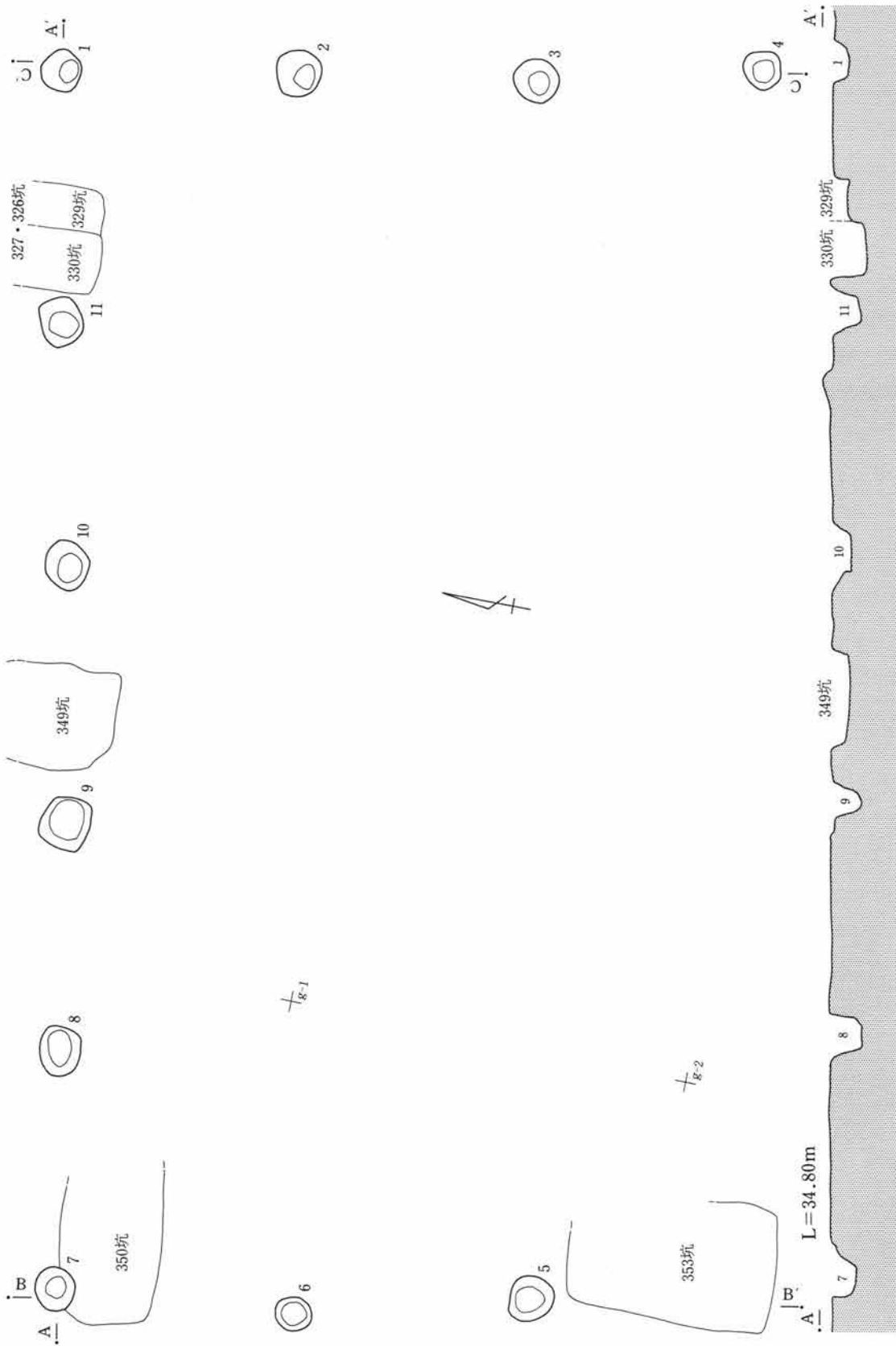
各柱穴の配置は規則的で、梁方向の柱穴の芯々距離は2・35mになっている。また棟方向も2・35~2・50mと大きな差はない。P4と12号掘立柱建物北桁との距離は約7mある。

AY-13号掘立柱建物

	径(cm)		深さ(cm)		径(cm)		深さ(cm)
	南北	東西			南北	東西	
1	40	42	16	7	38	42	20
2	42	46	36	8	42	46	30
3	44	42	40	9	48	52	28
4	36	40	32	10	42	46	20
5	42	46	24	11	44	50	28
6	36	34	18				



第106図 AY-13号掘立柱建物断面図



第107图 AY-13号掘立柱建物

AY-14号掘立柱建物（第108図）

位置 E区1・m-1・2グリッド 本遺構の東側はトレンチャーによる攪乱が著しく、小規模な柱穴状の遺構の検出は極めて難しい。

規模 梁行2,34m以上×桁行4,65m以上か

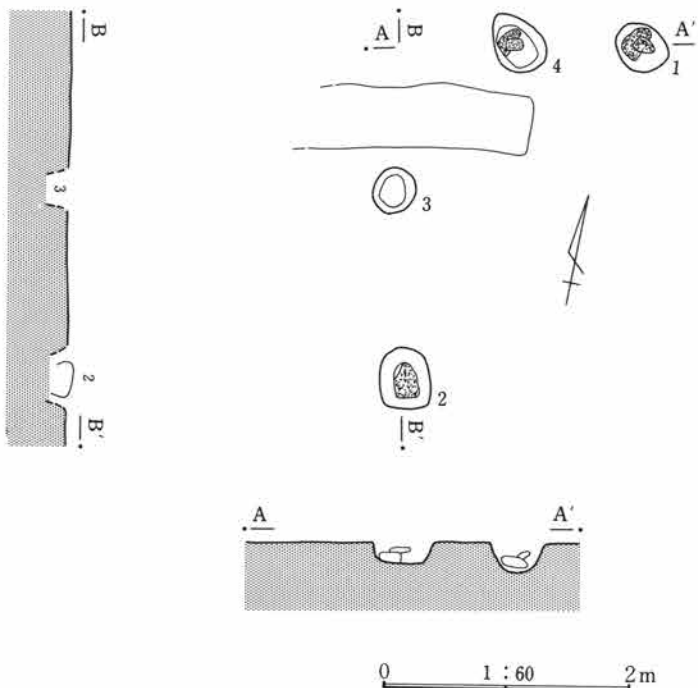
軸方向 N-8°-W

重複 391号土坑

備考 この建物も12号掘立柱建物の範囲確認時に礎石状の礫のある柱穴の続きとして発見したものである。北西隅の柱穴が確認出来ないうえ、北側と西側では柱間距離も異なり、建物である確証もないが、11号掘立柱建物と類似した柱穴群であり、12号掘立柱建物同様の大型建物の一画となる可能性もあろう。

独立した建物となる場合、軸方向がややずれており、12号建物と同時存在ではないと考えた。

P1とP4には礫が2個ずつ埋めてあった。またP2には径25cmの扁平な礫が埋めてあった。いずれも平坦面を造っている。柱間は芯々距離でP4-P1間1,05m、P2-P3間1,70mである。また、P4の北側1,2mの地点の土坑埋没土には扁平な礫が混入しており、本建物内から抜かれた礎石の可能性もある。



AY-14号掘立柱建物

	径(cm) 南北	径(cm) 東西	深さ (cm)
1	36	42	
2	48	40	
3	36	32	
4	42	40	9

第108図 AY-14号掘立柱建物

AY-15号掘立柱建物 (第109図 PL-21)

位置 E区 s・t-14・15グリッド 南側館堀区画の南外の、遺構の少ない一画にあり重複もない。

他の建物からも離れている。

規模 梁行2,30m×

桁行4,55m(南側)・4,70m(北側)

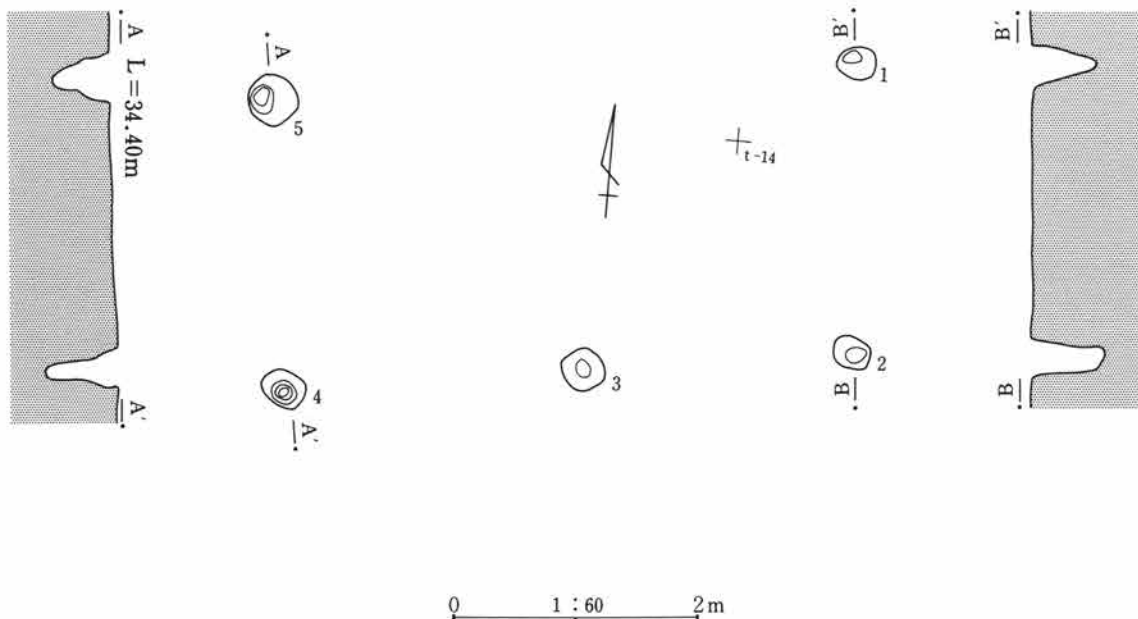
軸方向 N-9°-W

備考 四隅の柱穴は黒色味の強い明瞭な落ち込みとして確認できた。いずれも確認面から50cm以上の深さがある。南側中央の柱穴(P3)は不明瞭で、対応する北側中央の柱穴(P5-P1間)は精査したが確認できなかった。

変則的な1間×2間の南面建物になると思われるが、P3は配置に問題はないが他の柱穴に比べて著しく浅く、本建物には伴わないで1間×1間の建物となる可能性もあろう。P2-P3間2,25m、P3-P4間2,46mである。各柱穴は西側では中段に稜があり、東側では直線的にやや開いて立ち上がっている。

AY-15号掘立柱建物

	径(cm) 南北	径(cm) 東西	深さ (cm)
1	32	30	50
2	26	30	60
3	34	36	14
4	30	36	58
5	40	40	50

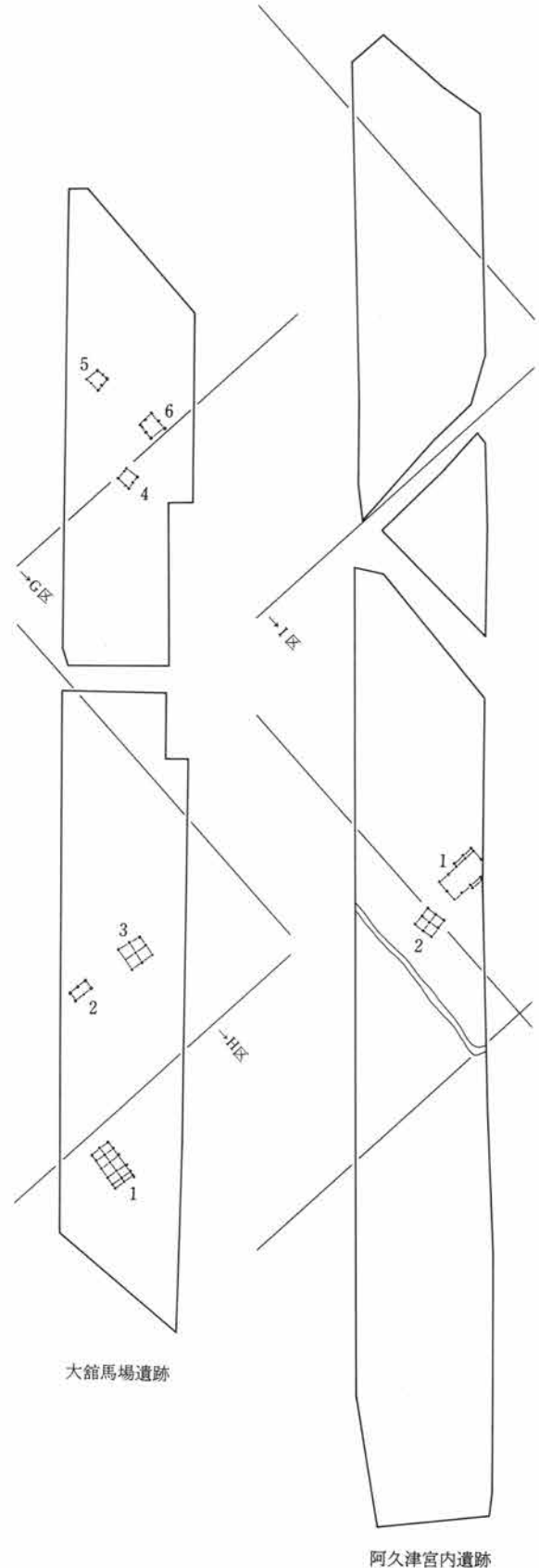


第109図 AY-15号掘立柱建物

## 大館馬場・阿久津宮内遺跡の掘立柱建物

掘立柱建物の数は大館馬場遺跡で6棟、阿久津宮内遺跡で2棟で、安養寺森西遺跡に比べて軒数は少なくなる。右図に両遺跡の建物配置の概略を示した（左・大館馬場遺跡、右・阿久津宮内遺跡）。掘立柱建物とはならない柱穴状のピット数も少なくなり、見逃した建物の存在はほとんど考えられない。竪穴住居の数も極めて少ない一画であり、安養寺森西遺跡とは古代からの土地利用の差が明瞭である。8棟の各建物の時期推定については根拠を持たないが、古代の遺構の存在は考えにくい。

大館馬場遺跡と阿久津宮内遺跡の8棟の掘立柱建物には重複例がないだけでなく、軒を並べるようにして近接する建物も1例もない。しかし、大館馬場遺跡の1～3号と4～6号、および阿久津宮内遺跡の2軒でそれぞれ大まかな群に分かれ、建物の占地に多少の規制も看取されよう。安養寺森西遺跡に見られた礎石状の礎の据えられた建物は1例もなかったが、同遺跡では類のなかった総柱の建物が3棟ある。桁が4間になるやや大型の建物が2棟あるが、いずれも変則的な庇の付くことが特徴である。



第110図 大館馬場・阿久津宮内遺跡掘立柱建物配置図

OT-1号掘立柱建物 (第111・112図 PL-22)

位置 H区b・c・d-14・15グリッド 他の掘立

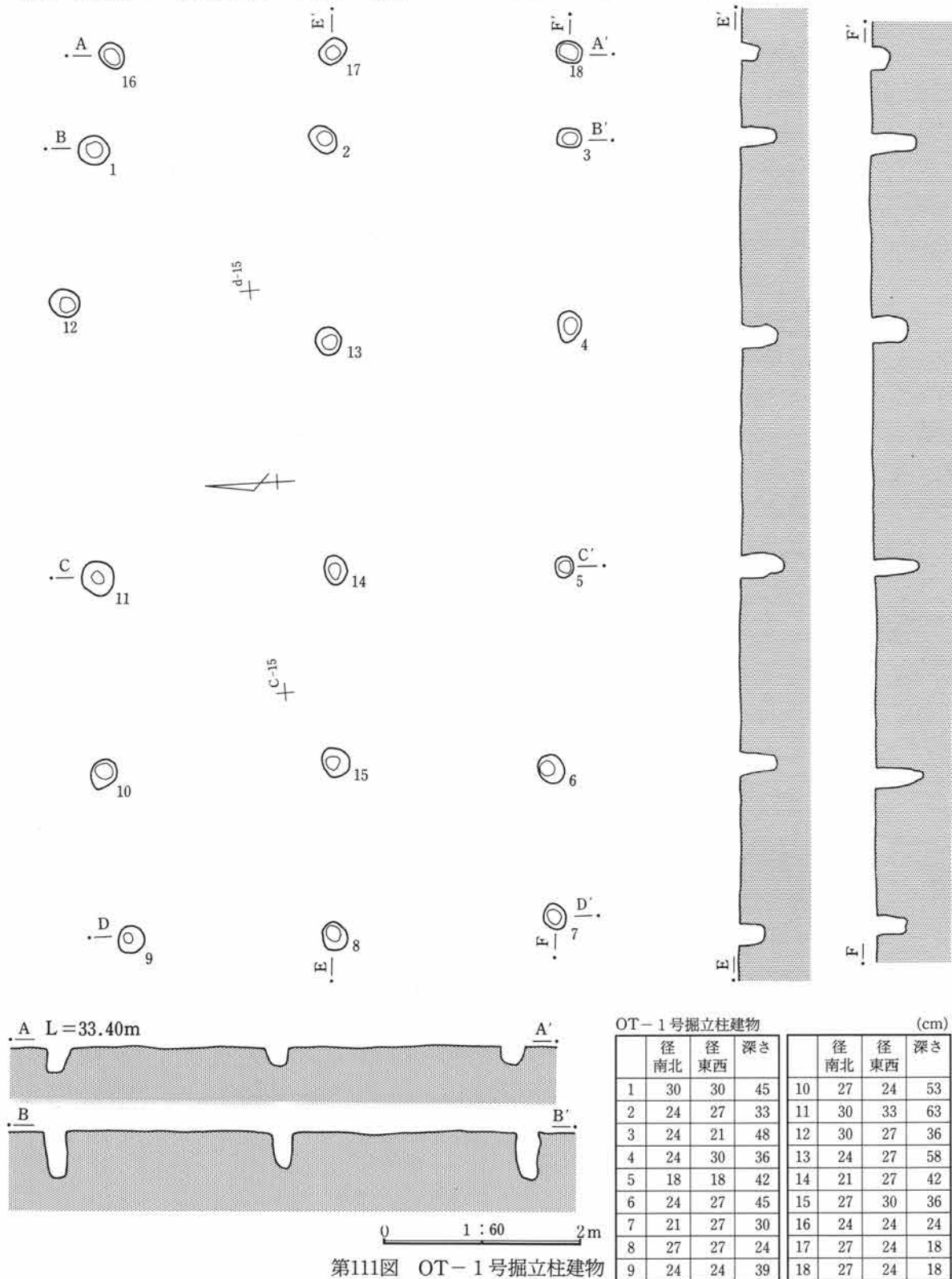
軸方向 N-3°-E

柱建物から離れ、他の遺構も少ない一画にある。

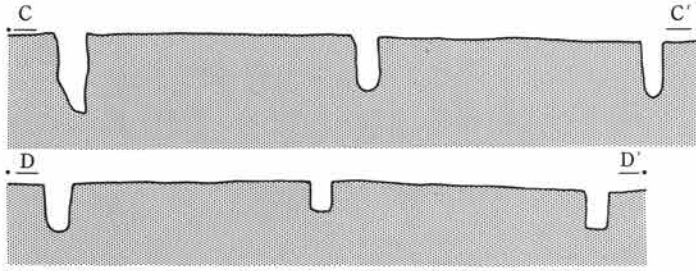
備考 2間×4間の南面する総柱建物で、梁方向の

規模 梁行4,70m(東側)4,30m(西側)×桁行7,75m

東側にのみ庇のある変則的な建物である。各柱穴は



第111図 OT-1号掘立柱建物



平面は小規模だが深さがある。形状も類似し抜柱痕はない。庇はやや浅い。大型の建物としては企画性に欠け、柱間はまちまちで、特に北側の桁線は直線

上に並ばない。P4-P5間、P11-P12間が広く、ここに入り口またはここを境に2棟の建物が想定できそうである。庇の張り出しは85cmである。

0 1:60 2m

第112図 OT-1号掘立柱建物断面図

OT-2号掘立柱建物 (第113図 PL-22)

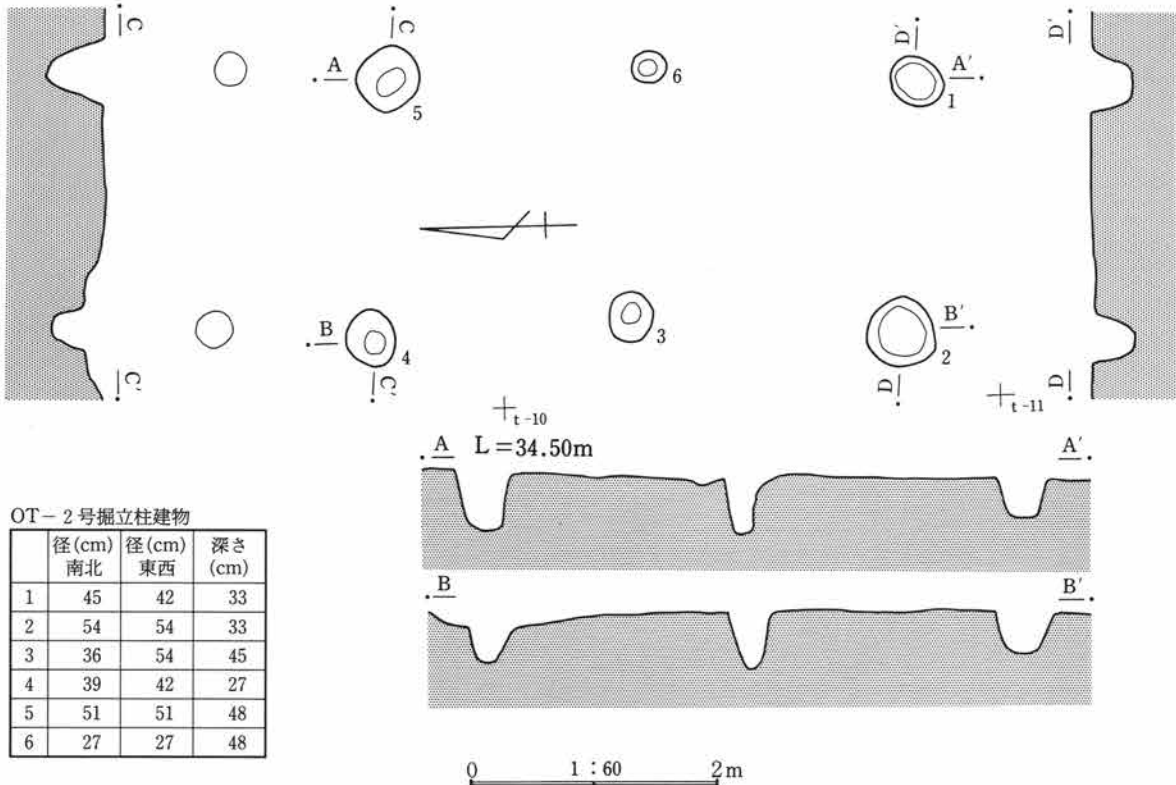
位置 G区 t-9・10グリッド

規模 梁行2,05m×桁行4,10m

軸方向 N-91°-E

備考 桁を南北方向に取る細長い1間×2間の建物で、柱間も芯々距離で2,05mと企画性がある。中央

の柱穴が、やや小規模になるが、深さは変わらない。本建物の北側1,20mに2本の柱穴が並んでおり、庇状の施設の可能性もある。平面は小規模だが、深さは東側柱穴が50cm、西側柱穴が65cmで、本建物の他の柱穴と同規模である。



OT-2号掘立柱建物

	径(cm) 南北	径(cm) 東西	深さ (cm)
1	45	42	33
2	54	54	33
3	36	54	45
4	39	42	27
5	51	51	48
6	27	27	48

0 1:60 2m

第113図 OT-2号掘立柱建物



OT-3号掘立柱建物 (第114図 PL-22)

位置 G区 t・u-6, 7グリッド

規模 梁行5,20m (西側) 5,40m (東側)

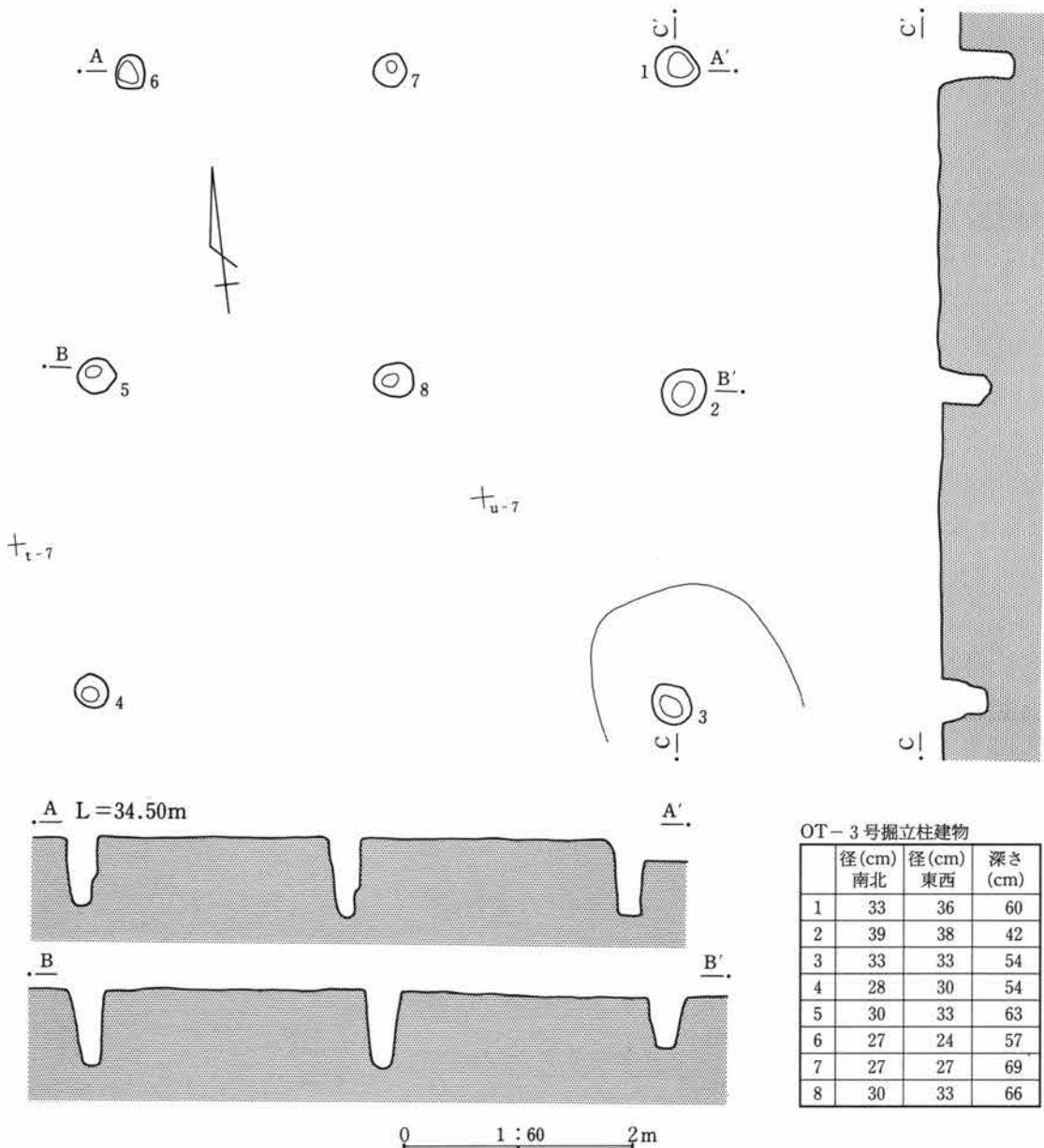
×桁行4,95m (南側) 4,75m (北側)

軸方向 N-6°-E

備考 南側中央の柱穴 (P3-P4間) を確認できなかったが、2間×2間の総柱建物を想定した。各

柱穴は深さのある明瞭なものである。建物の平面には歪みがあり、特にP6が東へ大きく振れている。

柱間もまちまちだが、芯々距離で2,50~2,75mの範囲にある。P2の北東に柱穴があり、本建物とは無関係の遺構と思われるが、深さは57cmあり、柱痕状の炭化物が出土している。



第114図 OT-3号掘立柱建物

OT-4号掘立柱建物

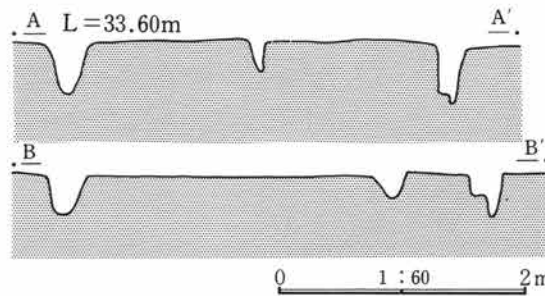
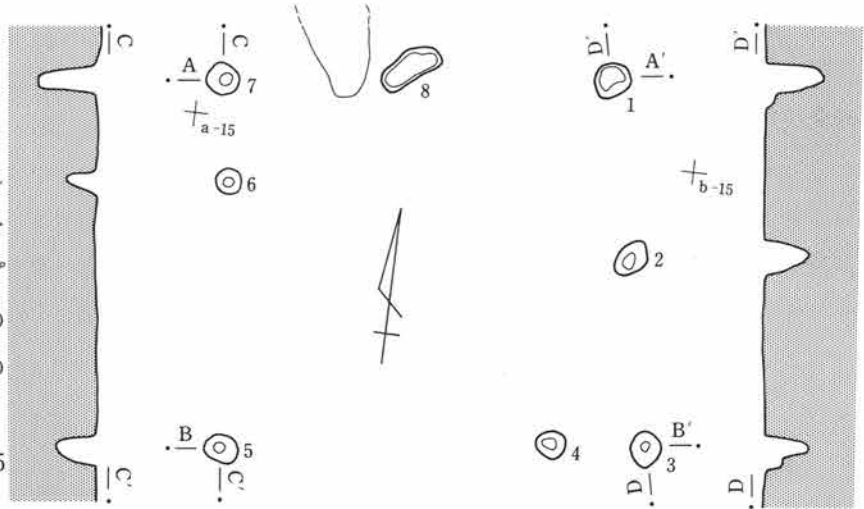
(第115図 PL-22)

位置 F区A-14・15グリッド  
4～6号は柱穴が集中している一画から小型の建物を確認した。各建物は変則的プランであった。軸方向や軒のラインは異なり、同時存在の建物群とは考えにくい。

規模 梁行2,90m×桁行3,35m (南側) 3,10m (北側)

軸方向 N-6°-W

備考 P4, P6が中央から大きくそれ、2間×2間の変則的な建物となる。南側が開く台形状の平面プランを呈している。柱間はまちまちである。四隅の柱穴が深くなる傾向がある。



第115図 OT-4号掘立柱建物

OT-4号掘立柱建物

	径(cm)		深さ(cm)
	南北	東西	
1	30	30	45
2	27	27	36
3	30	27	33
4	21	24	21
5	24	27	30
6	18	21	24
7	27	28	52
8	24	39	24

OY-5号掘立柱建物

(第116図 PL-22)

位置 F区u-12・13グリッド  
本建物付近には柱穴が多いが、大きめの柱穴から建物を復元した。

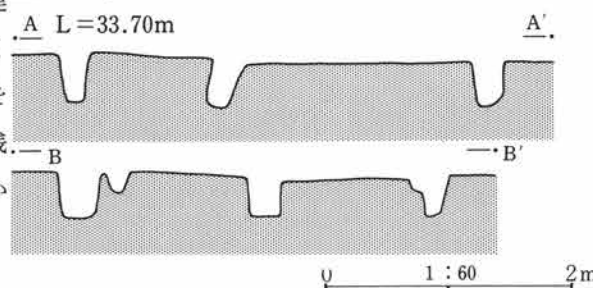
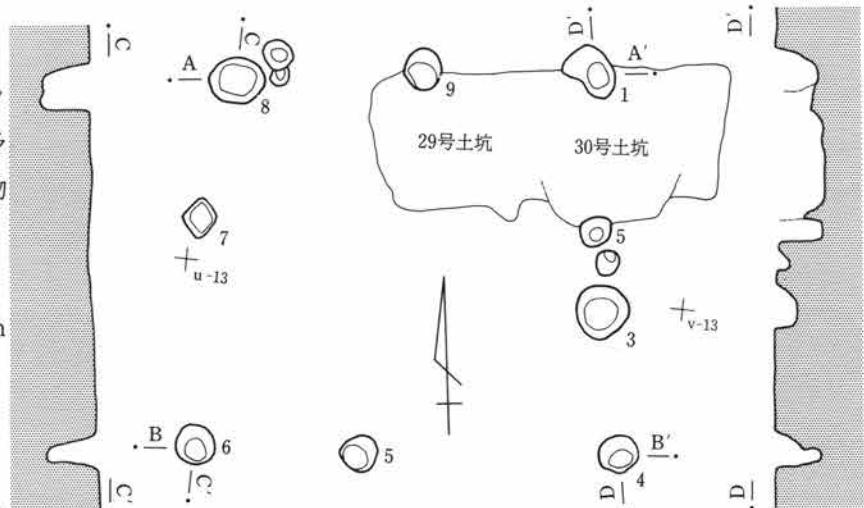
規模 梁行2,90m (西側)  
3,05m (東側) × 桁行3,30m  
(南側) 2,75m (北側)

軸方向 N-5°-W前後か

重複 29・30号土坑

備考 2間×2間の南面の建物と思われる。南側が大きく開いた台形状の平面プランを呈している。P3とP7は浅い柱穴で本建物に伴うものか分からない。

柱間は一定ではない。



第116図 OT-5号掘立柱建物

OT-5号掘立柱建物

	径(cm)		深さ(cm)
	南北	東西	
1	38	46	0
2	24	26	48
3	42	42	18
4	30	30	36
5	30	28	36
6	32	30	38
7	34	28	20
8	36	44	36
9	34	30	28

OT-6号掘立柱建物 (第117図 PL-22)

位置 F区x・y-12グリッド 柱穴の多い一画にあり、付近には図示した以外に30基以上の柱穴があるが、規則的に並ぶやや大きめの柱穴から建物を復元した。

規模 梁行3,40m (西側) 3,60m (東側)  
 ×桁行3,85M (南側) 4,10m (北側)

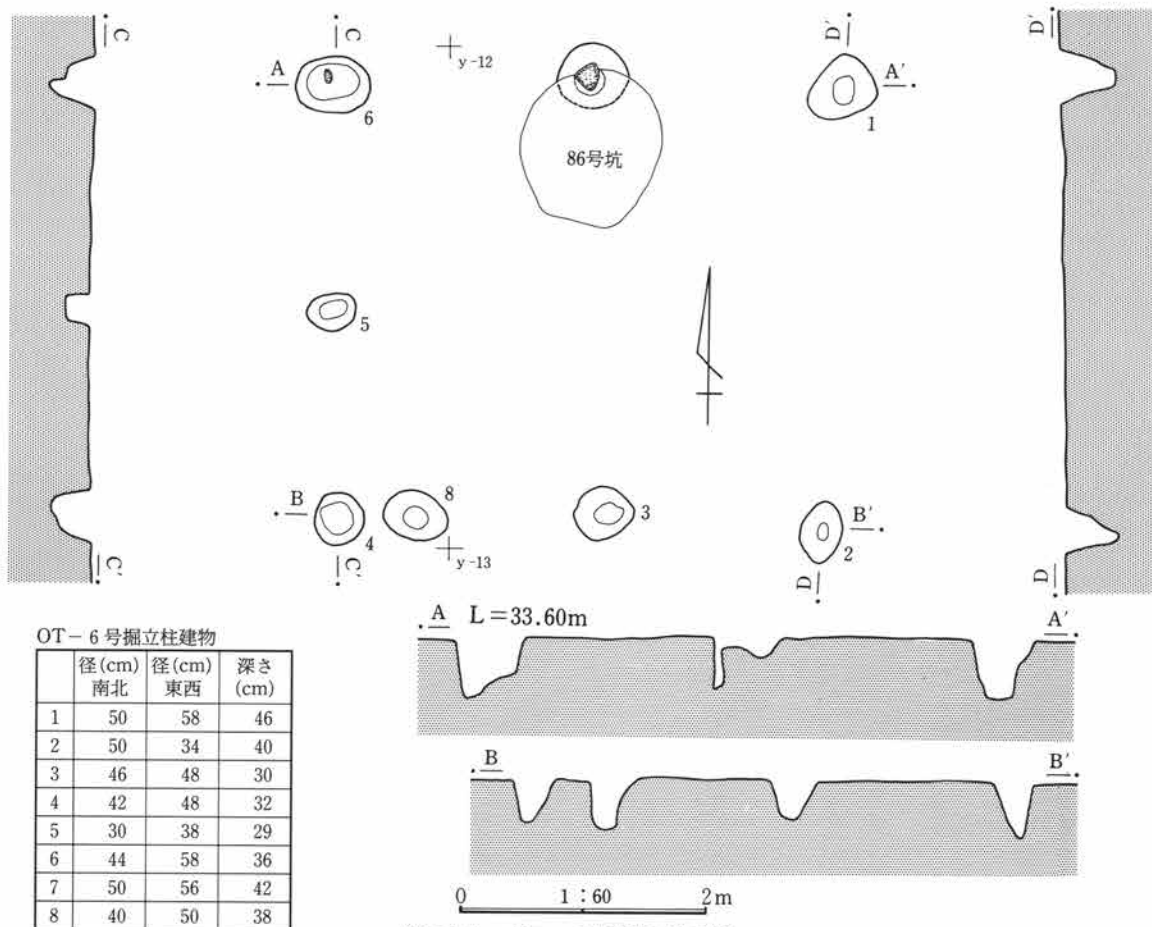
重複 86号土坑

軸方向 N-2°-W

備考 東側中央の柱穴 (P1-P2間) は精査しても確認できなかったが、2間×2間の南面の建物と思われる。P8は他の柱穴と近似した規模であるが、本建物に伴うものかは分からない。北側へ開いてい

て台形状の平面プランになる。柱間はまちまちだが、北側やP3-P4間は2m前後になっている。

P7の中央に径20cmの礫が底面から大きく浮いた状態で出土している。上面が平坦で礎石状であったが、他の柱穴には痕跡がなく、底面も深く先細り状のものが多いので、混入した礫と考えたい。



第117図 OT-6号掘立柱建物

AK-1号掘立柱建物 (第118・119図 PL-22)

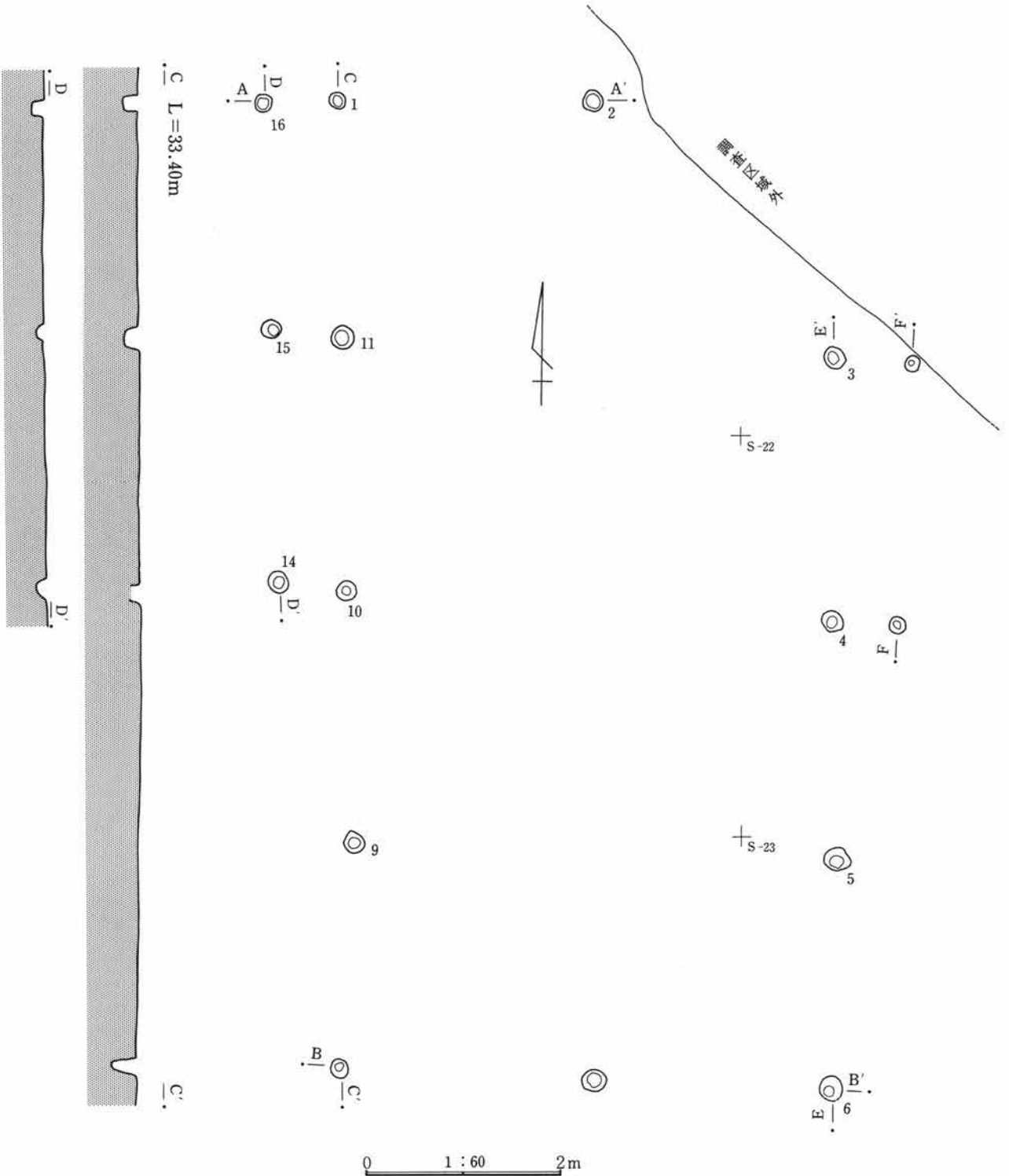
位置 I区q・r・s-21・22・23グリッド 北東 軸方向 N-91°-E

隅は調査範囲外となり、全容は明らかでない。

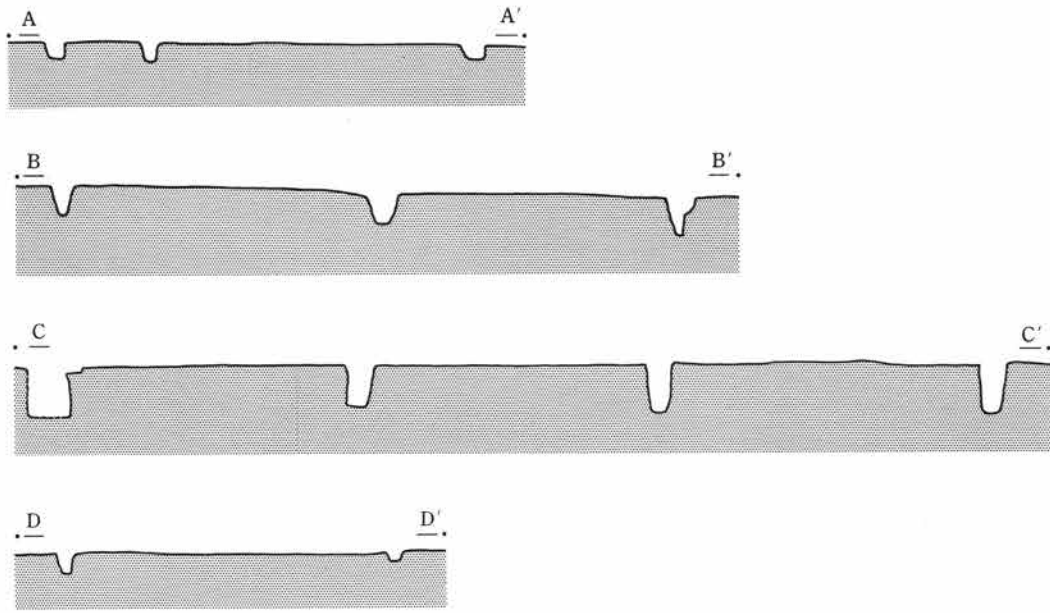
規模 梁行4,65m×桁行9,75m (西側)

備考 南北方向に長い2間×4間の建物となった。

語呂から嫌われる企画となったが、北側2間分の東



第118図 AK-1号掘立柱建物



西両面に底の付く変則的な建物である。北東隅は確認出来なかったが、建物の北側の限界は捉えられた。底の位置から、南側半分は土間になることを想定し、床面の精査に勤めたが、踏み固め面や床の汚れ等の痕跡は確認出来なかった。また、北側の庇付き母屋と、南側の別屋の2棟の並びも想定したが、母屋の南側に別屋は建てにくい。

この建物の区画内には小ピットがあったが、内部の構造を類推できるものではなかった。後世のものと調査段階で判断した。

各柱穴は小規模で浅いが、東側の柱穴のほうが深くなる傾向がある。柱間はまちまちで芯々距離は2.5m前後となっているが、P5-P6、P8-P9間はやや狭くなっている。底の張り出しは75cmで柱間に比べて著しく短い。

AK-1号掘立柱建物

	径(cm)		深さ (cm)
	南北	東西	
1	21	21	39
2	21	24	39
3	24	27	33
4	27	24	30
5	21	24	24
6	18	16	24
7	21	21	
8	18	21	
9	24	24	15
10	15	18	15
11	21	21	10
12	15	15	9
13	18	18	15
14	21	21	11
15	18	21	6
16	18	18	12

0 1 : 60 2m

第119図 AK-1号掘立柱建物断面図

AY-2号掘立柱建物 (第120図 PL-22)

位置 I区 r・s-0・24グリッド 阿久津宮内遺跡では2棟しかない建物の1つで、AK-1号建物の南側に隣接しているが、軸方向が異なり、同時期に存在していたとは考えにくい。

規模 梁行4.75m、×

桁行4.50m (南側)・4.25m (北側)

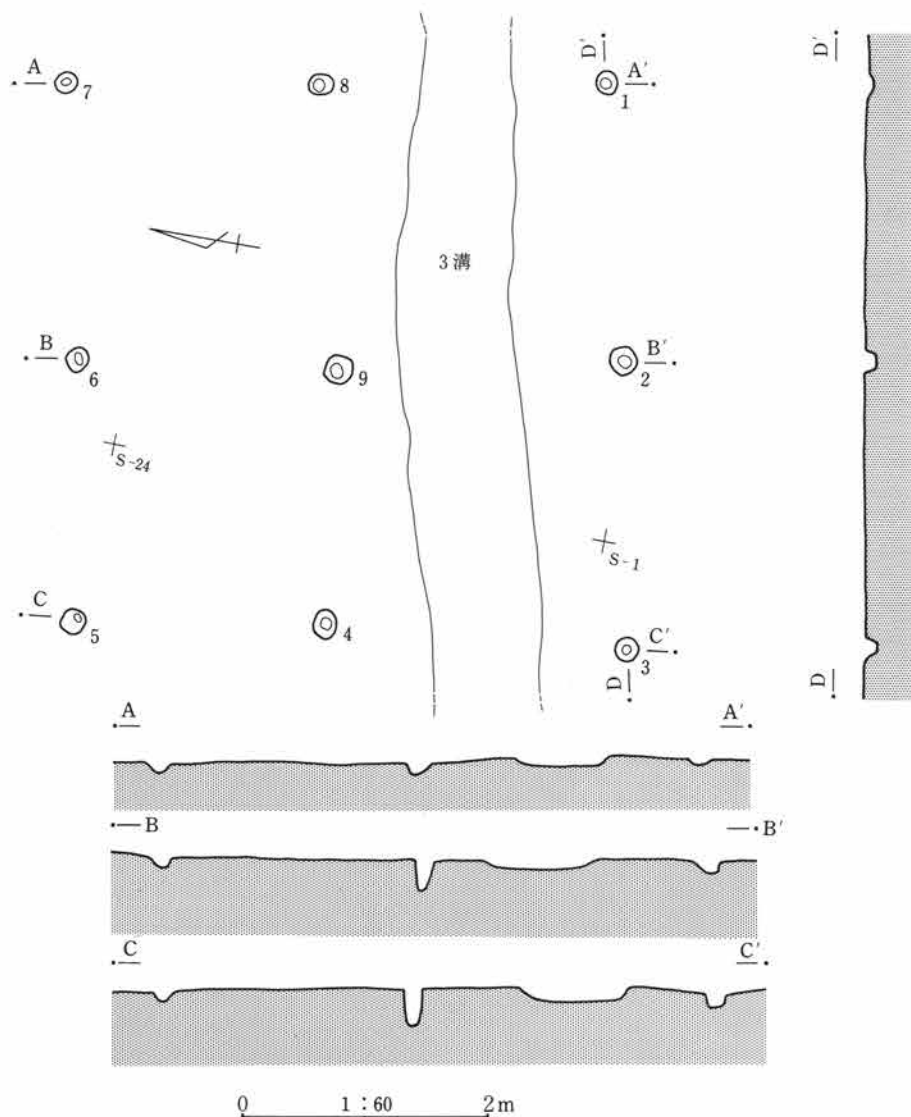
軸方向 N-10°-E

備考 2間×2間の総柱建物であるが、柱穴は小規模で、杭を打ち込んだ痕跡と思われる。倉庫的な建物と断定するのはむずかしい。P9が南側へ若干ず

れているが、比較的規則的な柱穴配置となっている。北辺が南辺よりやや短く、台形気味の平面となっている。重複する3号溝とは新旧は不明だが、軸方向が近く、近接する時期となる可能性もあろう。

AK-2号掘立柱建物

	径(cm) 南北	径(cm) 東西	深さ (cm)
1	18	18	6
2	21	21	9
3	18	18	10
4	18	21	27
5	21	21	6
6	18	21	7
7	18	18	7
8	18	18	9
9	21	24	24



第120図 AK-2号掘立柱建物

#### 4 溝

安養寺森西遺跡で35条、大館馬場遺跡で6条、阿久津宮内遺跡では9条の溝を調査した。道路脇の側溝的なもの、水路的なもの、区画溝と思われるもの等性格・規模はまちまちであるが、溝として一括した。遺物を出土しない遺構が多く時期決定できないものが大半だった。なお、中世館跡の外郭を作る堀(第84・85図)は除外してある。

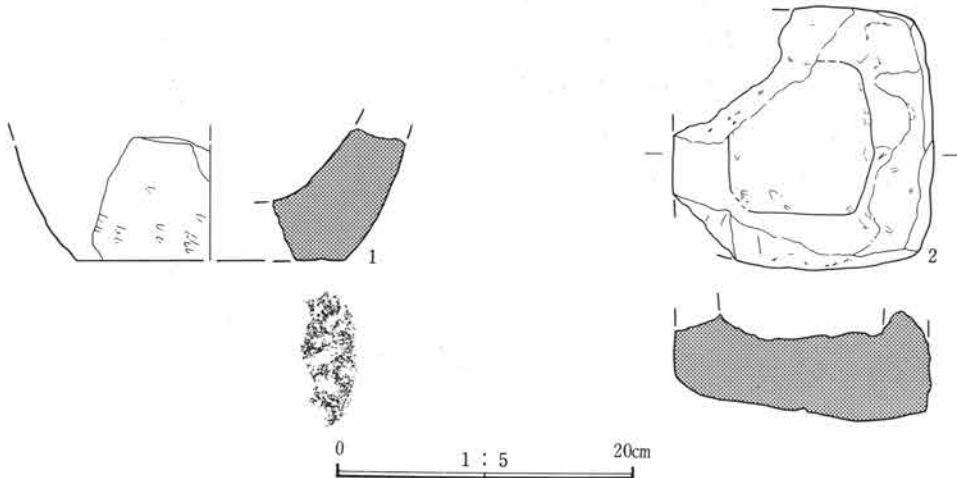
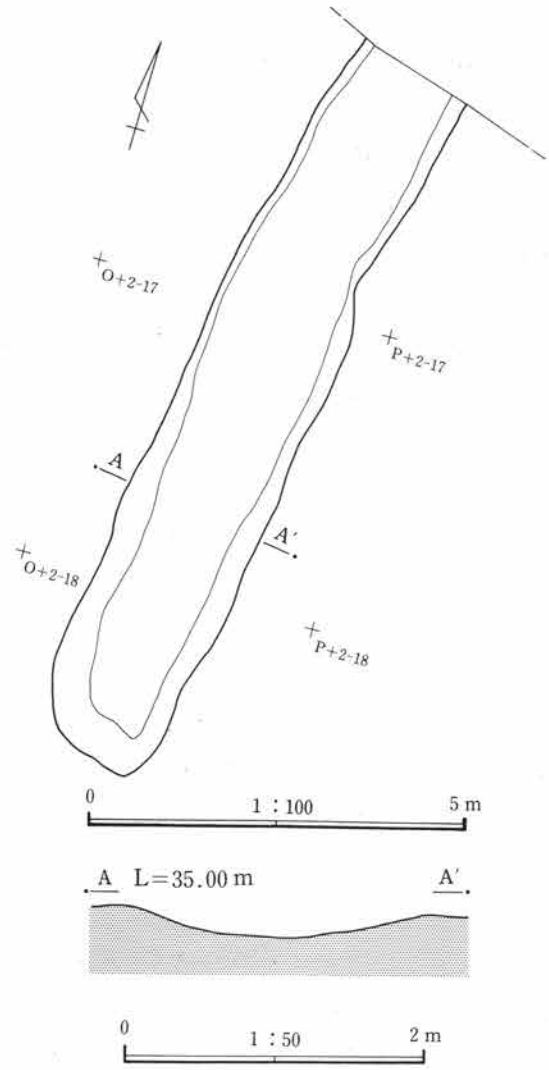
#### AY-1号溝 (第121図 PL-30)

**位置** A区P-16グリッド～O・P-18グリッド  
調査した溝の中では最も北の遺構の少ない一画にあり、北側は調査区域外であった。この付近からは中世以前の遺物の出土はない。

**規模** 全長 [10.1m]

**深さ** 20cm

**備考** 砂質土の地山に黒色味の強い落ち込みとして確認した。調査範囲では幅広く直線的な溝で、N-15°-Eの走向である。埋没土はほぼ一層で、流路の痕跡はない。底面はやや平坦で、立ち上りも緩やかである。埋没土内より石製品破片を2点出土している。



第121図 AY-1号溝および出土遺物

AY-2号溝 (第122図 PL-23)

位置 A区y-3グリッド～B区b-5グリッド

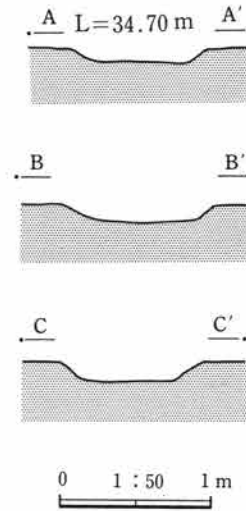
地山は砂質土で、遺構の極めて少ない一画にある。

規模 全長 [13.5m]

深さ 6～10cm

重複 3号溝 切り合いは不明である。

備考 南隅は流路状の砂土とシミ状の変色域につながり、全容は不明である。走向N-49°-Wで直線的で、全体に浅い溝である。上面幅は60～110cmである。底面はほぼ平坦だが緩やかに波打つような凹凸があり、5cm前後のレベル差がある。水路の痕跡はない。性格不明の溝である。遺物の出土はなかった。



AY-3号溝 (第122図 PL-23)

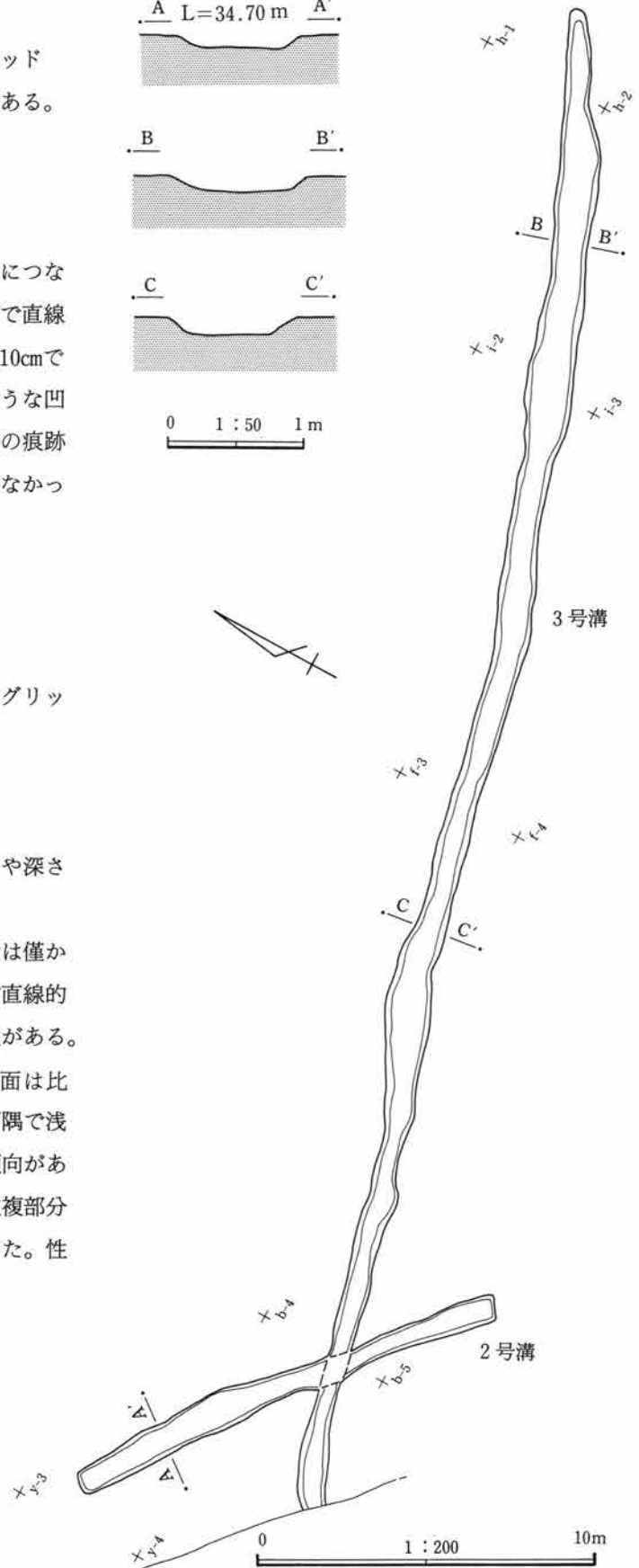
位置 A区y-4・5グリッド～B区k-1グリッド 遺構の極めて少ない一画にある。

規模 全長 [44.8m]

深さ 13～19cm

重複 2号溝 切り合いは不明であるが走向や深さから同時存在とは考えにくい。

備考 西側は調査区域外にある。確認部分では僅かな蛇行があるが、走向はN-79°-Eでほぼ直線的であるが、西隅付近から屈曲が始まる可能性がある。上面幅は75～130cmである。全体に浅く、底面は比較的平坦だが底面レベルは多少差があり、両隅で浅くなっている。また幅広部分では深くなる傾向がある。立ち上りは緩やかである。2号溝との重複部分では、本溝のほうが4cm前後レベルが低かった。性格不明の溝である。遺物の出土はなかった。



第122図 AY-2・3号溝



AY-4号溝 (第123図 PL-23)

位置 B区1-9グリッド～s-4・5グリッド  
遺構の少ない一画にある。

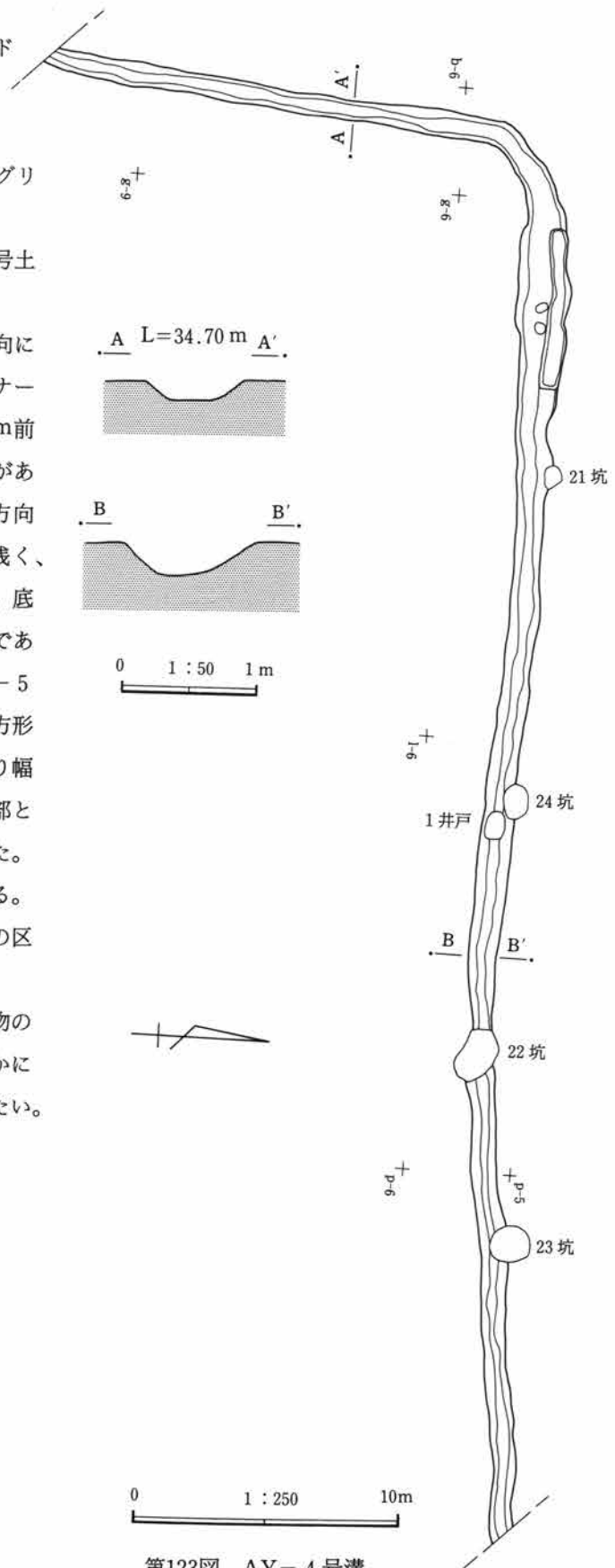
規模 全長 [69.0m]

深さ f-7グリッド付近では15.5cm、n-5グリッド付近では25.0cm。

重複 24号土坑、1号井戸に先行。21・22・23号土坑と重複。

備考 調査範囲では東西方向に約50m、南北方向に約18mあり、L字状に屈曲する溝である。コーナー部分の屈曲は比較的緩やかである。上面幅は1m前後でほぼ一定している。東西方向は僅かな蛇行があるが走向はおおよそN-87°-Eである。南北方向は直線的で走向はN-5°-Eである。全体に浅く、底面はほぼ平坦だが、地山の凹凸にそうように、底面レベルは一定していない。立ち上りは緩やかである。水路の痕跡は認められない。g-5からh-5グリッドにかけて、長さ6m、幅70cm前後の長方形に掘り直し部分があり、この一画は深さ30cmあり幅も広がっている。大型の屋敷の方形区画の一部と思われるが、南側、東側の溝は確認できなかった。区画内には1号掘立柱建物、2～4号井戸がある。掘立柱建物は軸方向が東西溝とほぼ同じで、この区画内の小型建物になる可能性がある。

遺物の出土は全くなかったが、中世以前の遺物の出土のほとんどない一画にあり、本建物に明らかに先行する遺構もないことから、近世の溝と考えたい。



第123図 AY-4号溝

AY-5号溝 (第124図)

位置 B区u-9~w-9グリッド 遺構の少ない一画にあり、重複はない。

規模 全長 [5.3m]

深さ 8~13cm

備考 東側は調査区域外にある。西隅は浅く、立ち上りもきわめて緩やかで、西へ続いていた部分が削平されて確認できなかった可能性がある。上面幅は60cm前後で一定している。走向はN-88°-Wではほぼ直線的だが、東隅は北方へ小さく曲がっている。水路の痕跡は認められない。4号溝の東西方向部分の南側15mにあって同溝とほぼ平行に走向する溝で、4号溝の作る屋敷区画に関連する遺構と思われる。

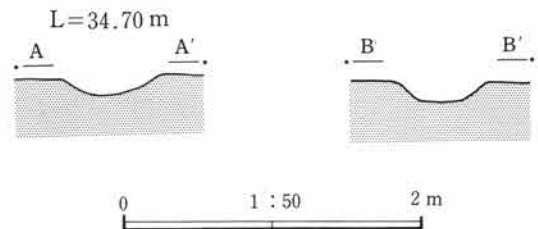
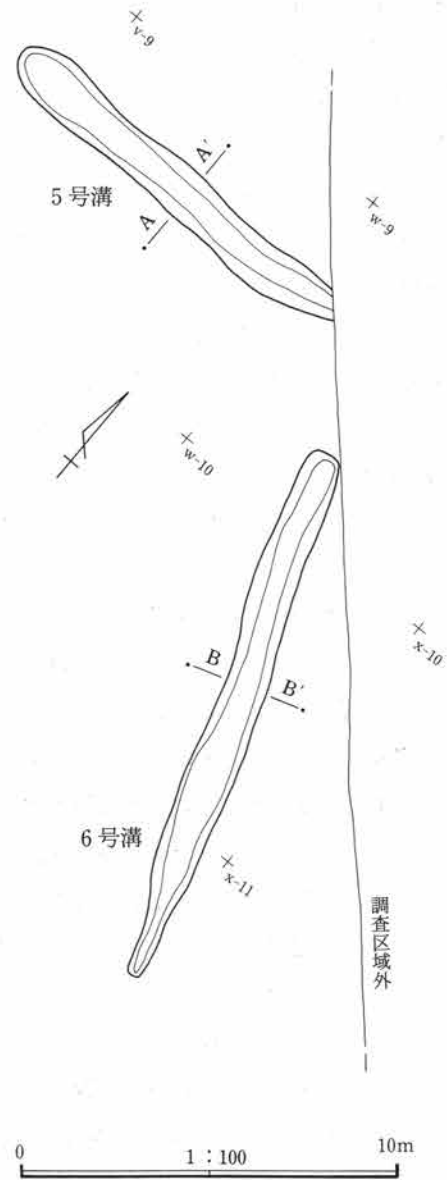
AY-6号溝 (第124図)

位置 B区w-9~w・x-11グリッド 5号溝同様に重複遺構はない。流路跡状の砂質土部分にかかり、水路には適さない一画にある。

規模 全長7.4m

深さ 7~14cm

備考 走向はN-21°-Wで、直線的な溝である。北隅の落ち込みは明瞭で、溝の端を捉えたと思われるが、南隅は浅く不明瞭になり、さらに南方へ続いていたものと思われる。底面はほぼ平坦で立ち上りも緩やかである。不明瞭な南隅を除けば上面幅は60cm前後でほぼ一定で、5号溝に似ている。走向は5号溝とかけ離れているが、同溝と1.5mの間隔が開いている。踏み固めは認められなかったが、この間に道のあった可能性がある。



第124図 AY-5・6号溝

AY-7号溝 (第125図)

位置 B区n-17~o-17グリッド

規模 全長 [5.3m]

深さ 12~21cm

重複 8号溝とは新旧不明、62号土坑と同時期か。

備考 底面は東側へ向かって緩やかに下降し62号土坑につながっている。走向N-71°-Wで、西隅は南側へ曲がる大きな屈曲の始点のようだ。

AY-8号溝 (第125図)

位置 B区o-17~o-18グリッド

規模 全長 [6.3m]

深さ 6~17cm

重複 7号溝とは新旧不明、62号土坑に先行。

備考 南側は調査区域外で全容は不明。北隅は緩やかに立ち上がっている。走向はN-8°-Eで直線的な溝である。

AY-9号溝 (第125図)

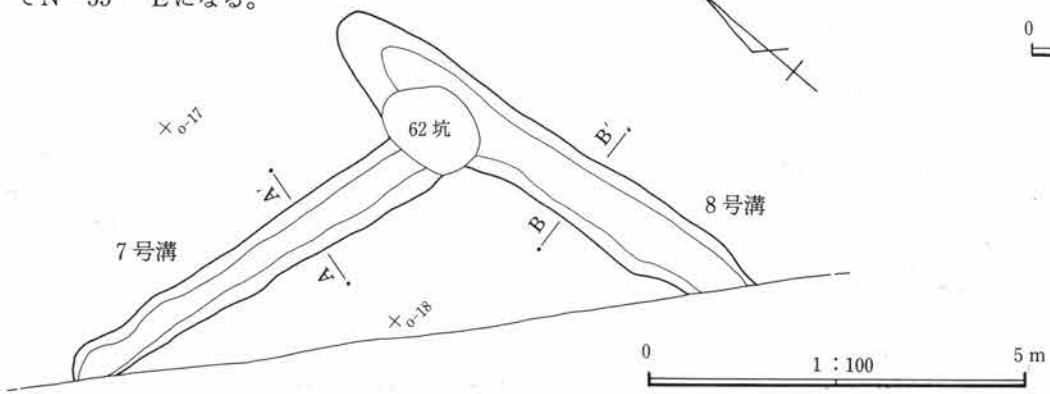
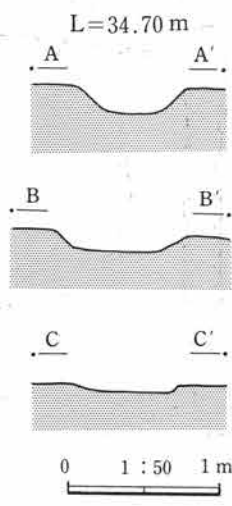
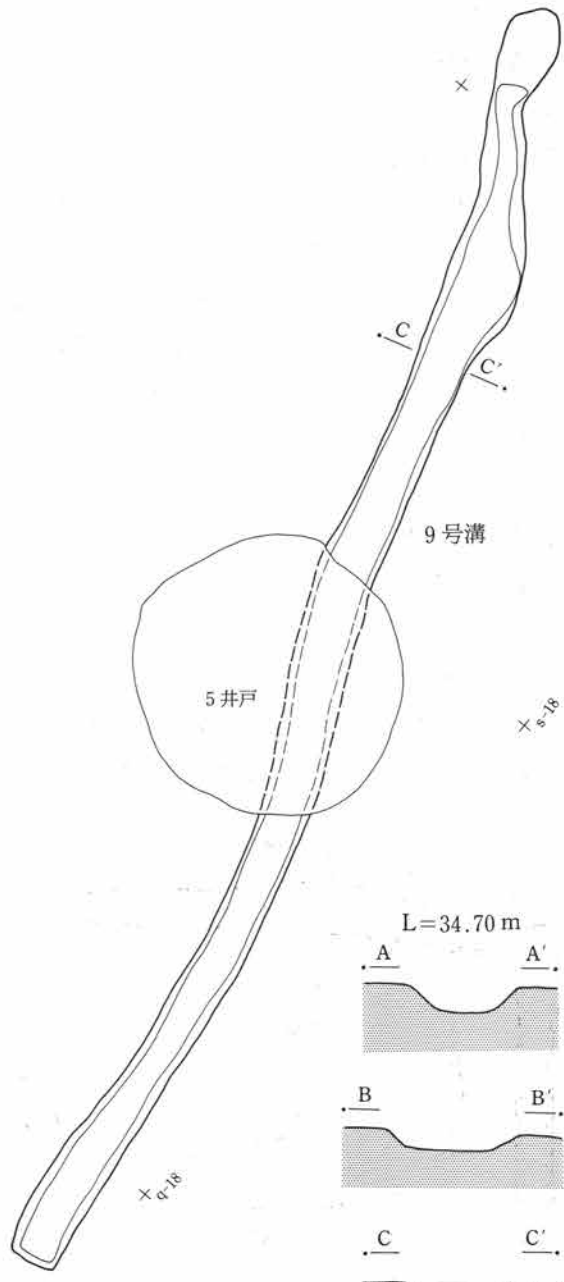
位置 B区p-17グリッド~B区t-16グリッド

規模 全長18.1m

深さ 5~13cm

重複 5号井戸

備考 西側の延長上に7号溝があり、関連する遺構の可能性はある。5号井戸とのセクションから本溝が先行または同時存在であることがわかる。また71号土坑を避けるように小さく蛇行しており、同時存在と考えられる。走向は西側でN-68°-E、東側でN-55°-Eになる。



第125図 AY-7・8・9号溝

AY-10号溝 (第126図)

位置 B区w-18~C区a-15・16グリッド

規模 全長16.7m

深さ 9~15cm

備考 南北方向の7.7m部分(走向N-2°-E)と東西方向部分9m(走向N-84°-E)からなる。南隅は立ち上りが明瞭だが、東隅はやや不明瞭になる。底面は北側の方が5cmほどレベルが低い。東西走向部分の中央は南側には深さ15cmの張り出しがあるが、重複する土坑の可能性もある。

AY-12号溝 (第126図)

位置 B区w-19~C区d-16・17グリッド

規模 全長26.8m

深さ 13~23cm

重複 3号墓坑に先行する。

備考 上面幅1.3~2.1mで走向N-64°-Eの直線的な溝である。11号溝の南側にほぼ平行している。東側は調査区域外で、西隅は不明瞭になっていて、浅い溝がさらに西方へ続いていたと思われる。遺物の出土はなく時期不明だが、墓坑に先行しているので中世の遺構の可能性がある。

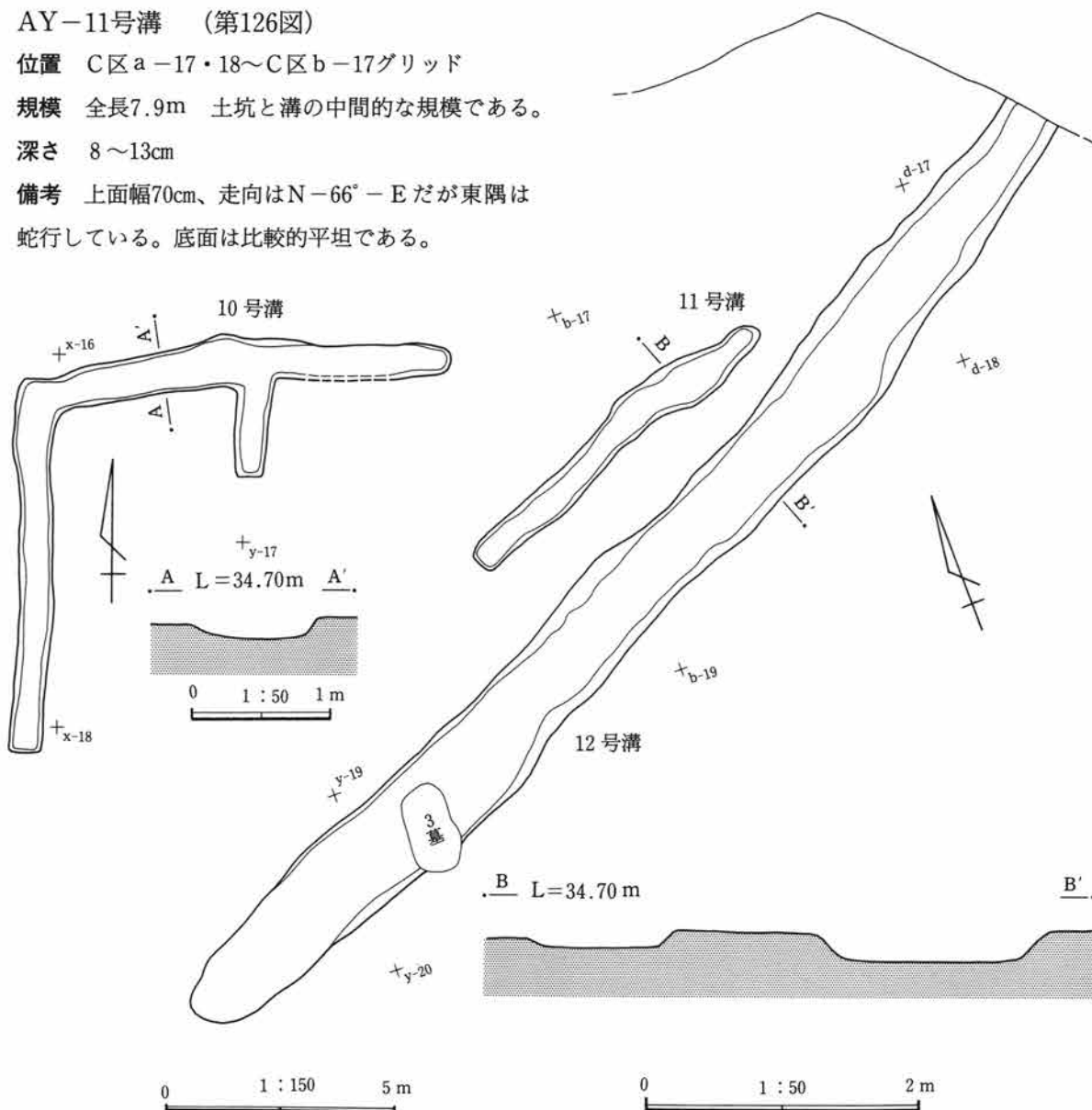
AY-11号溝 (第126図)

位置 C区a-17・18~C区b-17グリッド

規模 全長7.9m 土坑と溝の間中間的な規模である。

深さ 8~13cm

備考 上面幅70cm、走向はN-66°-Eだが東隅は蛇行している。底面は比較的平坦である。



第126図 AY-10・11・12号溝

AY-13号溝 (第127図 PL-23)

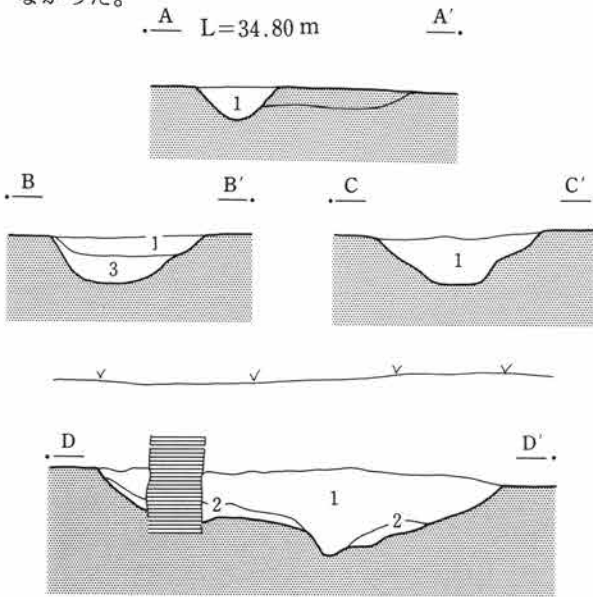
位置 C区d-24~C区j-11グリッド

規模 全長 [56.6m]

深さ 西から順に南側は40cm前後、北側は21cm前後になるが地山の高さによるもので底面レベルに大きな差はない。

重複 126・127号土坑に先行する。

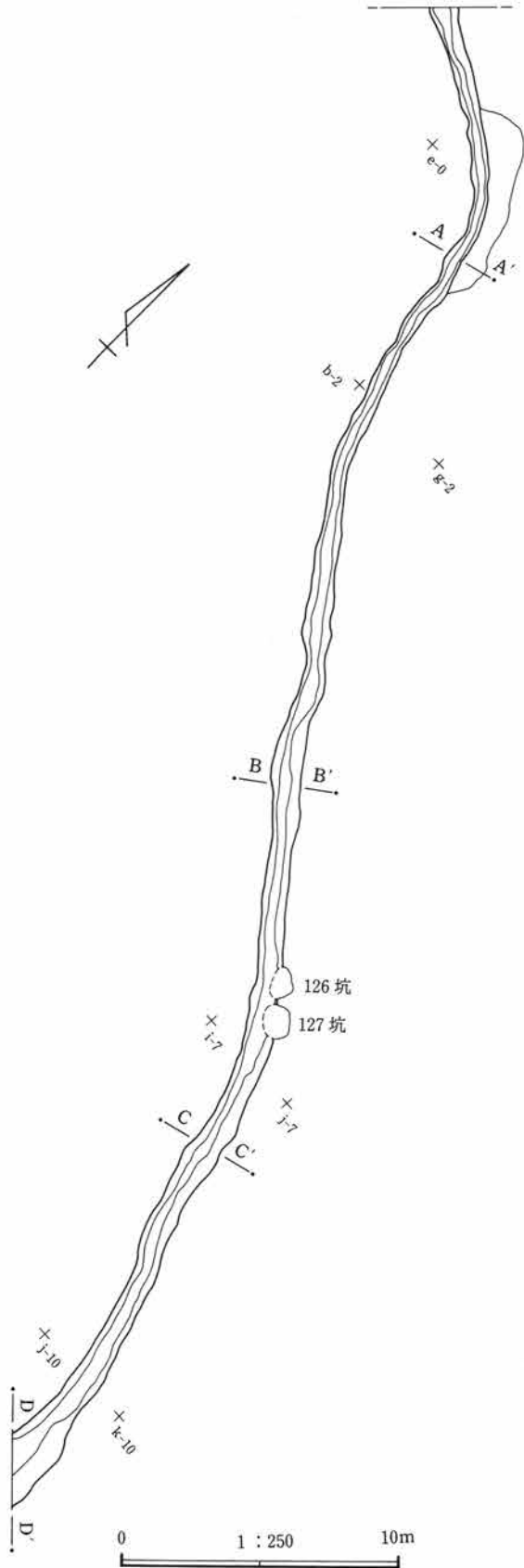
備考 砂質土の地山に粒子の細かな埋没土の落ち込みとして確認した。南端は調査区域外、北端は流路状のシミにつながり不明瞭になる。緩やかな蛇行のある流路跡状の溝である。走向は溝中央付近でN-52°-Eだが、両隅は西方へ大きく振れている。またf-0グリッド付近には性格不明のテラス状の平坦部分がある。上面幅は北隅で60cm、南隅で110である。底面には凹凸があり、レベルは一定でない。地山は砂質土で常時水路とするには不向きな場所で、埋没土にもラミナ状の堆積はみられない。洪水で一時的にできた流路跡の可能性が強い。遺物の出土はなかった。



AY-13号溝土層説明

- 1 にぶい暗褐色土層 標準土層のII層およびIII層。こぶし大の礫を少量含む。
- 2 暗褐色土層 やや砂質のしまりに欠ける層。アズキ大のFPを含む。
- 3 褐色土層 やや粒子の細かな弱粘性土。

0 1 : 50 2 m



第127図 AY-13号溝

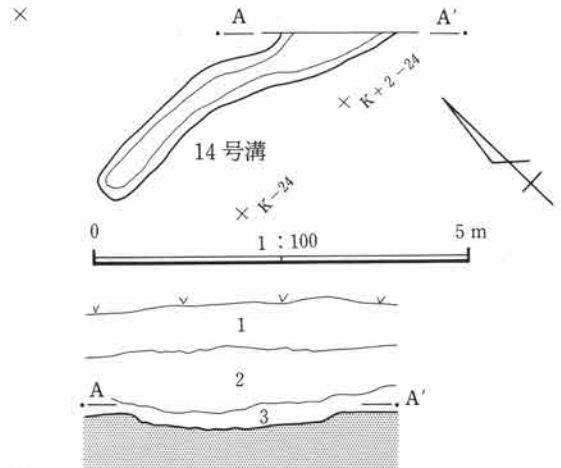
AY-14号溝 (第128図)

位置 C区j-23~C区k-23グリッド

規模 全長 [4.0m]

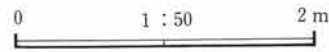
深さ 7~12cm

備考 東側は調査区域外で確認できたのは一部のようだ。西隅はきちんと立ち上がり、端部まで把握できたと思われる。西隅で上面幅50cm、走向N-87°-Wで直線的だが、中央から南側に屈曲し、幅も一定でない。水路の痕跡はなく、区画溝としては蛇行しており、性格不明である。遺物の出土はなかった。



AY-14号溝土層説明

- 1 暗褐色土層 耕作土で標準土層のI層。
- 2 褐色土層 粒子の細かな非粘性土層。しまり強い。FPを含む。
- 3 褐色土層 やや粒子の粗い非粘性土層。しまり弱い。FPを含む。



AY-15号溝 (第128図 PL-23)

位置 C区n・o-2~C区p-10グリッド

規模 全長 [32.0m]

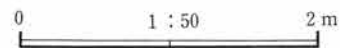
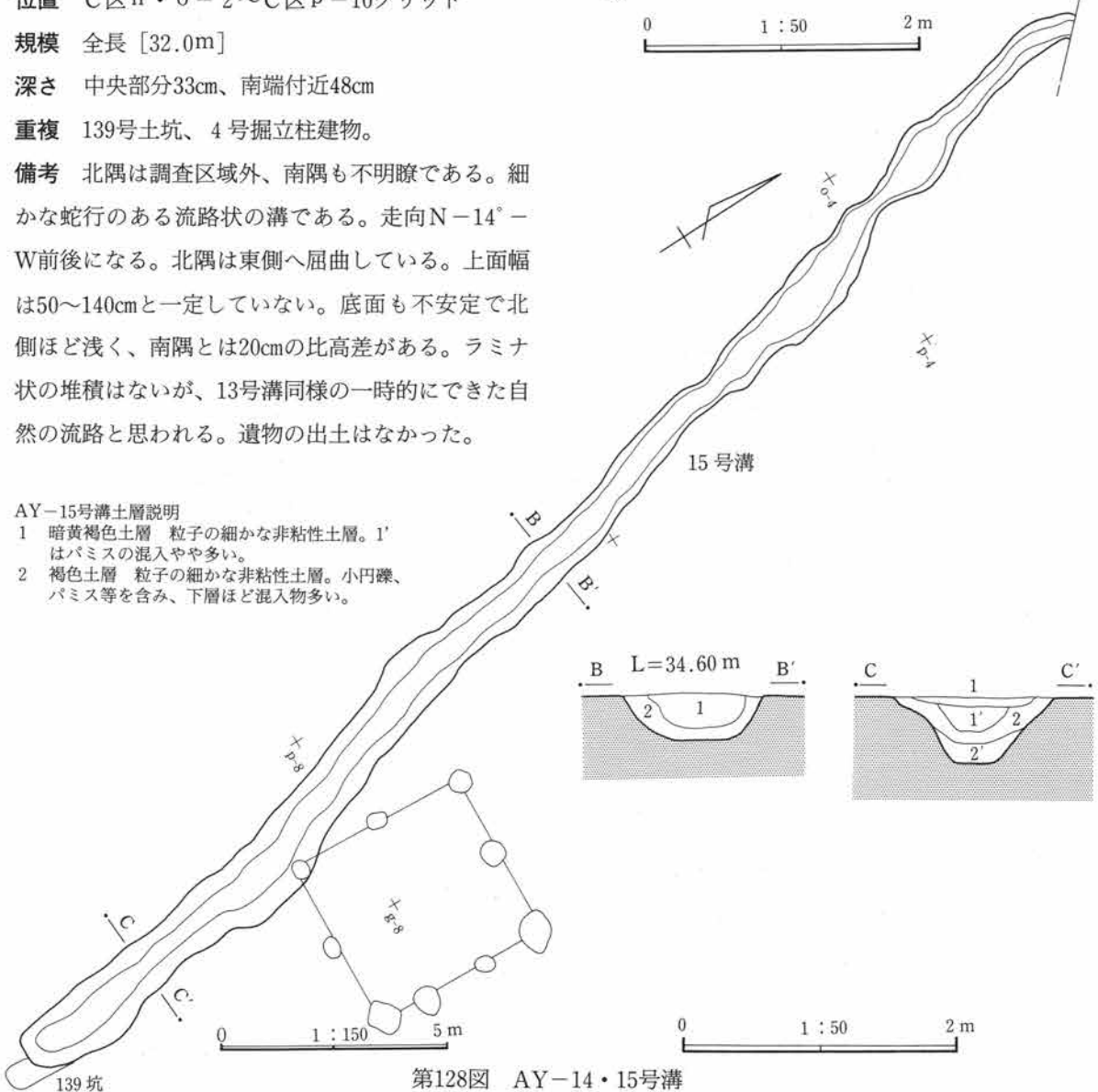
深さ 中央部分33cm、南端付近48cm

重複 139号土坑、4号掘立柱建物。

備考 北隅は調査区域外、南隅も不明瞭である。細かな蛇行のある流路状の溝である。走向N-14°-W前後になる。北隅は東側へ屈曲している。上面幅は50~140cmと一定していない。底面も不安定で北側ほど浅く、南隅とは20cmの比高差がある。ラミナ状の堆積はないが、13号溝同様の一時的にできた自然の流路と思われる。遺物の出土はなかった。

AY-15号溝土層説明

- 1 暗黄褐色土層 粒子の細かな非粘性土層。1'はバミスの混入やや多い。
- 2 褐色土層 粒子の細かな非粘性土層。小円礫、バミス等を含み、下層ほど混入物多い。



第128図 AY-14・15号溝

AY-16号溝 (第129図 PL-23・30)

位置 C区t-8~C区m-13・14グリッド

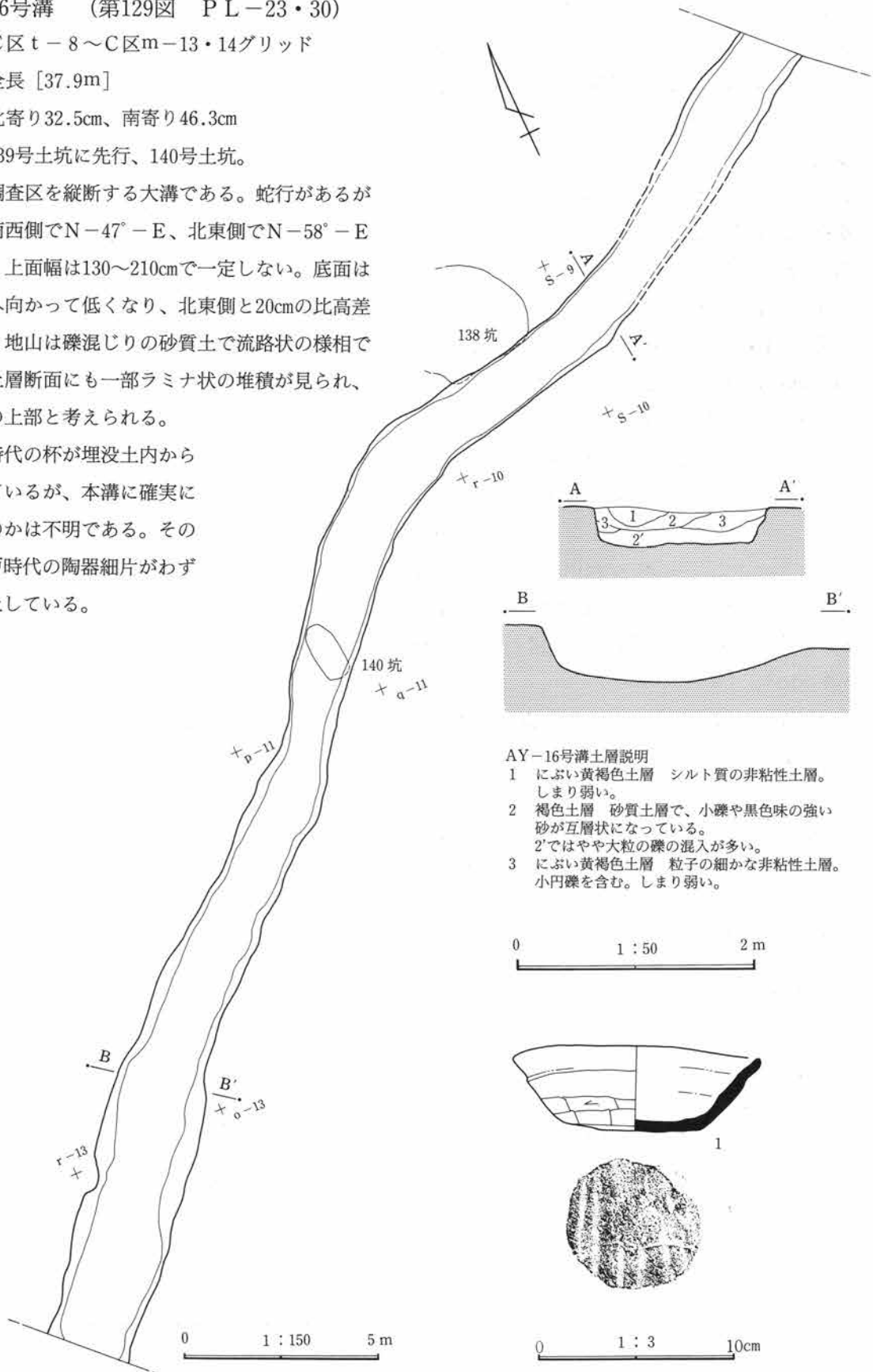
規模 全長 [37.9m]

深さ 北寄り32.5cm、南寄り46.3cm

重複 139号土坑に先行、140号土坑。

備考 調査区を縦断する大溝である。蛇行があるが走向は南西側で $N-47^{\circ}-E$ 、北東側で $N-58^{\circ}-E$ になる。上面幅は130~210cmで一定しない。底面は南西側へ向かって低くなり、北東側と20cmの比高差がある。地山は礫混じりの砂質土で流路状の様相である。土層断面にも一部ラミナ状の堆積が見られ、流路跡の上部と考えられる。

平安時代の杯が埋没土内から出土しているが、本溝に確実に伴うものかは不明である。その他に江戸時代の陶器細片がわずかに出土している。



AY-16号溝土層説明

- 1 におい黄褐色土層 シルト質の非粘性土層。しまり弱い。
- 2 褐色土層 砂質土層で、小礫や黒色味の強い砂が互層状になっている。2'ではやや大粒の礫の混入が多い。
- 3 におい黄褐色土層 粒子の細かな非粘性土層。小円礫を含む。しまり弱い。

第129図 AY-16号溝および出土遺物

AY-17号溝 (第130図 PL-23)

位置 C区s-14~C区x-14グリッド 大型土坑の多い一画にある。また南側6mには掘立柱建物群、南側1.5mには8号井戸がある。

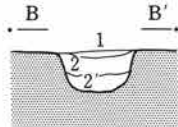
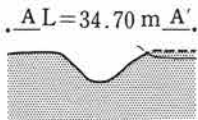
規模 全長19.2m

深さ 西寄り33cm、東寄り17cm

重複 180号土坑に先行する。176・190号土坑と重複。

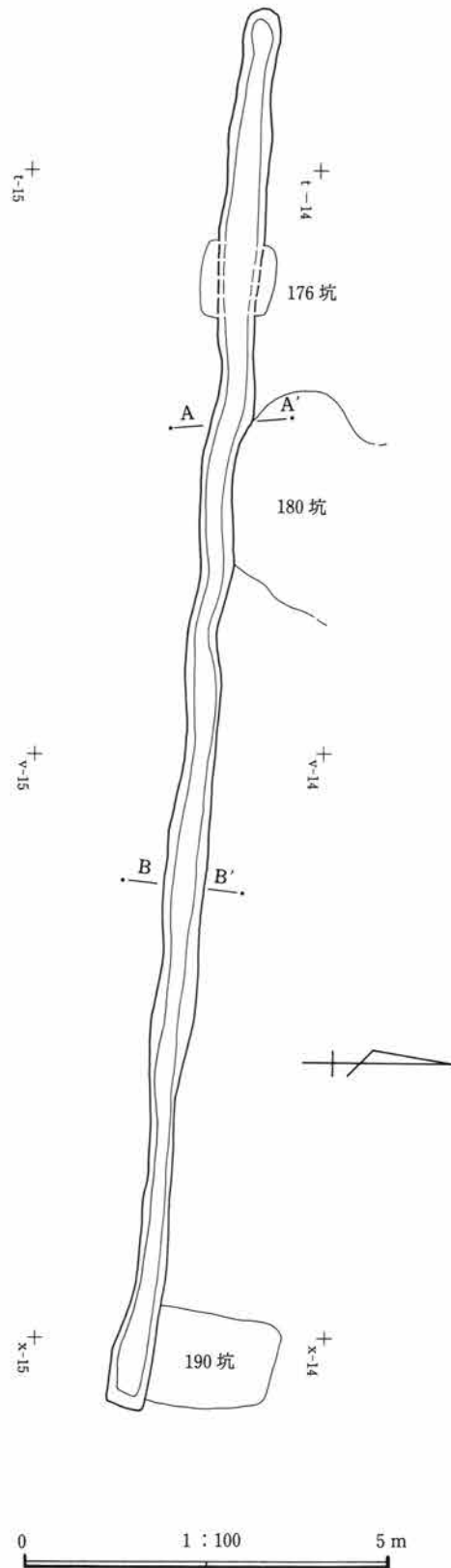
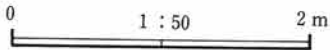
備考 両端とも立ち上りは明瞭で、溝の全容を把握できたと考えられる。走向はN-85°-Wで、小さな蛇行はあるが直線的な溝である。上面幅は30~60cmで比較的小規模である。底面は比較的平坦で西側のほうが低く、東側と10cmの比高差がある。地山はシルト質土で保水性はありそうだが、地山の崩壊土中心の埋没土からは水の流れた痕跡は認められない。4号溝の東西方向部分と類似点が多く、区画溝的なものと考えられる。本溝の東側にある18号溝とは4mの間隔がある。同溝は桶土坑が並行して作られており農道に接していたようだが、本溝も同一の性格のものと考えられる。

焙烙の底部破片10片、江戸時代の磁器細片を出土している。



AY-17号溝土層説明

- 1 暗褐色土層 粒子のやや細かな砂質土層。しまりあり。パミス散見。
- 2 暗黄褐色土層 ややしまり欠くシルト質土層。1層土がブロック状にまじり、2'では少ない。



第130図 AY-17号溝



AY-18号溝 (第131図 PL-23)

位置 C区y-12~C区w-23グリッド 竪穴住居、掘立柱建物等遺構の多い一面にあり、重複が多い。

規模 全長 [42.0m]

深さ 北側12cm、中央42cm

重複 9・11・14・18・26号住居に後出する。2Q2号土坑・8号掘立柱建物にも後出か。

備考 調査区を縦断する長い溝であるが、北側は痕跡だけで不明瞭になり、南側も流路跡状の砂質土が混じって不明瞭になる。南隅は砂質土を掘り過ぎたようで、図示部の幅は広すぎると考えられる。走向はN-11°-Eで直線的な溝である。上面幅も両端を除けば50~75cmでほぼ一定している。底面のレベルは南側に向かって下がり、北側と40cmの比高差がある。本溝に並行して桶土坑があり、区画溝で農道が隣接してあったものと思われるが、硬化面等の道の痕跡は確認できなかった。

重複住居からの混入品の土師器・須恵器の小破片を多量に出土しているが、軟質陶器鍋やかかわらけの小破片もわずかに混じていた。

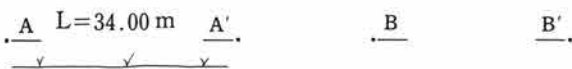
AY-19号溝 (第131図 PL-23)

位置 C区y-16・D区a-16~C区y-18グリッド

規模 全長9.9m 深さ 10cm

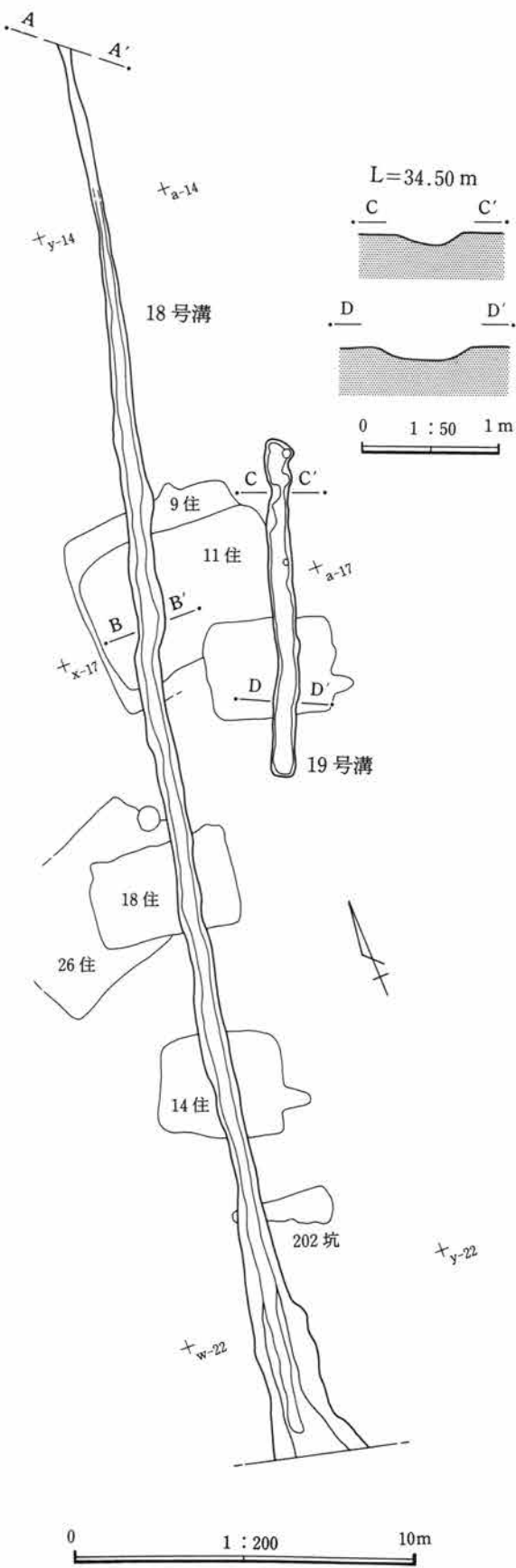
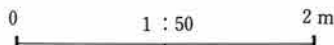
重複 9・11・19号住居，8号掘立柱建物に後出。

備考 18号溝の東側3mに隣接するが、走向はN-19°-Eとやや異なる。直線的な溝で、上面幅は70cmでほぼ一定している。重複遺構と攪乱の多い一面で底面は不明瞭であった。



AY-18号溝土層説明

- 1 褐色土層 しまりの強い砂質土層。微細なパミスを見出す。
- 2 におい黄褐色土層 しまりのやや弱いシルト質土層。1層土を小ブロック状に含む。2'では1層土が小粒で少量になる。



第131図 AY-18・19号溝

AY-20号溝 (第132図 PL-24)

位置 C区x-24~D区o-27グリッド

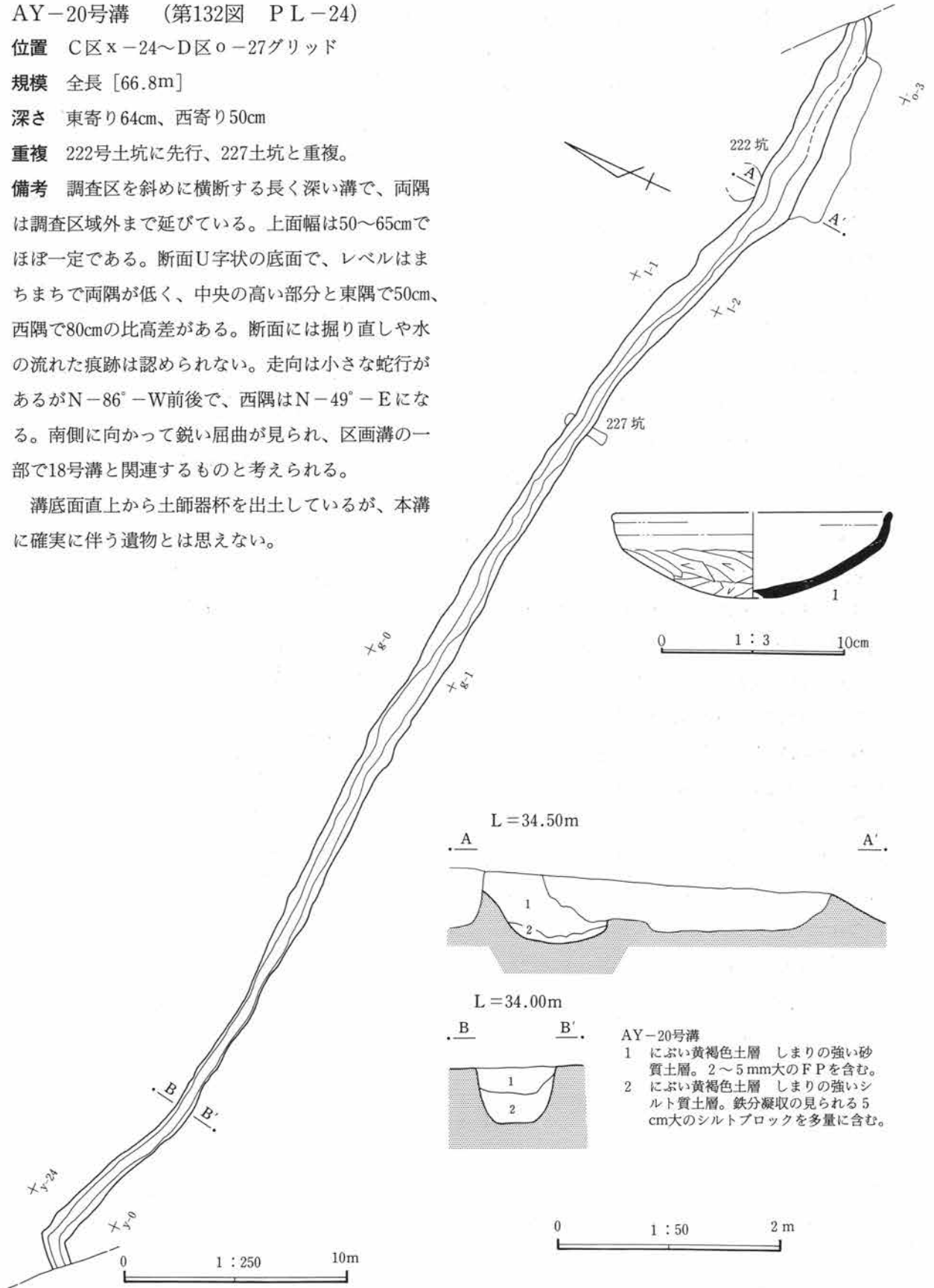
規模 全長 [66.8m]

深さ 東寄り64cm、西寄り50cm

重複 222号土坑に先行、227土坑と重複。

備考 調査区を斜めに横断する長く深い溝で、両隅は調査区域外まで延びている。上面幅は50~65cmでほぼ一定である。断面U字状の底面で、レベルはまちまちで両隅が低く、中央の高い部分と東隅で50cm、西隅で80cmの比高差がある。断面には掘り直しや水の流れた痕跡は認められない。走向は小さな蛇行があるがN-86°-W前後で、西隅はN-49°-Eになる。南側に向かって鋭い屈曲が見られ、区画溝の一部で18号溝と関連するものと考えられる。

溝底面直上から土師器杯を出土しているが、本溝に確実に伴う遺物とは思えない。



第132図 AY-20号溝および出土遺物

AY-21号溝 (第133図 PL-24)

位置 D区f・g-20~D区f-24グリッド

規模 全長16.1m

深さ 北寄り18cm、南寄り8cm

重複 1・10号住居に後出、211号土坑

備考 攪乱や重複遺構の多い一画にあり、不明瞭な部分も多かった。走向はN-10°-Eでほぼ直線的な溝である。上面幅は45~105cmで一定でない。底面レベルもまちまちである。区画溝と思われる。江戸時代の陶磁器細片を僅かに出土している。

AY-22号溝 (第133図)

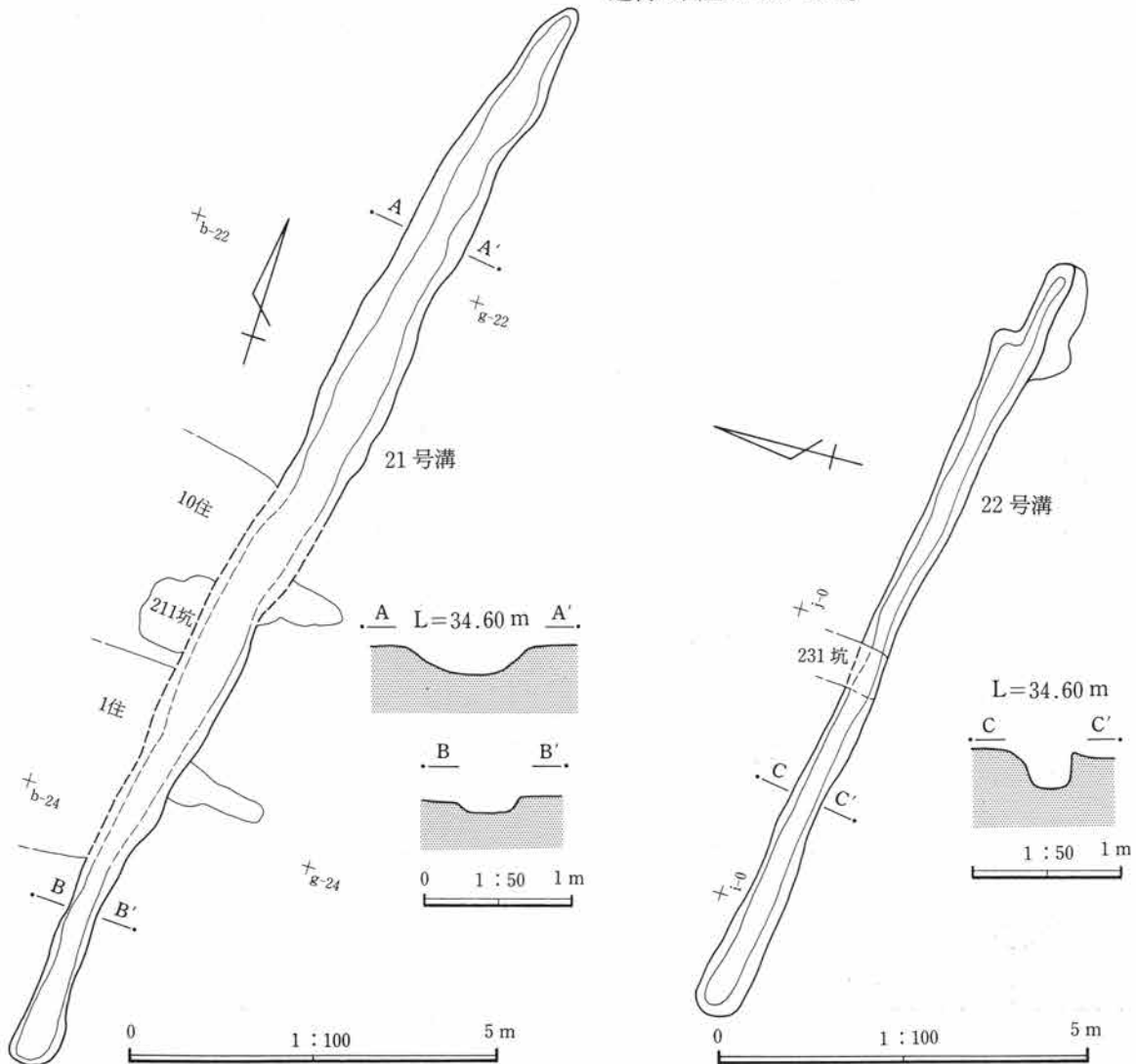
位置 D区h-0~D区k-0グリッド

規模 全長11.2m

深さ 西寄り27cm、東寄り14cm

重複 231号土坑

備考 走向N-80°-Wの直線的な溝である。上面幅は40~70cmで凹凸は少ない。東隅には掘り直しの痕跡が平面的に確認できた。底面は比較的平坦で両側がやや低く、中央にくらべ東隅は16cm、西隅で7cmの比高差があった。埋没土は粒子の細かな非粘性土でしまりなく、シルト質土をブロック状に含んでいた。水の流れた痕跡はない。20号溝の3m北側に並行しており、区画溝または道の側溝と思われる。遺物の出土はなかった。



第133図 AY-21・22号溝

AY-23号溝 (第134図)

位置 D区 i-5~D区 i-6 グリッド

規模 全長5.5

深さ 30cmでほぼ一様

備考 砂質土を地山としており不明瞭だった。壁の遺存状態は悪い。土坑と溝の間中間的な規模である。

走向はN-14°-Eで直線的である。上面幅は45~55cmで一定している。地山の傾斜にそって底面は南側ほどやや低くなり、北隅と10cmの比高差がある。

AY-24号溝 (第134図 PL-24)

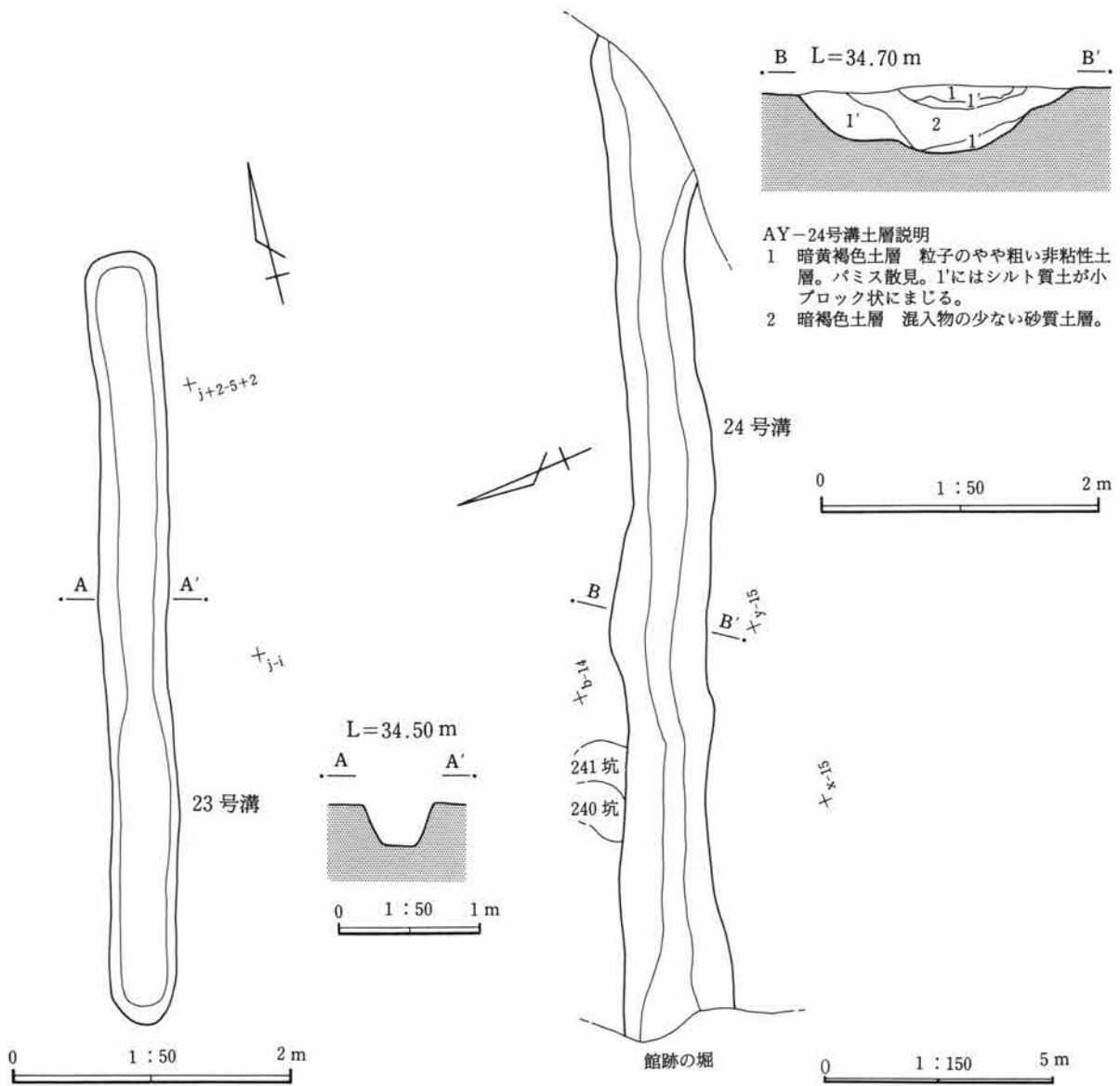
位置 D区w-13・14~E区b・c-15グリッド

規模 全長 [20.3m]

深さ 45.0cm

重複 館堀に先行する。239・240号土坑。

備考 館堀の区画内精査段階に確認した溝で、地山に似た砂質土を埋没土にしている。走向はN-70°-Wで直線的である。底面は不定である。発掘調査時には洪水時の流路のひとつと考えたが、本溝の北側にある館堀に後出する流路とは時期が異なる。



第134図 AY-23・24号溝

AY-25号溝 (第135図 PL-24)

位置 D区y-22~E区j-22グリッド 3/4丁四方の小さな館堀区画内にある。

規模 全長 [41.5m]

深さ 西寄り45cm、中央付近43cm、東寄り56cm

重複 282号土坑に後出

備考 調査区域を斜めに横断する長い溝である。走向はN-86°-Eで直線的であり、2丁区画館堀の南側20mに同堀と並行している。上面幅は1m前後でほぼ一定である。底面レベルは一定でなく20cm近い比高差がある。区画溝であるが、館の時期の遺構かは不明である。

2点の小皿(かわらけ)と石製容器の破片を図示した。1は埋没土内、2・3は底面直上である。他には土師器・須恵器少片が約70片、常滑と思われる甕の胴部破片が10点出土している。

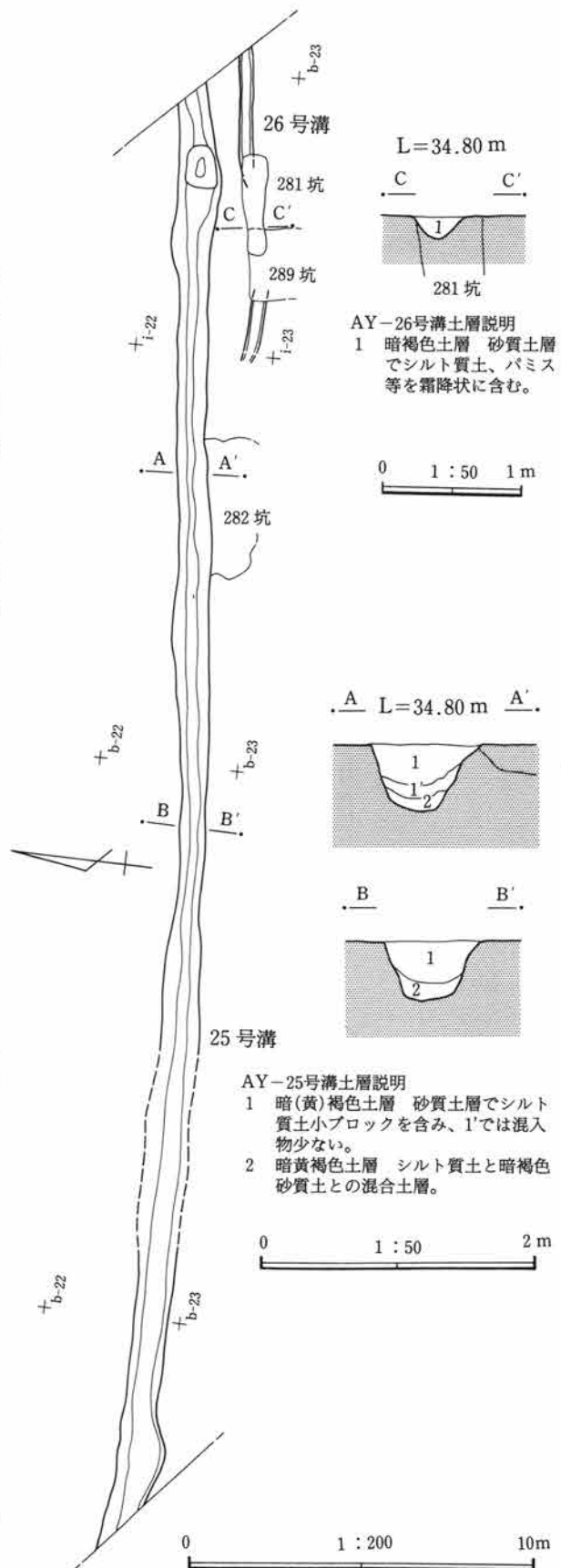
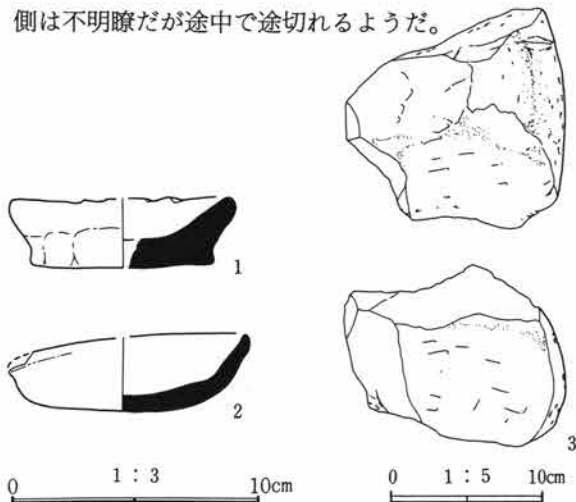
AY-26号溝 (第135図)

位置 E区h-22~E区k-22グリッド 25号溝の南側80cmに並行している。

規模 全長 [8.9m] 深さ 9~13cm

重複 281号土坑に後出する、289号土坑。

備考 当初、土坑と推定していたが、調査中の溝に変更した遺構である。走向N-83°-Eの直線的な溝で、上面幅は40cm前後である。底面は平坦で、東側がやや浅くなっている。東側は調査区域外で、西側は不明瞭だが途中で途切れるようだ。



第135図 AY-25・26号溝および出土遺物

AY-27号溝 (第136図)

位置 E区n-7~E区r-6グリッド

規模 全長 [17.0m]

深さ 西側から順に15.0cm、20.0cm、17.5cm

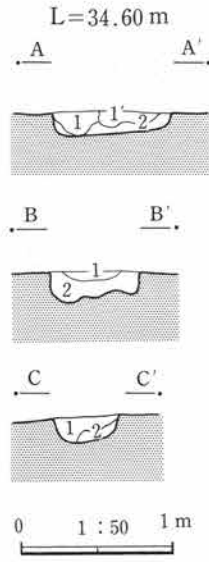
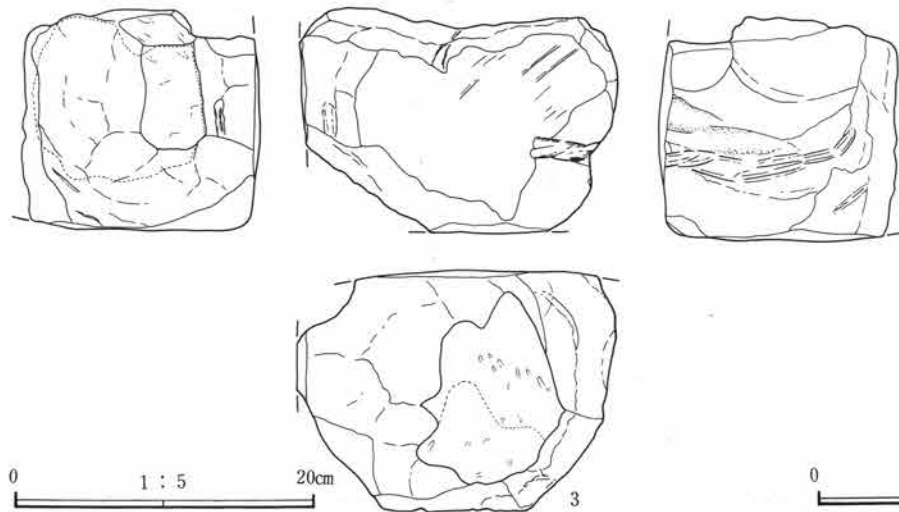
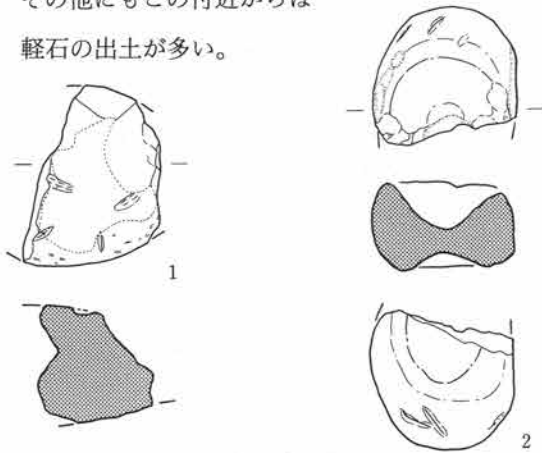
重複 457号土坑・19号井戸・21号井戸

備考 東隅は21号井戸と重複してその先は確認できない。3/4丁区画の館堀の北側4mにある。走向はN-74°-Eで直線的だが、東隅は北方へ小さく曲がって21号井戸につながる。上面幅は40~50cmでほぼ一定で、屈曲部分から東側はやや幅広になる。21号井戸との新旧は不明だが礫や石製品が重複部分を中心に両遺構から出土しており、現場では同時存在と考えた。また19号井戸を避けるように小さな屈曲があり、同井戸には後出すると思われる。

図示した石製品は21号井戸に近接して出土した。

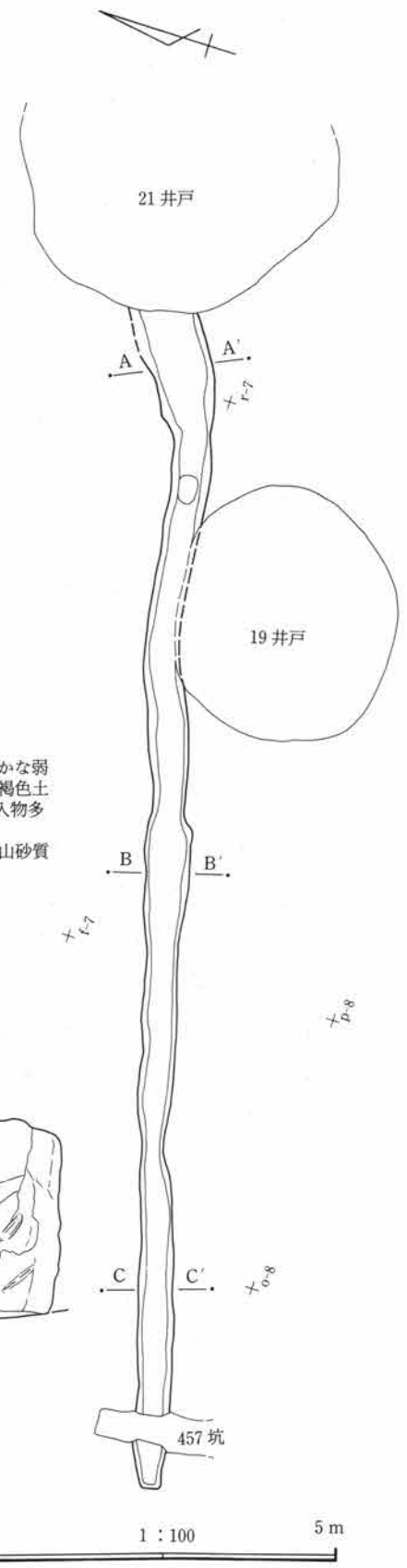
その他にもこの付近からは

軽石の出土が多い。

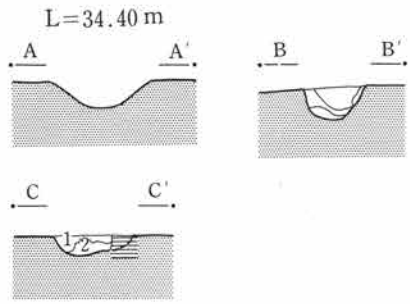


AY-27号溝土層説明

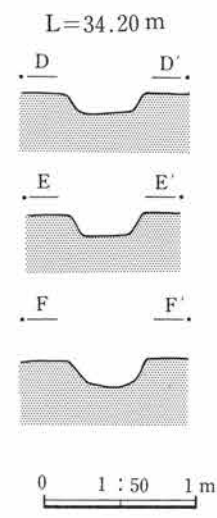
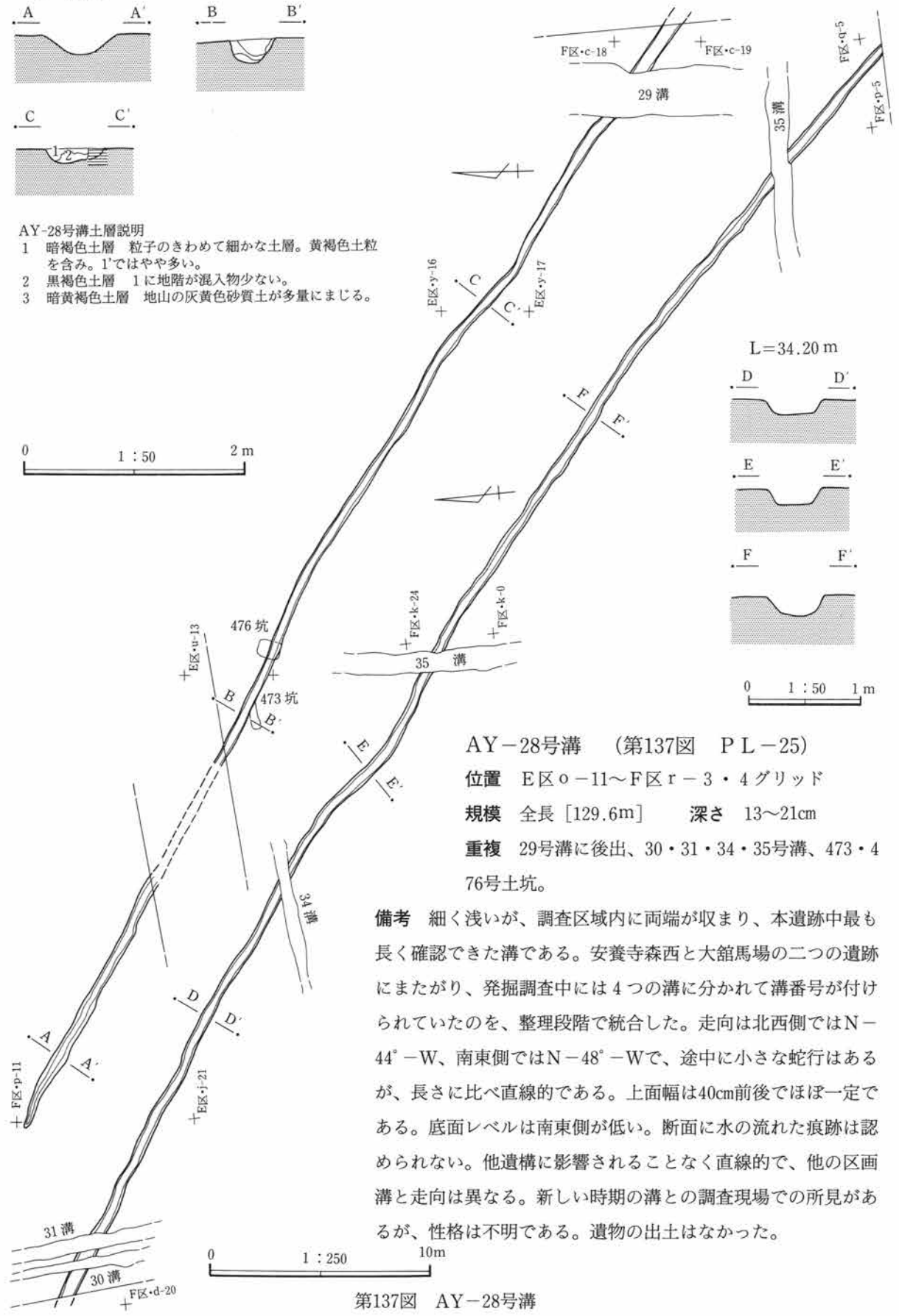
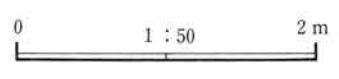
- 1 暗褐色土層 粒子の細かな弱粘性土層。パミス、黄褐色土粒を散見し、1'では混入物多い。
- 2 暗灰褐色土層 1に地山砂質土を多量に含む。



第136図 AY-27号溝および出土遺物



- AY-28号溝土層説明
- 1 暗褐色土層 粒子のきわめて細かな土層。黄褐色土粒を含み。1'ではやや多い。
  - 2 黒褐色土層 1に地層が混入物少ない。
  - 3 暗黄褐色土層 地山の灰黄色砂質土が多量にまじる。



AY-28号溝 (第137図 PL-25)  
 位置 E区o-11~F区r-3・4グリッド  
 規模 全長 [129.6m] 深さ 13~21cm  
 重複 29号溝に後出、30・31・34・35号溝、473・476号土坑。

備考 細く浅いが、調査区域内に両端が取り、本遺跡中最も長く確認できた溝である。安養寺森西と大館馬場の二つの遺跡にまたがり、発掘調査中には4つの溝に分かれて溝番号が付けられていたのを、整理段階で統合した。走向は北西側ではN-44°-W、南東側ではN-48°-Wで、途中に小さな蛇行はあるが、長さ比べ直線的である。上面幅は40cm前後ではほぼ一定である。底面レベルは南東側が低い。断面に水の流れた痕跡は認められない。他遺構に影響されることなく直線的で、他の区画溝と走向は異なる。新しい時期の溝との調査現場での所見があるが、性格は不明である。遺物の出土はなかった。

第137図 AY-28号溝

AY-29号溝 (第138図 PL-25)

位置 F区b-13~F区b-22グリッド

規模 全長 [39.0m]

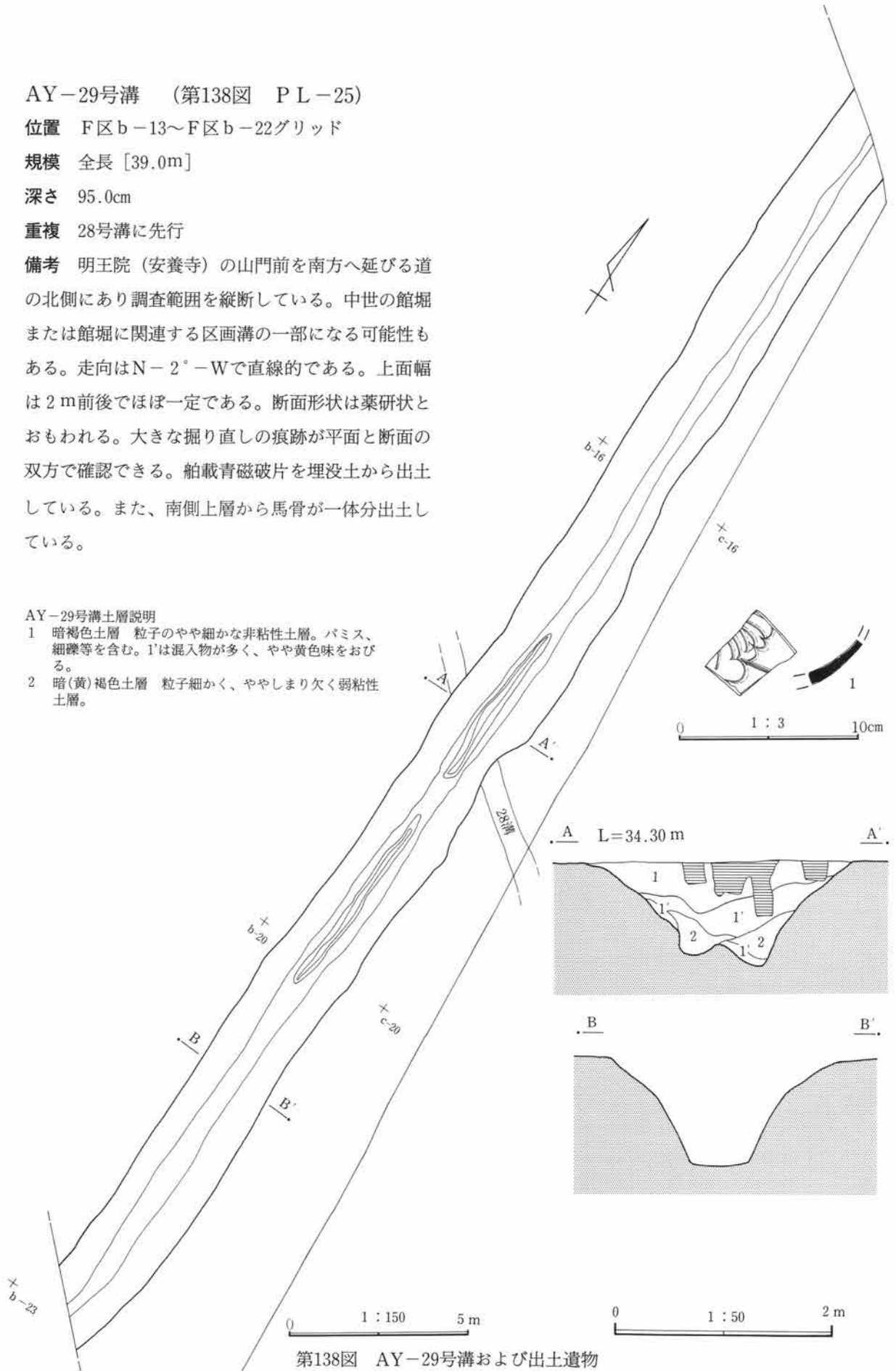
深さ 95.0cm

重複 28号溝に先行

備考 明王院(安養寺)の山門前を南方へ延びる道の北側にあり調査範囲を縦断している。中世の館堀または館堀に関連する区画溝の一部になる可能性もある。走向は $N-2^{\circ}-W$ で直線的である。上面幅は2m前後でほぼ一定である。断面形状は葉研状とおもわれる。大きな掘り直しの痕跡が平面と断面の双方で確認できる。舶載青磁破片を埋没土から出土している。また、南側上層から馬骨が一体分出土している。

AY-29号溝土層説明

- 1 暗褐色土層 粒子のやや細かな非粘性土層。パミス、細礫等を含む。1'は混入物が多く、やや黄色味をおびる。
- 2 暗(黄)褐色土層 粒子細かく、ややしまり欠く弱粘性土層。



第138図 AY-29号溝および出土遺物



AY-30号溝 (第139図 PL-25)

位置 F区d-15~F区d-23グリッド 重複遺構  
や攪乱の多い一画にある。

規模 全長 [31.5m]

深さ 507号土坑と重複する部分23.7cm、他27.5cm。

重複 28・32号溝、481・482・490・502・507号土坑

備考 現道を挟んで29号溝の東側に31号溝とともに並んでいる。走向はN-4°-Wで調査区を直線的に縦断する長い溝だが、29号溝とは埋没土は明らかに異なった。当初、31号溝と同一の溝と考えて掘り進んだため出土遺物は混在したため、どちらの溝に所属するか不明だが、近世の灯明皿と中世の舶載青磁破片を埋没土から出土している。

AY-31号溝 (第139図 PL-25)

位置 F区d-16~F区E-23グリッド

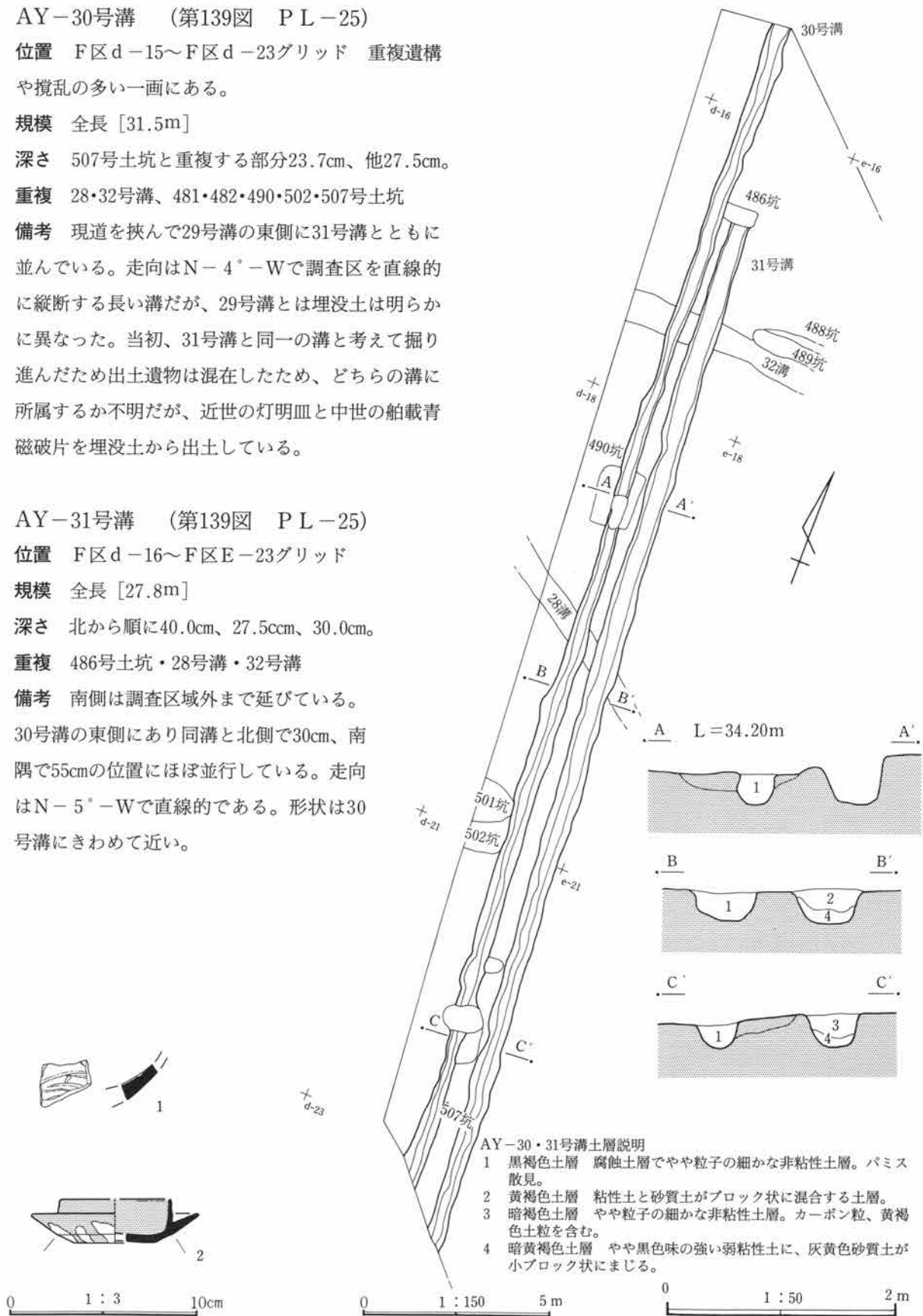
規模 全長 [27.8m]

深さ 北から順に40.0cm、27.5cm、30.0cm。

重複 486号土坑・28号溝・32号溝

備考 南側は調査区域外まで延びている。

30号溝の東側にあり同溝と北側で30cm、南隅で55cmの位置にほぼ並行している。走向はN-5°-Wで直線的である。形状は30号溝にきわめて近い。



AY-30・31号溝土層説明

- 1 黒褐色土層 腐蝕土層でやや粒子の細かな非粘性土層。パミス散見。
- 2 黄褐色土層 粘性土と砂質土がブロック状に混合する土層。
- 3 暗褐色土層 やや粒子の細かな非粘性土層。カーボン粒、黄褐色土粒を含む。
- 4 暗黄褐色土層 やや黒色味の強い弱粘性土に、灰黄色砂質土が小ブロック状にまじる。

第139図 AY-30・31号溝および出土遺物

AY-32号溝 (第140図 PL-26)

位置 F区d-17グリッド～F区f-17グリッド

規模 全長 [10.5m]

深さ 34.0cm

重複 30号溝・31号溝に先行か。488号土坑・489号土坑に後出する。

備考 走向N-88°-Wの直線的な溝である。農道を挟んだ西側では確認できない。東側は調査区域外となる。

AY-32号溝土層説明

- 1 灰褐色土層 粒子の細かな粘性土層。混入物少ない。1'には黒色味の強い粘性土がまじる。
- 2 暗灰褐色土層 粘性土層で斑鉄あり。
- 3 灰褐色土層 粒子の細かな粘性土層で斑鉄あり。

AY-33号溝 (第140図 PL-26)

位置 F区e-19グリッド～F区h・i-19グリッド

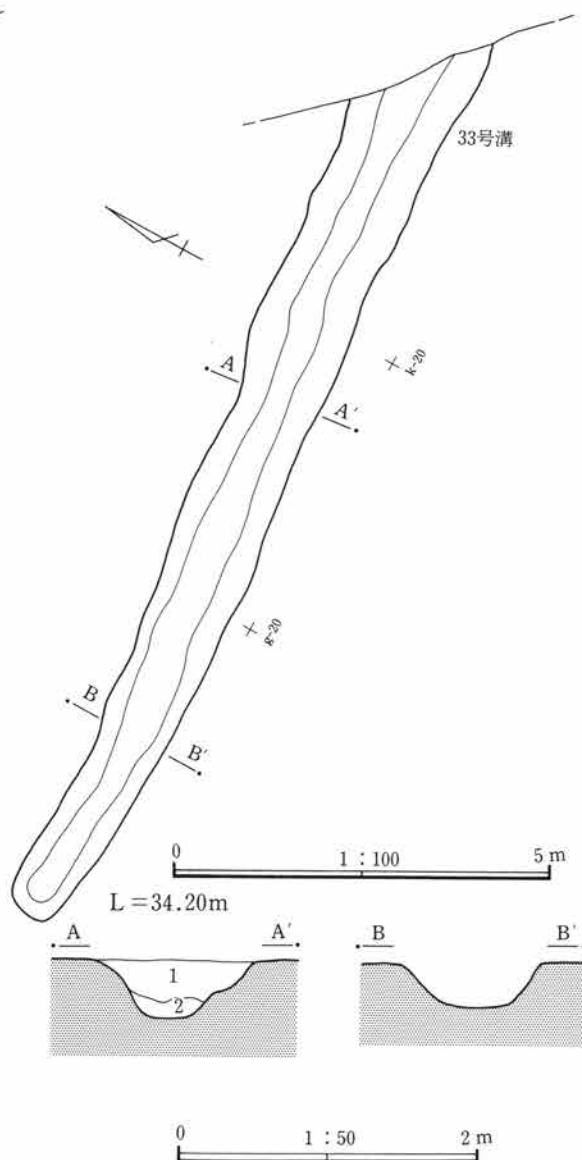
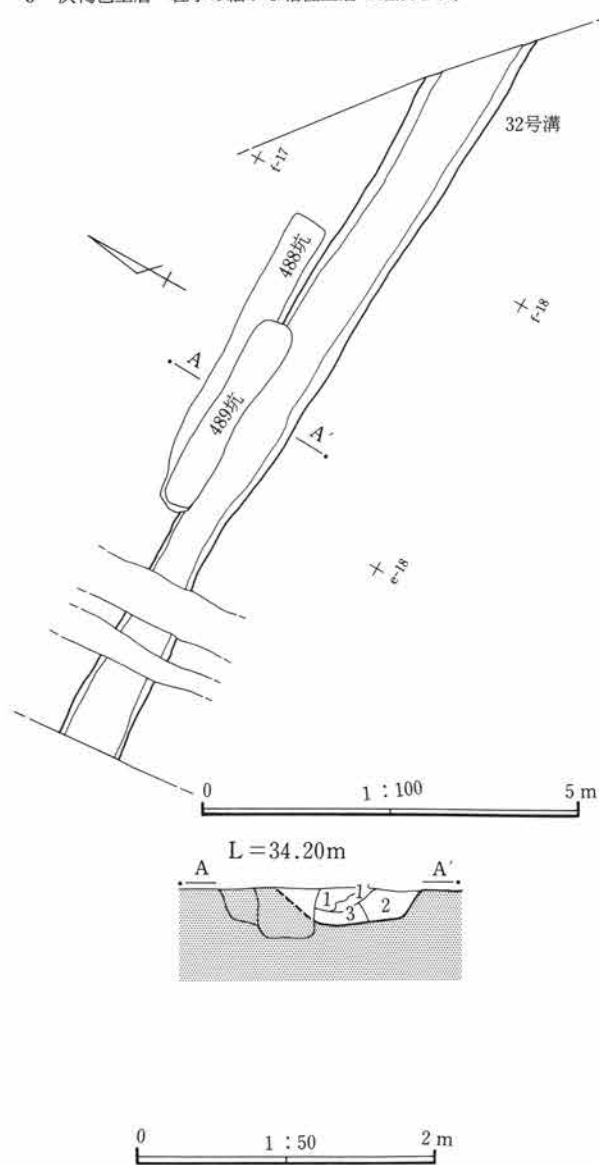
規模 全長 [12.5m]

深さ 西寄り28.5cm、中央付近39.0cm

備考 走向N-87°-Eの直線的な溝で、32号溝の南側8mにほぼ並行している。

AY-33号溝土層説明

- 1 黒褐色土層 やや粒子の細かな弱粘性土層。黄褐色土粒がまじり、1'では多い。
- 2 黒褐色土層 1に近いが、混入物少ない。
- 3 暗黄褐色土層 地山の灰黄褐色砂質土が多量にまじる。



第140図 AY-32・33号溝

AY-34号溝 (第141図 PL-26)

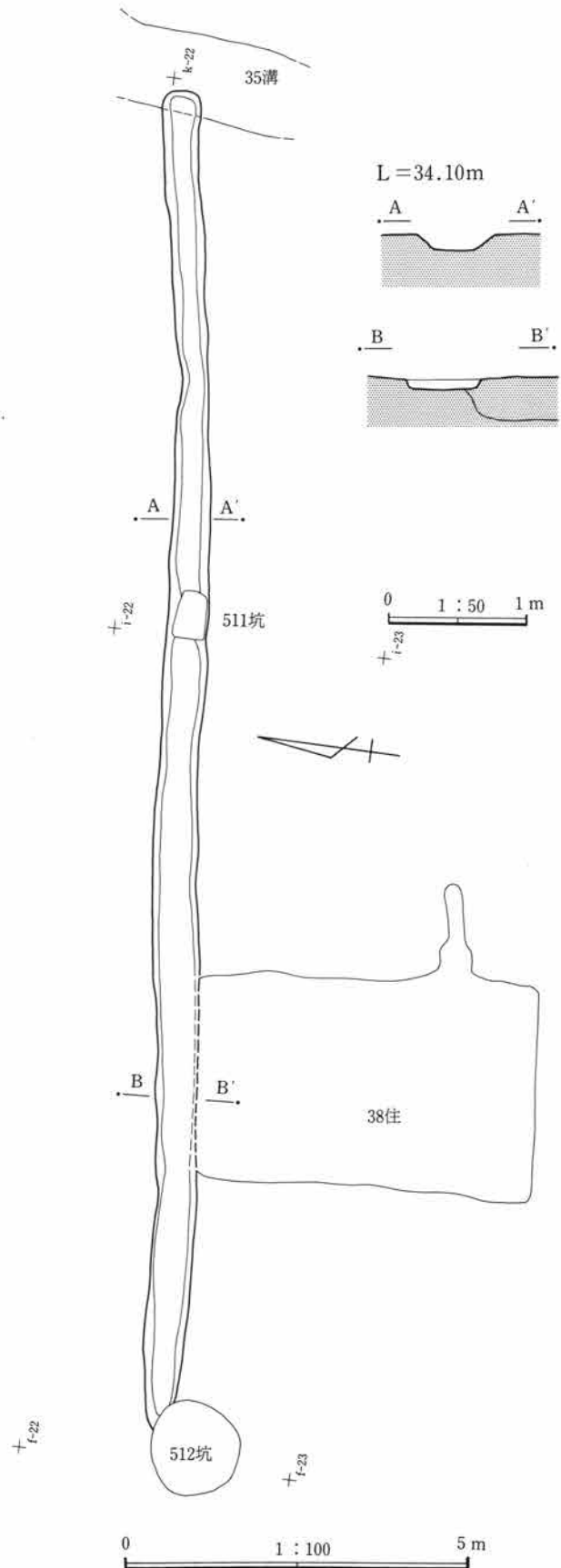
位置 F区 f-22グリッド～F区 j-21・22グリッド

規模 全長 [19.6m]

深さ 11.2cm、38号住居と重複部分は7.5cm。

重複 38号住居に先行する。28号溝に先行し、35号溝に後出する。511号土坑に先行か。512号土坑。

備考 33号溝の南側10mにある。32～34号の3本の溝は、ほぼ並行して並んでおり、畠の区画溝的なものと推定した。本溝は唯一全容を把握できたもので、他の2本の溝も同様の規模のものと推定できる。走向N-84°-Eの直線的な溝で、31号溝に近似する形状である。38号住居からの混入品と思われる土師器片を少量出土したが、他の遺物の出土はなかった。



第141図 AK-34号溝

AY-35号溝 (第142図 PL-26)

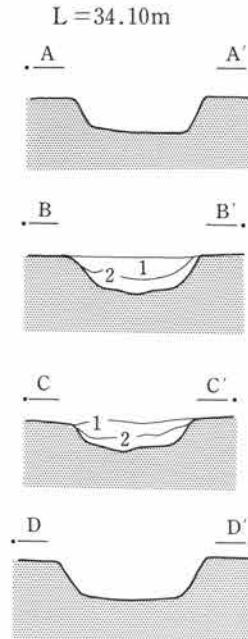
位置 F区j・k-21グリッド～F区r-4グリッド

規模 全長 [59.7m]

深さ 南北に走行する部分で北から27.5cm、20.6cm、  
東西に走行する部分で西から25.0cm、22.5cm。

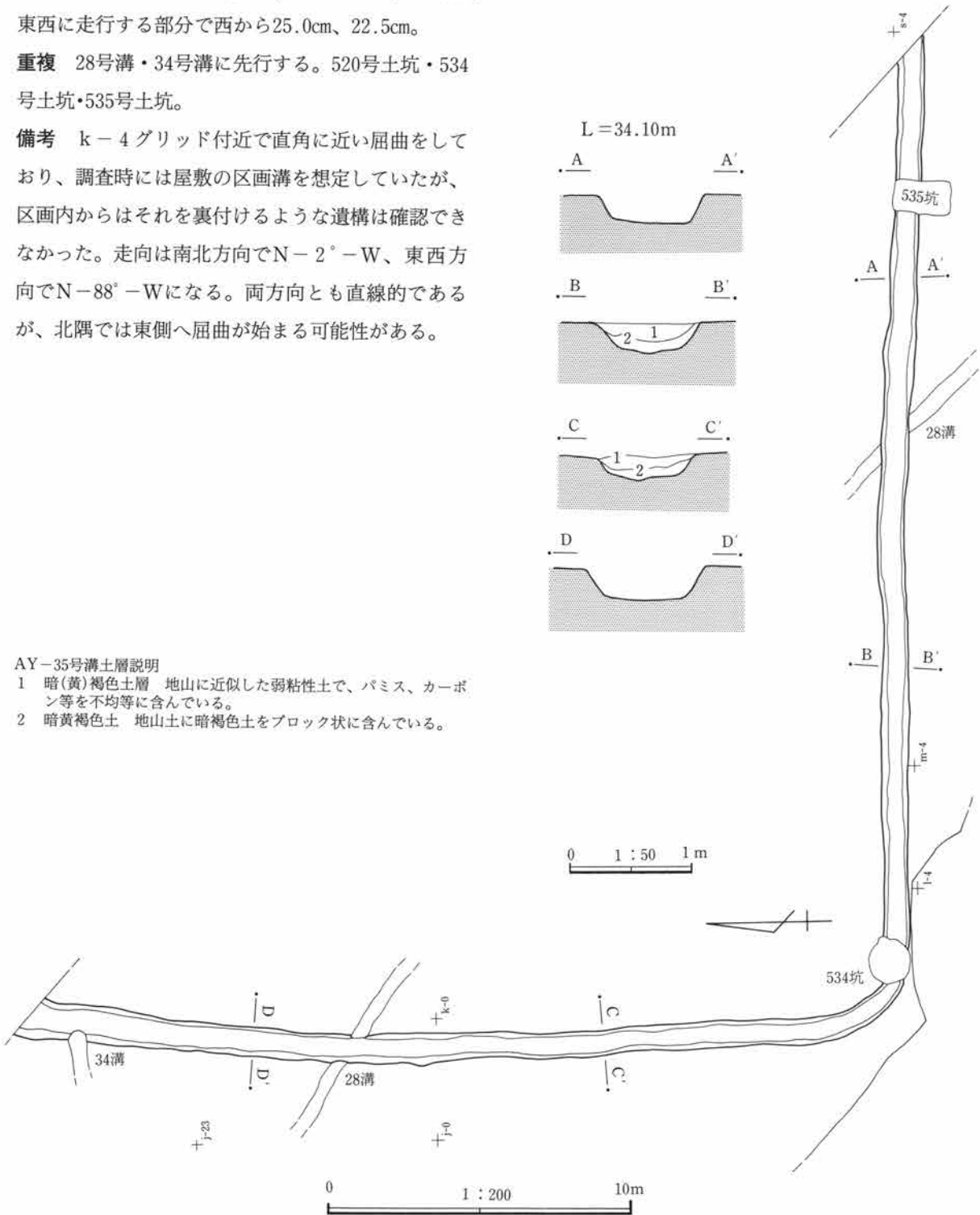
重複 28号溝・34号溝に先行する。520号土坑・534号土坑・535号土坑。

備考 k-4グリッド付近で直角に近い屈曲をしており、調査時には屋敷の区画溝を想定していたが、区画内からはそれを裏付けるような遺構は確認できなかった。走向は南北方向で $N-2^{\circ}-W$ 、東西方向で $N-88^{\circ}-W$ になる。両方向とも直線的であるが、北隅では東側へ屈曲が始まる可能性がある。



AY-35号溝土層説明

- 1 暗(黄)褐色土層 地山に近似した弱粘性土で、パミス、カーボン等を不均等に含んでいる。
- 2 暗黄褐色土 地山土に暗褐色土をブロック状に含んでいる。



第142図 OT-35号溝

OT-1号溝 (第143図)

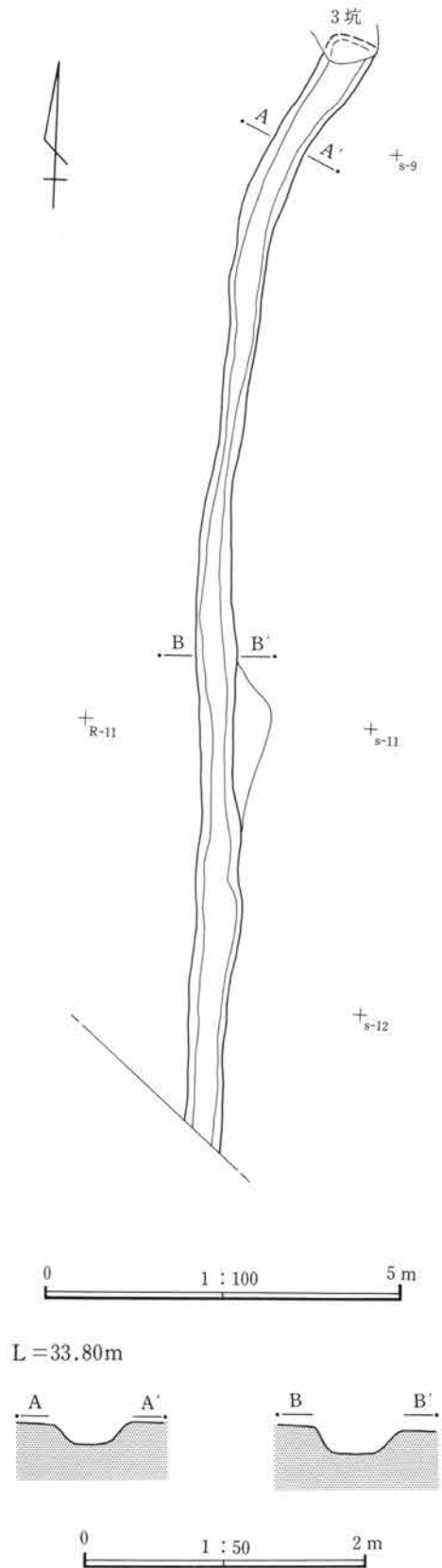
位置 F区r-8グリッド～F区q-12グリッド

規模 全長 [16.0m]

深さ 北寄り15.0cm、中央付近18.7cm。

重複 3号土坑に後出する。

備考 走向はおおよそN-2°-Eでやや蛇行し、北隅は大きく東側へ曲がっている。この延長線上3mに1号井戸がある。南側は調査区域外となる。遺構の少ない一画にあるが、本溝の東側は土坑、井戸等が多くなる。性格不明の遺構である。近世陶磁器細片を埋没土より少量出土している。



第143図 OT-1号溝

OT-2号溝 (第144図 PL-27)

位置 F区x-17・18 Y-18・19グリッド～

G区e-17グリッド

規模 全長 [22.7m]

深さ 40.0cm

重複 91号土坑・105号土坑・106号土坑・107号土坑

備考 幅広の溝で西隅は大型の土坑と重複したような平面形状になっている。断面や底面から確認することはできなかったが、数次の掘り直しの結果、図示したような規模になったと思われる。底面は比較的平坦だが、幅は1.8～6.7mと一定していない。遺構の少ない一画になるが、本溝の北は土坑、井戸等が密集しており、南側では途切れている。区画溝的な性格が想定される。走向はN-85°-E前後である。

OT-2号溝土層説明

- 1 黄褐色土層 粒子の細かな粘性土層。
- 2 暗黄褐色土層 粒子のやや細かな弱粘性土層で、シルト質土小ブロックを下層ほど含む。
- 3 黄褐色土層 粒子の粗い弱粘性土層。シルト質土小ブロックを不均等に含む。

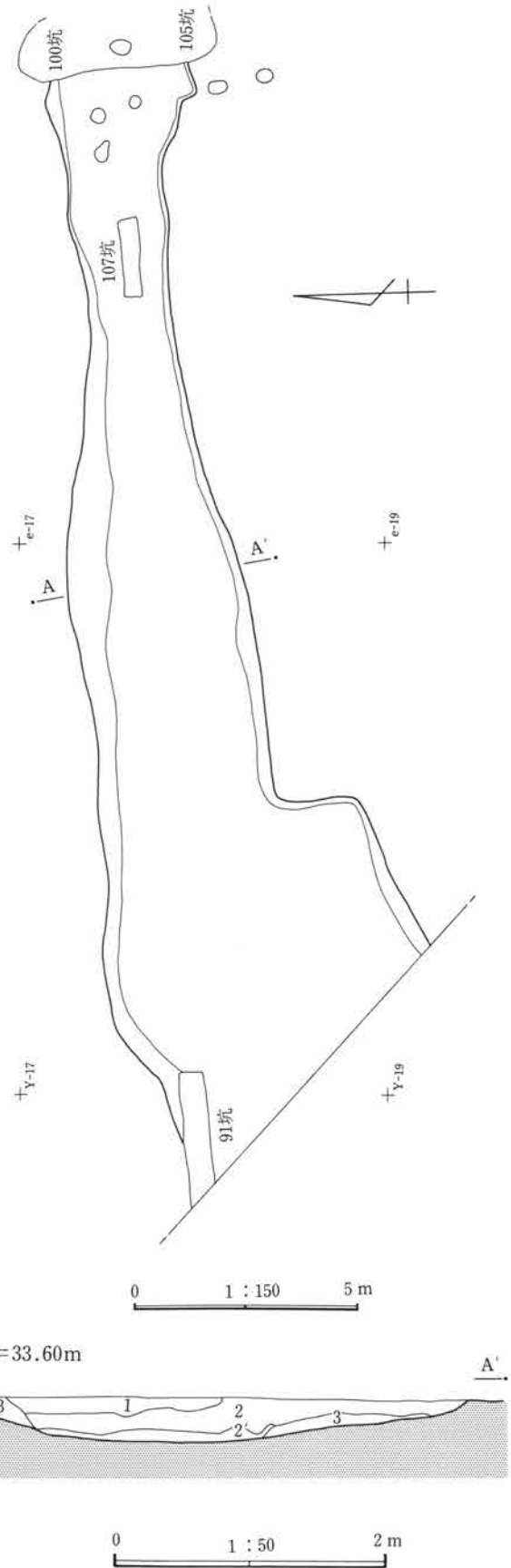
OT-3号溝 (第145図 PL-27)

位置 G区m-23グリッド～G区m-5グリッド

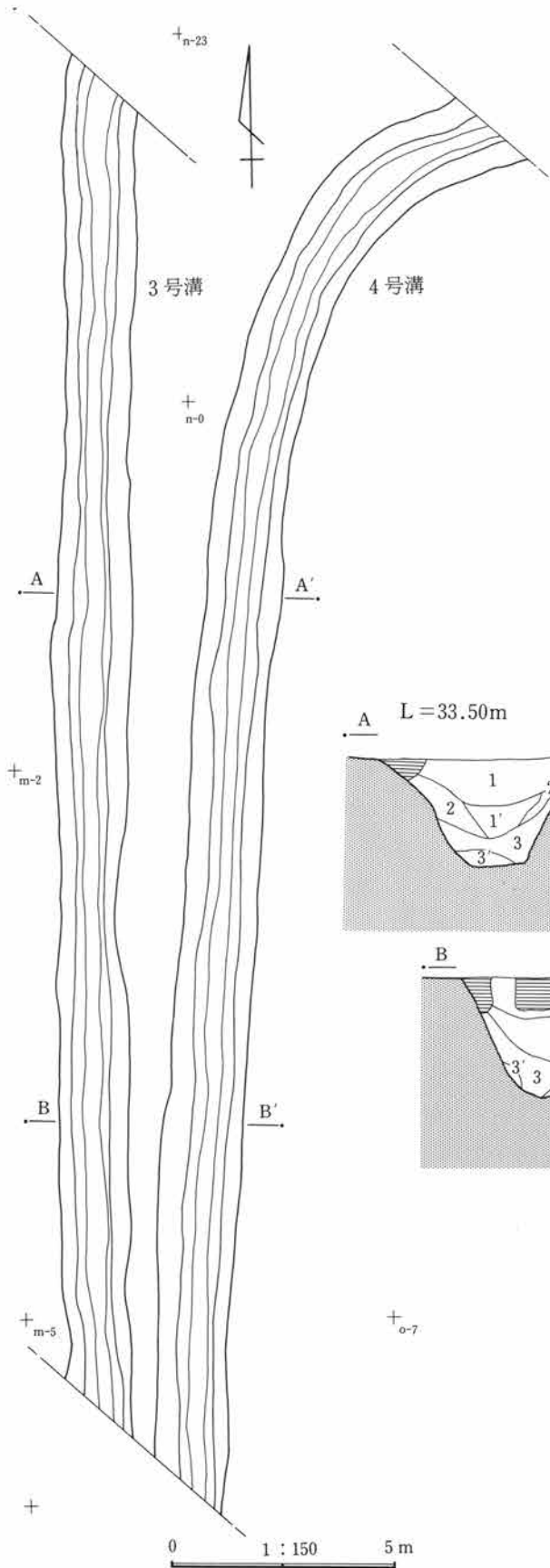
規模 全長 [28.9m]

深さ 北寄り81.2cm、南寄り87.5cm。

備考 遺構の少ない一画にある。N-2°-Eの直線的な溝であるが、北隅は屈曲の始点となる可能性がある。深さも一定している。葉研状に近い断面が部分的に残存しており、中世の溝となる可能性がある。



第144図 OT-2号溝



OT-4号溝 (第145図 PL-27)

位置 G区o-23グリッド～G区m-5 n-6グリッド

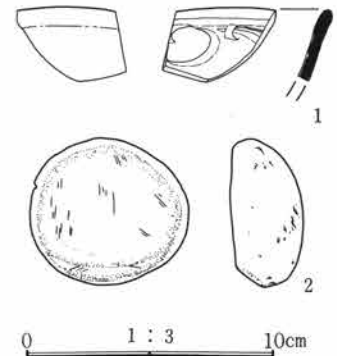
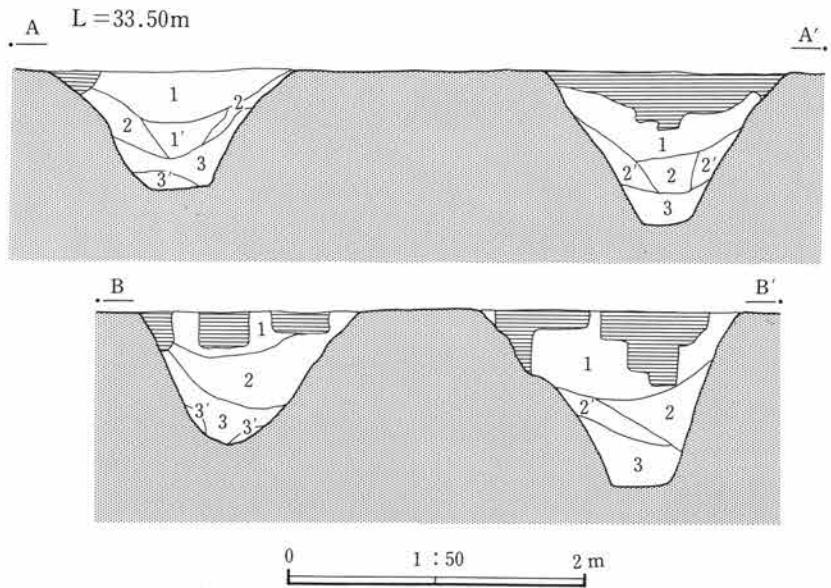
規模 全長 [32.0m]

深さ m-1グリッド付近で102.5cm、m-4グリッド付近で118.0cm。

備考 北隅は東側へ大きく屈曲している。3号溝の東側に隣接しており、断面形状も同溝に近似している。走向はN-5°-Eとやや異なり、南隅ではかなり近接していることから、二つの溝が同時存在していたとは考えにくい。

OT-3・4号溝土層説明

- 1 暗褐色土層 弱粘性土層でしまり強い。1'には灰色味をおびたシルト質土ブロックがまじる。
- 2 暗黄褐色土層 1土中に黄色味をおびたシルト質土小ブロックがまじる。2'では混入物少ない。
- 3 暗褐色土層 やや砂質土で、不揃いのシルト質土ブロックを含む。3'では混入物少ない。



第145図 OT-3・4号溝および出土遺物

OT-5号溝 (第146図 PL-28)

位置 H区c-18・19グリッド～H区i-17・18グリッド

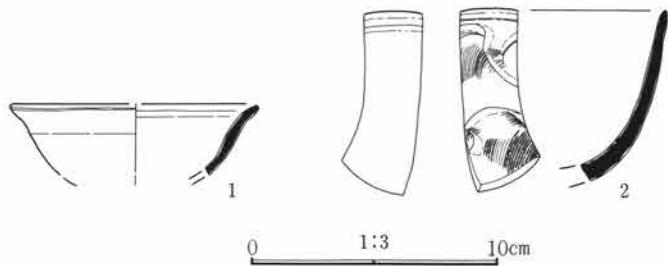
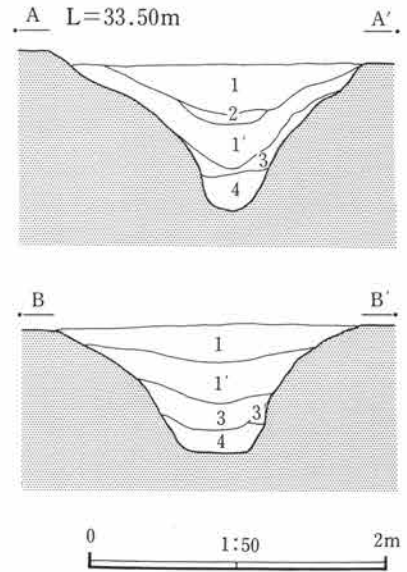
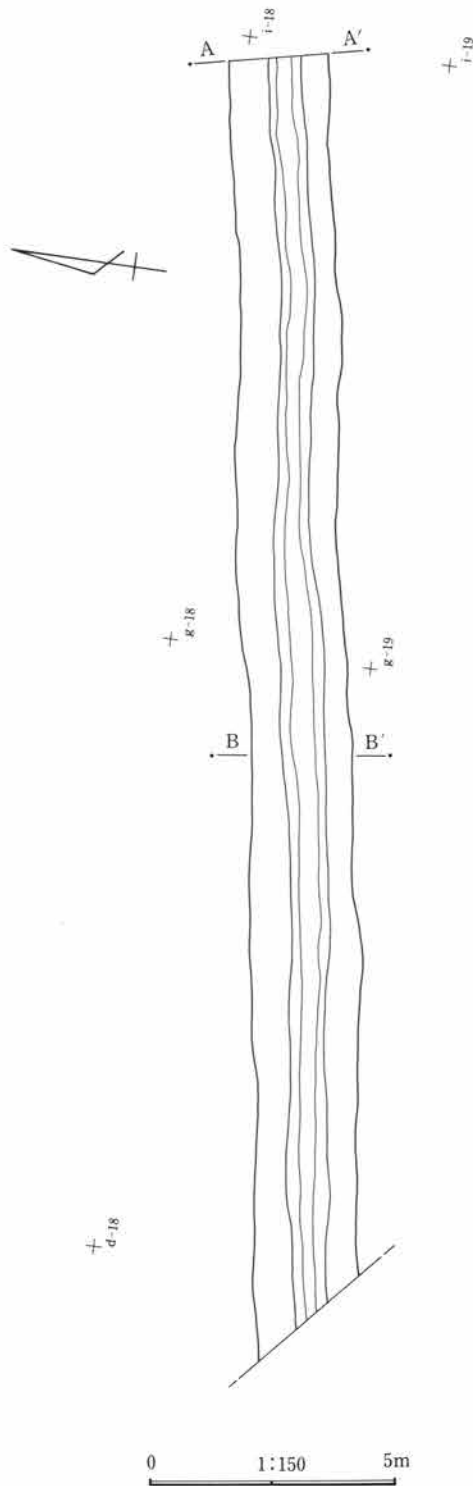
規模 全長 [25.0m]

深さ 東端で97.5cm、中央付近で85.0cm。

備考 農道の北側にあった溝で、調査区を横断していた。遺構の少ない一面にあり、重複する遺構はない。走向はN-84°-Eで直線的である。断面は薬研状に近く、旧状をよく留めていた。掘り直しの痕跡は認められない。中世の溝と考えられ、2点の舶載磁器片を出土している。

OT-5号溝土層説明

- 1 暗褐色土層 粒子の細かな非粘性土層。しまり強い。混入物少ないが、1'にはシルト質土がまじる。
- 2 暗灰褐色土層 きわめて緻密な粘性土層。
- 3 暗黄褐色土層 弱粘性土層でシルト質土を含み、3'ではブロック状になる。
- 4 暗褐色土層 弱粘性土層でシルト質土を散見する。



第146図 OT-5号溝および出土遺物



OT-6号溝 (第147図 PL-28)

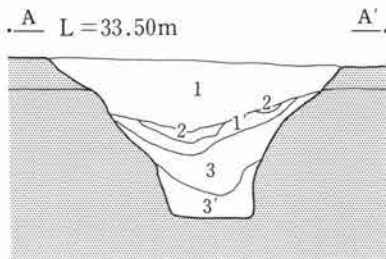
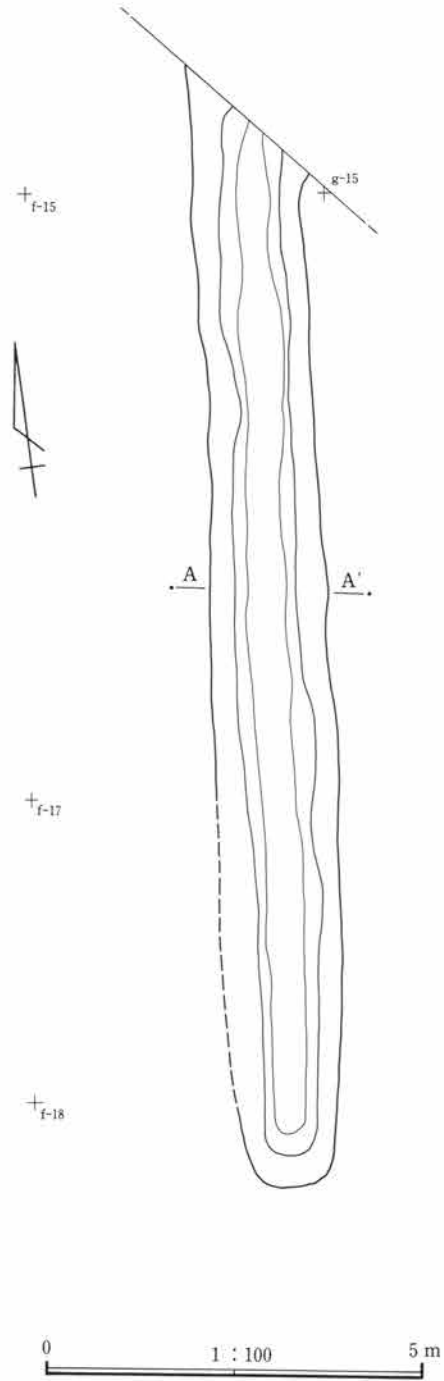
位置 H区 f-14グリッド～H区 f・g-18グリッド

規模 全長 [14.0m]

深さ 106.5cm

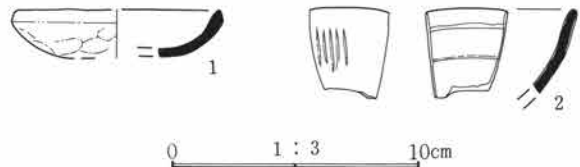
備考 走向はN-3°-Eの直線的な溝である。北側は調査区域外となり、南側は5号溝の80cm手前で止まっていた。断面は葉研状に近い形状で、5号溝と類似している。舶載磁器片とかかわりけ片を各1点ずつ図示した。

5号溝の区画を意識した位置にあり、同溝と同時存在したものであろう。中世の区画を作る溝の一つと考えられる。



OT-6号溝土層説明

- 1 暗褐色土層 やや灰色味をおびたシルト質土主体の層で、パミス、褐色土粒を散見する。1'では混入物多い。
- 2 暗黄褐色土層 1土中にブロック状のシルト質土がまじり、2'で多い。
- 3 暗褐色土層 やや砂質土で、不揃いのシルト質土ブロックを含み、3'で多い。



第147図 OT-6号溝および出土遺物

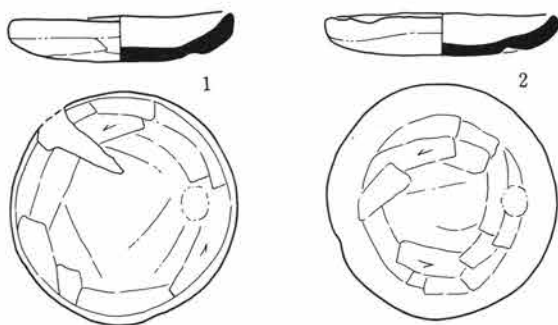
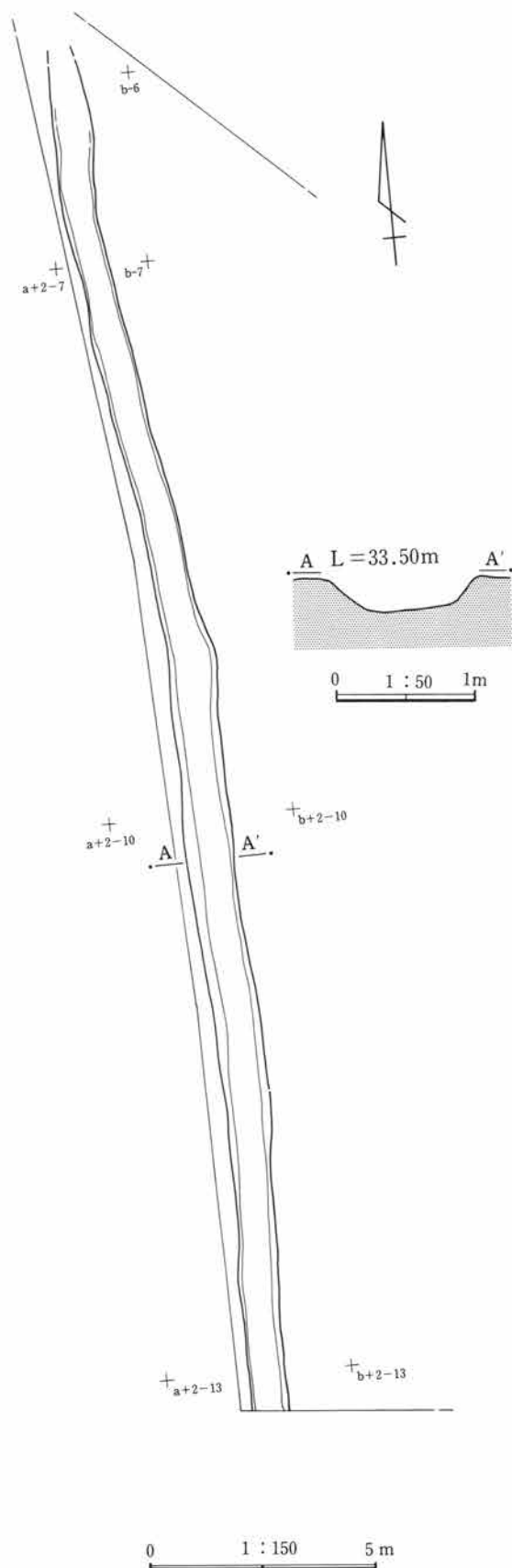
AK-1号溝 (第148図 PL-28・30)

位置 I区a-5グリッド～I区a・b-13グリッド

規模 全長 [29.7m]

深さ 23.7cm

備考 調査時に残存していた農道の東側にあり、側溝的なものと思われる。走向は大よそN-2°-Wで、調査区内をほぼ南北に直線的に縦断している溝である。底面は平坦だが中央付近がやや高くなり、南北のそれぞれの隅付近とは10cm以上の比高差がある。出土遺物は少なく、2点の完形土師質小皿を図示したが、その他は礫、河原石等を数点出土したのみである。



0 1 : 3 10cm

0 1 : 150 5m

第148図 AK-1号溝および出土遺物

AK-2号溝 (第149・150図 PL-28・30)

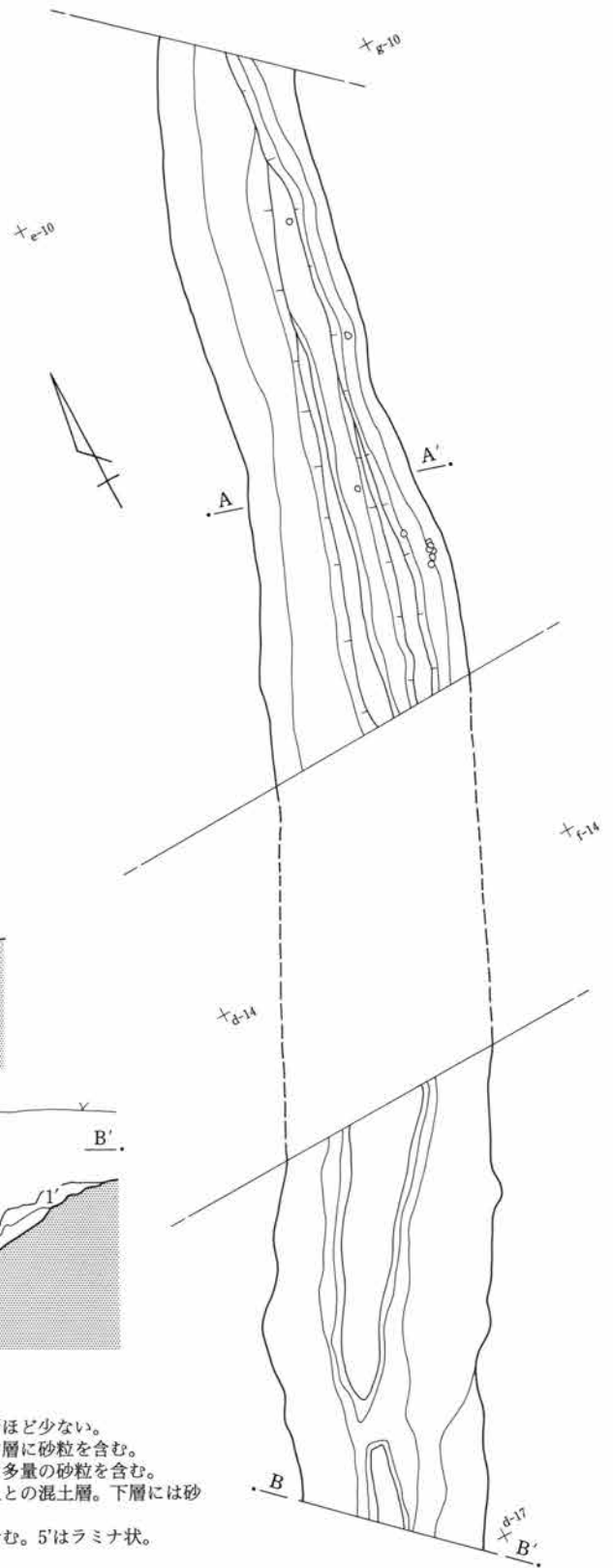
位置 I区f-9グリッド～I区c-16グリッド

規模 全長 [30.6m]

深さ d-12グリッド付近で67.5cm、南壁際で101.3cm

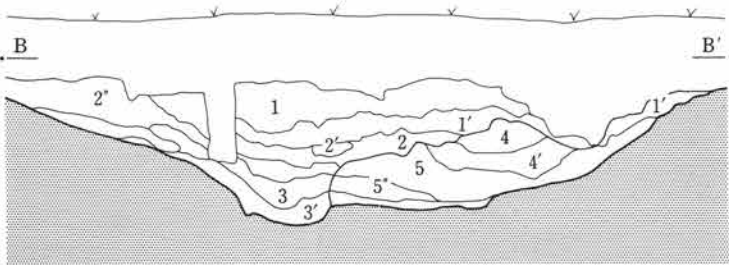
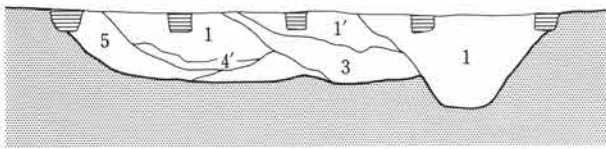
備考 2度以上の大規模な掘り直しを行っていることが、A-A'セクションより看取できる。ここでは西から東へ溝の位置が移動しているが、B-B'セクションでは様相が異なり、個々の溝は小さく蛇行すると思われる。走向は大よそN-22°-Wである。一部に水成堆積の痕跡が認められる。

遺物の出土状態 f-12グリッド付近から4～6、8～13の9点の完形土師器杯がまとまって出土した。同巧の杯群で一括廃棄の遺物と考えられる。その他の遺物もいずれも平安時代のものである。



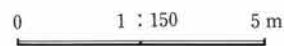
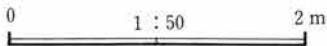
A L=33.80m

A'

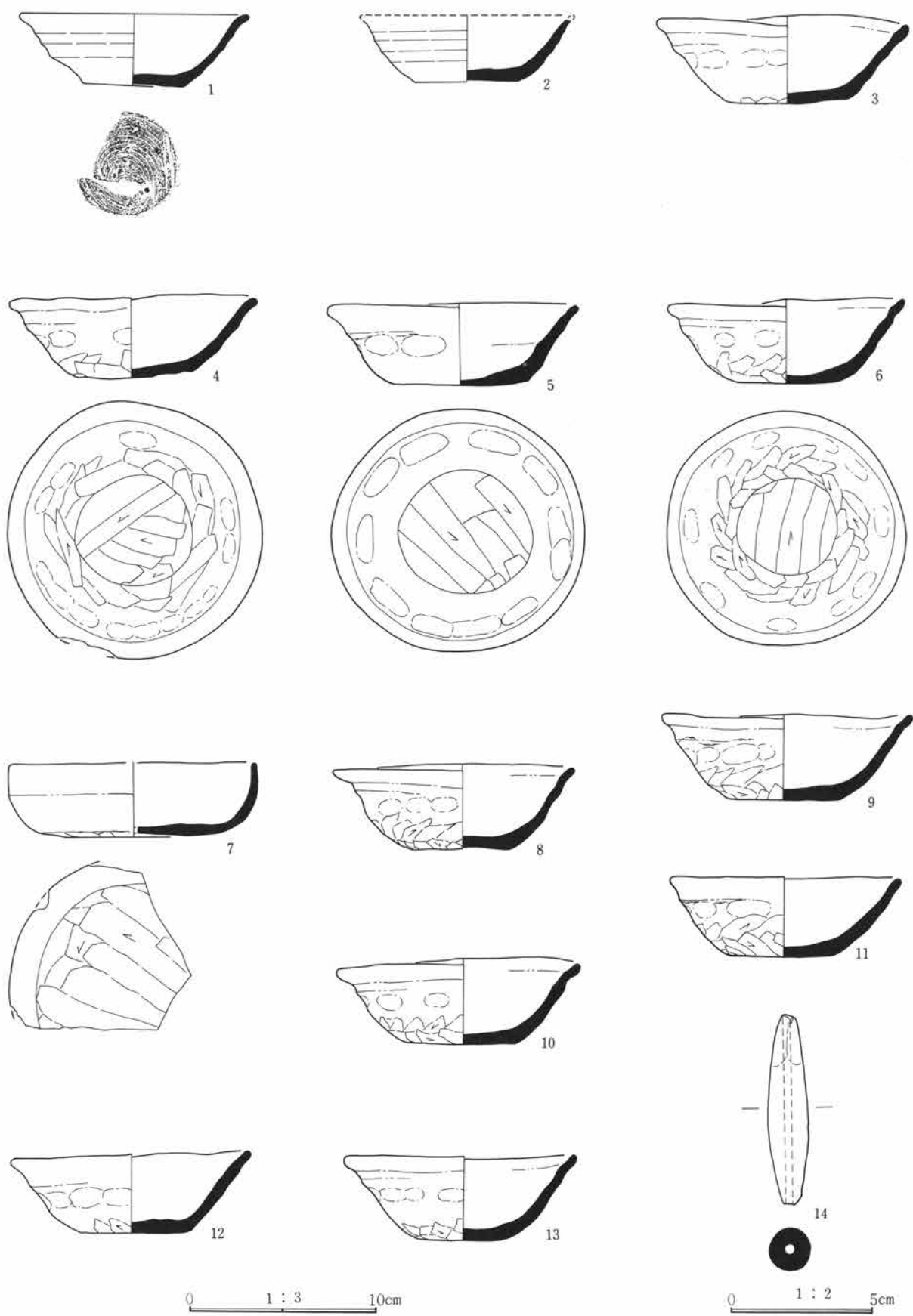


AK-2号溝土層説明

- 1 褐色土(10YR4/4) しまりの強い非粘性土で、パミスを含むが下層ほど少ない。
- 2 にぶい黄褐色土(10YR4/3) FPと思われるパミスを含む層で、中層に砂粒を含む。
- 3 褐灰色土(10YR4/1) 褐灰色の底面付近地山シルト質土で下層には多量の砂粒を含む。
- 4 にぶい黄褐色土(10YR6/3) 黄色味の強い地山シルト質土と1層土との混土層。下層には砂の混入多い。
- 5 褐灰色土(10YR5/1) 褐灰色のシルト質土中にパミスを不均等に含む。5'はラミナ状。



第149図 AK-2号溝



第150图 AK-2号沟出土遗物

AK-3号溝 (第151図 PL-29)

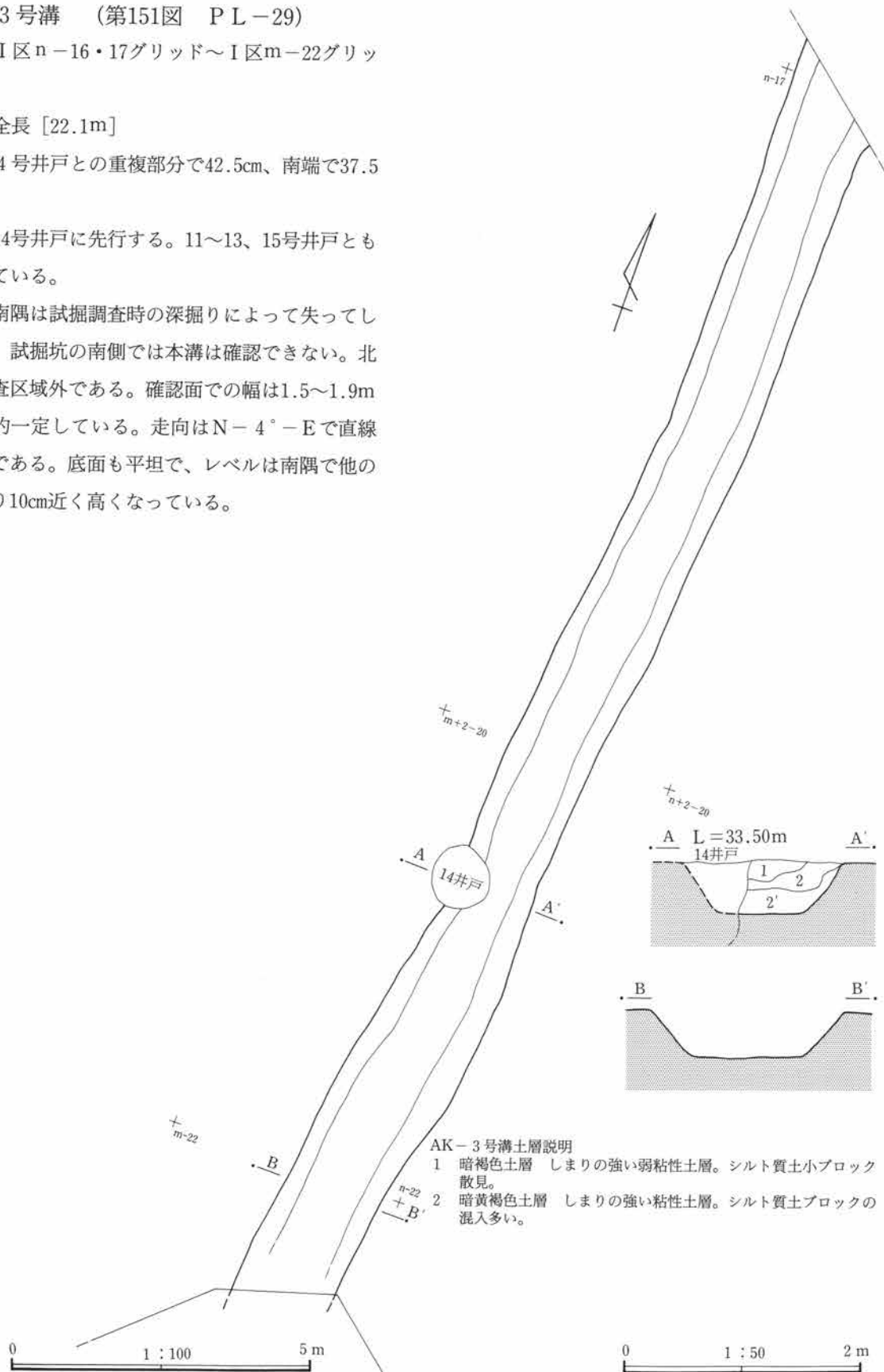
位置 I区n-16・17グリッド～I区m-22グリッド

規模 全長 [22.1m]

深さ 4号井戸との重複部分で42.5cm、南端で37.5cm

重複 14号井戸に先行する。11～13、15号井戸とも近接している。

備考 南隅は試掘調査時の深掘りによって失ってしまった。試掘坑の南側では本溝は確認できない。北側は調査区域外である。確認面での幅は1.5～1.9mで比較的一定している。走向はN-4°-Eで直線的な溝である。底面も平坦で、レベルは南隅で他の部分より10cm近く高くなっている。



AK-3号溝土層説明

- 1 暗褐色土層 しまりの強い弱粘性土層。シルト質土小ブロック散見。
- 2 暗黄褐色土層 しまりの強い粘性土層。シルト質土ブロックの混入多い。

第151図 AK-3号溝

AK-4号溝 (第152図 PL-29)

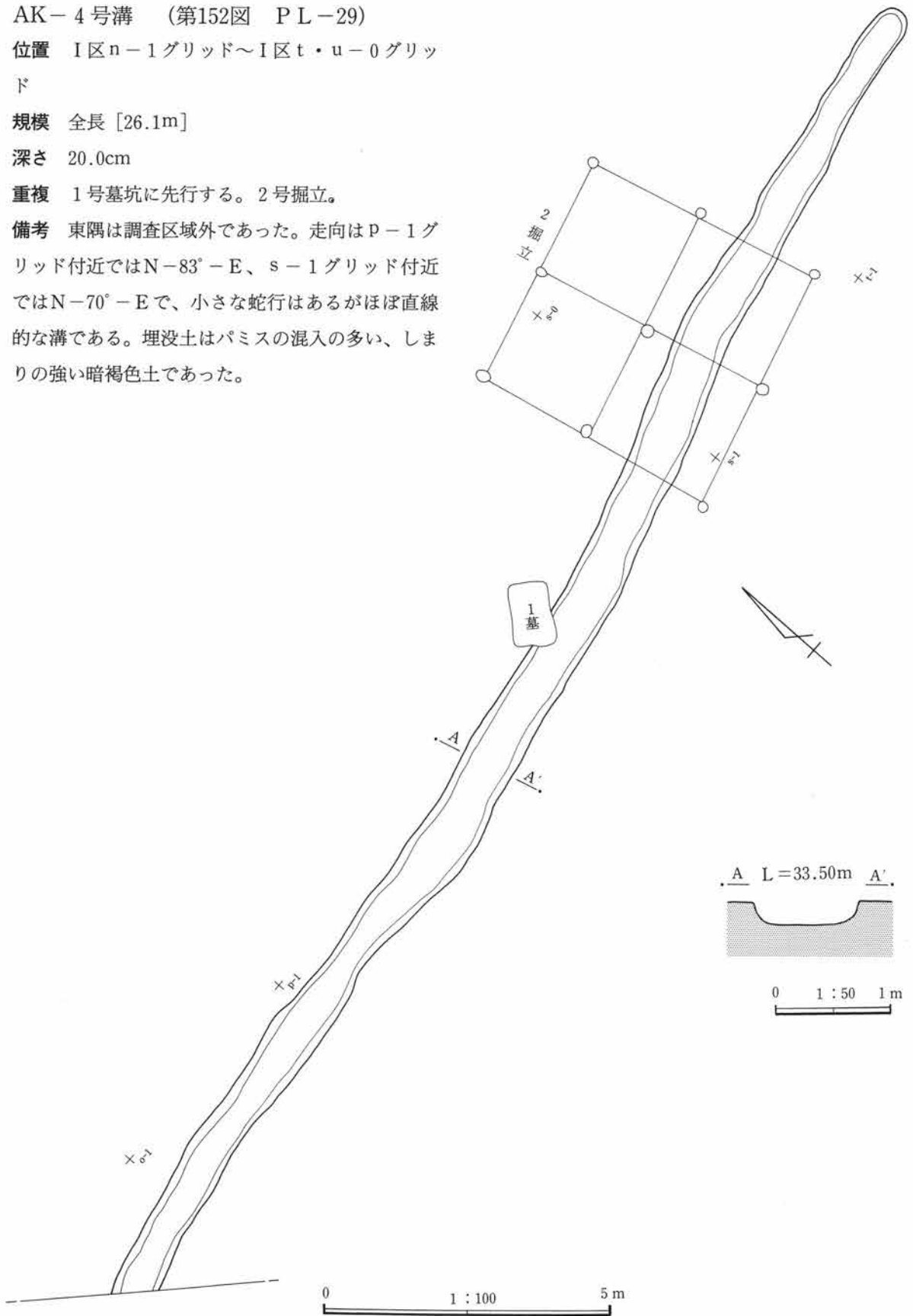
位置 I区n-1グリッド～I区t・u-0グリッド

規模 全長 [26.1m]

深さ 20.0cm

重複 1号墓坑に先行する。2号掘立。

備考 東隅は調査区域外であった。走向はP-1グリッド付近ではN-83°-E、s-1グリッド付近ではN-70°-Eで、小さな蛇行はあるがほぼ直線的な溝である。埋没土はパミスの混入の多い、しまりの強い暗褐色土であった。



第152図 AK-4号溝

AK-5号溝 (第153図 PL-29)

位置 I区o・p-2グリッド～J区a-2グリッド

規模 全長 [42.3m]

深さ 6号溝と重複する部分で75.0cm、落ち込み部分と重複する部分で42.5cm、落ち込み部分は25.0cm。

重複 6号溝に後出する。

備考 a-3グリッド付近で直角に近い屈曲があり、屋敷の区画溝が想定される。この区画内には1・2号の2棟の掘立柱建物がある。4号溝がこの区画の西側の溝となる可能性があり、この場合東西幅約48m、南北幅40m以上の区画となる。本溝の走向は東西方向では蛇行があるが、ほぼN-90°、南北方向でN-13°-Eとなる。一部で断面薬研状となっているが、逆台形状を呈している部分が大半である。

AK-6号溝 (第153図)

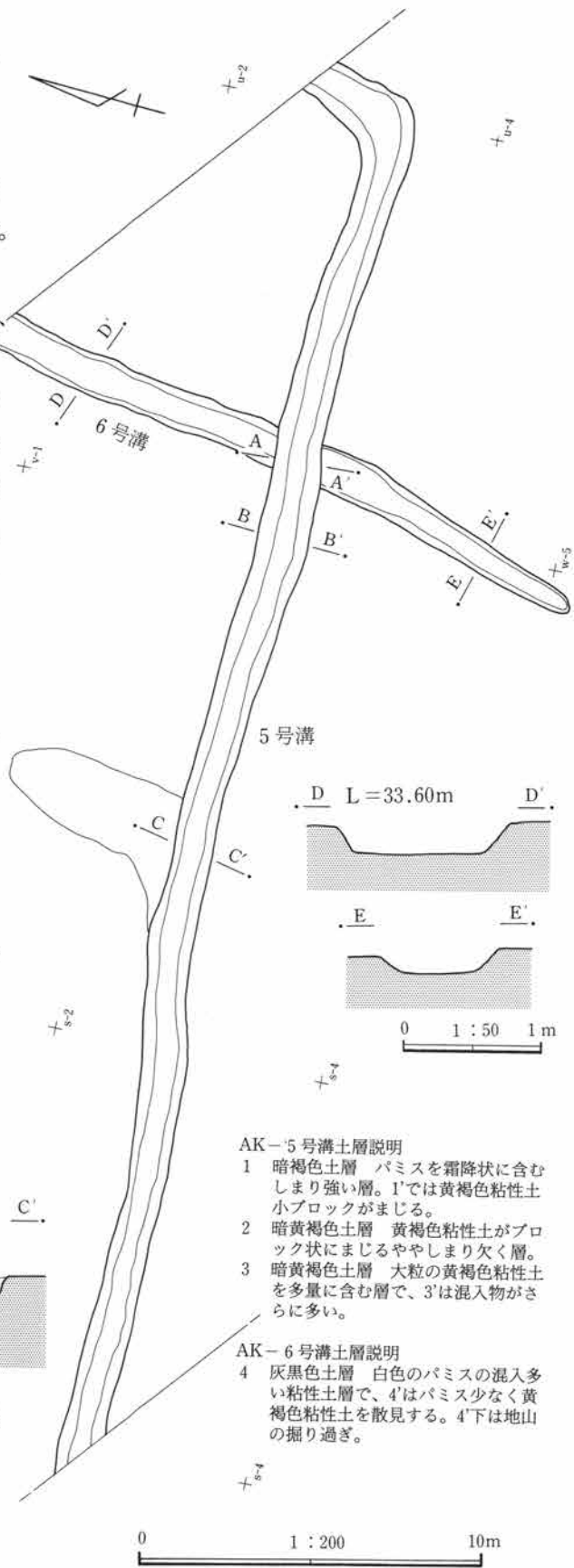
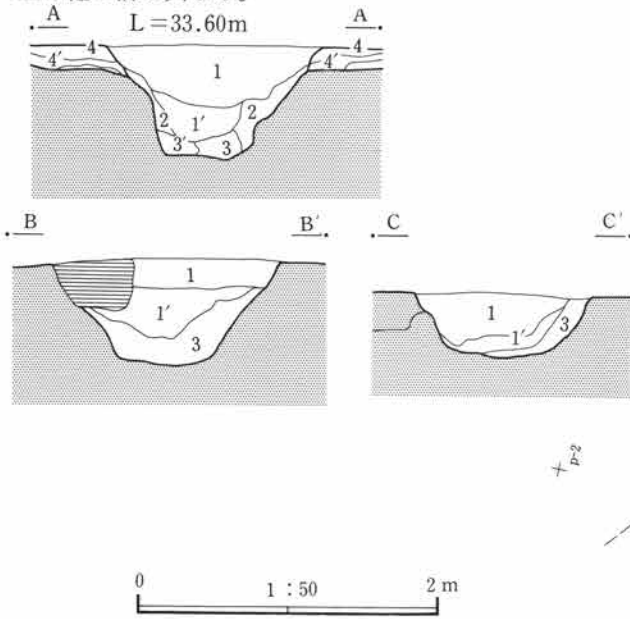
位置 I区w・x-0グリッド～I区v-5グリッド

規模 全長 [18.8m]

深さ 北寄りで22.5cm、南寄りで17.5cm。

重複 5号溝に先行する。

備考 走向N-11°-E前後の浅い溝である。埋没土は他の溝と異なる。



- AK-5号溝土層説明
- 1 暗褐色土層 パミスを霜降状に含むしまり強い層。1'では黄褐色粘性土小ブロックがまじる。
  - 2 暗黄褐色土層 黄褐色粘性土がブロック状にまじるややしまり欠く層。
  - 3 暗黄褐色土層 大粒の黄褐色粘性土を多量に含む層で、3'は混入物がさらに多い。
- AK-6号溝土層説明
- 4 灰黒色土層 白色のパミスの混入多い粘性土層で、4'はパミス少なく黄褐色粘性土を散見する。4'下は地山の掘り過ぎ。

第153図 AK-5・6号溝

AK-7号溝 (第154図)

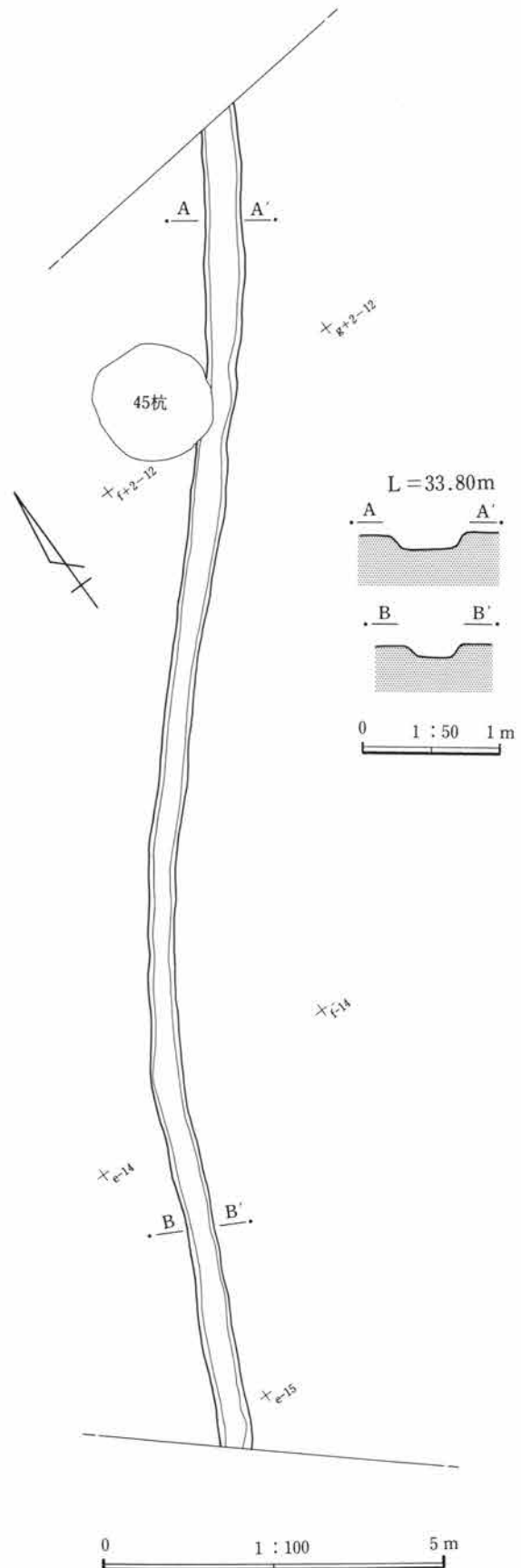
位置 J区g-11グリッド～J区d-15グリッド

規模 全長 [19.5m]

深さ 北寄りで12.5cm、南寄りで8.8cm。

重複 45号土坑

備考 7～9号溝は地山レベルの最も高い一面にある。本溝の両端は調査区域外であった。北東隅は農道を切り替えて行った追加調査の際には確認できず、図示部は端部付近と思われる。南西側も図示部の先2mの位置で行った道路下調査で延長部分が確認できず、端部はこの間に含まれるものである。緩やかだが大きな蛇行があり、走向はN-36°-E前後となる。底面は平坦で流路の泥跡はない。遺物の出土はなかった。



第154図 AK-7号溝



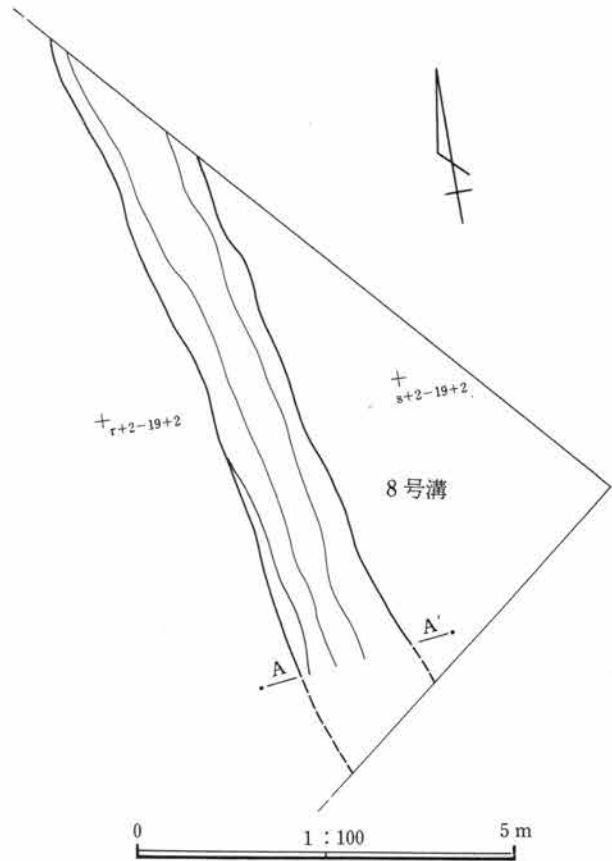
AK-8号溝 (第155図)

位置 J区r-17・18グリッド～J区s-19グリッド

規模 全長 [9.2m]

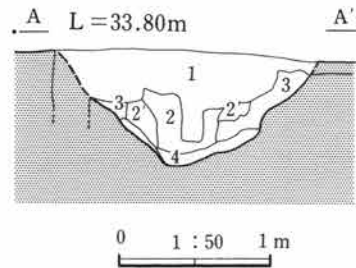
深さ 60.0cm

備考 調査範囲の東隅にあり、全遺構中でも最東隅にあたる溝である。付近は古墳時代氾濫層のない最も安定した場所と思われるが、遺構の少ない一面である。調査できた範囲は僅かであったが、深さのあるしっかりした溝で、大きな区画を作る溝と思われる。走向はN-13°-Wで直線的である。断面は不明瞭だが、薬研状になる可能性があろう。なお、本溝の南側は約25mで現早川の崖線に達する。



AK-8号溝土層説

- 1 暗褐色土層 攪乱の影響強い。ややしまり欠く。
- 2 暗褐色土層 しまりの強い弱粘性土層。バミスまじる。1'には黄褐色土ブロックがまじる。
- 3 暗黄褐色土層 地山黄褐色土と2土との混合土層。
- 4 灰黒色土層 下層地山の黒褐色粘性土主体の不明瞭な土層。しまりやや欠く。



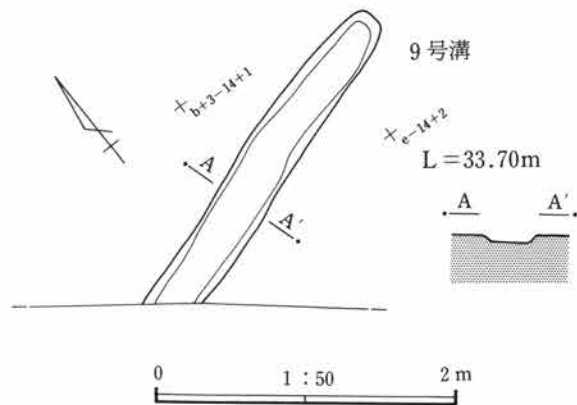
AK-9号溝 (第155図)

位置 J区b-14グリッド～J区c-14グリッド

規模 全長 [4.8m]

深さ 5 cm

備考 氾濫層下の畠の調査のため、道路を切り替えて調査した時に確認した溝で、上面の大半を失ってしまった。氾濫層上の溝で、走向はN-75°-Eで直線的である。埋没土は黒褐色を呈した弱粘性土であった。



第155図 AK-8・9号溝

## 5 井戸

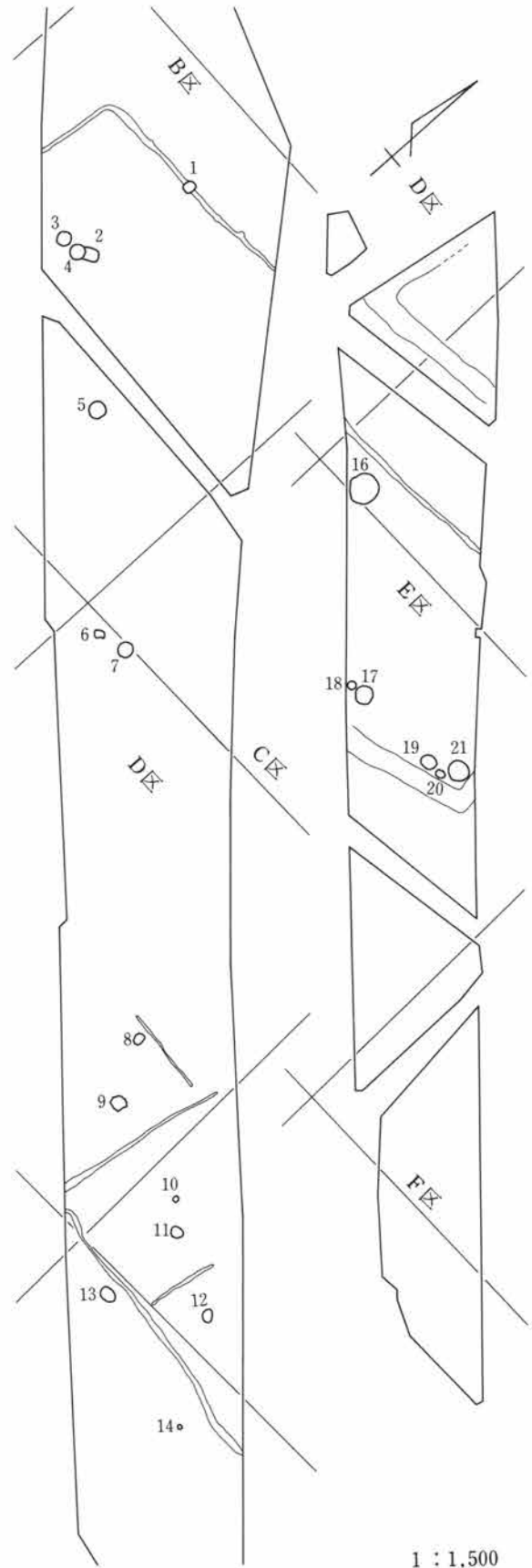
井戸は土坑に次いで数の多い遺構であった。安養寺森西遺跡では21基、大館馬場遺跡では21基、阿久津宮内遺跡では16基、総計58基の井戸を調査した。井戸の番号については調査時の重複や欠番、土坑との入れ替えなどによる混乱の解消のため、整理時に一部付け直しを行った。

安養寺森西遺跡の井戸分布を右図に示した。両図からも分かるように、井戸は流路跡の砂地や台地へり部分を除いてほぼ全域で確認されている。発掘調査は始めに確認面から約1.5mの深さまで掘り下げた。この時の出土遺物を上層として取り上げた。その後氾濫層下の畠を調査したのち、底面まで掘り下げこの時の出土遺物を下層とした。中層はこの間の出土遺物である。

安養寺森西遺跡のB・C・D区は氾濫層下が砂質土のため、重機により半截しながら掘り下げ、図面を合成する方法を取らざるを得なかった。地山が砂質土であるため、さまざまな井戸枠の工夫が見られた。また、木製品の出土も極めて多かった。この地区の井戸はすべて近世のものと思われる。

E区は中世館の区画内にあり、この時期の井戸が含まれているものと思われる。出土遺物にも中世のものが多い。

なお、大館馬場遺跡と阿久津宮内遺跡の井戸分布は第217図に示した。



第156図 安養寺森西遺跡井戸配置図

AY-1号井戸 (第157~159図 PL-31)

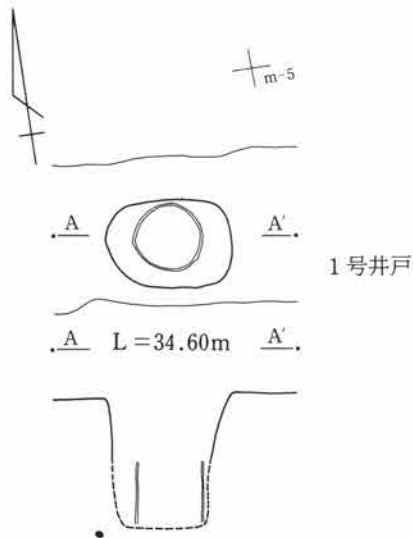
位置 B区e-5グリッド 4号溝の底面調査中、さらに落ち込みのあることに気付いた。溝の走向を意識した横長の平面形状である。新旧関係は確認できなかったが、調査段階では同時存在との所見を得ている。

規模(長軸×短軸) 上面1.02m×0.69m  
下面0.51m×0.51m

深さ 1.08m (溝底面から)

内部施設 栓の付いた桶を底板を抜いて井戸枠として底面に埋設している。2の栓の付いた側板表面には「罫」の屋号が焼き印されていた。また2と9には吊り手孔が穿たれていた。

備考 井戸としては極めて浅い。底面付近の地山は砂質土だが、湧水面まで達していない。当初土坑と考えたが、底を抜いた桶が埋設されていることより、溝の水を貯める井戸とした。



AY-2号井戸土層説明

- 1 暗褐色土層 0.5~4cm大の軽石を多量に含む砂質土層。1'はさらに砂質で、炭化物粒を散見する。
- 2 暗黄褐色土層 シルト質土や粘性土等の雑多な混入物の多い弱粘性土。

AY-2号井戸 (第157・160図 PL-31・36)

位置 B区k・1-11・12グリッド 2~4号の3基の井戸が集中している。特に4号井戸とは上面で10cmしか離れておらず、同時存在は考えにくい。

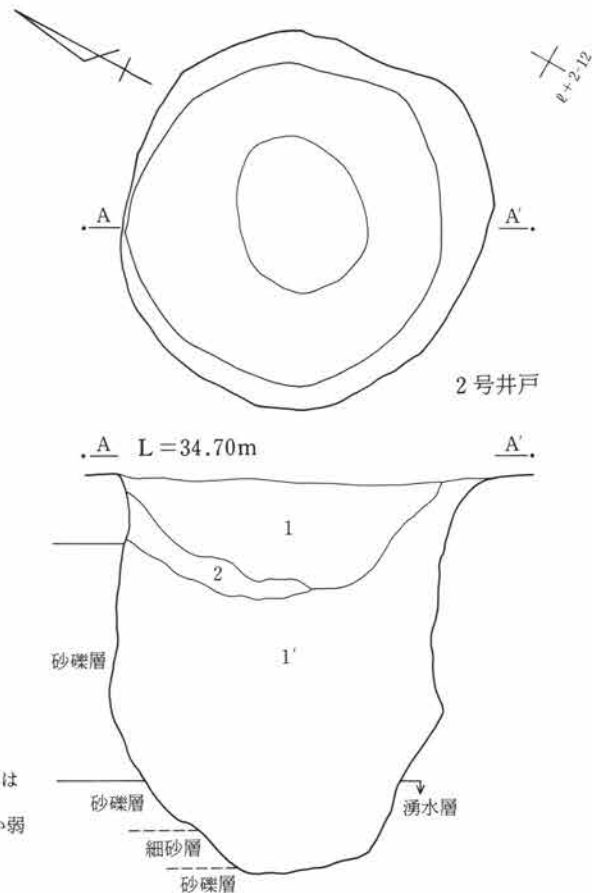
規模(長軸×短軸) 上面3.08m×2.78m  
下面1.32m×0.82m

深さ 3.16m

内部施設 みつかっていない。

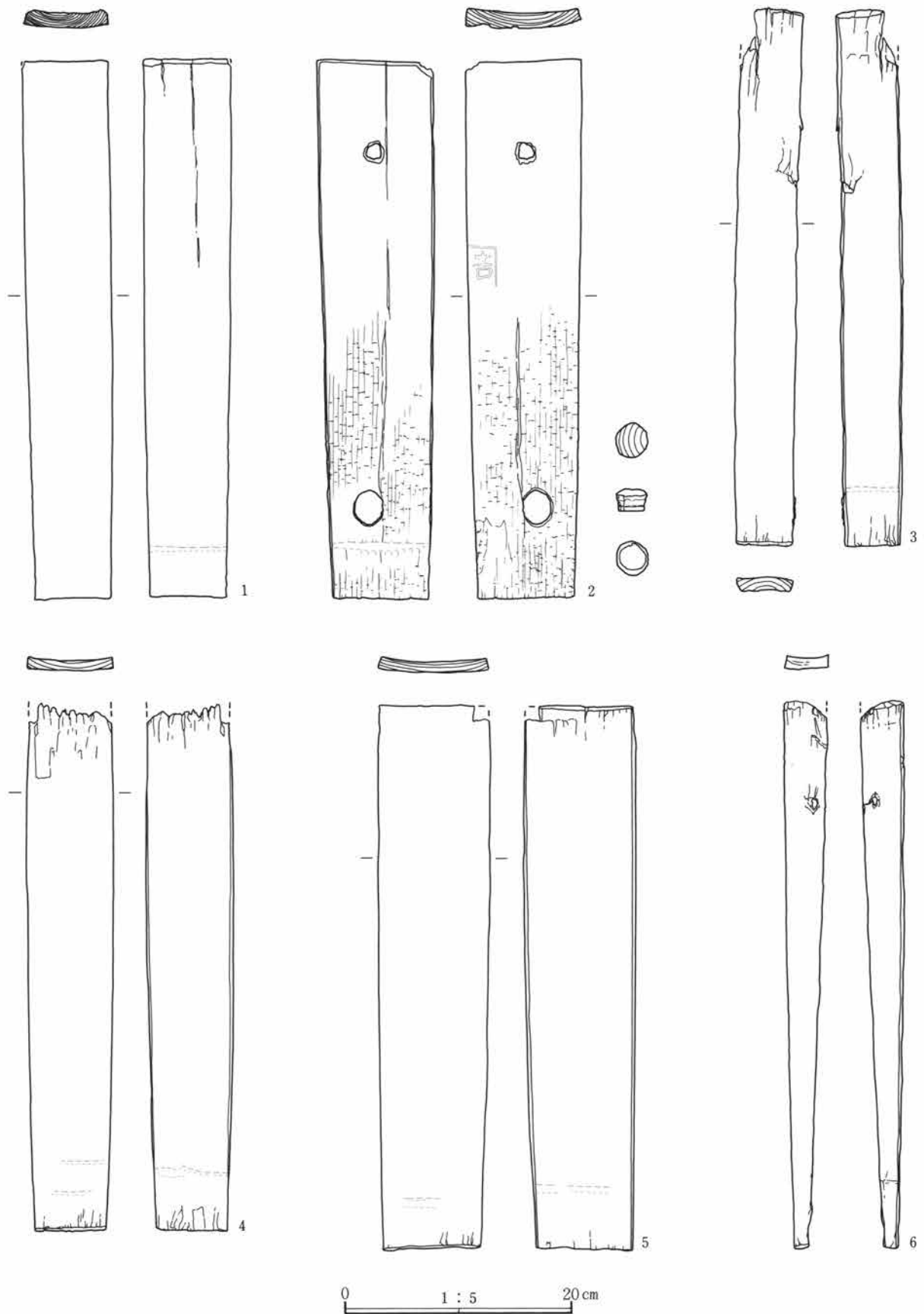
遺物の出土状態 陶磁器を中心に13点の遺物を図示した。すべて上層からの出土で、2・4・6~10など9号井戸と接合するものが目立った。

備考 本井戸と9号井戸は年度をまたいだ調査で、遺物の取り上げに混乱があった。接合資料は9号井戸に所属する遺物の可能性がある。

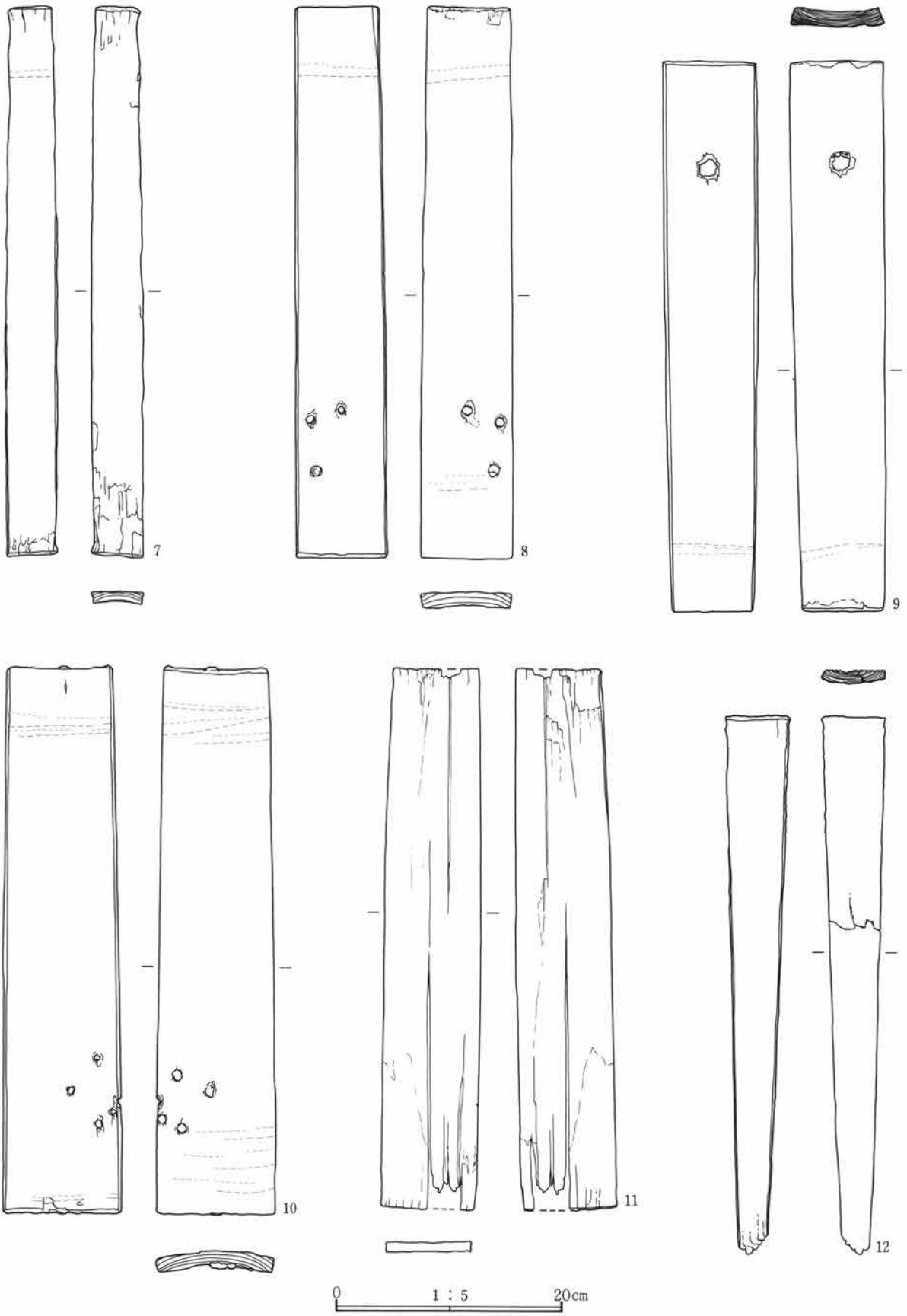


0 1:60 2m

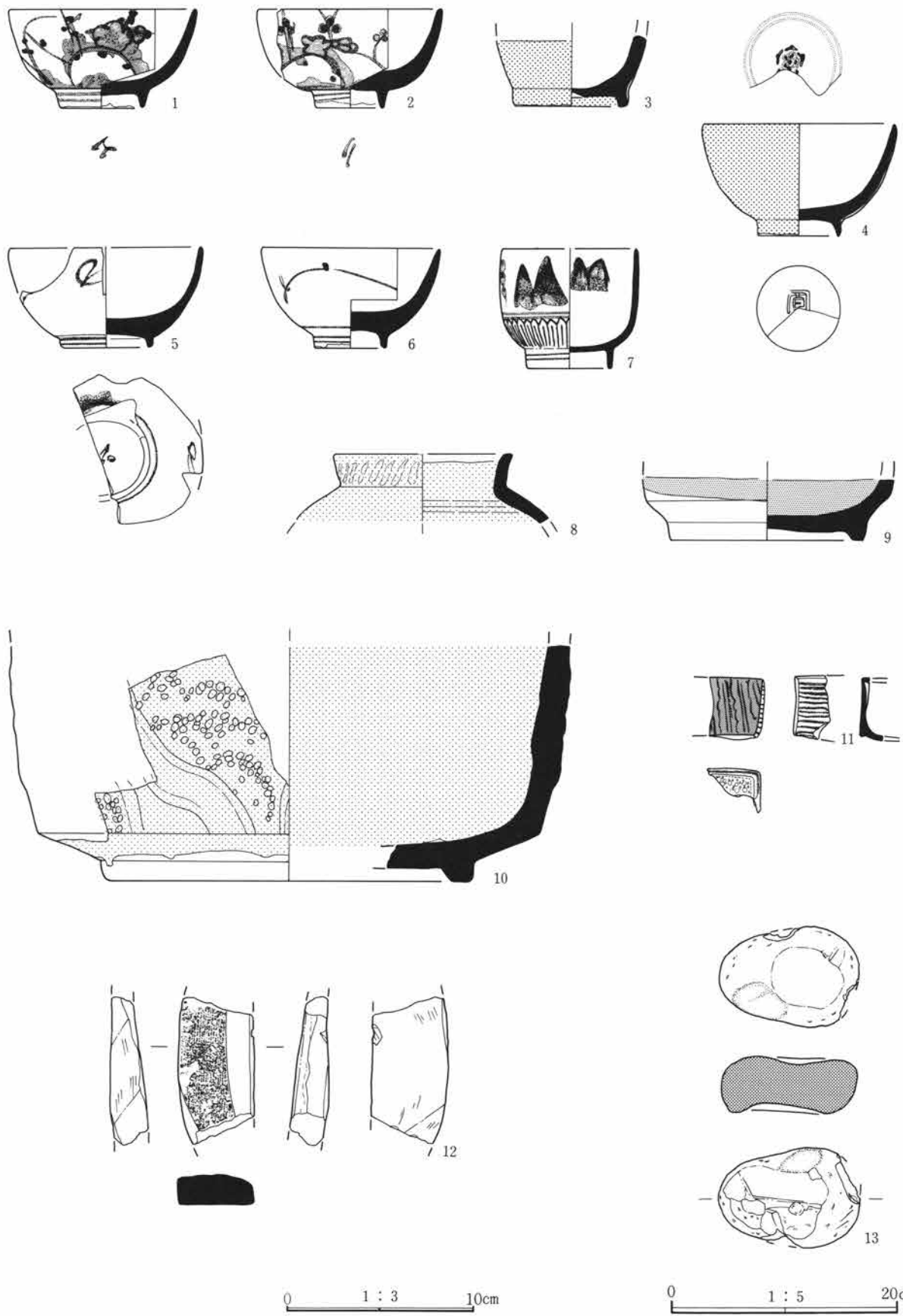
第157図 AY-1・2号井戸



第158図 AY-1号井戸出土遺物(1)



第159图 AY-1号井戸出土遺物(2)



第160図 AY-2号井戸出土遺物

AY-3号井戸 (第161図 PL-31)

位置 B区 i・j-11・12グリッド 東側1.5mに  
4号井戸がある。

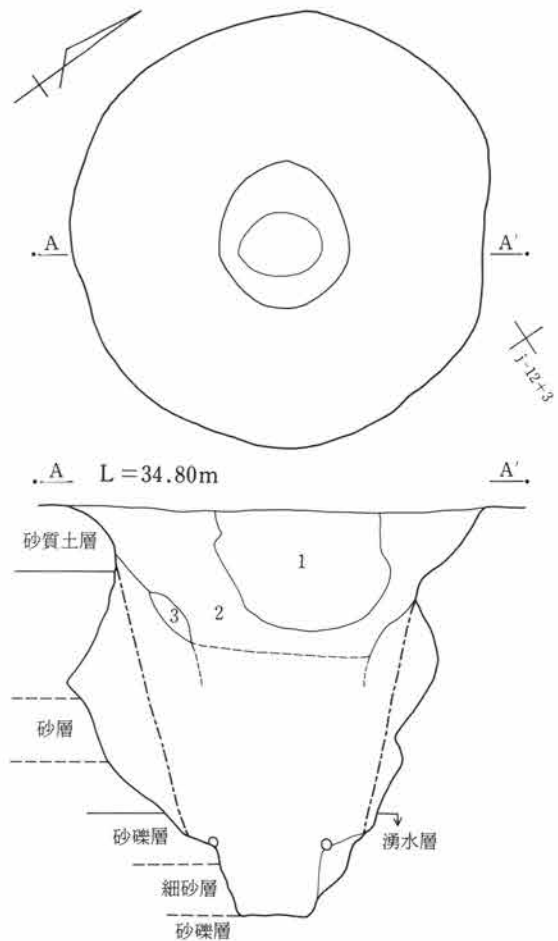
規模 (長軸×短軸) 上面3.50m×3.30m  
下面0.66m×0.51m

深さ 3.16m

**内部施設** 調査時の壁の崩落のため、下半では土層の記録を残せなかったが、崩落以前の観察から、壁際には粘性土を充填していることが確認できた。この粘性土の上面には円礫が多く、充填土上に石敷部分のあった可能性がある。右断面図の一点破線外側は調査時の壁の崩落部分である。また、下層の一次底面から落ち込み部分にかけて木質が残存しており、井戸枠状の施設のあった可能性がある。

**遺物の出土状態** 埋没土中より不明軽石製品破片を1点出土している。

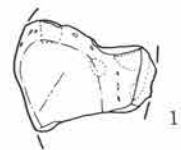
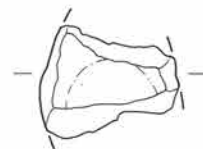
**備考** 遺構確認時には径1.4mほどの小規模な落ち込みであった(断面の1層に相当)。中層の壁の崩落は殆どが発掘調査時のものであり、遺構の遺存状態は比較的良かったと思われる。



AY-3号井戸土層説明

- 1 灰褐色砂層 軽石の混入の多い、しまりに欠ける層。
- 2 暗灰褐色砂質土層 砂と暗褐色土の混土層で軽石の混入多い。
- 3 暗褐色土層 炭化物の混じる弱粘性土層。

0 1 : 60 2m



0 1 : 5 20cm

第161図 AY-3号井戸および出土遺物

AY-4号井戸 (第162図 PL-31)

位置 B区k-11・12グリッド

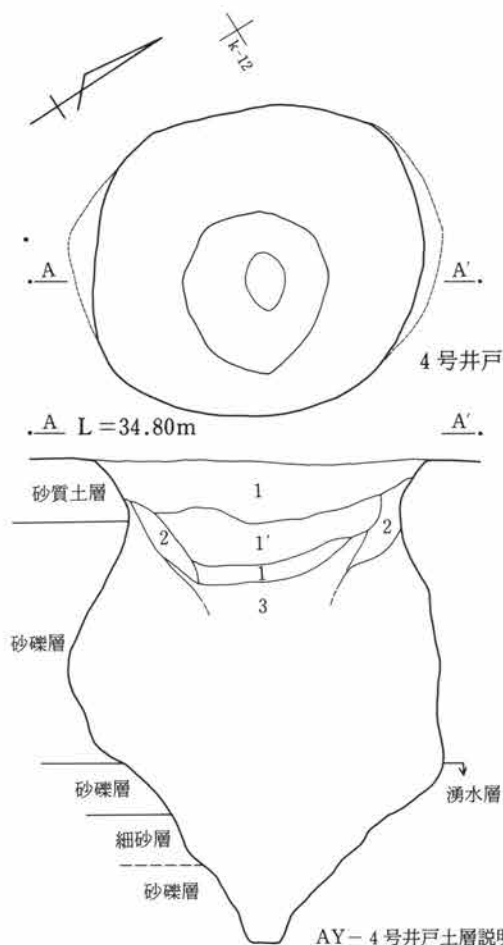
規模(長軸×短軸) 上面2.86m×2.54m  
下面0.45m×0.30m

深さ 3.86m

内部施設 見つからなかった。

遺物の出土状態 上層より渡来銭の破片1点を出土している。

備考 湧水と壁の崩落が著しく、旧状は明瞭にできなかった。



AY-4号井戸土層説明  
1 暗褐色土層 3cm大の軽石の混入多いや砂質土層。1'は砂の混入多い。  
2 暗黄褐色土層 ブロック状のシルト質土と砂の混土層。  
3 暗灰褐色土層 炭化物の混じる弱粘性土層。



0 5cm

AY-5号井戸 (第162図 PL-31)

位置 B区r-16・17 s-17グリッド

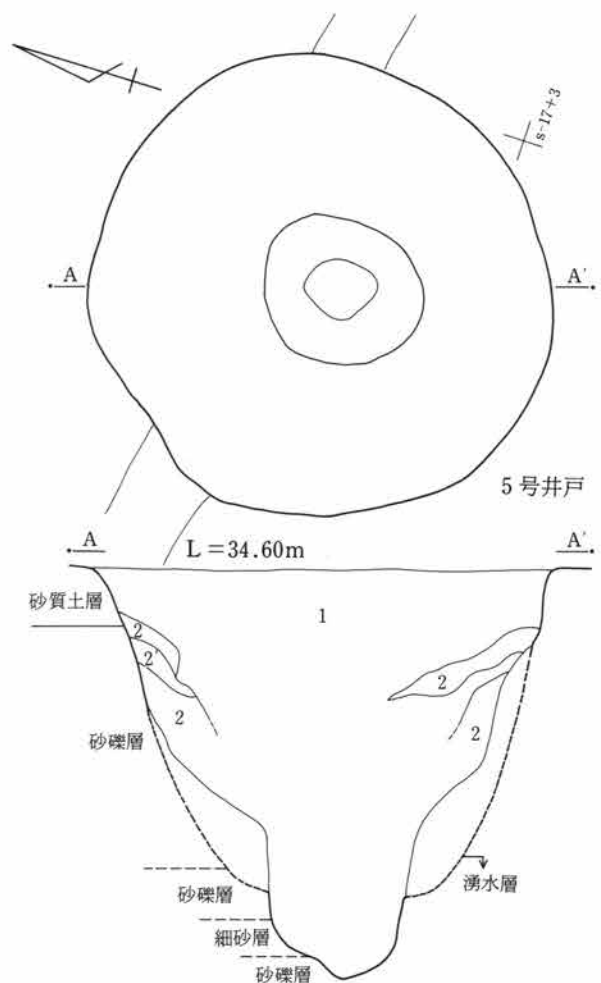
重複 9号溝

規模(長軸×短軸) 上面3.76m×3.60m  
下面0.58m×0.46m

深さ 3.34m

内部施設 下半の壁際に粘性土を充填しており、井戸枠の裏込めと考えられる。

備考 湧水が著しく、北壁は測量前に崩落してしまい、一部復元図示となっている。



AY-5号井戸土層説明  
1 暗褐色土層 0.5~4cm大の軽石の混入やや多い砂質土層。  
2 暗黄褐色土層 シルト質土、砂、粘性土の混土層。しまりあり。2'は砂の混入多い。

0 1:60 2m

第162 AY-4・5号井戸および出土遺物



AY-6号井戸 (第163図 PL-31・36)

位置 C区b・c-0グリッド 上面北側は生活道路にかかり、調査できなかった。

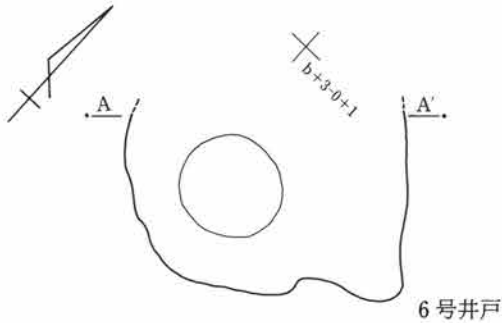
規模 (長軸×短軸) 上面2.22m×-

深さ [2.40m]

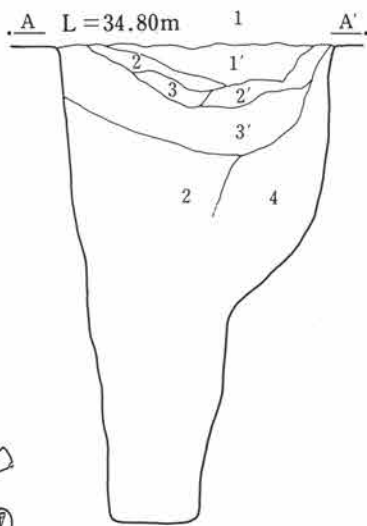
内部施設 痕跡は認められなかった。

遺物の出土状態 埋没土中から鉄釘を出土している。

備考 断面測図は井戸中央を外れてしまい、下半は合成した。底面はボーリング棒で得られたデータによる想定復元である。

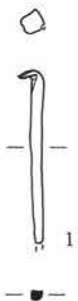


6号井戸



AY-6号井戸土層説明

- 1 褐色土層 粒子の細かな非粘性土層。1'は軽石の混入やや多い。
- 2 にぶい黄褐色土層 砂粒・細礫の混入多い。2'は暗褐色土ブロックの混入多い。
- 3 暗褐色土層 軽石・砂粒の混じる弱粘性土層。3'は黒色味増す。



0 1:3 10cm

AY-7号井戸

(第163~178図 PL-31・36~39)

位置 C区d-24・0グリッド

規模 (長軸×短軸) 上面3.39m×3.18m

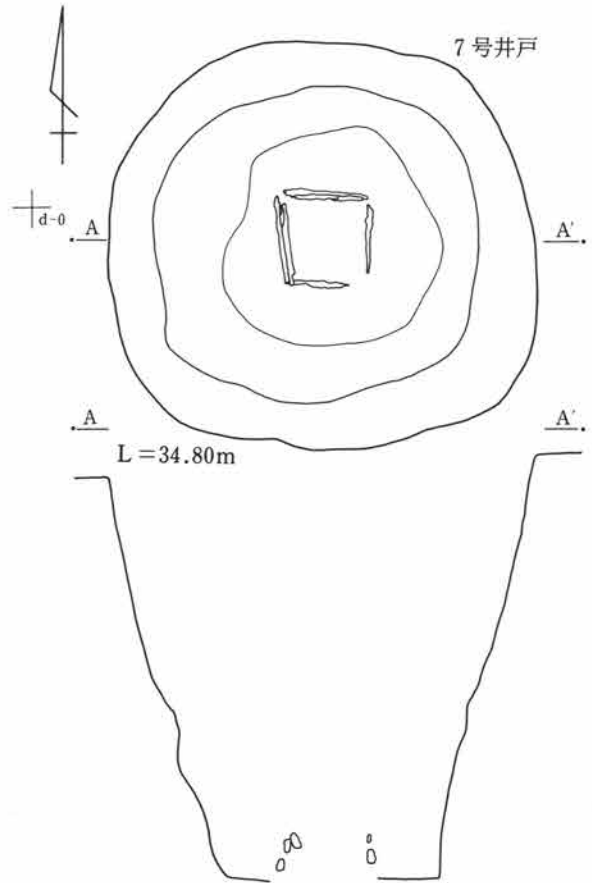
下面1.71m×1.65m

深さ 4.80m

内部施設 底面付近に方形に組んだ、内側約1.2mの井戸枠を設けている。

遺物の出土状態井戸枠材の他にも曲物、桶、端材等の木製品が極めて多く出土しており、総数161点を図示した。

備考 井戸枠掘り出しの際、底面付近は失っている。



7号井戸



d-0

A

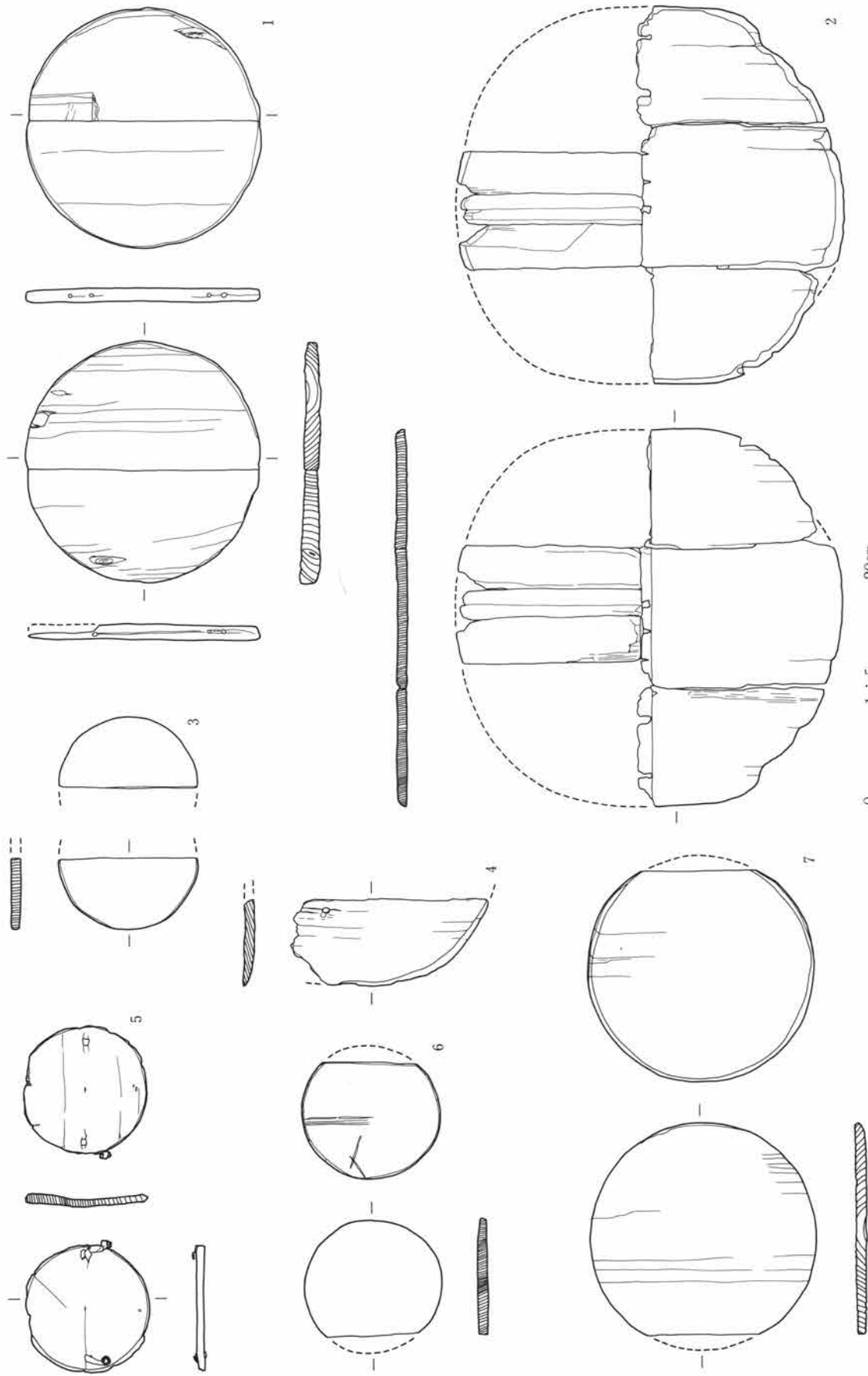
L=34.80m

AY-7号井戸土層説明

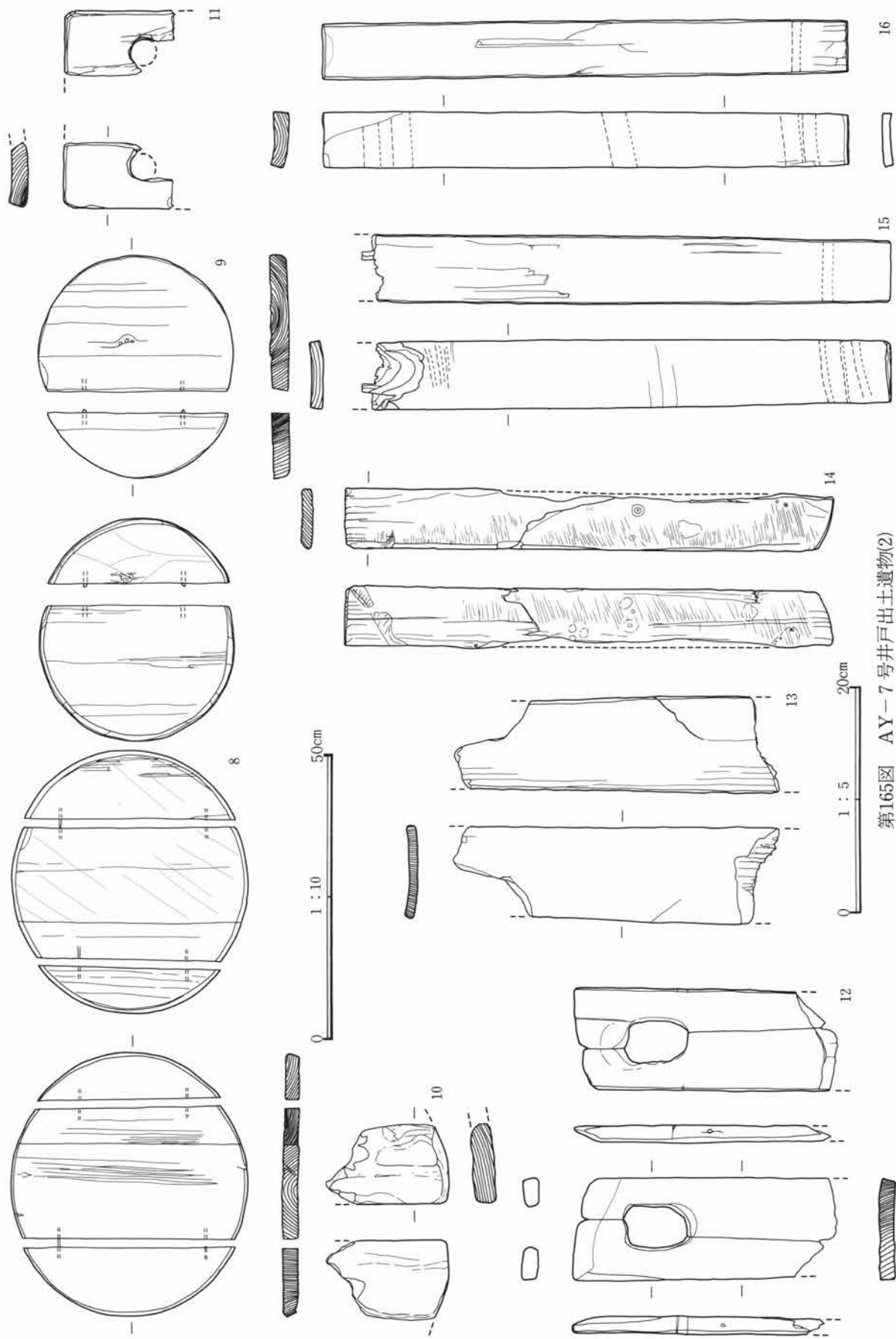
埋没土は暗褐色を呈する弱粘性土で、砂粒・軽石・円礫等の混入物を含む。

0 1:60 2m

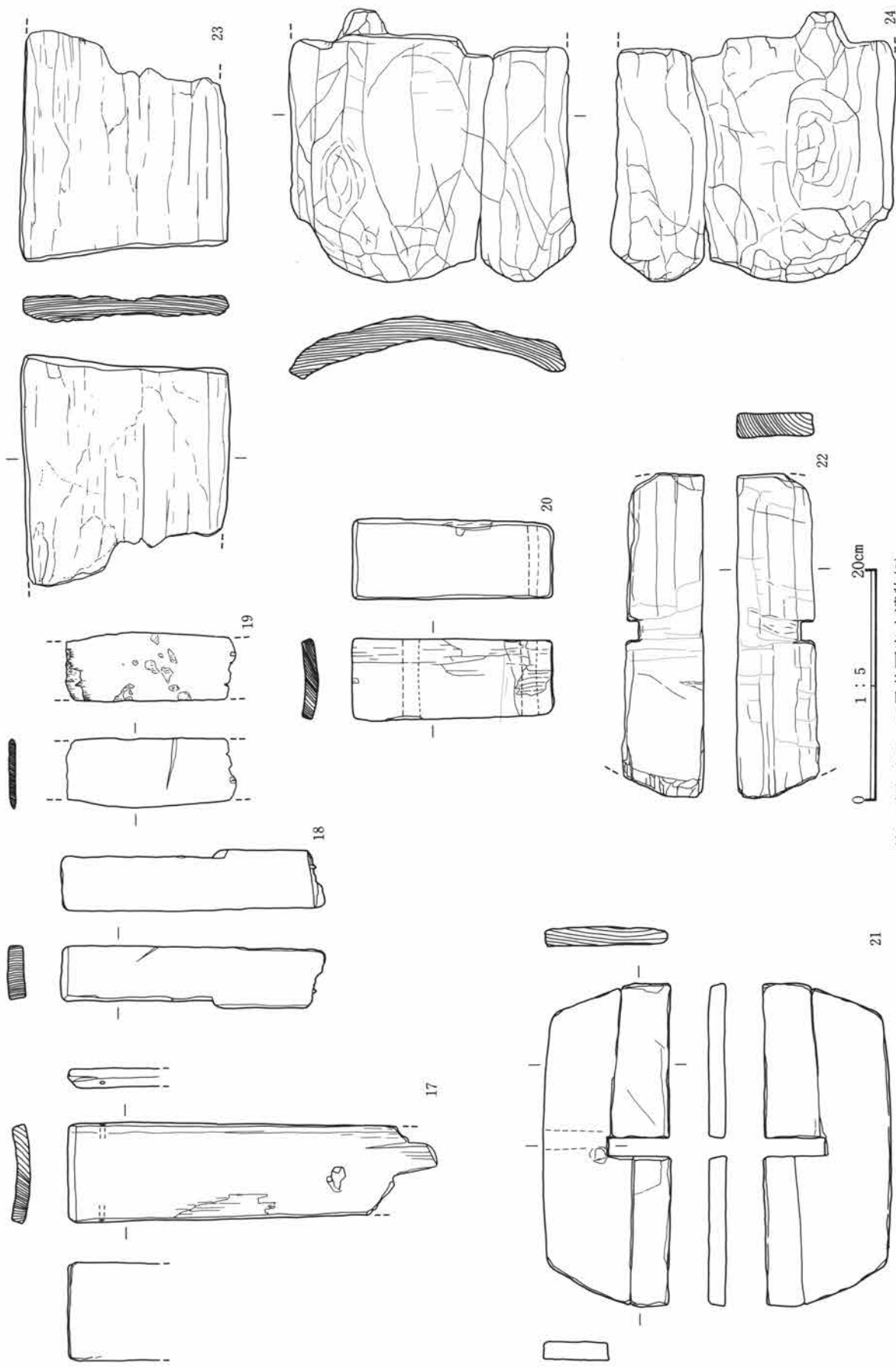
第163図 AY-6・7号井戸および出土遺物



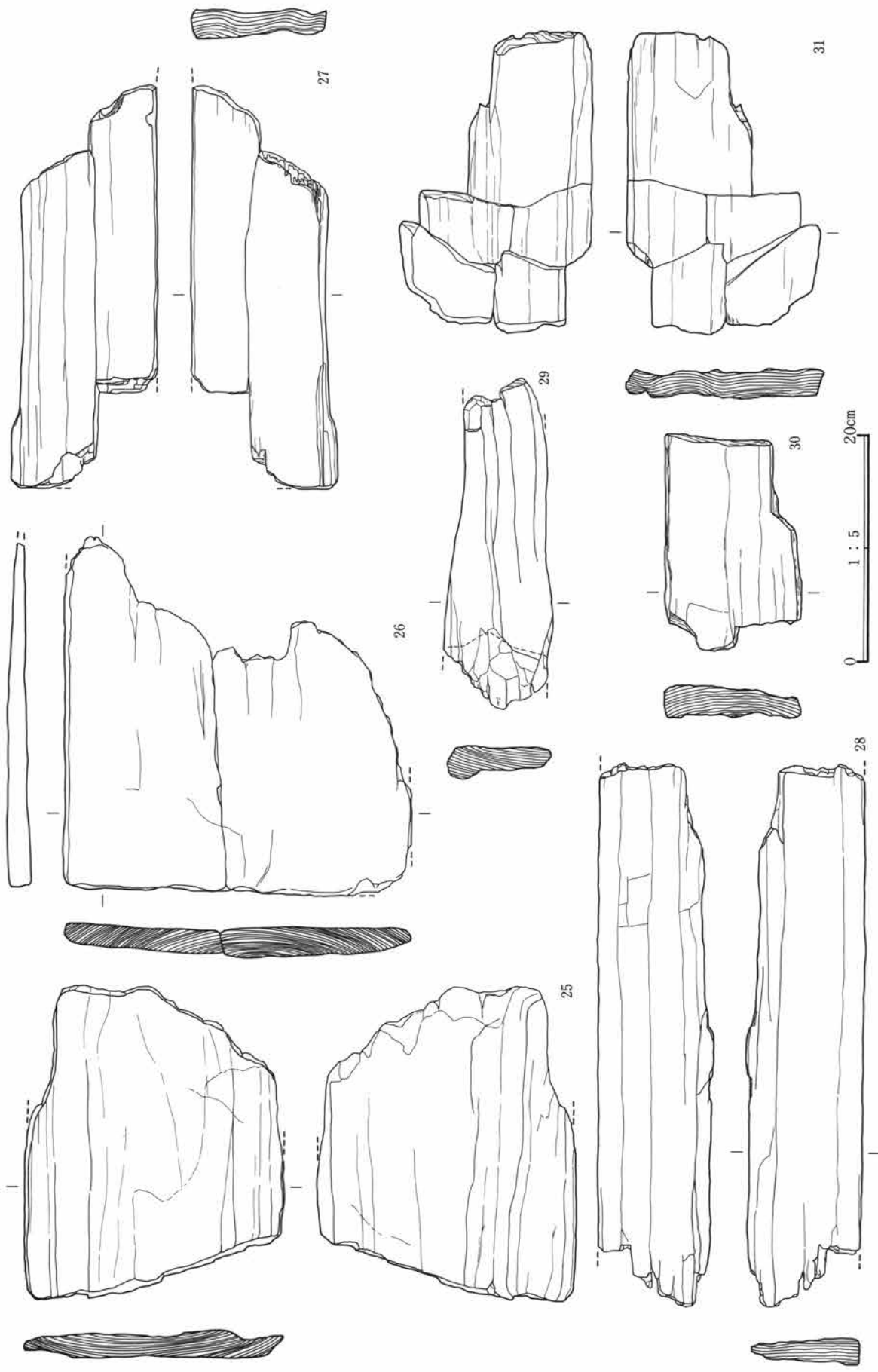
第164図 AY-7号井戸出土遺物(1)



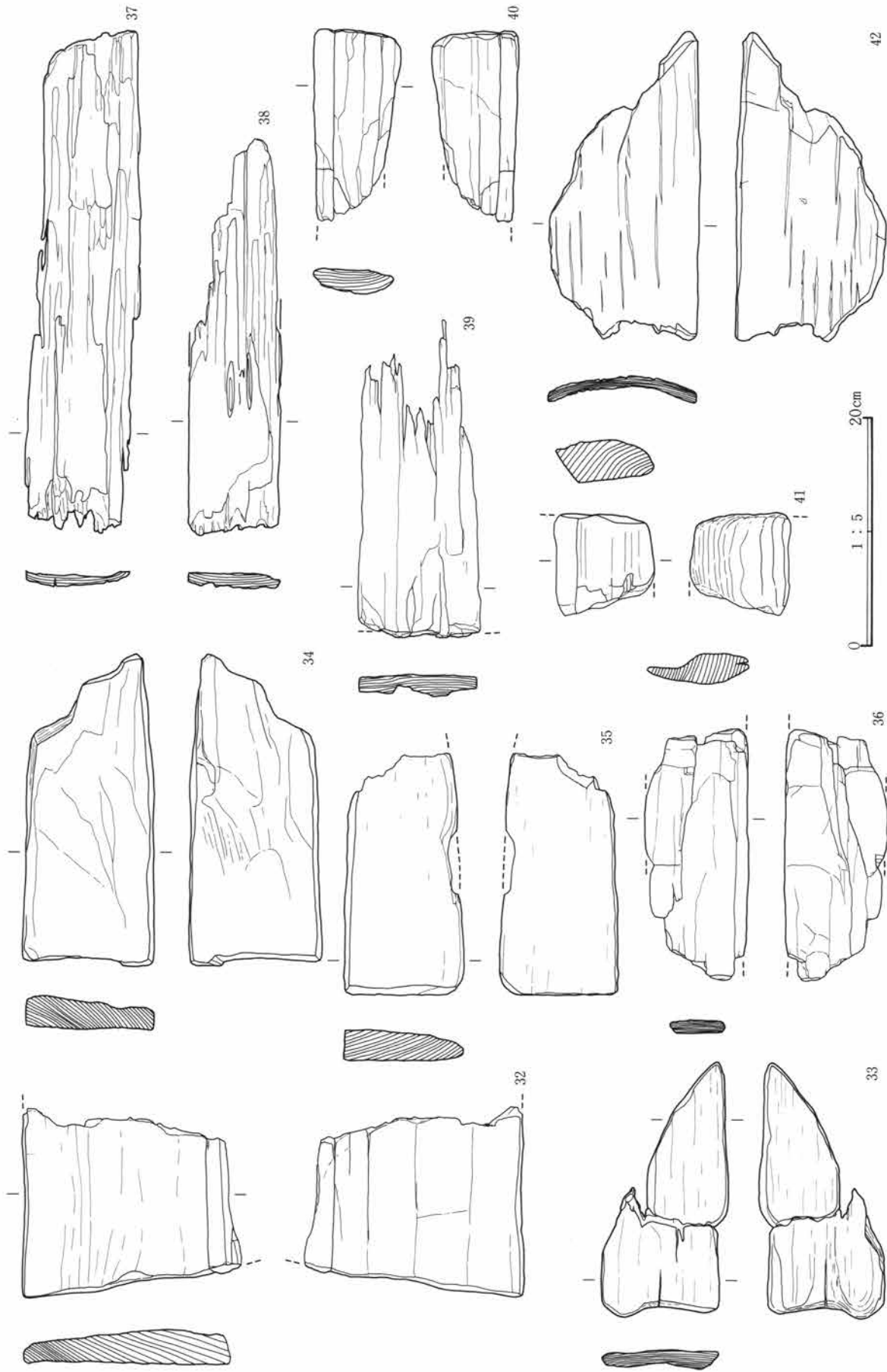
第165図 AY-7号井戸出土遺物(2)



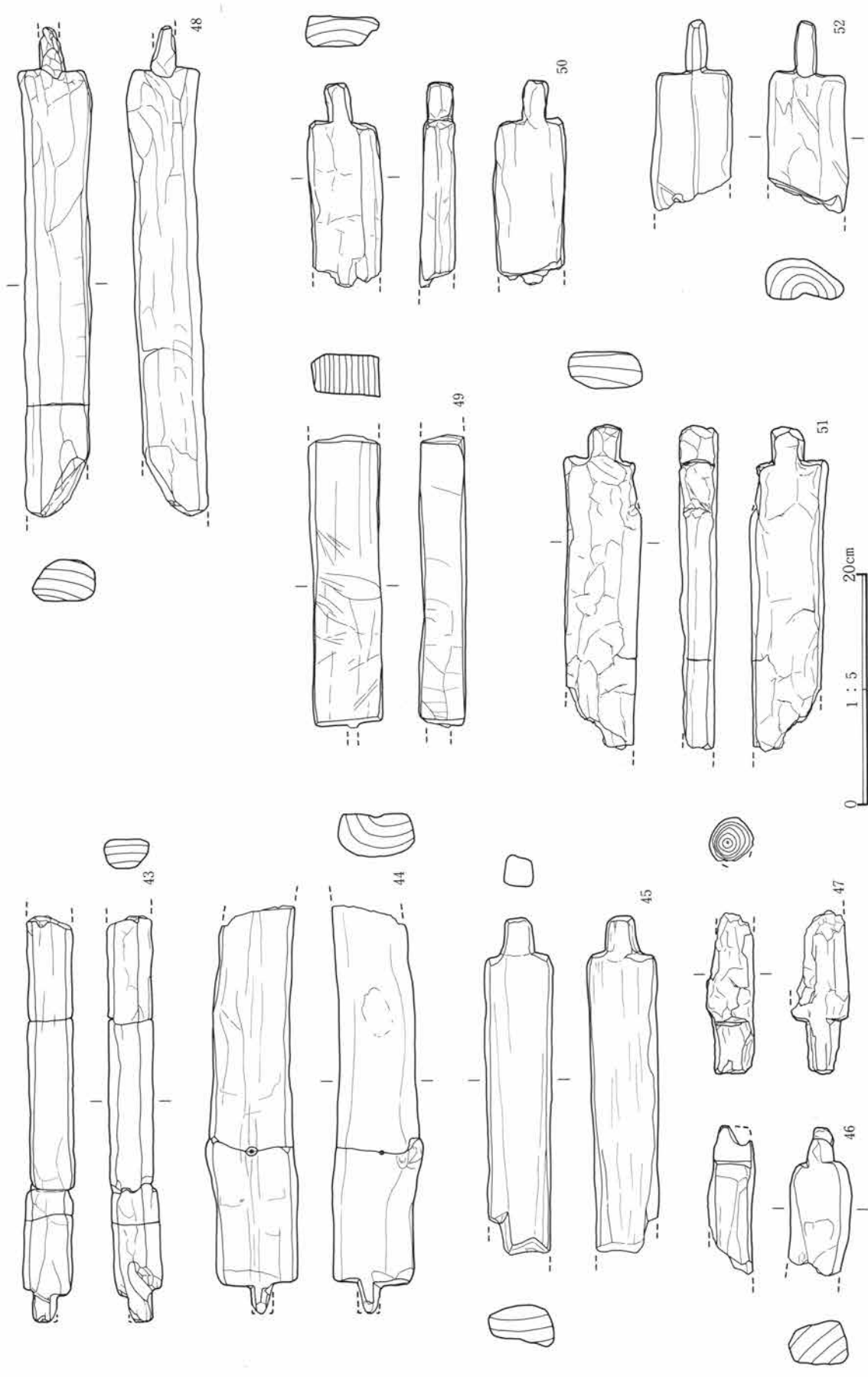
第166図 AY-7号井戸出土遺物(3)



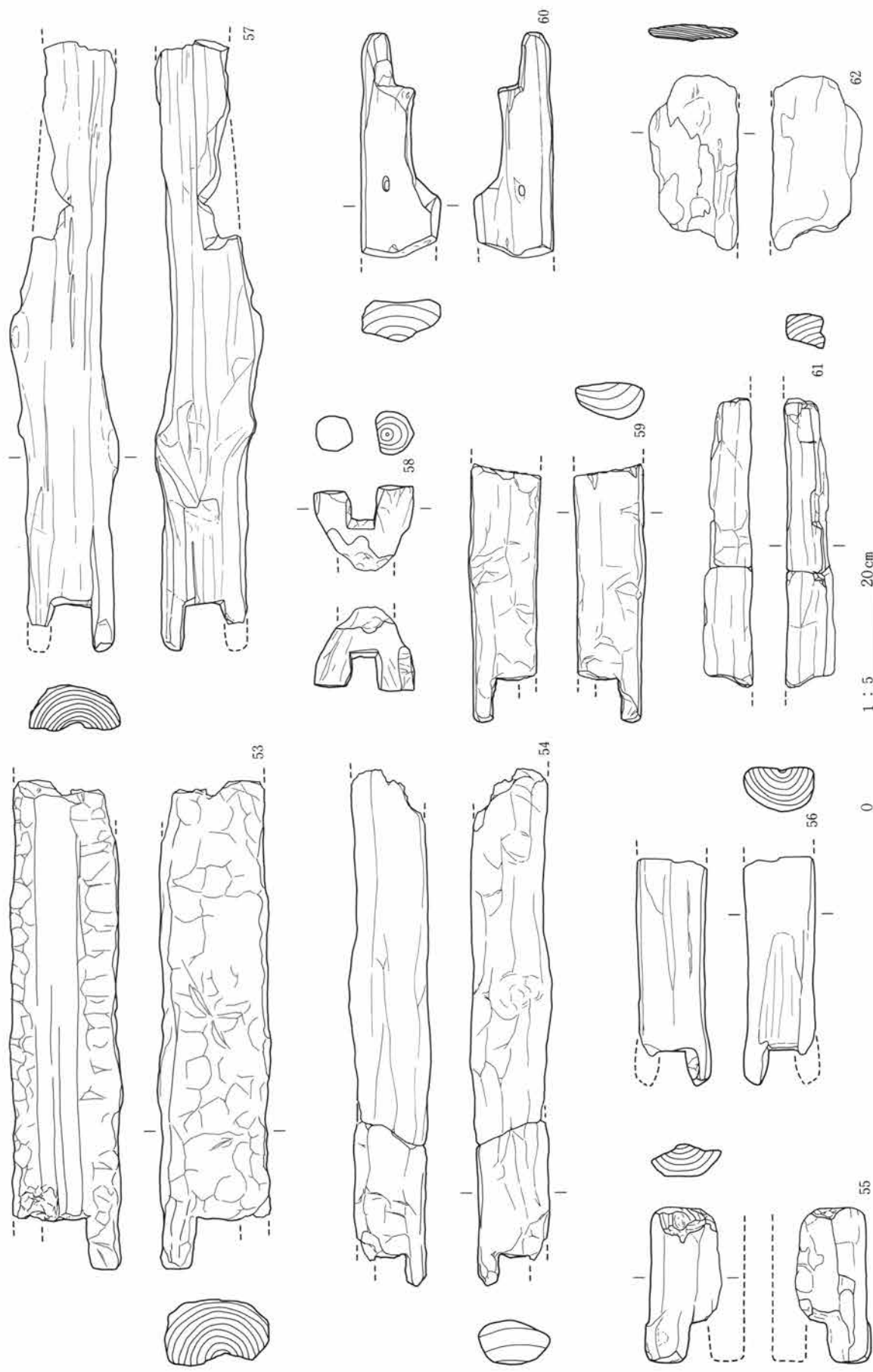
第167図 AY-7号井戸出土遺物(4)



第168図 AY-7号井戸出土遺物(5)

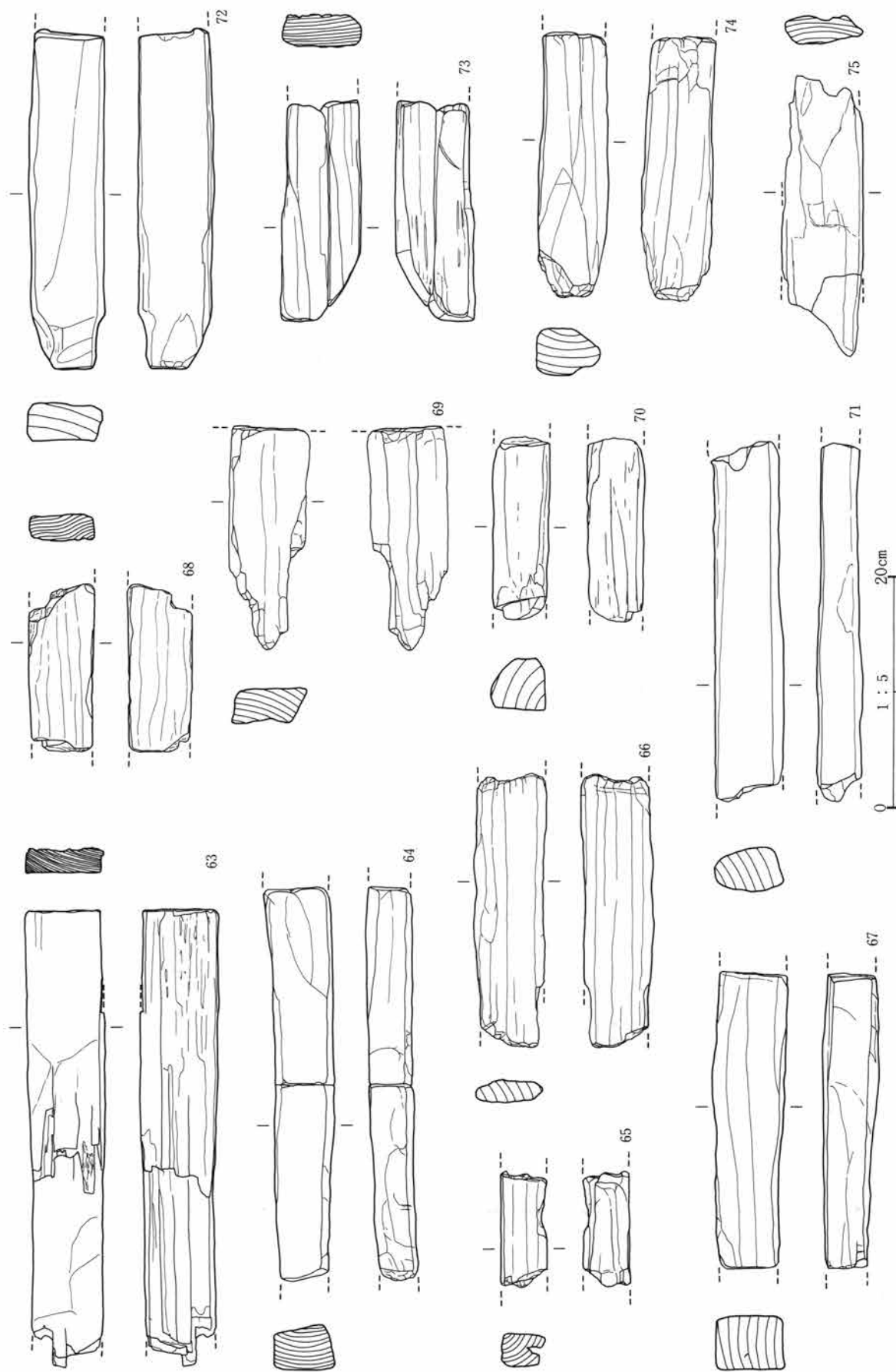


第169図 AY-7号井戸出土遺物(6)

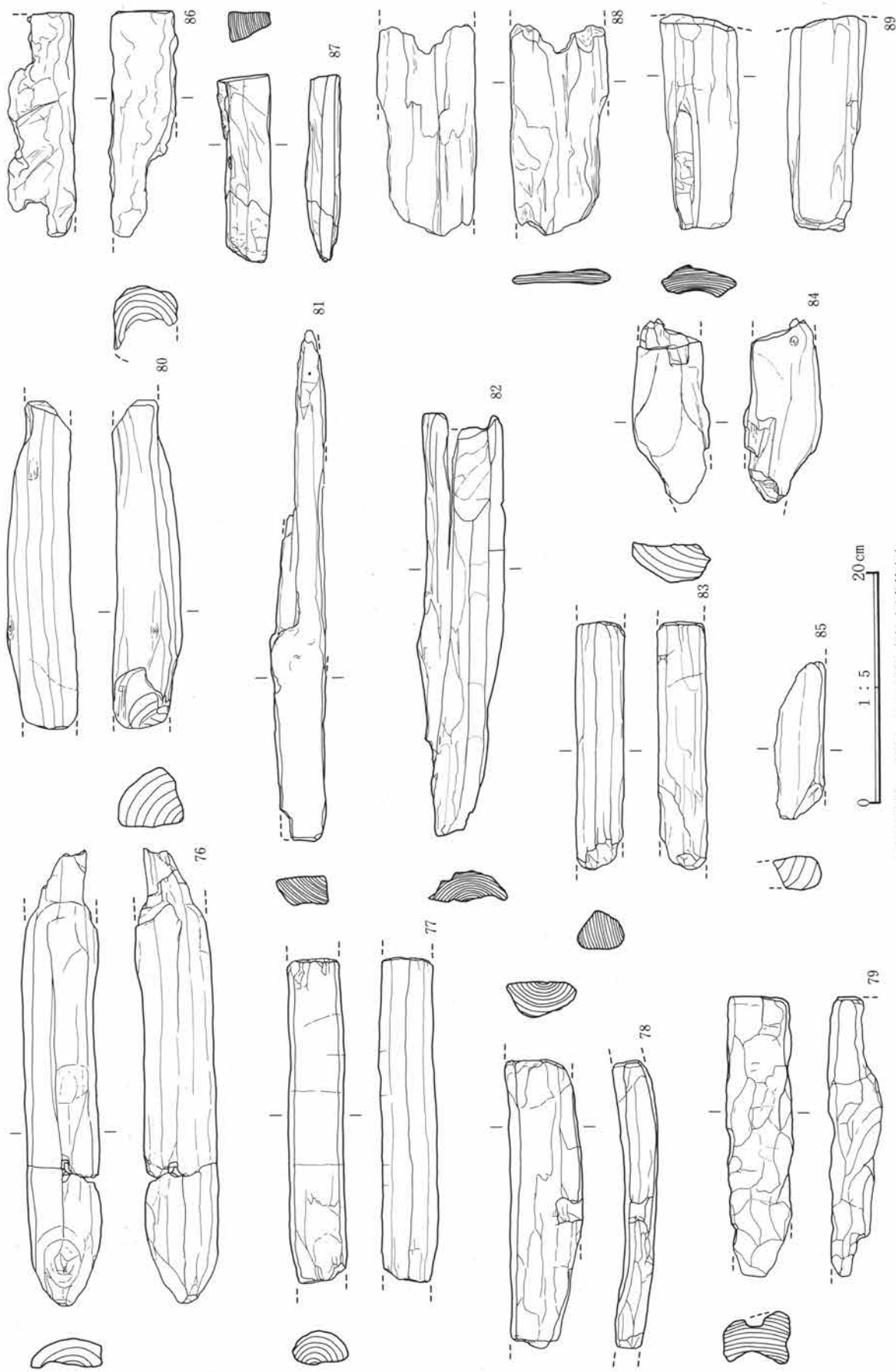


第170图 AY-7号井戸出土遺物(7)

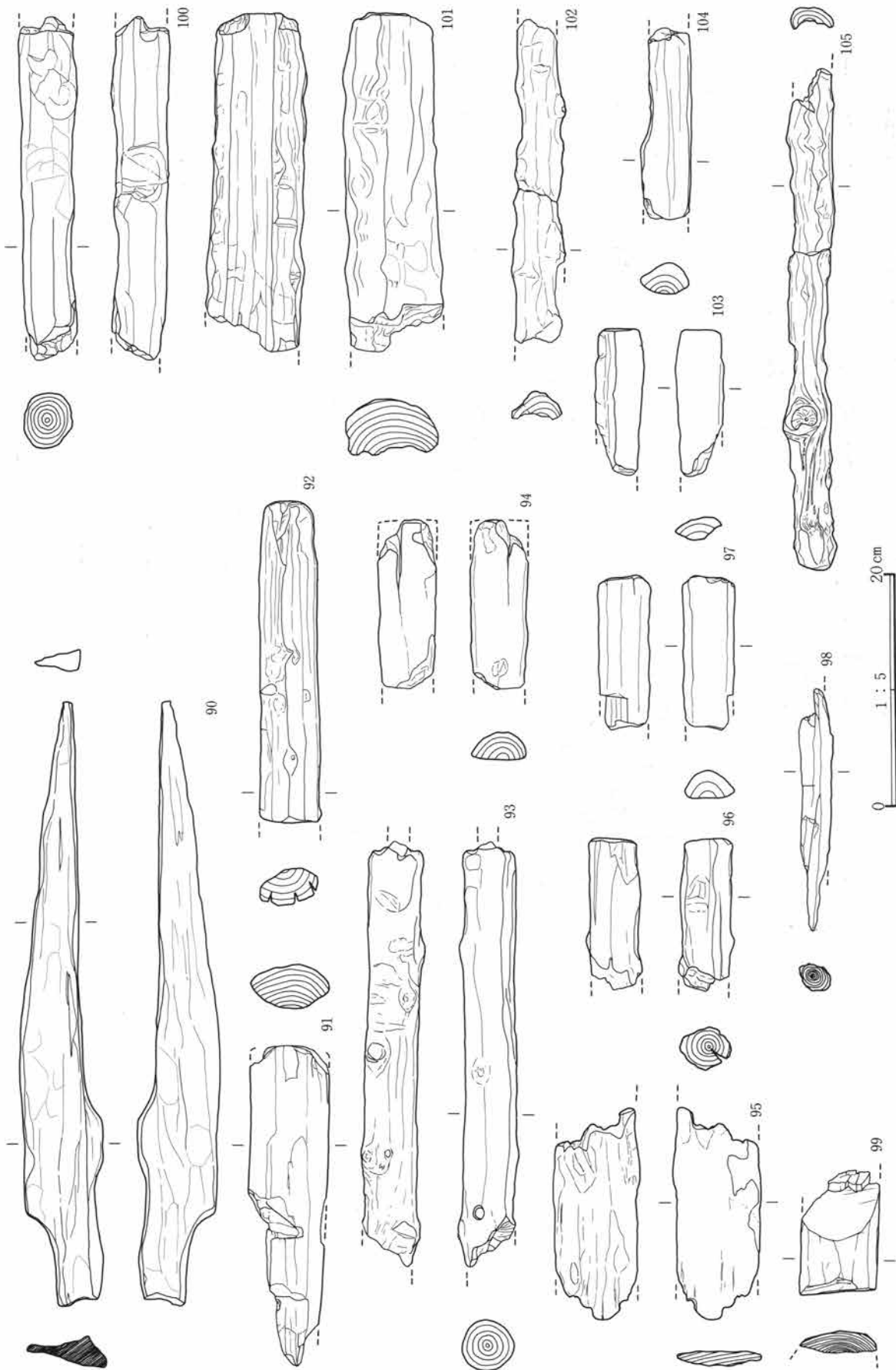




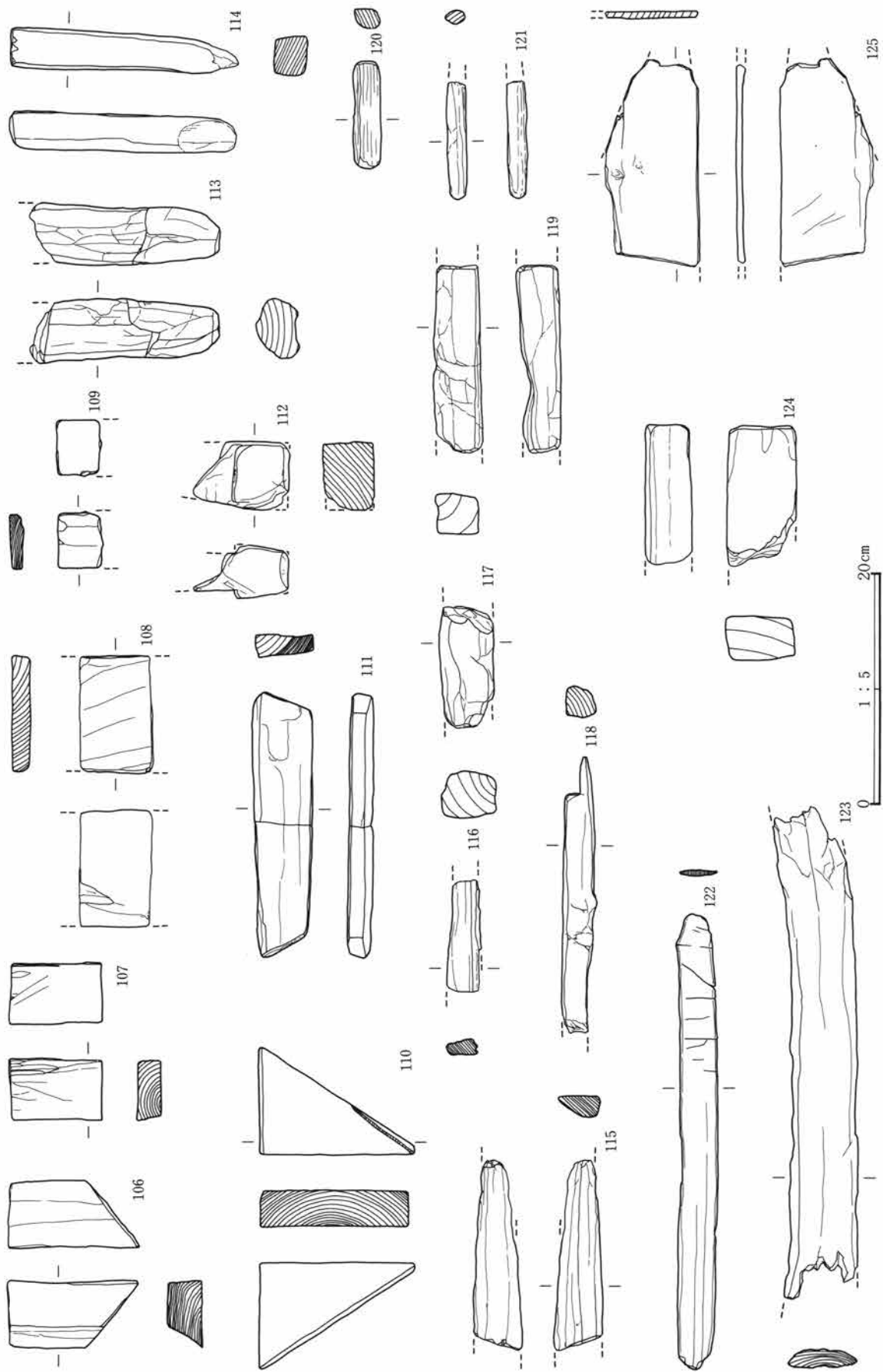
第171図 AY-7号井戸出土遺物(8)



第172図 AY-7号井戸出土遺物(9)



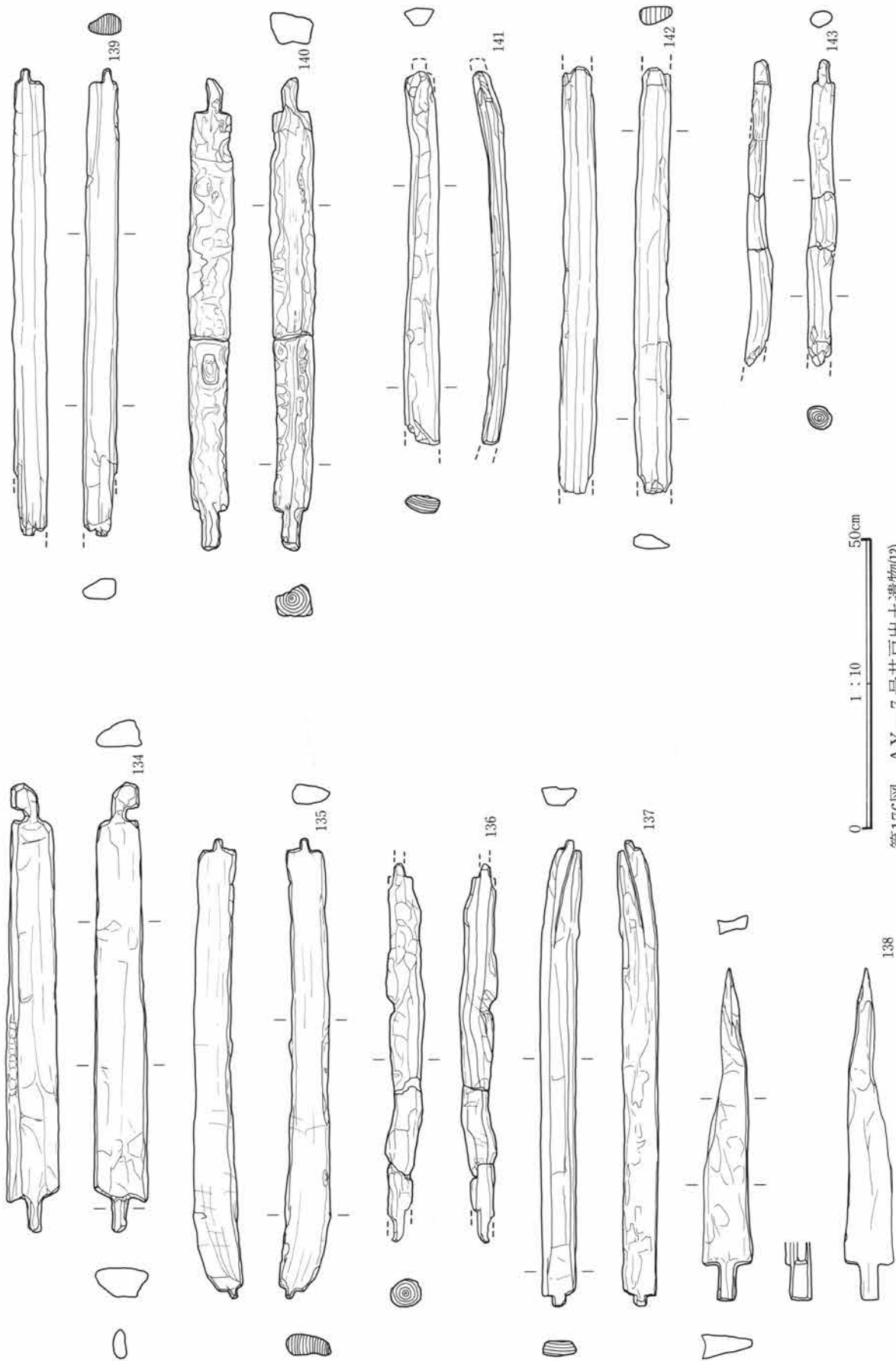
第173図 AY-7号井戸出土遺物(10)



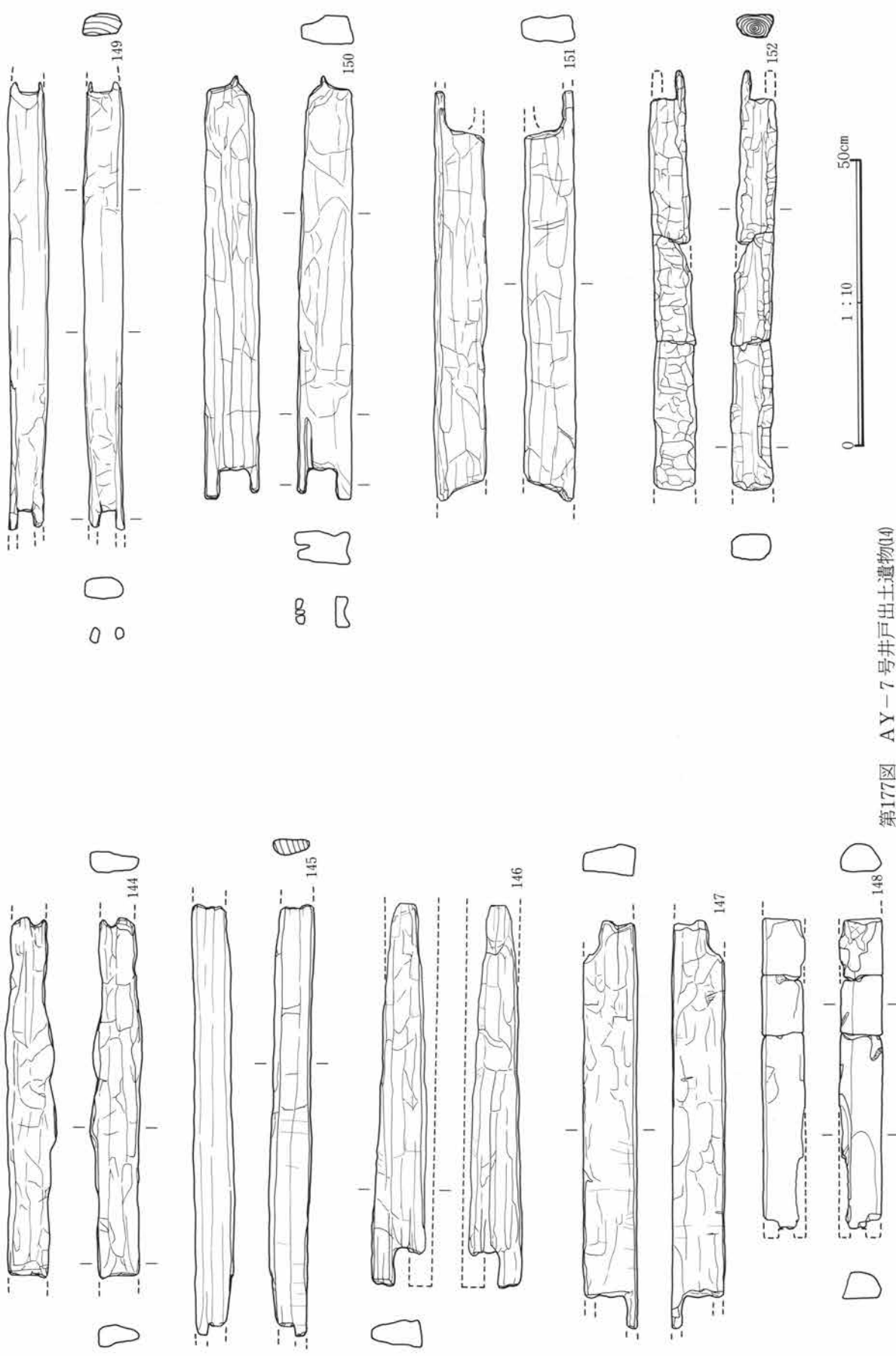
第174図 AY-7号井戸出土遺物(II)



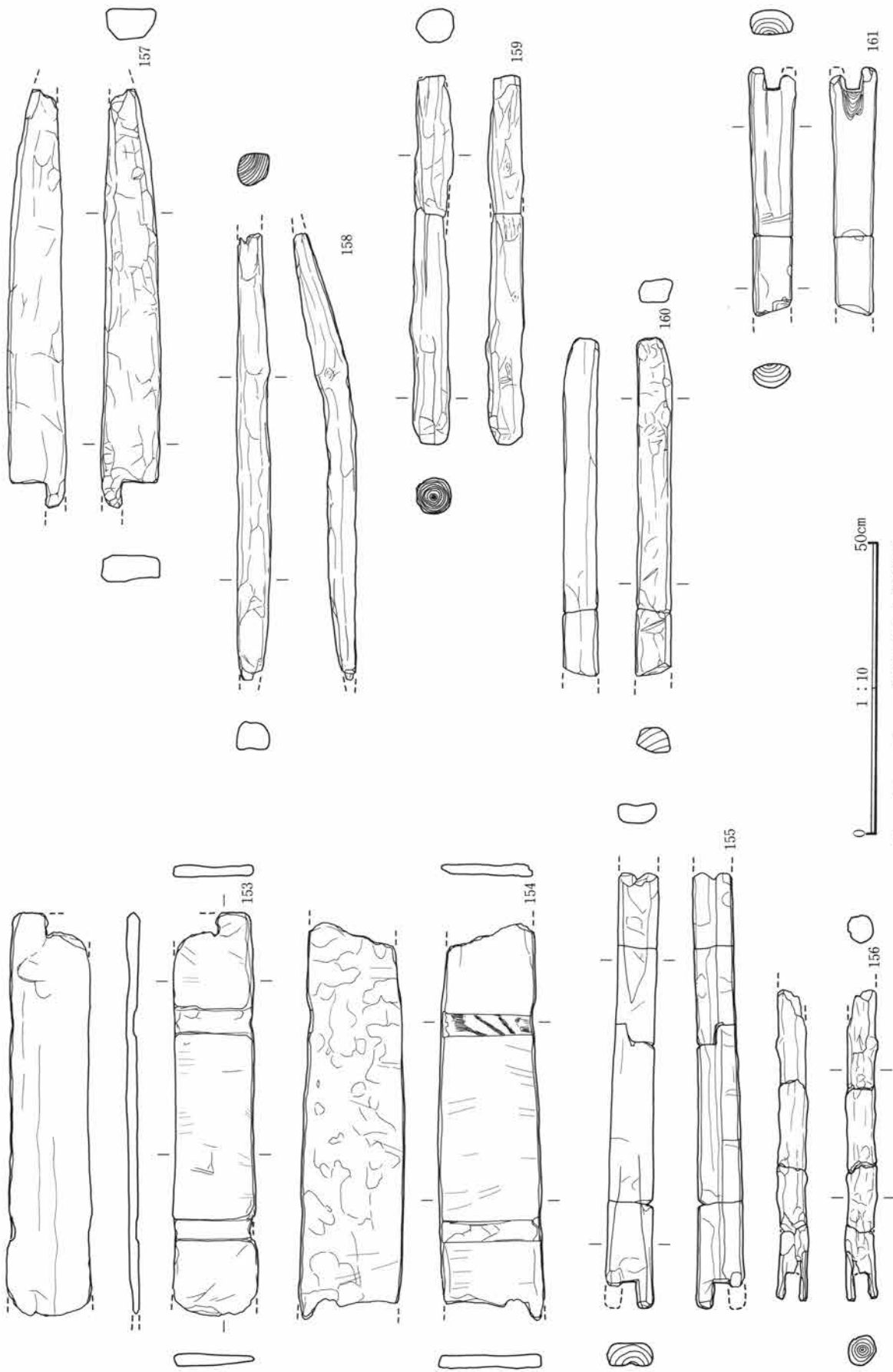
第175図 AY-7号井戸出土遺物



第176図 AY-7号井戸出土遺物(13)



第177図 AY-7号井戸出土遺物(14)



第178図 AY-7号井戸出土遺物(5)



AY-8号井戸 (第179・180図 PL-31・40)

位置 C区 t-14・15グリッド

規模 (長軸×短軸) 上面3.11m×2.19m

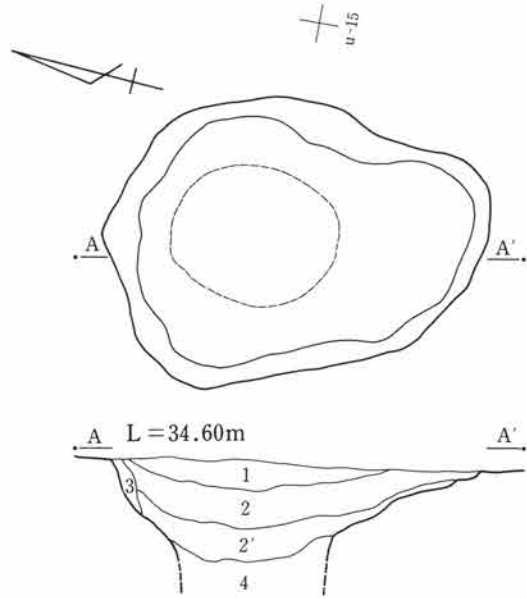
(一次底面) 下面1.35m×1.14m

深さ [0.85m]

内部施設 不明

遺物の出土状態 陶磁器、古銭等出土遺物は多様で、1・2層からの出土であった。11の呪符の墨書のあるかわらけや、16~18の灯芯のための有孔かわらけ等、特殊遺物が目立つ。

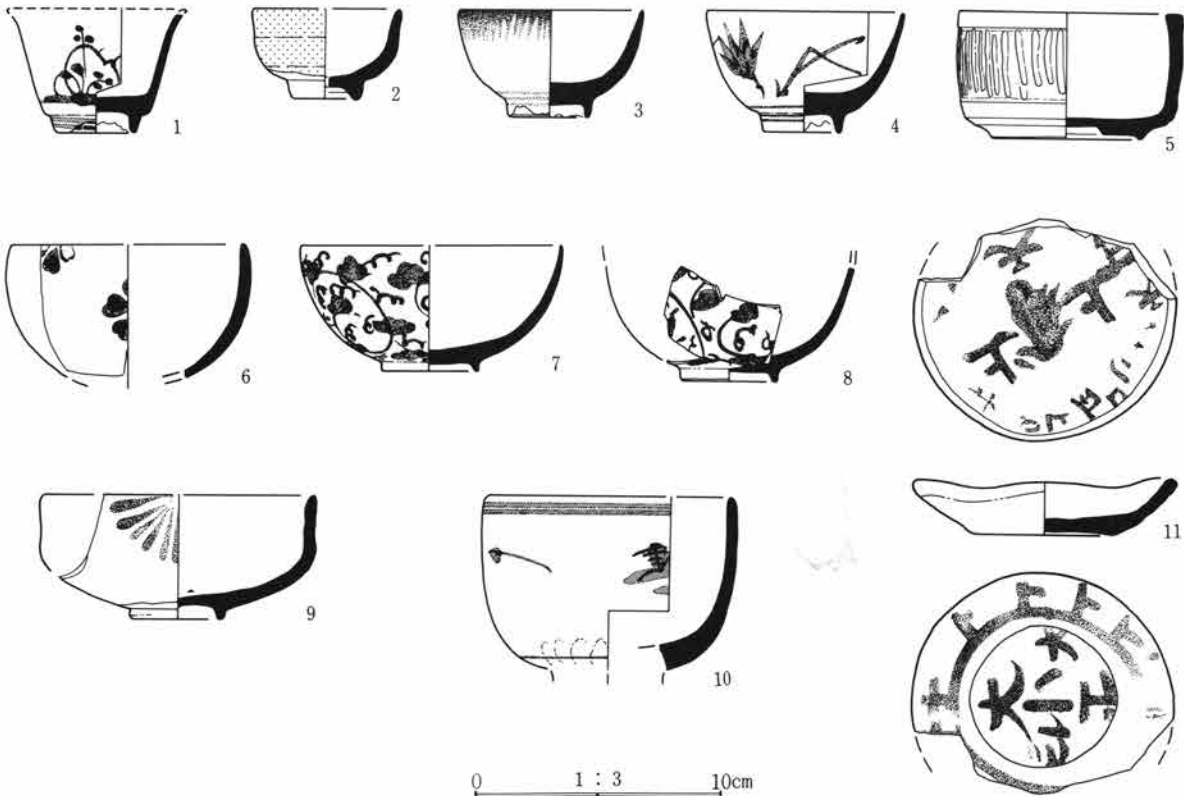
備考 調査中の崩落のため、中層以下は記録できなかった。



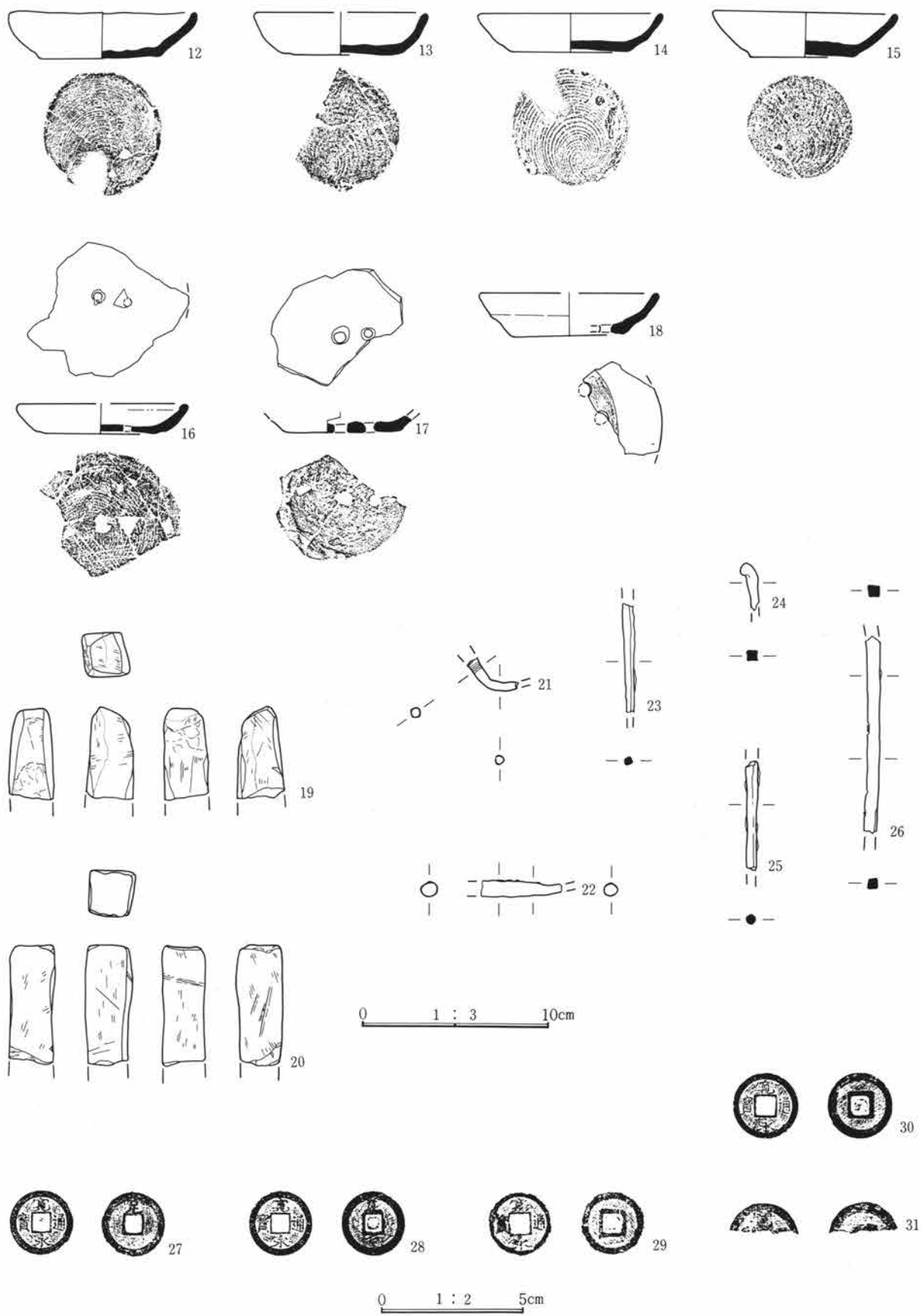
AY-8号井戸土層説明

- 1 におい黄褐色土層 しまりのある砂質土層で炭化物を含む。
- 2 褐色土層 1に近い。焼土ブロックの混入やや多い。2'は黄褐色シルト質土の混入多くしまり欠く。
- 3 におい黄褐色土層 シルト質土と暗褐色土の混土層。
- 4 黄褐色シルト質土層 地山と近似する。暗褐色土ブロック混入。

0 1:60 2m



第179図 AY-8号井戸および出土遺物(1)



第180図 AY-8号井戸および出土遺物(2)

AY-9号井戸 (第181~191図 PL-31・40~42)

位置 C区u・v-17・18グリッド

重複 17号住居

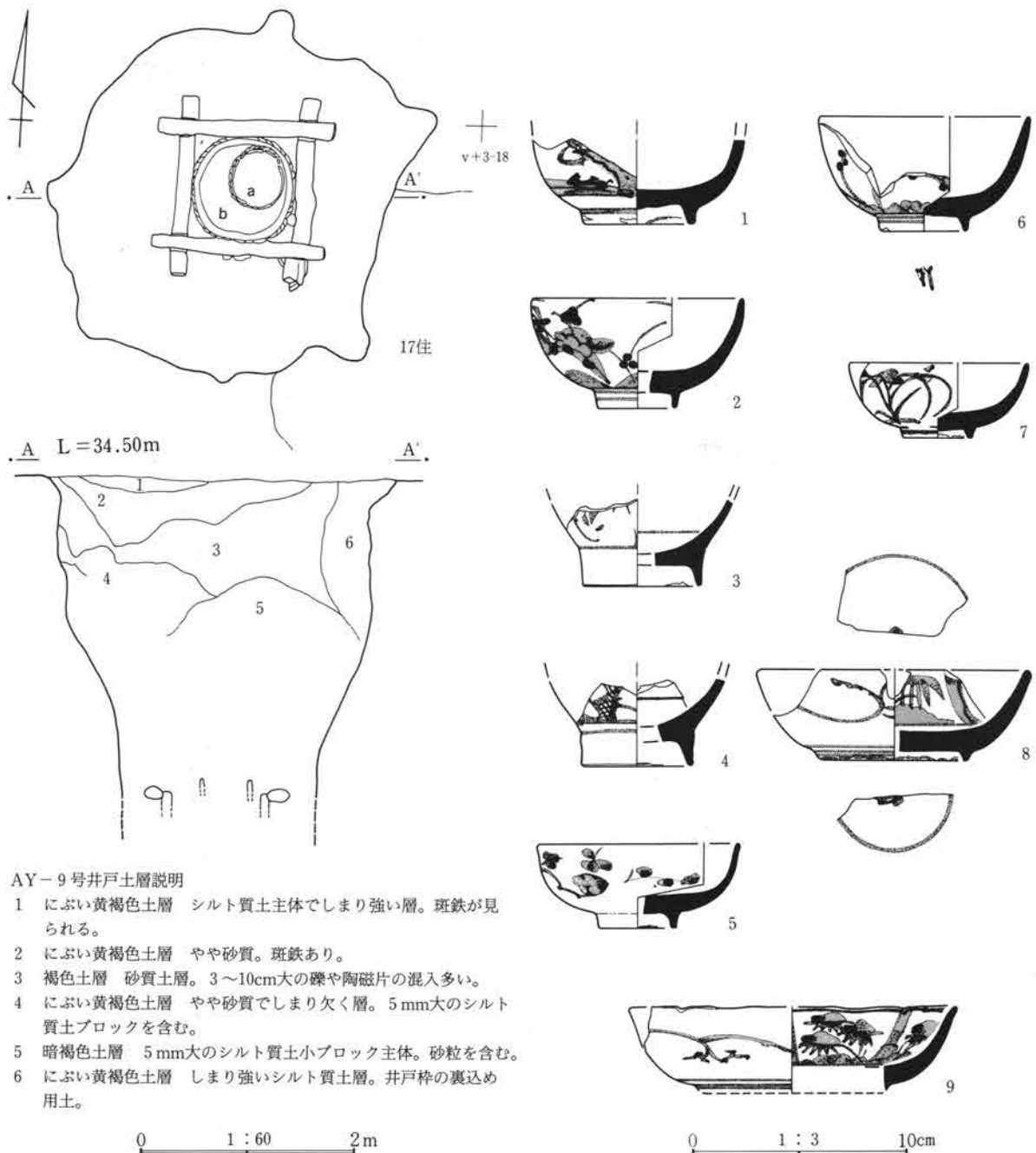
規模 (長軸×短軸) 上面3.12m×2.94m

深さ 3.90m

内部施設 下層に丸太材を加工した井桁と、底面を抜いた桶を組み合わせた井戸枠を作っている。

また、幅太の竹材がつきささるようにして見つかり、井戸埋め戻し時の祭事を行ったものと思われる。

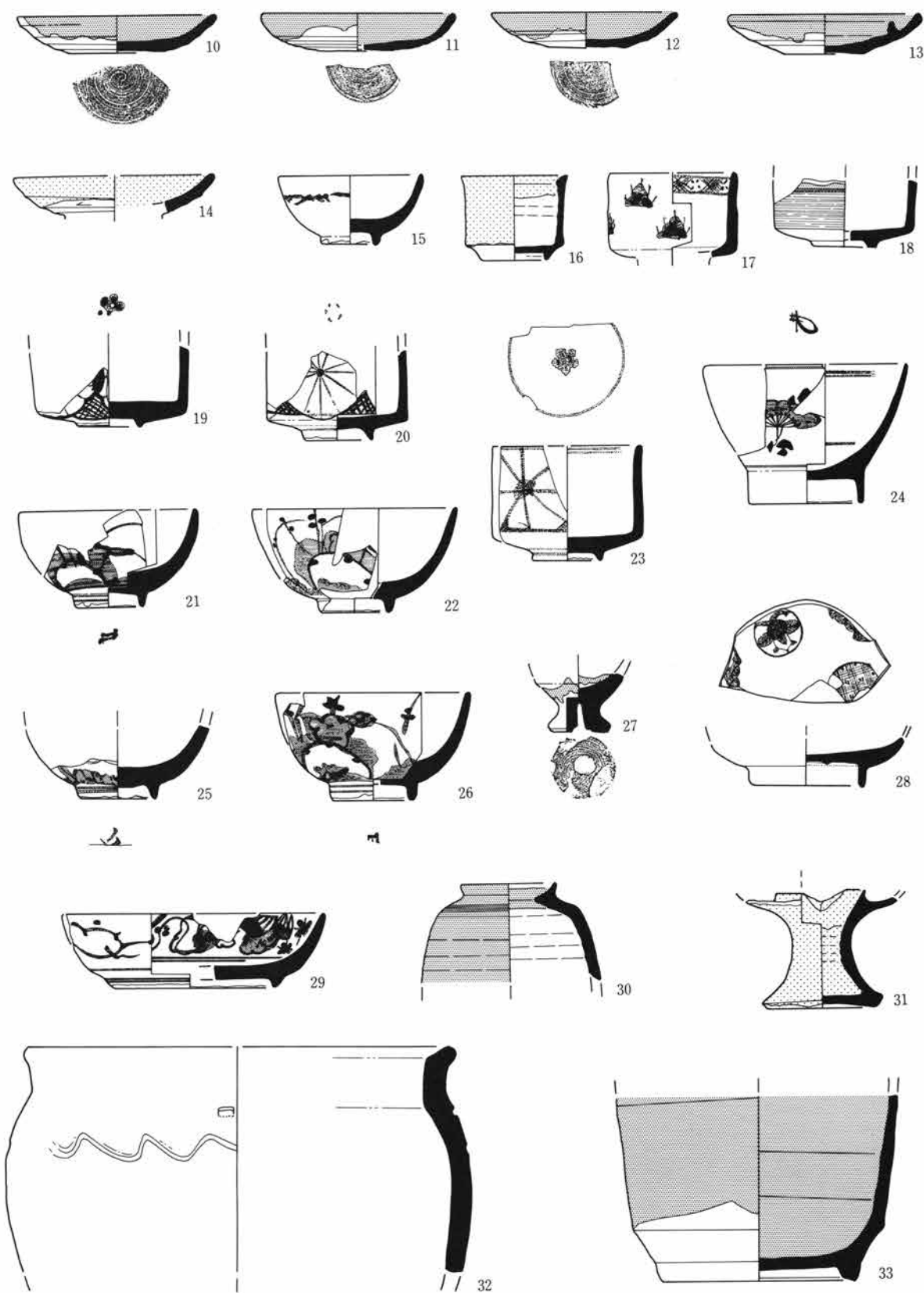
備考 井戸枠を掘り出すため下半は外側を崩しながら調査したため、井戸底面付近を明瞭に記録することができなかった。



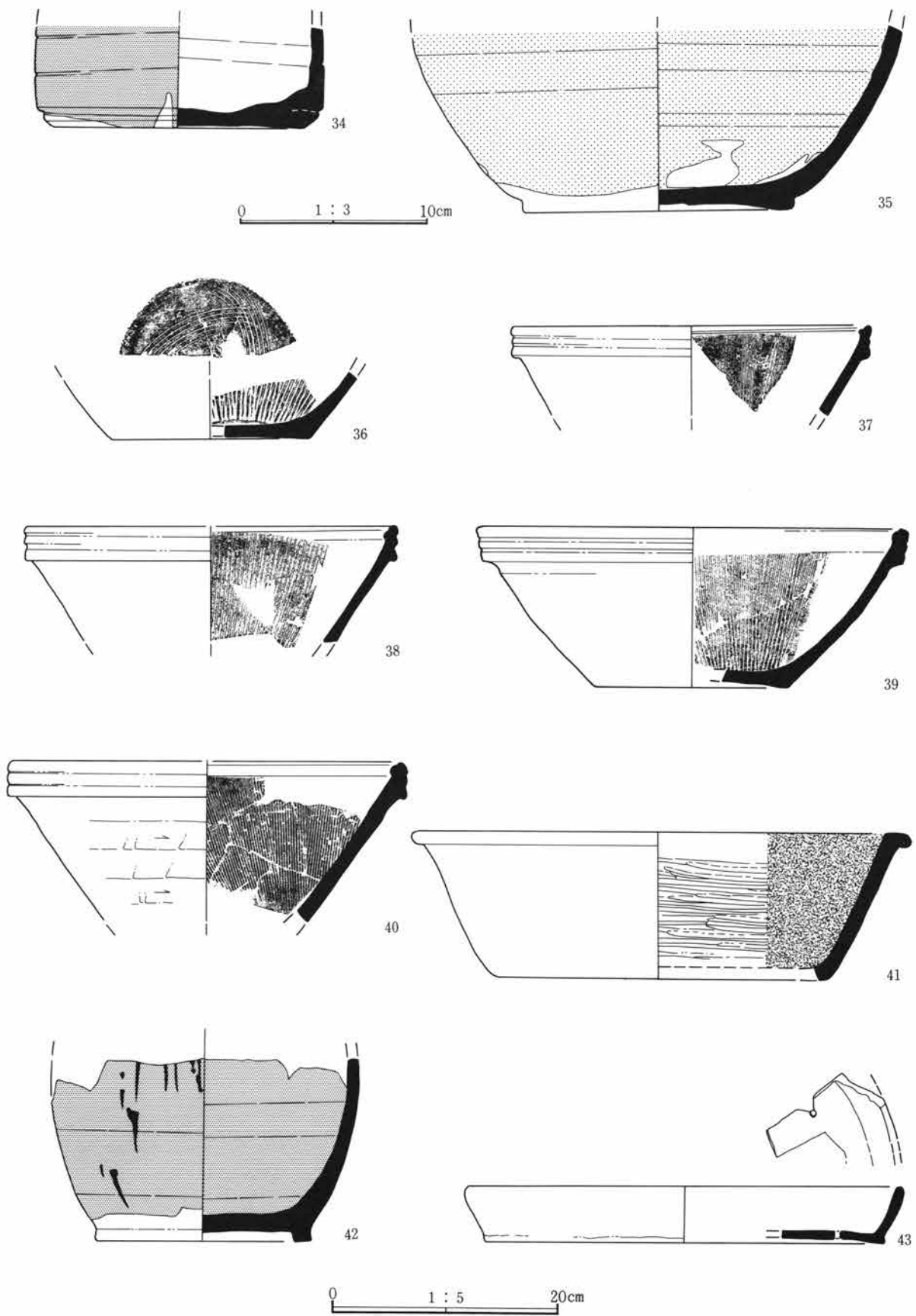
AY-9号井戸土層説明

- 1 にぶい黄褐色土層 シルト質土主体でしまり強い層。斑鉄が見られる。
- 2 にぶい黄褐色土層 やや砂質。斑鉄あり。
- 3 褐色土層 砂質土層。3~10cm大の礫や陶磁片の混入多い。
- 4 にぶい黄褐色土層 やや砂質でしまり欠く層。5mm大のシルト質土ブロックを含む。
- 5 暗褐色土層 5mm大のシルト質土小ブロック主体。砂粒を含む。
- 6 にぶい黄褐色土層 しまり強いシルト質土層。井戸枠の裏込め用土。

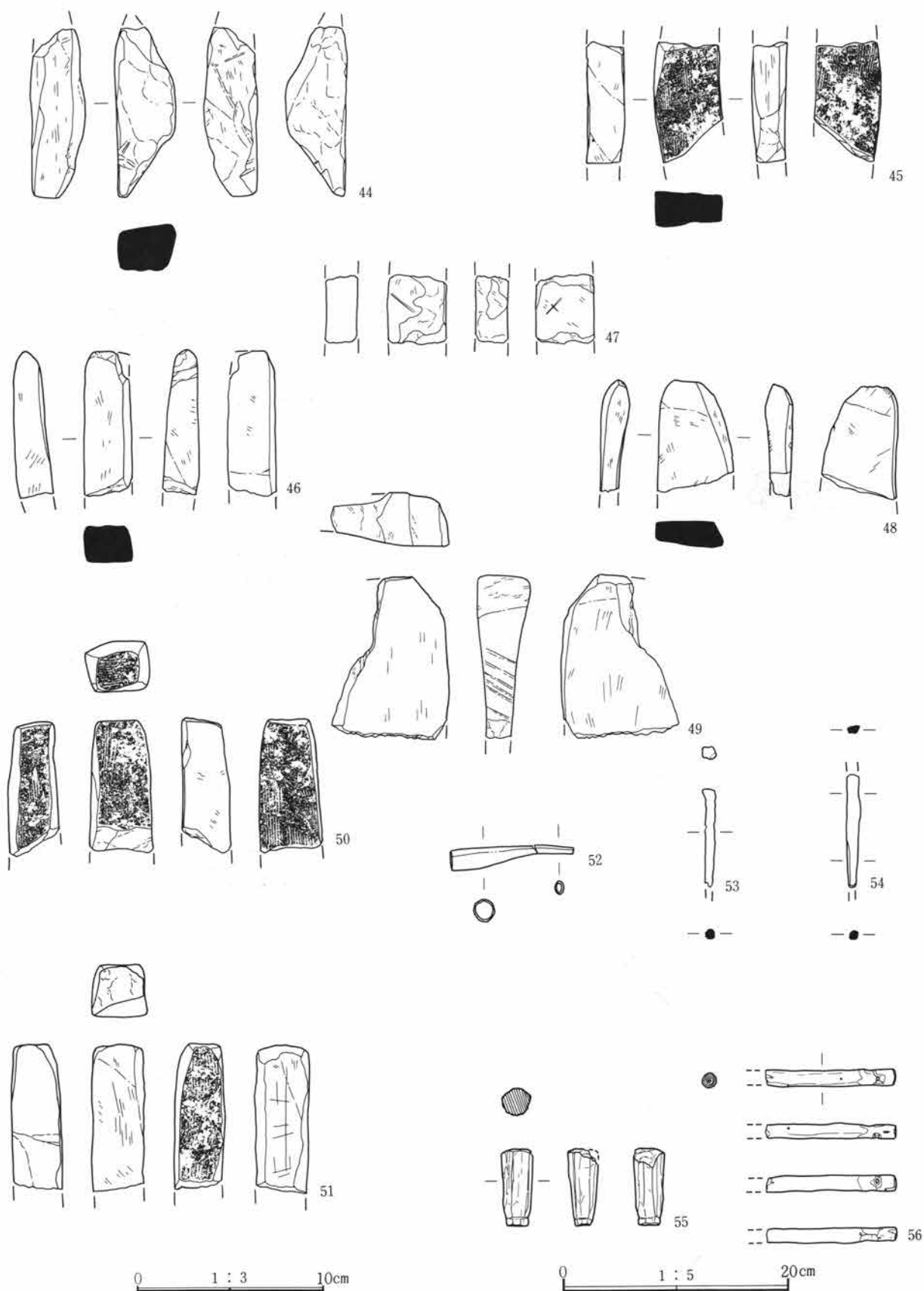
第181図 AY-9号井戸および出土遺物(1)



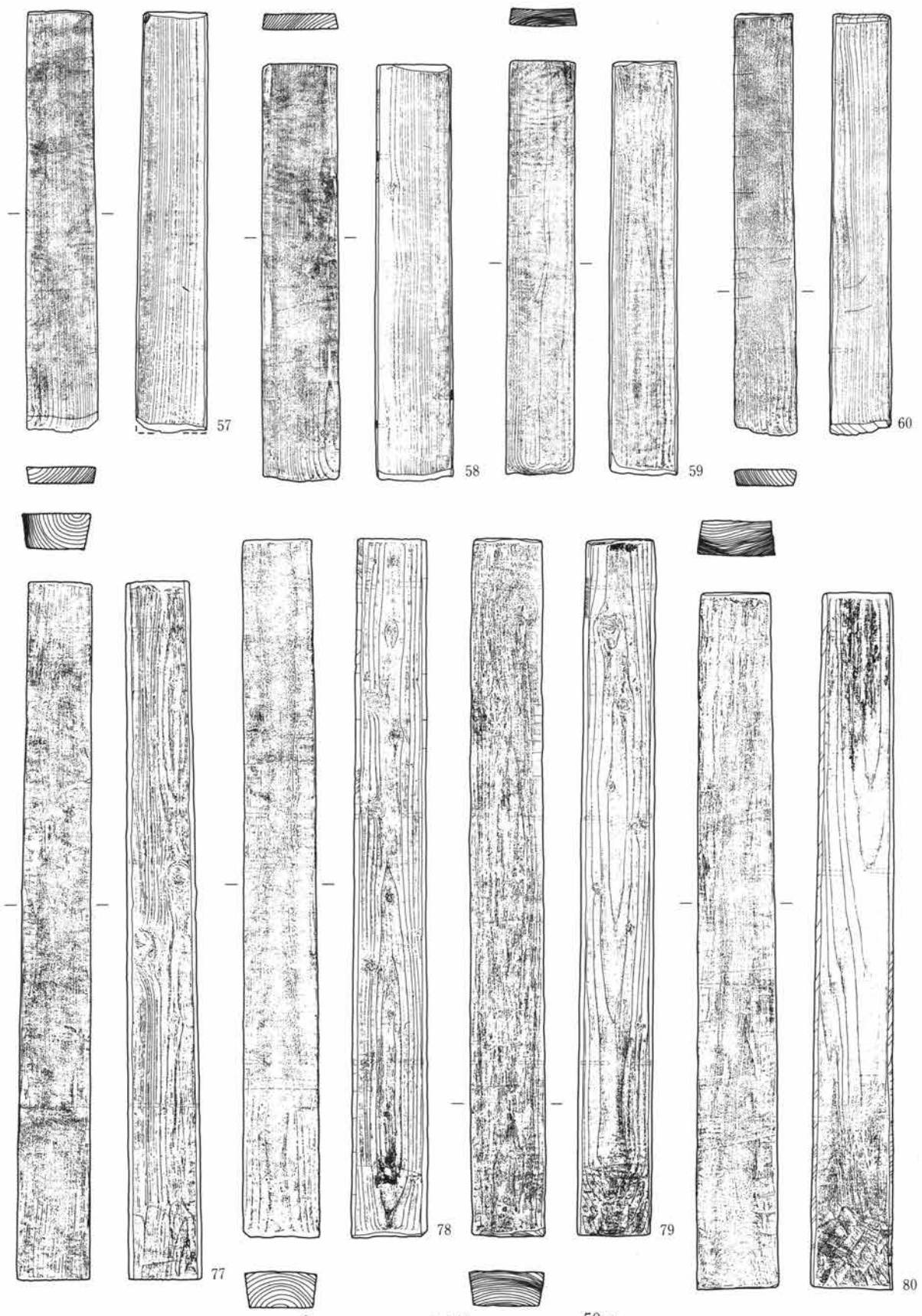
第182図 AY-9号井戸および出土遺物(2)



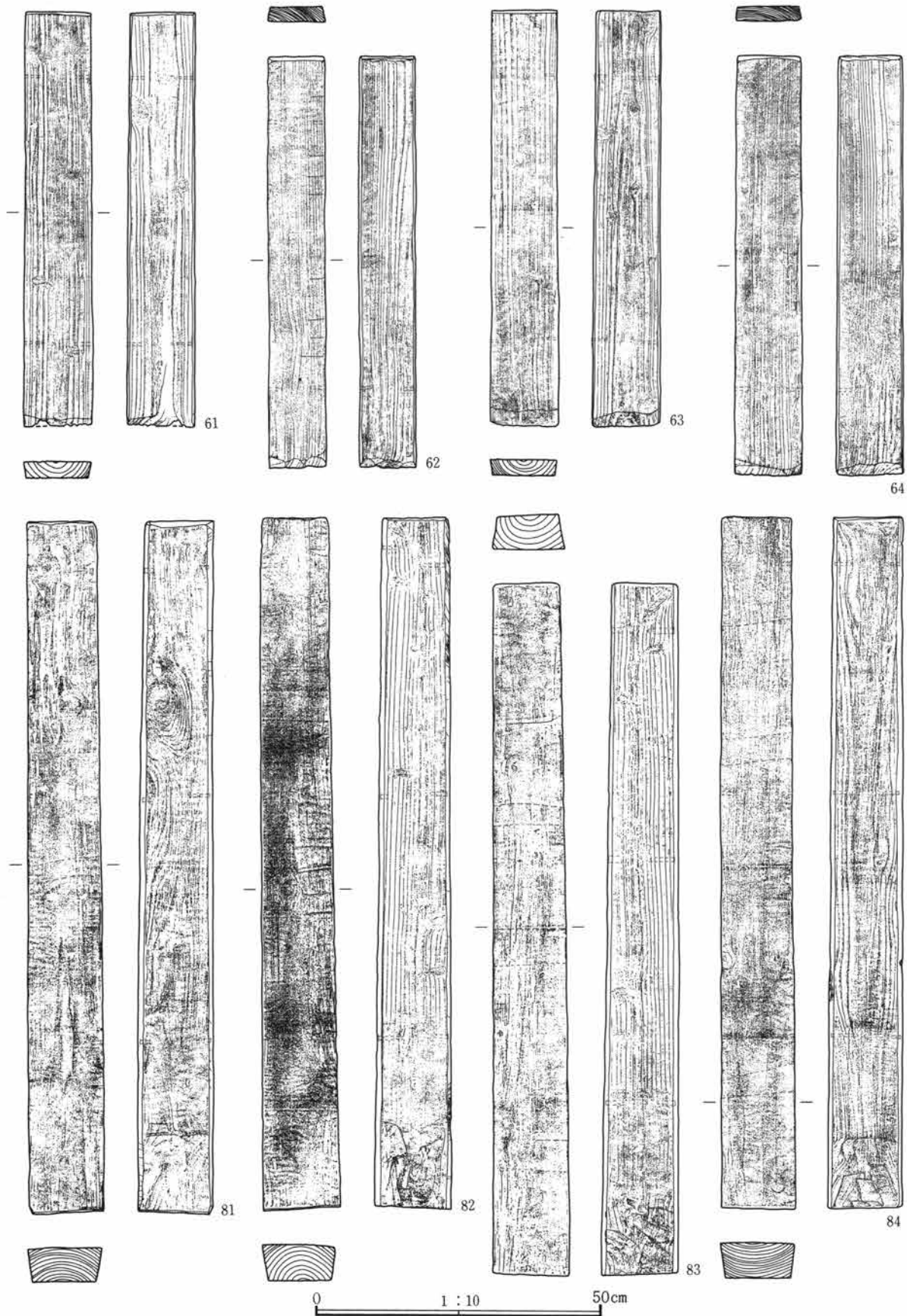
第183図 AY-9号井戸および出土遺物(3)



第184図 AY-9号井戸および出土遺物(4)

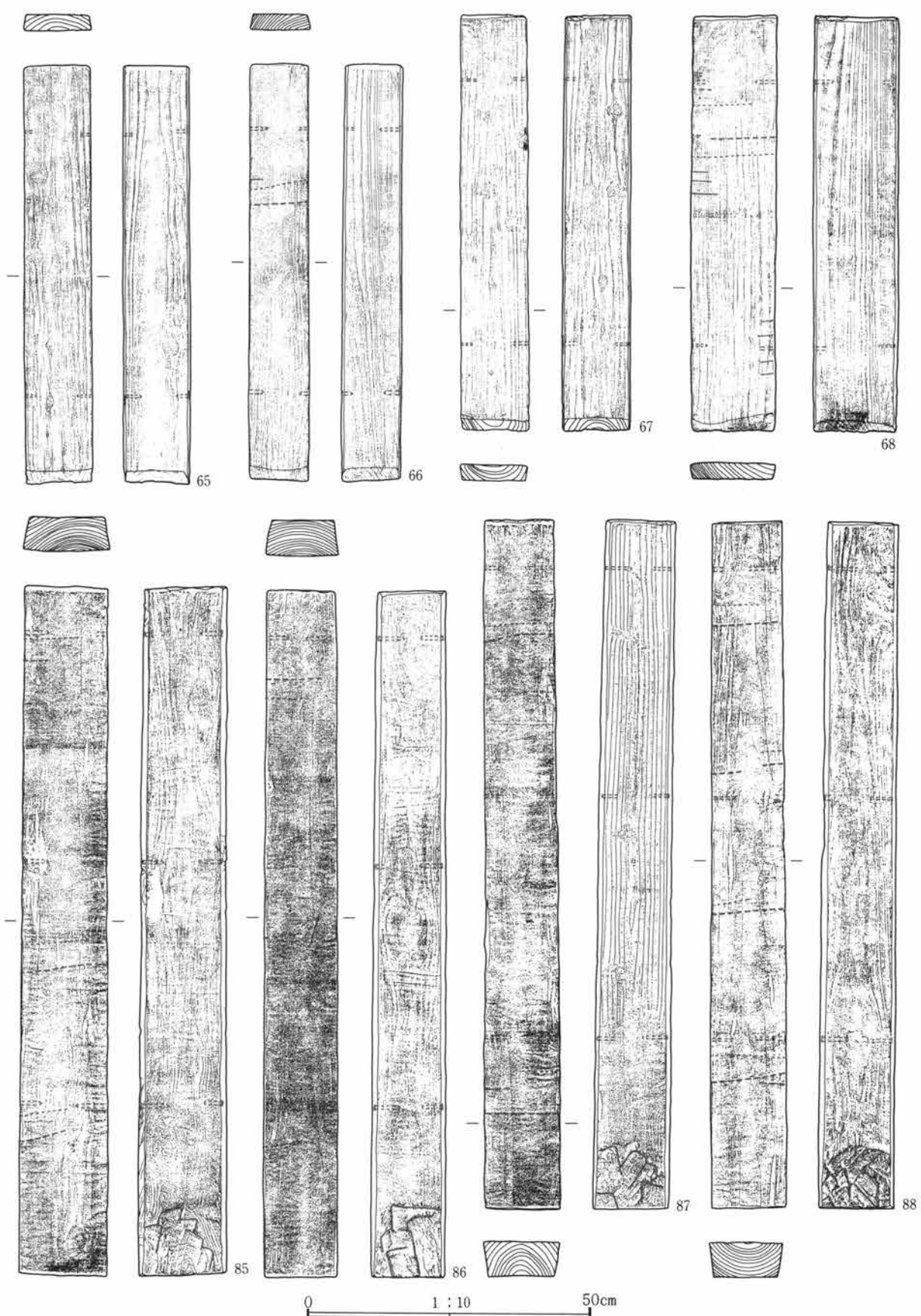


0 1 : 10 50cm  
 第185図 AY-9号井戸および出土遺物(5)

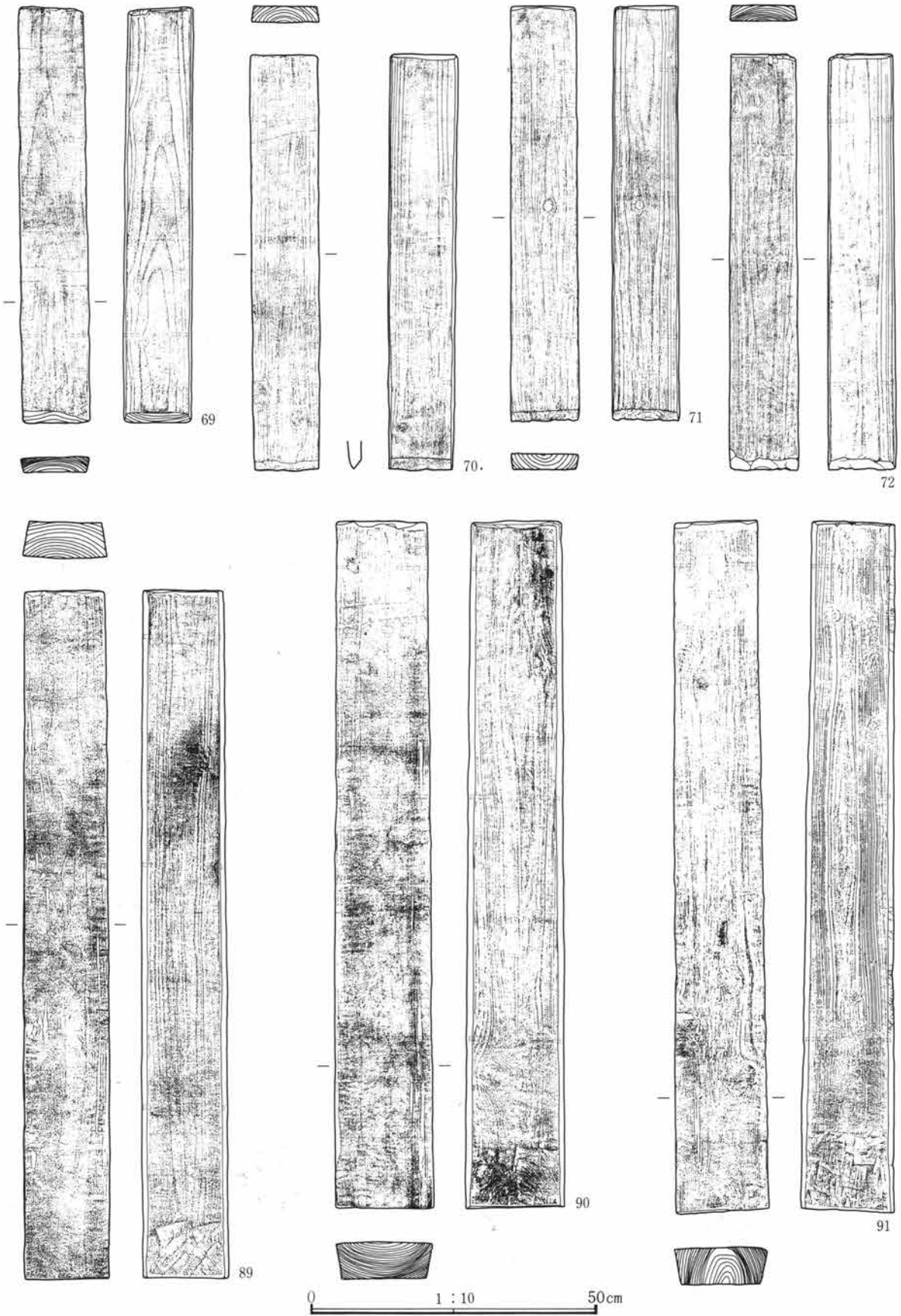


第186図 AY-9号井戸および出土遺物(6)

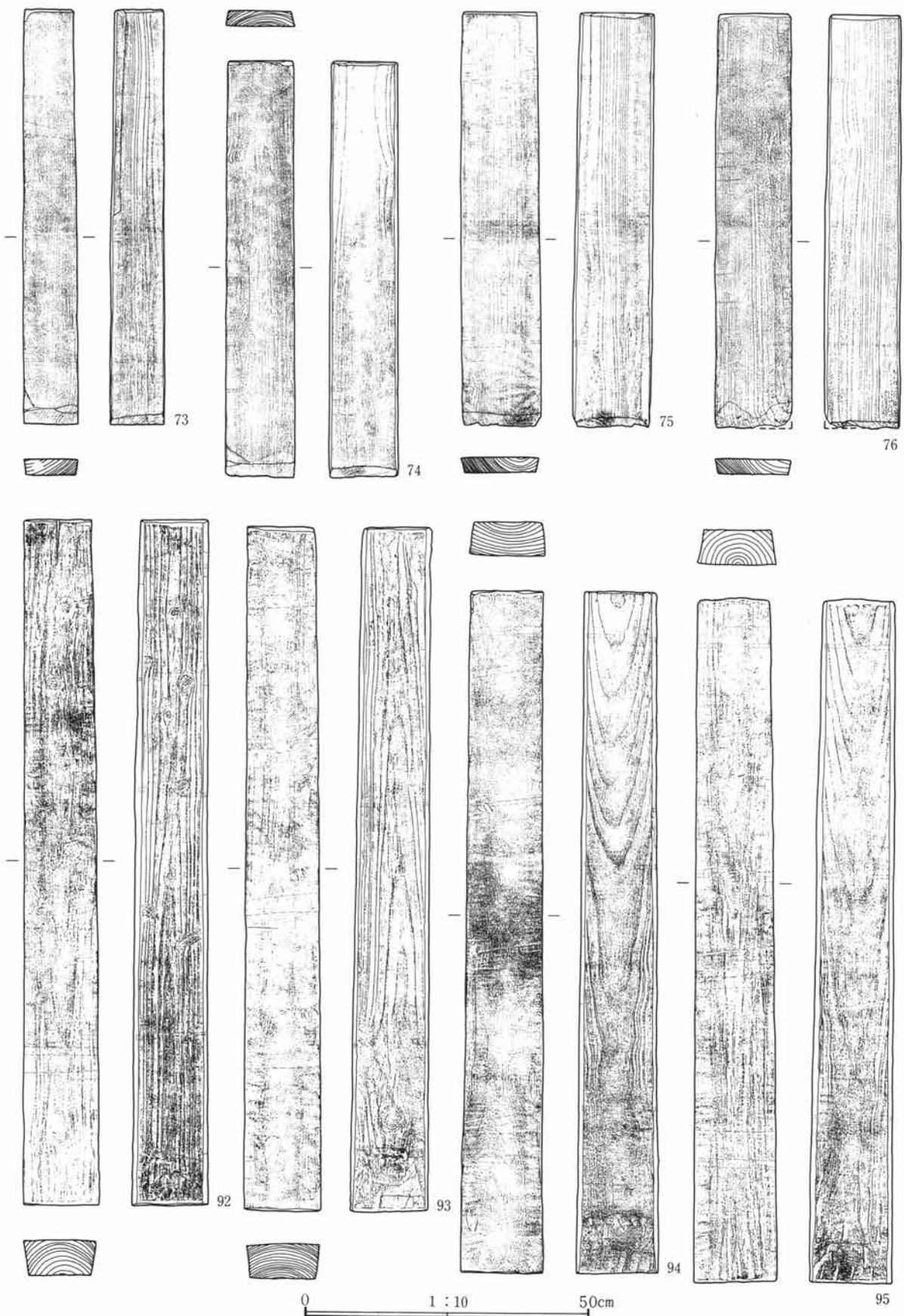




第187図 AY-9号井戸および出土遺物(7)



第188図 AY-9号井戸および出土遺物(8)



第189図 AY-9号井戸および出土遺物(9)



第190図 AY-9号井戸および出土遺物(10)

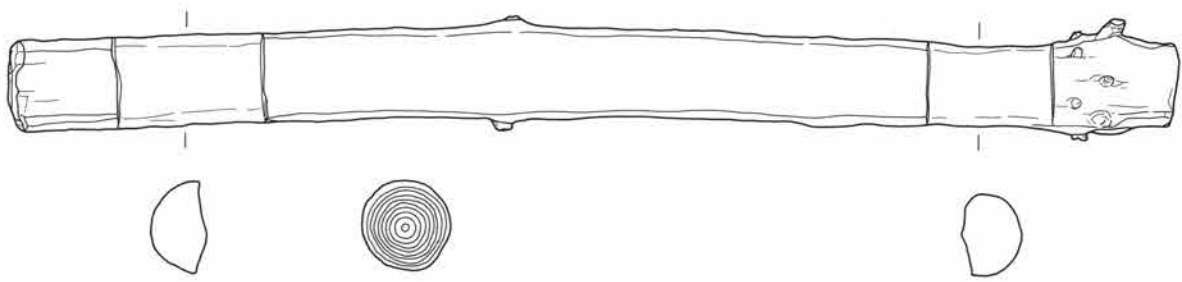
遺物の出土状態 きわめて多量の遺物が出土した。

陶磁器類、土器類は2・3層からの出土が多い。43点を図示した。摺鉢等の大型品の出土が目立ったが、完形に復元できるものはなかった。図示した以外にも別個体の体部破片は多い。

砥石は8点出土したが、いずれも研ぎ減ったものが欠けた状態であった。

桶材はa (57~76)とb (77~99)が各々一対となるものである。底板の痕跡が見られないこと、内面下端に面取りを加えていることより、転用桶ではなく、井戸枠として作られたものである。井桁は4本出土

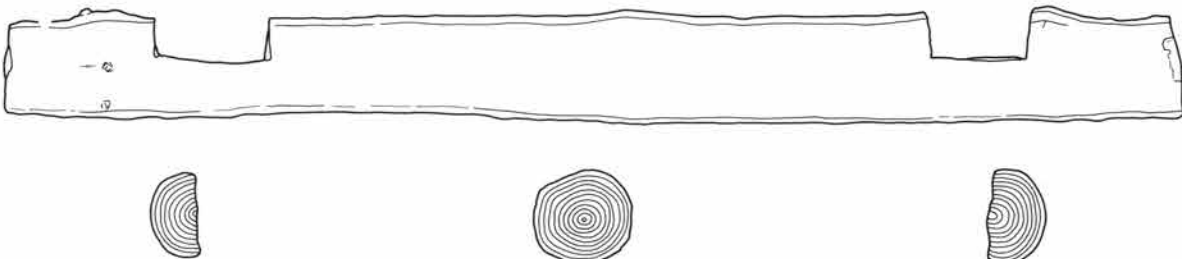
したが、整理期間前に1本を破損してしまい、写真図版を参照して頂きたい。桶bに伴うものである。桶aは掘り直し時の施設かもしれない。桶材、井桁とも自然乾燥を行ったもので、やや縮んでいる。



100



101



102

0 1 : 10 50cm

第191図 AY-9号井戸および出土遺物(11)

AY-10号井戸 (第192図 PL-31・42)

位置 D区b-20 c-19・20グリッド

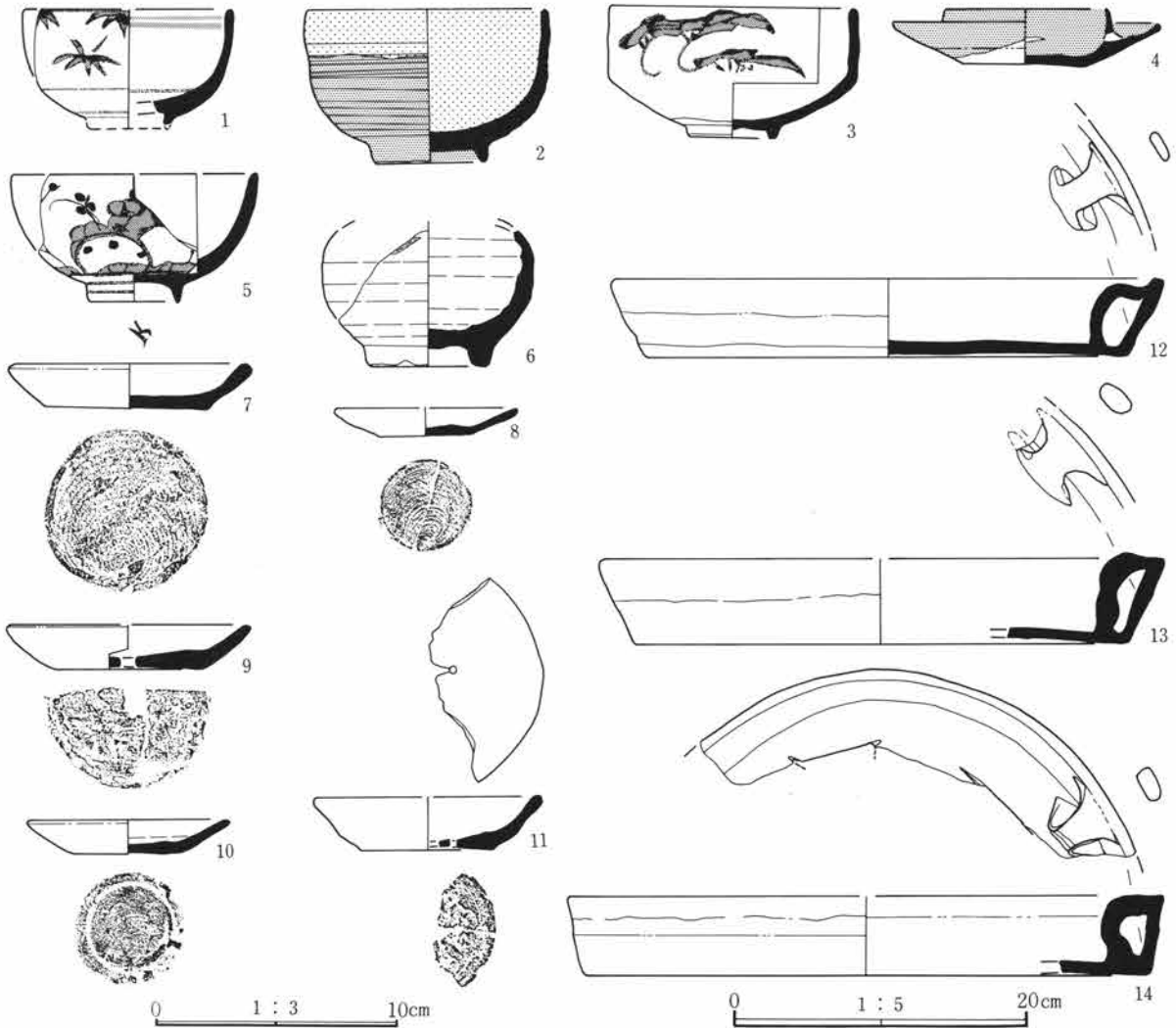
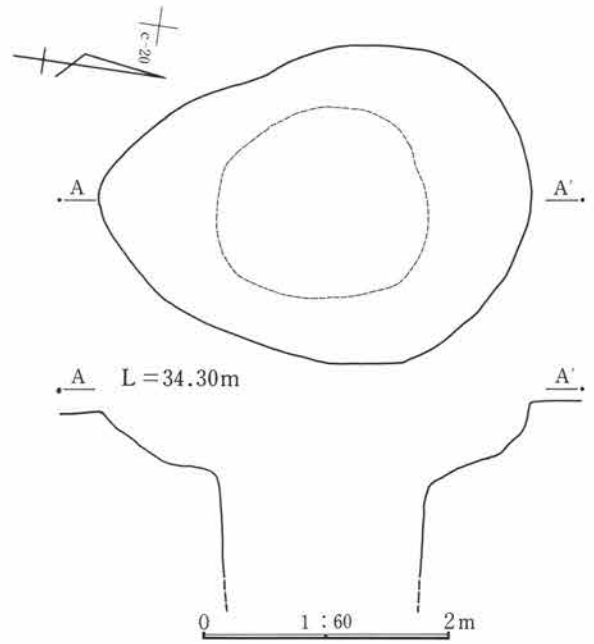
規模(長軸×短軸) 上面3.45m×2.52m

(一次底面) 下面1.68m×1.50m

深さ [1.38m]

遺物の出土状態 上層から出土した陶磁器、かわらけ、内耳土器の計14点を図示した。底面に透かし孔のある14が注目される。

備考 調査中の崩落のため、全容は明らかにできなかった。



第192図 AY-10号井戸および出土遺物

AY-11号井戸

(第193~203図 PL-32・42・43)

位置 D区d-20・21グリッド

重複 5号住居

規模 (長軸×短軸) 上面2.34m×1.80m

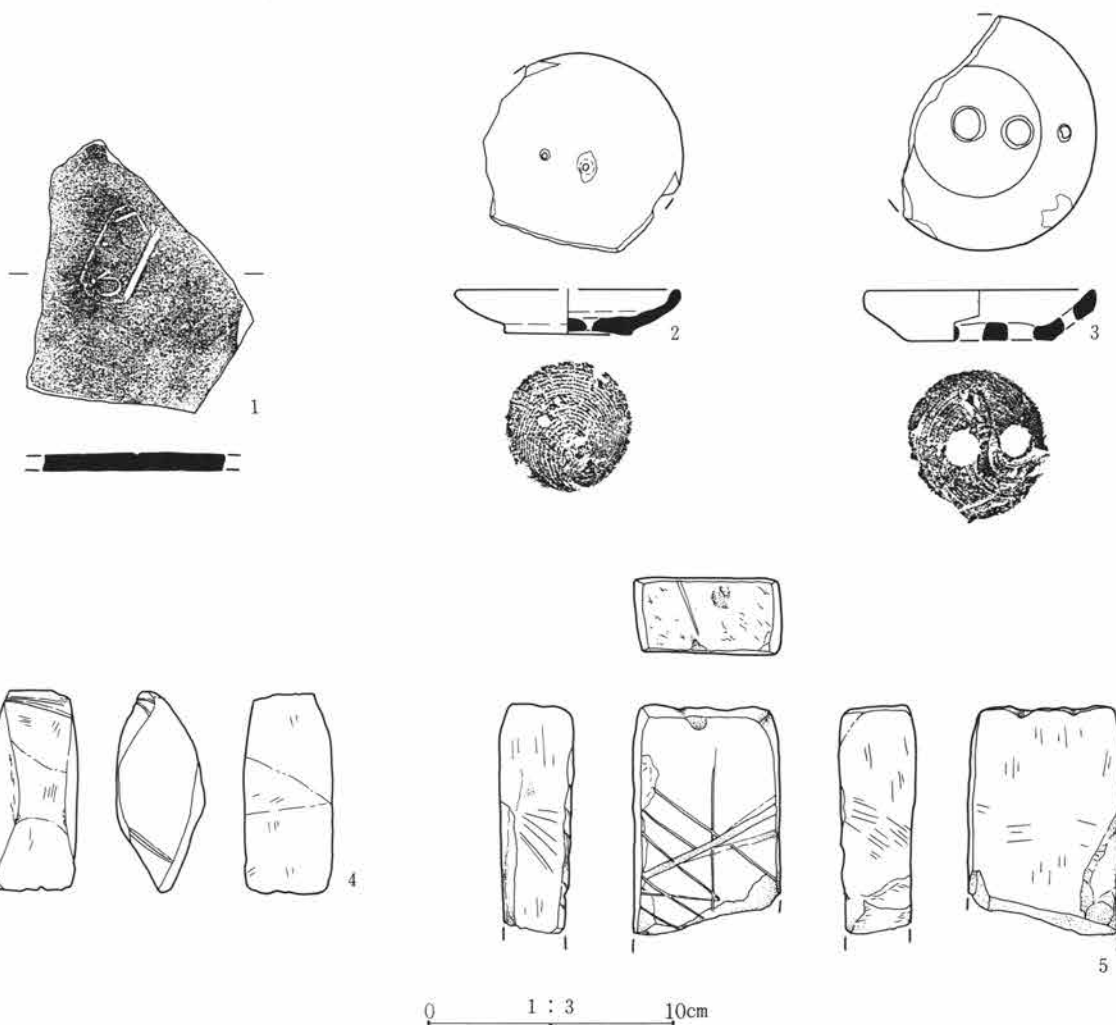
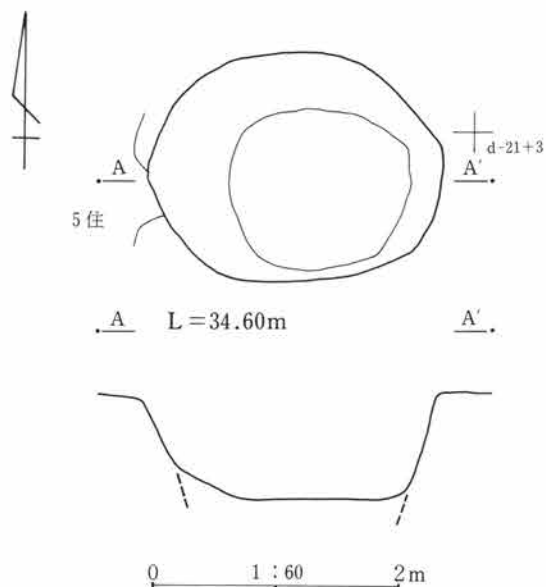
下面1.44m×1.26m

深さ [0.87m]

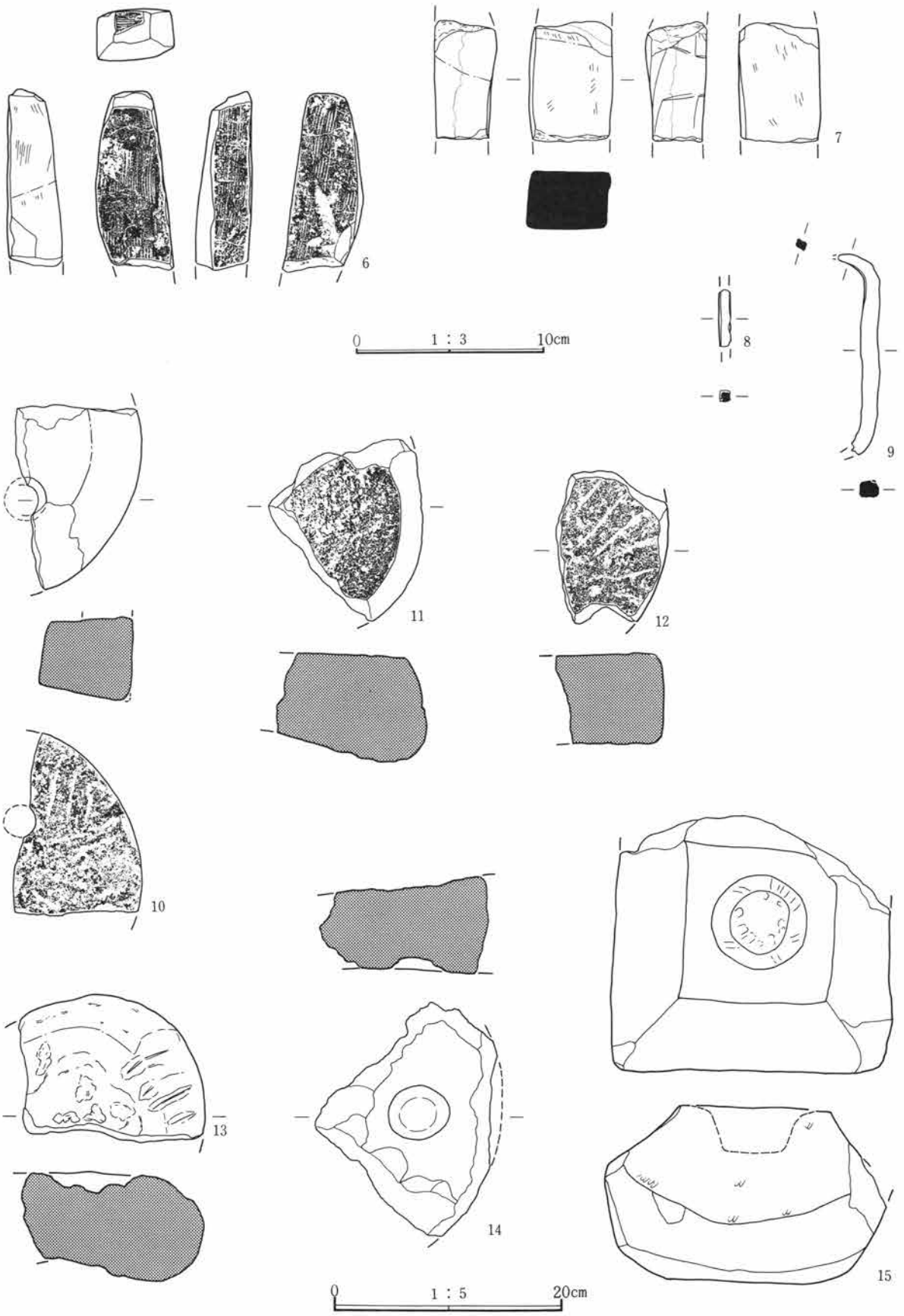
内部施設 高さ1.8m以上ある筒形の井戸枠を埋設している。

遺物の出土状態 下層から出土した4点の漆碗が特筆される。石製品の出土も目立った。井戸枠は上面が著しく腐蝕していた。

備考 井戸材を掘り出すため、外側を図示できなかった。深さは3m以上になるものである。

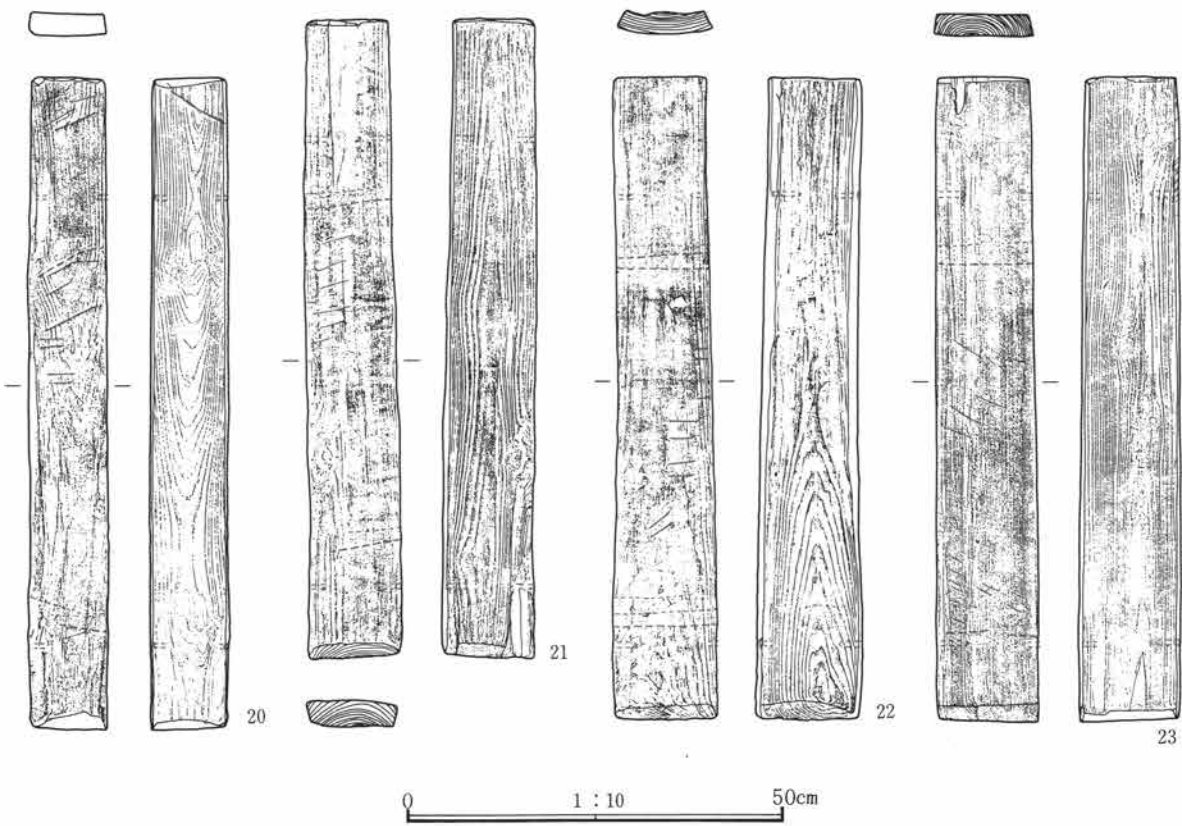
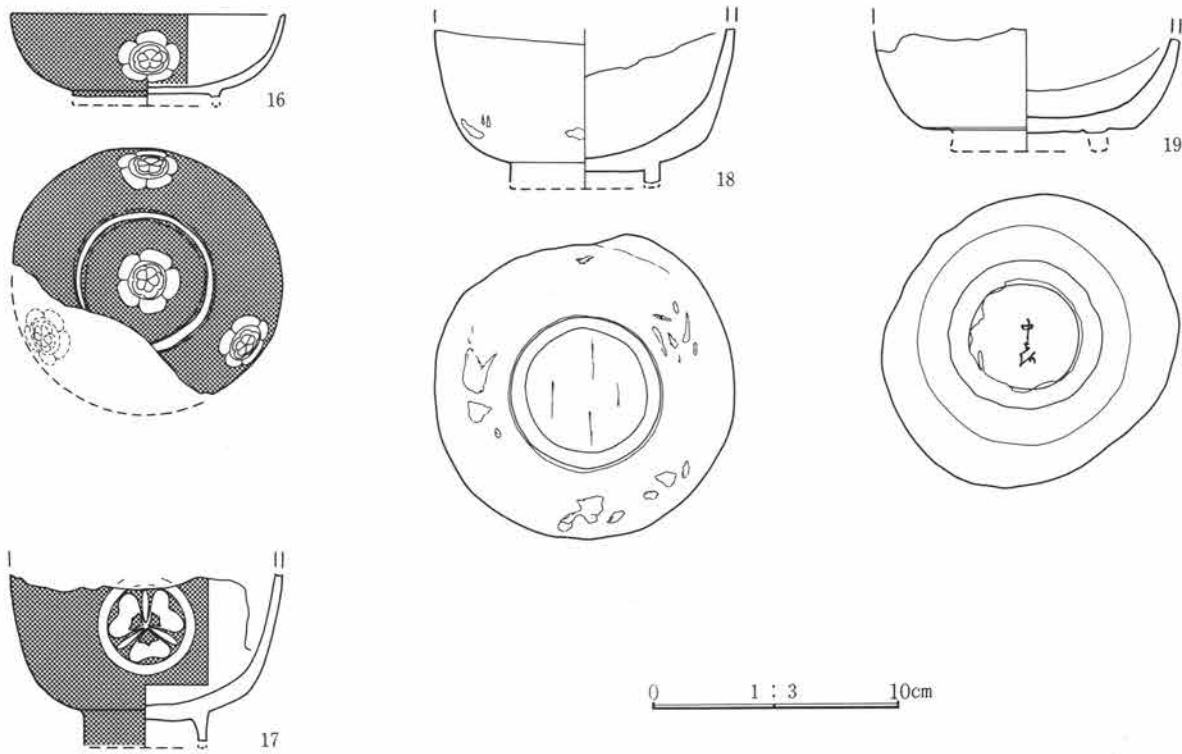


第193図 AY-11号井戸および出土遺物(1)

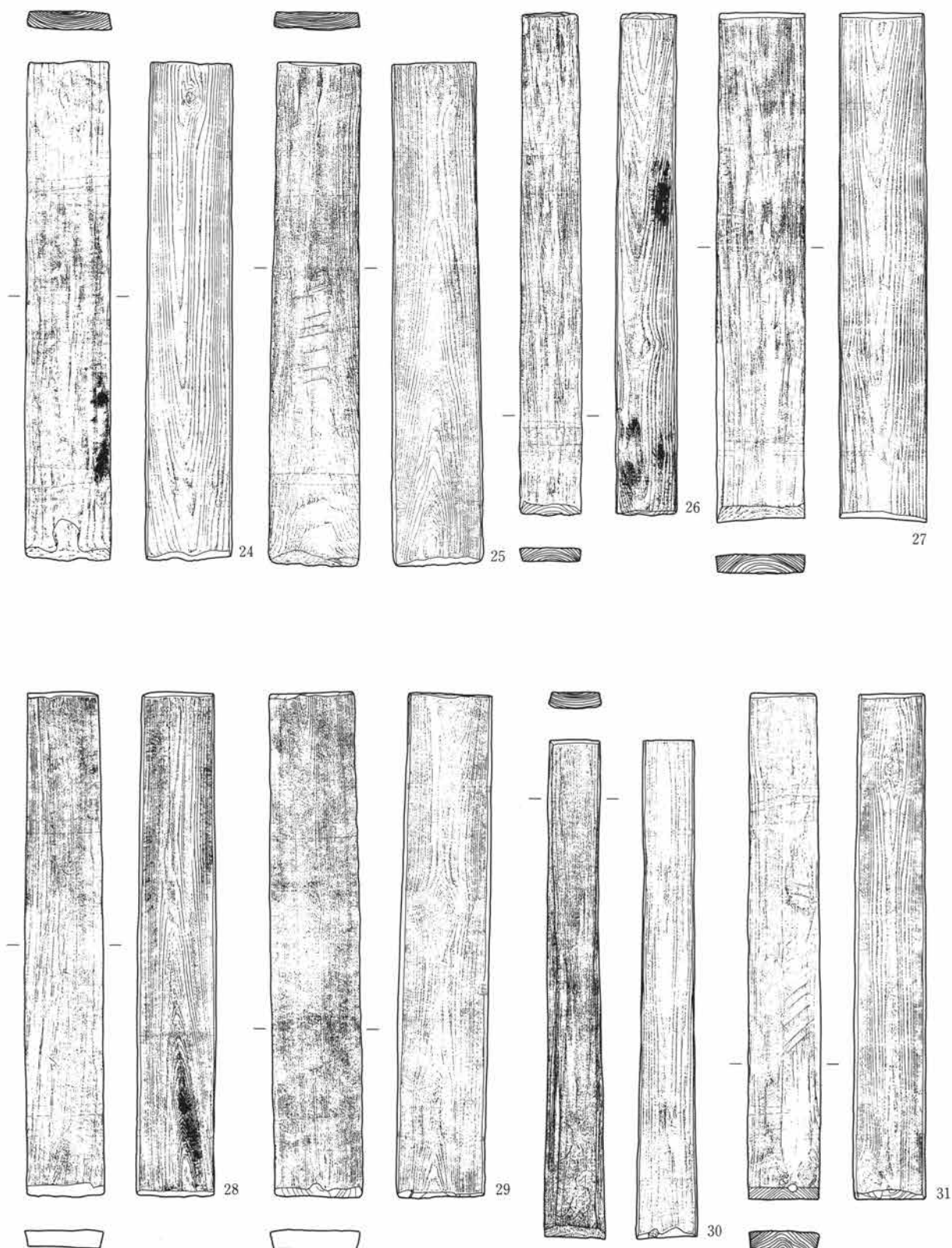


第194図 AY-11号井戸および出土遺物(2)



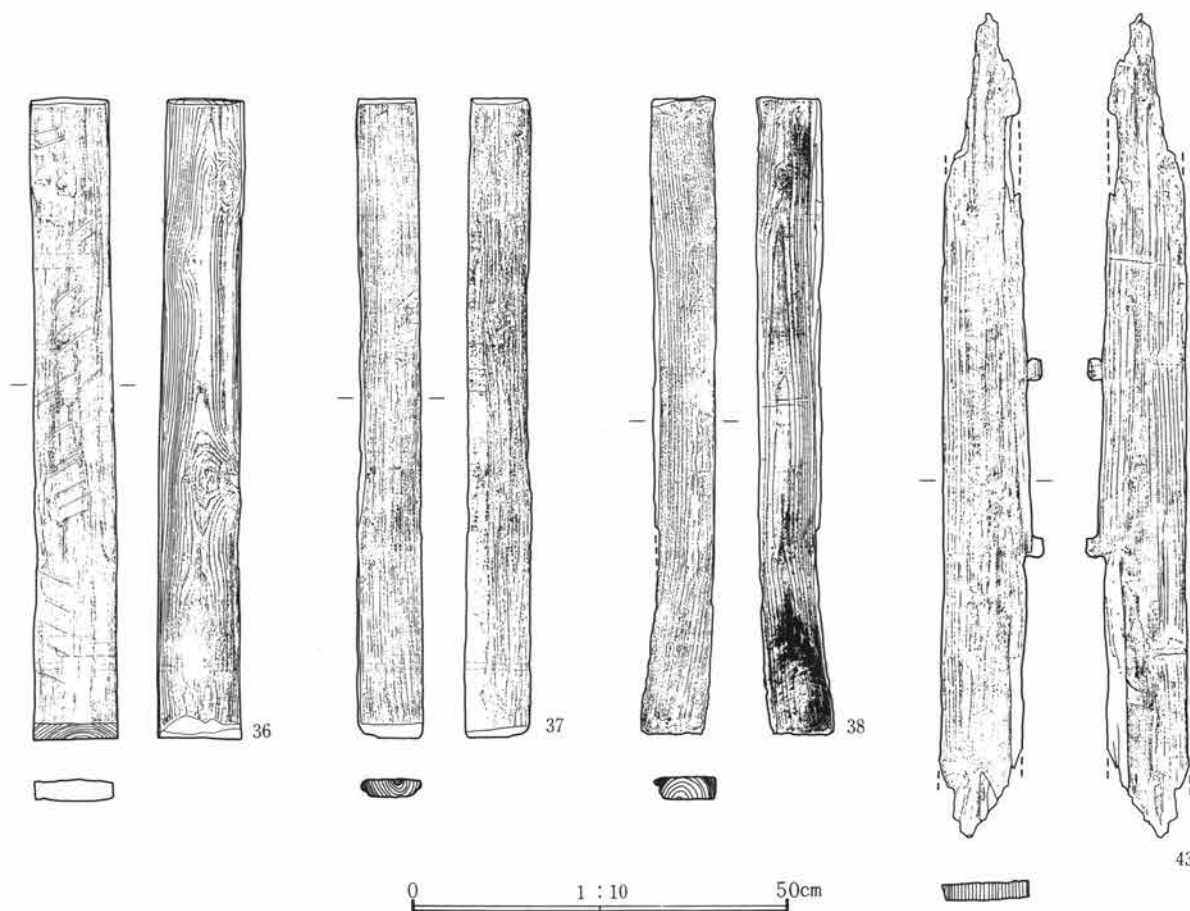
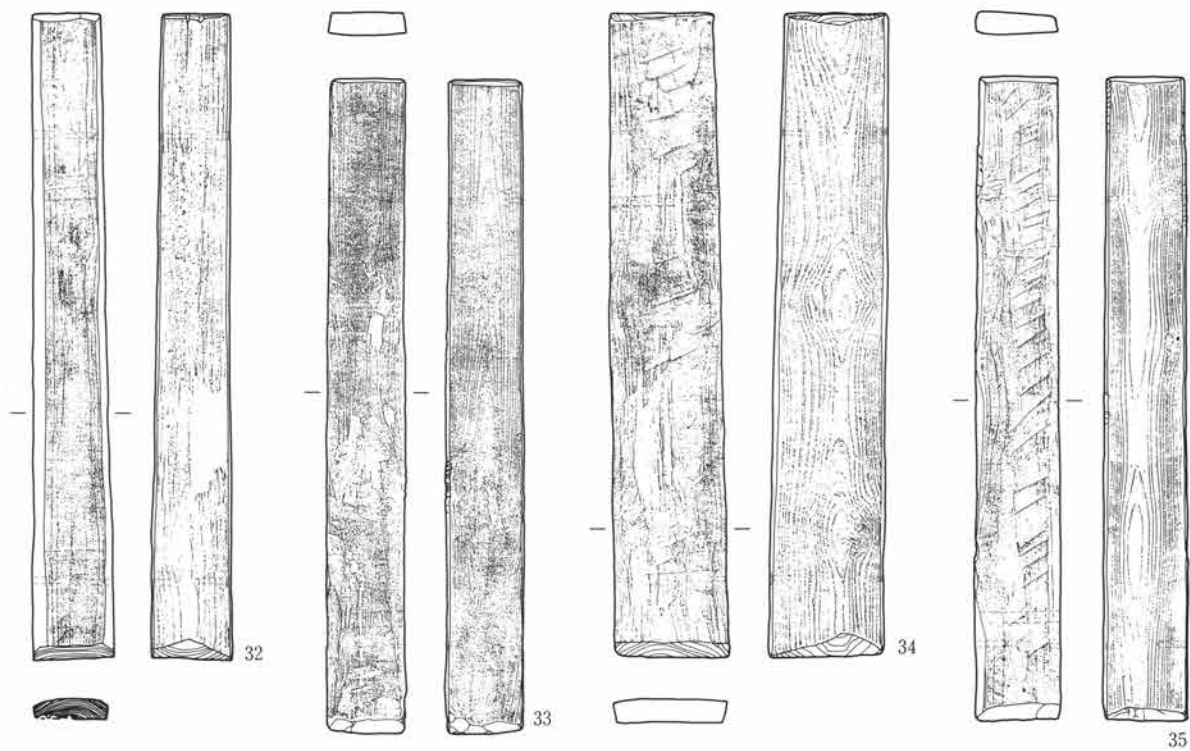


第195図 AY-11号井戸および出土遺物(3)



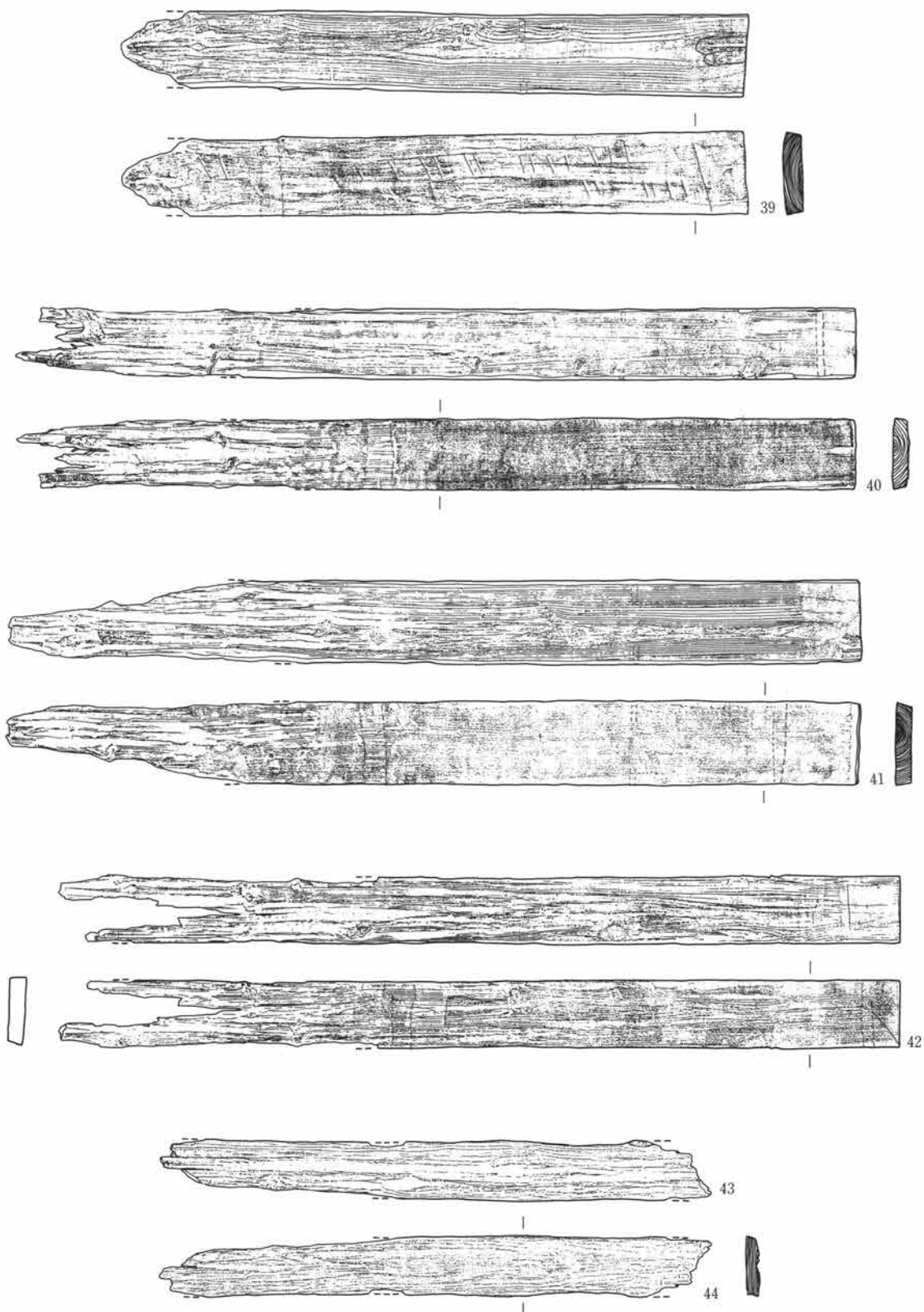
0 1 : 10 50cm

第196図 AY-11号井戸および出土遺物(4)



0 1 : 10 50cm

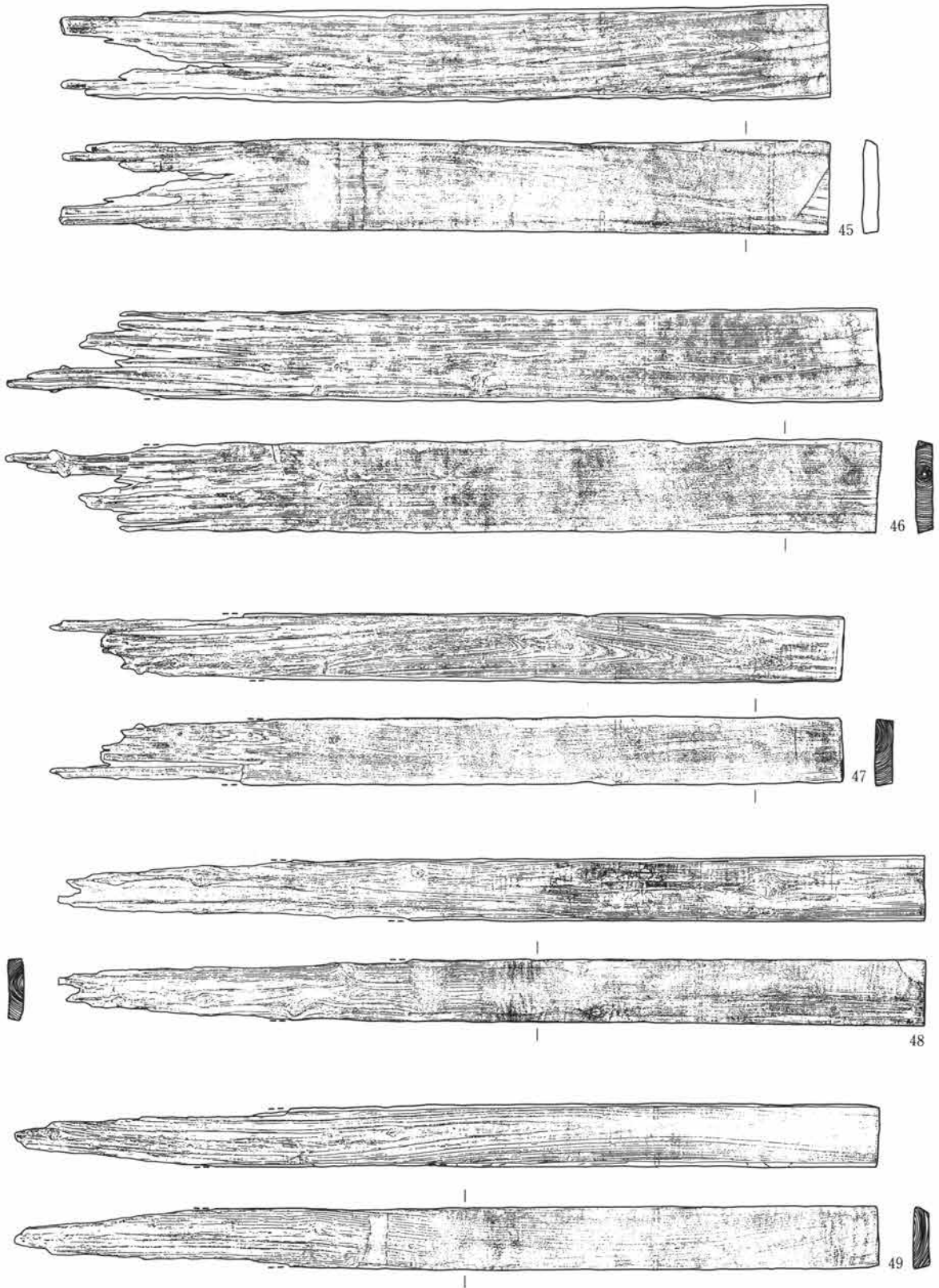
第197図 AY-11号井戸および出土遺物(5)



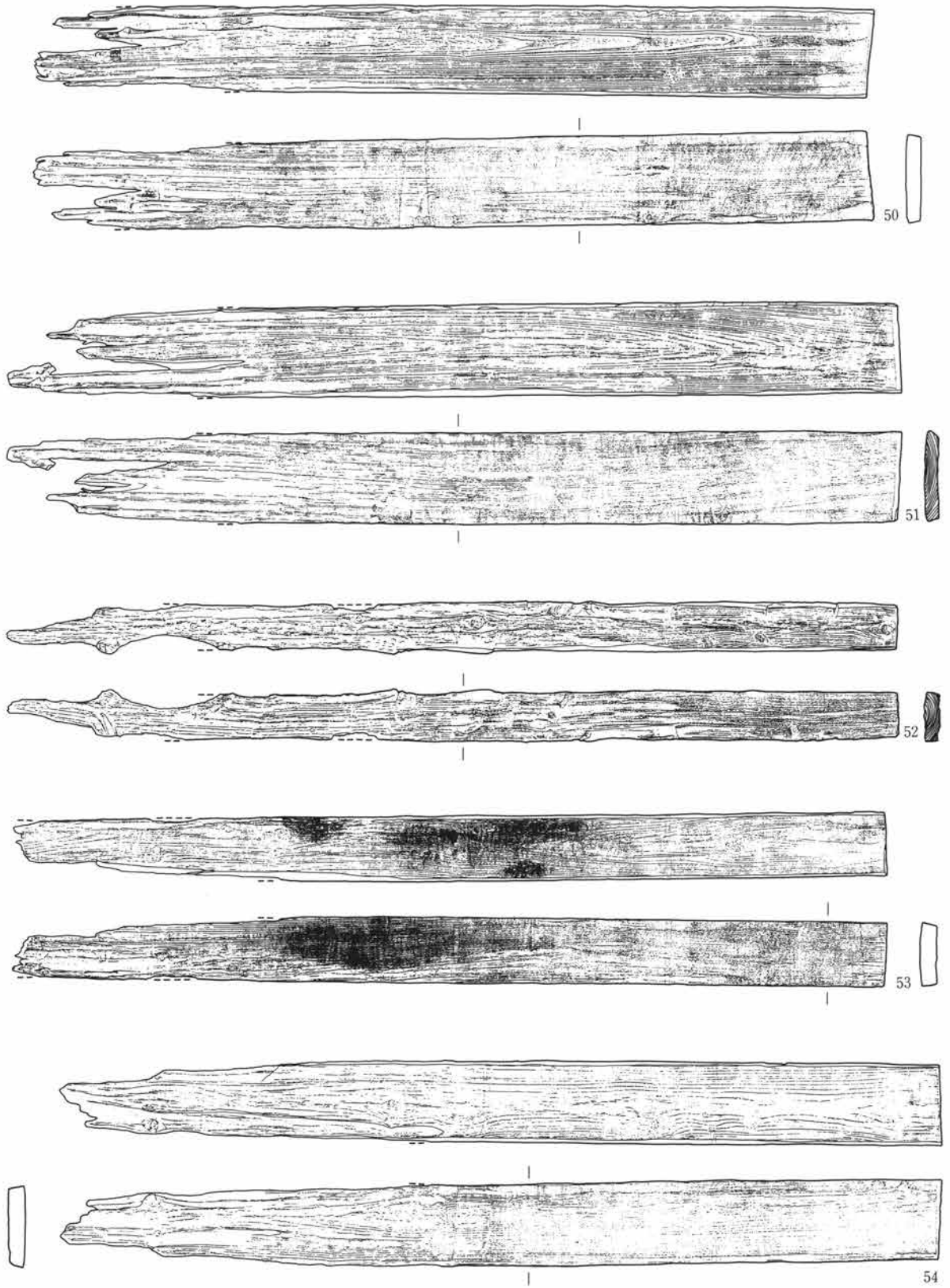
※ 紙面の都合で横位置になっているが  
左側を天として頂きたい。

0 1 : 10 50cm

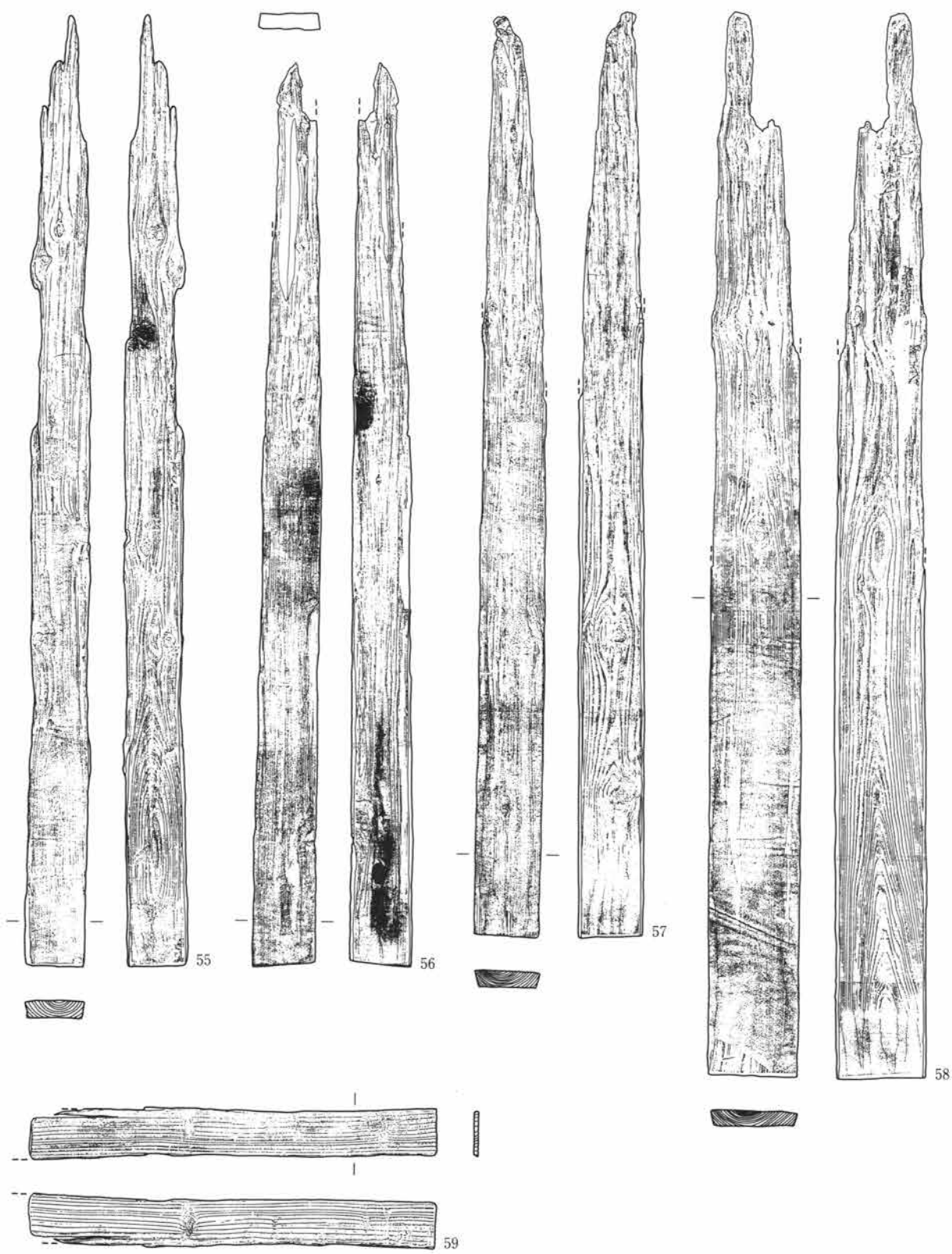
第198図 AY-11号井戸および出土遺物(6)



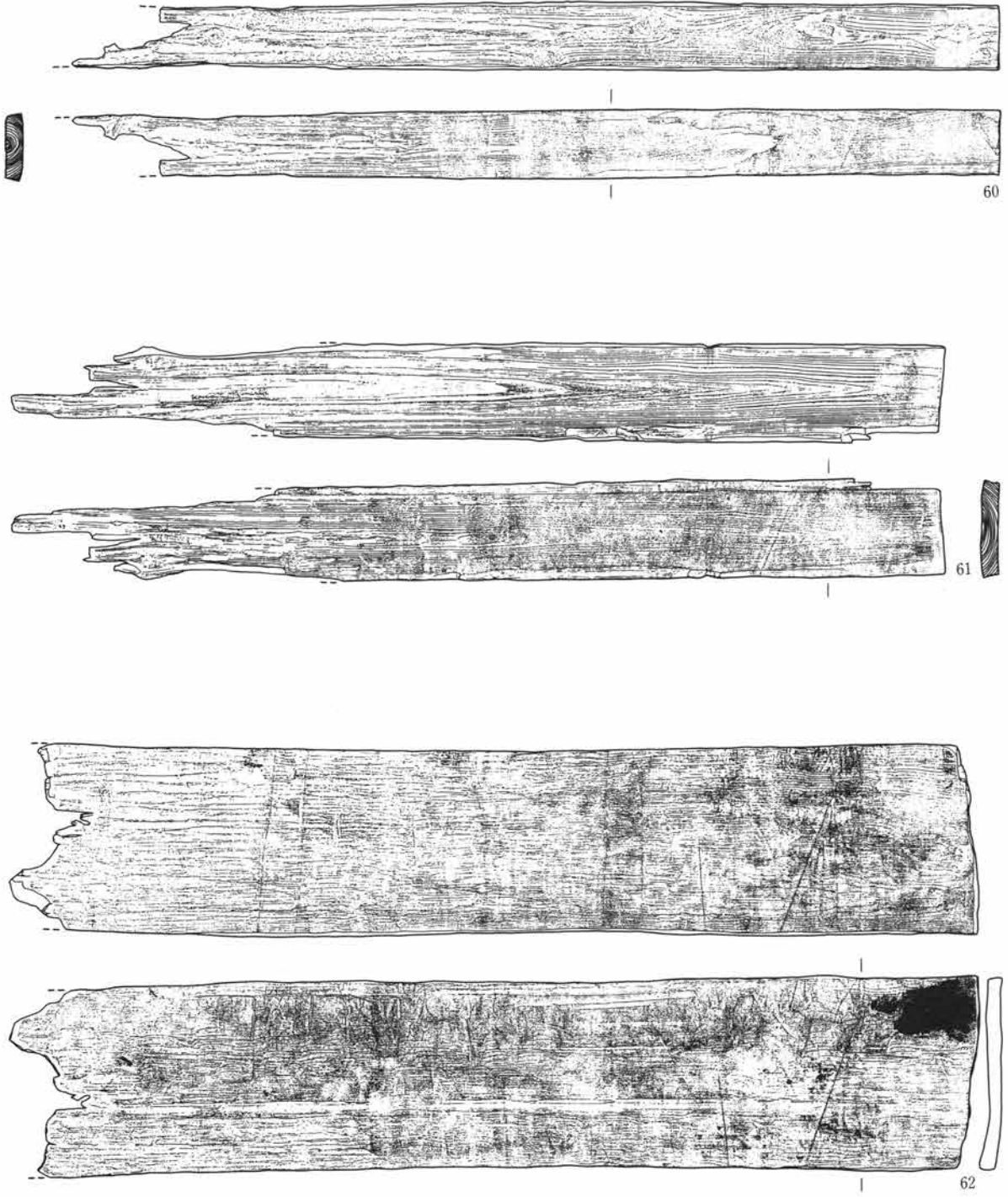
第199図 AY-11号井戸および出土遺物(7)



第200図 AY-11号井戸および出土遺物(8)

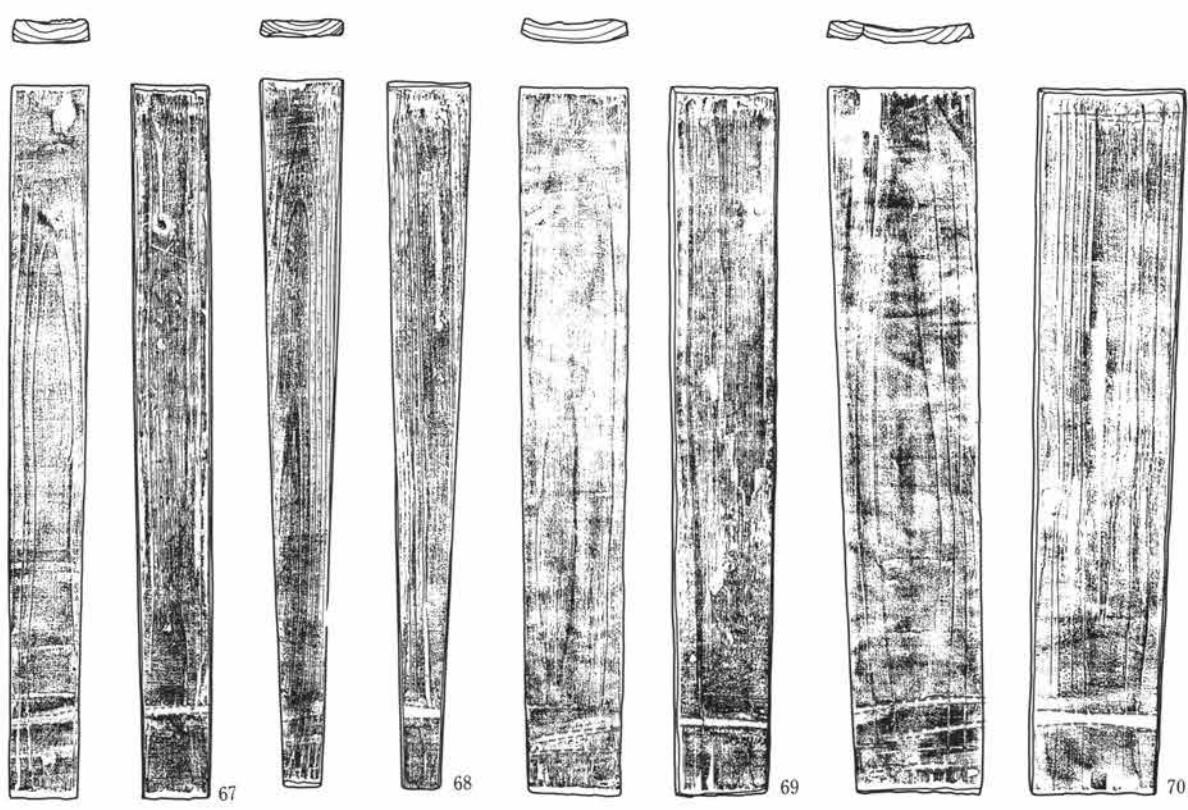
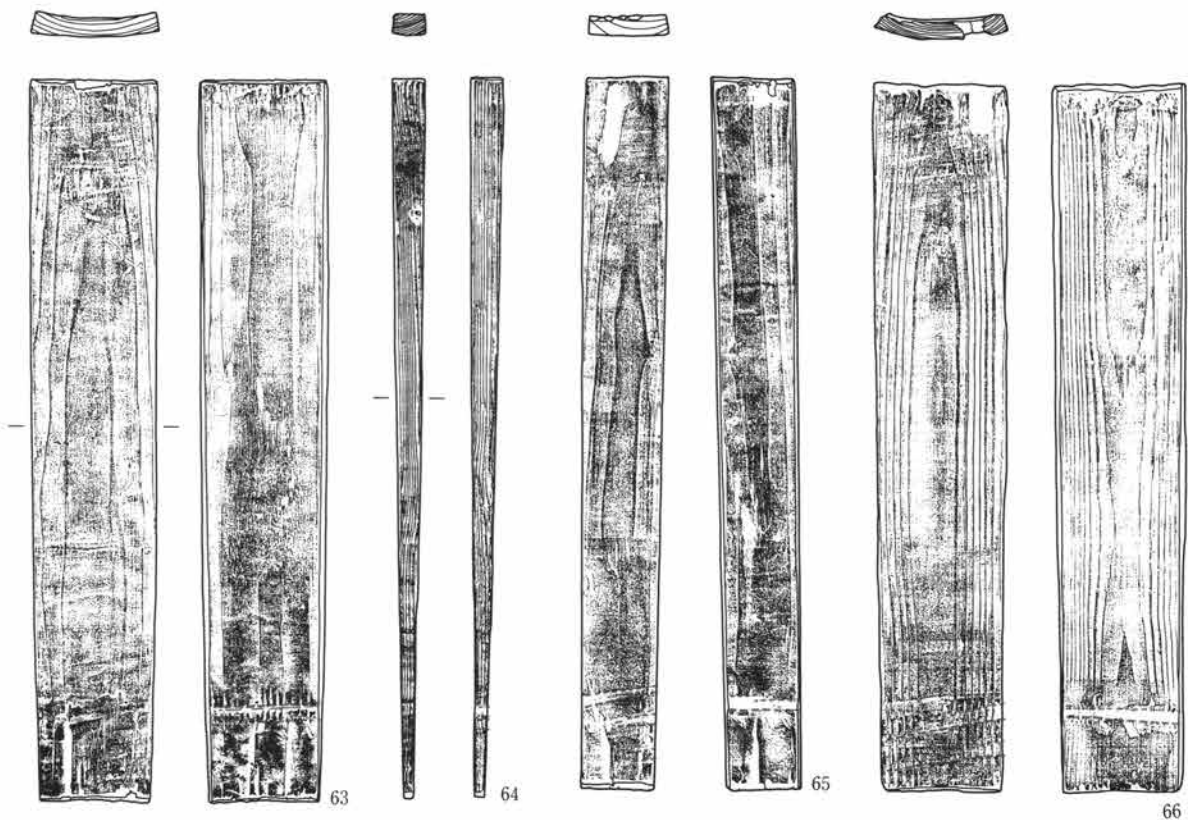


第201図 AY-11号井戸および出土遺物(9)



第202図 AY-11号井戸および出土遺物(10)





0 1 : 5 20cm

第203図 AY-11号井戸および出土遺物(1)

AY-12号井戸 (第204図 PL-32・44)

位置 D区h・i-22・23グリッド

規模 (長軸×短軸) 上面3.32m×2.60m

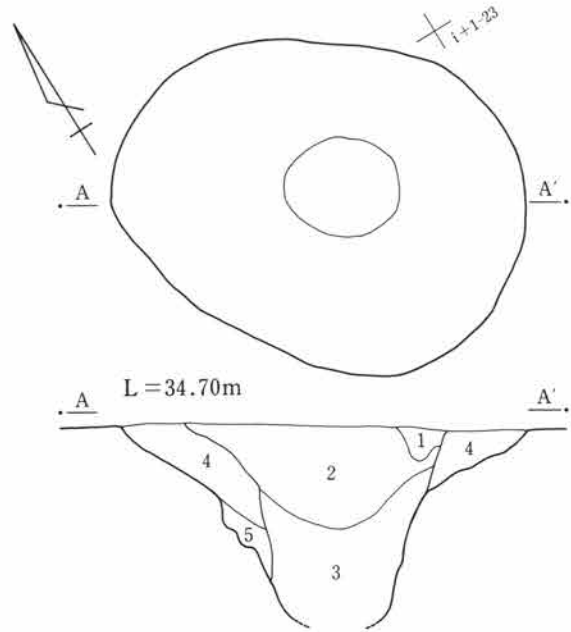
下面1.50m×1.41m

深さ [1.56m]

内部施設 確認できなかった。

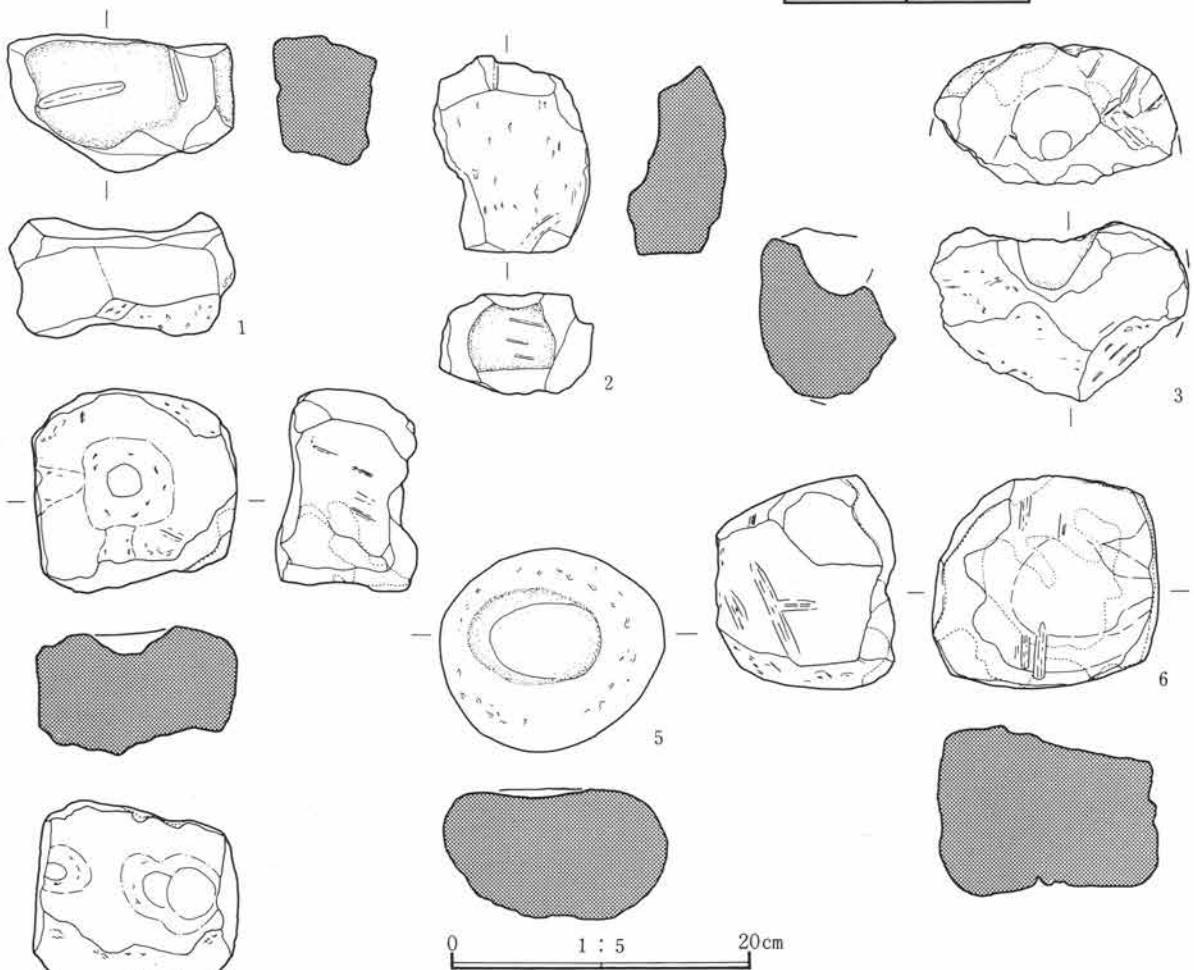
遺物の出土状態 軽石類の出土が多く、そのうち加工痕や使用痕のある不明軽石製品6点を図示した。

備考 調査中の崩落のため、底面付近を記録できなかった。



AY-12号井戸土層説明

- 1 黄褐色土層 軽石の混入多いしまり強い層。ピット状の別遺構埋没土。
- 2 褐色土層 シルト質土ブロックまじりの非粘性土層。
- 3 暗褐色土層 軽石、シルト質土ブロックを少量含む弱粘性土層。しまり欠く。
- 4 暗褐色土層 シルト質土ブロックの多い非粘性土層。
- 5 黄褐色土層 シルト質土ブロックまじりの非粘性土層。



第204図 AY-12号井戸および出土遺物

AY-13号井戸 (第205図 PL-32)

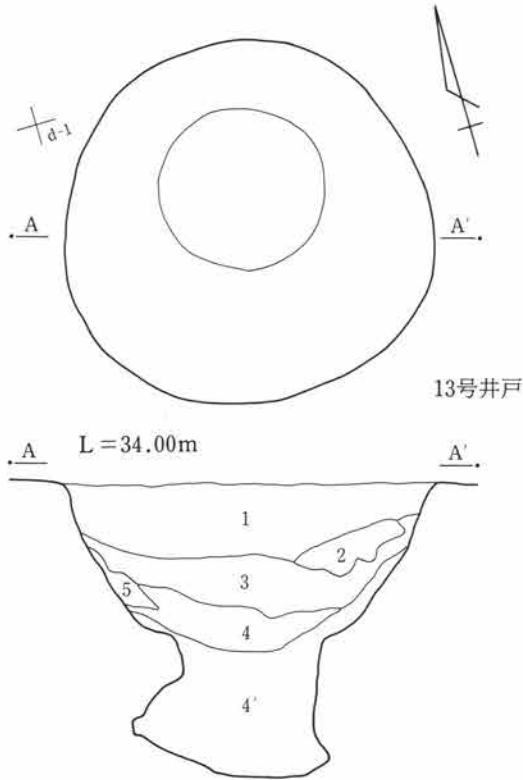
位置 D区c-1 d-0・1グリッド

規模(長軸×短軸) 上面2.94m×2.85m  
 下面1.32m×1.26m

深さ 2.19m

内部施設 確認できなかった。

備考 調査以前のタナ落ち状の崩落の痕跡が顕著だった。底面の形状が不明瞭であり、最下部まで達していない可能性もある。底面付近には10cm大の礫が多かった。



AY-13号井戸土層説明

- 1 褐色土層 大粒の軽石、ブロック状の粘性土を含むしり強い層。
- 2 にぶい黄褐色土層 細砂主体。微細な軽石がまじる。
- 3 にぶい黄褐色土層 砂粒、シルト質土小ブロックのまじる粘性土層。斑鉄あり。
- 4 褐色土層 砂粒とシルト質土の混入層。軽石散見。斑鉄あり。4'には大粒の軽石の混入多い。
- 5 にぶい黄褐色土層 軽石まじりの粘性土層。

0 1:60 2m

AY-14号井戸 (第205図)

位置 D区1-3グリッド

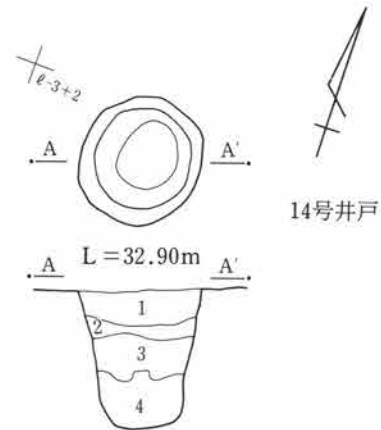
規模(長軸×短軸) 上面1.04m×0.96m  
 下面0.52m×0.46m

深さ 2.14m

内部施設 なし。素掘りの遺構である。

遺物の出土状態 土師器杯に類似した大型のかわらけを1点出土している。

備考 湧水面まで達しておらず、井戸とするには問題がある。



AY-14号井戸土層説明

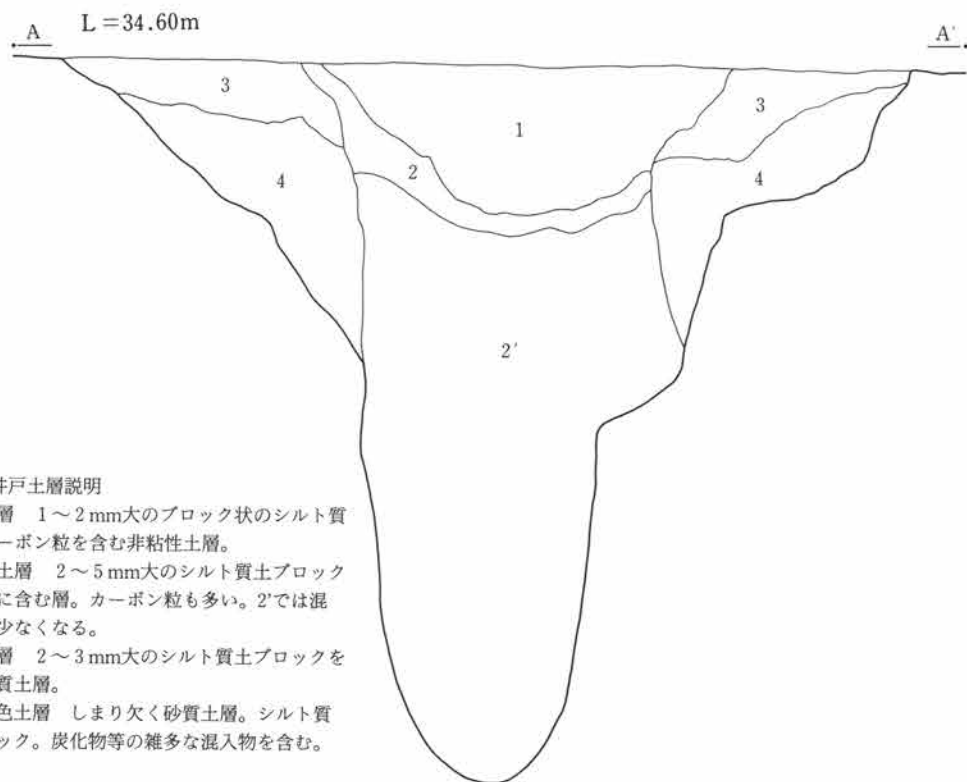
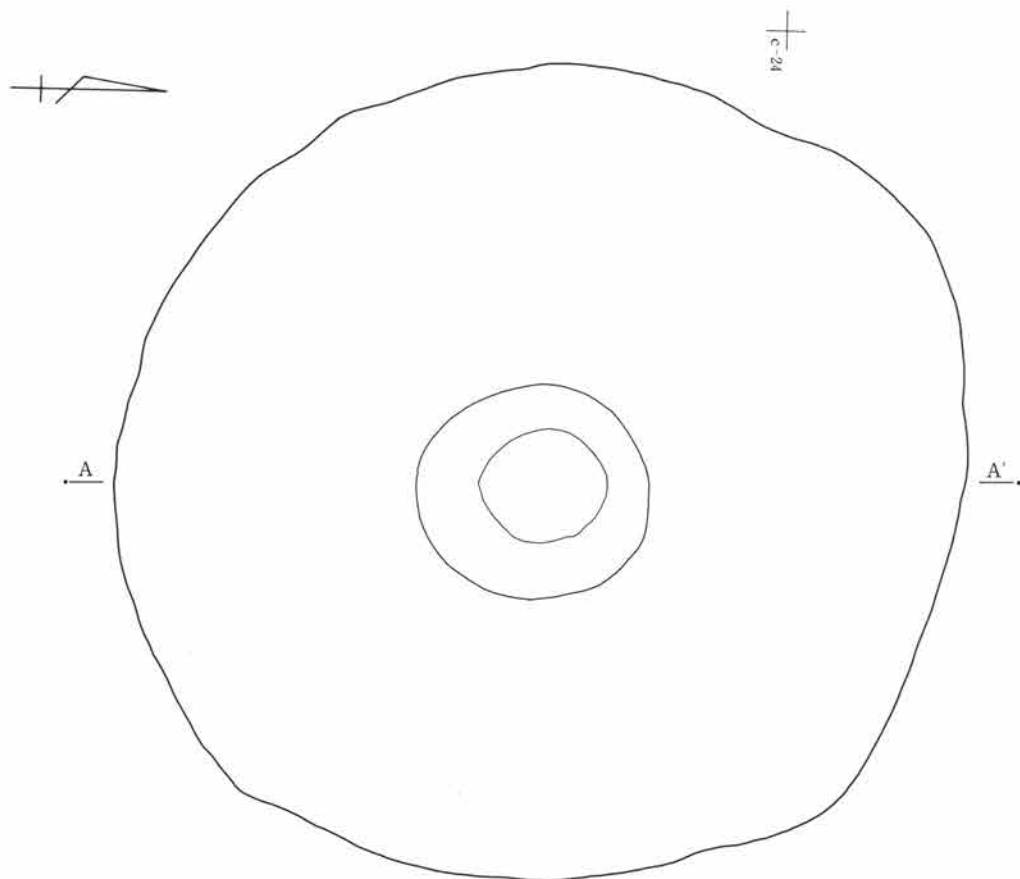
- 1 にぶい黄褐色土層 シルト質土がブロック状にまじる砂質土層。
- 2 にぶい黄褐色土層 1に同じだが砂とシルト質土が一部でラミナ状になる。
- 3 褐色土層 粗砂主体で不揃いの軽石を多量に含んでいる。
- 4 暗褐色土層 シルト質土主体で砂粒を多量に含む。

0 1:60 2m



0 1:3 10cm

第205図 AY-13・14号井戸および出土遺物

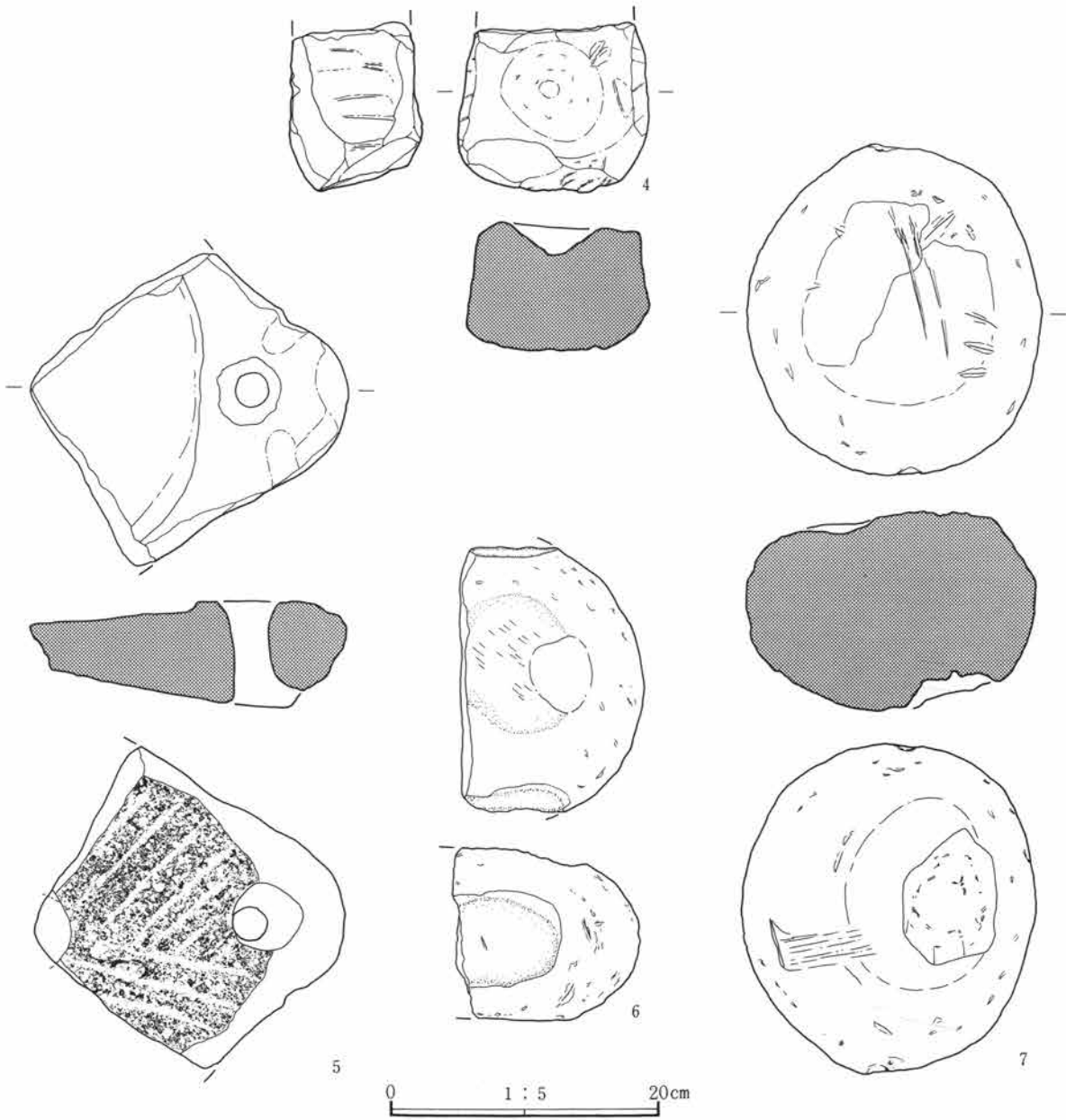
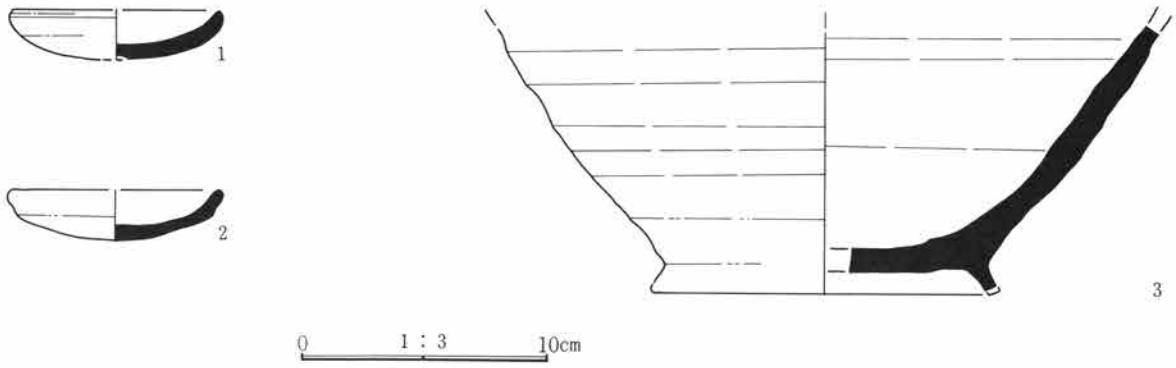


AY-16号井戸土層説明

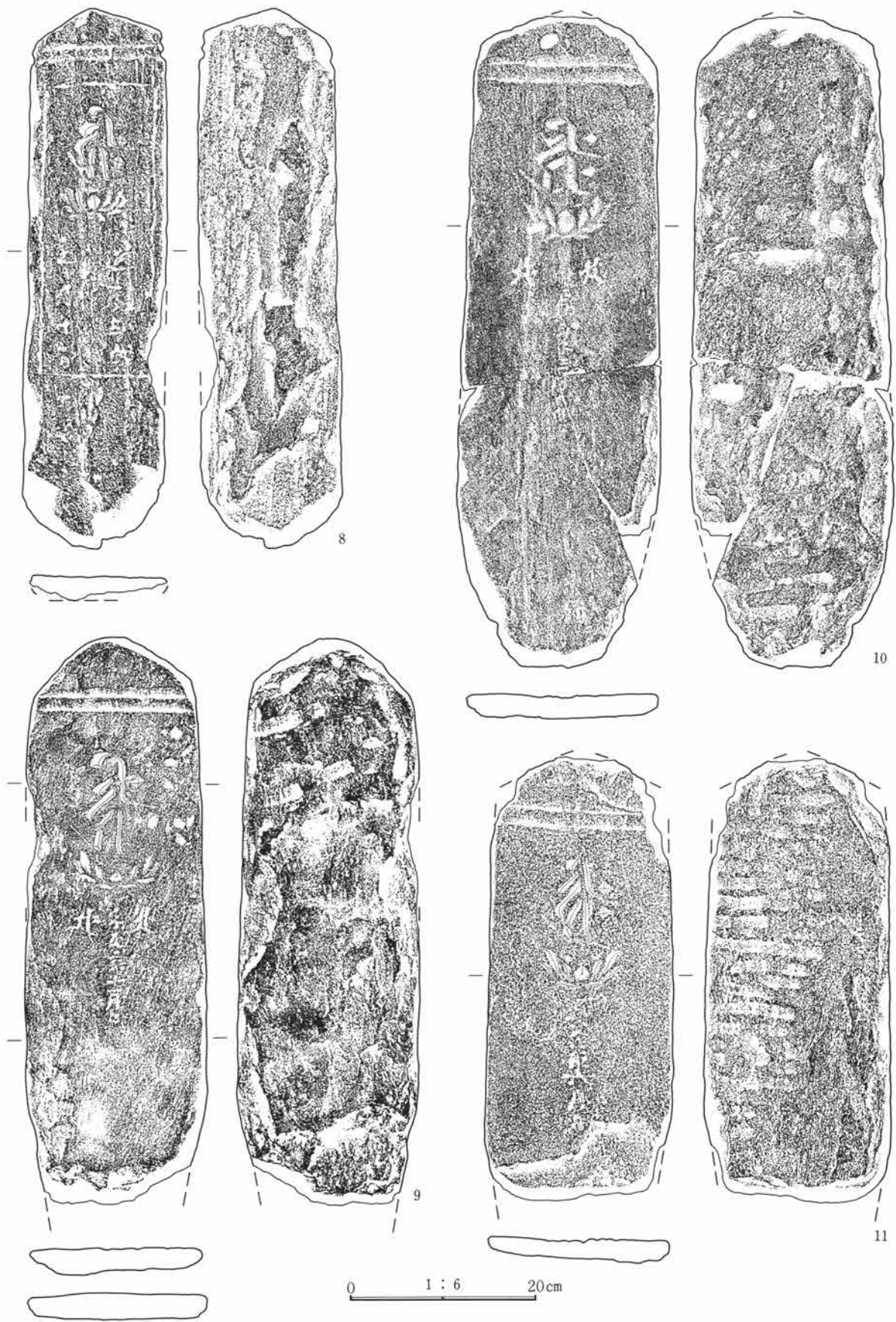
- 1 褐色土層 1~2mm大のブロック状のシルト質土、カーボン粒を含む非粘性土層。
- 2 暗褐色土層 2~5mm大のシルト質土ブロックを多量に含む層。カーボン粒も多い。2'では混入物は少なくなる。
- 3 褐色土層 2~3mm大のシルト質土ブロックを含む砂質土層。
- 4 暗灰褐色土層 しまり欠く砂質土層。シルト質土ブロック。炭化物等の雑多な混入物を含む。

0 1 : 60 2m

第206図 AY-16号井戸



第207図 AY-16号井戸出土遺物(1)



第208図 AY-16号井戸出土遺物(2)

AY-16号井戸

(第206～210図 PL-32-44)

位置 E区c・d-23・24・

0グリッド

規模(長軸×短軸)

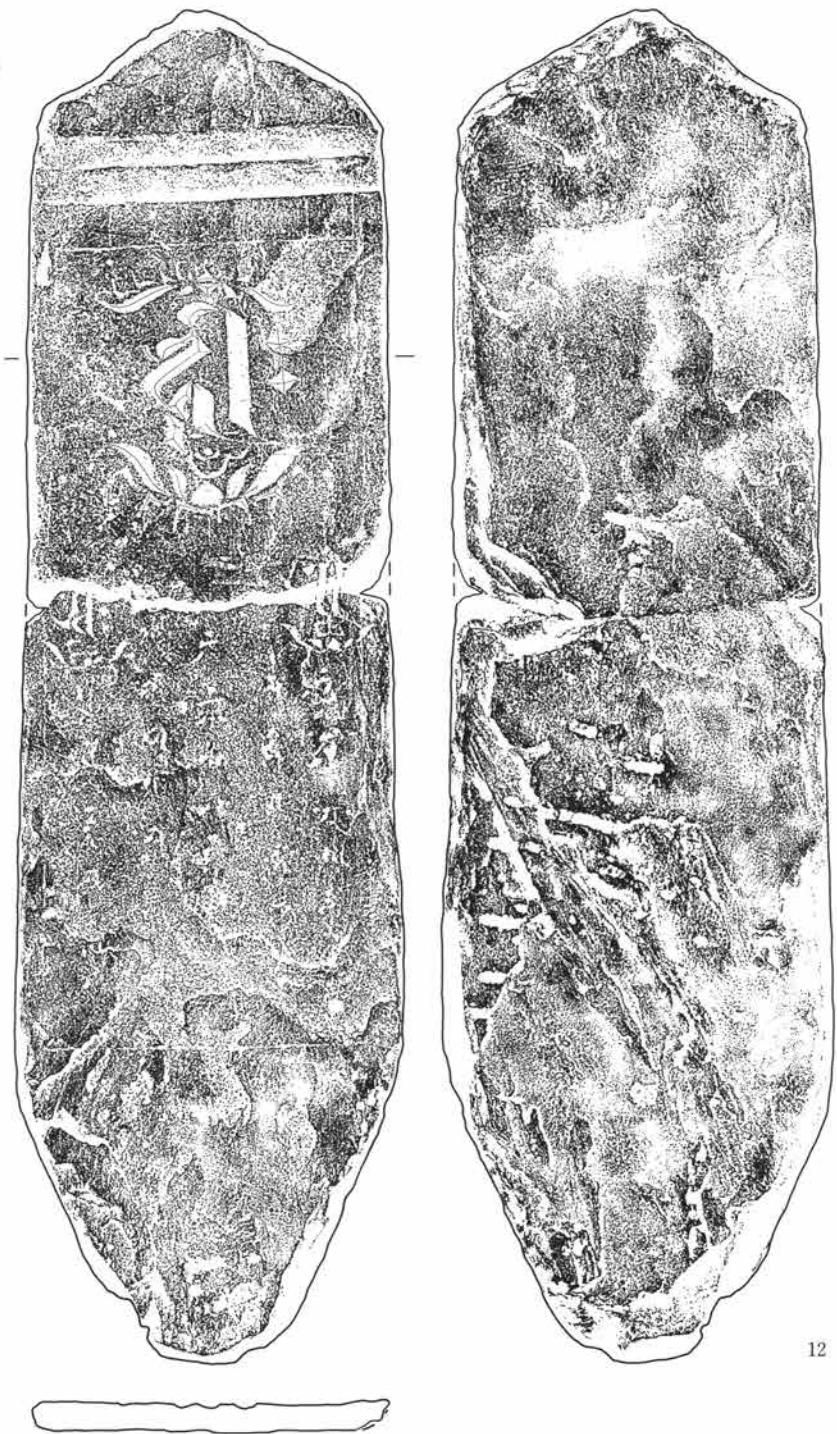
上面6.81m×6.48m

下面0.99m×0.87m

深さ 5.70m

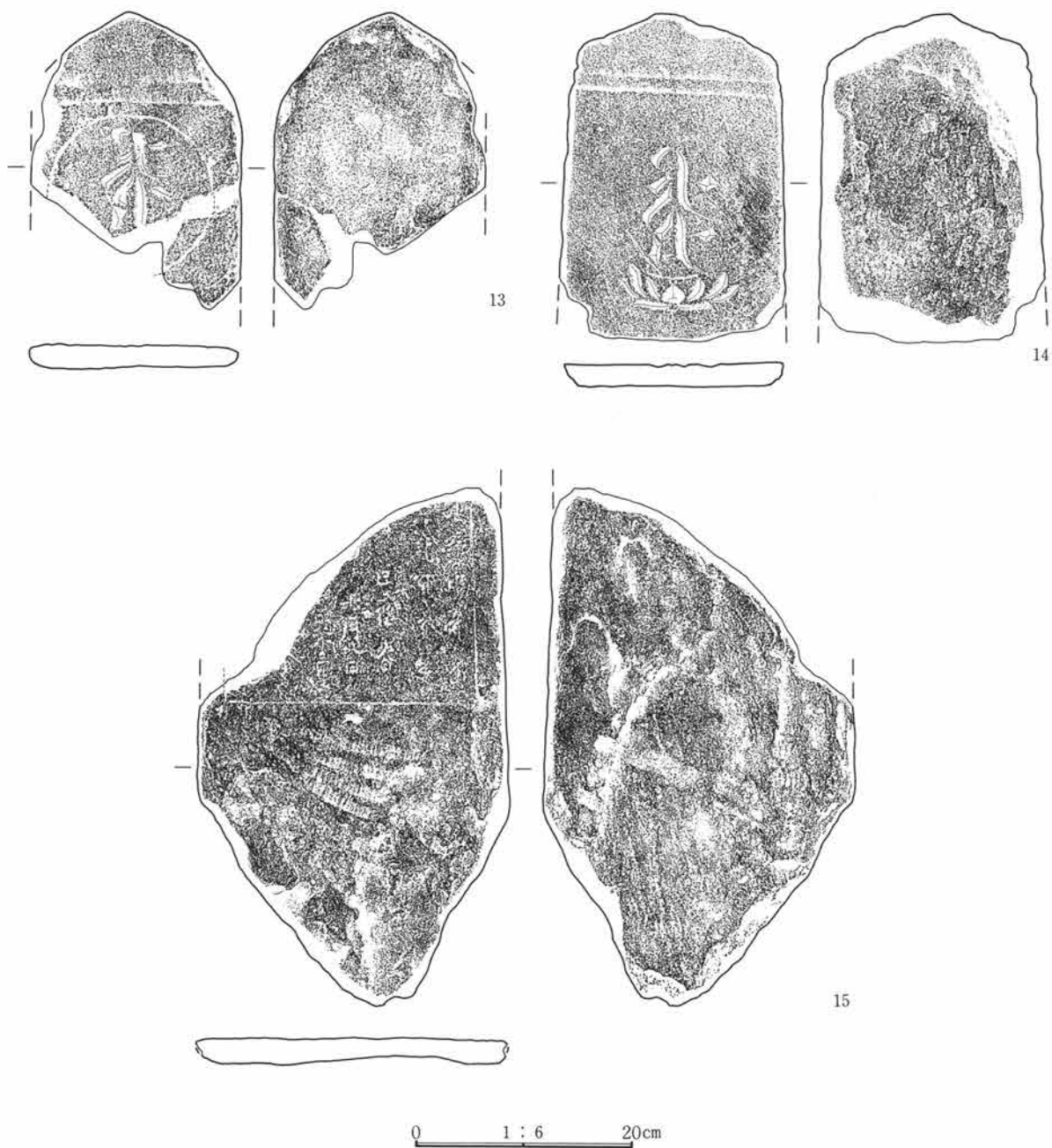
**内部施設** 3・4層は崩落部分の埋め戻し土だが、比較的砂質の土を使っている。上面まで井戸枠が存在していたはずである。板碑を立てて底面に埋め込むようにして円形の井戸枠を作っていた。この板碑を掘り出すため、底面の形状を損なった可能性がある。湧水と壁崩落の中での作業だったため、詳細な記録は残せなかった。

**備考** 径、深さとも安養寺森西遺跡で完掘できた井戸中、最大のものである。



12

第209図 AY-16号井戸出土遺物(3)



第210図 AY-16号井戸出土遺物(4)

遺物の出土状態 15点を図示した。石製品の出土が目立つ。井戸枠に使用していた板碑8点を図示した。銘等は若干摩滅しているが、長期間放置されたものを使ったようには思われない。8・10のようにほぼ完形のものも含まれる。12は別々に埋めてあったものを接合したもので、長さ1mを越える本遺跡中最大のものである。図示した以外にも銘等のない破片

が出土しているが、中層より上からのものが多く、井戸枠とは別のものと思われる。



## AY-17号井戸

(第211・212図 PL-32・45)

位置 E区k・1-6・7グリッド 西側に接する  
ように18号井戸がある。

重複 437号土坑 453号土坑

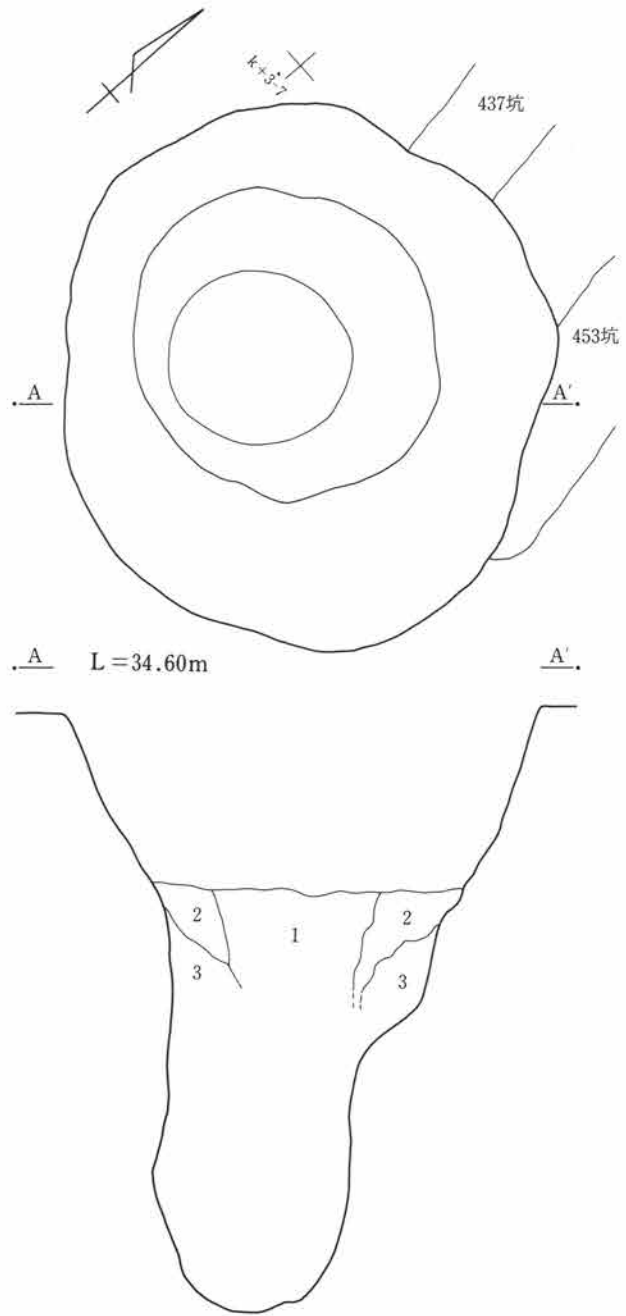
規模 (長軸×短軸) 上面4.35m×3.90m  
下面1.47m×1.38m

深さ 4.80m

内部施設 底面付近に竹材が巡らされるような状態  
で検出された。直径90cmほどの円形の井戸枠があっ  
たものと思われる。

遺物の出土状態 本遺跡では例の少ない常滑、渥美  
系の大甕がまとまって出土した。口縁部か底部の残  
っている8点を図示したが、接合できなかつた胴部  
破片の出土も多く、この中には別個体と思われるも  
のものもある。

備考 中層付近の壁際に粘性土を充填している。遺  
存状態は比較的良好であった。上層からは礫の出土  
が多かった。

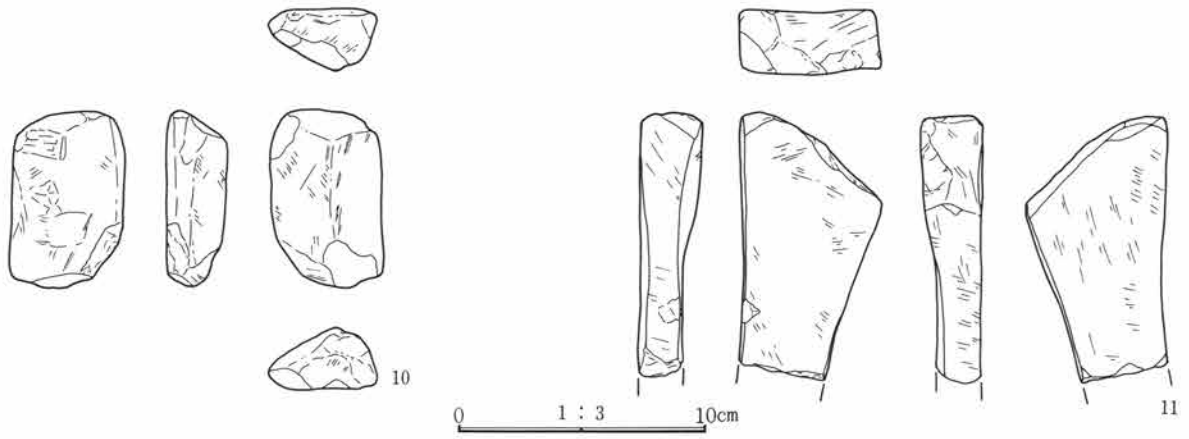
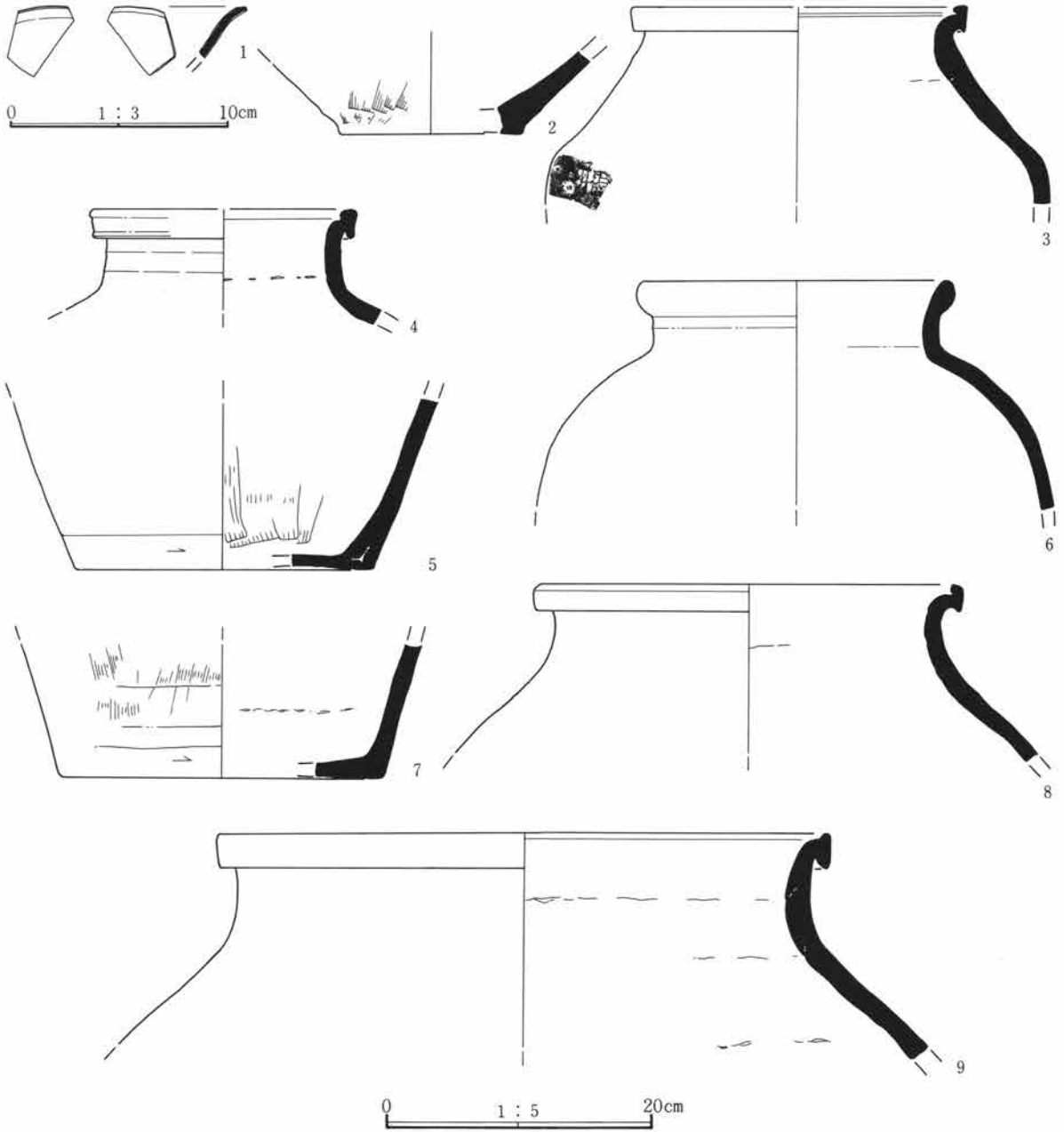


### AY-17号井戸土層説明

- 1 暗褐色土層 灰褐色粘性土をブロック状に含む弱粘性土層。
- 2 暗褐色土層 1土と灰褐色土が互相層に見られる。
- 3 灰褐色土層 ややしまり欠く砂質土層。カーボン粒を含む。

0 1:60 2m

第211図 AY-17号井戸



第212图 AY-17号井戸出土遺物

AY-18号井戸 (第213図 PL-32)

位置 E区k-7グリッド

重複 411号土坑

規模 (長軸×短軸) 上面2.04m×-  
下面1.74m×-

深さ [1.05m]

備考 通学路用の側道脇にあり、途中までしか調査できなかった。底面まで1m以上ある。

AY-20号井戸 (第213図 PL-32)

位置 E区q・r-6・7グリッド

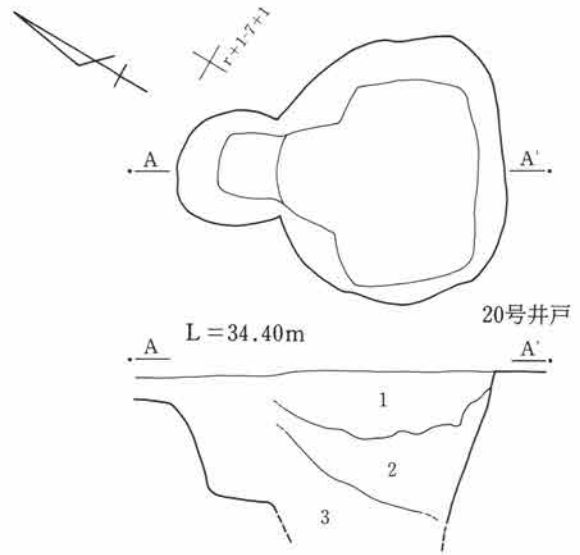
規模 (長軸×短軸) 上面2.61m×2.10m

深さ [1.11m]

内部施設 確認できなかった。

遺物の出土状態 砥石に使用した片岩の破片を出土している。

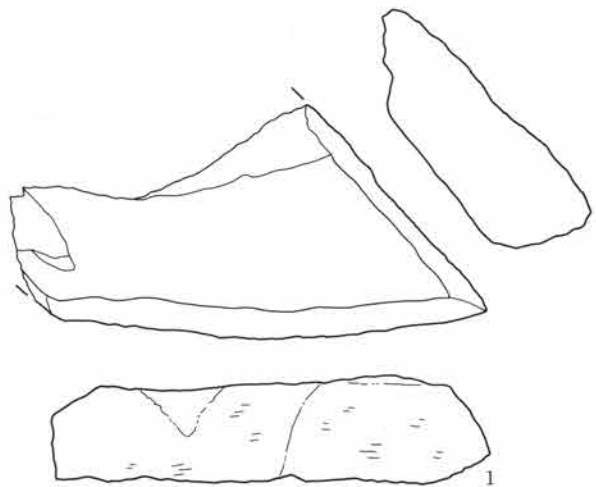
備考 ステップ状の段が北側に付く。土坑との重複の可能性もあるが、断面から切り合いは確認できなかった。



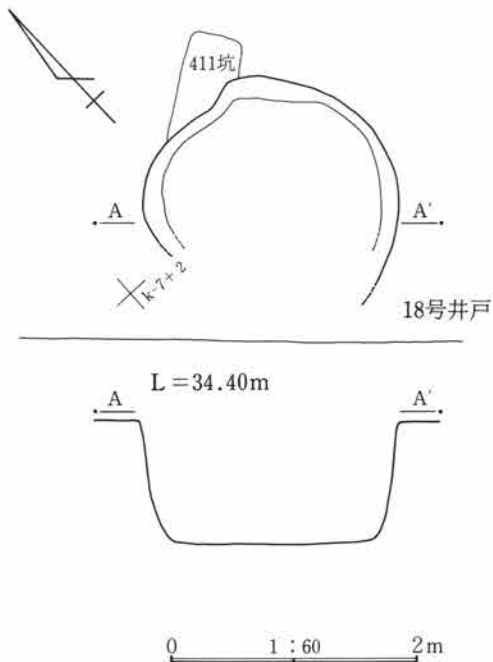
AY-20号井戸土層説明

- 1 暗褐色土層 しまり強い弱粘性土層。一部で互相状。
- 2 灰褐色土層 砂質土で混入物少ない。しまり欠く。
- 3 暗褐色土層 ややしまり欠く弱粘性土層。シルト質土小ブロックを含む。

0 1 : 60 2m



0 1 : 3 10cm



0 1 : 60 2m

第213図 AY-18・20号井戸および出土遺物

AY-19号井戸 (第214図 PL-32・45)

位置 E区P-7 Q-6・7グリッド 19~21号

井戸は館堀のコーナー付近で密集して見つかった。

重複 27号溝

規模 (長軸×短軸) 上面3.63m×3.57m

下面0.60m×0.45m

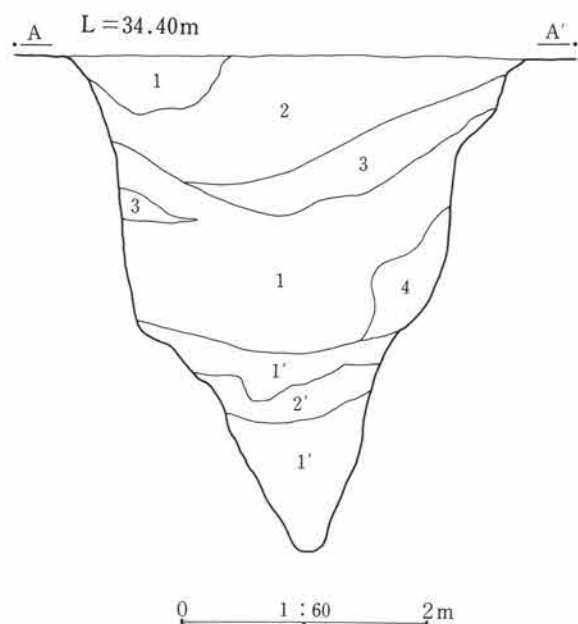
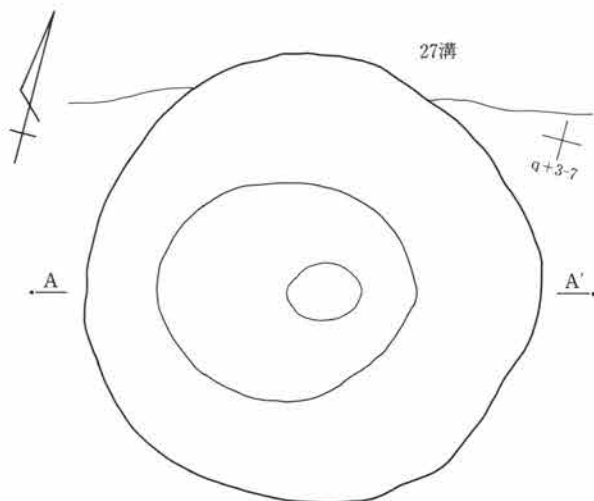
深さ 3.90m

内部施設 確認できなかった。

遺物の出土状態 かわらけ1点と頂部付近を砥石に

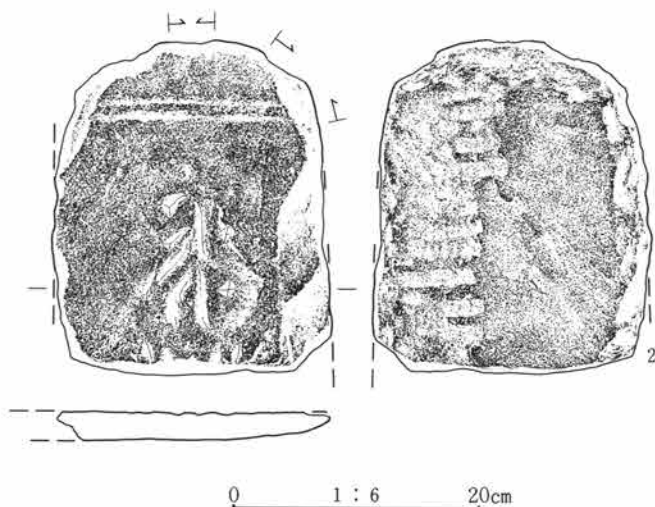
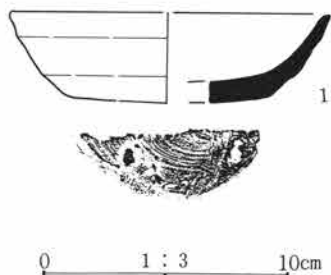
転用した板碑片1点を図示した。

備考 4層付近に粘性土の充填痕が認められた。



AY-19号井戸土層説明

- 1 暗褐色土層 やや砂質でしまり弱い層。シルト質土を小ブロック状に含む。1'は黒色味をおび、混入物少ない。
- 2 灰褐色土層 粒子の細かな弱粘性土層。砂礫やシルト質土ブロックを含む。2'は1土がまじり斑鉄が見られる。
- 3 暗灰褐色土層 2層土中に青灰色の粘土ブロックがまじる。
- 4 灰褐色土層 砂粒やシルト質土ブロックのまじる粘性土。



第214図 AY-19号井戸および出土遺物

AY-21号井戸 (第215・216図 PL-32・45)

位置 E区 r・s-6・7グリッド

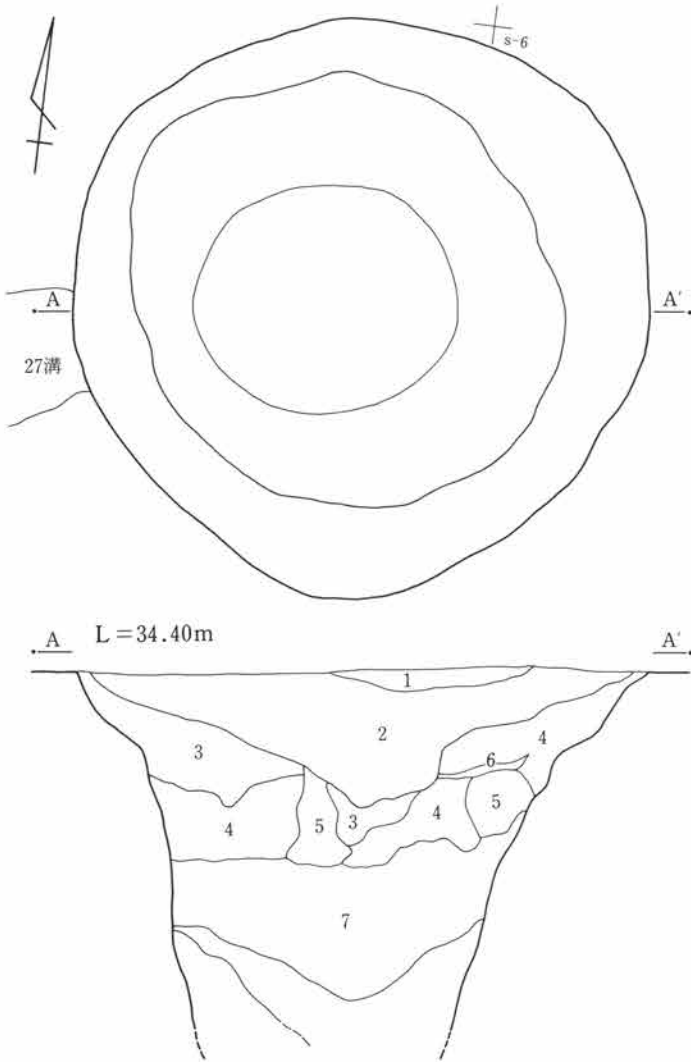
重複 27号溝

規模 (長軸×短軸) 上面4.59m×4.56m

深さ [2.82m]

内部施設 確認できなかった。

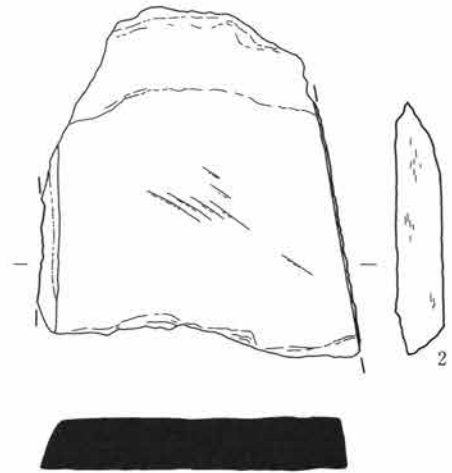
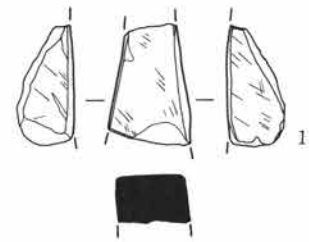
備考 湧水と崩落のため、最下層まで調査することはできなかった。3～6層の堆積状態は、人為的な埋め戻しを示している。



AY-21号井戸土層説明

- 1 灰黄褐色土層 1～5mm大のシルト質土ブロック主体のしまり強い層。
- 2 暗褐色土層 粒子やや細かくややしまり欠く層。混入物少ない。
- 3 暗褐色土層 2土に黄色味強いシルト質土ブロックが混入する。
- 4 黒褐色土層 やや腐蝕土質でしまり欠く層。カーボン粒を含む。
- 5 暗灰褐色土層 シルト質でややしまり強い粘性土層。斑鉄は見られる。
- 6 暗黄褐色土層 混入物のないシルト質土層。
- 7 暗灰褐色土層 灰色と褐色のシルト質土の混土層でややしまり強い。

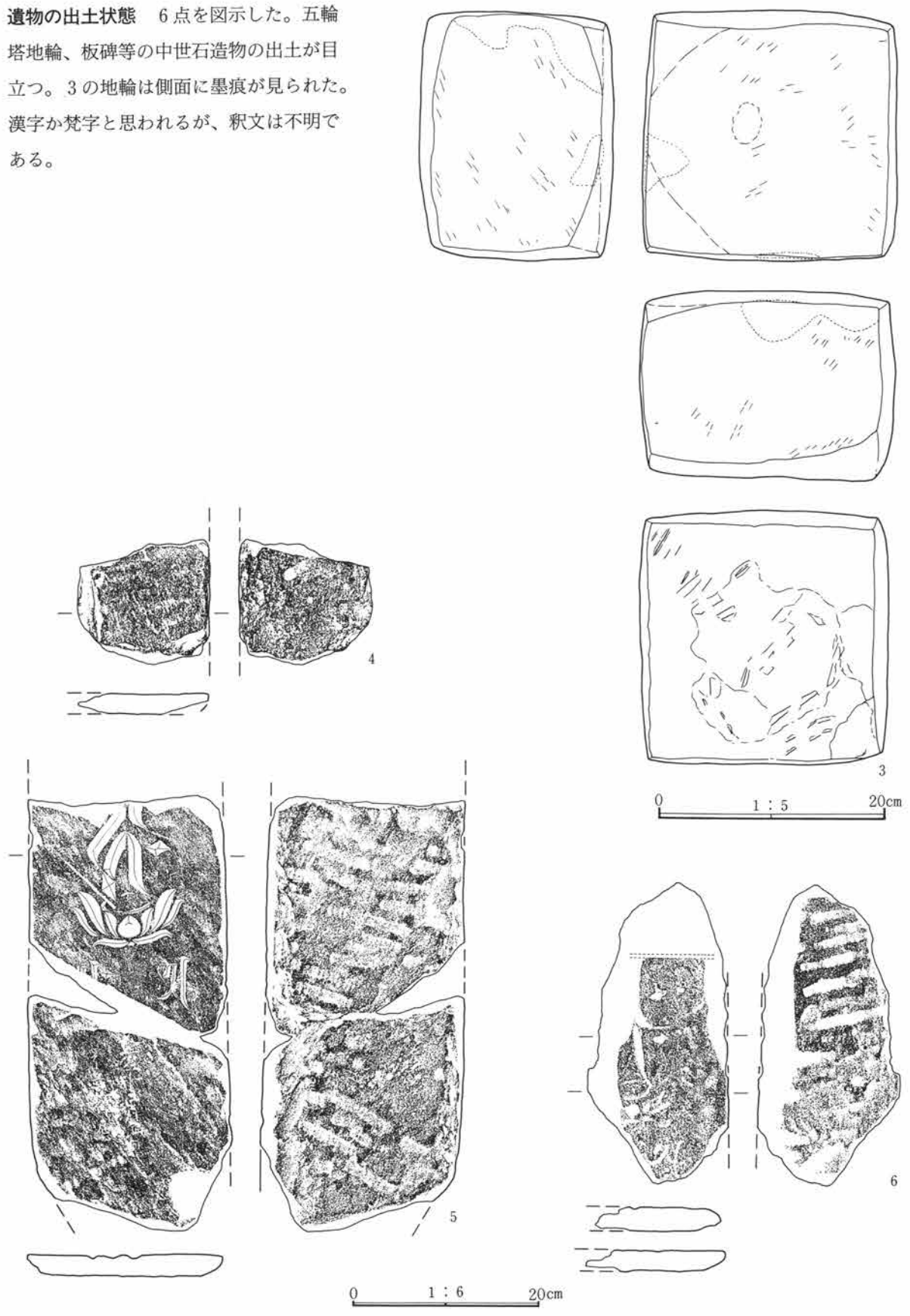
0 1:60 2m



0 1:3 10cm

第215図 AY-21号井戸および出土遺物(1)

遺物の出土状態 6点を図示した。五輪塔地輪、板碑等の中世石造物の出土が目立つ。3の地輪は側面に墨痕が見られた。漢字か梵字と思われるが、釈文は不明である。



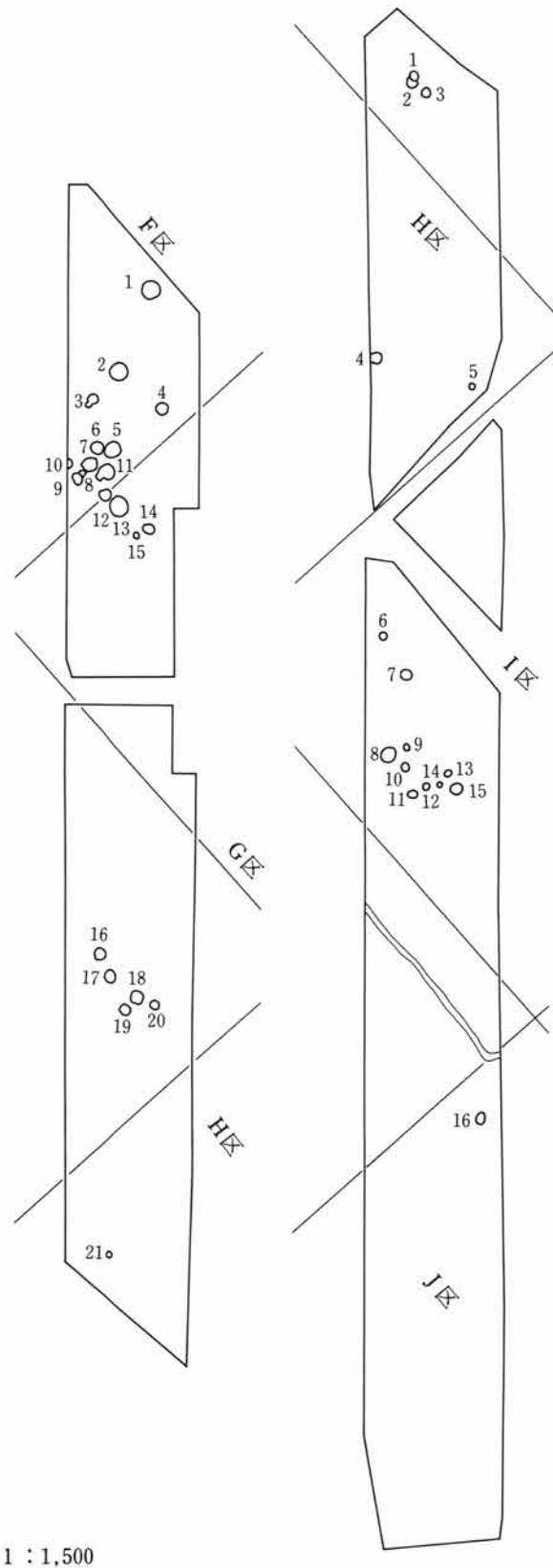
第216図 AY-21号井戸および出土遺物(1)

### 大館馬場遺跡・阿久津宮内遺跡の井戸

両遺跡の井戸の配置を右図に示した。遺構の密集する状況は安養寺森西遺跡以上のものがある。特に大館馬場遺跡のF区G区の境界付近と阿久津宮内遺跡のI区内は遺跡群全体を通じてもっとも井戸が集中して見つかった。安養寺森西遺跡の井戸に比べ大規模な井戸枠が見られないのは、地山のシルト質土に多少保持力のあることが大きい。井戸の年代にも差のあることも考えられる。

阿久津宮内遺跡南東側の井戸は、本遺跡群の調査で最初に掘り下げを行ったため、状況がつかめず、壁の崩落が重なり、底面まで十分な調査が行なえなかったものがある。そのうち、井戸掘削を業者委託したが、それでも深いものは危険回避のためボーリングステッキで底面を確認するに留めたものが含まれている。

出土遺物は安養寺森西遺跡に比べると著しく少ない。特に近世の陶磁器類がほとんど出土しないことが大きな差である。



第217図 大館馬場・阿久津宮内遺跡井戸配置図

OT-1号井戸 (第218図 PL-33)

位置 F区s・t-7・8グリッド

規模(長軸×短軸) 上面3.94m×3.70m

深さ [3.06m]

遺物の出土状態 上層から土師質小皿、褐釉陶器などの小破片計4点を出土しているが、時期決定はできない。

備考 内部施設の痕跡はなく、素掘りの井戸である。底面は地山との区別が難しく、明らかにできなかった。3層下が底面となる可能性もある。

OT-2号井戸 (第218図 PL-33)

位置 F区u・v-11・12グリッド

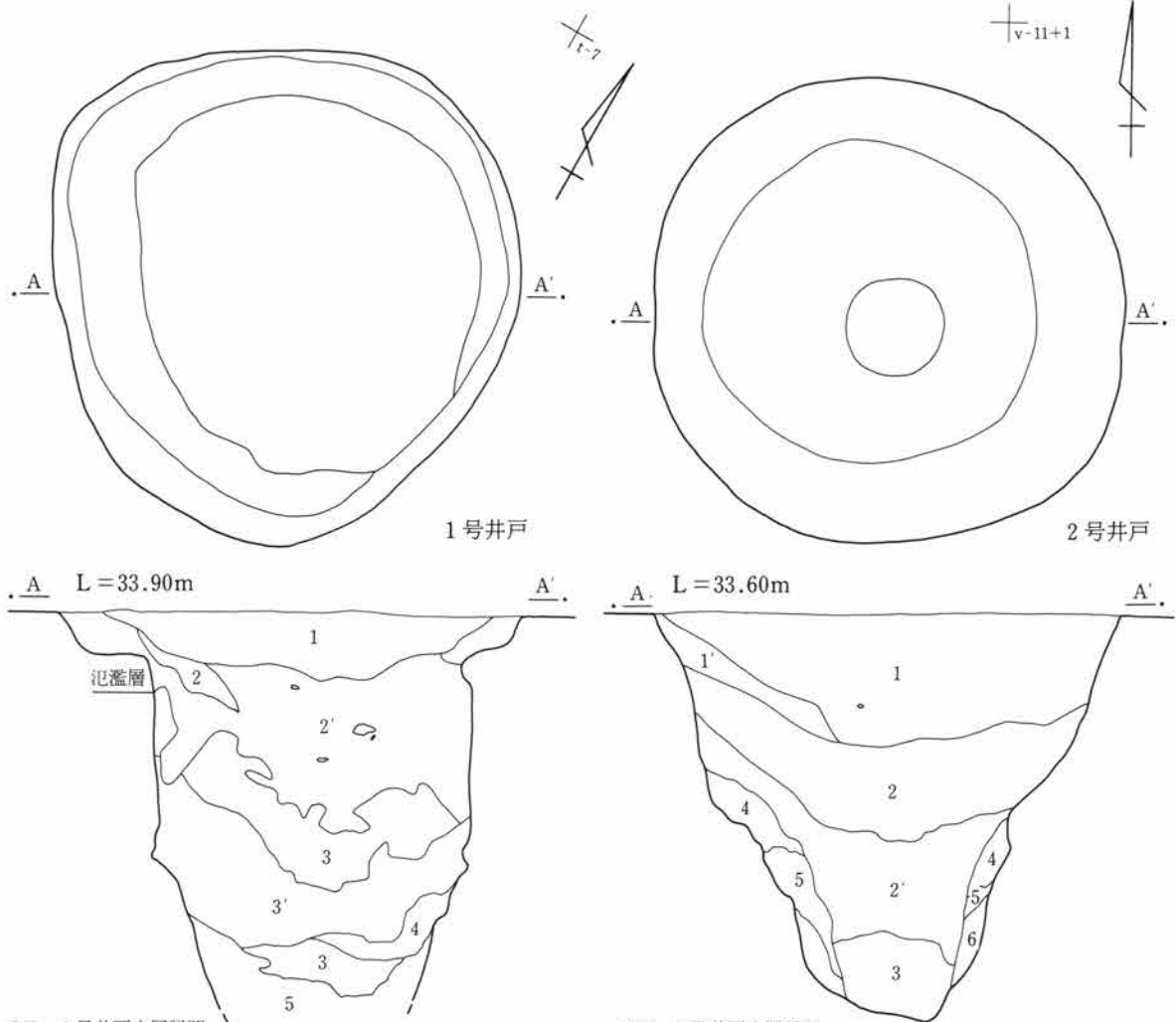
規模(長軸×短軸) 上面3.90m×3.76m

下面0.82m×0.80m

深さ 3.22m

遺物の出土状態 中世軟質陶器鉢底部や砥石の小破片を出土している。

備考 ロト状の断面を呈している。土層断面から井戸杵状の内部施設のあったことも考えられる。6層は調査時に崩落した壁。



OT-1号井戸土層説明

- 1 暗褐色土層 シルト質土を小ブロック状に含む。しまり強い。
- 2 暗黄褐色土層 シルト質土の混入多い。2'はカーボン粒まじる。
- 3 黒褐色土層 やや腐植土質でしまり欠く層。粘性あり。3'は斑鉄が見られ灰色味をおびる。
- 4 灰黒色土層 地山の灰色シルト質土と3土との混合土層。
- 5 灰褐色土層 地山との区別が難しいが、地山に見られるラミナがない。

OT-2号井戸土層説明

- 1 暗黄褐色土層 しまりの強いシルト質土層。1'はシルト質土がブロック状になる。
- 2 暗褐色土層 ややしまり欠く粘性土層。2'は灰色味をおびる。
- 3 暗灰褐色土層 しまり強く混入物少ない。下半黒色味おびる。
- 4 黒褐色土層 黒色粘性土中に黄褐色のシルト質土ブロック混入。
- 5 灰褐色土層 シルト質土中に黒色粘性土をブロック状に混入。

0 1:60 2m

第218図 OT-1・2号井戸



OT-3号井戸 (第219図 PL-33)

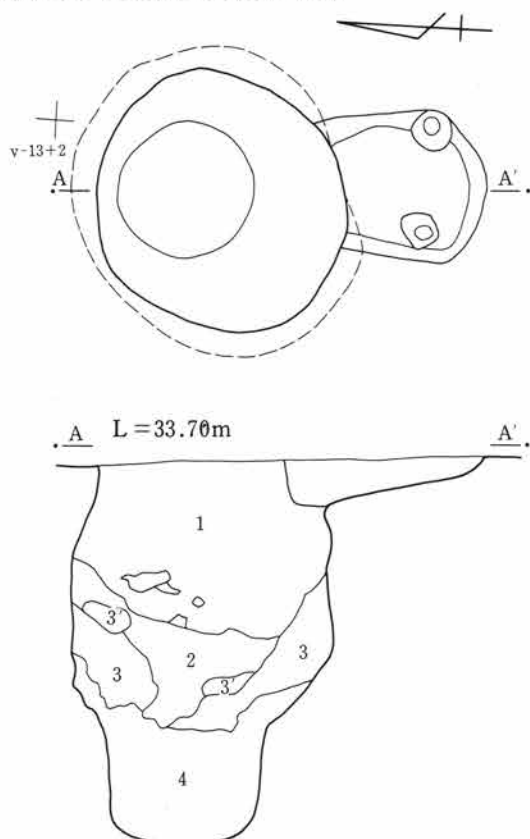
位置 F区u・v-13・14グリッド

重複 土坑に先行する。

規模 (長軸×短軸) 上面2.04m×1.96m  
下面1.10m×1.08m

深さ 3.02m

備考 断面中位に壁の崩落によるふくらみあり。比較的遺存状態の良い井戸であるが、内部施設の痕跡はない。遺物の出土もなかった。



OT-3号井戸土層説明

- 1 暗褐色土層 しまりの強い粘性土層。上層に細礫、中層にカーボン粒を含む。
- 2 灰黒色土層 灰色シルト質土ブロックを含む粘性土層。
- 3 灰色土層 混入物の少ない粘性土層。3'は2層土との混合土層。
- 4 灰褐色土層 シルト質土と砂との混合土層で、他の混入物は少ない。

OT-4号井戸土層説明

- 1 褐色土層 シルト質土の混入するしまり強い層で上方に細礫の混入多い。1'は壁崩落土のシルト質土ブロック中心。
- 2 褐色土層 やや砂質でしまり欠く層。シルト質土を小ブロック状に混入。
- 3 暗褐色土層 黒褐色の粘性土中に大粒の黄褐色シルト土を含む人為的な埋戻し土。3'は灰色粘性土の混入多い。
- 4 灰褐色土層 地山と同じ灰色シルト質土と砂の混合土層。
- 5 暗褐色土層 やや腐植土質の粘性土でしまり欠く。下層は砂礫中心で地山との区別難しい。

0 1:60 2m

第219図 OT-3・4号井戸

OT-4号井戸 (第219図 PL-33)

位置 F区x・y-11グリッド

重複 3号火葬土坑

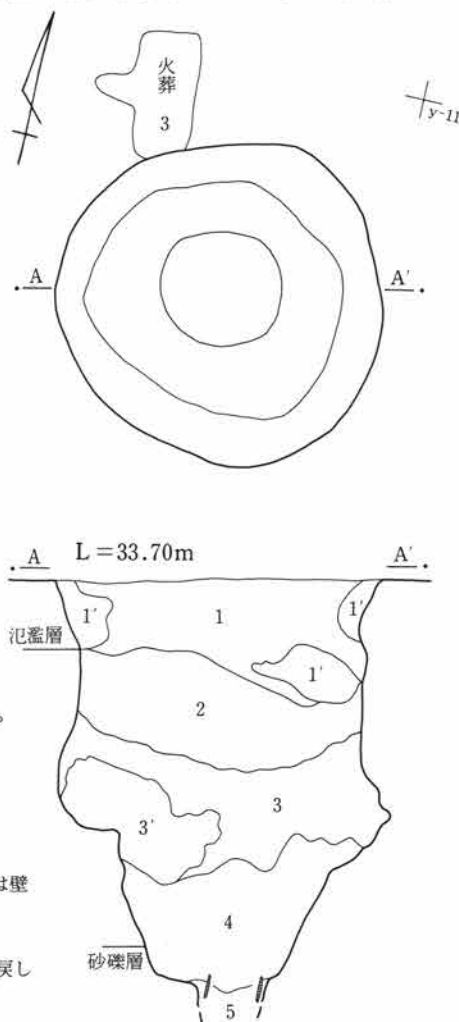
規模 (長軸×短軸) 上面2.60m×2.52m  
(一次底面) 下面0.96m×0.90m

深さ [3.26m]

内部施設 底面を一段掘り下げて推定径40cmの曲物を埋設したようで、小破片を検出している。

遺物の出土状態 中世焼締陶器の胴部破片を埋没土から出土している。

備考 最下層は漸移的に砂礫層となっており、明確な底面は把握できなかった。壁崩落土の混入多く、開口部は一まわり小さかったはずである。



OT-5号井戸 (第220図 PL-33)

位置 F区x-14・15グリッド 6号井戸に近接しており、同時存在は無理である。

規模 (長軸×短軸) 上面3.84m×3.26m  
下面1.48m×1.34m

深さ 3.26m

遺物の出土状態 礫に混じって中世焼締陶器鉢や、軟質陶器鉢、軽石製窪み石の破片を上層から出土している。

備考 内部施設は確認できなかったが、最下層の埋没土は4号井戸と類似しており底面施設があった可能性もある。

OT-6号井戸 (第220図 PL-33)

位置 F区w・x-15グリッド

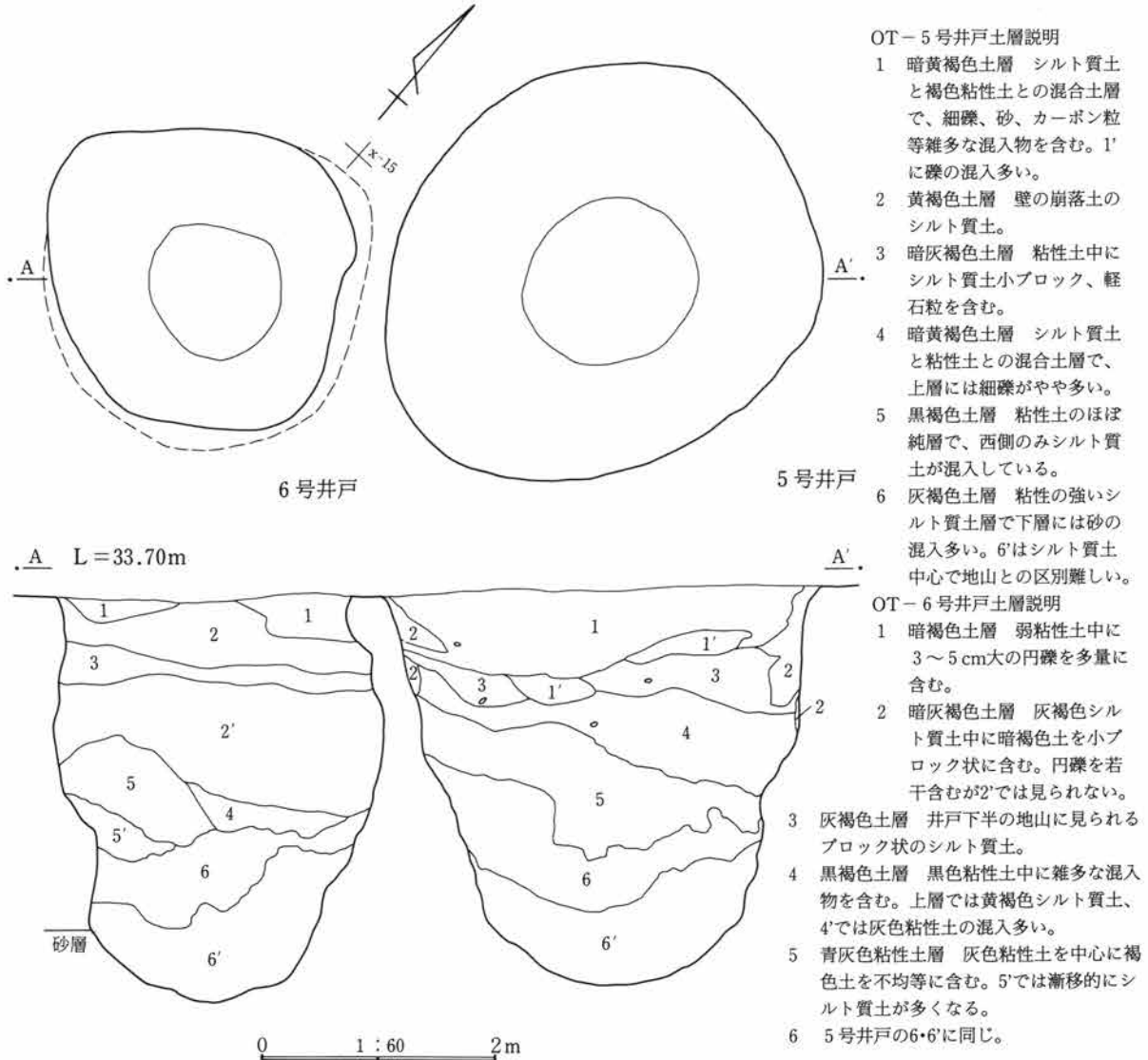
規模 (長軸×短軸) 上面3.88m×2.56m  
下面1.18m×1.10m

深さ 3.32m

内部施設

遺物の出土状態 中世焼締陶器鉢3点、常滑小破片等を上層から出土している。

備考 3層土は近くの井戸掘削時の埋め戻されたものであり、本井戸が5号井戸に先行する可能性がある。底面の状況は5号井戸に同じである。



OT-5号井戸土層説明

- 1 暗黄褐色土層 シルト質土と褐色粘性土との混合土層で、細礫、砂、カーボン粒等雑多な混入物を含む。1'に礫の混入多い。
- 2 黄褐色土層 壁の崩落土のシルト質土。
- 3 暗灰褐色土層 粘性土中にシルト質土小ブロック、軽石粒を含む。
- 4 暗黄褐色土層 シルト質土と粘性土との混合土層で、上層には細礫がやや多い。
- 5 黒褐色土層 粘性土のほぼ純層で、西側のみシルト質土が混入している。
- 6 灰褐色土層 粘性の強いシルト質土層で下層には砂の混入多い。6'はシルト質土中心で地山との区別難しい。

OT-6号井戸土層説明

- 1 暗褐色土層 弱粘性土中に3~5cm大の円礫を多量に含む。
- 2 暗灰褐色土層 灰褐色シルト質土中に暗褐色土を小ブロック状に含む。円礫を若干含むが2'では見られない。
- 3 灰褐色土層 井戸下半の地山に見られるブロック状のシルト質土。
- 4 黒褐色土層 黒色粘性土中に雑多な混入物を含む。上層では黄褐色シルト質土、4'では灰色粘性土の混入多い。
- 5 青灰色粘性土層 灰色粘性土を中心に褐色土を不均等に含む。5'では漸移的にシルト質土が多くなる。
- 6 5号井戸の6・6'に同じ。

第220図 OT-5・6号井戸

OT-7号井戸 (第221図 PL-33)

位置 F区x-15・16 w-16グリッド

規模 (長軸×短軸) 上面3.30m×2.80m

下面1.04m×1.02m 深さ 3.38m

OT-9号井戸 (第221図 PL-33)

位置 F区x-17グリッド

規模 (長軸×短軸) 上面2.66m×2.00m

下面1.96m×1.30m 深さ 3.08m

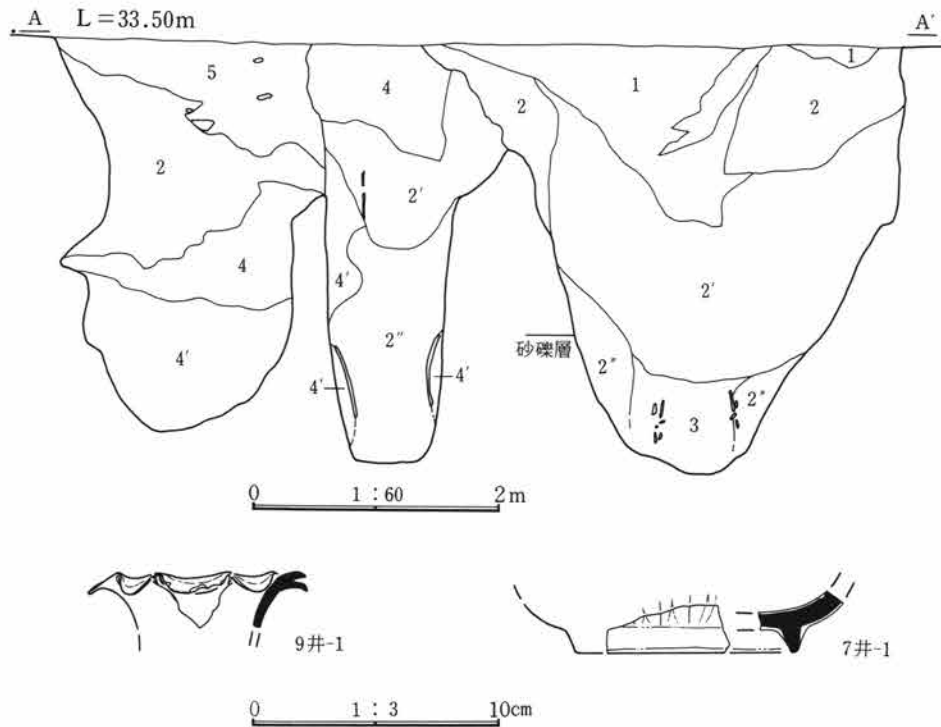
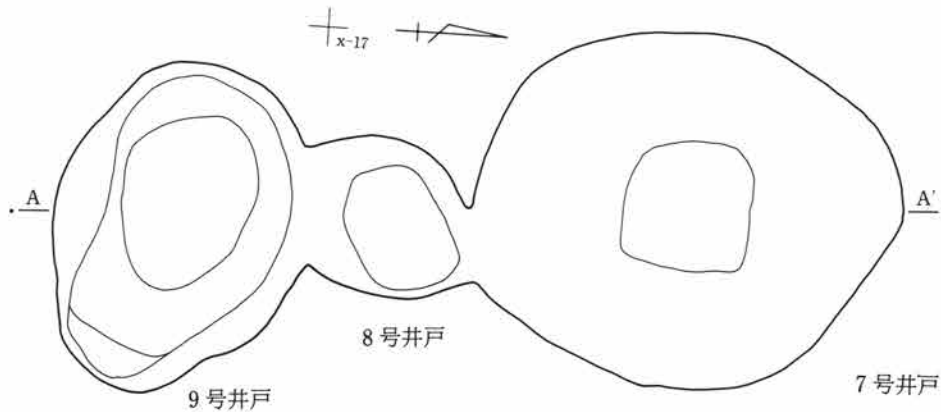
備考 9号(最古)→8号→7号の順で重複。7号井戸には底部に曲物状の井戸枠の痕跡あり。

OT-8号井戸 (第221図 PL-33)

位置 F区x-16・17グリッド

規模 (長軸×短軸) 上面1.38m×0.94m

下面1.04m×0.74m 深さ 3.30m



OT-7・8・9号井戸

土層説明

- 1 暗灰褐色土層 シルト質土に黄褐色土層が混入。1'に礫の混入多い。
- 2 暗黄褐色土層 暗褐色土とシルト質土の混合土層。2'はシルト質土がブロック状である。2''はシルト質土が少なく砂礫が混じる。
- 3 暗褐色土層 有機質土を含んだ弱粘性土層。
- 4 灰褐色土層 シルト質土に褐色土が混入。4'では砂を混入する。
- 5 褐色土層 シルト質土に小礫を多量に含む。

第221図 OT-7・8・9号井戸および出土遺物

OT-11号井戸 (第222図 PL-33・46)

位置 F区x・y-15・16グリッド

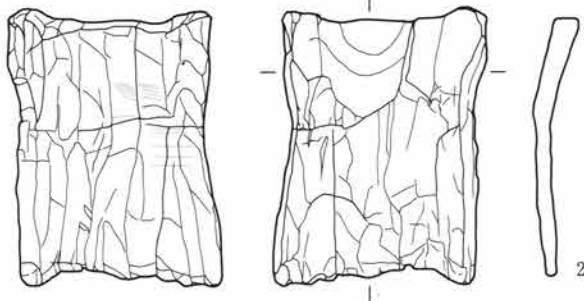
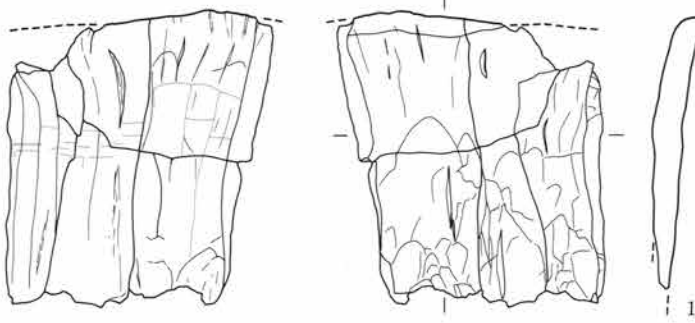
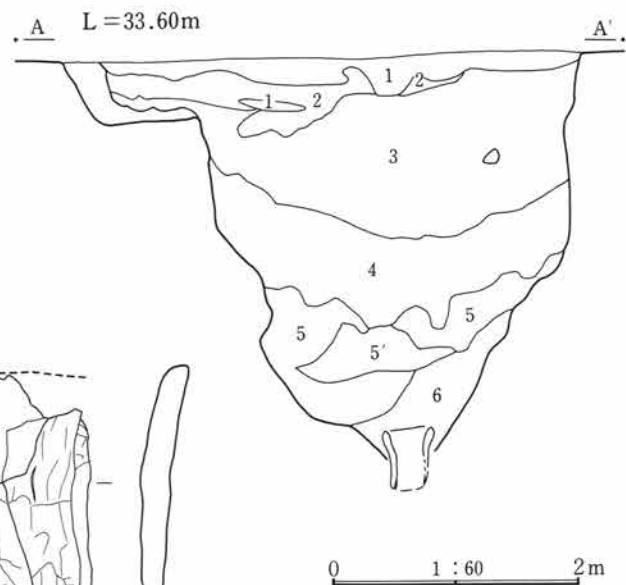
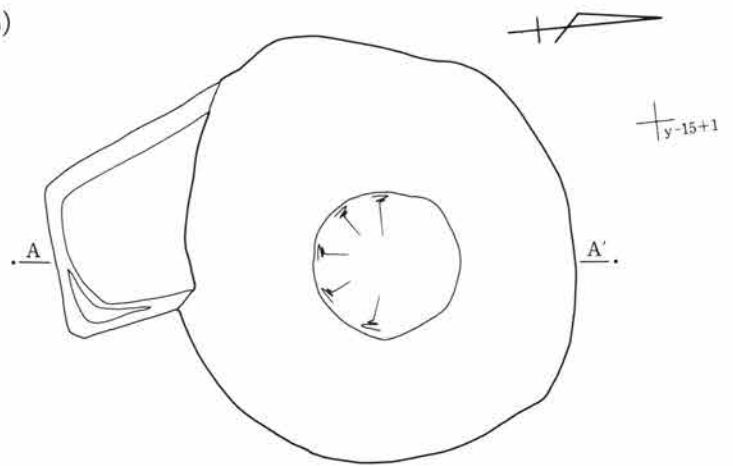
規模(長軸×短軸) 上面4.14m×3.32m

(一次底面) 下面1.18m×1.16m

深さ [2.96m]

内部施設 底面を一段掘り下げて木製臼を埋設している。臼は底部を欠きほぼ完存だったと思われるが、脆弱で調査時に破損してしまった。その他には井戸枠の痕跡はなく、底部のみの施設である。

備考 テラス状の施設と重複している。断面より本井戸が後出すと思われるが、同時存在していた可能性もある。



0 1 : 10 50cm

OT-11号井戸土層説明

- 1 褐色土層 しまりの強い弱粘性土で、細礫、シルト質土ブロックを含む。
- 2 暗褐色土層 1層に近く、カーボン粒を混入する。
- 3 暗黄褐色土層 シルト質土の多い弱粘性土層で、細礫が混じる。
- 4 暗褐色土層 粘性土中にシルト質土をブロック状に含む。
- 5 灰褐色土層 粘性の強いシルト質土で、下層は青色味をおびる。5'では4層土の混入多い。
- 6 灰褐色土層 灰色シルト、砂、黄褐色土の混合土層。

第222図 OT-11号井戸および出土遺物

OT-12号井戸 (第223図 P L-34)

位置 G区Y-16・17 H区a-16・17グリッド

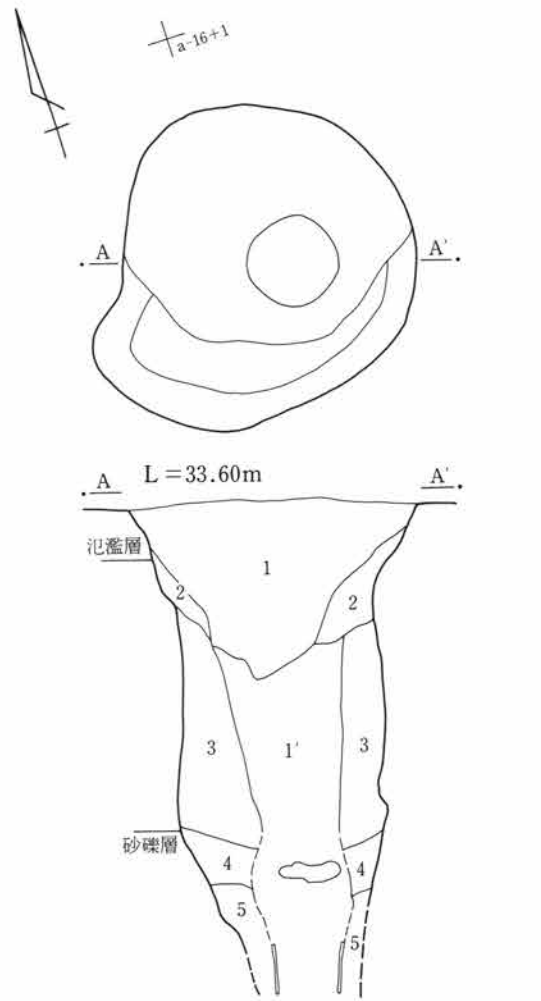
規模 (長軸×短軸) 上面2.74m×-

深さ [3.90m]

内部施設 砂礫層を掘り込んだ底面に径約50cm、高さ約40cmの曲物を埋設してあった。曲物は遺存状態が悪く調査中に破損してしまっただが、留め具等は残存していないようで、転用品と考えられる。壁面は粘性土中位付近まで固めてあるが、井戸枠の残片等は出土していない。

遺物の出土状態 下層から曲物底部破片が2個体以上出土している。井戸枠の曲物に伴うものかは確認できなかった。また、破損した曲物側板の破片を図示した。

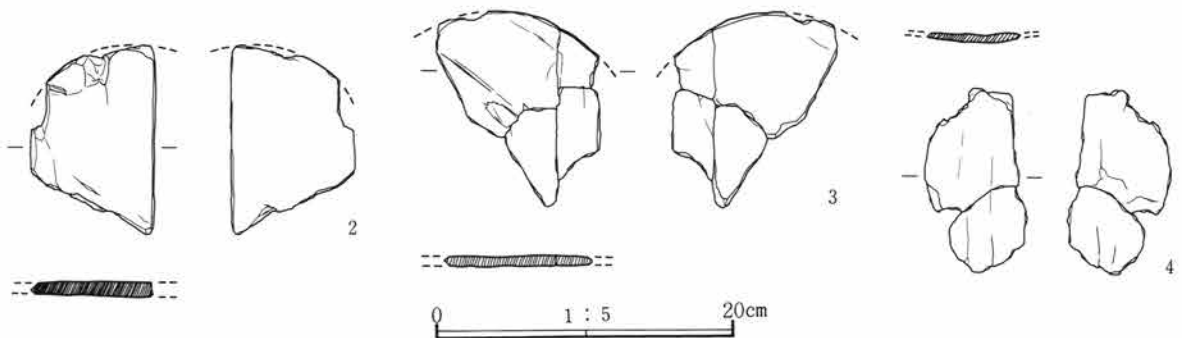
備考 上面は若干崩落しているが、遺存状態は比較的良い。砂礫層内は重機によって周辺から削り取ったため、底面は明瞭でない。



OT-12号井戸土層説明

- 1 暗褐色土層 粒子の細かな、しまりの強い層で、2~5cmの円礫を含む。1'は細礫、カーボン粒のまじる粘性土で、下層ほどしまり欠く。
- 2 暗褐色土層 地山のシルト質土を不均等に含んだ層で、軽石の混入やや多い。
- 3 暗灰褐色土層 灰色シルト質土や黒色粘性土等を不規則な版築状に突き固めた壁面補強の層。
- 4 褐色土層 3と同様の層で、ブロック状のシルト質土中心。
- 5 黒褐色土層 混入物の少ない腐植土状の粘性土層である。

0 1 : 60 2m



第223図 OT-12号井戸および出土遺物

OT-10号井戸 (第224図 PL-33)

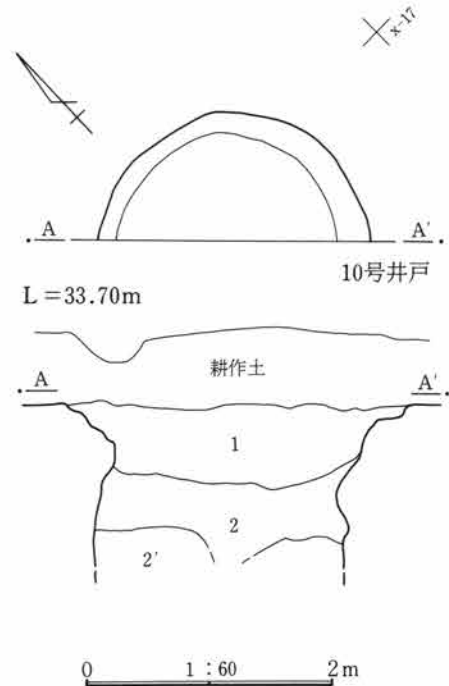
位置 F区w-16・17グリッド 調査区の隅にあり、  
完掘できなかった。

規模 (長軸×短軸) 上面2.18m×-

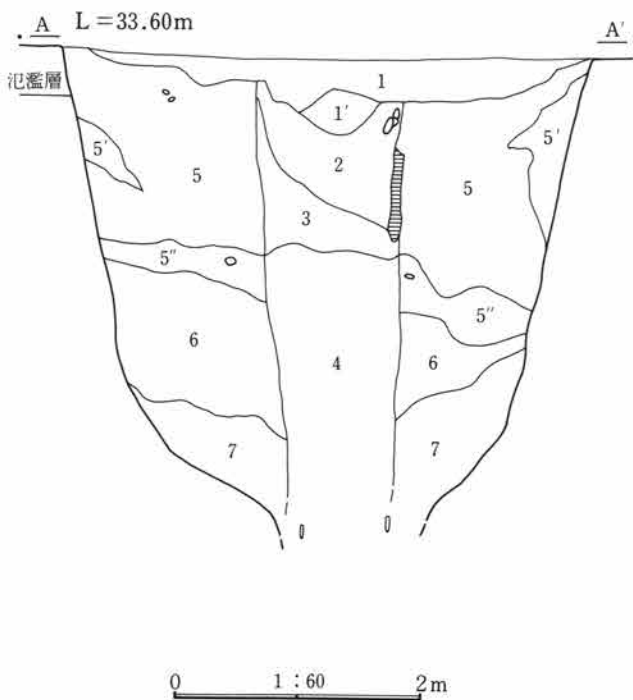
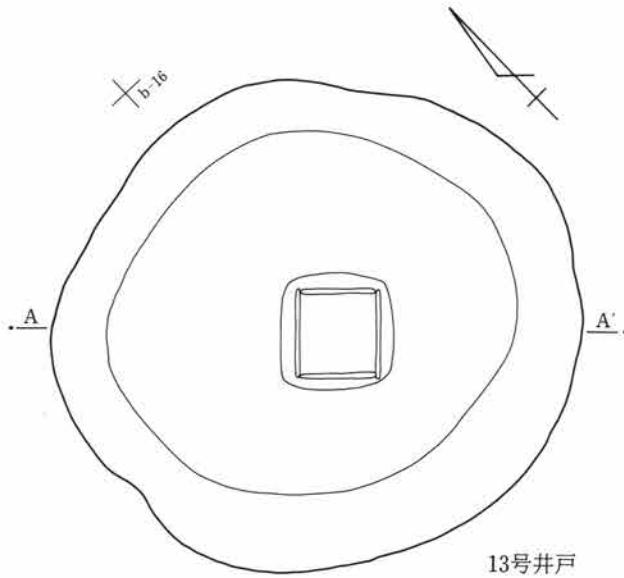
深さ [1.10m]

OT-10号井戸説明

- 1 暗褐色土層 粒子の細かな弱粘性土に雑多な混入物を含む。
- 2 暗黄褐色土層 粘性土でシルト質土や円礫を含む。2'ではしまりなく混入物少ない。



第224図 OT-10号井戸



OT-13号井戸土層説明

- 1 暗黄褐色土層 弱粘性土に小円礫が混じる。カーボン粒多い。1'は混入物を含まない粘性土ブロック。
- 2 灰黄色土層 底面付近の地山に見られるシルト質土層で礫の混入多い。
- 3 暗褐色土層 混入物の少ない粘性土層。
- 4 暗褐色土層 ややしまり欠く粘性土層 1cm大のシルト質土ブロックを霜降状に混入する。
- 5 暗黄褐色土層 ややしまりの強い非粘性土層で、不規則な版築状になっている。5'は混入物の緩んだ壁。5''は粘性あり。
- 6 暗褐色土層 4に近い。しまり強く、5~10cmの軽石が混じる。
- 7 暗灰褐色土層 中央に向かって傾斜する版築状。大粒のシルト質土ブロックを含む。

第225図 OT-13号井戸

OT-13号井戸 (第225・226図 PL-34・46)

位置 G区a・b-16・17グリッド

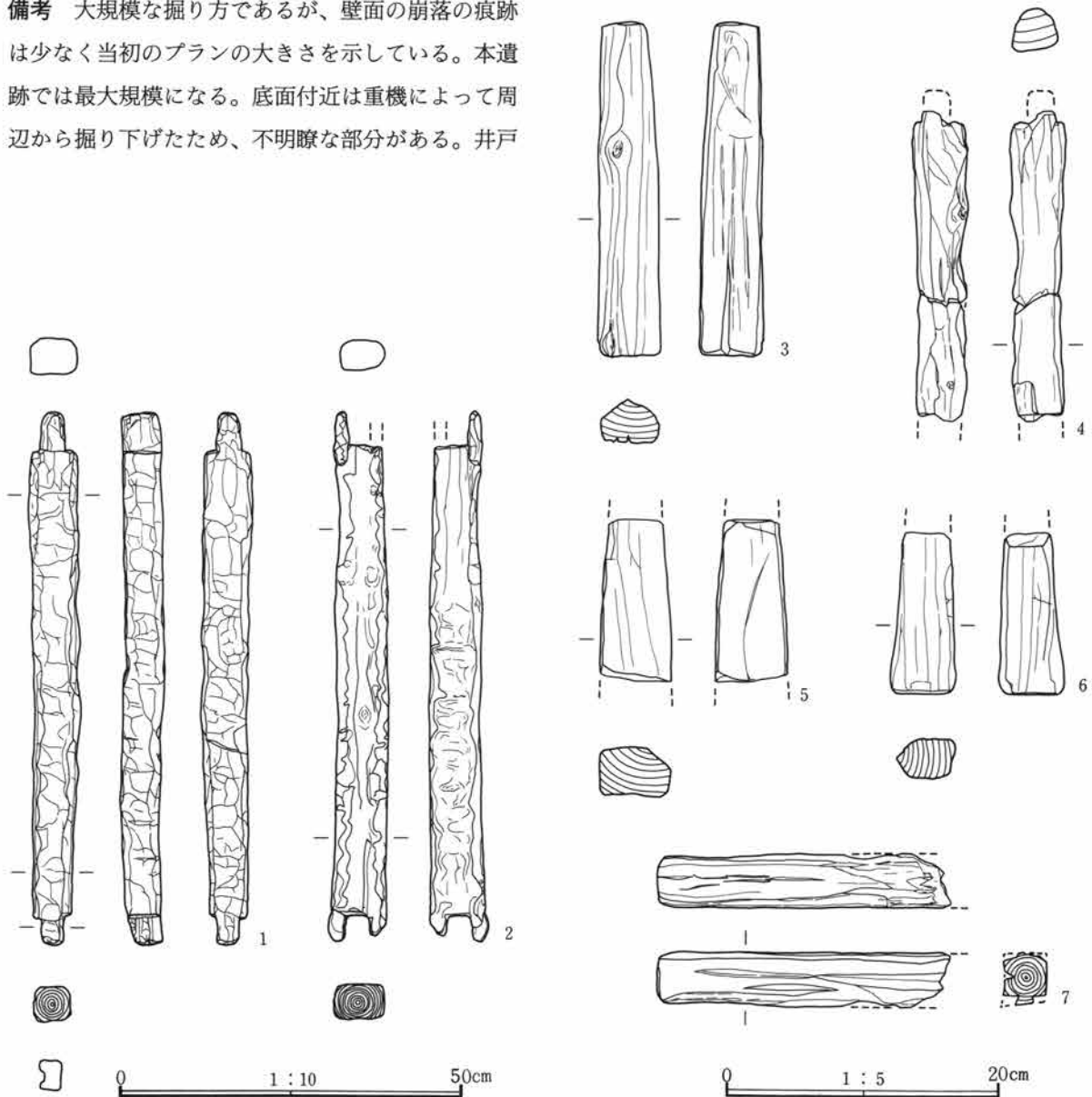
規模 (長軸×短軸) 上面4.24m×3.84m

深さ [3.70m]

**内部施設** 上面から下面まで円形に掘り込んであるが、底面付近のみ方形の掘り込みとなり、壁面には枝や竹材を縦位にならべ、1辺65cmの井戸枠を正方形に据えて枝等をおさえていた。径80cm程の井戸本体の痕跡が上面まで残り、周囲に不規則な版築状の裏込めが見られたが、井戸枠の痕跡は底面付近のみであった。

**備考** 大規模な掘り方であるが、壁面の崩落の痕跡は少なく当初のプランの大きさを示している。本遺跡では最大規模になる。底面付近は重機によって周辺から掘り下げたため、不明瞭な部分がある。井戸

枠は調査時に一部を破損してしまった。凸形と凹形のホゾを組み合わせたものである。遺物の出土はなかった。



第226図 OT-13号井戸出土遺物

OT-14号井戸 (第227図 PL-34)

位置 G区c・d-15・16グリッド

規模(長軸×短軸) 上面2.54m×2.00m  
下面0.86m×0.54m

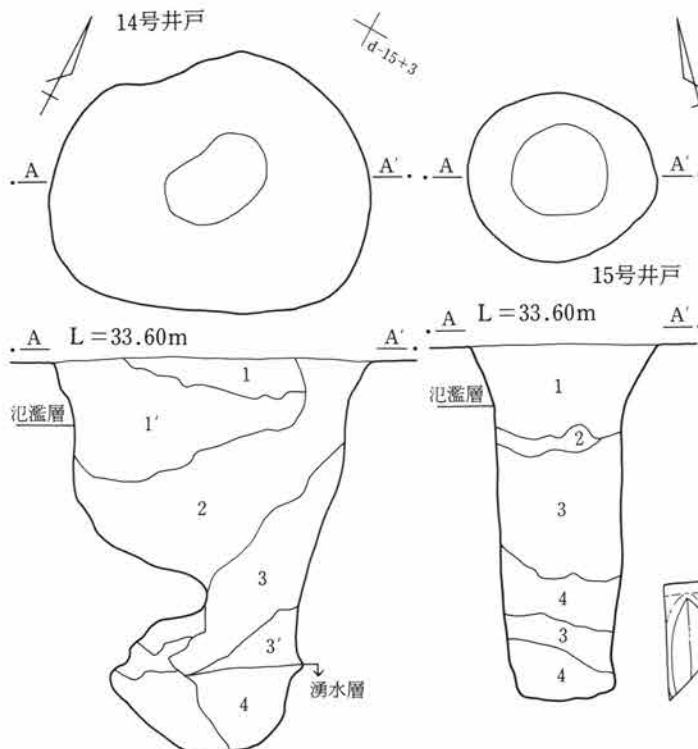
深さ 3.10m

備考 底面に対し中位以上がそれている。1層は重複する土坑状の施設の可能性がある。下層は湧水による壁の崩落の痕跡があり、調査中の崩落も多かった。埋没土は水平堆積していた。内部施設の痕跡はなく遺物の出土もなかった。

OT-15号井戸 (第221図 PL-34)

位置 G区c-16・17グリッド

規模(長軸×短軸) 上面1.50m×1.34m  
下面0.76m×0.72m



OT-14号井戸土層説明

- 1 暗黄褐色土層 地山の暗褐色土にシルト質土を小ブロック状に混入する。1'はシルト質土を上層ほど多く含んでいる。
- 2 暗褐色土層 粒子の細かな弱粘性土層。下層ほどシルト質土ブロックが大粒。
- 3 暗黄褐色土層 1~3cm大のシルト質土をブロック状に含む粘性土層。3'はラミナ状になっている。
- 4 暗褐色土層 灰黒色粘性土が目立つ。ラミナ状の堆積土層。

OT-15号井戸土層説明

- 1 暗黄褐色土層 粒子の細かなしまり強い層。黄色味の強いシルト質土小ブロックの混入やや多い。
- 2 暗褐色土層 地山シルト質土の流れ込土。
- 3 暗褐色土層 すき間の多い暗褐色土粘性土。5cm大の円礫の混入多い。
- 4 暗黄褐色土層 3土中に黄褐色シルト質土を霜降状に含む。

0 1:60 2m

深さ 2.82m

備考 遺存状態の良い井戸で、開口部は漏斗状に開いている。内部施設の痕跡はない。舶載青磁片(1/3で図示)を埋没土内から出土している。

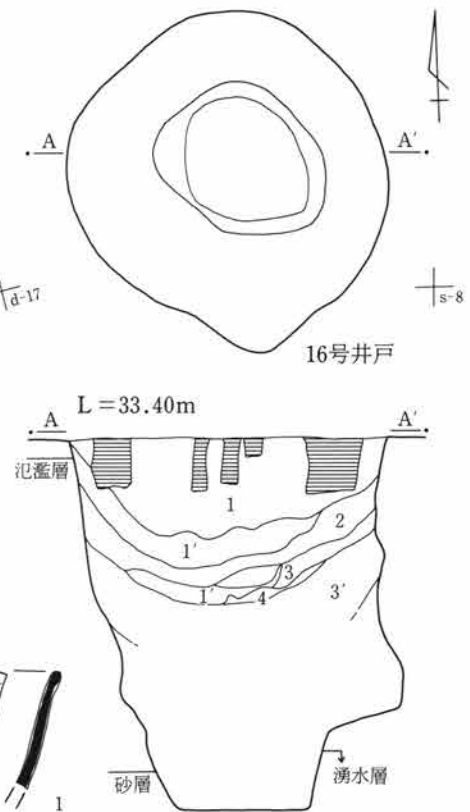
OT-16号井戸 (第227図 PL-34)

位置 G区r-7・8グリッド

規模(長軸×短軸) 上面2.72m×2.54m  
下面1.16m×0.82m

深さ 2.94m

備考 調査中に壁の崩落があり、断面観察は十分にできなかった。内部施設の痕跡はなく、遺物の出土もなかった。



OT-16号井戸土層説明

- 1 暗褐色土層 粒子の細かなしまり強い層。シルト質土、カーボン粒を不均等に含む。1'はしまり欠く灰色味おびる粘性土まじる。
- 2 暗黄褐色土層 灰色味強い粘性土主体。しまり欠く。シルトブロック含む。
- 3 黒褐色土層 黒色灰、シルト質土小ブロックの混合土層。焼土まじる。3'は灰の混入少ない。
- 4 黒色灰層 灰のほぼ純層。

※ 底面付近は黒褐色粘性土であった。

第227図 OT-14・15・16号井戸および出土遺物



OT-17号井戸 (第228図 PL-34・46)

位置 G区s・t-7・8グリッド

規模(長軸×短軸) 上面2.66m×2.32m

下面1.02m×0.98m

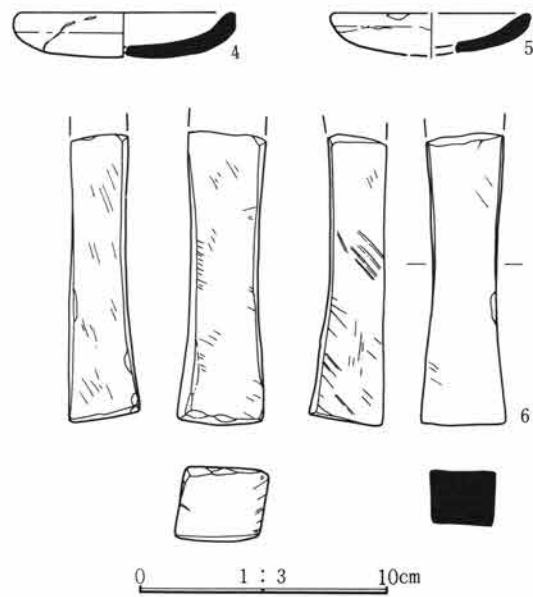
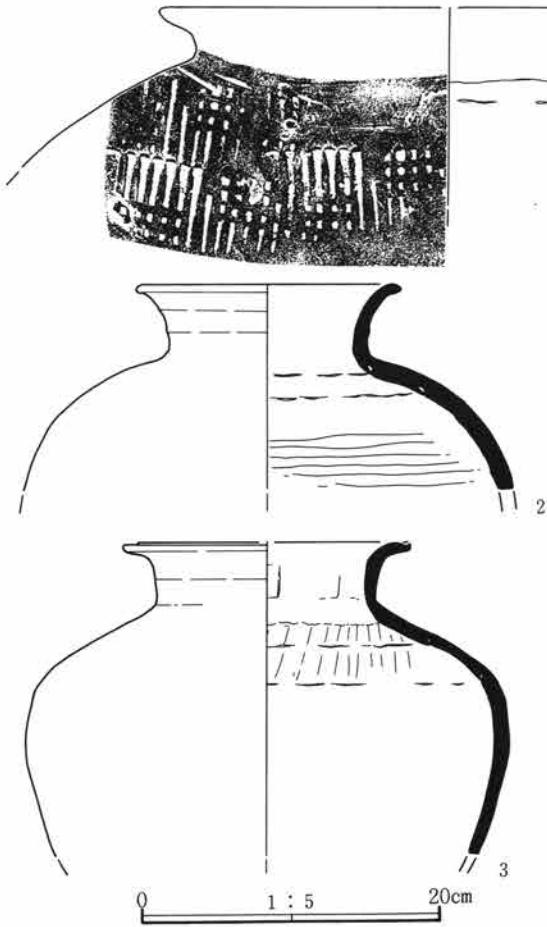
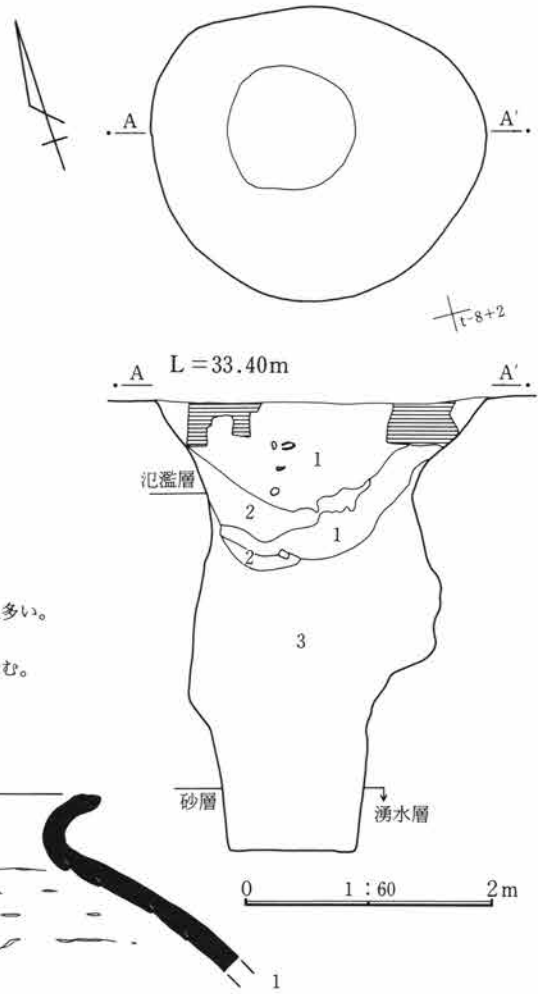
深さ 3.54m

遺物の出土状態 上層から礫の出土が極めて多く総数約120点になる。図示した以外にも常滑の甕破片22点を上面から出土している。

備考 中層以下は人為的な埋め戻しを行っている。中位の壁崩落は調査中のもの。内部施設の痕跡はなかった。

OT-17号井戸土層説明

- 1 暗褐色土層 粒子細かな弱粘性土層。上層には砂粒の混入多い。
- 2 暗灰褐色土層 粘性土を多量に含むし強い土層。
- 3 暗黄褐色土層 1土にブロック状のシルト質土を多量に含む。



第228図 OT-17号井戸および出土遺物

OT-18号井戸 (第229図 PL-34)

位置 G区u-7・8グリッド

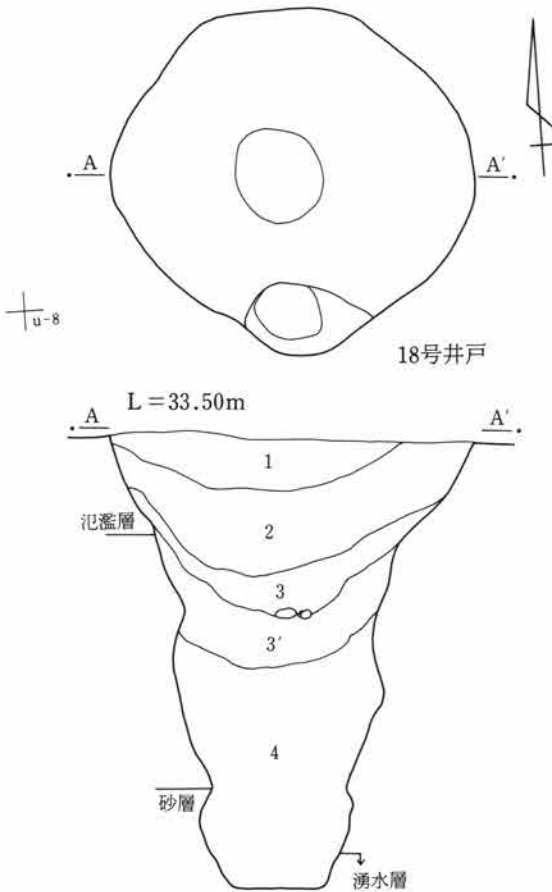
規模(長軸×短軸) 上面2.90m×2.72m  
 下面0.76m×0.68m

深さ 3.54m

内部施設

遺物の出土状態 上層から中層にかけて礫の出土が多い。中世焼締陶器鉢の破片を出土している。

備考 開口部南側に水を汲み上げの痕跡の窪みあり。中層に長さ1m、径3cmの垂直な空洞あり。井戸埋め戻し時に行った井戸神信仰による竹筒埋設の痕跡と思われる。内部施設の痕跡はなかった。



OT-18号井戸土層説明

- 1 暗褐色土層 灰色味をおびたシルト質土小ブロックを含むしまり強い層。西側に焼土多い。
  - 2 黒褐色土層 10cm大のシルト質土ブロックのまじる弱粘性土層。
  - 3 暗黄褐色土層 しまりの強い粘性土層。黄色味の強いシルト質土を混入。3'はシルト質土多い。
  - 4 黄褐色土層 ブロック状のシルト質土中心。
- ※ 底面付近は青色味をおびた砂質土になる。

OT-19号井戸 (第229図 PL-34)

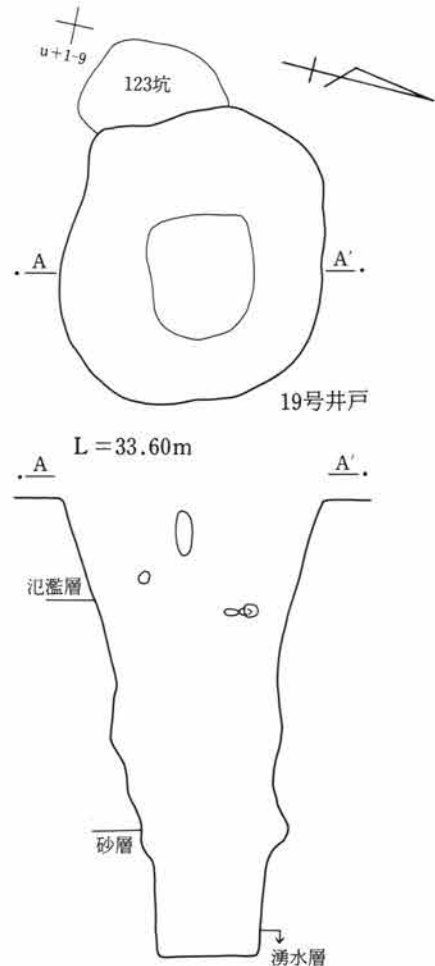
位置 G区u-8グリッド

重複 123号土坑  
 規模(長軸×短軸) 上面2.48m×2.10m  
 下面0.98m×0.82m

深さ 3.62m

遺物の出土状態 上層から多量の礫に混じって円筒埴輪片が6点、2個体以上を出土している。底部破片が半数で、大破片が混じっている。

備考 中位の壁が若干崩落しているが、依存状態は比較的良い。内部施設の痕跡はなかった。



OT-19号井戸土層説明

上層はシルト質土ブロック混じりの暗褐色土。中層は灰色味をおびた粘性土。下層は砂と粘性土が互層状に堆積し底面付近は砂が多い。

0 1:60 2m

第229図 OT-18・19号井戸

OT-20号井戸 (第230図 PL-34)

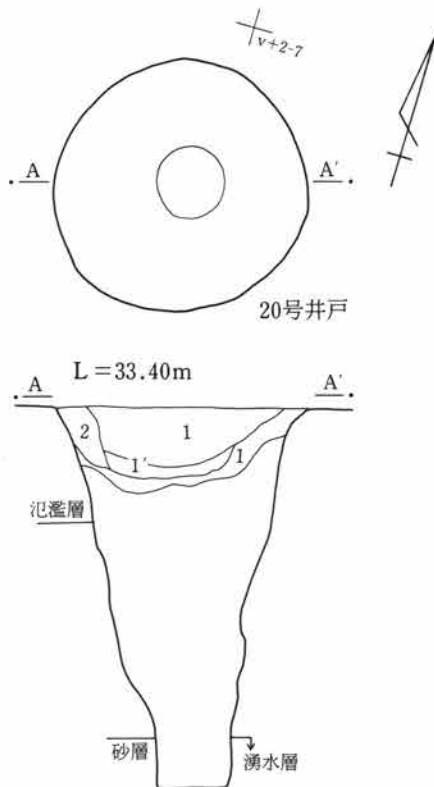
位置 G区v-7グリッド

規模 (長軸×短軸) 上面2.04m×1.94m  
下面0.58m×0.54m

深さ 3.00m

遺物の出土状態 土師器小破片に混じって、中世軟質陶器小破片を中層より出土している。

備考 内部施設の痕跡はなかった。



OT-20号井戸土層説明

- 1 暗褐色土層 粒子の細かな弱粘性土で1'はシルト質土の混入多い。
  - 2 暗黄褐色土層 シルト質土ブロック主体の壁崩落土。
- ※ 中層は黄色みをおびたシルト質土ブロック多い。下層はしまりの強い粘性土で底面付近は砂層となる。

OT-21号井戸 (第230図 PL-34)

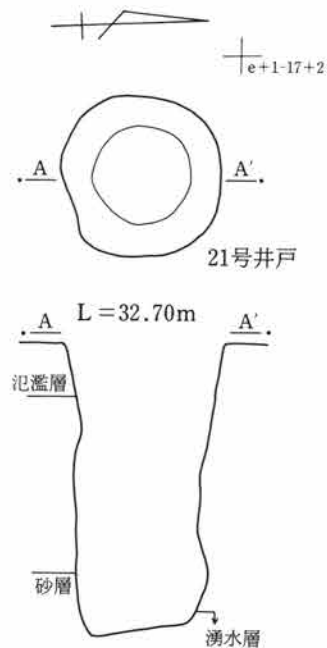
位置 H区e-17グリッド

規模 (長軸×短軸) 上面1.34m×1.32m  
下面0.78m×0.78m

深さ 2.26m

遺物の出土状態 須恵器壺破片に混じってロクロ不使用のカワラケ破片を中層より出土している。

備考 底面は砂礫層まで達しているが、南側に低く傾斜しており、掘り下げ途中で中止した可能性がある。内部施設の痕跡はなかった。



OT-21号井戸土層説明

上層はシルト質土ブロックまじりの暗褐色土。下層は黄色味の強いシルト質土中心の人為的な埋没土である。

0 1:60 2m

第230図 OT-20・21号井戸

AK-1号井戸 (第231図 PL-35)

位置 H区 j-21・22グリッド

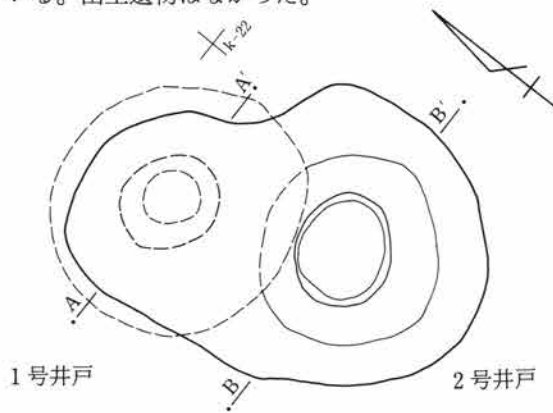
重複 2号井戸に後出か

規模 (長軸×短軸) 上面1.66m×-  
下面0.46m×0.42m

深さ 3.30m

内部施設 下層の周辺部版築状の部分は粘土質土で、井戸枠のあった可能性がある。

備考 筒型で幅広のずん胴の掘り方である。壁の崩れは少ないようで、掘り直しがあったものと考えている。出土遺物はなかった。



AK-2号井戸 (第231図 PL-35)

位置 H区 j・k-22グリッド

重複 1号井戸の後出か。

規模 (長軸×短軸) 上面2.32m×-  
下面0.76m×0.68m

深さ 2.60m

備考 下半部の壁崩落は掘り下げ完了直後のもので、底面以外は復元となった。上層埋没土は井戸掘削時の残土を埋め戻している。出土遺物はなかった。

AK-3号井戸 (第231図 PL-35・46)

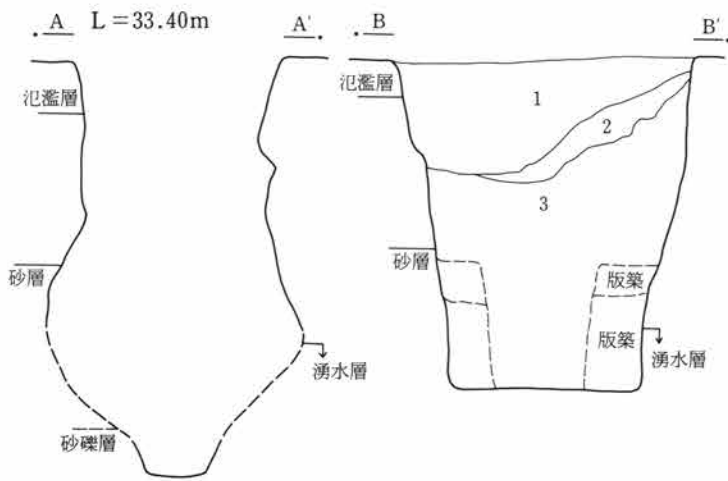
位置 H区 k-22グリッド

規模 (長軸×短軸) 上面2.02m×1.80m  
下面0.78m×0.76m

深さ 2.82m

遺物の出土状態 大型の完形土錘(1/3で図示)を埋没土内から出土している。

備考 中位の壁は調査中に崩落したものであるが、版築状であった。内部施設のあった可能性がある。



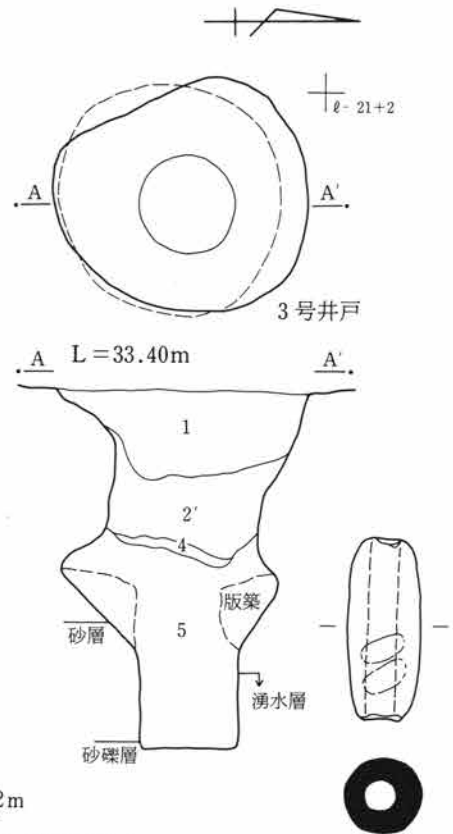
AK-1号井戸土層説明

上層はシルト質土ブロックのまじる暗褐色土で中層以下に砂礫の混入多い。

AK-2・3号井戸土層説明

- 1 暗褐色土層 シルト質土をブロック状に含む粘性土層。
- 2 暗黄褐色土層 礫まじりの砂層。2'はシルト質土を小ブロック状に多量に含む。
- 3 暗灰褐色土層 シルト質土小ブロックを含む粘性土層。
- 4 暗黄褐色土層 シルト質土中心の粘性土層。混入物少ない。
- 5 暗褐色土層 砂礫を多量に含む非粘性土。しまり欠く。2号井戸下層も同じ。

0 1:60 2m



第231図 AK-1・2・3号井戸および出土遺物

AK-4号井戸 (第232図 PL-35)

位置 H区 s・t-8グリッド

規模 (長軸×短軸) 上面2.60m×2.16m

下面1.36m×1.20m

深さ 2.80m

備考 壁の崩落が著しい。調査中の崩落もあったが、埋没時にかなり原型は損なっていたものと思われる。底面付近は砂の堆積があり、底面は明瞭にできなかった。内部施設の痕跡はなく、出土遺物もなかった。

AK-5号井戸 (第232図 PL-35)

位置 H区 t-5グリッド

規模 (長軸×短軸) 上面1.40m×1.38m

下面0.52m×0.46m

深さ 3.14m

備考 阿久津宮内遺跡の中で最も遺存状態の良い井戸であった。上面が僅かに開く筒型の断面形状が確認できる。内部施設の痕跡なく、出土遺物もなかった。

AK-6号井戸 (第232図 PL-35)

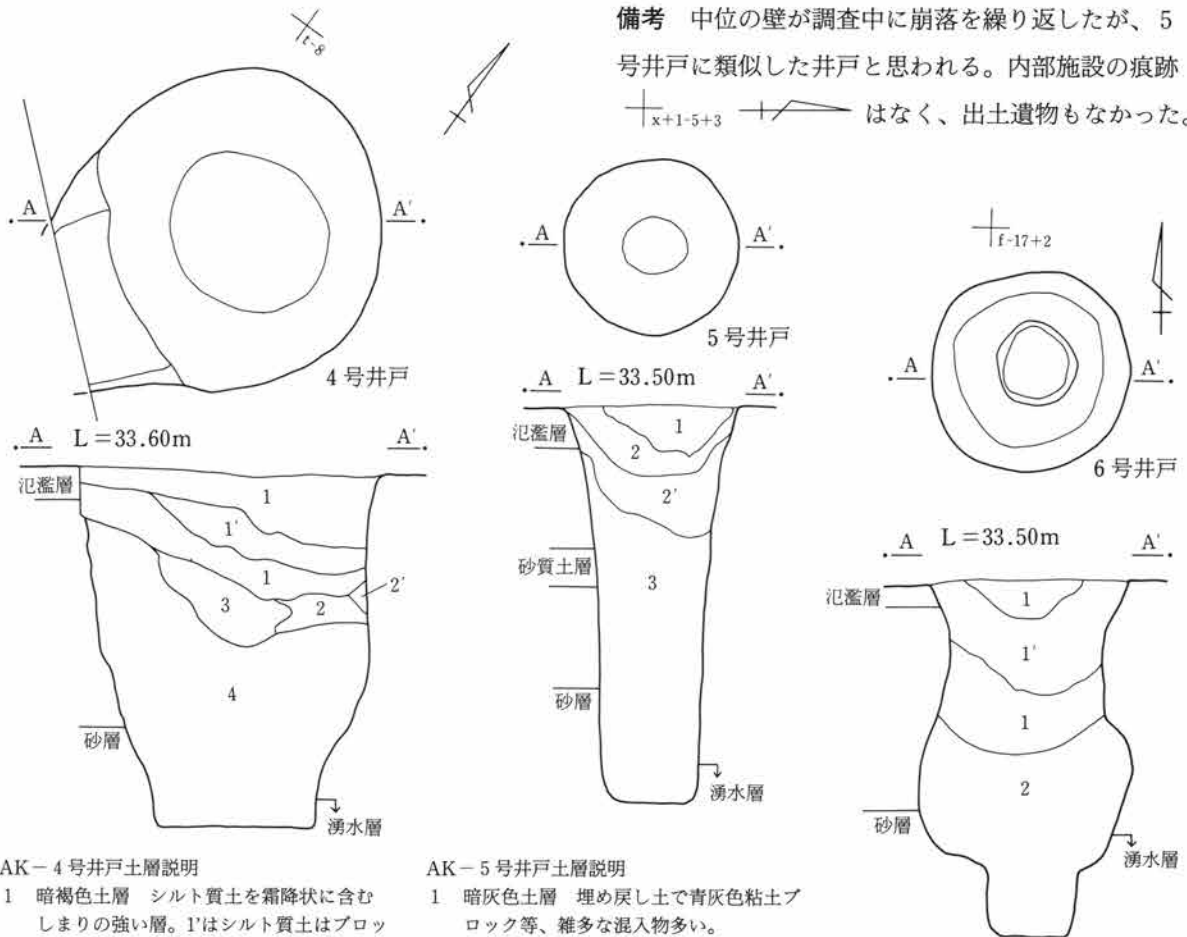
位置 I区 e・f-17グリッド

規模 (長軸×短軸) 上面1.64m×1.58m

下面0.56m×0.52m

深さ 2.82m

備考 中位の壁が調査中に崩落を繰り返したが、5号井戸に類似した井戸と思われる。内部施設の痕跡はなく、出土遺物もなかった。



AK-4号井戸土層説明

- 1 暗褐色土層 シルト質土を霜降状に含むしまりの強い層。1'はシルト質土はブロック状。
- 2 暗灰褐色 灰色シルト質土を多量に含む層。2'は黒色味強い。
- 3 暗黄褐色 ブロック状のシルト質土中心の土層。
- 4 暗褐色土層 ブロック状のシルト質土を含む層。
- ※ 底面付近は黒色の砂質土多い。

AK-5号井戸土層説明

- 1 暗灰色土層 埋め戻し土で青灰色粘土ブロック等、雑多な混入物多い。
- 2 暗褐色土層 ややしまり欠く粘性土層。シルト質土や粘土の小ブロックを不均等に含む。2'は混入物多い。
- 3 黒褐色土層 混入物を不均等に含んだ埋め戻し土。
- ※ 底面付近は黒色の砂質土の混入多い。

0 1:60 2m

AK-6号井戸土層説明

- 1 暗褐色土層 カーボン粒の混入の多いややしまり欠く土層。1cm大の軽石を含む。1'はシルト質土小ブロックを含む土層。
- 2 暗褐色土層 混入物の少ない粘性土層。

第232図 AK-4・5・6号井戸

AK-7号井戸 (第233図 PL-35)

位置 I区h-17・18グリッド

規模(長軸×短軸) 上面2.22m×2.04m  
下面0.54m×0.50m

深さ 3.00m

備考 中位下端の砂層から湧水があり、調査中に著しい壁の崩落があった。版築状の止水層がなければ使えない井戸のはずである。内部施設の痕跡はなく、出土遺物もなかった。

AK-8号井戸 (第233図 PL-35)

位置 I区j・k-21・22グリッド

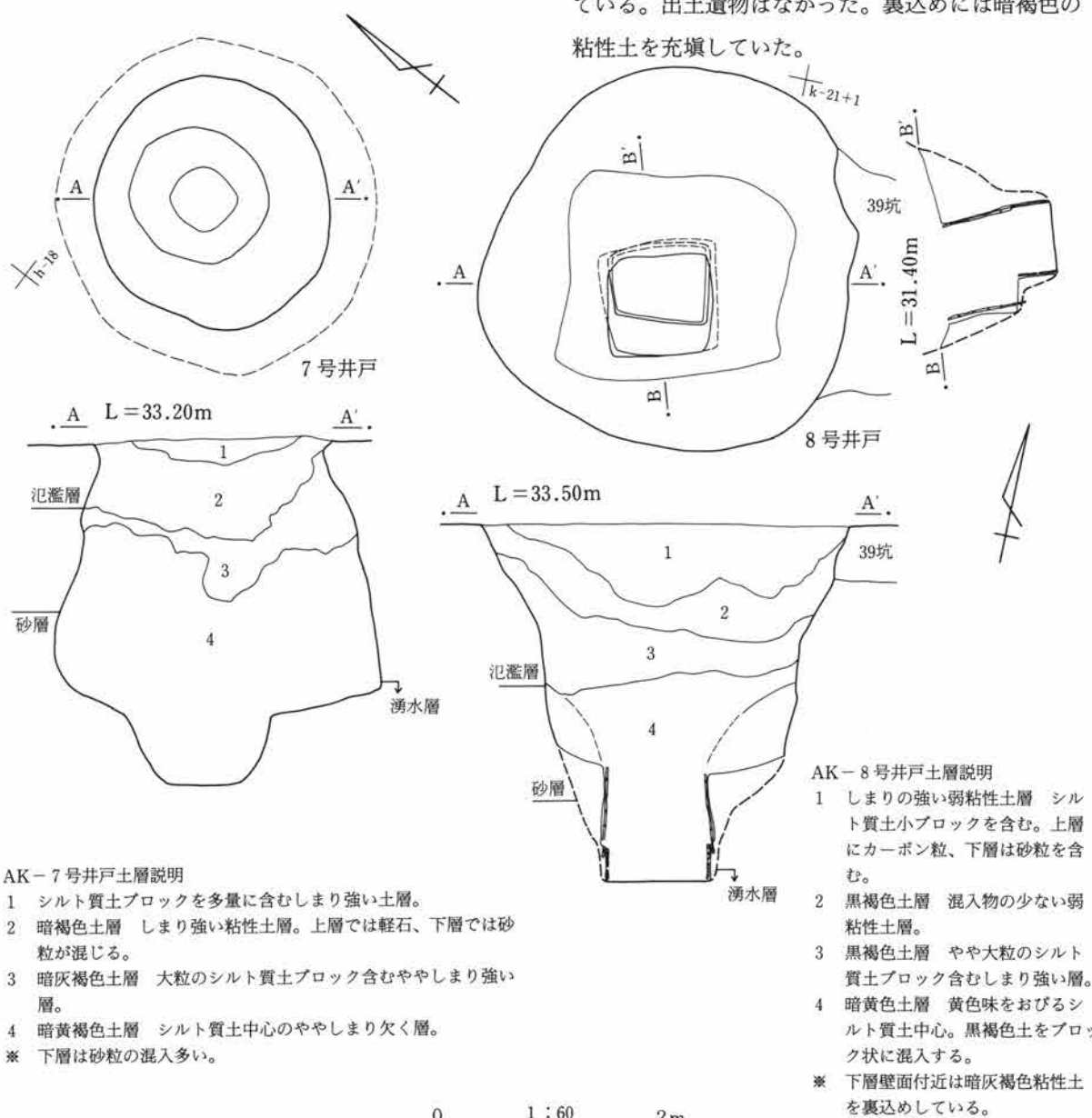
重複 39号土坑に後出する。

規模(長軸×短軸) 上面3.48m×3.36m  
下面0.92m×0.86m

深さ 3.10m

内部施設 中位に平面方形の掘り方が残り、下位には竹状の小枝を垂直に立て掛けた2段の井戸枠の痕跡が残っている。

備考 方形の掘り方プランは開口部にも痕跡を留めている。出土遺物はなかった。裏込めには暗褐色の粘性土を充填していた。



第233図 AK-7・8号井戸

AK-9号井戸 (第234図 PL-35)

位置 I区k-20グリッド

規模(長軸×短軸) 上面1.32m×1.22m  
下面0.52m×0.48m

深さ 2.28m

備考 埋没土は人為的に一気に埋め戻されている。  
内部施設の痕跡はなく、出土遺物もなかった。

備考 中位付近は調査中の崩落で一回り大きくなってしまった。最下層は地山と同じ砂層で底面は不明瞭であった。他の井戸と比べて浅く、この下にもう1段掘り込みのある可能性がある。内部施設の痕跡はなく、出土遺物もなかった。

AK-10号井戸 (第234図 PL-35)

位置 I区k・1-21グリッド

規模(長軸×短軸) 上面1.70m×1.66m  
下面1.00m×0.92m

深さ 2.40m

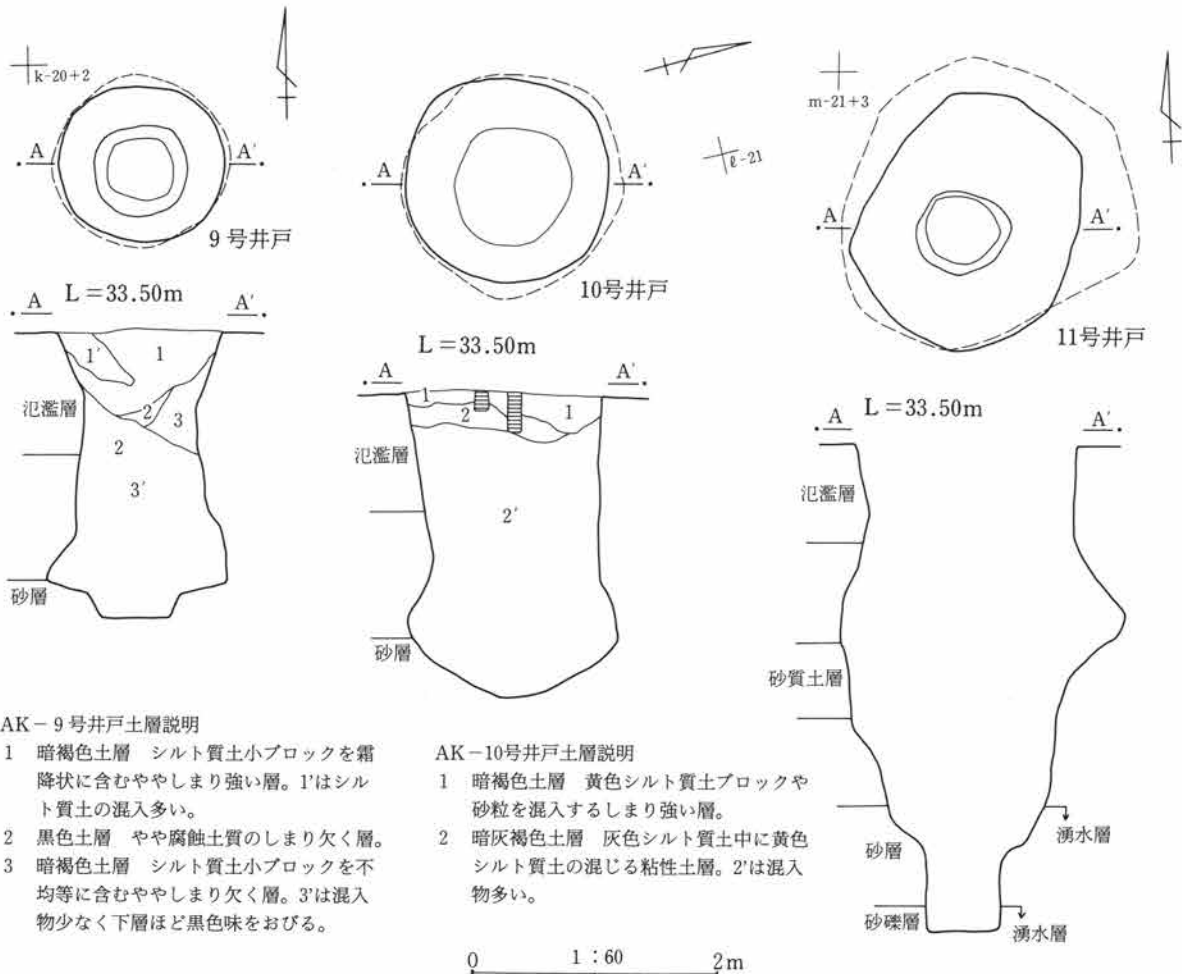
AK-11号井戸 (第234図 PL-35)

位置 I区m-21・22グリッド

規模(長軸×短軸) 上面2.06m×1.66m  
下面0.58m×0.44m

深さ 3.84m

備考 中位から壁の崩落の痕跡が見られたが、砂礫層まで掘り込んだ明瞭な底面まで確認できた。内部施設の痕跡はなく、出土遺物もなかった。



AK-9号井戸土層説明

- 1 暗褐色土層 シルト質土小ブロックを霜降状に含むややしまり強い層。1'はシルト質土の混入多い。
- 2 黒色土層 やや腐蝕土質のしまり欠く層。
- 3 暗褐色土層 シルト質土小ブロックを不均等に含むややしまり欠く層。3'は混入物少なく下層ほど黒色味をおびる。

AK-10号井戸土層説明

- 1 暗褐色土層 黄色シルト質土ブロックや砂粒を混入するしまり強い層。
- 2 暗灰褐色土層 灰色シルト質土中に黄色シルト質土の混じる粘性土層。2'は混入物多い。

第234図 AK-9・10・11号井戸

AK-12号井戸 (第235図 PL-35)

位置 I区1-21 m-20・21グリッド

規模(長軸×短軸) 上面1.48m×1.40m  
下面0.74m×0.70m

深さ 2.92m

備考 南側を中心に壁の崩落が著しく、原型はほとんど留めていない。底面は砂層の中にあったが、固く締まった地山で、確認しやすかった。内部施設の痕跡はなく、出土遺物もなかった。

AK-13号井戸 (第235図 PL-35)

位置 I区m-19・20グリッド

重複 3号溝に後出する。

規模(長軸×短軸) 上面1.70m×1.68m  
下面0.74m×0.70m

深さ 3.28m

備考 12号井戸同様に底面付近の地山が締まっており、中位付近の壁の崩落が著しいが、底面は明確に把握できた。

AK-14号井戸 (第235図 PL-35)

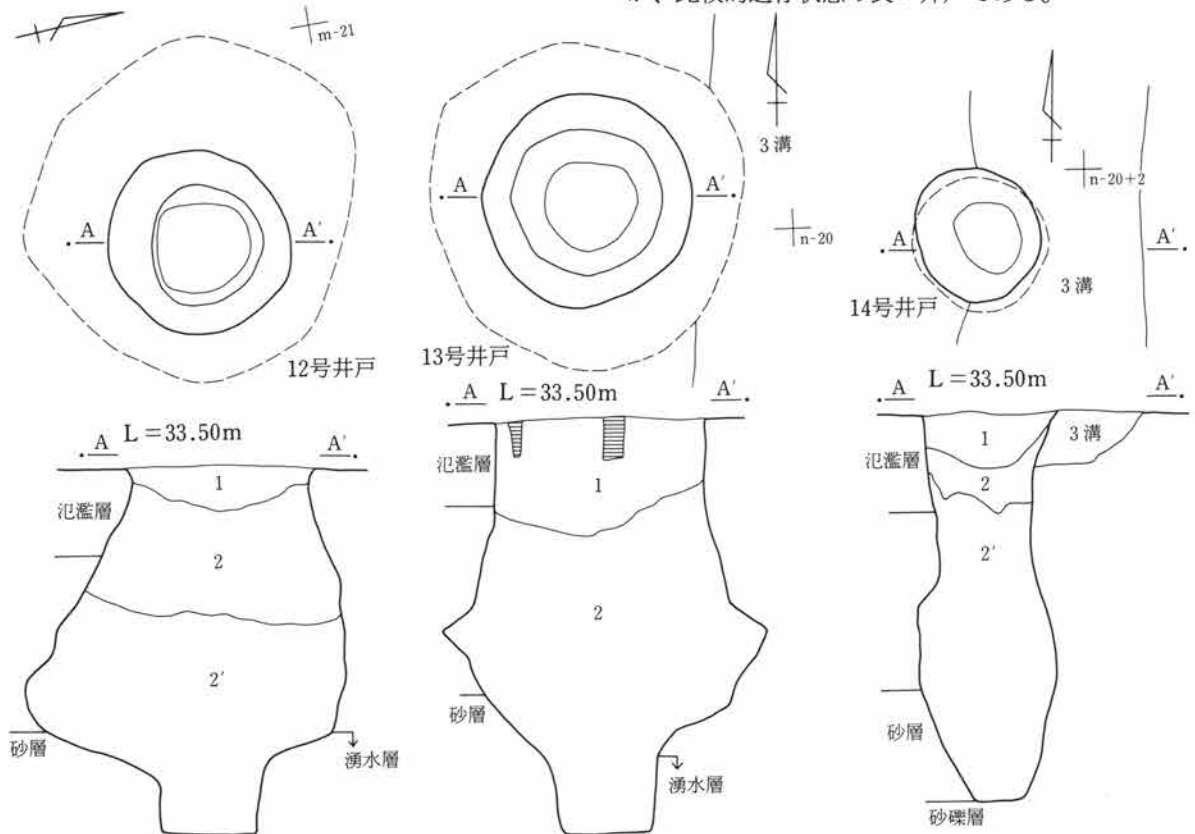
位置 I区m-20グリッド

重複 3号溝に後出する。

規模(長軸×短軸) 上面1.08m×0.96m  
下面0.60m×0.48m

深さ 3.06m

備考 中位から下位にかけて若干、壁の崩落があるが、比較的遺存状態の良い井戸である。



AK-12号井戸土層説明

- 1 暗褐色土層 しまり強い弱粘性土層。0.5～3cm大のパミスを含む。
  - 2 暗褐色土層 シルト質土ブロックを下層ほど多く含む。10～30cm大の礫がまじる。2'はカーボン粒の混入多い。
- ※ 下層は漸移的に砂粒の混入が多くなる。

AK-13号井戸土層説明

- 1 暗褐色土層 軽石を含むしまり強い層でカーボン粒を散見する。下層にはシルト質土の混入多い。
- 2 黒褐色土層 軽石の混入の少ない粘性土層でシルト質土の混入多い。下層ほどしまりなくなる。

AK-14号井戸土層説明

- 1 にぶい黄褐色土層 砂粒のまじる弱粘性土層。下層ほど砂粒の混入多い。中層は黒色味をおびる。
- 2 暗褐色土層 砂粒、暗褐色シルト質土の混土層。2'ではシルト質土が大粒のブロック状となり量も増える。

0 1:60 2m

第235図 AK-12・13・14号井戸



AK-15号井戸 (第236図 PL-35)

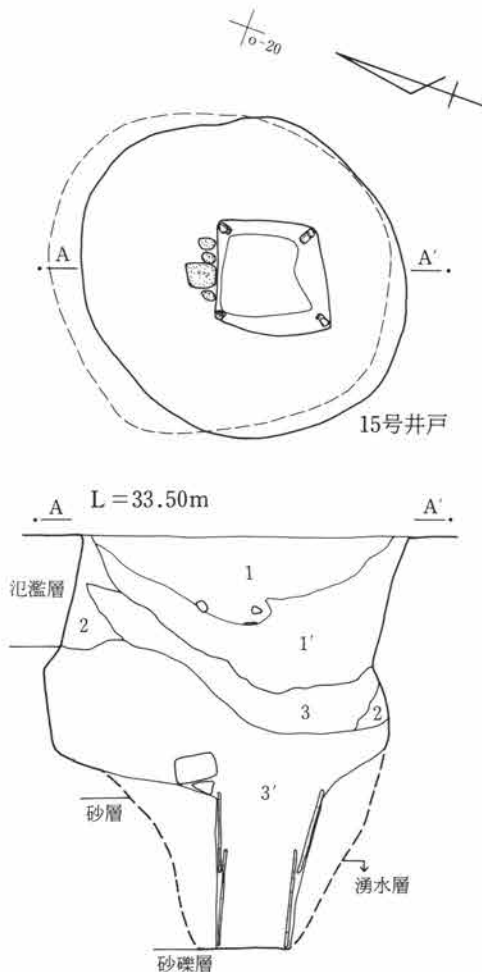
位置 I区n-19・20グリッド

規模 (長軸×短軸) 上面2.76m×2.40m  
 下面0.90m×0.86m

深さ 3.26m

内部施設 下層に竹等の小枝状の材を垂直に2段にならべた井戸枠の痕跡がみつまっている。4隅に杭を打って横木を据えたものと思われ、底面付近におちていた棒状品を確認しているが、取り上げ前に井戸が崩壊してしまった。粘性土で裏込めを行い、上面に礫を置いていた。

備考 南側を中心に壁の崩落の痕跡が顕著である。埋没土も崩落土がかなり含まれており、当初のプランよりかなり大きくなっている。



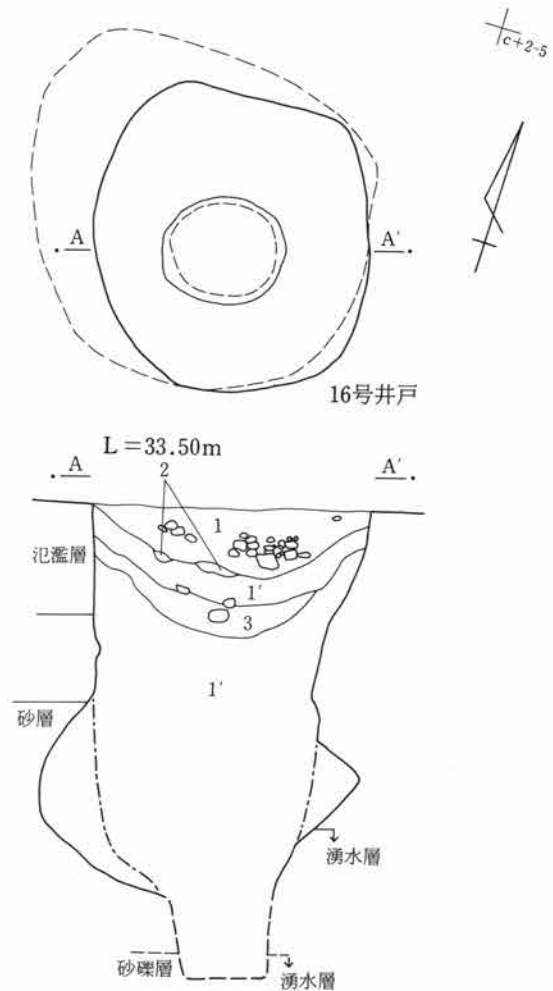
AK-16号井戸 (第236図 PL-35)

位置 J区b・c-5グリッド

規模 (長軸×短軸) 上面2.54m×2.30m  
 下面0.84m×0.72m

深さ 3.72m

備考 上面から礫の出土が顕著である。中位の壁崩落は調査時のものである。



AK-15号井戸土層説明

- 1 褐色土層 斑鉄のあるシルト質土をブロック状に混入。1'はカーボン粒、軽石等雑多な混入物多い。
- 2 暗灰褐色土層 シルト質土のほぼ純層で壁の崩落土層。
- 3 暗褐色土層 地山崩落土のシルト質土をブロック状に多量に含む層でカーボン粒が混じる。3'は砂質土を含むが粘性強い。

AK-16号井戸土層説明

- 1 暗褐色土層 礫以外には混入物の少ない土層で粘性強い。1'はシルト質土が混じる。
- 2 灰褐色土層 ブロック状のシルト質土。
- 3 暗黄褐色土層 黄色味をおびたシルト質土をブロック状に含む。

0 1:60 2m

第236図 15・16号井戸

## 6 火葬土坑

大館馬場遺跡のF区Xグリッドを中心に、埋没土の中に多量の炭化物を含み、煙道状の施設のある小型の土坑を6基調査した。長軸方向の長さが1m前後と50cmの二通りで、深さ50cm未満であった。掘り下げて行くうちに焼土粒にまじって人骨らしい焼骨片が検出され、火葬を行った施設と推定した。これらの骨片は鑑定の結果、すべて人骨と判明している(第IV章、396頁参照)。また、煙道と考えた張り出し部が、土坑本体の方形部分より深いものがあり、送風口的な施設であると判明した。形状はそれぞれ異なっていたが、この付近のみに見られた遺構であり、遺構の間隔が接近したものがなく、比較的短期間に火葬の場として使われた一画と推定した。

骨片は全て細かく、部位は雑多で、遺体を動かしながら火葬しているようで、小型の施設であっても、成人遺体の火葬が可能であったようだ。

遺物が皆無であったため年代を類推する根拠には欠ける。遺構との関連では、土坑群に後出することと、井戸群の密集地点にありこれらとは同時存在しないであろうことが類推できた。井戸に後出するものが1基ある。

藤岡市白石大御堂遺跡で10基の類例が報告されており、室町時代の遺構と想定している。

### OT-1号火葬土坑 (第238図 P L-47)

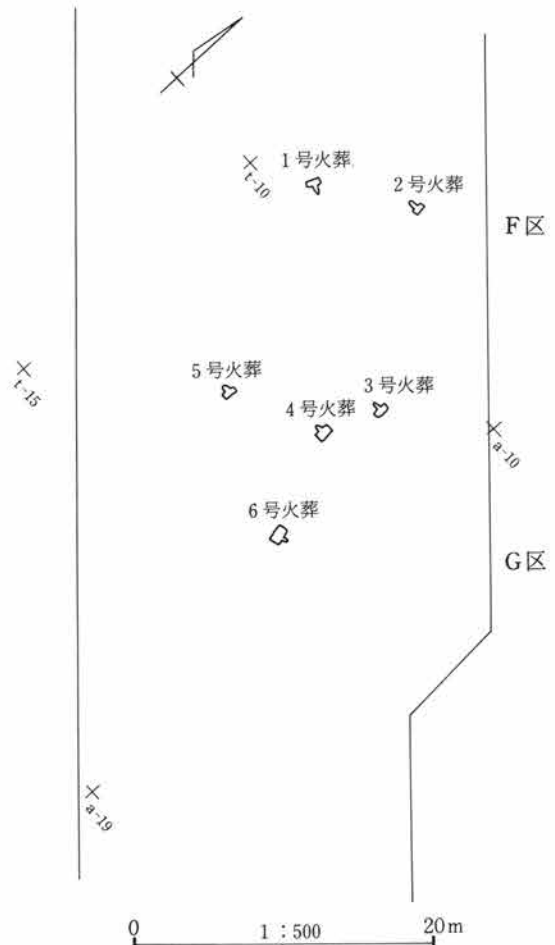
位置 F区 t・u-9・10グリッド

主軸方向 N-95°-E

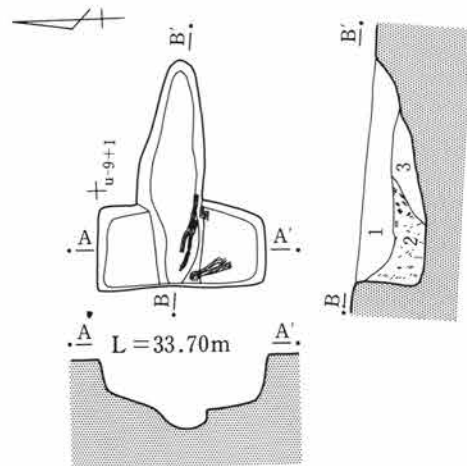
方形部分の規模 89cm×44cm 深さ41cm

送風口の長さ 76cm

備考 送風口が東側へきわめて長く張り出している。方形部分に向かってレベルが下がり、直下では平坦になっている。炭化材の出土が多く、底面付近では大きなものがめだった。出土した骨片は脆く細かいうえに少なく、部位のわかるものはなかった。

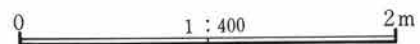


第237図 火葬土坑配置図



#### 1号火葬土坑土層説明

- 1 暗褐色土層。しまりの強い非粘性土で、カーボン粒を少量含む。
- 2 黒色土層。ほとんど炭化物からなる層で上層に骨片を含む。
- 3 暗褐色土層。しまりのない非粘性土で、焼土粒の混入やや多い。



第238図 OT-1号火葬土坑

OT-2号火葬土坑 (第239図 PL-47)

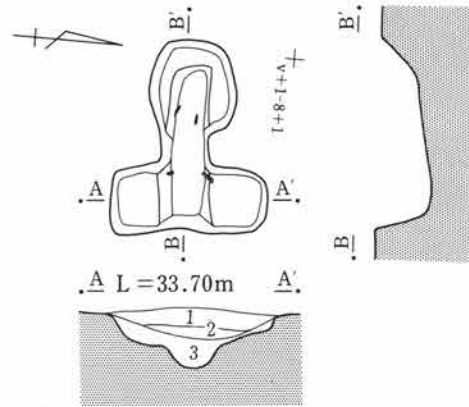
位置 F区v-8・9グリッド

主軸方向 N-93°-W

方形部分の規模 85cm×35cm 深さ30cm

通風口の長さ 52cm 64cm

備考 通風口の基部に円形の浅い掘り込みがあるが、形状は1号火葬土坑と類似している。通風口と土坑中央が低くなっており、この部分に炭化物は集中している。骨片の出土量は少なかった。



2号火葬土坑土戸説明

- 1 暗黄褐色土層。シルト質土を小ブロック状に含んだ層。カーボン粒を少量含む。
- 2 暗褐色土層。非粘性土中にカーボン粒を少量含む。
- 3 黒色土層。カーボンを主体とした層で、骨片を含む。

OT-3号火葬土坑 (第239図 PL-47)

位置 F区x-11グリッド

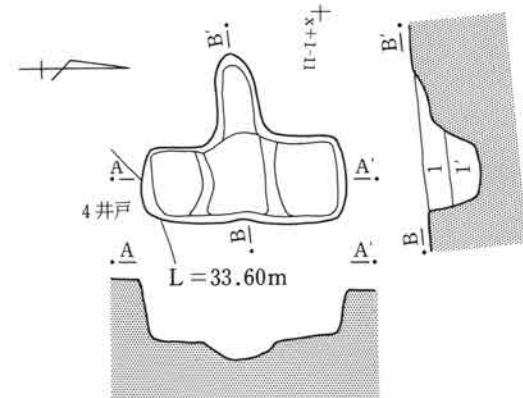
主軸方向 N-91°-W

方形部分の規模 51cm×25cm 深さ46cm

通風口の長さ 16cm

重複 4号井戸に後出

備考 通風口は浅く、カマドの煙道状である。炭化材の出土はやや少なく、底面付近のみの出土であった。骨片は極めて細かいうえに少なく、部位のわかるものはなかった。



3号火葬土坑土戸説明

- 1 暗黄褐色土層。非粘性土でシルト質土を小ブロック状に含む。炭化材を少量含む。1'では混入物少ないが、最下層に炭化材が含まれる。

OT-4号火葬土坑 (第239図 PL-47)

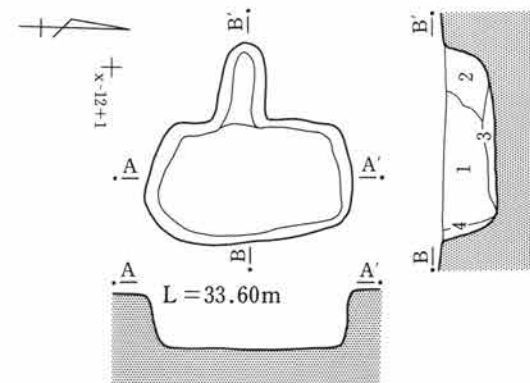
位置 F区x-12グリッド

主軸方向 N-88°-W

方形部分の規模 54cm×32cm 深さ32cm

通風口の長さ 20cm

備考 通風口部分が土坑部分から緩やかに立ち上がり、燃烧部分を高くする工夫は見られなかった。炭化物は少なかった。骨片の出土量は5号土坑に次いで多かった。



4号火葬土坑土戸説明

- 1 暗褐色土層。シルト質土やローム土をブロック状に含み、下層ほど大粒になる。カーボン粒を少量含む。再下層に骨片を含む。
- 2 黒褐色土層。混入物の少ない、しまりにやや欠ける層。
- 3 黒褐色土層。カーボン粒を主体に焼土粒を含む。ややしまりに欠ける層。
- 4 暗赤褐色土層。強い火熱を受けた壁面が崩落した層。

0 1 : 40 2m

第239図 OT-2・3・4号火葬土坑

OT-5号火葬土坑 (第240図 PL-47)

位置 F区V-12グリッド

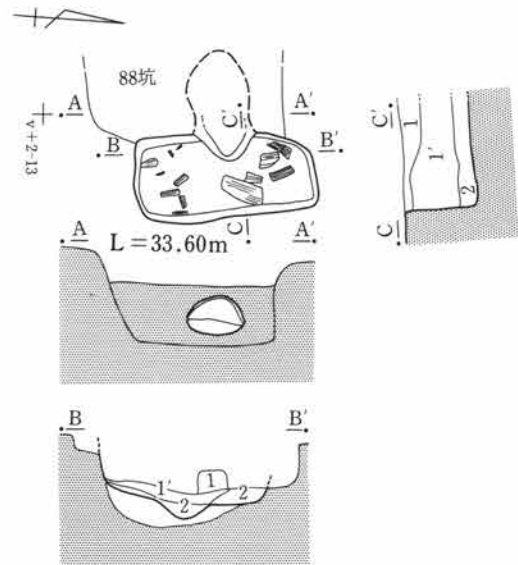
主軸方向 N-102°-W (焼土の範囲を含む)

方形部分の規模 96cm×46cm 深さ48cm

重複 88号土坑に後出

備考 通風口は火熱を受けて赤変硬化し、底面には炭化材があり明瞭なものであったが、土坑との重複部分で把握を誤り、焼土・炭化材範囲の図示となった。横断面よりトンネル状の施設であったことがわかる。

遺存状態がよく、土坑部分の壁上面は火熱を受けていたが埋没土内には焼土の混入はほとんどなかった。底面付近には多量の炭化材があった。骨片の出土量も6基の火葬土坑中最も多く、通風口部分まで広がっていたが、骨の部位は雑多で、土坑部分との差異はなかった。



5号火葬土坑土層説明

- 1 暗褐色土層。シルト質土を霜降り状に含み、カーボン粒をわずかに含む。1'では混入物は少ない。
- 2 黒色土層。カーボンを主体とした層で、骨片が混じる。

0 1:40 2m

第240図 OT-5号火葬土坑

OT-6号火葬土坑 (第241図 PL-47)

位置 F区Y-14グリッド

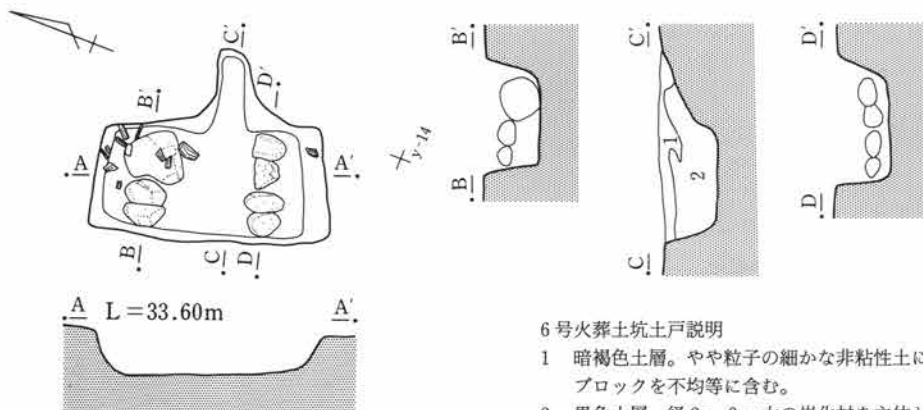
主軸方向 N-70°-E

方形部分の規模 120cm×64cm 深さ24cm

通風口の長さ 38cm

備考 通風口は浅く、煙道状であるが、土坑部分に

円礫を2列に並べている。炭化材で底面に密着しているものは少ない。骨片の出土量はあまり多くないが、部位のわかるものが含まれ、明らかに人骨である。骨片は6基の火葬土坑中、最も良く焼けているのが特徴である。



6号火葬土坑土層説明

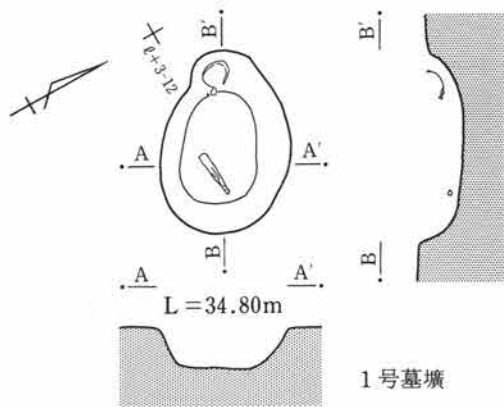
- 1 暗褐色土層。やや粒子の細かな非粘性土に、カーボン・焼土小ブロックを不均等に含む。
- 2 黒色土層。径2~3cm大の炭化材を主体とする層。骨片・焼土粒を含む。

0 1:40 2m

第241図 OT-6号火葬土坑

## 7 墓墳

安養寺森西遺跡で7基、大館馬場遺跡で2基、阿久津宮内遺跡で1基、計10基の墓墳を調査した。火葬土坑のような集中性は見られなかった。AK-1号墓墳以外はいずれも頭部を北に置いている。宋銭や明銭を副葬するものが二例ある以外に、年代を想定する根拠を持たないが、いずれも中世のものと思われる。

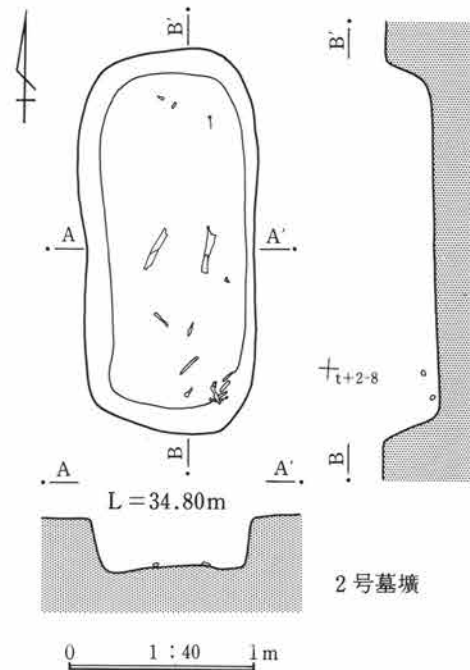


### AY-1号墓墳 (第242図 PL-48)

位置 B区1・m-11・12グリッド

規模 100cm×68cm

備考 頭骨を掘り出すために北壁を壊してしまった。かなり無理して遺体を納めている。骨の遺存状態は悪いが、脛骨の位置から、顔を西側へ向けた屈葬であることが判る。

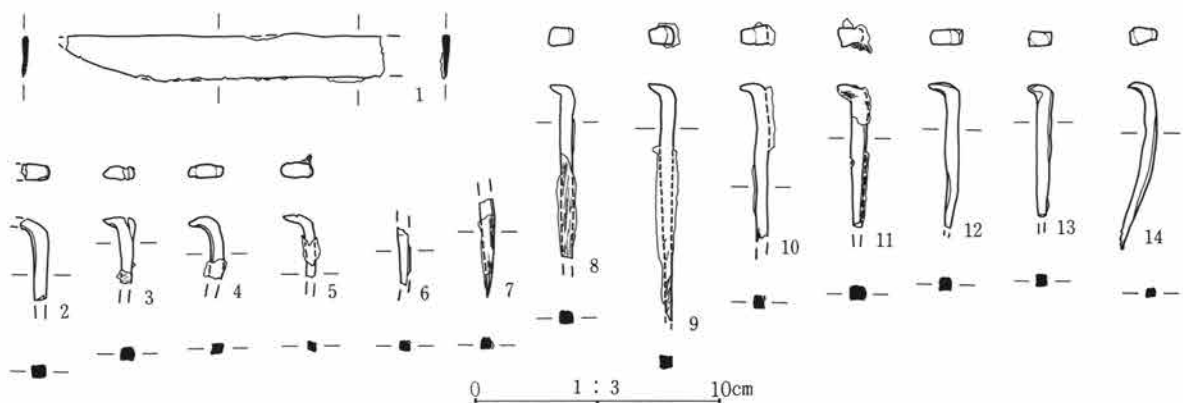


### AY-2号墓墳 (第242図 PL-48・49)

位置 B区t-7・8グリッド

規模 204cm×88cm

備考 深さ30cmほどの明瞭な掘り込みであったが、骨の状態は悪く、埋葬の様子は明らかにできなかった。鉄釘が11本以上あることが頂部の数より確認できた。墓墳の規模から伸展葬も充分可能であり、木棺を使用した可能性が高い。



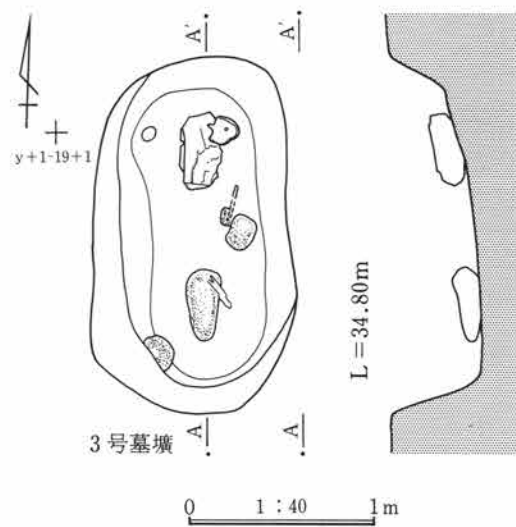
第242図 AY-1・2号墓墳および出土遺物

AY-3号墓壙 (第243図 PL-48)

位置 B区Y-19グリッド

規模 190cm×104cm

備考 深さ45cmで10基の墓壙中最も深い掘り込みが確認できた。河原石状の礫の上に遺体を埋葬している。骨の遺存状態は悪く、礫上で骨片が若干見つかっただけで、埋葬の様子は不明である。



0 1 : 3 10cm

AY-4号墓壙 (第243図 PL-48・49)

位置 E区n-7グリッド

規模 120cm×70cm

備考 10cmほどの浅い掘り込みで、骨の取り上げのため底面は失ってしまった。骨の遺存状態が良く、手の上に、西方に顔を向けた頭部を乗せている様子が明瞭に判った。右の懐に入れたと思われる6枚の宋銭を副葬している。



0 1 : 2 5cm

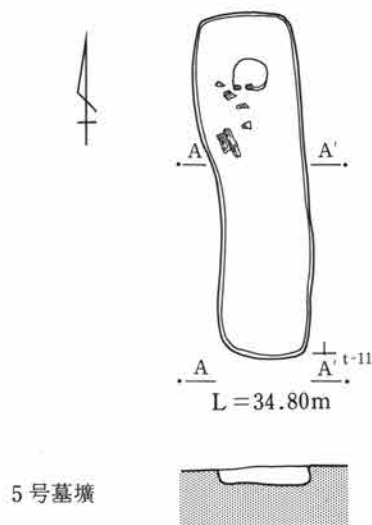
第243図 AY-3・4号墓壙および出土遺物

AY-5号墓墳 (第244図 PL-48)

位置 E区s-10・11グリッド

規模 184cm×48cm

備考 10cmほどの浅い掘り込みであった。骨の遺存状態は悪かったが、北側の頭骨の痕跡が確認できた。墓墳の規模から伸展葬が考えられる。埋没土は暗褐色非粘性土である。

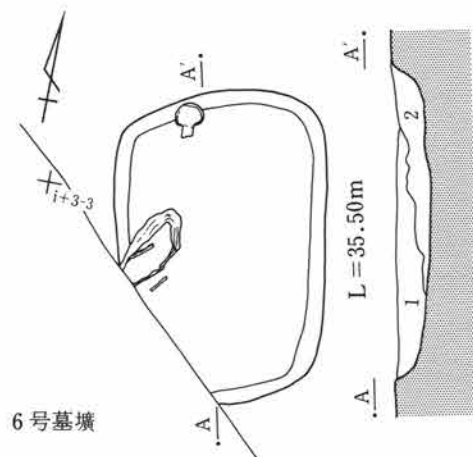


AY-6号墓墳 (第244図 PL-48)

位置 F区i・j-2・3グリッド

規模 164cm×110cm

備考 北側に頭骨の痕跡を確認し、底面に密着した礫の上から骨片を検出した。攪乱を受けた可能性がある。埋没土は1層はしまりのあるシルト質土で、2層土はやや黒色味を帯びていた。

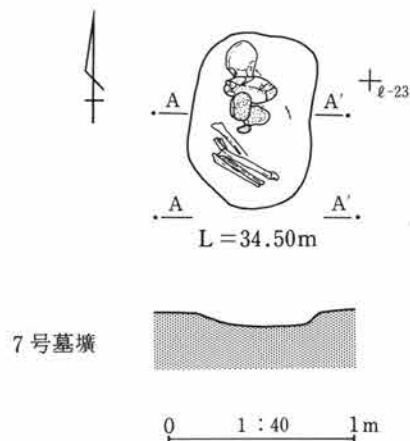


AY-7号墓墳 (第244図 PL-48)

位置 F区k-22・23グリッド

規模 94cm×64cm

備考 浅い遺構で埋没土も地山と近似しており、上端は不明瞭であった。骨の遺存状態は良く、AY-4号墓墳同様の埋葬方法が判る。胸部付近に最大30cmの河原石を乗せている。



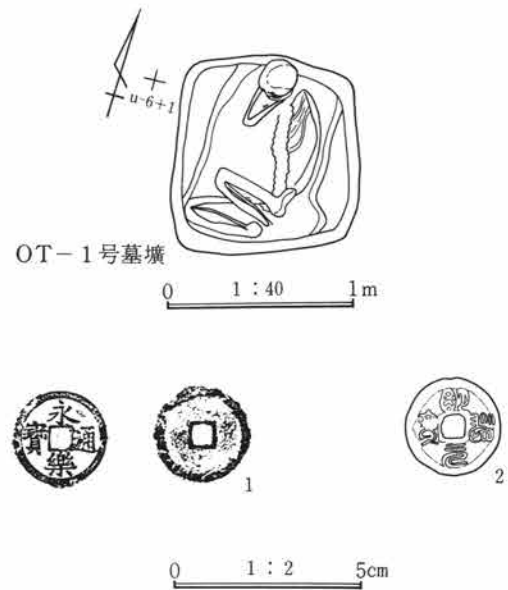
第244図 AY-5・6・7号墓墳

OT-1号墓壙 (第245図 PL-48・49)

位置 G区u-6グリッド

規模 100cm×60cm

備考 10cmに満たない浅い掘り込みである。骨の取り上げのため底面は失ってしまった。墓壙の規模からはかなり無理をして遺体を納めている。骨の遺存状態は良く、AY-4号墓壙同様の埋葬を行っている。2枚の副葬銭が錆で固まった状態で出土した。2は錆のため剝落した表面をX線撮影し、トレースしたものである。



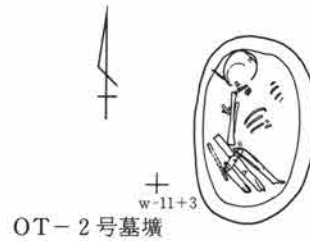
OT-1号墓壙

OT-2号墓壙 (第245図 PL-48)

位置 G区w・x-11グリッド

規模 100cm×60cm

備考 10cmに満たない浅い掘り込みで、骨の取り上げのため底面付近は失ってしまった。かなり無理をして遺体を納めている。AY-4号墓坑同様の埋葬が考えられる。



OT-2号墓壙

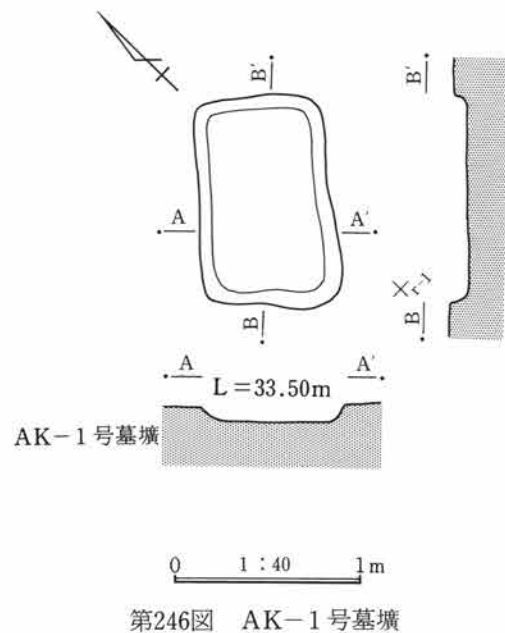
第245図 OT-1・2号墓壙および出土遺物

AK-1号墓壙 (第246図 PL-48)

位置 I区q・r-0グリッド

規模 110cm×70cm

備考 約10cmの浅い掘り込みである。人骨片が少量出土したため墓坑と判断したが、骨の遺存状態がきわめて悪く、埋葬の様子は不明瞭である。



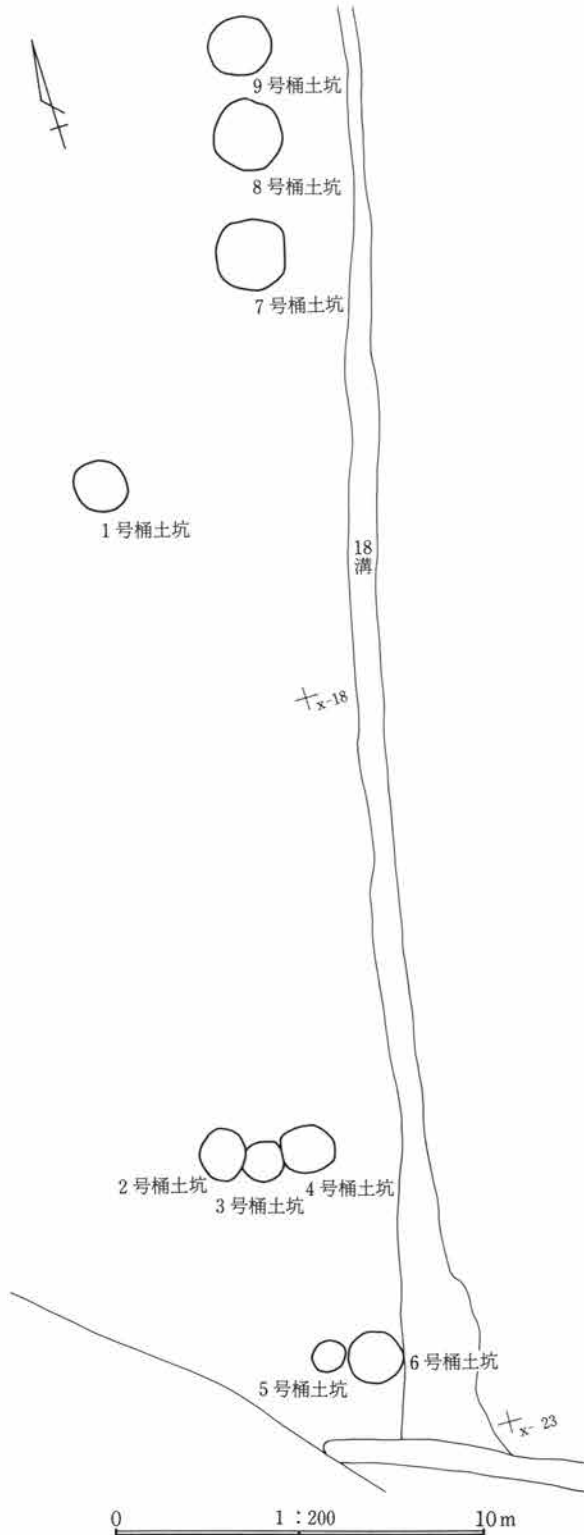
AK-1号墓壙

第246図 AK-1号墓壙



## 8 桶土坑

安養寺森西遺跡C区の18号溝西側で、桶底部の痕跡の残る浅い掘り込みを9基調査した。単独で存在



第247図 桶土坑配置図

するものは1基のみで、3基並ぶものが2組、2基並ぶものが1組と、組み合わせで作られおり、下肥の貯蔵に使用したと想定し、赤堀町五日牛南組遺跡にならい桶土坑と名付けた。全体の配置から、18号溝沿いと2～4号坑南側に農道があったものと想定できよう。遺物の出土が少ないため、年代の根拠には乏しいが、江戸時代のものと思われる。

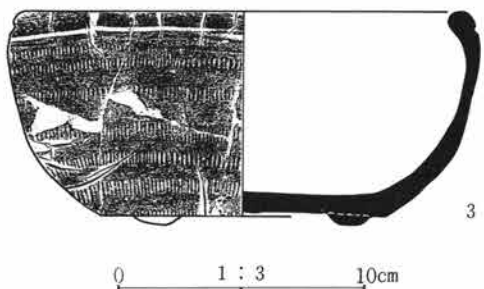
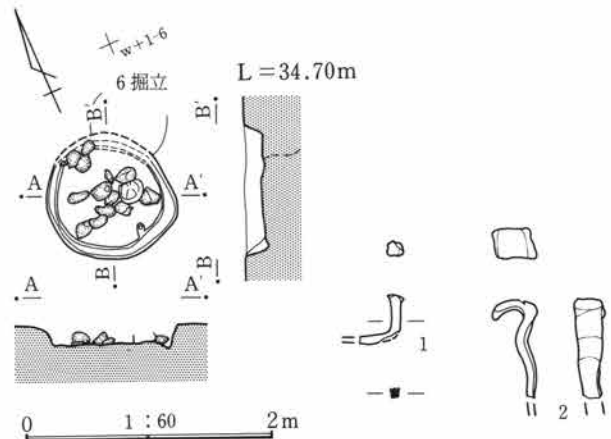
### AY-1号桶土坑 (第248図 PL-50)

位置 C区w-16グリッド

規模 108cm×105cm 深さ15cm

重複 6号掘立に後出する。

備考 桶土坑群中、唯一単独の遺構である。縁辺に深さ3cmの桶底の痕跡がある。地山が砂質のため崩落が著しいが、本来は幅狭の縁部掘り込みと思われる。遺物を出土したのは本土坑のみで、底面直上の礫に混じって鉄製品と軟質陶器が出土した。



第248図 AY-1号桶土坑および出土遺物

AY-2~4号桶土坑 (第249図 PL-50)

位置 C区v・w-20グリッド

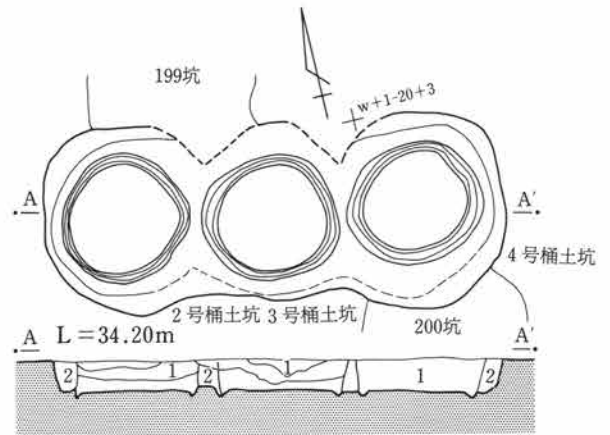
規模 2号 105cm×100cm 深さ28cm

3号 110cm×100cm 深さ25cm

4号 110cm×100cm 深さ30cm

重複 199・200号土坑と重複。後出のようだ。

備考 個々の土坑は重複していないが、3基を包むように連続した掘り方がある。3基とも桶底部の痕跡が顕著である。



2~4号桶土坑

- 1 暗褐色土層 カーボン粒まじる。下層ほど黒色味強い。
- 2 にぶい黄褐色土層 やや砂質。

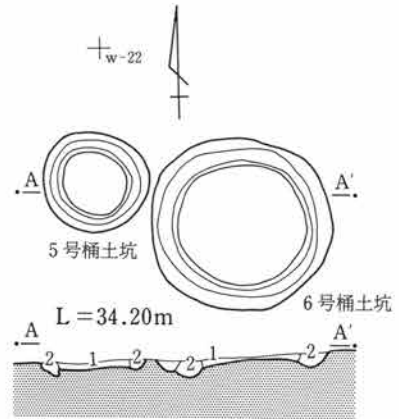
AY-5・6号桶土坑 (第249図 PL-50)

位置 C区v・w-22グリッド

規模 5号 85cm×80cm 深さ10cm

6号 150cm×140cm 深さ15cm

備考 近接した大小2基の組み合わせである。底面の痕跡が残るだけだがレベルはほぼ同一で、桶底部の痕跡は顕著である。



5・6号桶土坑

- 1 暗褐色土層 やや砂質の非粘性土。
- 2 黒褐色土層 1層から漸移的に黒色味を増し、境は不明瞭。

AY-7~9号桶土坑 (第249図 PL-50)

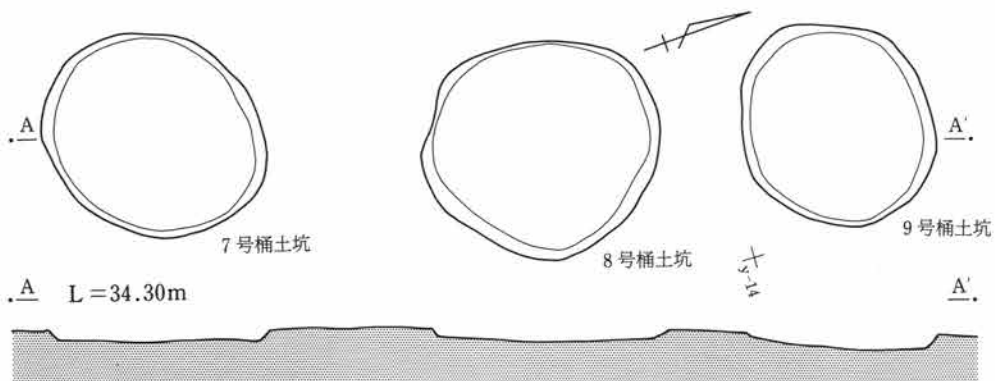
位置 C区x-13・14・15グリッド 18号溝の西に、軸方向をそろえるようにして並んでいる。

規模 7号 180cm×160cm 深さ10cm

8号 190cm×180cm 深さ10cm

9号 160cm×160cm 深さ15cm

備考 桶底部の痕跡は認められない。



0 1:60 2m

第249図 AY-2~9号桶土坑

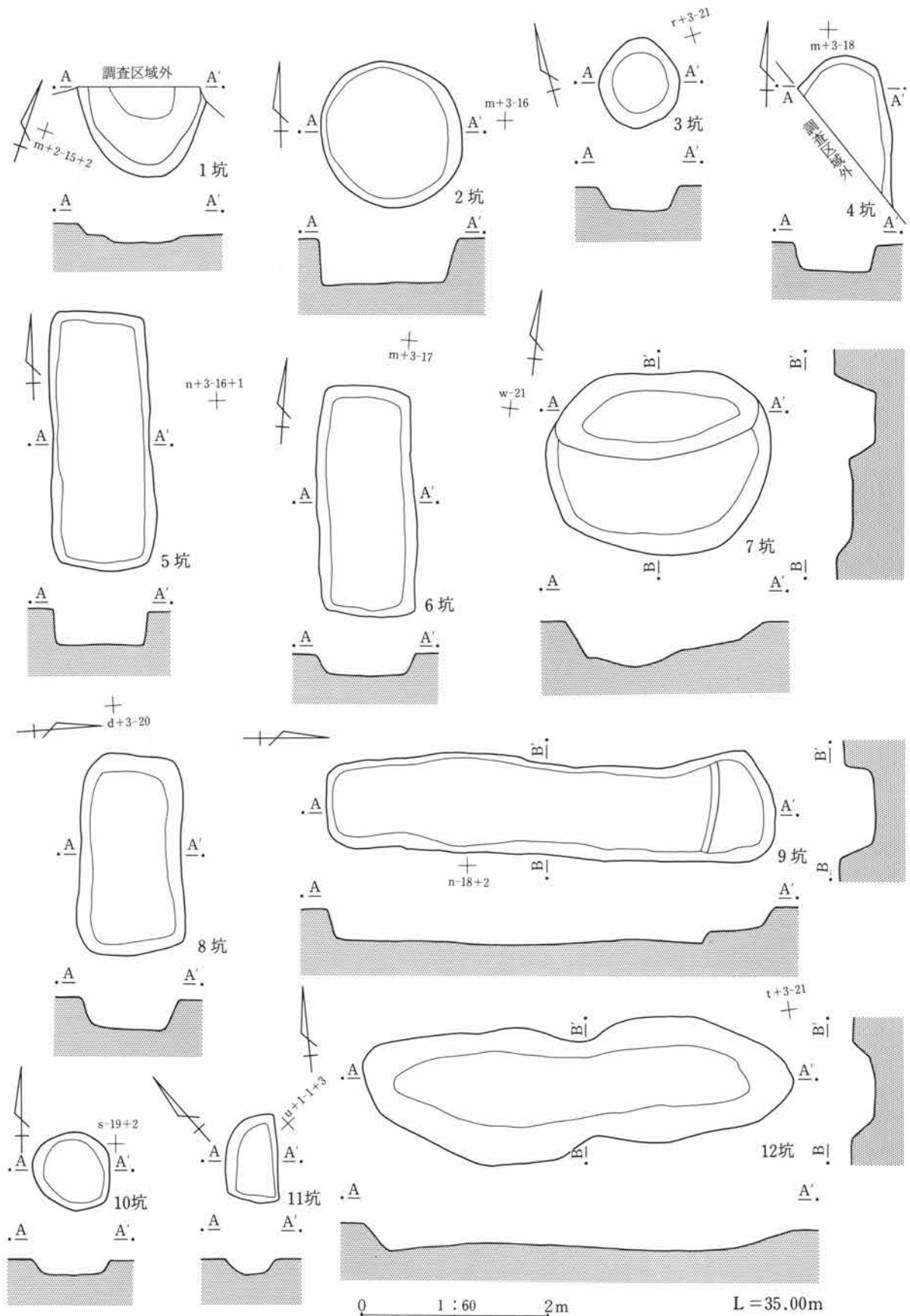
## 9 土坑

土坑とした遺構は阿久津宮内遺跡で54基、大館馬場遺跡で130基、安養寺森西遺跡で535基、合計719基あり、それぞれの遺跡で最も数の多い遺構であった。発掘調査が切貼り状態だったため、調査時に付けた遺構番号に重複や欠番など不都合が多く、整理段階で遺跡毎にすべて北西側から通し番号となるよう付け直した。この時に、明らかに埋葬に使用したものを墓壇、火葬を行ったものを火葬土坑、桶の痕跡の残るものを桶土坑として除外し、前項までに記した。ただし、骨片が確認できなかった墓壇や、桶の痕跡が不明瞭だった桶土坑がこの中に含まれた可能性もある。

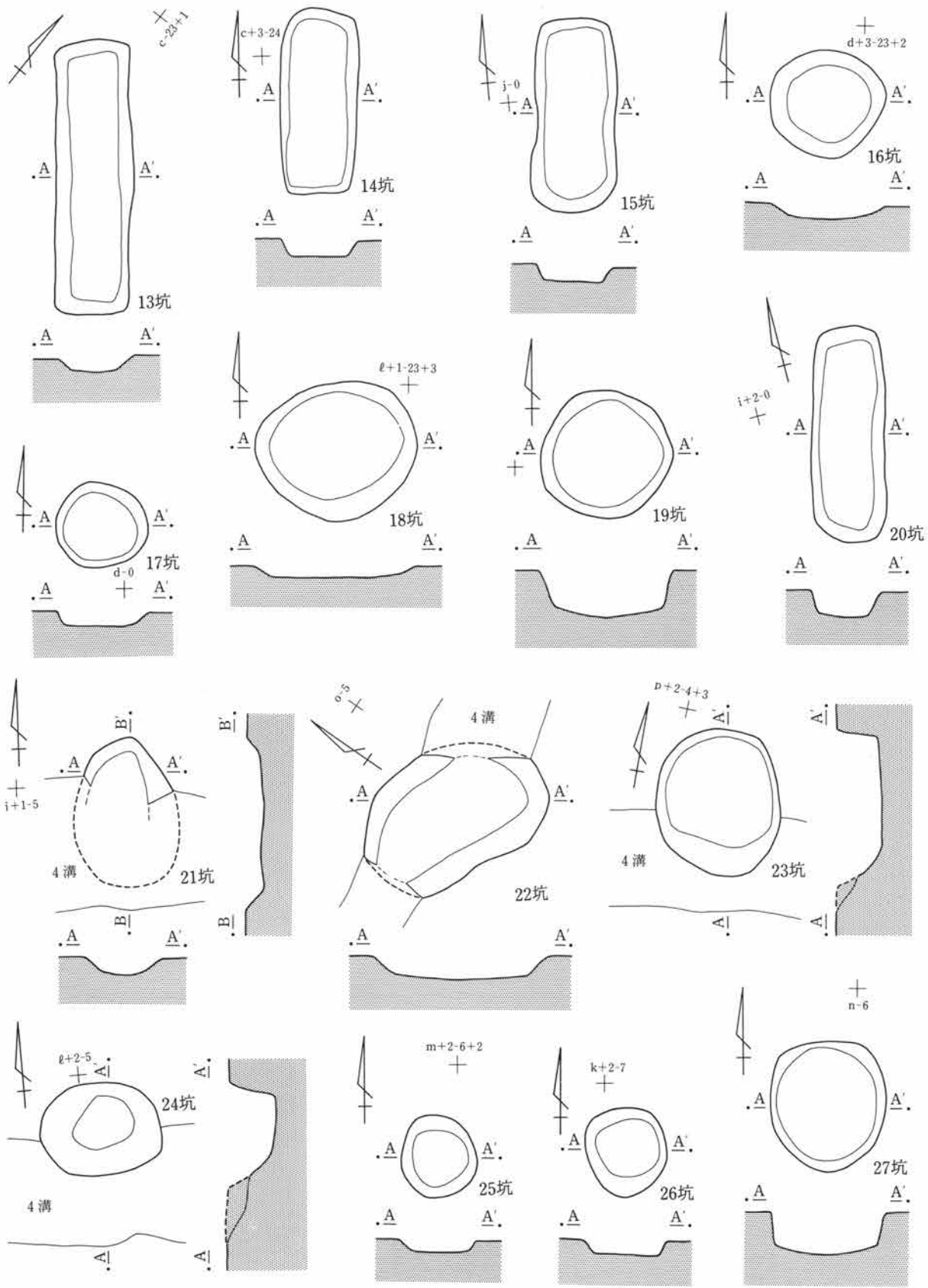
土坑は重複が多いうえに遺物を伴うものが少なく、性格不明のものがほとんどであった。このうち、古代の遺物がまとまって出土したのはAY-155号土坑で、唯一この時期に特定できる遺構である。また、AY-188・288号土坑もこの時期の遺構と思われる。銅銭を出土したAY-347号土坑は、形状からも中世の墓壇となる可能性が高い。その他の遺構は近世以降が大半と思われる。安養寺森西遺跡に数多く見られる、平面円形の浅い遺構の内のいくつかは桶土坑であった可能性がある。これらをすべて掲載するため、遺構図（本文244～292頁）・遺物図（本文293～298頁）・一覧表（本文299～323頁）の一括集成表示とした。

一覧表中の埋没土の表記には右のような8層の基本土層を一部で使用した。これは土坑のみの土層表示に使用したものである。

- A層 暗褐色土層 しまりの強い弱粘性土。パミス若干含んでいる。A'層には5～20cm大の黄褐色土やパミスをやや多量に含んでいる。
- B層 暗黄褐色土層 黄褐色や灰褐色のシルトブロック、パミス等を不均等に、多量に含んだしまりの強い層。
- C層 黒褐色土層 ややしまり欠く弱粘性土層。混入物をほとんど含まないが、C'では不明瞭なシルト質土を混入する。
- D層 暗褐色土層 粒子の粗い非粘性土層。パミス・炭化物等を含んでいる。
- E層 にぶい黄褐色土層 粒子粗く、やや砂質の非粘性土層。パミスを含んだしまりの強い層。
- F層 にぶい黄褐色土層 シルト質の弱粘性土層。
- G層 褐色土層 粒子の細かな非粘性土層。シルト質土をブロック状に含む。
- H層 暗褐色土層 パミス・黄灰色砂粒を含むやや砂質土層。



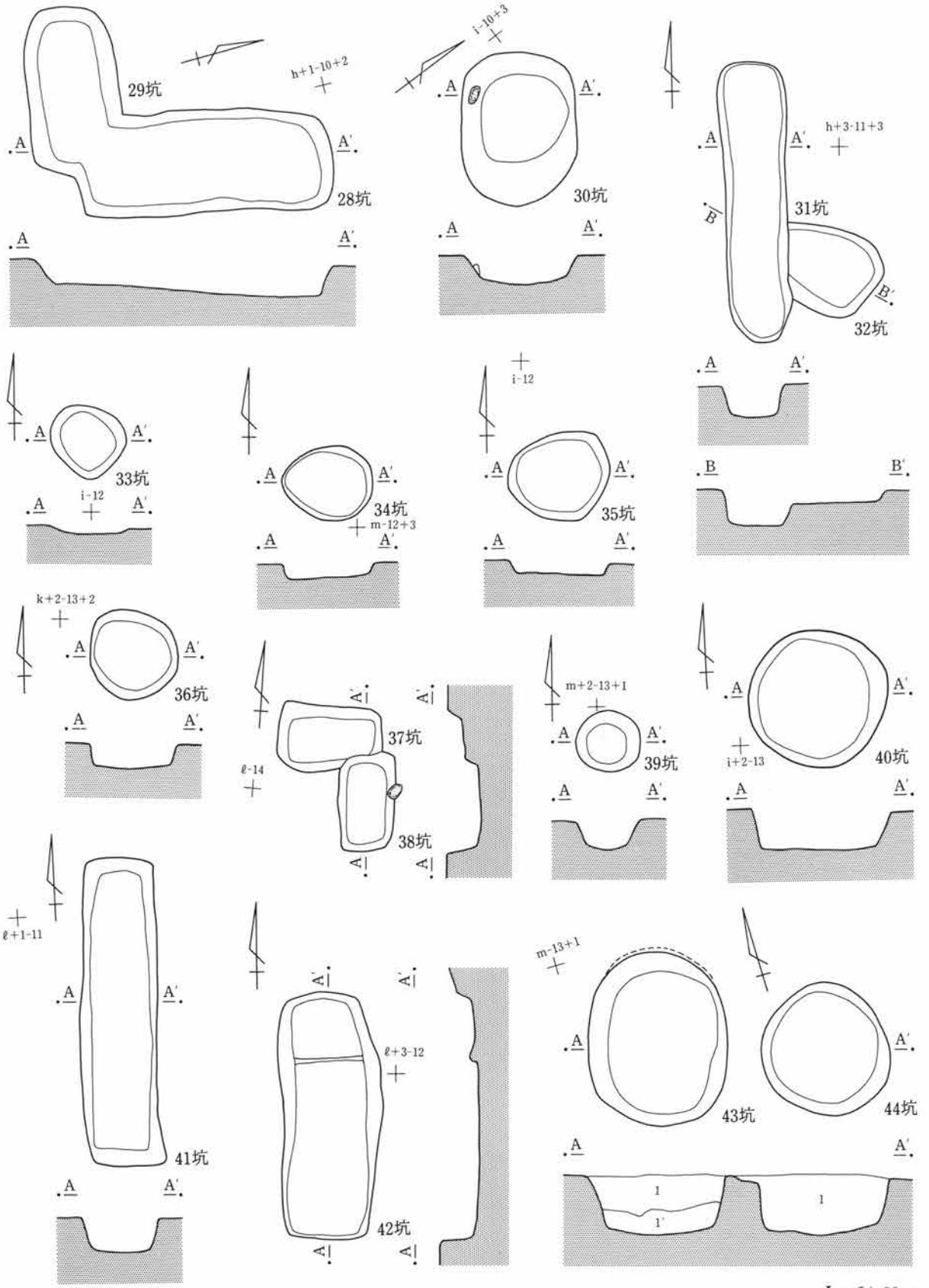
第250图 A区 AY-1~12号土坑



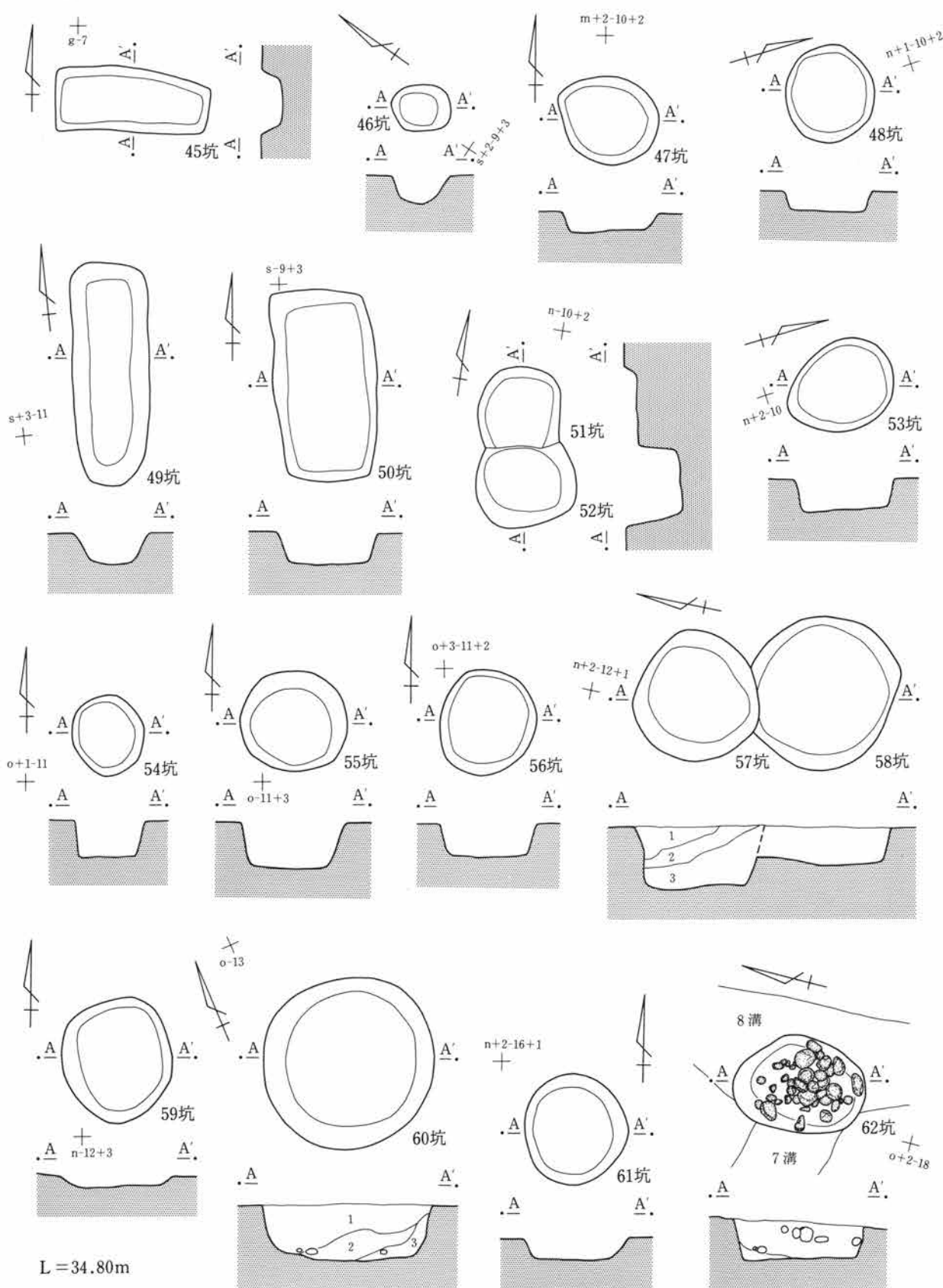
L = 34.70m

0 1 : 60 2m

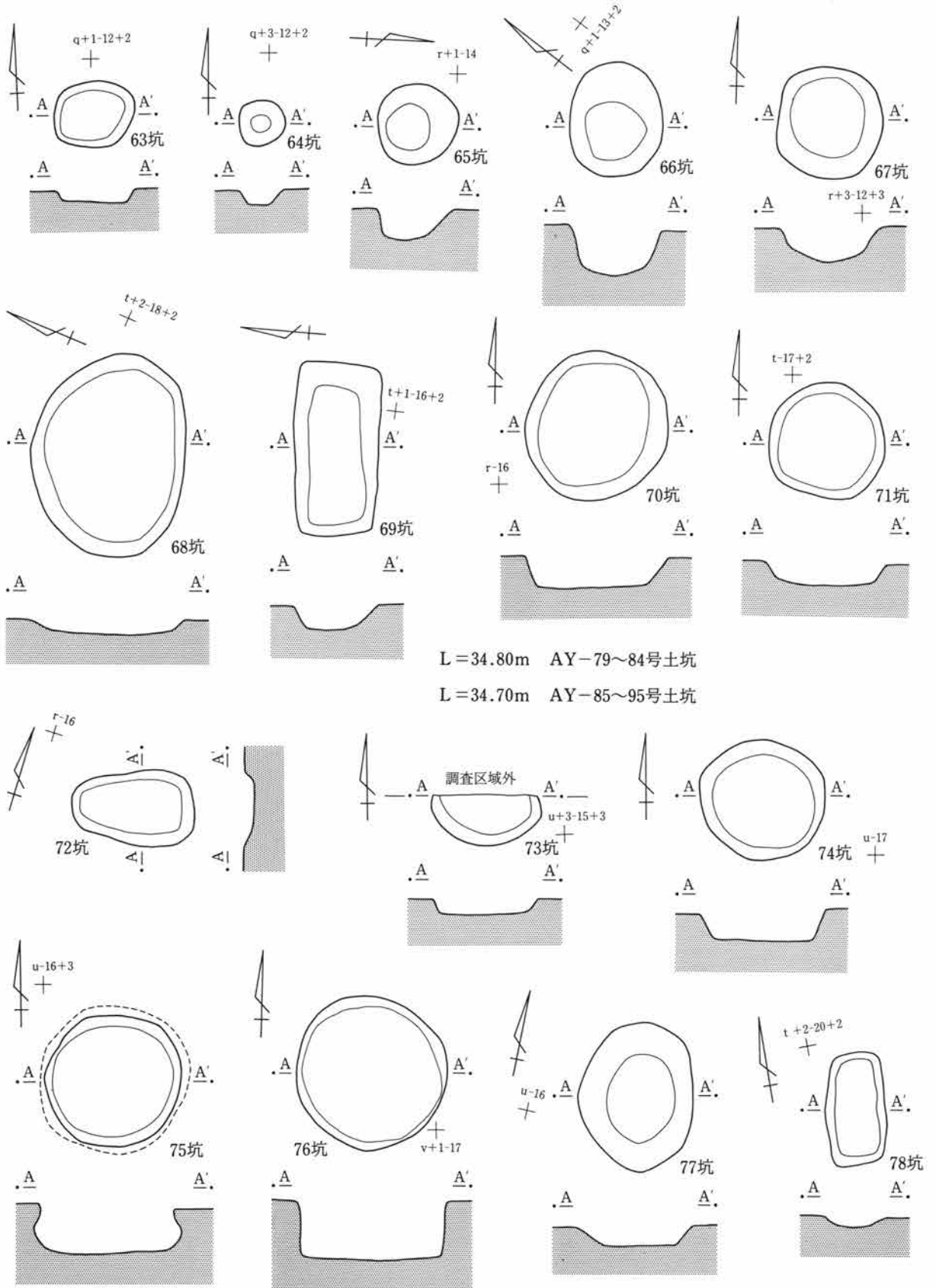
第251图 B区 AY-13~27号土坑



第252图 B区 AY-28~44号土坑



第253图 B区 AY-45~62号土坑

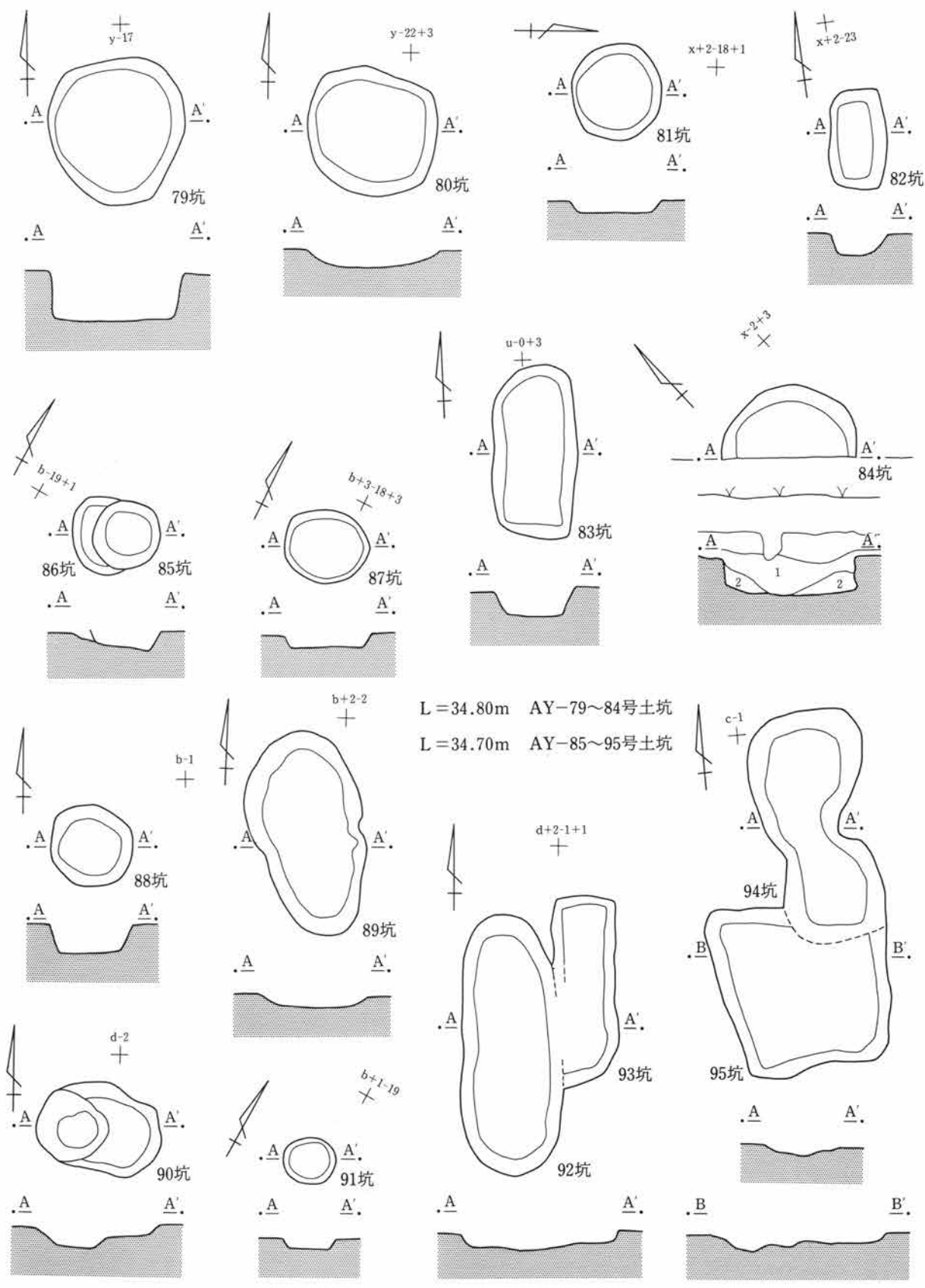


L = 34.80m AY-79~84号土坑

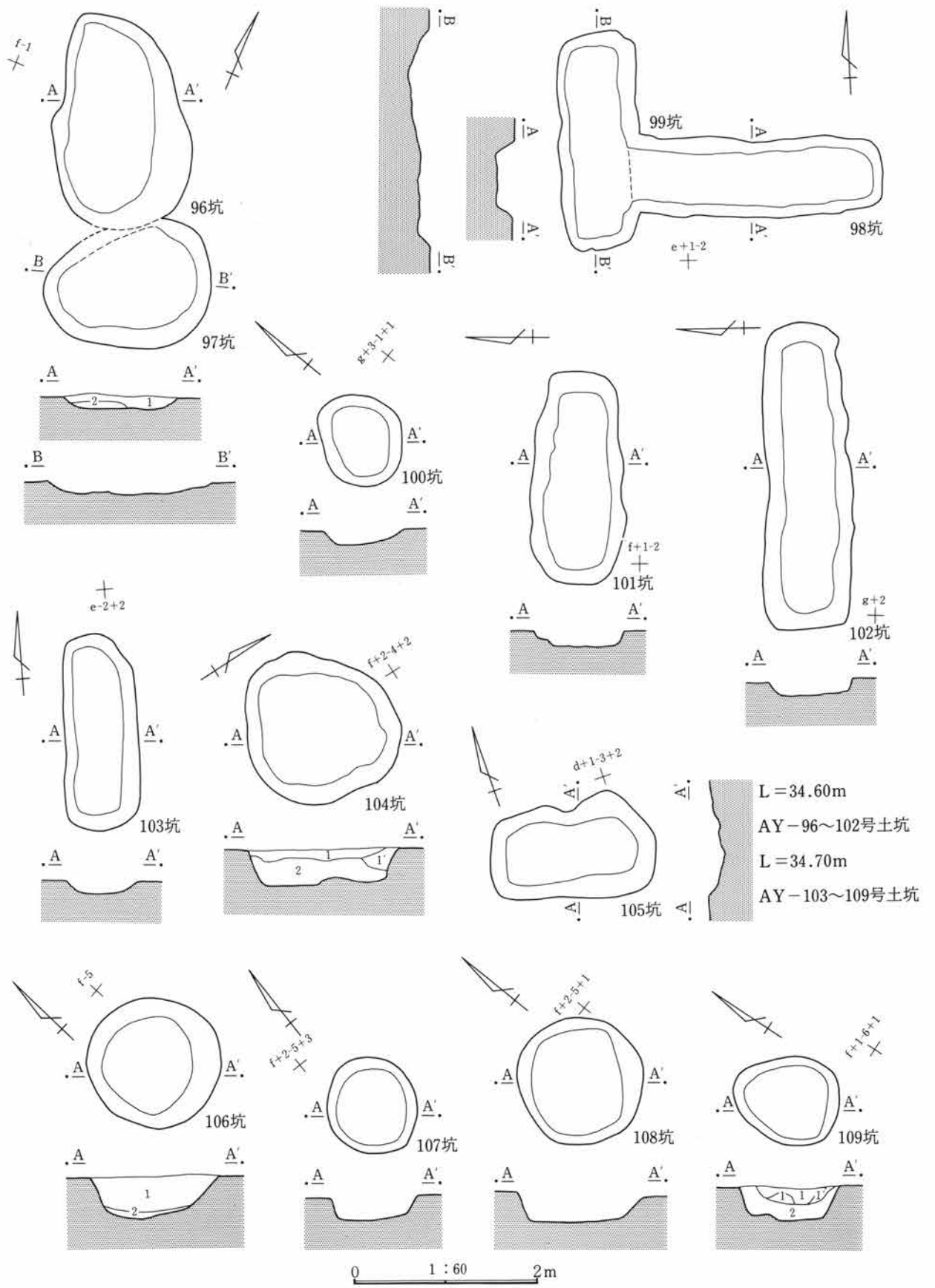
L = 34.70m AY-85~95号土坑

第254图 B区 AY-63~78号土坑

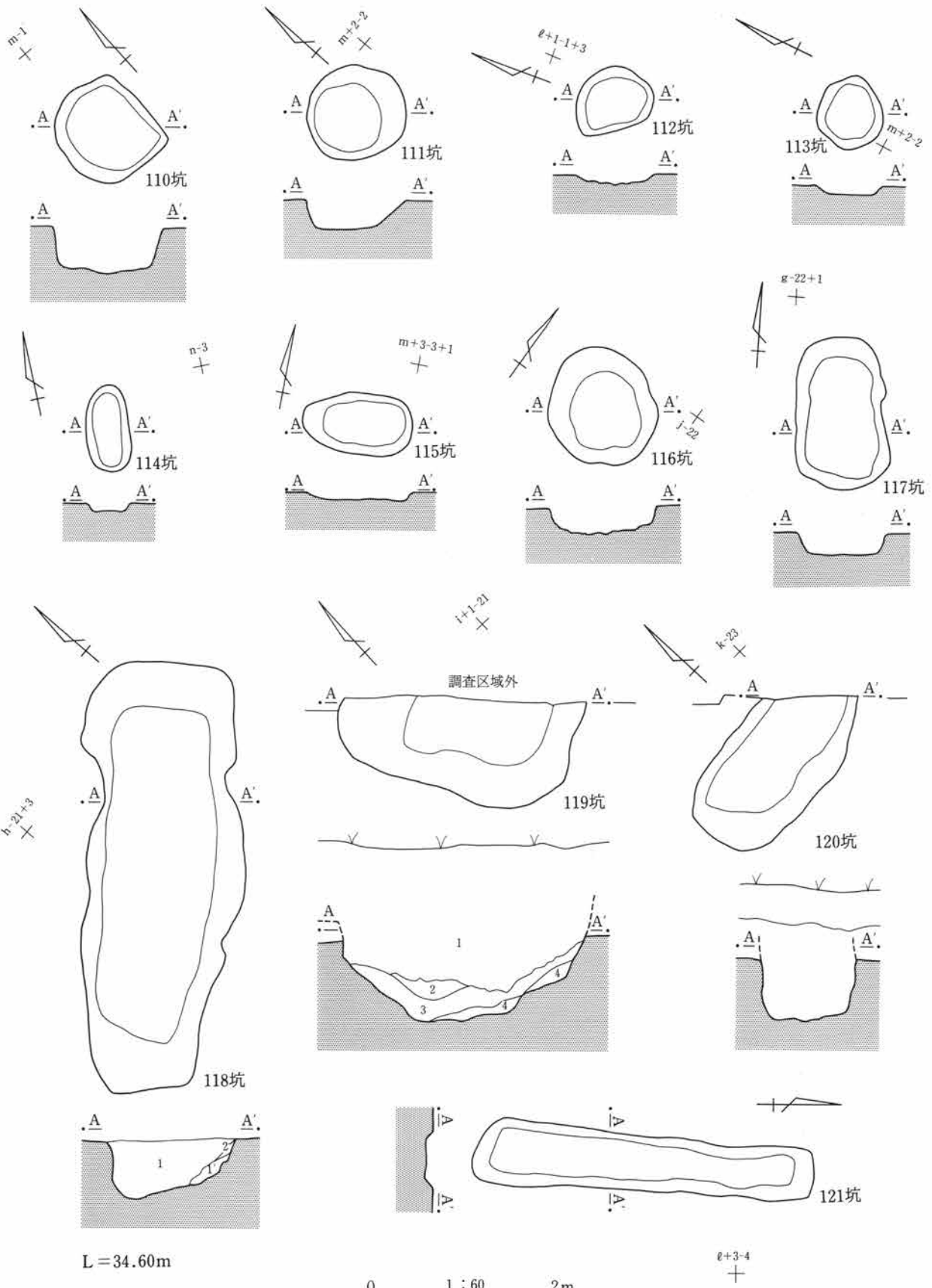




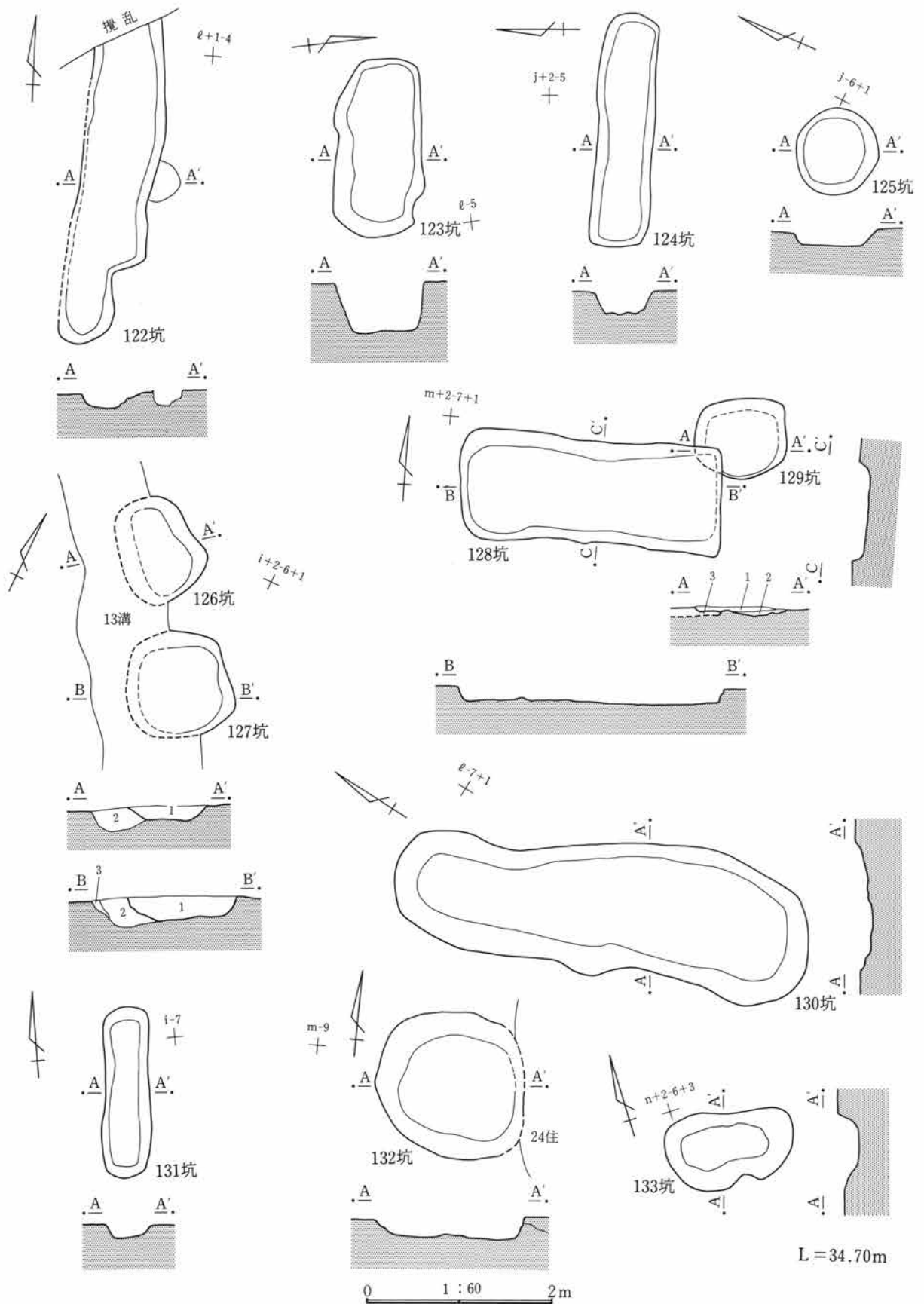
第255图 B区 AY-79~87号土坑 C区 AY-88~95号土坑



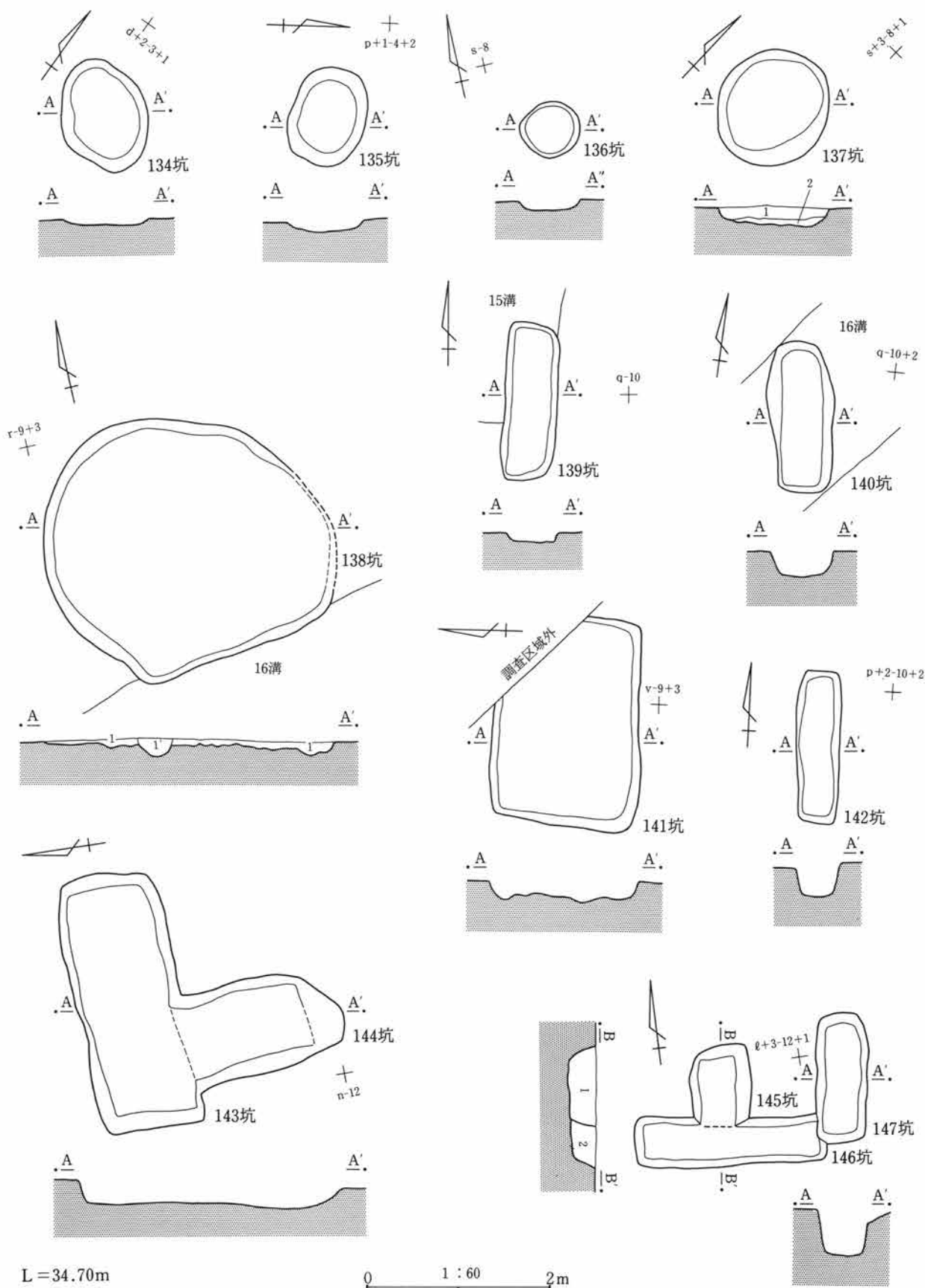
第256图 C区 AY-96~109号土坑



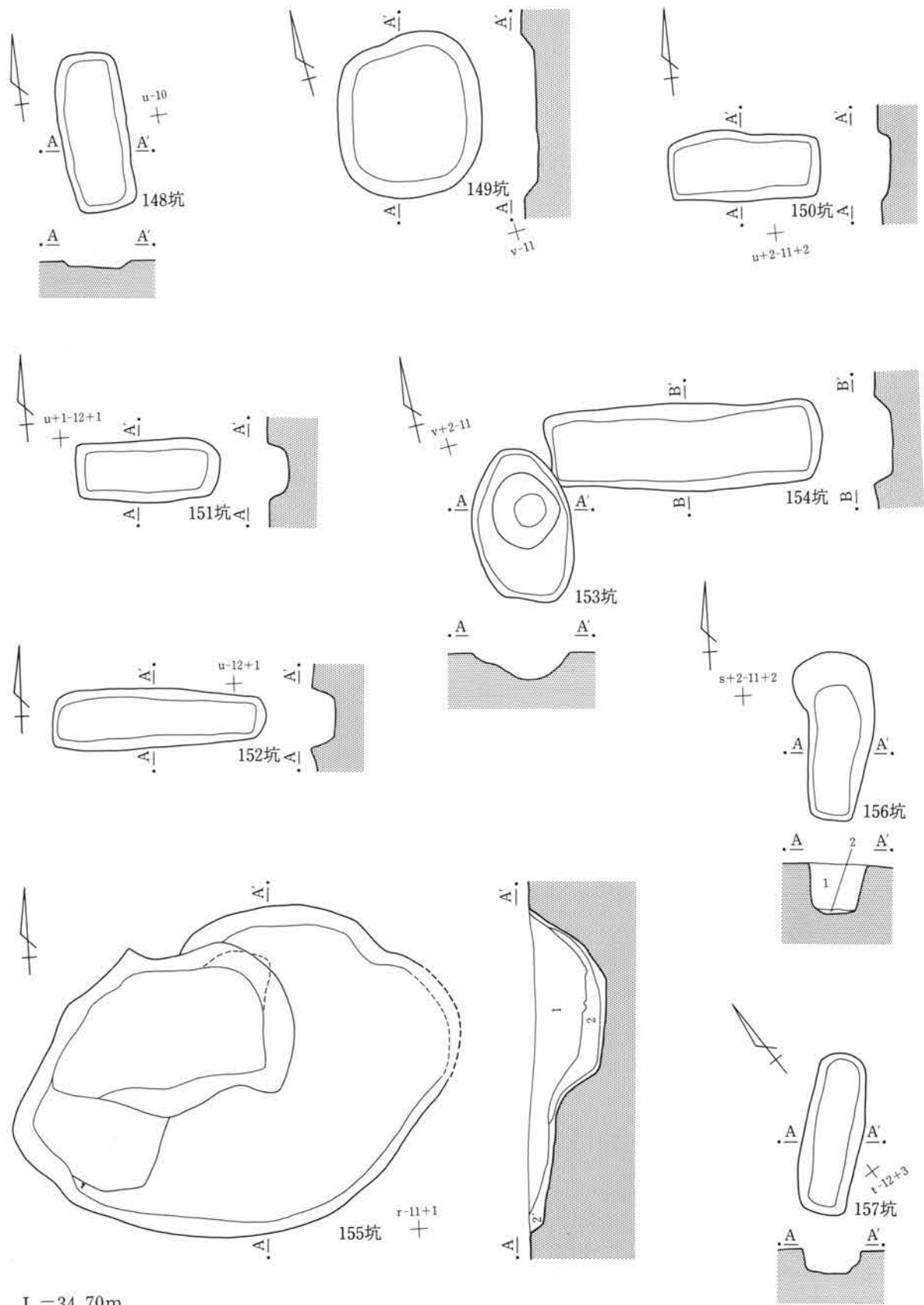
第257图 C区 AY-110~121号土坑



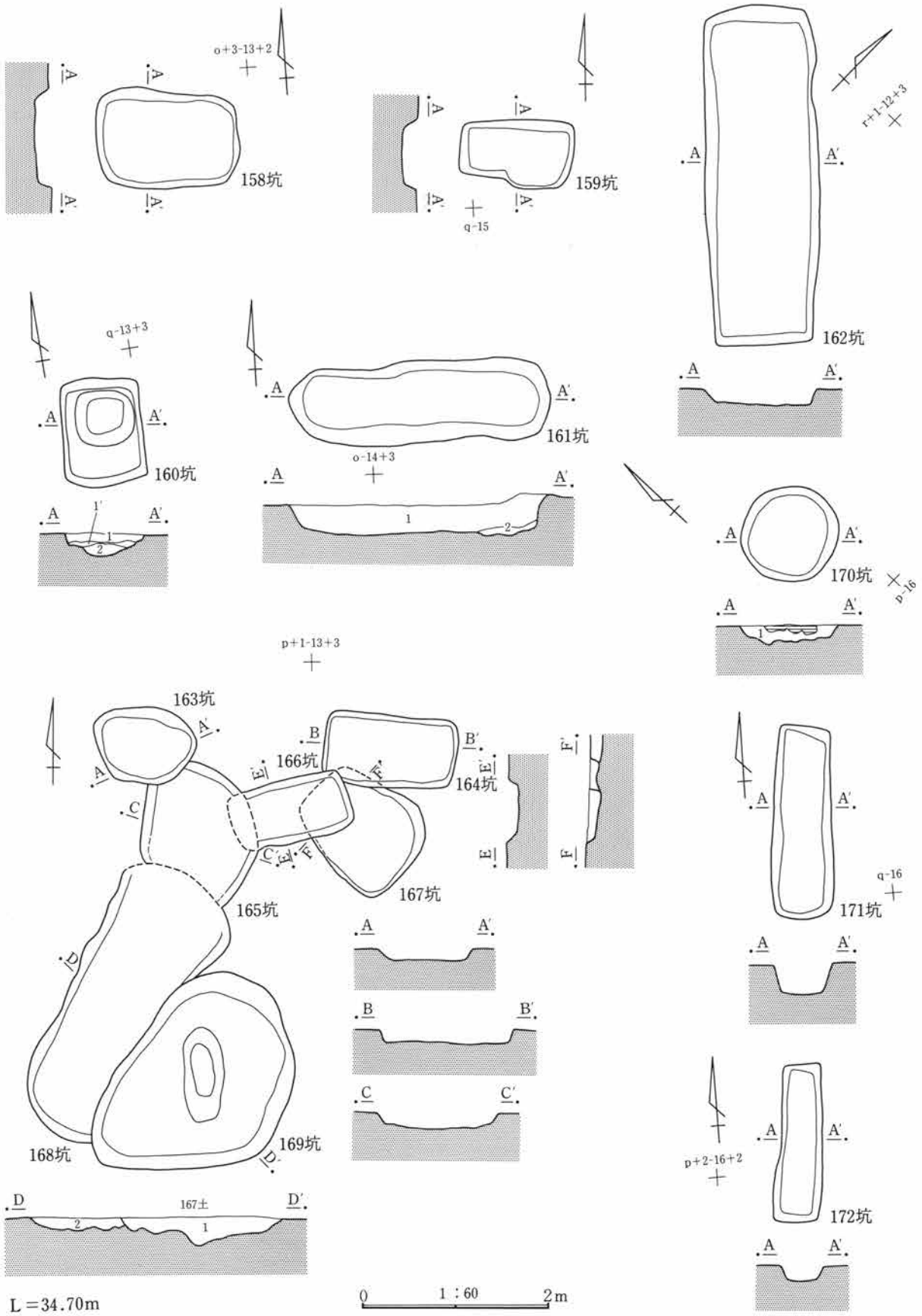
第258图 C区 AY-122~133号土坑



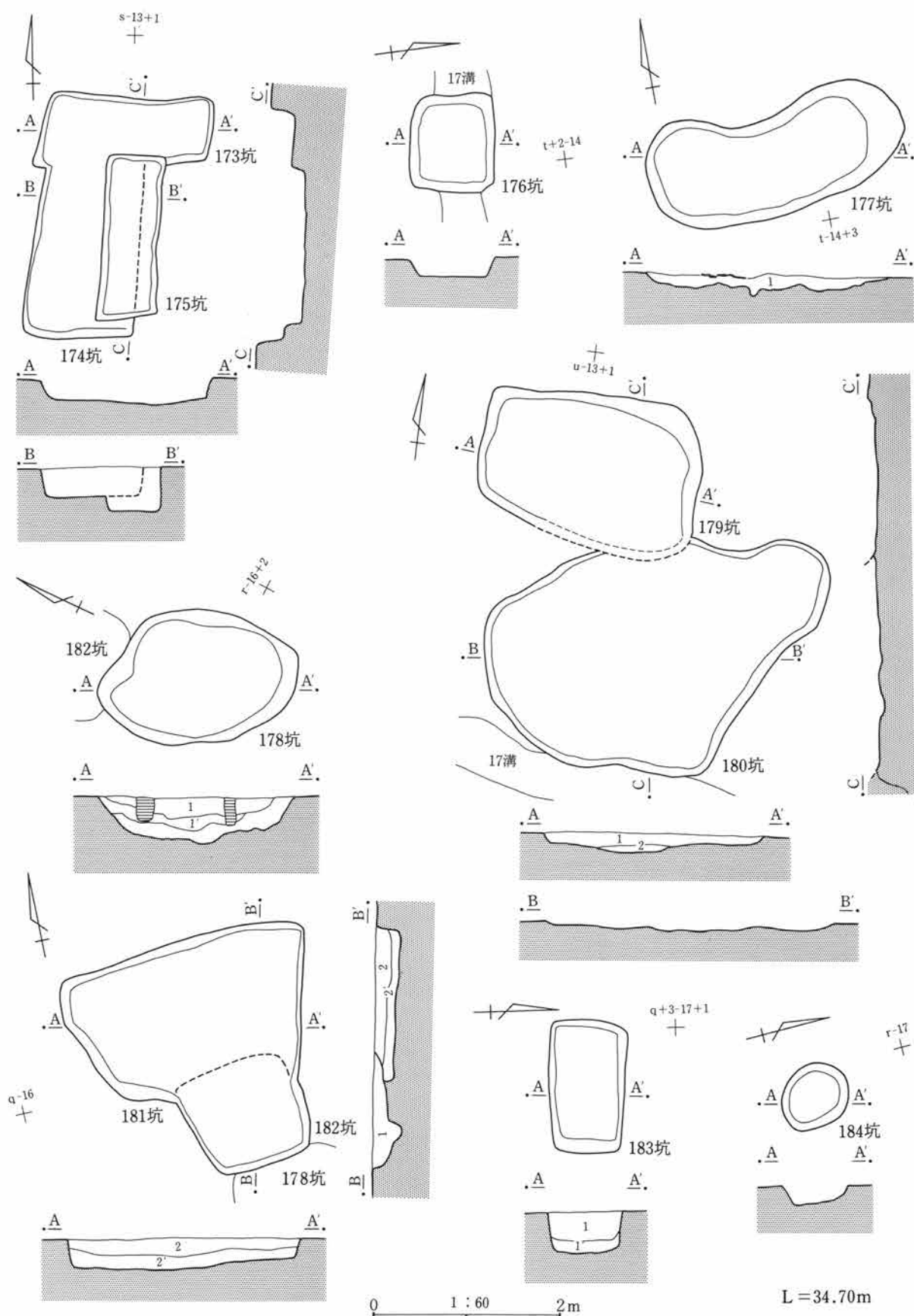
第259图 C区 AY-134~147号土坑



第260图 C区 AY-148~157号土坑

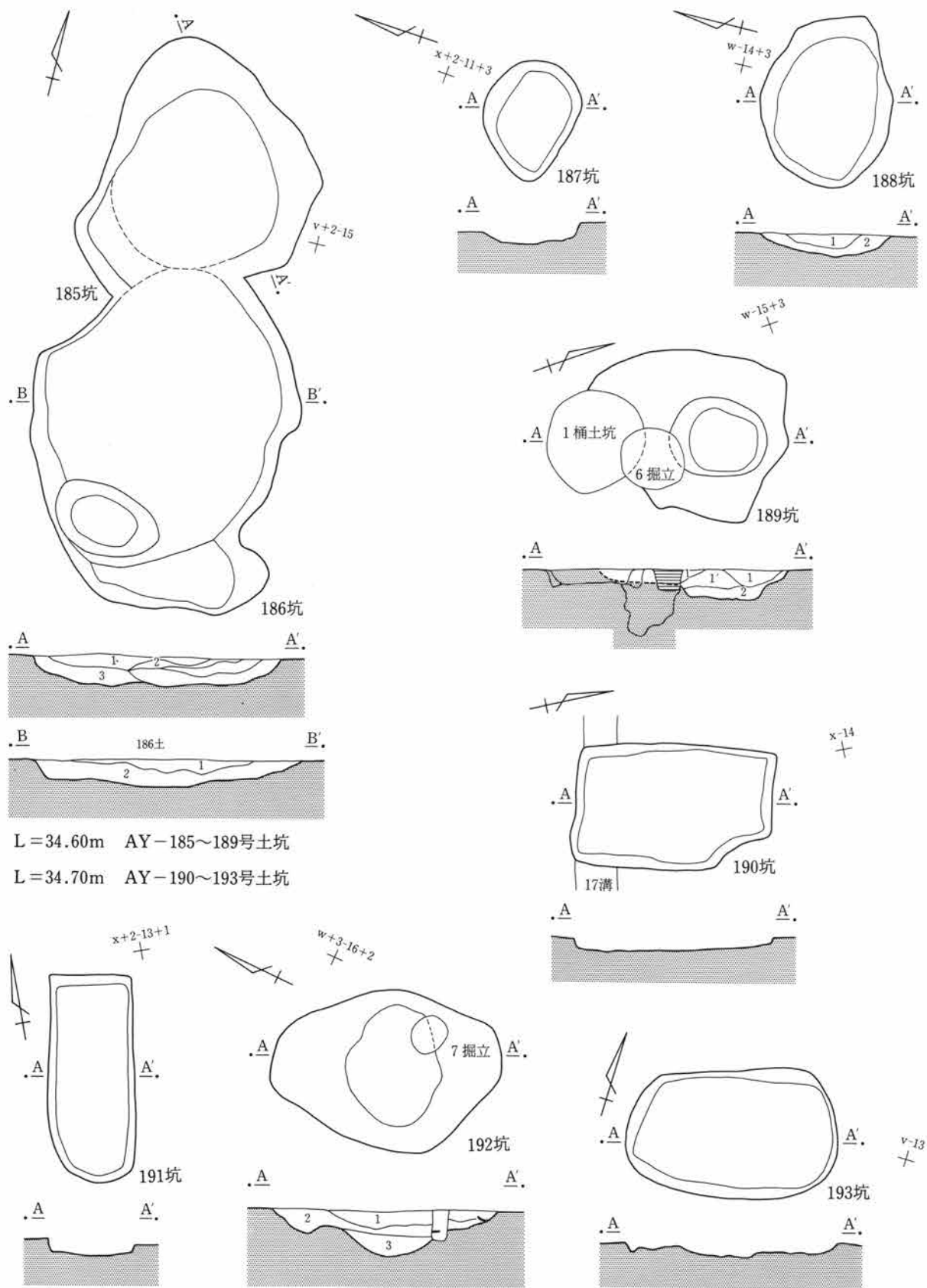


第261图 C区 AY-158~172号土坑



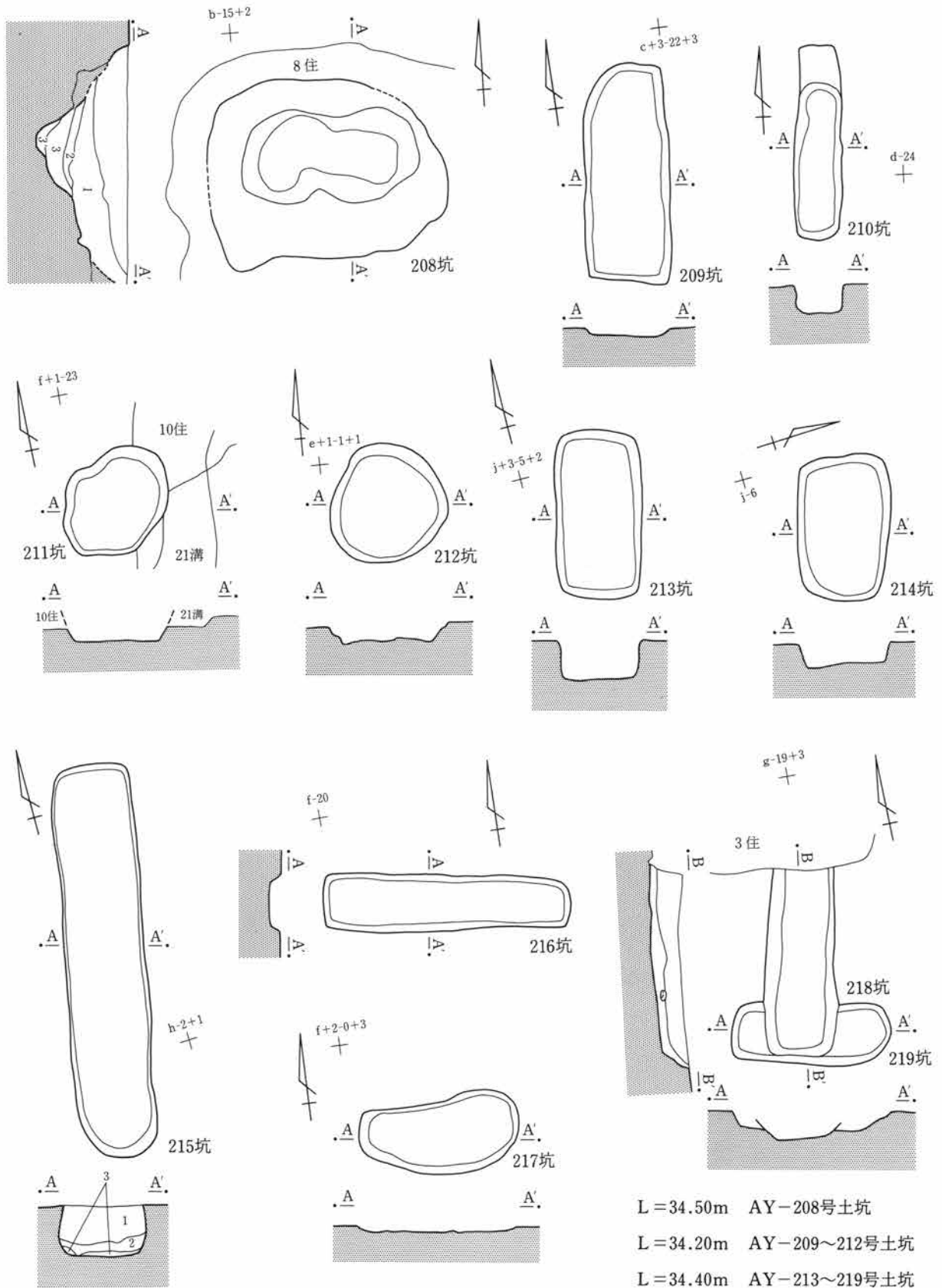
第262图 C区AY-173~184号土坑





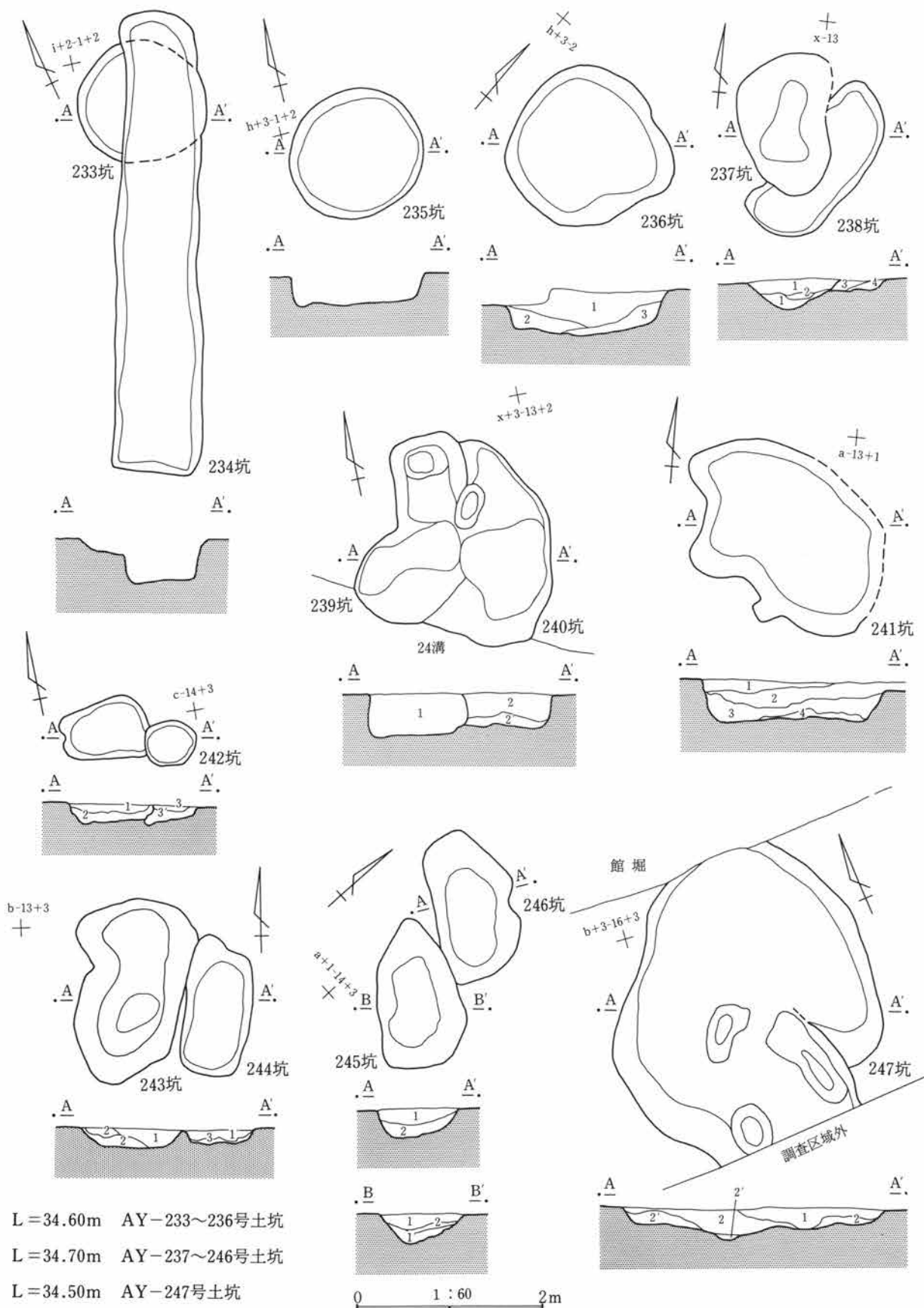
第263图 C区 AY-185~193号土坑



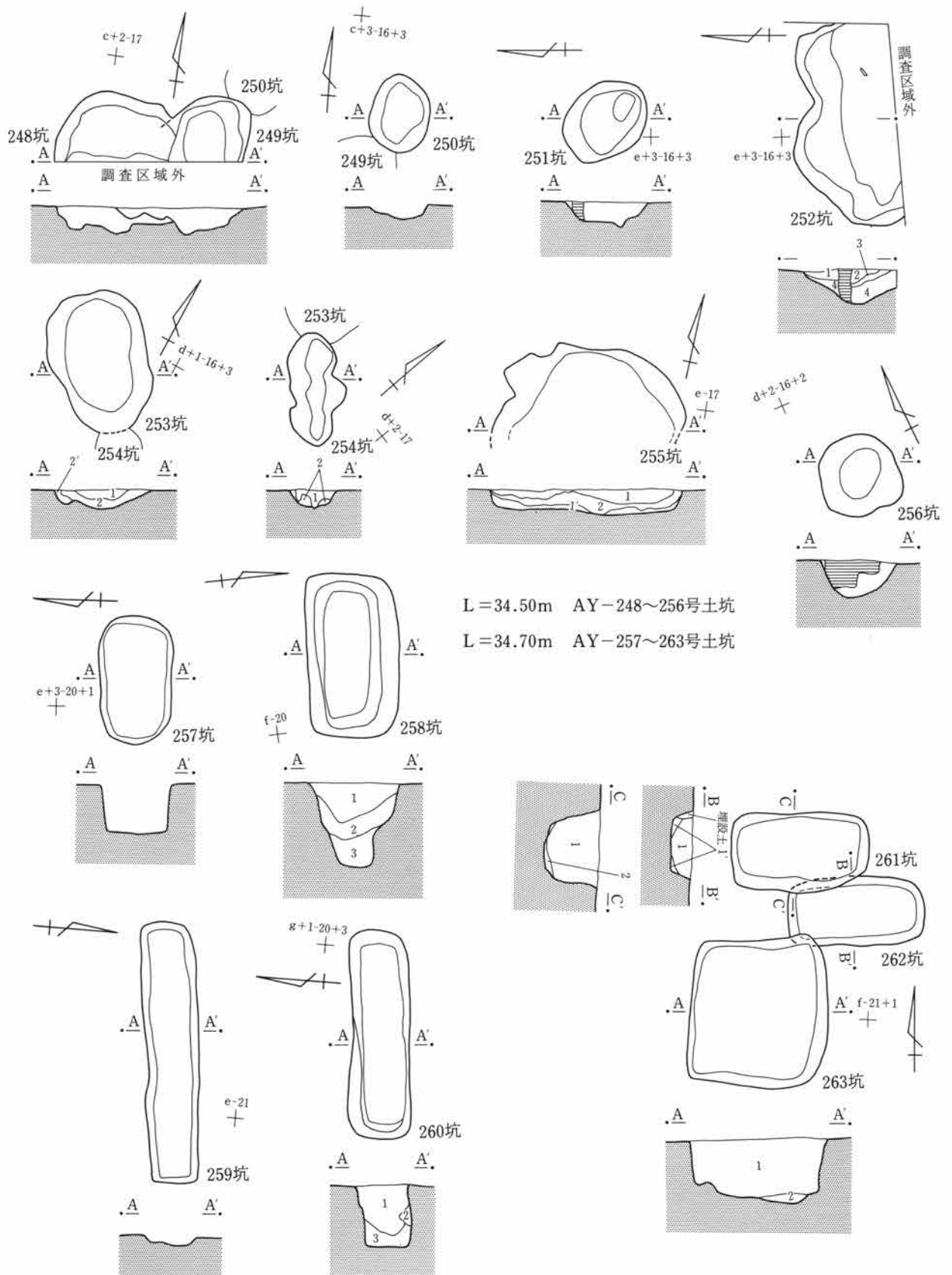


第265图 D区 AY-208~219号土坑

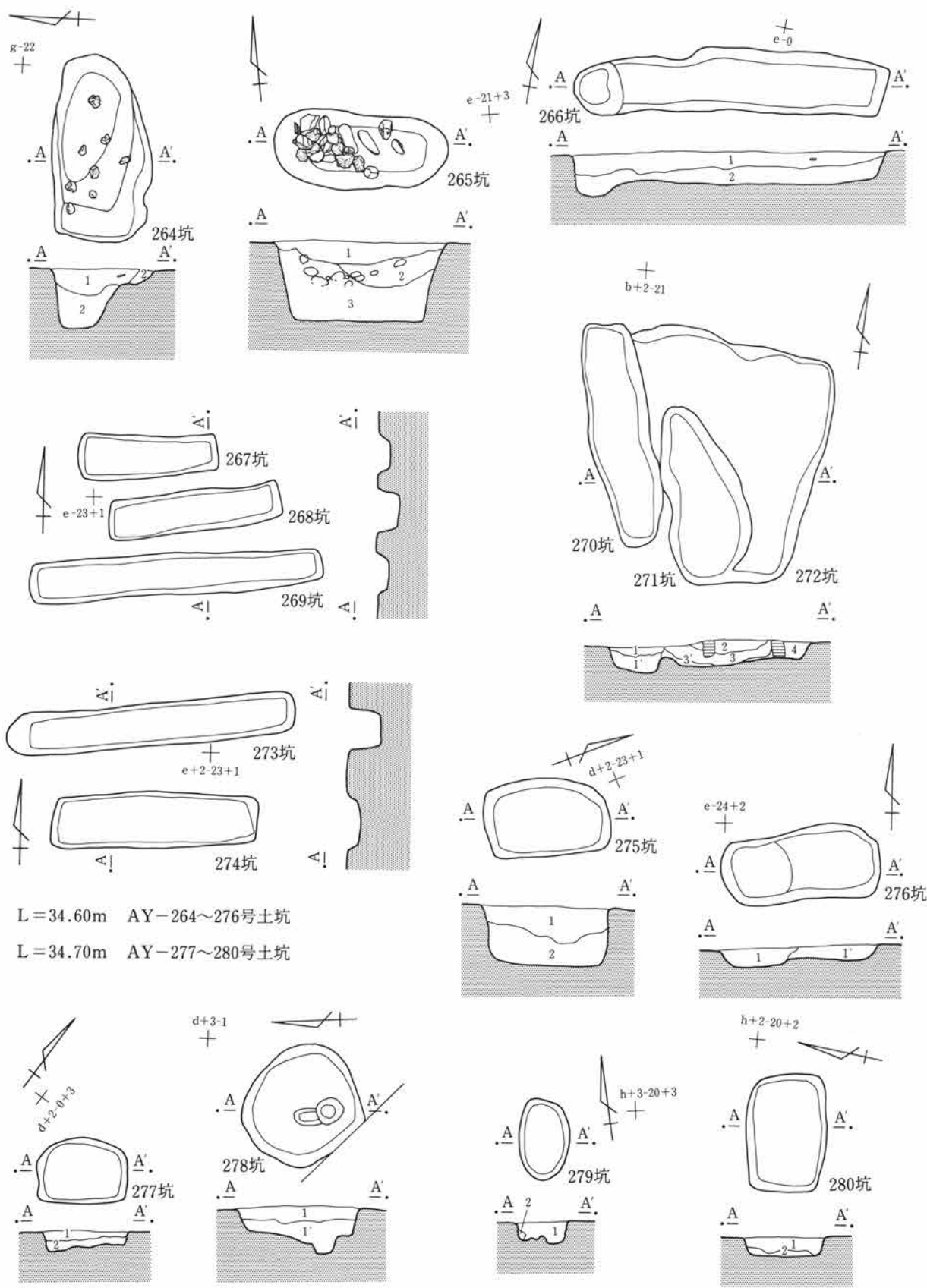




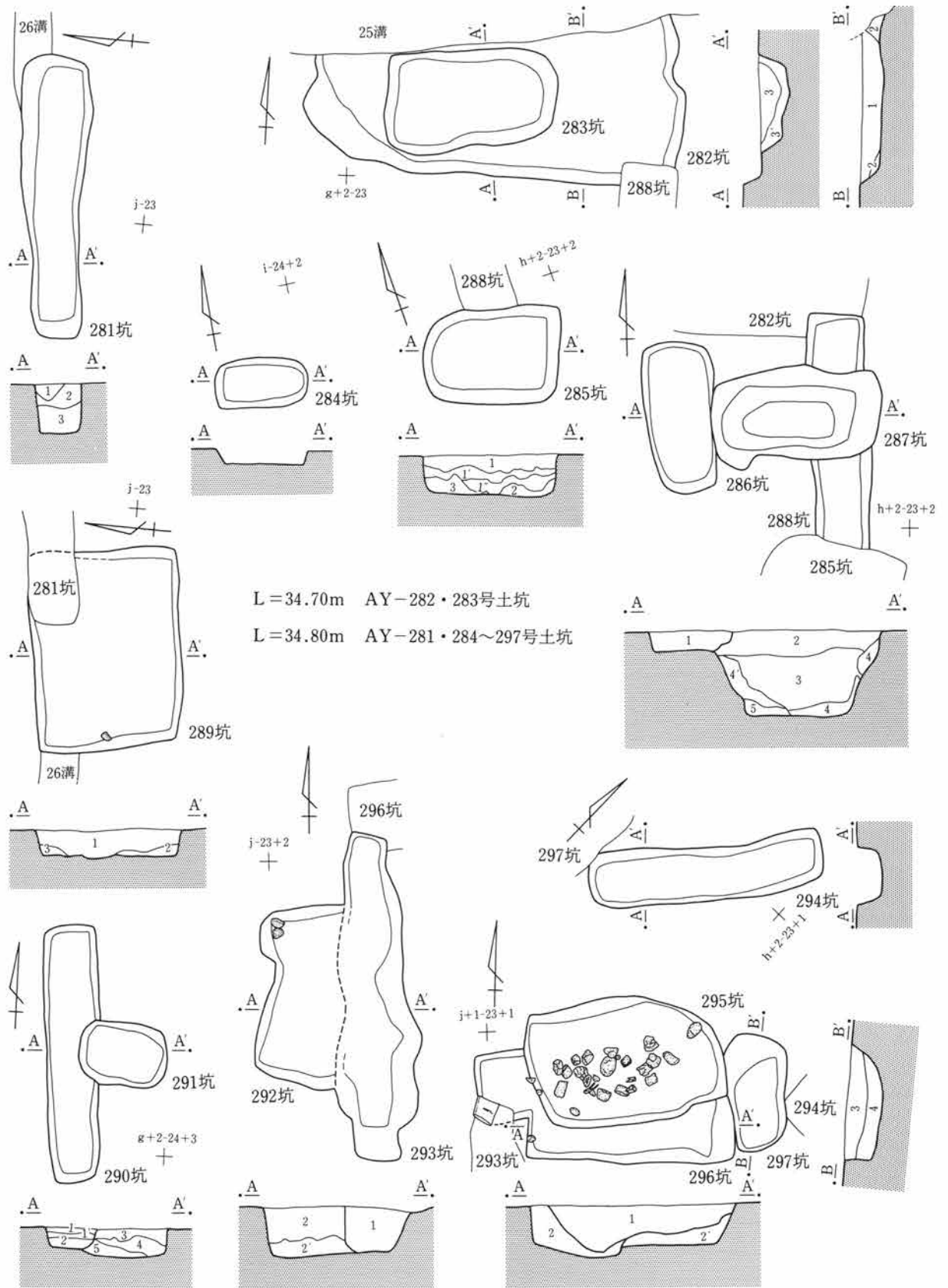
第267图 D区 AY-233~241号土坑



第268图 E区 AY-248~263号土坑

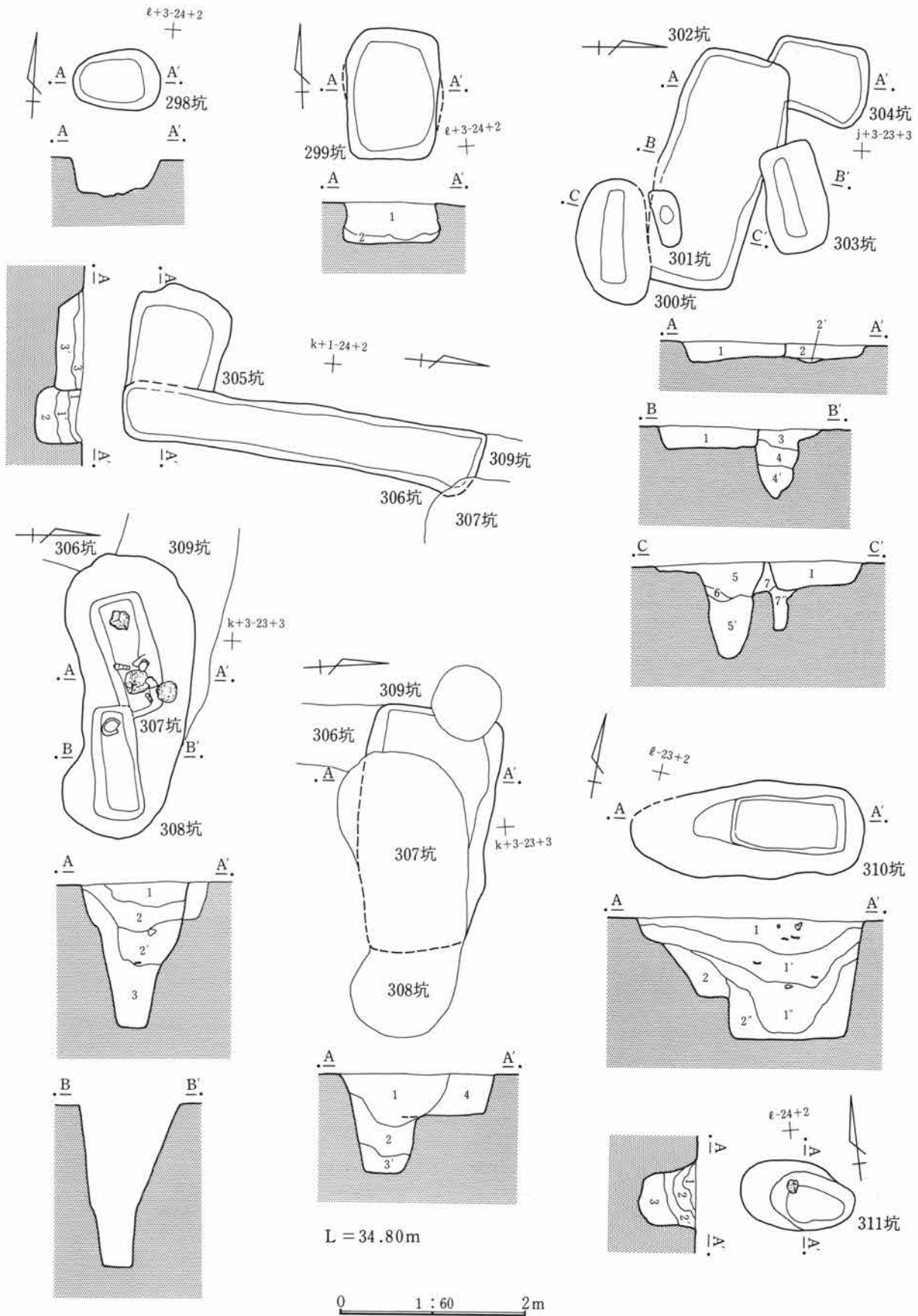


第269图 E区 AY-264~280号土坑

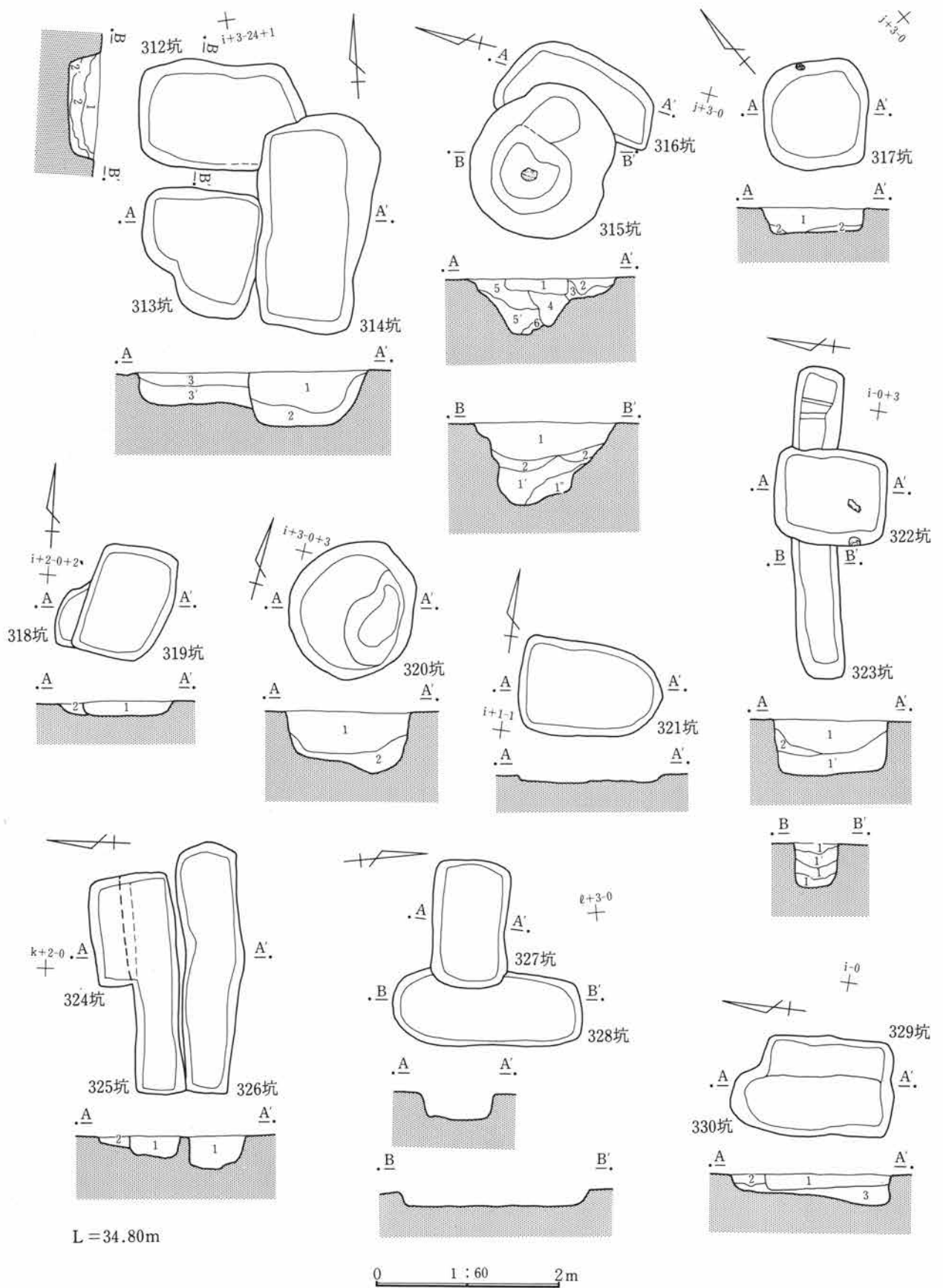


第270图 E区 AY-281~297号土坑



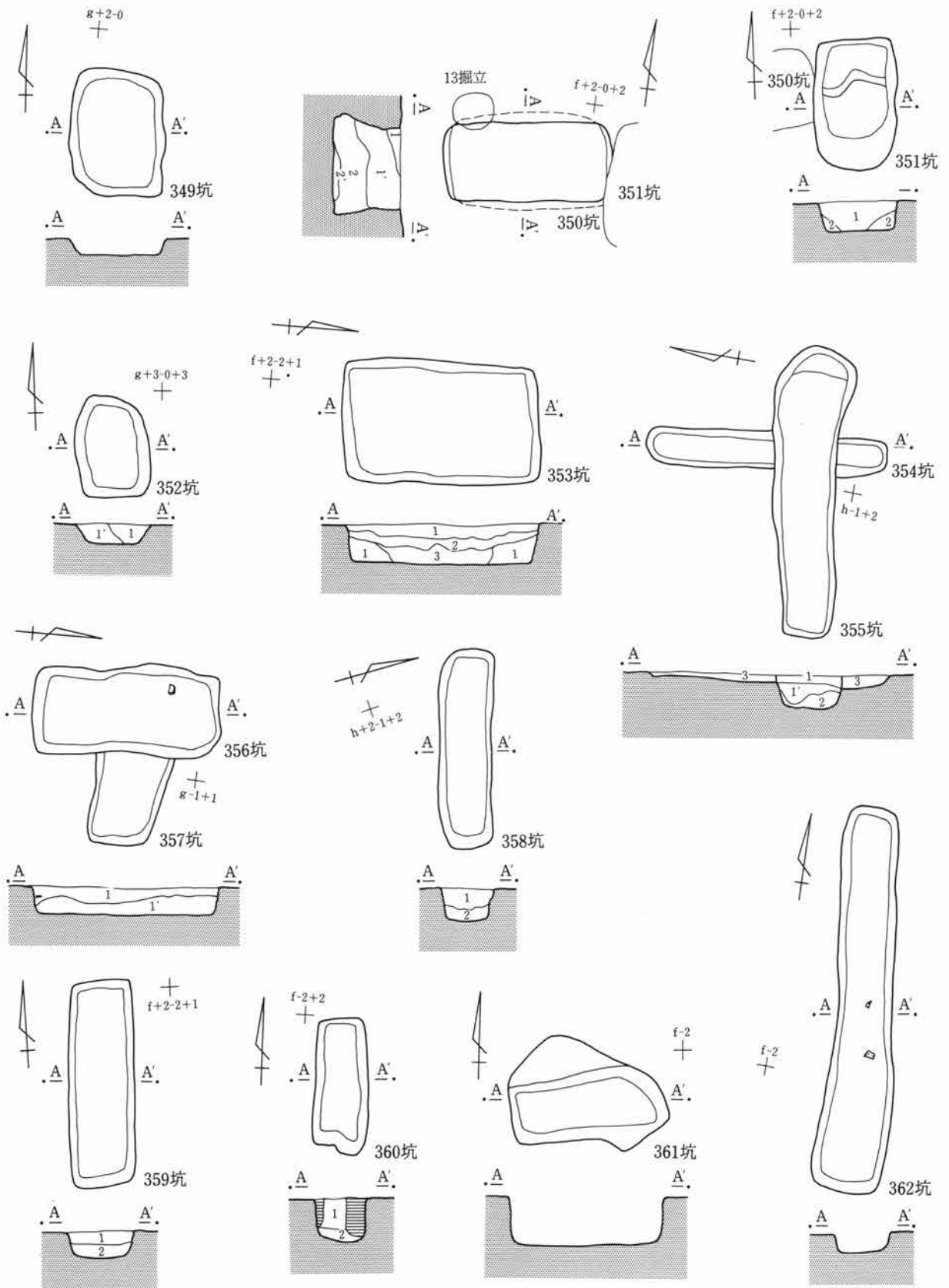


第271图 E区 AY-298~311号土坑



第272图 E区 AY-312~330号土坑

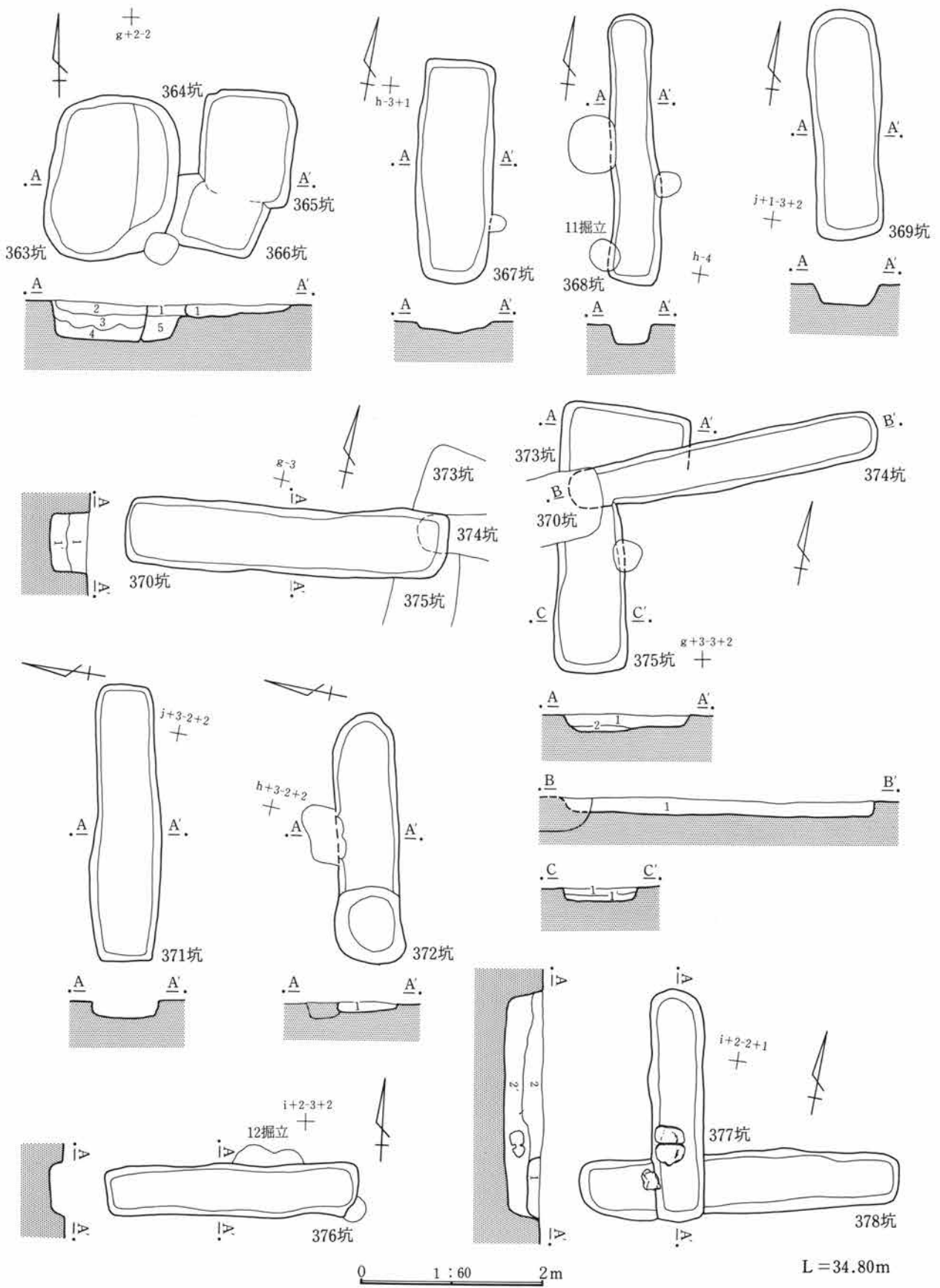




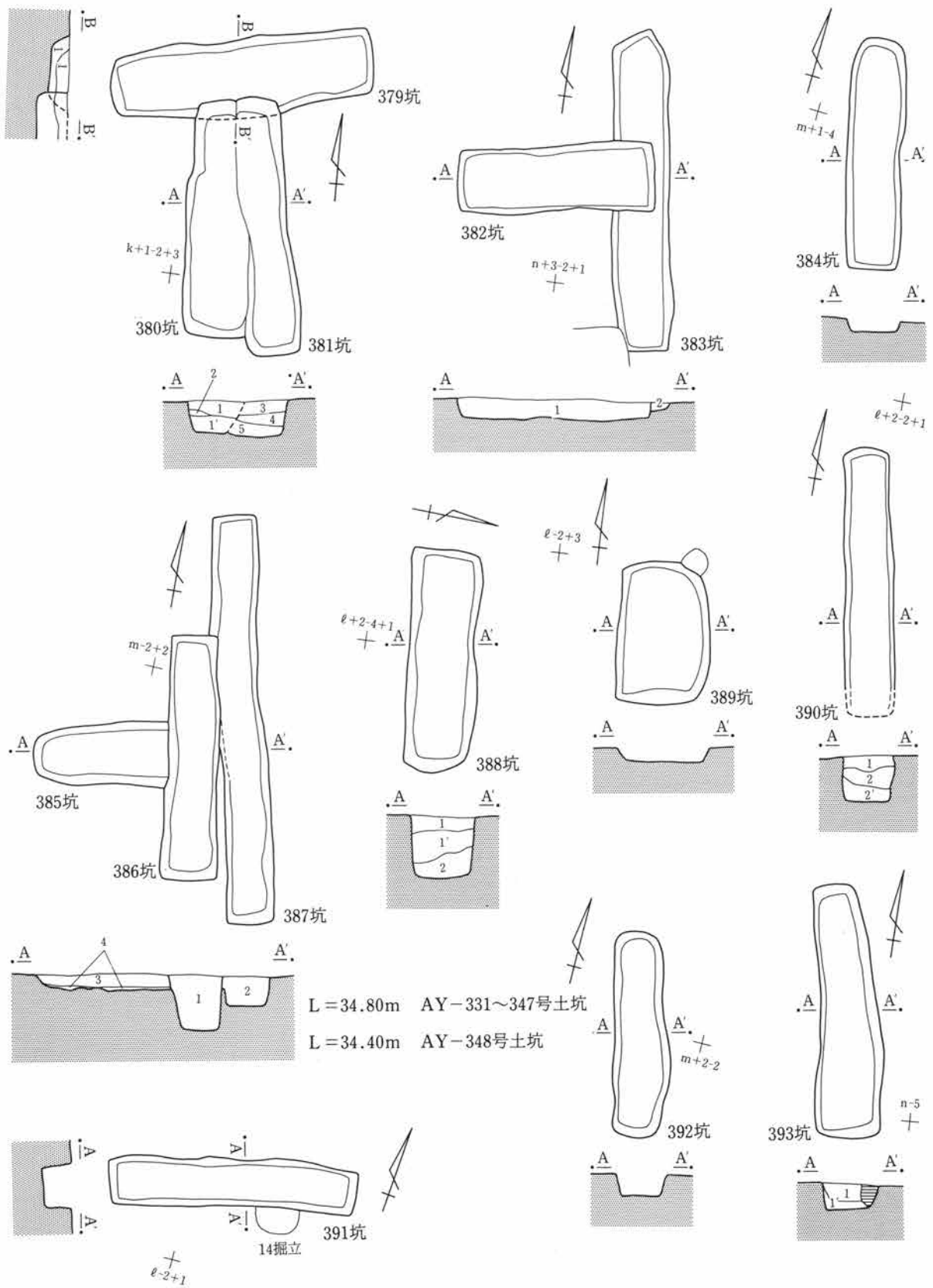
L = 34.80m

0 1 : 60 2m

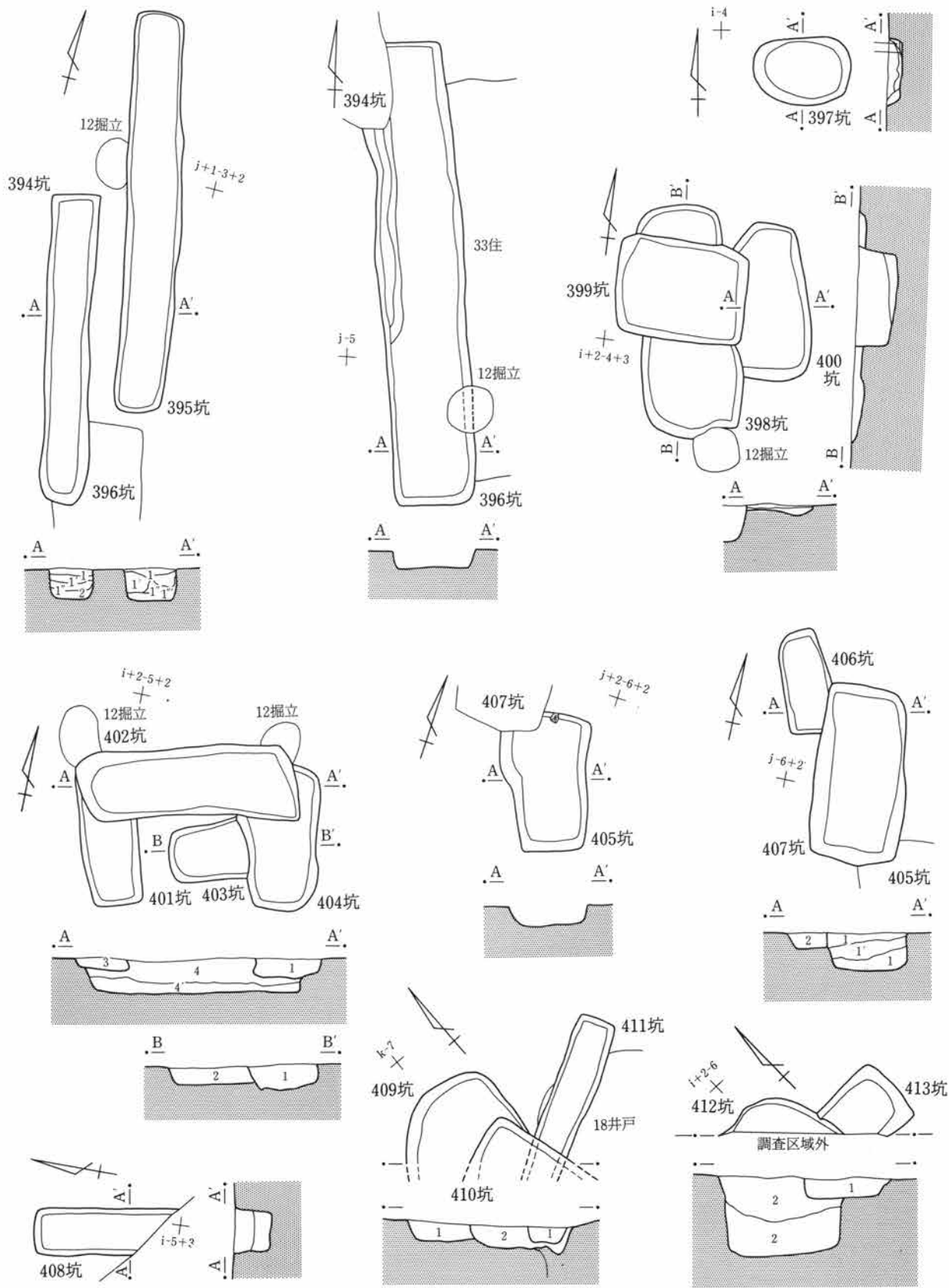
第274图 E区 AY-349~362号土坑



第257图 E区 AY-363~378号土坑

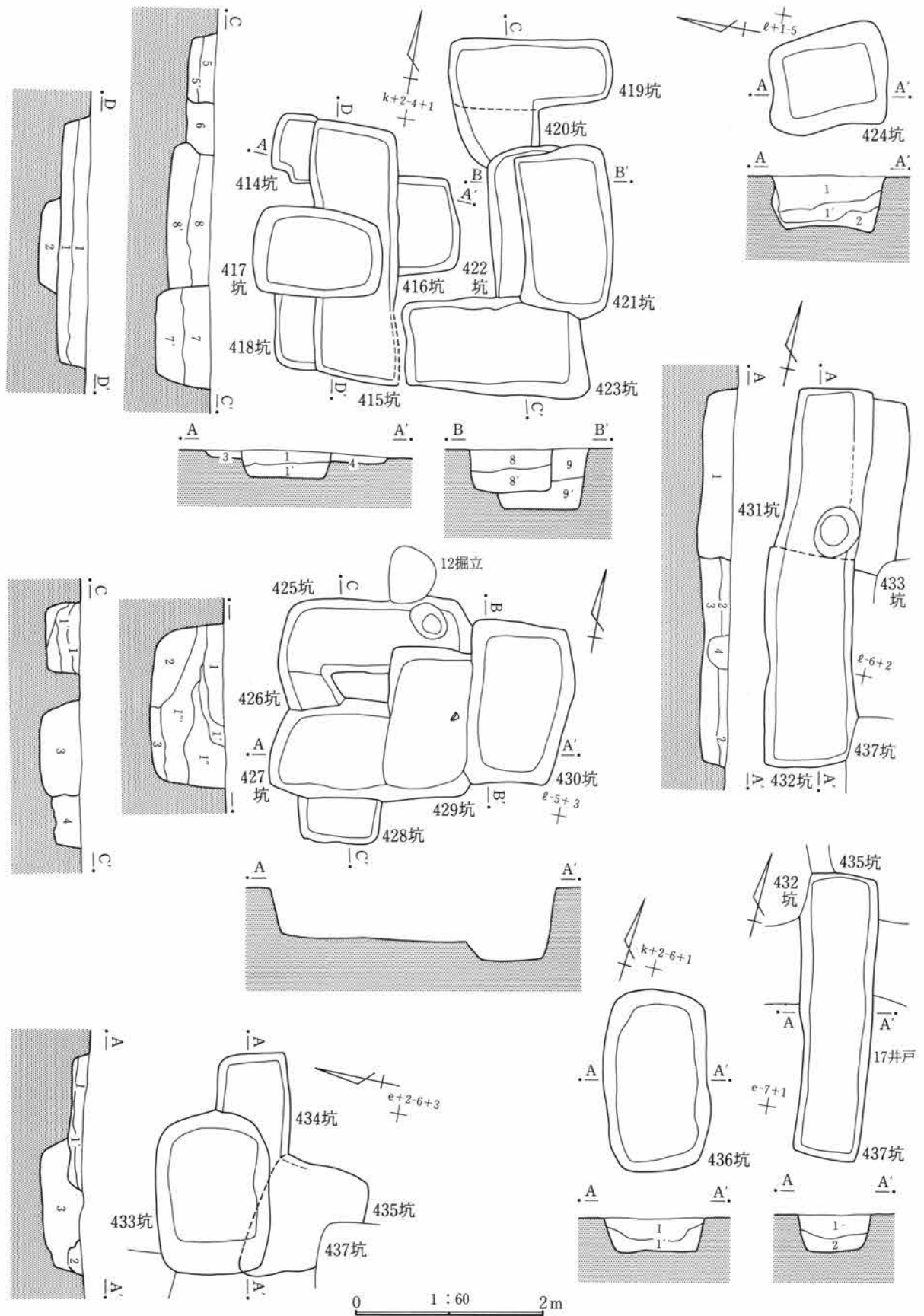


第276图 E区 AY-379~393号土坑



L = 34.80m

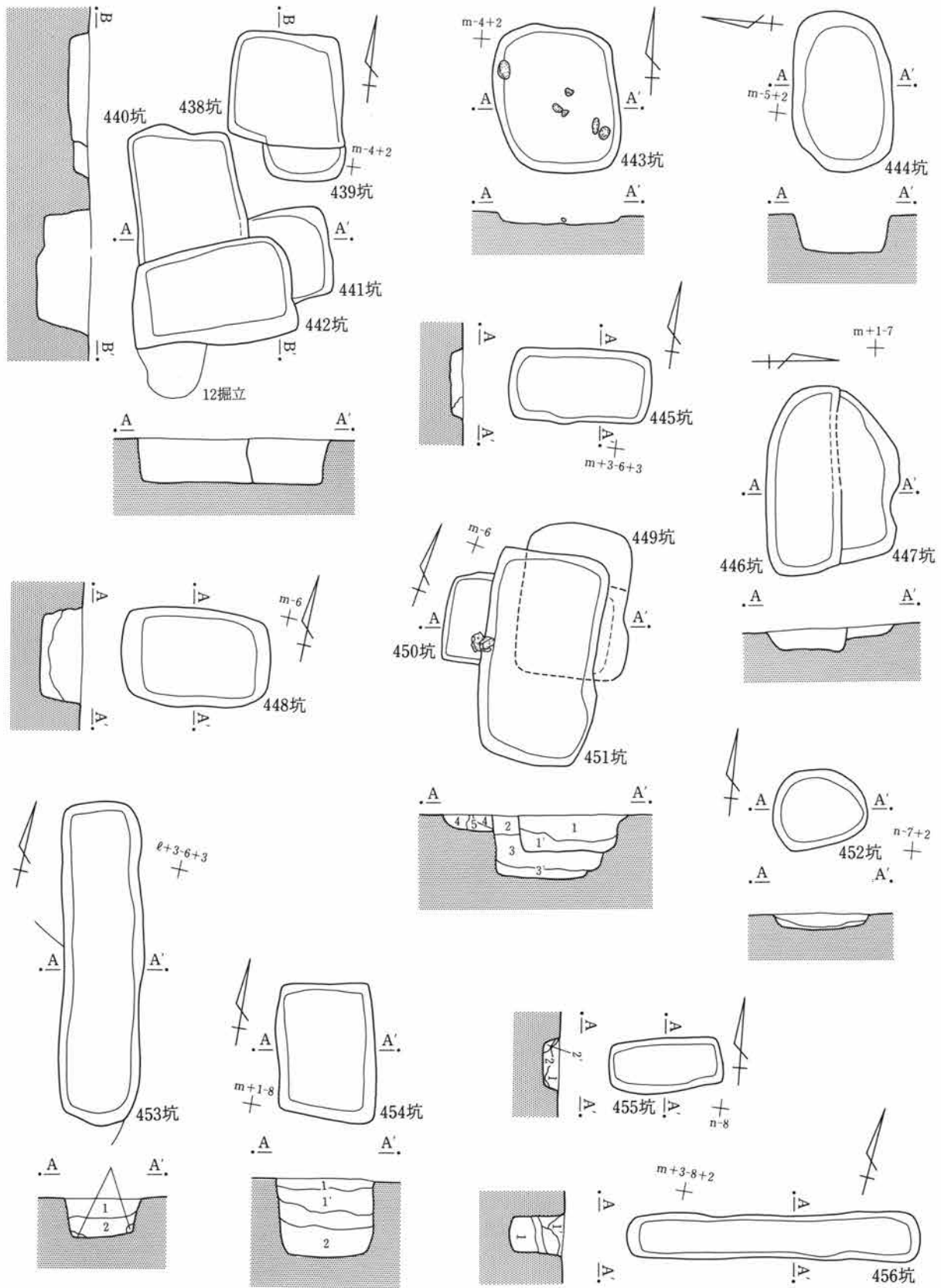
第277図 E区 394~413号土坑



第278图 E区 AY-414~437号土坑

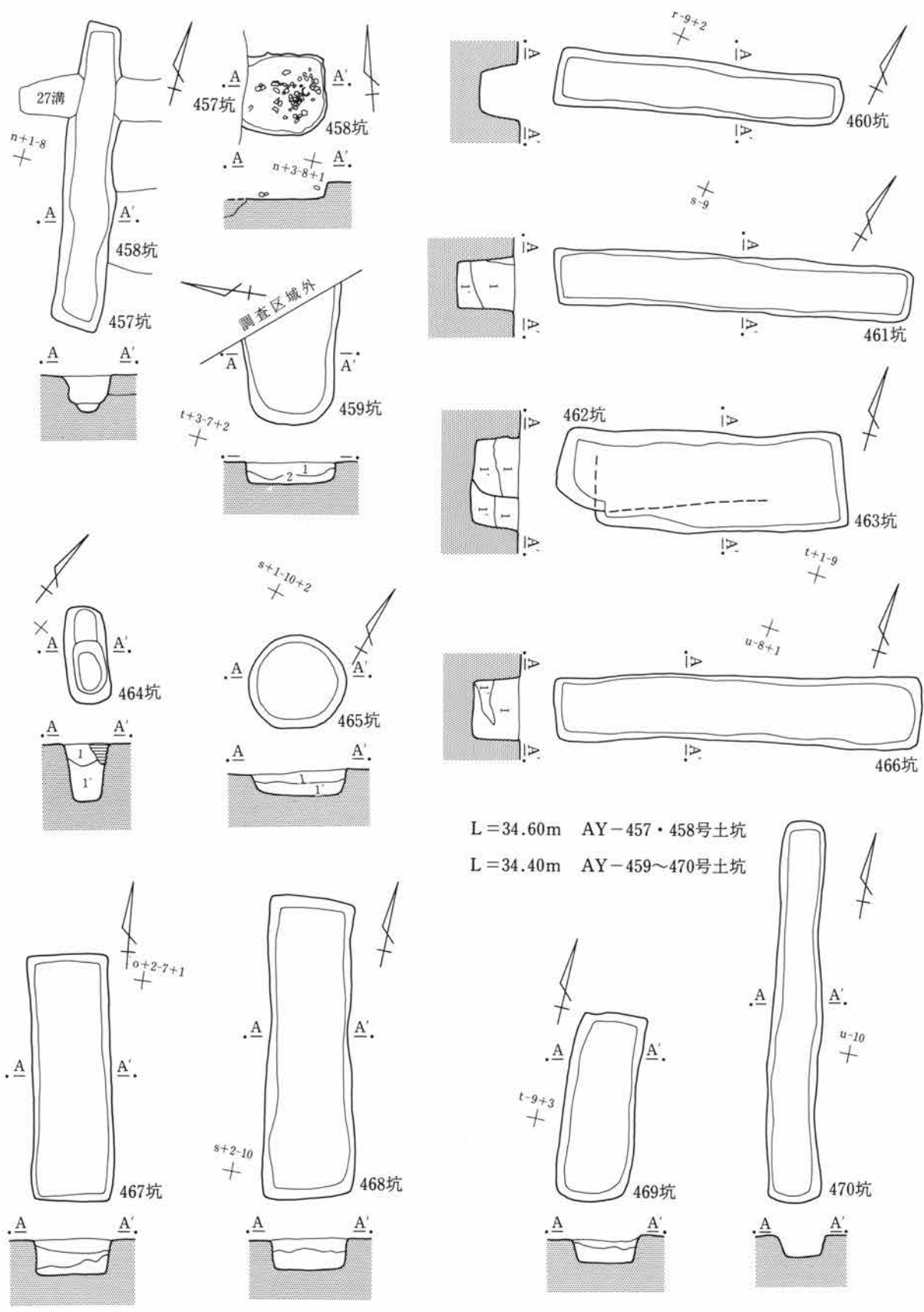
L = 34.80m





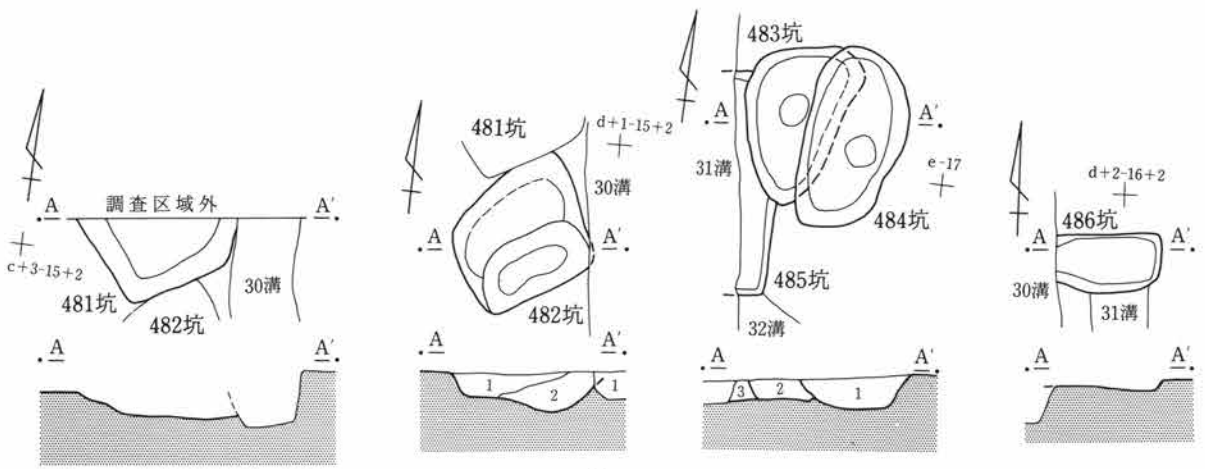
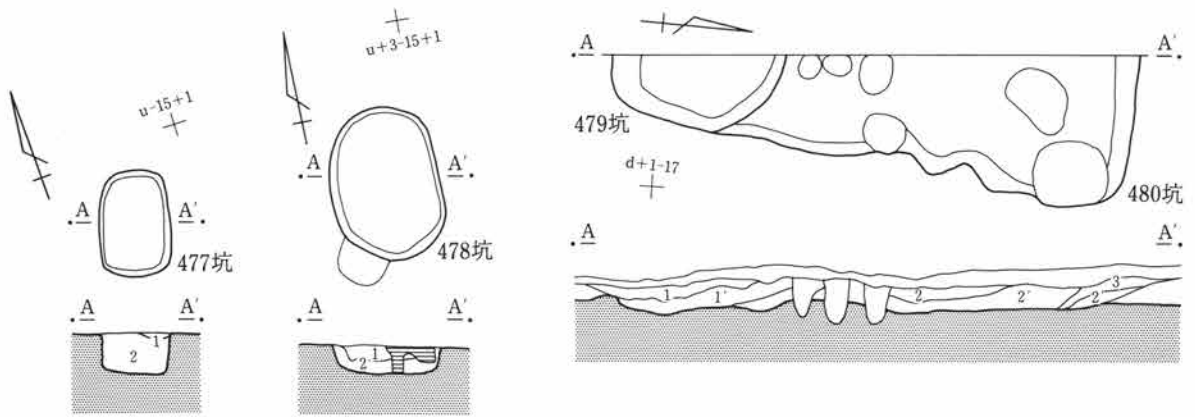
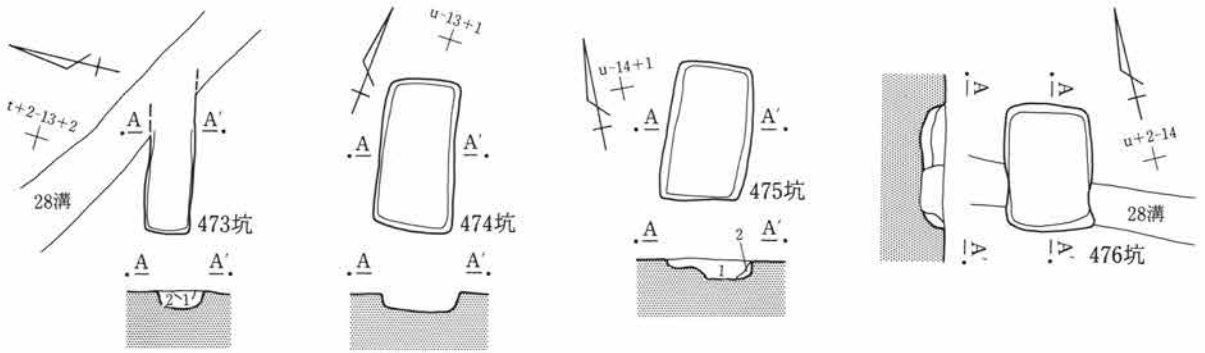
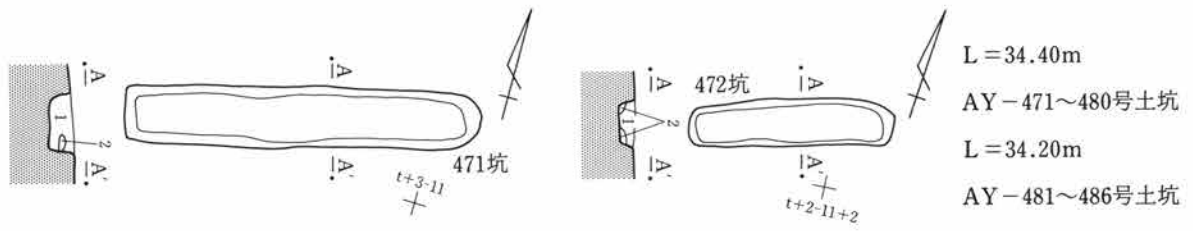
L = 34.80m

第279图 E区 AY-438~456号土坑



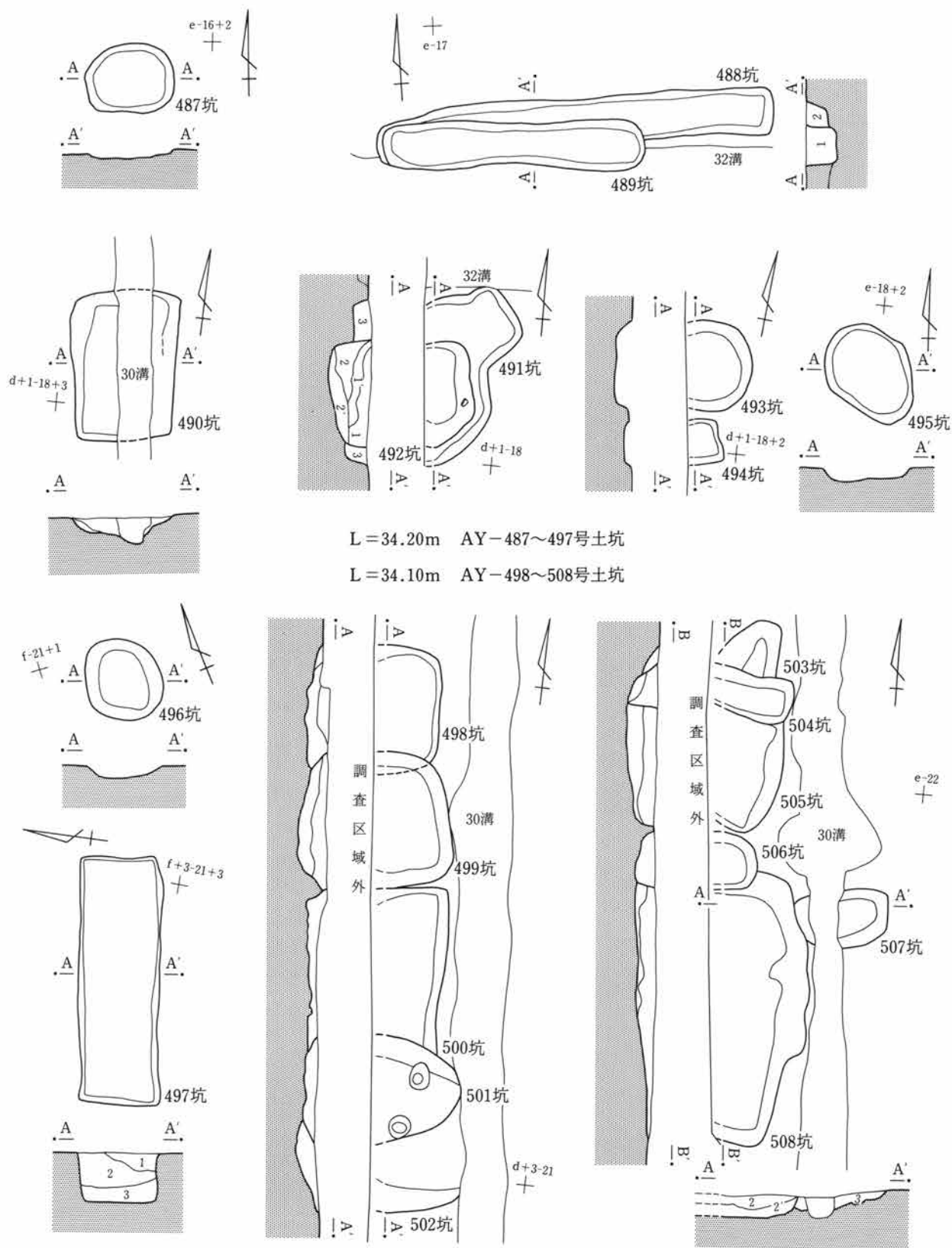
L = 34.60m AY-457·458号土坑  
 L = 34.40m AY-459~470号土坑

第280图 E区 AY-457~470号土坑

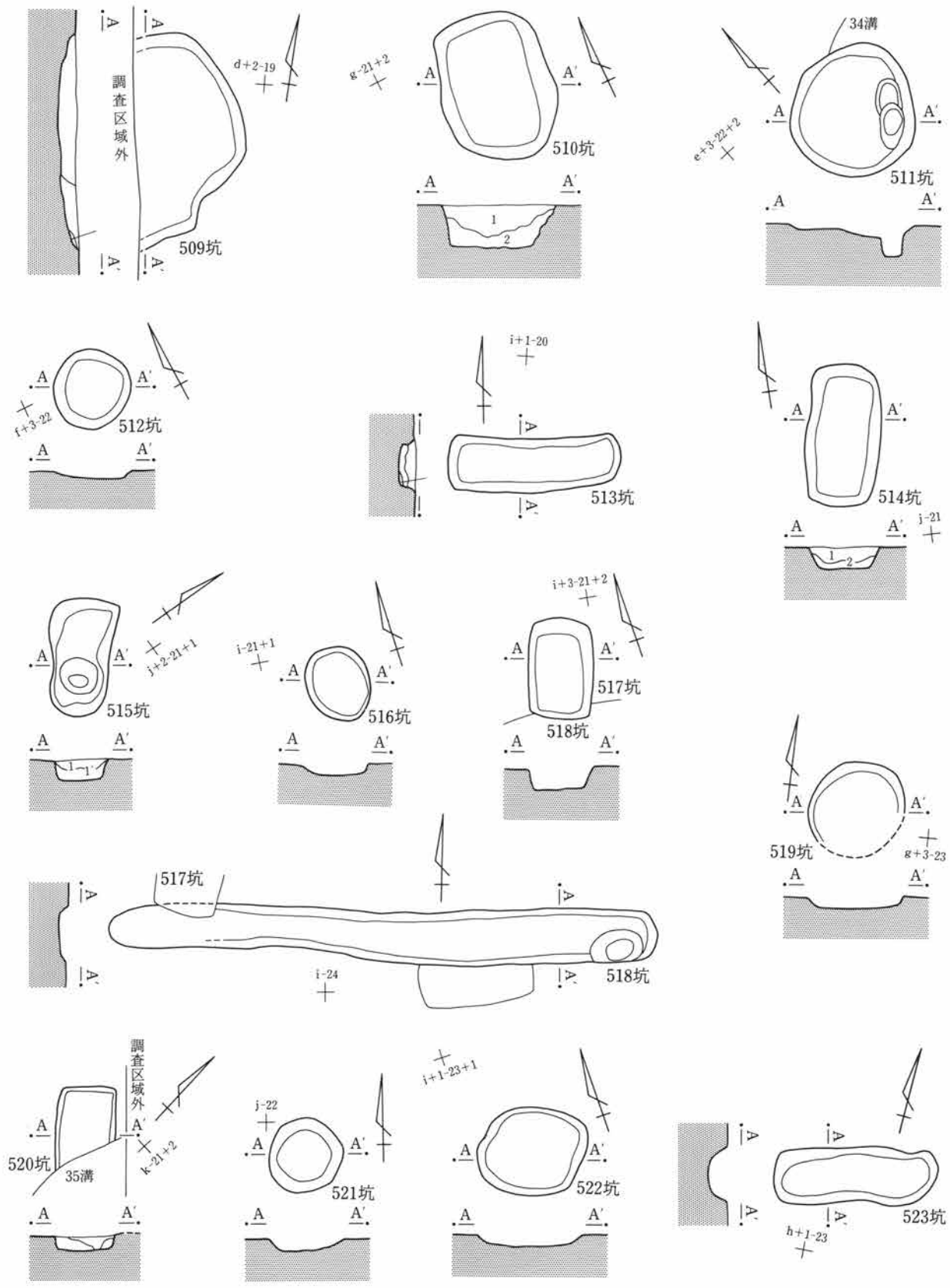


0 1 : 60 2m

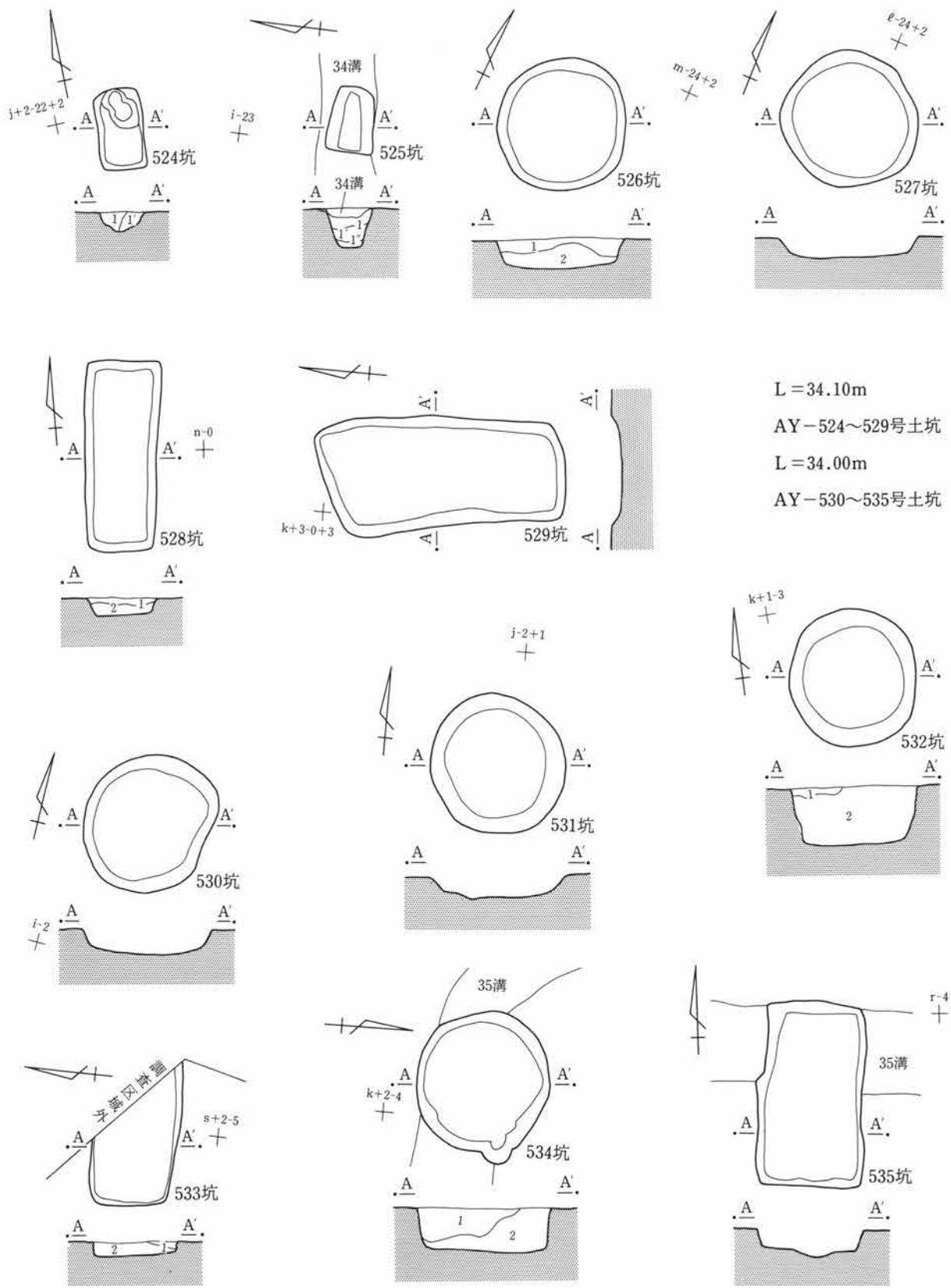
第281图 E区 AY-471~478号土坑 F区 AY-479~486号土坑



第282图 F区 AY-487~508号土坑

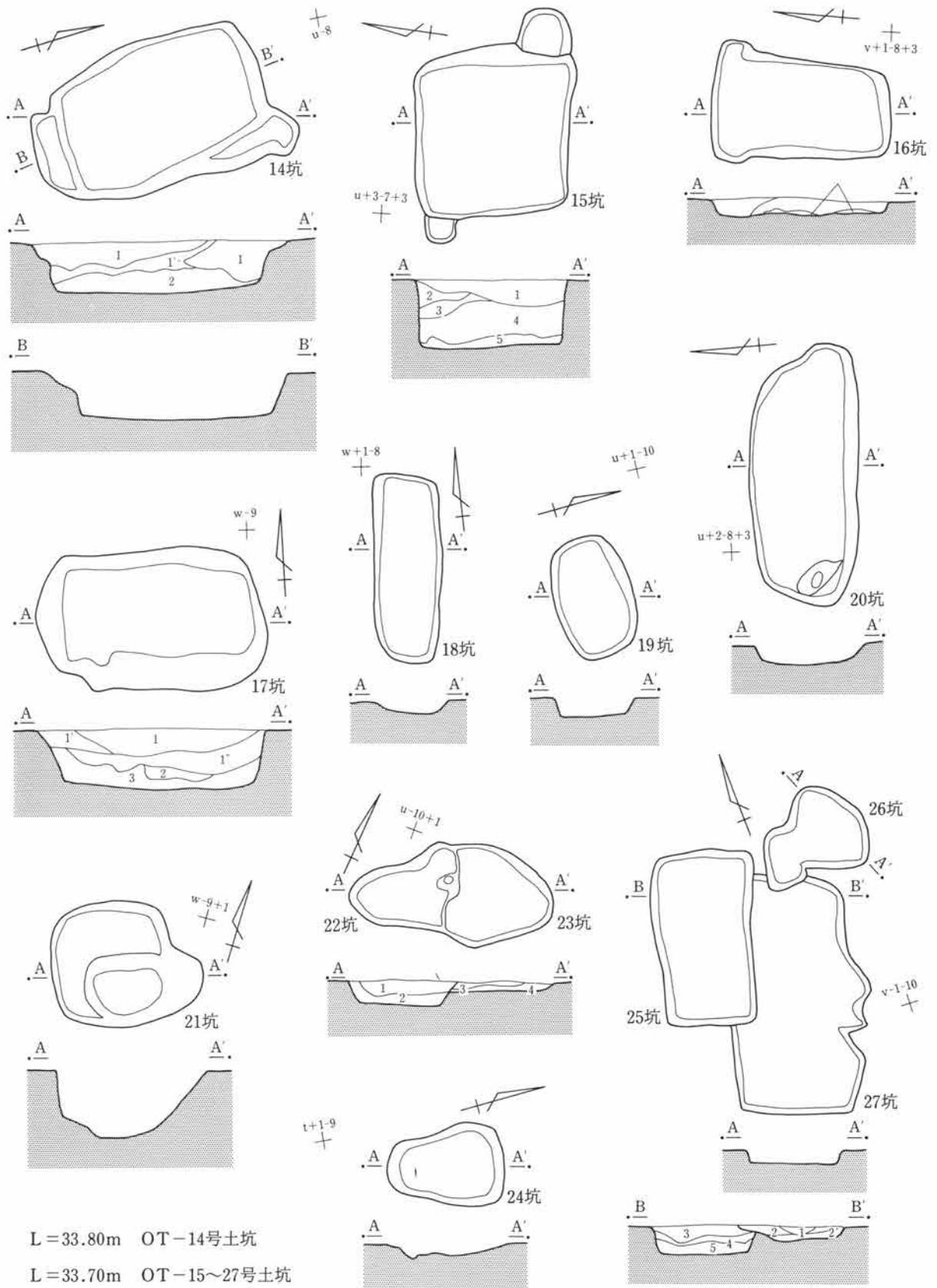


第23 第283图 F区 AY-509~523号土坑



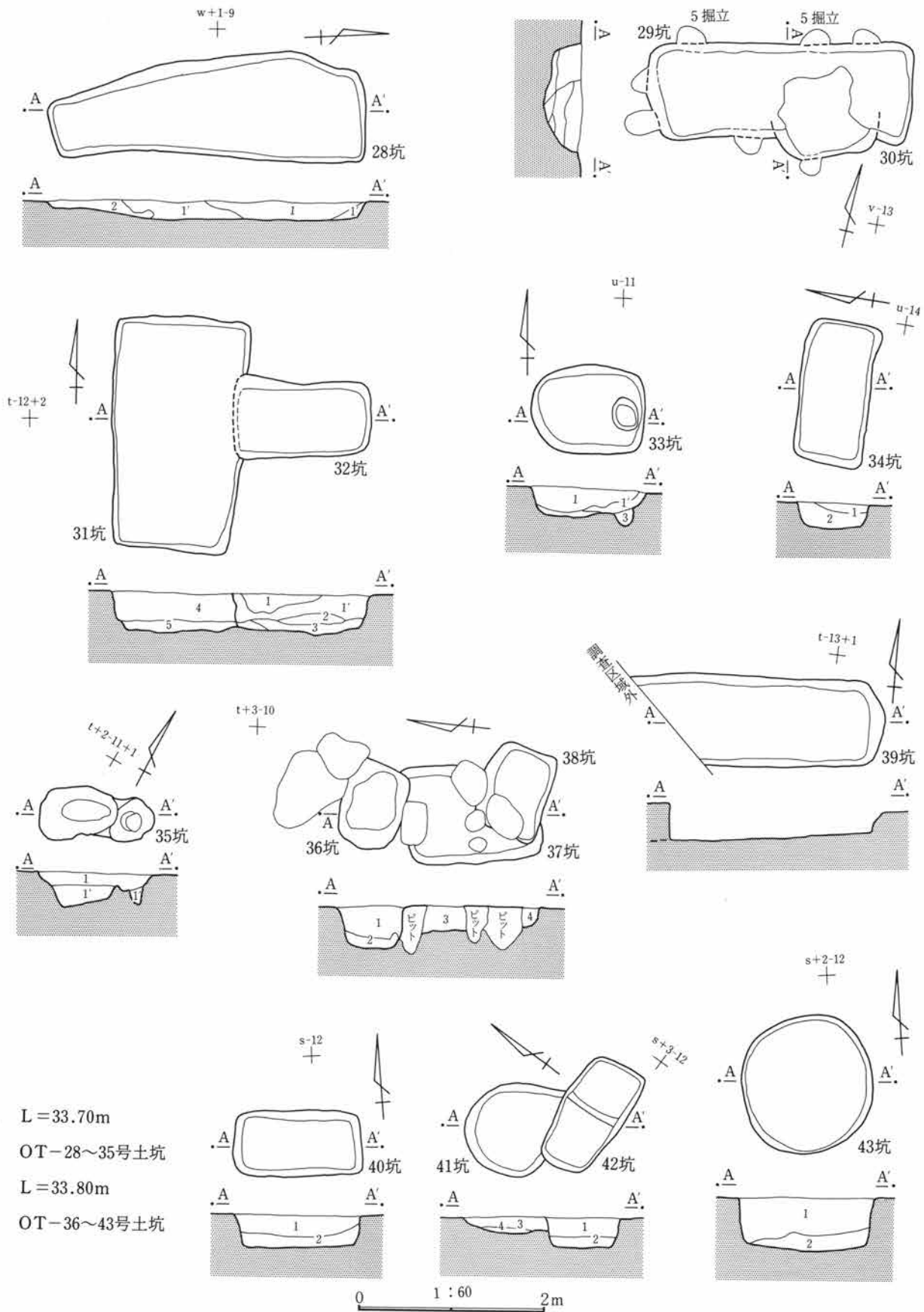
第284图 F区 AY-524~535号土坑





第286图 F区 OT-14~27号土坑





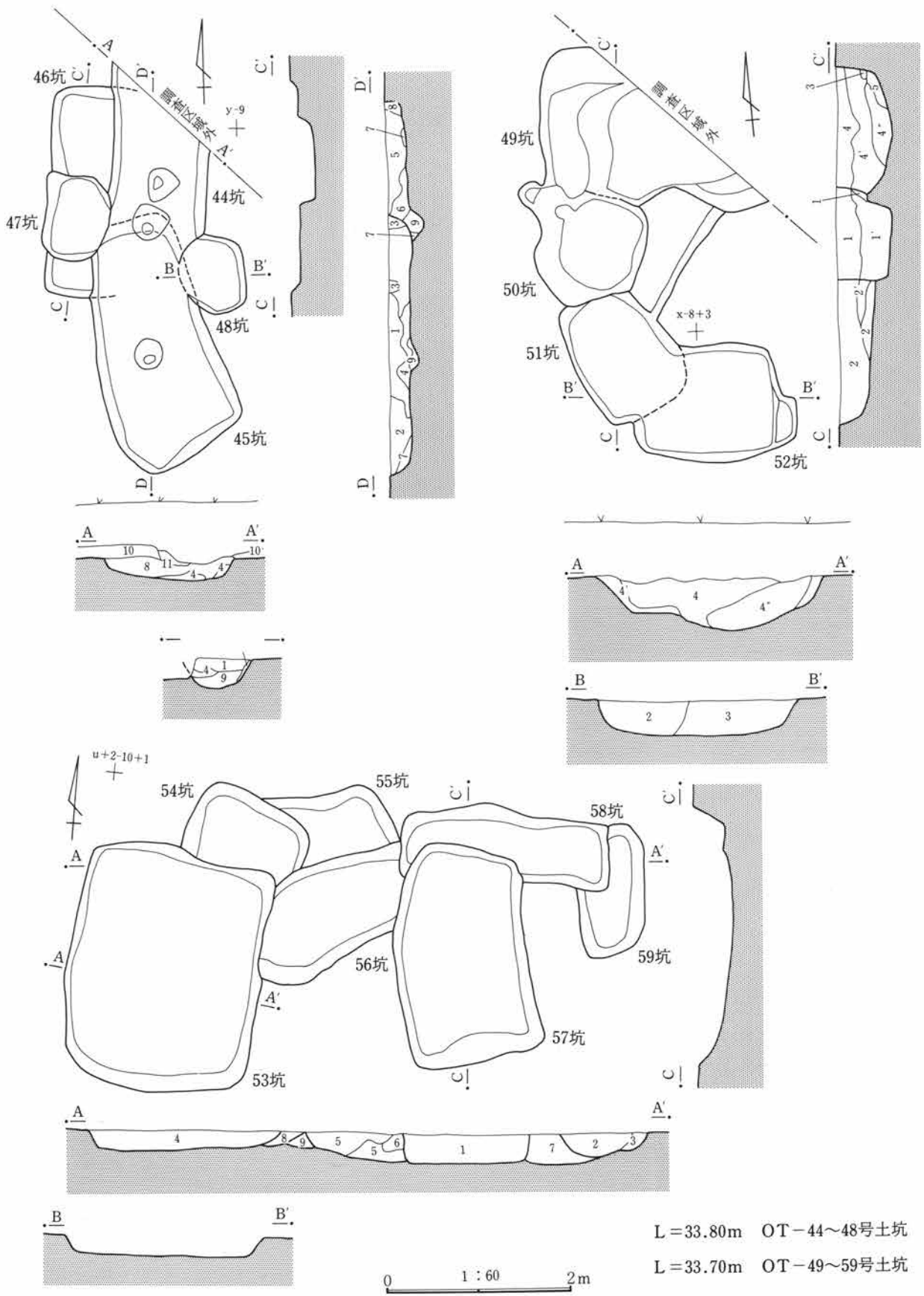
L = 33.70m

OT-28~35号土坑

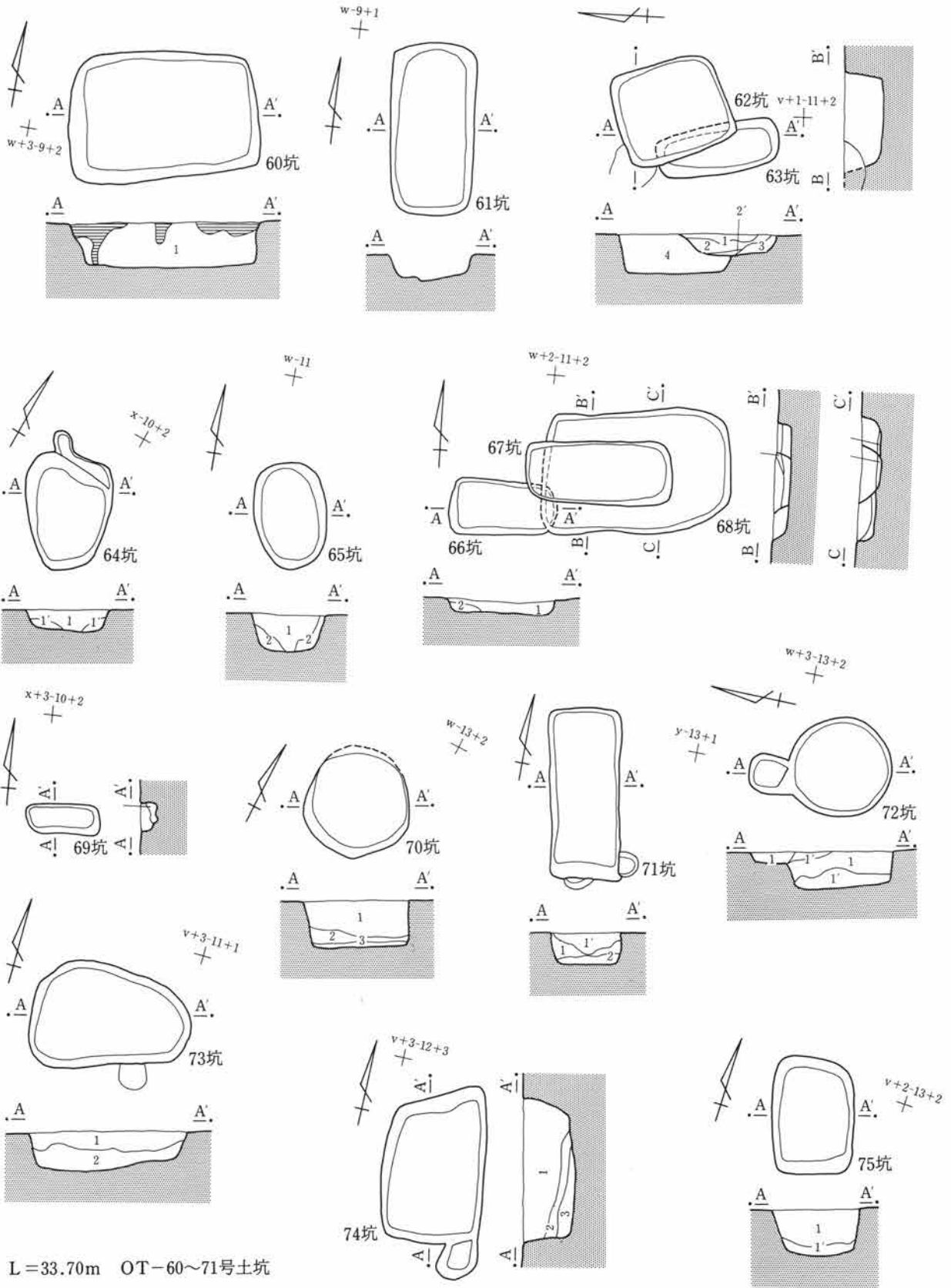
L = 33.80m

OT-36~43号土坑

第287图 F区 OT-28~43号土坑



第288图 F区 OT-44~59号土坑

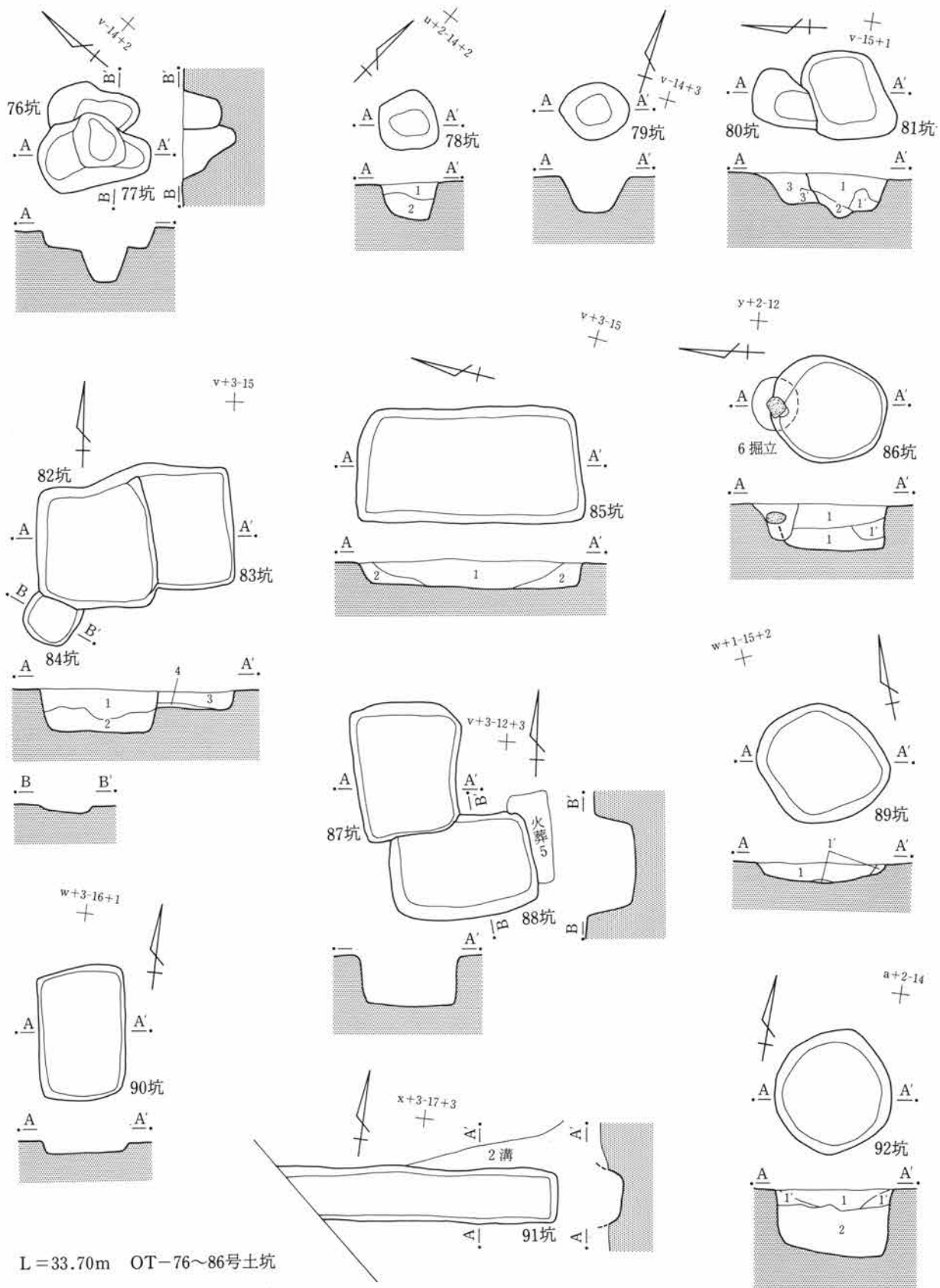


L = 33.70m OT-60~71号土坑

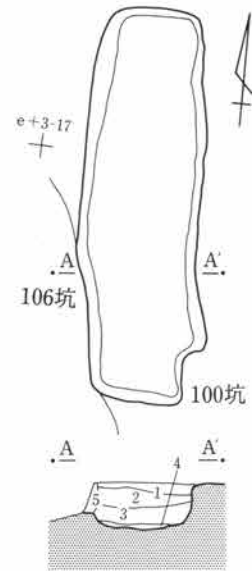
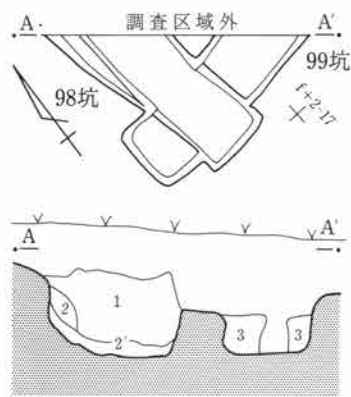
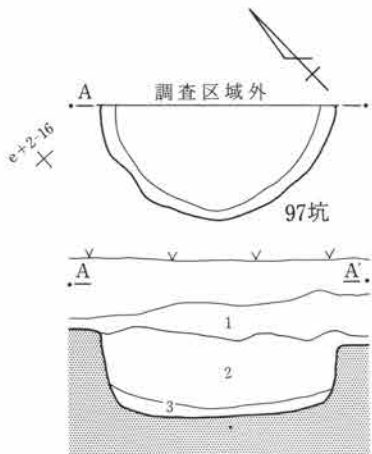
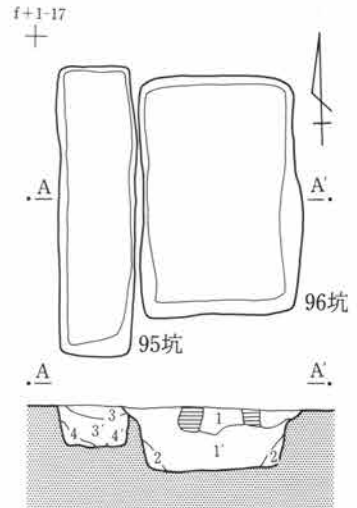
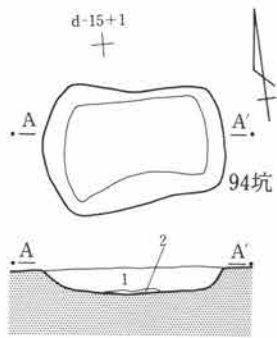
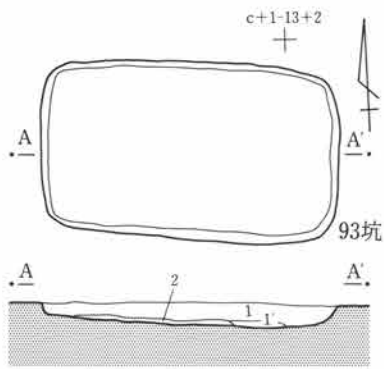
L = 33.60m OT-72~75号土坑

0 1:60 2m

第289图 F区 OT-60~75号土坑

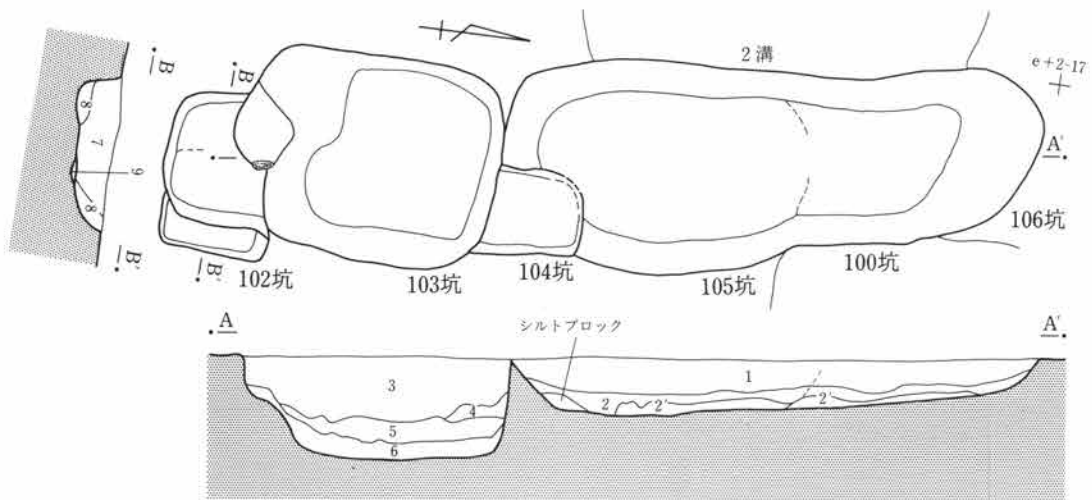
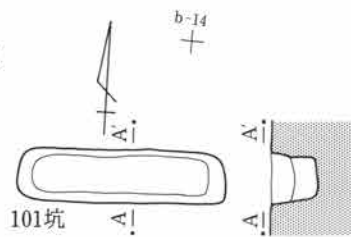


第290图 F区 OT-76~92号土坑



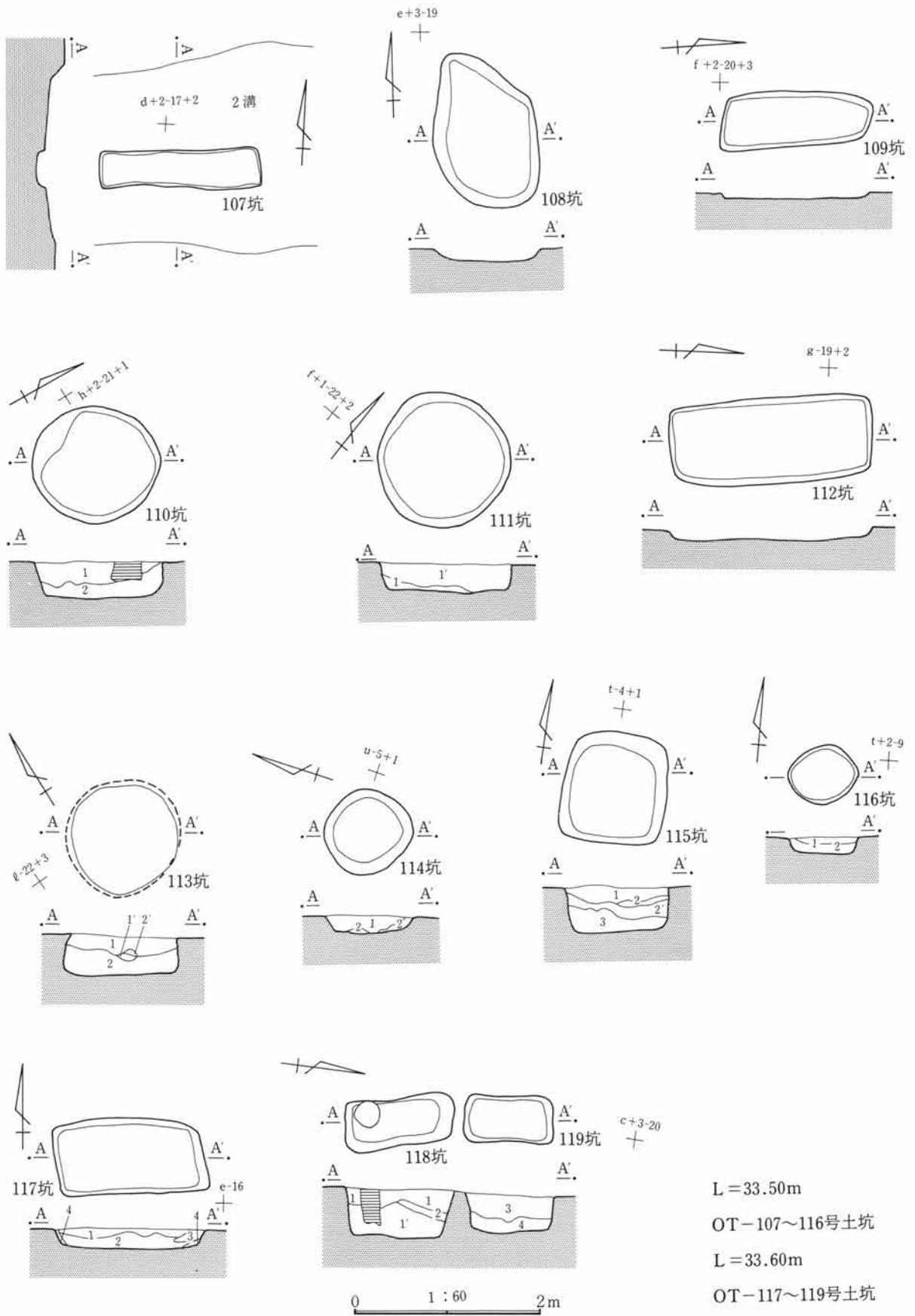
L = 33.60m OT-93~96・100~106土坑

L = 34.00m OT-97~99号土坑

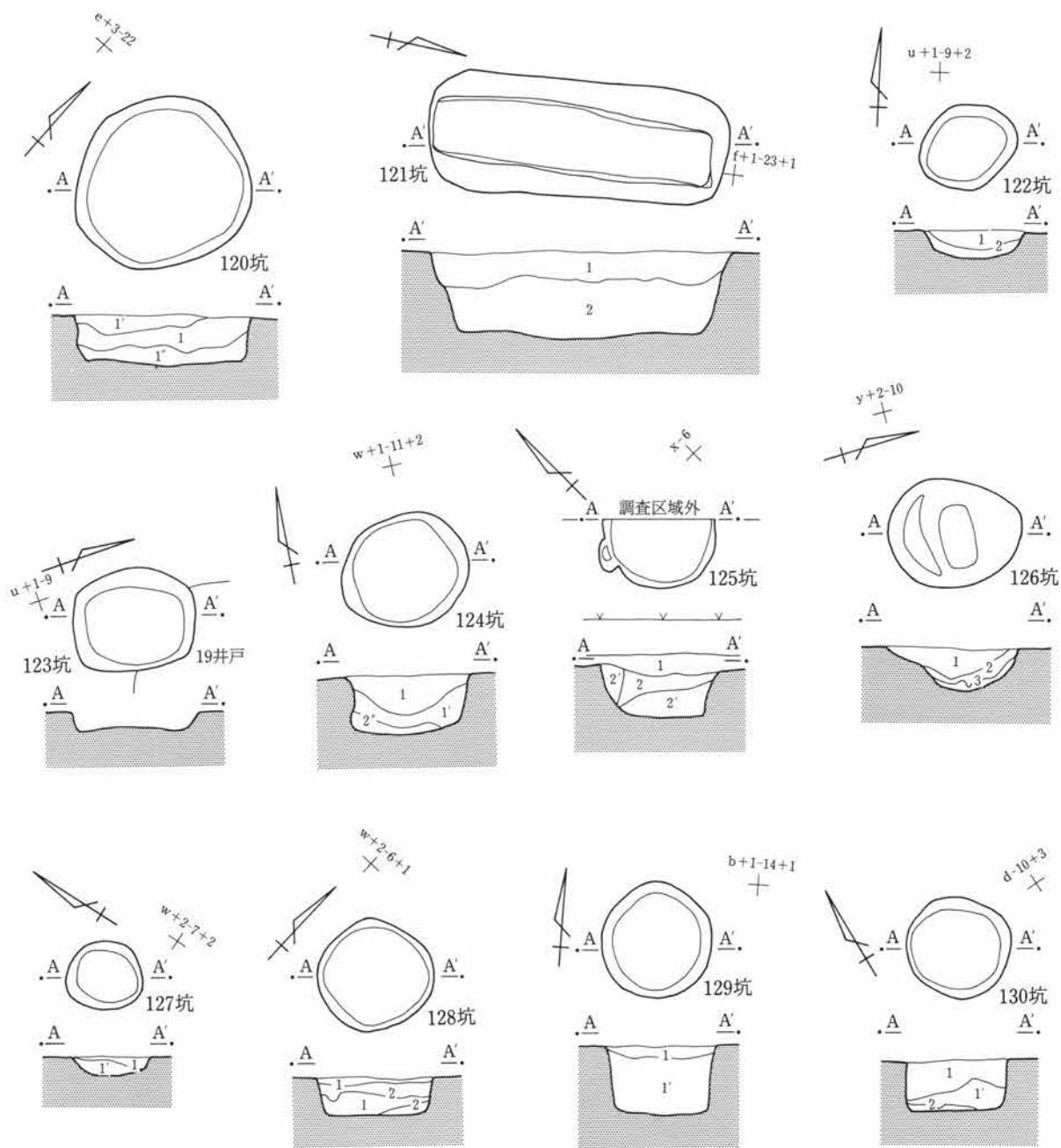


0 1 : 60 2m

第291図 G区 OT-93~106号土坑



第292图 G区 OT-107~119号土坑



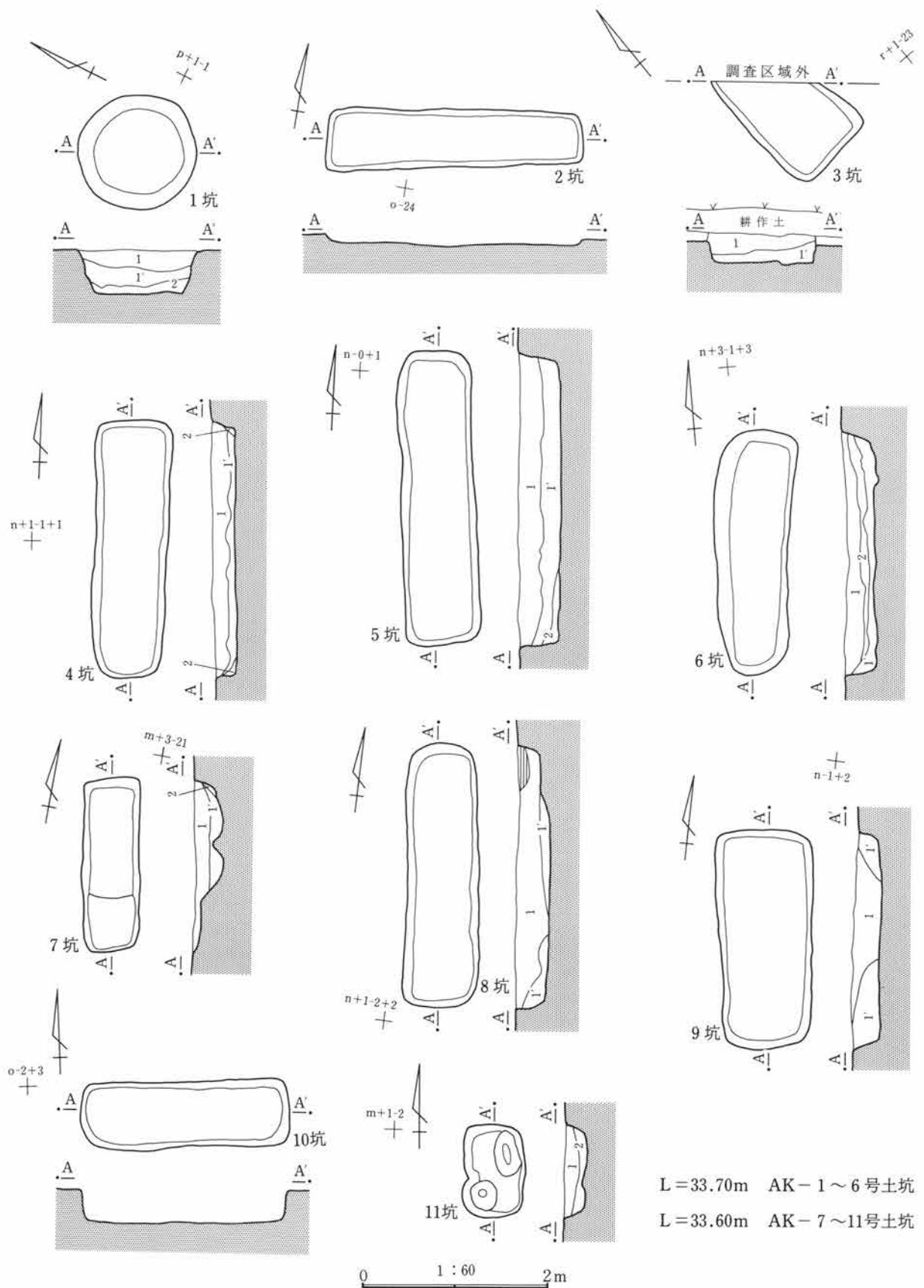
L = 33.60m OT-120・121号土坑

L = 33.50m OT-122~126号土坑

L = 33.40m OT-127~130号土坑

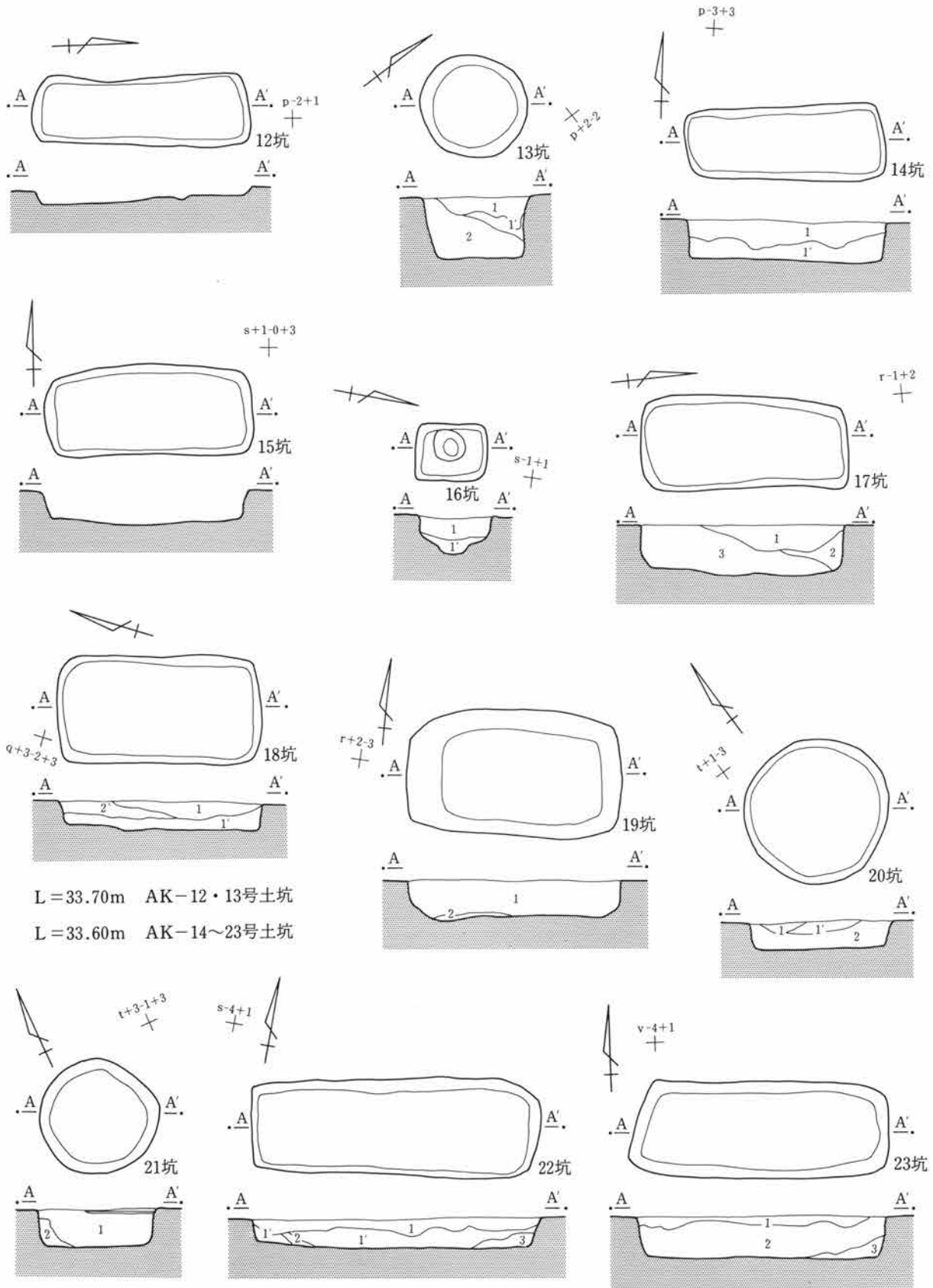
0 1 : 60 2m

第293图 G区 OT-120~128号土坑 H区 OT-129・130号土坑



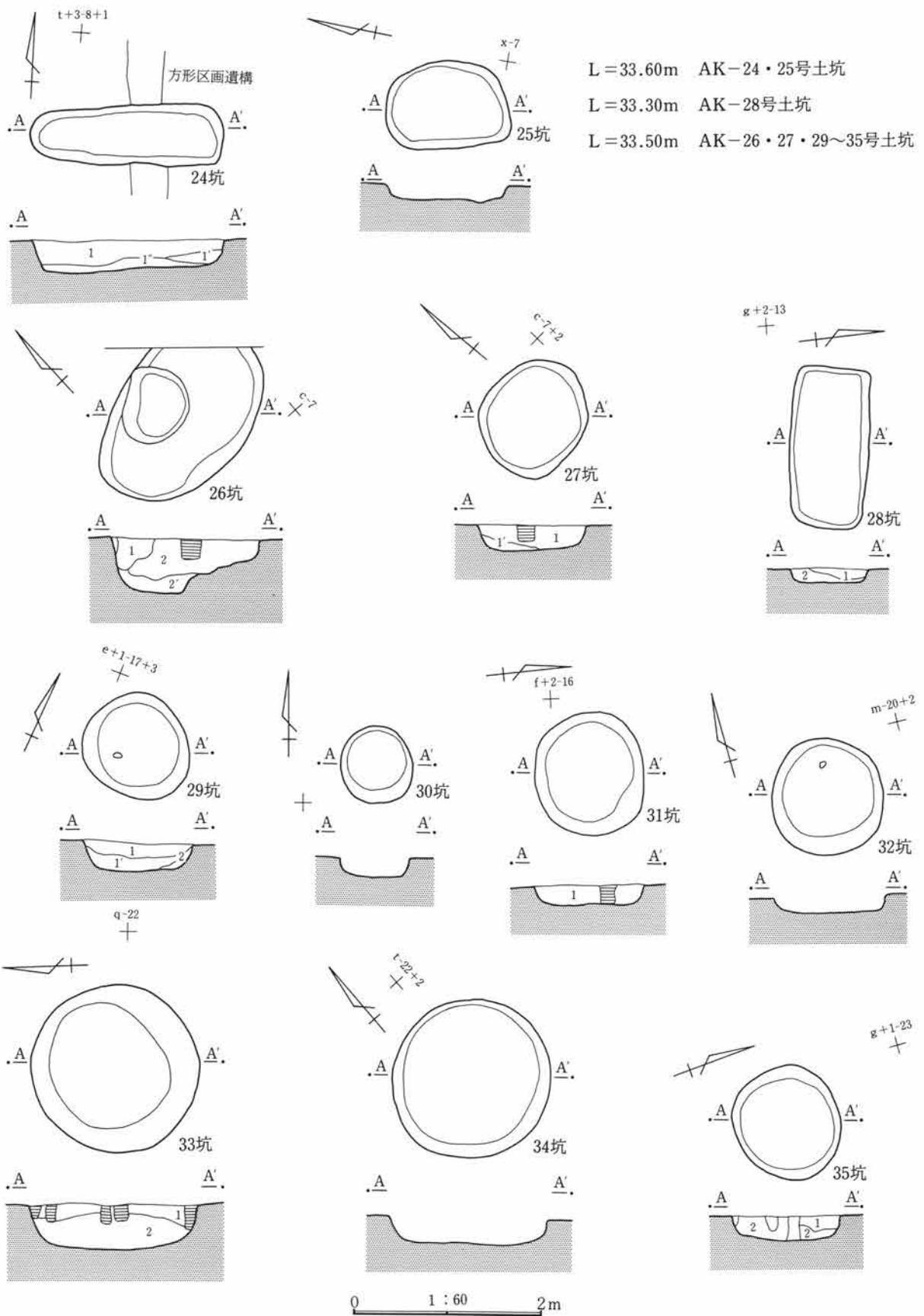
第294図 H区 AK-1~11号土坑



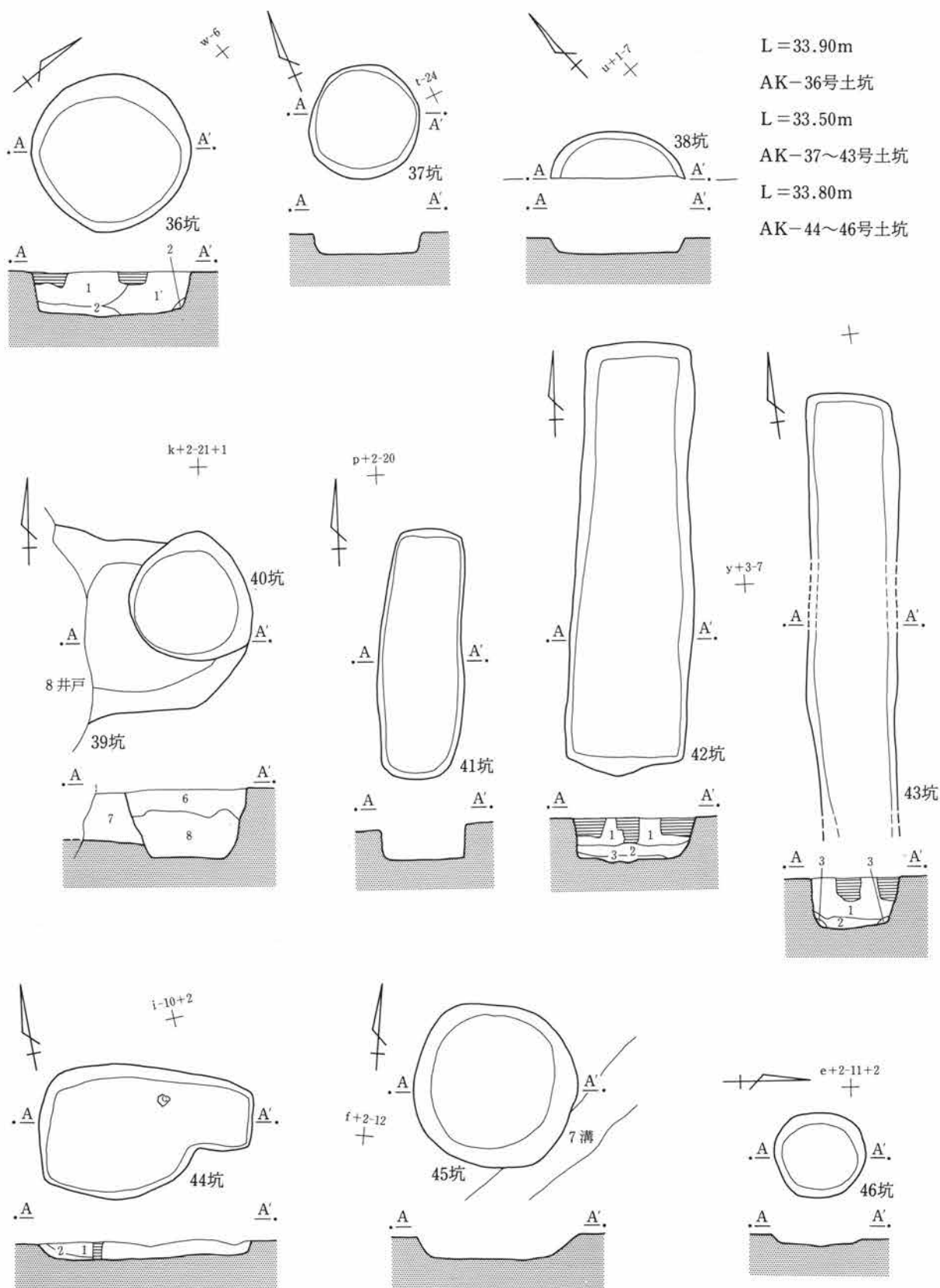


0 1 : 60 2m

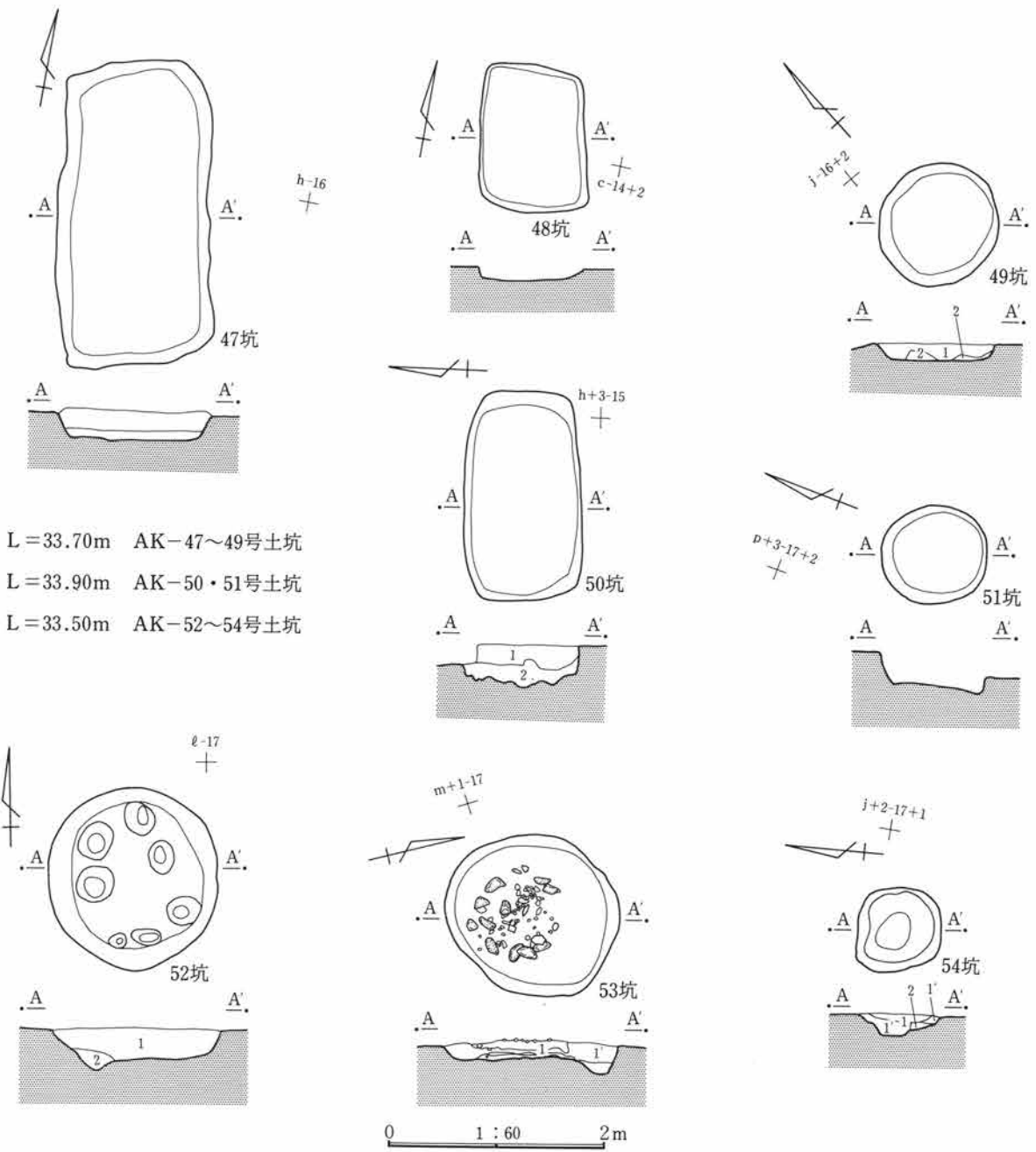
第295图 H区 AK-12~23号土坑



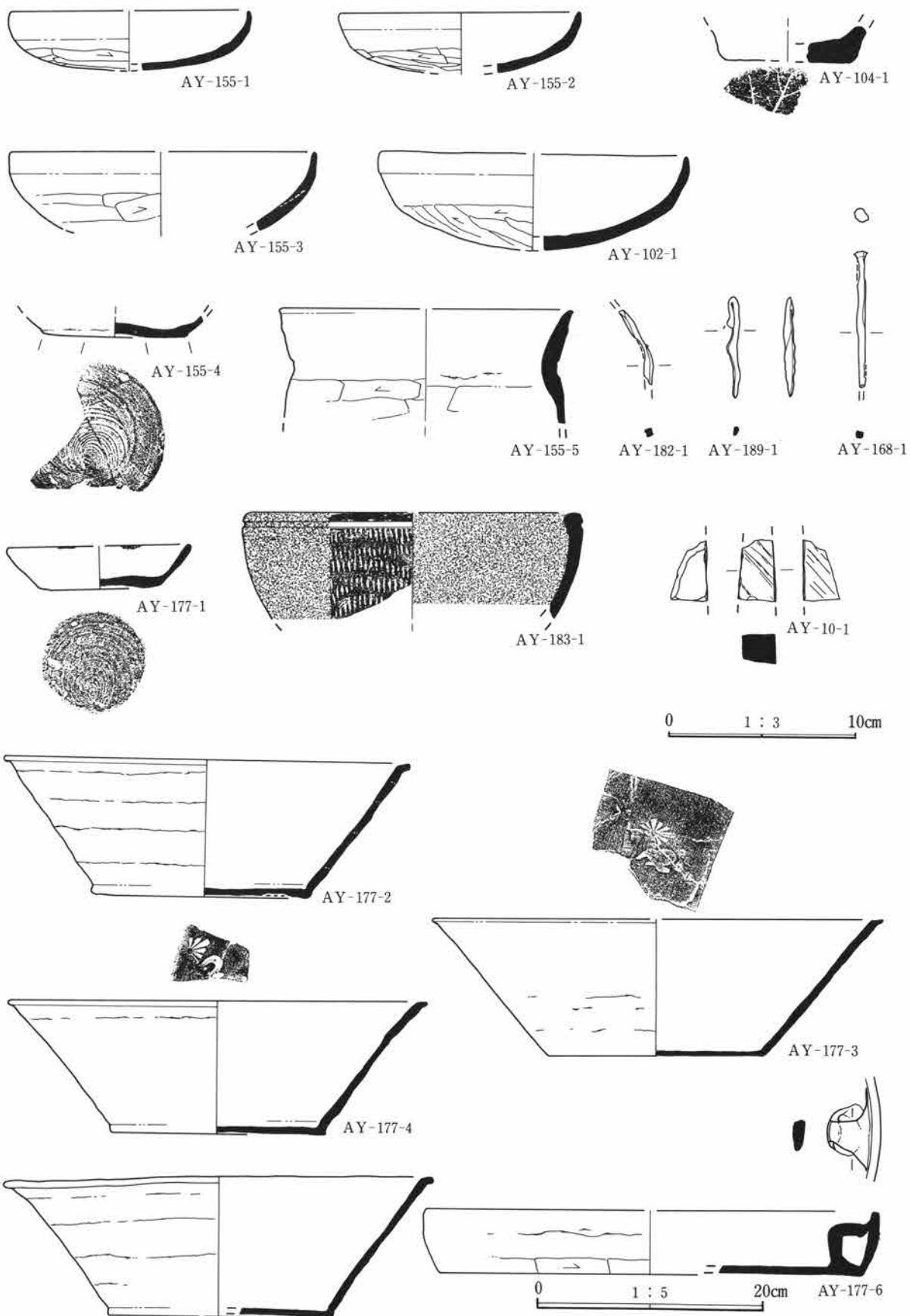
第296图 H区 AK-24~25号土坑 I区 AK-26~35号土坑



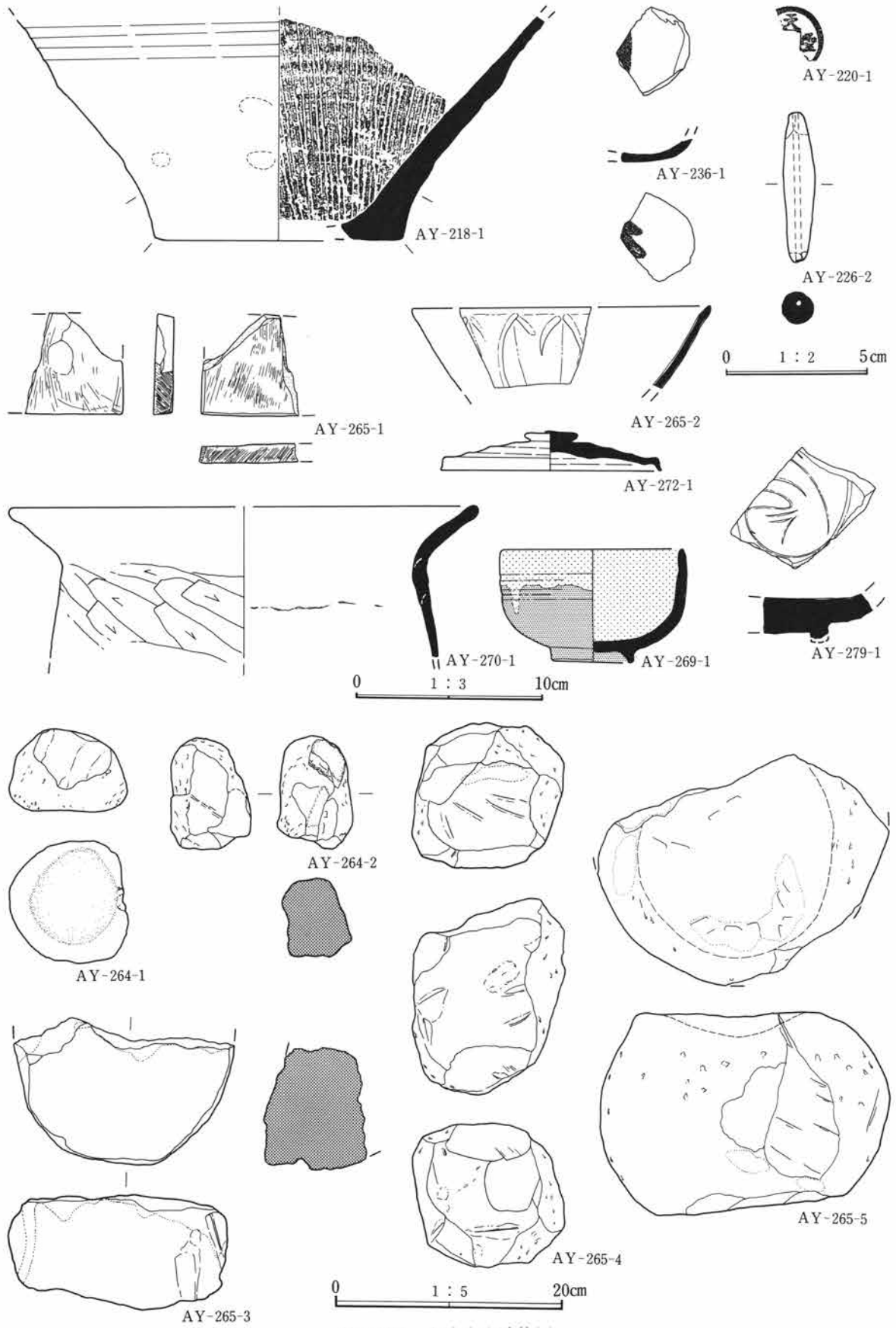
第297图 I区 AK-36~43号土坑 J区 AK-44~46号土坑



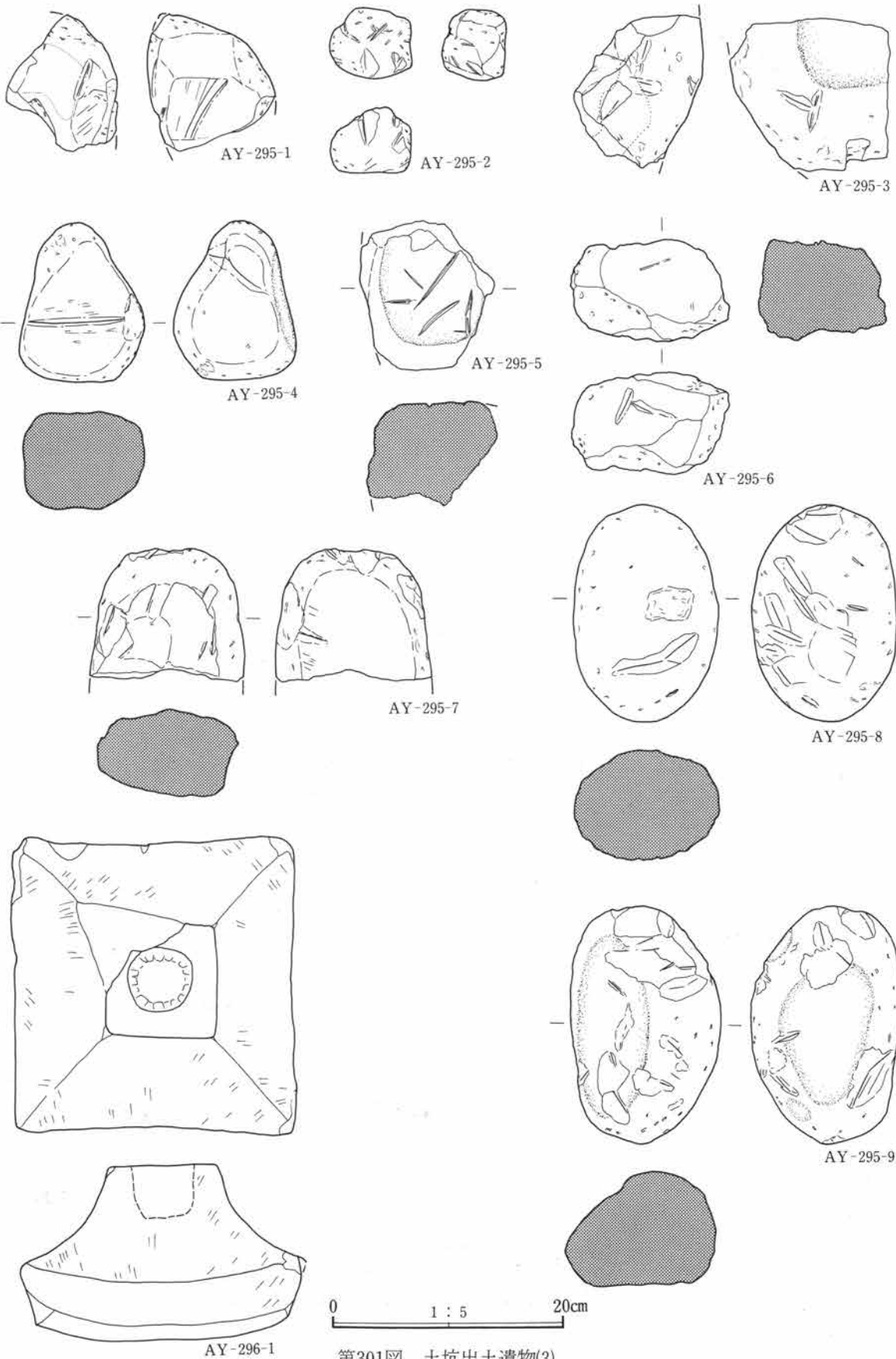
第298图 J区 AK-47~54号土坑



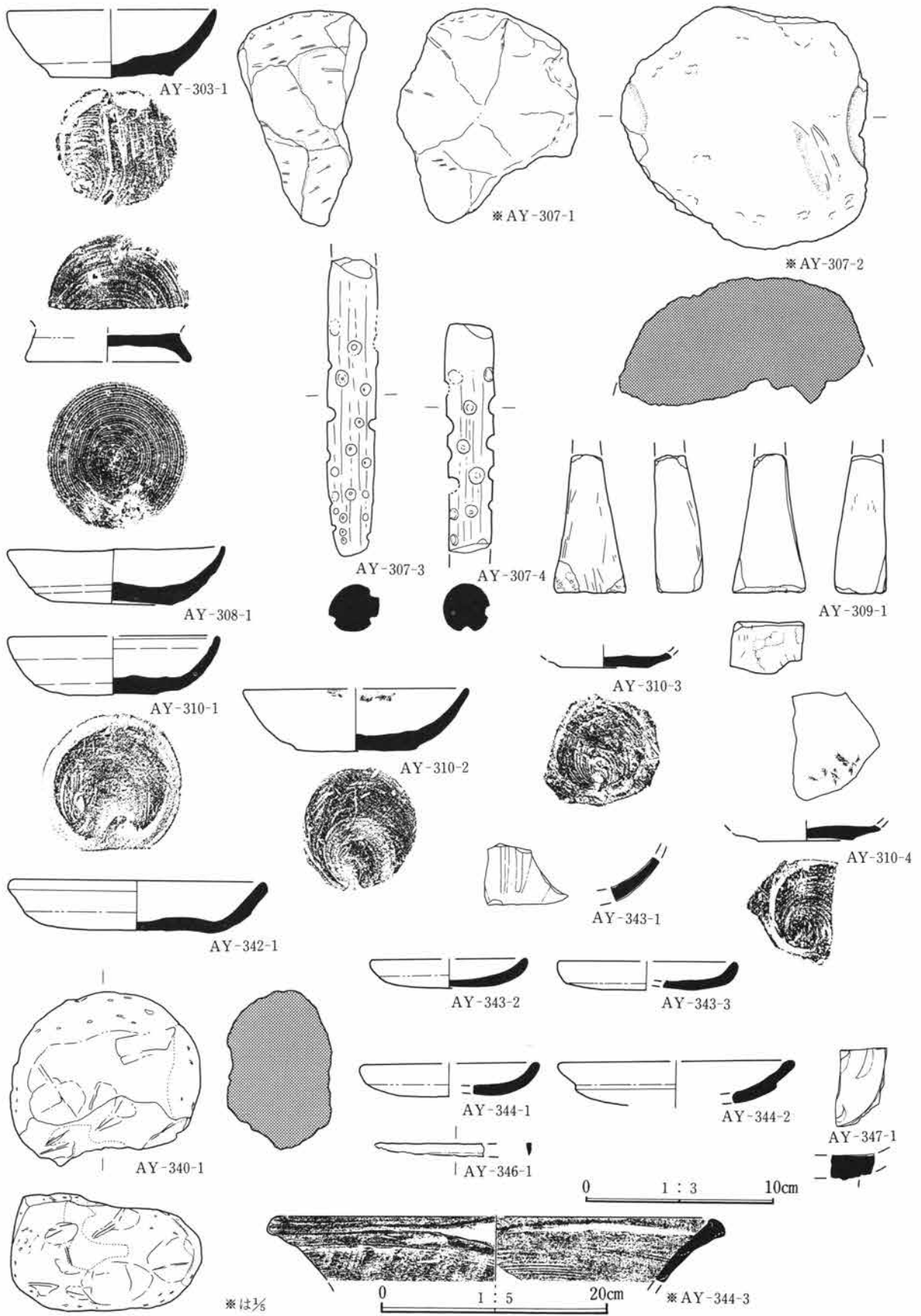
第299图 土坑出土遺物(1)



第300図 土坑出土遺物(2)

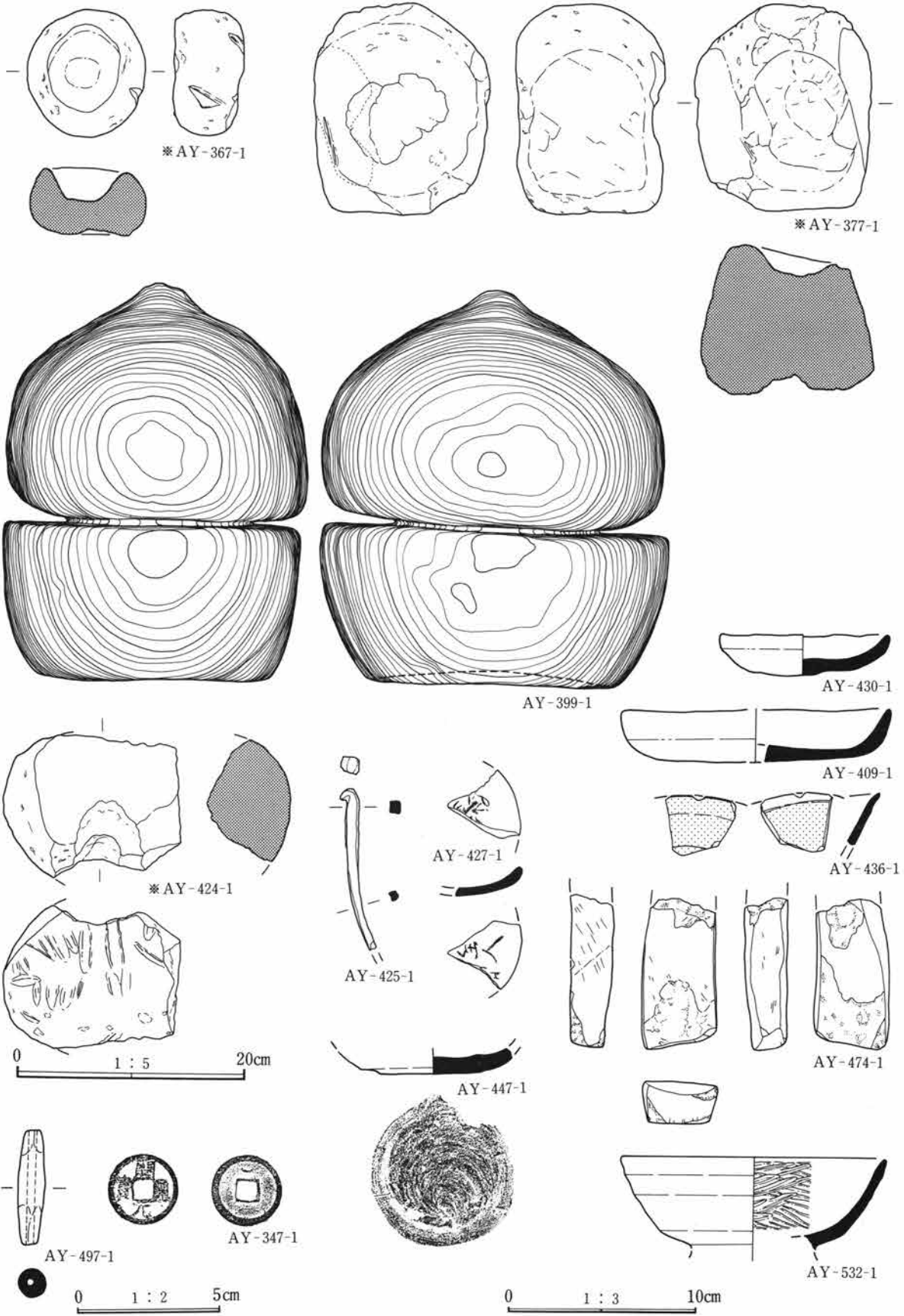


第301図 土坑出土遺物(3)

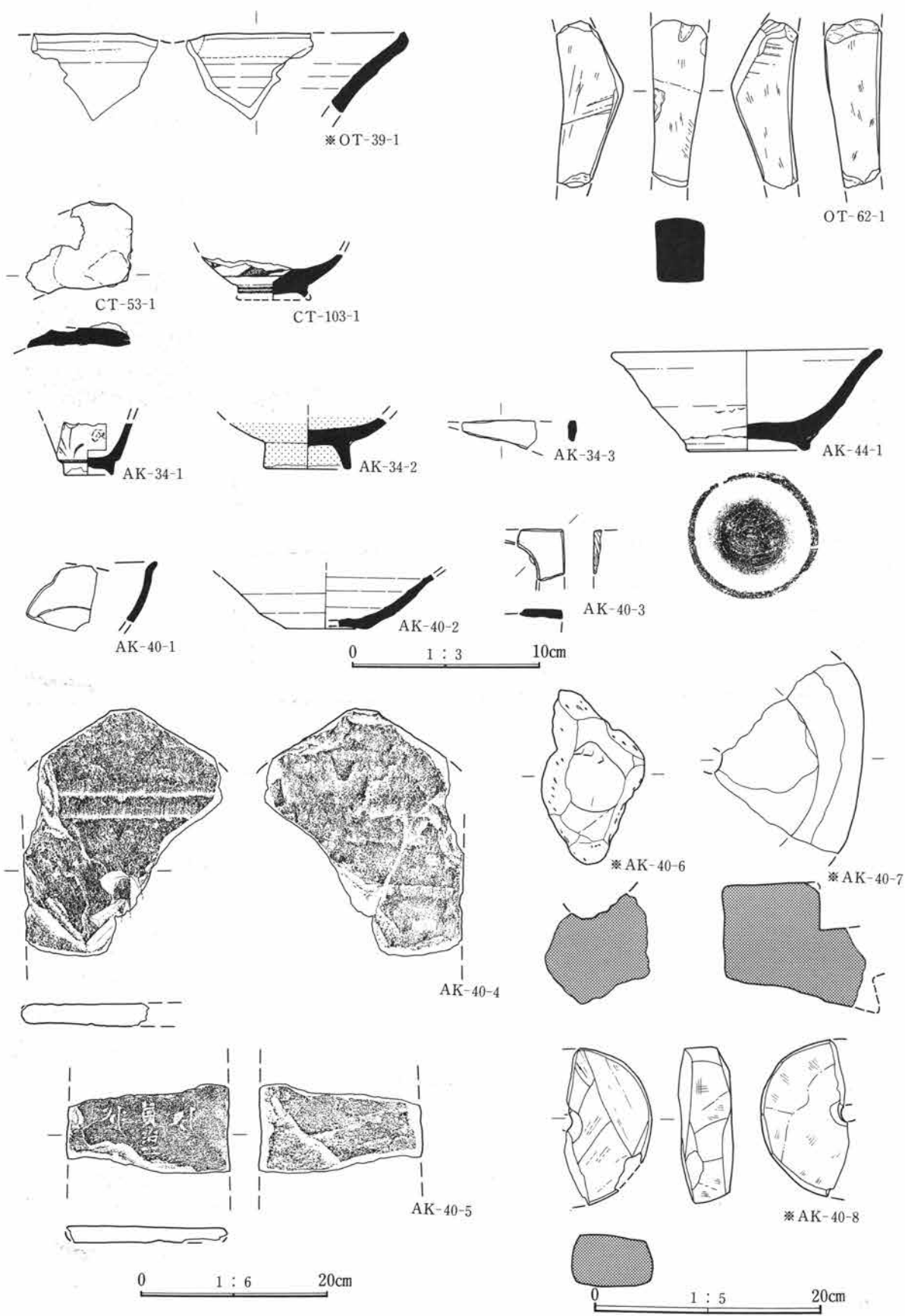


第302図 土坑出土遺物(4)





第303図 土坑出土遺物(5)



第304図 土坑出土遺物(6)

第2表 土坑一覧表

## 安養寺森西遺跡

番号	平面形 位置(グリッド)	長軸方位	長軸×短軸 深さ(cm)	埋没土の特徴 出土遺物	備考
A区 AY-1	楕円形か m-15	N-20°-W	- × 130 21	埋没土はA層土。	不明瞭。北半分は調査区域外。
A区 AY-2	不整円形 m-15・16		152 × 144 51		底面は黒褐色粘性土まで掘り込んでいる。
A区 AY-3	不整円形 r-21		98 × 86 26.5		
A区 AY-4	楕円形か m-18	N-1°-W	- × 90 35	埋没土はA層土。	南西半分は調査区域外。
A区 AY-5	長方形 n-16	N-3°-E	272 × 100 39		
A区 AY-6	長方形 m-17	N-3°-W	238 × 102 29		隣接する4・5土坑に形状類似し、方位も近い。
A区 AY-7	不整楕円形 w-20・21	N-86°-E	234 × 188 17・48		北半が低く、重複する2基の土坑の可能性あり。
A区 AY-8	長方形 p-19・20	N-86°-W	202 × 106 35		
A区 AY-9	不整長方形 o-18	N-1°-E	470 × 96 25・38		北隅に段があり、重複する2基の土坑の可能性あり。
A区 AY-10	円形 r-19		82 × 82 17		
A区 AY-11	不整長方形 t・u-21	N-42°-E	82 × 54 18	埋没土はD層土。	不明瞭。
A区 AY-12	s・t-21	N-82°-W	460 × 96 34.5	埋没土はD層土。	不明瞭。
B区 AY-13	長方形 b・c-23	N-38°-W	284 × 80 20.5		
B区 AY-14	長方形 c-23・24	N-2°-E	190 × 80 18.5	埋没土はA層土。	
B区 AY-15	隅丸長方形 j-24・0	N-5°-E	200 × 8221		
B区 AY-16	不整円形 d-23		122 × 110 16		16~18号土坑まで、円形の浅い土坑が集中している。
B区 AY-17	不整円形 c・d-24		92 × 88 24.5		
B区 AY-18	不整円形 d・e-23・24		170 × 142 14.5		
B区 AY-19	不整円形 h-1・2		138 × 132 43		底面、壁とも平坦でしっかりしている。
B区 AY-20	隅丸長方形 i-24・0	N-13°-E	220 × 78 28		
B区 AY-21	楕円形か i-4・5	N-2°-E	(150) × (108) 19	埋没土上半は暗褐色土層。下半は砂礫層で地山との区別難しい。	4号溝に先行する。
B区 AY-22	楕円形か n・o-5	N-44°-E	204 × 128 24	埋没土上半はD層土。底部付近はA層土。	4号溝に後出する。
B区 AY-23	不整円形 p-4・5		150 × 130 49	埋没土はD層土。	4号溝に後出する。
B区 AY-24	楕円形1-5	N-90°	126 × 92 50	埋没土はB・D層土の混合土。	4号溝に先行か。不明瞭。
B区 AY-25	円形 m-6		82 × 80 12		不明瞭。
B区 AY-26	不整円形 k-7		88 × 86 16		不明瞭。
B区 AY-27	不整円形 m・n-6		132 × 122 38		
B区 AY-28	長方形 h-10・11	N-14°-E	314 × 106 37.5		B区29号土坑と重複。
B区 AY-29	長方形 g・h-11	N-82°-W	(180) × 96 30		B区28号土坑に先行か。

番号	平面形 位置(グリッド)	長軸方位	長軸×短軸 深さ(cm)	埋没土の特徴 出土遺物	備考
B区 AY-30	楕円形 i-10・11	N-53°-W	160 × 118 35	1cm大の軽石の混入やや多い。南壁際埋没土中に円礫あり。	
B区 AY-31	隅丸長方形 h-11・12	N-3°-W	290 × 58 40	埋没土はD層土。	B区32号土坑に後出する。南側ほど深い。
B区 AY-32	不整形 h-11・12	N-60°-W	98 × 90 16	埋没土はD層土。	B区31号土坑に先行する。
B区 AY-33	不整形 h・i-11	N-13°-W	80 × 80 11	埋没土はD層土。	
B区 AY-34	不整形 l・m-12		94 × 78 14.5	埋没土はD層土で最大φ5cmの軽石がまじる。	
B区 AY-35	不整形 h・i-12		106 × 88 14	埋没土はD層土。	
B区 AY-36	円形 k-13		94 × 90 27	埋没土はD層土で最大φ5cmの軽石がまじる。	
B区 AY-37	長方形 l-13	N-85°-E	110 × 68 24	埋没土はD層土。	B区38号土坑と重複。西側ほど深くなる。
B区 AY-38	長方形 l-13・14	N-5°-W	98 × 60 37	埋没土はD層土でA層土が帯状に混入する。	B区37号土坑と重複。
B区 AY-39	円形 m-13		66 × 62 31	埋没土はD層土。	43・44号土坑の北方に隣接。
B区 AY-40	円形 i-12・13		146 × 142 45	埋没土はD層土で上層ほど軽石の混入多い。	
B区 AY-41	長方形 l-10・11	N-3°-E	322 × 80 39.5	埋没土はD層土で炭化物の混入やや多い。	
B区 AY-42	長方形 l-11・12	N-0°	256 × 98 40	埋没土はD層土で最大φ5cmの軽石がまじる。	重複する2基の土坑の可能性。
B区 AY-43	楕円形 m-13	N-15°-E	180 × 144 63	1層→D層土。1'層には小粒の軽石を多量に含む。	
B区 AY-44	不整形 m-13		136 × 130 58	1層→D層土。	
B区 AY-45	長方形 p・q-7	N-90°	162 × 66 24		
B区 AY-46	楕円形 s-9	N-34°-W	64 × 48 29		
B区 AY-47	不整形 m-10		100 × 92 21.5	埋没土はD層土。	
B区 AY-48	楕円形 n-10		102 × 90 22		53号土坑の西方10cmに隣接。
B区 AY-49	隅丸長方形 s・t-10・11	N-6°-E	228 × 82 35		
B区 AY-50	長方形 r・s-9・10	N-10°-W	200 × 110 35.5		底面は断面V字状。
B区 AY-51	楕円形か n・m-10	N-10°-W	86 × 86 12.5	埋没土はD層土。	B区52号土坑に先行する。
B区 AY-52	不整形 m-10・11 n-10		106 × 82 58.5	礫の混入多い。埋没土はD層土。	B区51号土坑に後出する。
B区 AY-53	楕円形 n-10	N-17°-E	114 × 100 32	埋没土はD層とA層の混合土。	
B区 AY-54	円形 o-10		82 × 76 37	埋没土はしまりのないD層土。	
B区 AY-55	円形 n・o-11		110 × 106 48	埋没土はD層土。	
B区 AY-56	不整形 o-11		110 × 100 35	埋没土はD層土で最大φ3cmの軽石を含む。	
B区 AY-57	円形 n-12		130 × 130 68	1層→A層土。2層→D層土。3層→A層とD層の混合土層。	B区58号土坑に後出する。
B区 AY-58	円形 n-12・13		154 × 150 39		B区57号土坑に先行する。
B区 AY-59	不整形 m・n-12		130 × 116 10	埋没土はD層土。	不明瞭。

番号	平面形 位置(グリッド)	長軸方位	長軸×短軸 深さ(cm)	埋没土の特徴 出土遺物	備考
B区 AY-60	円形 n・o-13		180 × 176 60	1層→D層とA層の混合土層。 3層→A層。	底面は不整で凹凸多い。
B区 AY-61	円形 n-16		114 × 108 23.5		
B区 AY-62	楕円形 o-17	N-20°-W	138 × 102 41.5	埋没土中に5~20cm大の軽石を多量 に含む。	7号溝・8号溝の交点にあり、両方の 溝に後出する。
B区 AY-63	不整形円形 q-12		80 × 70 14		底面は砂礫層上にある。
B区 AY-64	円形 p-12		48 × 48 16		柱穴の可能性あり。
B区 AY-65	円形 r-14		84 × 82 35		
B区 AY-66	楕円形 p・q-13	N-53°-E	118 × 98 52		
B区 AY-67	円形 r-12		116 × 112 37		
B区 AY-68	楕円形 s・t-18	N-67°-E	208 × 166 13.5		
B区 AY-69	長方形 s・t-16	N-81°-E	178 × 88 28		
B区 AY-70	円形 r-15・16		152 × 150 35		
B区 AY-71	円形 s・t-17		124 × 122 24	底面に拳大の軽石が敷きつめられる ようにして出土。	
B区 AY-72	不整形長方形 v-16	N-73°-E	130 × 78 14.5		
B区 AY-73	楕円形か u-15		118 × - 16		北側半分は調査区域外。
B区 AY-74	円形 t-16・17		132 × 124 30.5		75号土坑の西方60cmに隣接。
B区 AY-75	円形 t・u-16・17		146 × 134 54		壁面全体がオーバーハングし、袋状に なる。
B区 AY-76	円形 u・v-16・17		160 × 158 61.5		壁はほぼ垂直で、一部オーバーハング する。
B区 AY-77	楕円形 u-15	N-13°-W	152 × 120 22		73号土坑の南西方30cmに隣接。
B区 AY-78	長方形 t-20	N-11°-E	114 × 64 12		
B区 AY-79	不整形円形 x・y-17		150 × 146 52		壁はほぼ垂直に立ち上がる。
B区 AY-80	不整形円形 x・y-22・23		140 × 132 15	埋没土はD層土。	不明瞭。
B区 AY-81	円形 x-18		100 × 92 14	埋没土はD層土。	
B区 AY-82	隅丸長方形 x-23	N-7°-E	106 × 60 23.5		
B区 AY-83	隅丸長方形 u-0	N-1°-E	182 × 90 34		
B区 AY-84	円形か w-2・3		144 × - 35.5	1層→D層土。2層→C層土。	南東半分は調査区域外。壁面は一部 オーバーハングする。
B区 AY-85	円形 b-18・19		72 × 70 17		B区86号土坑と重複。
B区 AY-86	不整形円形か b-18・19		80 × - 7		B区85号土坑と重複。不明瞭。
B区 AY-87	楕円形 b-18	N-64°-E	90 × 76 11.5		85号土坑の北東方140cmに隣接。
C区 AY-88	円形 a-1		88 × 84 28	埋没土はA層土。	
C区 AY-89	不整形楕円形 b-2	N-13°-W	214 × 114 24	埋没土はE層土。瀬戸・美濃系碗皿 類、伊万里系染付碗等5片出土。	地山の傾斜に沿って、北側ほど深い。

番号	平面形 位置(グリッド)	長軸方位	長軸×短軸 深さ(cm)	埋没土の特徴 出土遺物	備考
C区 AY-90	楕円形 g-1	N-72°-W	131 × 86 30 × 14	埋没土はD層土で焼土散見。	重複する2基の土坑の可能性。
C区 AY-91	円形 b-19		56 × 48 13	埋没土はA層土。	
C区 AY-92	d-1・2	N-7°-W	294 × 168 24		93号土坑と重複。
C区 AY-93	長方形か c・d-1・2	N-0°	197 × 66 225		92号土坑と重複。北側ほどやや深い。
C区 AY-94	c-0・1	N-18°-W	242 × 72 15	埋没土はD層土。	C区95号土坑と重複。
C区 AY-95	台形 b・c-1	N-0°	176 × 174 16	埋没土はD層土。	C区94号土坑と重複。不明瞭。小皿。軟質陶器鉢等8片出土。
C区 AY-96	不整楕円形 f-0・1	N-22°-W	234 × 114 14	1・2層→D層土。2層にバミス多い。土師器杯の細片を出土。	C区97号土坑と重複。北側ほど深く南端と10cmの比高差。
C区 AY-97	不整楕円形 f-1	N-73°-E	178 × - 18	埋没土はE層土。	C区96号土坑と重複。
C区 AY-98	隅丸長方形か e-1	N-86°-E	- × 78 22	埋没土はD層土。	C区99号土坑に後出か。
C区 AY-99	隅丸長方形 d・e-1	N-0°	226 × 88 24.5	埋没土はD層土。図示部のセクションには重複の痕跡なし。	C区98号土坑と重複。底面不整。北側ほど深い。
C区 AY-100	不整円形 g-1		102 × 82 14.5		底面は皿底状。
C区 AY-101	隅丸長方形 f-1	N-90°	224 × 100 22	埋没土はE層土。	
C区 AY-102	隅丸長方形 f・g-1	N-90°	230 × 90 24.5	埋没土はE層土。土師器杯。	C区101号土坑の東側に直線的に並んでいる。
C区 AY-103	隅丸長方形 d・e-2・3	N-7°-E	204 × 80 15	埋没土はD層土。	
C区 AY-104	不整円形 f-4		168 × 160 40	1層→E層。1'層は砂質。2層→B層。軟質陶器鉢・小皿細片出土。	
C区 AY-105	不整長方形 c・d-3	N-75°-W	180 × 90 22	埋没土はE層土。	東側ほど深く、西隅と10cmの比高差。
C区 AY-106	円形 e・f-5		146 × 140 43	1層→E層。2層→粒子の細かな非粘性土。	
C区 AY-107	円形 f-5		106 × 98 25	埋没土はE層土。	
C区 AY-108	円形か f-5・6		138 × 136 35	埋没土はE層土。	砂礫層を掘り込んでいる。
C区 AY-109	不整円形 e・f-5・6	N-28°-W	114 × 94 38	1層→E層。1'層は砂礫の混入多い。2層は砂礫地山と似ている。	底面は砂礫層下の黒色土中にある
C区 AY-110	楕円形か l・m-1	N-39°-W	122 × 96 51	埋没土はE層土。	
C区 AY-111	不整円形 m-1・2		106 × 100 31.5	埋没土は110号土坑と同じ。	
C区 AY-112	不整円形 l-1・2		88 × 64 9	埋没土は110号土坑と同じ。	
C区 AY-113	不整円形 m-1		78 × 70 10	埋没土は110号土坑と同じ。	
C区 AY-114	楕円形 m-3	N-8°-E	90 × 46 9	埋没土はF層土。	砂礫層を掘り込んでいる。
C区 AY-115	楕円形 m-3	N-90°	120 × 64 6.5	埋没土は114号土坑と同じ。	砂礫層を掘り込んでいる。
C区 AY-116	不整円形 i-21・22		128 × 116 34	埋没土はE層土。	
C区 AY-117	隅丸長方形 g-22	N-0°	160 × 94 23	埋没土はD層土。土師器甕の細片出土。	
C区 AY-118	隅丸長方形 g-22 h-21・22	N-51°-E	446 × 142 69	1層→F層。1'は2層の混合土層。2層→E層。壁の崩落土層。	遺物は、鍋等の中近世素焼き土器細片出土。
C区 AY-119	h-20・21 i-21		260 × - 76	1・3層→A層。1層に現代遺物混じる。2層→E層。4層→B層。	北東側半分は調査区域外。底面は砂礫層中にある。

番号	平面形 位置(グリッド)	長軸方位	長軸×短軸 深さ(cm)	埋没土の特徴 出土遺物	備考
C区 AY-120	隅丸長方形か j・k-23	N-81°-E	- × 110 62	埋没土はE層土。ローリングを受けた土師器杯細片を出土。	東側半分は調査区域外。
C区 AY-121	長方形 l-3・4	N-0°	366 × 58 8	埋没土はE層土でしまり弱い。	
C区 AY-122	隅丸長方形 k・l-3・4	N-0°	- × 76 30	埋没土はD層土。	重複する小ピットに先行。
C区 AY-123	隅丸長方形 k-5	N-81°-W	192 × 90 52	埋没土はD層土。大粒のバミスや礫の混入多い。	底面は砂礫層中にある。
C区 AY-124	隅丸長方形 j-5	N-68°-W	252 × 60 23	埋没土はE層土。	底面は砂礫層にあり、不整。
C区 AY-125	円形 i-6		92 × 91 19	埋没土はE層土。	
C区 AY-126	楕円形か i-6	N-41°-W	112 × 84 14		13号溝と重複。
C区 AY-127	不整形 i-6		112 × 112 26		13号溝と重複。
C区 AY-128	長方形 m・n-7	N-90°	284 × 106 20		C区129号土坑に先行する。
C区 AY-129	不整形 n-7	N-80°-E	96 × 82 8		C区128号土坑に後出する。
C区 AY-130	不整形長方形 k・l-7・8	N-23°-W	448 × 134 49	埋没土はE層土。 土師器の細片4片出土。	底面は砂礫層中にあり不整。
C区 AY-131	隅丸長方形 h-6・7	N-10°-E	180 × 48 14	埋没土はF層土。	
C区 AY-132	不整形円形 m-8・9		176 × 156 21	土師器の細片11片出土。	
C区 AY-133	不整形楕円形 n-6・7	N-56°-W	142 × 68 21	埋没土はD層土。	
C区 AY-134	楕円形 o-3	N-50°-W	122 × 90 9	埋没土はE層土。	
C区 AY-135	楕円形 p-4	N-70°-W	108 × 80 11	埋没土はE層土。	
C区 AY-136	円形 s-8		66 × 58 13	埋没土はF層土。	底面は砂礫層中にあり。
C区 AY-137	不整形円形 s-8		130 × 120 24.5	1層→F層。2層→A層。	遺物は須恵器蓋・杯等8世紀前半の40片出土。
C区 AY-138	楕円形 q-9 r-8・9	N-71°-W	326 × 280 17.5	埋没土はA層土。	16号溝に後出。
C区 AY-139	長方形 p-9・10	N-0°	170 × 58 14	埋没土はF層土。	15号溝と重複。
C区 AY-140	隅丸長方形 p-10	N-14°-W	160 × 68 31	埋没土は139号土坑と同じ。	16号溝に後出する。
C区 AY-141	長方形 u・v-9	N-90°	228 × 156 21	埋没土はD層土。焼土粒散見。 近世国産青磁片出土。	底面は不整。
C区 AY-142	長方形 p-10	N-0°	164 × 46 36.5	埋没土は139号土坑と同じ。	140号土坑の西側に平行に並んでいる。
C区 AY-143	長方形か m・n-11	N-70°-E	274 × 112 36	埋没土はD層土。	C区144号土坑と重複。
C区 AY-144	長方形か n-11・12	N-0°	- × 102 30	埋没土は143号土坑と同じ。 印版飯碗・焙烙等出土。	C区143号土坑と重複。
C区 AY-145	長方形か l-12	N-0°	- × 64 34.5	1層→A層。	146号土坑に後出する。
C区 AY-146	長方形 l-12	N-87°-W	210 × 46 30	2層→D層。	147号土坑と重複。145号土坑に先行。
C区 AY-147	隅丸長方形 l-12	N-7°-E	136 × 54 49.5	埋没土はD層土。印版細片・焙烙等出土。	146号土坑と重複。
C区 AY-148	隅丸長方形 t-9・10	N-0°	166 × 68 8	埋没土はF層土。	両隅に小ピットがあるが、本址に伴うものかは不明。
C区 AY-149	不明方形 u-10	N-46°-E	178 × 162 20		

番号	平面形 位置(グリッド)	長軸方位	長軸×短軸 深さ(cm)	埋没土の特徴 出土遺物	備考
C区 AY-150	長方形 u-11	N-72°-W	158 × 72 27		
C区 AY-151	隅丸長方形 u-12	N-90°	152 × 60 23		
C区 AY-152	隅丸長方形 t・u-12	N-90°	220 × 62 28	埋没土はD層土。 中近世素焼き土器細片2片出土。	151号土坑の西側に、直線的に並んでいる。
C区 AY-153	楕円形 v-11	N-0°	160 × 106 9 × 27	埋没土はF層土。 薄手の土師器細片出土。	154号土坑に重複。底面は二重になっている。
C区 AY-154	長方形 v・w-11	N-79°-W	286 × 88 27	埋没土はD層土。下層にブロック状のシルト質土を含む。	153号土坑に重複。
C区 AY-155	不整楕円形 p・r-10q-10・11	N-80°-E	542 × 328 25 × 76	1層→褐色砂質土層。2層→D層。 8世紀代の土師器約110片出土。	
C区 AY-156	隅丸長方形 s-11	N-0°	174 × 64 56	1層→D層。2層→E層。	
C区 AY-157	隅丸長方形 s・t-12	N-44°-E	166 × 60 29	埋没土はD層土。ブロック状のシルト質土を含む。	
C区 AY-158	隅丸長方形 o-13	N-90°	150 × 100 18.5	埋没土はF層土。	
C区 AY-159	不整長方形 p・q-14	N-82°-W	120 × 60 18	埋没土はF層土。 須恵器細片出土。	重複する2基の土坑の可能性あり。
C区 AY-160	長方形 p-13・14 q-13	N-10°-E	114 × 88 15 × 24	1層→F層。1'には焼土ブロック混入。2層→D層。陶器染付大皿・すり鉢等18世紀以降の遺物7片出土。	底面は二重になっている。
C区 AY-161	隅丸長方形 n・o-14	N-90°	276 × 86 45.5	1層→A層。拳大の軽石を含む。 2層→F層。	
C区 AY-162	長方形 q・r-12・13	N-45°-W	360 × 120 24.5	埋没土はF層土。 軟質陶器胴部細片出土。	
C区 AY-163	不整台形 o-13・14	N-74°-W	108 × 80 11.5	埋没土はG層土。	165号土坑と重複。
C区 AY-164	長方形 p-13・14	N-87°-W	142 × 76 18	埋没土はG層土。	166号土坑に先行。167号土坑と重複。
C区 AY-165	o・p-14		16		163・166・168号土坑と重複。
C区 AY-166	長方形 p-14	N-78°-E	- × 66 14	埋没土はE層土。	164号土坑に後出。165・167号土坑と重複。
C区 AY-167	p-14	N-49°-W	- × 104 13		164・166号土坑と重複する。
C区 AY-168	隅丸長方形か o・p-14	N-30°-E	334 × - 17	埋没土はE層土。	169号土坑に先行する。
C区 AY-169	o・p-14・15	N-43°-E	250 × 176 39.5	埋没土はE層土。 土師器細片出土。	168号土坑に後出する。
C区 AY-170	円形 o・p-15		102 × 100 14	埋没土はE層土。	
C区 AY-171	隅丸長方形 p-15・16	N-8°-E	200 × 64 38	埋没土はD層土で細礫がまじる。	
C区 AY-172	長方形 p-16	N-8°-E	162 × 44 19.5	埋没土は171号土坑と同じ。	
C区 AY-173	長方形 r・s-13	N-87°-E	198 × 68 23.5		174・175号土坑と重複。
C区 AY-174	長方形か r・s-13・14	N-8°-E	- × 114 30	埋没土はE層土。	175号土坑に後出。173号土坑と重複。
C区 AY-175	長方形 r・s-13 r-14	N-4°-E	170 × 56 46	埋没土はE層土。 土師器杯の細片出土。	174号土坑に先行。173号土坑と重複。
C区 AY-176	長方形 t-14	N-7°-E	102 × 88 22	近世以降の焙烙破片を出土。	17号溝に重複。
C区 AY-177	長方形 s・t-14	N-85°-E	278 × 100 17	埋没土はD層土。中近世の小皿・火鉢等素焼き土器細片出土。	底面は不整。遺物は底面から5～8cm浮いている。
C区 AY-178	楕円形 q-16	N-40°-W	214 × 140 50.5	1層→F層。下層ほど明度が低い。	
C区 AY-179	長方形か t・u-13	N-82°-W	240 × 160 18	埋没土はD層土。	180号土坑に先行するようだ。



番号	平面形 位置(グリッド)	長軸方位	長軸×短軸 深さ(cm)	埋没土の特徴 出土遺物	備考
C区 AY-180	t・u-13・14	N-68°-E	382 × 240 9	埋没土は179号土坑にほぼ同じ。	179号土坑に後出か。 17号溝に後出する。
C区 AY-181	台形か q-15・16	N-87°-E	260 × 150 39.5	2層→E層土。2'には灰白色のシルト がまじる。焜炉の細片出土。	182号土坑に先行。
C区 AY-182	隅丸方形か q-16	N-13°-W	120 × 114 28	1層→D層土。ラミナ状に堆積する部 分あり。	181号土坑に後出。
C区 AY-183	長方形 q・r-17	N-89°-W	140 × 80 49.5	1層→A層土。ブロック状にシルトを 含むが、1'では少ない。	遺物は素焼き鍋・火鉢等出土。
C区 AY-184	不整形 q・r-17		76 × 62 20.5	埋没土はシルト質の灰褐色土。素焼き の鍋・土師質小皿3片出土。	183号土坑の北東20cmに隣接。
C区 AY-185	u・v-14・15	N-13°-W	240 × 214 35	1層→D層土。2層→E層土。2'に1 層土混入。3層→シルト土。	186号土坑と重複。遺物は19世紀以降 の鍋・鉢等5片。
C区 AY-186	u・v-15・16	N-13°-W	350 × 276 30	埋没土は185号土坑に同じ。18~19世 紀の陶片約40片出土。	185号土坑と重複。
C区 AY-187	楕円形 x-11・12	N-75°-W	122 × 100 26	埋没土はD層土。土師器細片出土。	底面は砂礫層上にある。
C区 AY-188	楕円形 v・w-14・15	N-86°-W	180 × 140 23	埋没土は185号土坑に同じ。8世紀代 の土師器・須恵器約80片出土。	
C区 AY-189	不整形 w-15・16	N-31°-E	- × 320 32	1層→D層土。2層→G層土。常滑・ 軟質陶器等中世遺物6片出土。	桶土坑-1に先行。3号掘立と重複。 複数の重複する土坑の可能性。
C区 AY-190	長方形か w・x-14	N-12°-E	202 × 134 16.5	埋没土はD層土。土師器細片5片出 土。	17号溝と重複する。
C区 AY-191	長方形 x-13	N-10°-E	214 × 86 25.5	埋没土はD層土。	
C区 AY-192	楕円形 w-16	N-29°-W	242 × 166 52	1層→G層土。2層→F・Gの混合土 層。3層→F層土。	7号掘立の区画内にある。遺物は18世 紀伊万里系染付等7片。
C区 AY-193	隅丸長方形 u-12・13	N-75°-E	222 × 130 10.5	埋没土は179号土坑に同じ。	
C区 AY-194	台形 f・g-3	N-52°-W	96 × 85 16		
C区 AY-195	隅丸長方形 n-14	N-6°-W	132 × 66 30	埋没土はF層土。小ブロック状の粘土 を含む。	遺物は18世紀以降の伊万里系染付・ 火鉢等出土。
C区 AY-196	長方形 r-17・18	N-5°-E	132 × 75 18.5		
C区 AY-197	不整形楕円形 w-20	N-47°-E	168 × 154 30.5	1層→D層土。2層→F層土。	14号住居に後出。
C区 AY-198	円形 w-21		164 × 154 36.5	1層→F層土。1'には褐色土がまじ る。2層→D層土。	
C区 AY-199	長方形か v-20	N-73°-W	136 × - 12	1層→混入物のないD層土。2層→F 層土。	桶土坑群に先行。
C区 AY-200	楕円形か w-21	N-80°-W	133 × - 17	1層→E層土。2層→D層土。18~19 世紀の陶片2片出土。	桶土坑群に先行。
C区 AY-201	楕円形 x-20・21	N-86°-W	160 × 104 11	埋没土はD層土。	203号土坑に後出のようだ。
C区 AY-202	x・w-21	N-82°-W	- × 66 9	1層→D層土。	203号土坑に後出。18号溝と重複。
C区 AY-203	不整形 x-21			2層→褐色粘性土。3層→F層土。3' に斑鉄。4層→灰黄褐色粘性土。	当初井戸としたが、湧水面まで達して おらず、土坑に改めた。
D区 AY-204	不整形 d-17		146 × 128 12	1層→G層土。2層→F層土。	4号住居に後出する。
D区 AY-205	長方形 g-19・20	N-9°-E	170 × 100 34	埋没土はG層土。砂粒を含む。焙烙の 細片出土。	
D区 AY-206	円形 g-19・20 h-20		106 × 104 10	埋没土はG層土。	205号土坑の南東10cmの位置に隣接 している。
D区 AY-207	長方形 g-20	N-9°-E	136 × 110 44	埋没土は205号土坑に同じ。土師器8 片・近世白磁細片出土。	205号土坑の南側に軸方向を同じにし て並んでいる。
D区 AY-208	楕円形か b-15	N-87°-W	246 × 184 111	1層→F層。2層→D層。3層→F 層。3'は黒色土を混入。	8号住居に後出する。
D区 AY-209	長方形か c-22・23	N-9°-E	226 × 88 10		

番号	平面形 位置(グリッド)	長軸方位	長軸×短軸 深さ(cm)	埋没土の特徴 出土遺物	備考
D区 AY-210	隅丸長方形 c-23・24	N-4°-E	160 × 48 38		
D区 AY-211	楕円形か f-23	N-47°-E	130 × 96 21		10号住居に後出する。21号溝と重複する。不明瞭。
D区 AY-212	円形 e-1		124 × 124 17.5	埋没土はF層土。斑鉄あり。	
D区 AY-213	長方形 j・k-5	N-21°-E	174 × 88 45	埋没土はG層土。	
D区 AY-214	隅丸長方形 j-5	N-70°-W	148 × 96 27.5	埋没土はG層土。軟質陶器鉢の小破片出土。	
D区 AY-215	隅丸長方形 g-1・2	N-12°-E	408 × 82 60.5	1層→D層。2層→G層。3層→F層。地山に近い。	南側が深く、北端と10cmの比高差がある。
D区 AY-216	長方形 e・f-20	N-79°-W	258 × 60 14	埋没土はG層土。	
D区 AY-217	楕円形か f-0・1	N-90°	168 × 76 6.5	埋没土はE層土。砂礫の混入多い。	小ピットと重複。
D区 AY-218	長方形か f・g-20	N-11°-E	- × 70 36	1層→G層土。上層に多いパミスが下層には殆ど含まれない。	3号住居に先行する。219号土坑に後出する。
D区 AY-219	隅丸長方形 f・g-20	N-79°-W	164 × 64 23		218号土坑に先行する。216号土坑の東側に一列に並んでいる。
D区 AY-220	長方形か j-22	N-8°-E	- × - 27	2層→G層。しまり強い。陶器急須細片・伊万里系染付等を5片出土。	221号土坑に先行する。
D区 AY-221	長方形か j-21・22	N-8°-E	- × 60 56.5	1層→E層土。	220・223号土坑に後出する。
D区 AY-222	不整形円形 m-1		176 × 156 82	1層→D層。I'はシルト質土含む。2層→A層。土師器細片出土。	20号溝に後出する。
D区 AY-223	長方形 i・j-23・24 j-22	N-8°-E	760 × 110 39	2層→F層土。土師器・須恵器約20片出土。	221・224号土坑に先行し、27号住居に後出する。
D区 AY-224	長方形か j-23	N-8°-E	- × 48 13	1層→D層土。	223号土坑の断面から見つかった土坑で、大半を失っている。
D区 AY-225	長方形 j-22・23	N-7°-E	252 × 60 21	1層→G層土。2層→F層土。土師質小皿・土師器杯等15片出土。	27号住居に後出、226号土坑に重複。
D区 AY-226	長方形 j-23・24	N-7°-E	350 × 60 34.5	1層→ブロック状シルト質土。2層→E層。土師器杯・甕20片出土。	225号土坑に重複する。
D区 AY-227	長方形 j-0・1	N-5°-E	206 × 46 29		20号溝に後出する。229号土坑の北側に一列に並んでいる。
D区 AY-228	楕円形 h-23	N-80°-E	132 × 68 31.5	埋没土はG層土。8世紀代の土師器杯・甕12片出土。	
D区 AY-229	長方形 j-1 i・j-2	N-84°-W	386 × 60 47	2層→G層土。	230号土坑に先行。北側ほど深く、南端と8cmの比高差がある。
D区 AY-230	隅丸長方形 i・j-2	N-85°-W	188 × 54 14	1層→E層土。	229号土坑に後出。西側ほど深く、東端と10cmの比高差がある。
D区 AY-231	隅丸長方形 i-0	N-4°-E	284 × 66 42	1層→G層土。3層→22号溝埋没土。土師質杯細片4片出土。	22号溝、232号土坑に後出する。
D区 AY-232	i-24・0		- × - 14	2層→F層土。	231号土坑に先行する。
D区 AY-233	円形か i-1		(126) × (130) 25		234号土坑に後出する。
D区 AY-234	長方形 i-1・2	N-13°-E	490 × 88 66		233号土坑に先行。北端は中央より20cmは高く、2基の土坑の可能性。
D区 AY-235	円形 h・i-1		140 × 136 35	埋没土はD層土。粘土粒がまじる。	
D区 AY-236	不整形円形 h・i-2		160 × 150 54.5	1層→G層。2層→D層。3層→ロクロ不使用土師質小皿2片出土。	
D区 AY-237	楕円形か w・x-13	N-9°-W	150 × 92 33.5	1層→G層。2層→D層。	238号土坑に後出。
D区 AY-238	w・x-13	N-45°-E	172 × - 15.5	3層→E層。4層→G層。	237号土坑に先行。
D区 AY-239	x-13・14	N-27°-E	200 × 62 48.5	1層→C層。	240号土坑に後出。4～5基の土坑の重複と思われる。

番号	平面形 位置(グリッド)	長軸方位	長軸×短軸 深さ(cm)	埋没土の特徴 出土遺物	備考
D区 AY-240	x-13・14	N-4°-E	204 × 46.5	2層→A層。2'には灰褐色の山砂の混入多い。	239号土坑に先行。24号溝と重複。
D・E区 AY-241	y-13 a-13	N-54°-W	250 × 132 55.5	1・2・4層→G層。2層は砂粒、4層は炭化物を含む。3層→D層。	底面は不整。
E区 AY-242	b-14	N-79°-W	138 × 66 20		
E区 AY-243	b-13・14	N-20°-E	202 × 106 22	1層→D層。2層→F層。	
E区 AY-244	楕円形 b-13・14	N-20°-E	140 × 70 16	1層→D層。2層→G層。	
E区 AY-245	楕円形 a-14	N-58°-W	158 × 92 38	1層→G層。2層→F層。	
E区 AY-246	楕円形 a-14	N-58°-W	162 × 80 41.5	1層→G層。2層→E層。	
E区 AY-247	b・c-16・17	N-30°-E	328 × 266 42.5		
E区 AY-248	c-17	N-85°-E	(130) × ( 80) 33.5	埋没土はG層。	249号土坑に先行する。
E区 AY-249	c-17	N-0°	( 76) × ( 70) 29.5	埋没土はG層。	250号土坑と重複、248号土坑に後出する。
E区 AY-250	楕円形 c-16・17	N-0°	80 × 64 13		249号土坑と重複する。
E区 AY-251	楕円形 e-16	N-45°-W	100 × 78 33	埋没土はG層。	
E区 AY-252	e-16・17	N-90°	142 × (126) 39.5		
E区 AY-253	楕円形 c・d-16	N-50°-W	(154) × 100 27		254号土坑と重複。
E区 AY-254	不整楕円形 d-16・17	N-50°-W	120 × 50 22	1層→G層。2層はシルト質土。ブロック。	253号土坑と重複。
E区 AY-255	d-16・17	N-82°-E	204 × (110) 28.5	1層→G層。2層→D層。	
E区 AY-256	不整円形 d-16	N-50°-W	94 × 86 38		
E区 AY-257	隅丸長方形 e-20	N-87°-E	136 × 76 55	埋没土はB層土。	底面はやや軟弱だが平坦。
E区 AY-258	隅丸長方形 e・f-19	N-82°-W	172 × 98 90	1層→A層。2層→1と3の漸移層。3層→B層。	
E区 AY-259	長方形 d・e-21	N-83°-E	280 × 56 29	埋没土はC層土で、パミス・黒色土がまじる。	底面は軟弱。
E区 AY-260	隅丸長方形 f・g-20	N-84°-E	220 × 60 72	1層→A層。2層→壁の崩落土と見られる褐色土層。3層→C層。	不明瞭なプランであった。底面は平坦。
E区 AY-261	長方形 e-20	N-90°	150 × 82 57	1層→A層で上方ほどパミスは多い。2層→B層。	262号に後出。底面は凹凸多い。
E区 AY-262	長方形 e・f-20・21	N-84°-E	150 × 72 25	1層→A層。1'には地山の褐色土がまじり、しまり欠く。	261号土坑に先行。263号と重複。底面は軟弱。
E区 AY-263	正方形 e-21	N-0°	154 × 148 68	1層→A層で細線がまじる。2層→B層。	262号土坑と重複。底面は凹凸多い。
E区 AY-264	不整楕円形 f・g-22	N-90°	198 × 108 69	1層→A層。2層→地山と区別の難しい褐色土層。	底面は不明瞭。
E区 AY-265	楕円形 d-21	N-82°-W	186 × 80 82	1層→A層で大粒のパミス含む。2層→C層。3層→B層で多量の地山褐色土含む。	軽石や河原石を多量に含む。
E区 AY-266	隅丸長方形 d・e-0	N-79°-E	332 × 66 36.5	1層→A層。1cm大のパミスを含む。2層→地山と区別の難しい暗黄褐色土層。	
E区 AY-267	長方形 e-22	N-87°-E	152 × 44 13.5	埋没土は非粘性でしまりの強い暗褐色土層。	267~269号土坑は平行して並ぶ、所謂ヨーカン土坑。
E区 AY-268	長方形 e-22・23	N-84°-E	190 × 44 29	埋没土は267号土坑と同じ。	
E区 AY-269	長方形 e-23	N-87°-E	320 × 44 19	埋没土は267号土坑と同じ。	

番号	平面形 位置(グリッド)	長軸方位	長軸×短軸 深さ(cm)	埋没土の特徴 出土遺物	備考
E区 AY-270	隅丸長方形 b-21	N-17°-W	240 × 46 39.5	1層→H層。1'層は混入物少なく黒色味強い。	271・272号土坑に後出する。
E区 AY-271	楕円形 b-21	N-17°-W	192 × 48 29	2層→暗黄褐色砂質土層。3層→H層。3'に灰褐色粘土小ブロック。	270号土坑に先行。272号土坑に後行する。
E区 AY-272	不整形か b・c-21		24	4層→暗黄褐色砂質土層。	プランは不明瞭。270・271号土坑に先行する。
E区 AY-273	隅丸長方形 c・d-23	N-80°-E	308 × 44 39	埋没土は粒子の細かな非粘性暗褐色土層。	273・274号土坑は所謂ヨーカン土坑で、267～269号土坑の西側に並ぶ。
E区 AY-274	長方形 d-23	N-84°-E	220 × 60 14		
E区 AY-275	隅丸長方形 e-23	N-21°-E	134 × 84 65	1層→A層で砂粒の混入やや多い。2層→H層。	底面は灰色砂質土中にある。
E区 AY-276	楕円形 e-24	N-83°-E	170 × 76 28・16	1層→A層。1'には地山の褐色土が不均等にまじっている。	重複する2つの土坑と思われる。東側の土坑は底面不明瞭。
E区 AY-277	隅丸長方形 d-0	N-53°-E	98 × 70 22	1層→A層。2層→地山との区別の難しい暗褐色土層。	底面は不明瞭。
E区 AY-278	円形 d-1		132 × 116 50	1層→B層でパミスやや多い。1'ではパミスをほとんど含まない。	
E区 AY-279	楕円形 h-20	N-	86 × 54 26	1層→H層で上層にパミス多い。2層→1層と地山の混合土。	底面は凹凸多く不明瞭。
E区 AY-280	長方形 h-13	N-85°-E	124 × 86 23	1層→粒子が揃いな非粘性暗褐色土層。2層→地山に似た弱粘性暗褐色土層。	色土層。
E区 AY-281	隅丸長方形 i・j-22	N-86°-E	284 × 48 51	1層→A層。焼土・灰褐色粘土粒も含む。1'では混入物少ない。	26号溝に先行する。
E区 AY-282	g-22 h-22・23		26	1層→A層。2層→粘性のある暗褐色土で砂質土の混入多い。	25号溝に先行し、283号土坑に後出か。
E区 AY-283	隅丸長方形 g・h-22	N-85°-E	182 × 98 31	3層→H層。3'は地山の褐色砂質土の混入多い。	282号土坑の底面より確認する。
E区 AY-284	隅丸長方形 h-24	N-80°-W	98 × 52 16	埋没土はH層で、シルトブロックやパミスの混入多い。	
E区 AY-285	隅丸長方形 h-23	N-70°-W	142 × 98 44.5	1層→A層。灰色シルトを含み、1'2層→地山黄褐色砂質土がまじる。	→1'と量を増す。3層→地山との区別難しい。
E区 AY-286	隅丸長方形 g-23	N-9°-W	160 × 64 25.5	1層→粒子の細かな暗褐色土層。上層にパミス、下層に黄褐色土プロ	287号土坑に後出する。ックを含む。
E区 AY-287	不整形楕円形 g・h-23	N-90°	180 × 96 92.5	2層→やや砂質なB層。3層→A層。4層→C層。5層→暗灰褐色砂質土層。	286号土坑に先行、288号土坑に後出。6層→斑鉄のある粘性土。
E区 AY-288	長方形 h-22・23	N-0°	(240) × 60 40.5		287号土坑に先行する。
E区 AY-289	長方形 i-22・23	N-84°-E	210 × 156 32	1層→A層。2層→混入物の少ない暗褐色土層。3層→パミスの多い褐色土層。	281号土坑・26号溝と重複。色土層。
E区 AY-290	長方形 g-24	N-6°-W	266 × 54 24	1層→A層で混入物少ない。1'は2層との漸移層。2層→B層。	291号土坑に後出。
E区 AY-291	楕円形 g-24	N-77°-W	96 × 76 31	3層→A層でやや砂質。4層→暗灰褐色土層。5層→B層。	290号土坑に先行。
E区 AY-292	不整形 i・j-23・24	N-	188 × 80 53.5	2層→暗灰褐色粘性土でカーボン散見。2'では混入物少ない。	
E区 AY-293	不整形楕円形 j-23・24	N-	340 × 68 53	1層→A層で灰色粘性土をブロック状に含む。	292号土坑に後出する。
E区 AY-294	隅丸長方形 k-23	N-40°-E	250 × 56 28	埋没土は黒褐色砂質土層。しまり欠き混入物をほとんど含まない。	297号土坑とわずかに重複する。
E区 AY-295	隅丸長方形 j-23	N-	206 × 134 79.5	1層→やや砂質の暗黄褐色土層。	296号土坑に後出する。
E区 AY-296	j-23	N-90°	266 × 114 61	2層→H層で2'は混入物少ない。	295号土坑に先行し293・297号土坑と重複。2基の土坑の可能性。
E区 AY-297	楕円形 j・k-23	N-	122 × 60 40	3層→A層。4層→黒褐色粘性土層で混入物少ない。	294・295・296号土坑とわずかに重複する。
E区 AY-298	楕円形 l-24	N-86°-E	92 × 62 40	1層→B層。2層→A層。	底面はやや平坦。
E区 AY-299	不整形 l-24	N-8°-E	140 × 96 53.5	埋没土は粒子の細かな暗褐色土層。大粒の灰黄色土ブロックを含む。	底面は細かな凹凸が多い。

番号	平面形 位置(グリッド)	長軸方位	長軸×短軸 深さ(cm)	埋没土の特徴 出土遺物	備考
E区 AY-300	楕円形 j・k-24	N-81°-E	132 × 66 95.5	5層→H層。カーボン・バミス等を含み5'はしまり欠く。6層→灰褐色砂質土層。	301号土坑に先行する。
E区 AY-301	楕円形 j・k-24	N-74°-E	62 × 28 62	7層→H層で7'はしまり欠き5'に類似する。	300・302号土坑に先行する。
E区 AY-302	長方形 j-23・24 k-24	N-75°-W	23.5	1層→H層。	300・301・303・304号土坑に後出する。
E区 AY-303	隅丸長方形 j-23・24 k-23	N-73°-E	114 × 60 79	3層→A層。4層→ややしまり欠く黒褐色土層。下層ほど黒色味増す。	302号土坑に先行する。
E区 AY-304	長方形 j-23	N-17°-E	112 × 78 17.1	2層→A層。2'は地山土混入。	302号土坑に先行する。
E区 AY-305	k-24・0	N-78°-W	(120) × 104 33	3層→A層。混入物少ない。3'には地山の砂質土少量まじる。	306号土坑に後出する。
E区 AY-306	隅丸長方形 k-23・24・0	N-3°-E	406 × 64 55.5	1層→A層。1'にはバミスや多い。2層→地山の黄褐色砂質土のまじるしまり欠く層。	305号土坑に先行する。
E区 AY-307	不整楕円形 k-23・24	N-71°-E	153	1層→H層。2層→しまり欠く砂質土層。3層→黄褐色土をブロック状に含む砂質土層。	309号土坑に後出。308号土坑と重複。
E区 AY-308	不整楕円形 k-24 l-23・24	N-85°-E	172	上面で307号土坑と区別することはできなかった。	307号土坑と重複する。
E区 AY-309	隅丸長方形 k・l-23・24	N-85°-W	(262) × (140) 42	4層→307号土坑A層に近似する暗褐色土層。	307・308号土坑に先行する。
E区 AY-310	楕円形 k・l-23	N-76°-E	252 × 102 128.5	1層→H層。下層に黄褐色土粒多く1'はカーボン多い。2層→黒褐色土層で2'に混入物多い。	
E区 AY-311	楕円形 k・l-24	N-74°-W	122 × 72 61.5	1層→A層。2層→黒褐色土層。下層ほどバミスの混入少ない。3層→砂質土と粘性土の混合土層。	
E区 AY-312	隅丸長方形 i-24	N-80°-W	(184) × 116 37	1層→A層。2層→砂質土のまじる暗褐色土層。2'は混入物少ない。	314号土坑と重複。
E区 AY-313	i-24	N-30°-W	162 × 120 36	3層→B層。3'には灰褐色土をブロック状に混入。	314号土坑に先行。
E区 AY-314	隅丸長方形 i-24・0	N-6°-E	236 × 116 60	1層→バミス等を霜降状に含む暗褐色土層。2層→砂粒の多い暗褐色土層。	313号土坑に後出。312号土坑と重複。底面は砂質土中にあり。
E区 AY-315	不整円形 j-24	N-76°-W	170 × 150 89	1層→バミス等を含む黒褐色土層。1'は混入物少なく1''は灰黄色土多い	316号土坑と重複。2層→B層。
E区 AY-316	j-24	N-12°-E	166 × ( 86) 60		315号土坑と重複。
E区 AY-317	隅丸正方形 j-24・0	N-35°-E	120 × 112 30.5	1層→A層で灰褐色土ブロックを含む。2層→黄褐色土ブロックの多い	底面は平坦。土層。
E区 AY-318	i-0	N-15°-E	64 × - 14	2層→A層。	319号土坑に先行する。
E区 AY-319	長方形 i-0	N-15°-E	124 × 92 18.5	1層→H層。	318号土坑に後出する。
E区 AY-320	円形 i-0・1 j-0		150 × 140 70	1層→A層。2層→褐色土と地山砂質土との混合土層。	底面は不明瞭。
E区 AY-321	隅丸長方形 i-0	N-90°	158 × 102 11.5	埋没土はA層土。	底面は細かな凹凸多い。
E区 AY-322	長方形 h-0	N-0°	124 × 106 61	1層→B層。1'では混入物少ない。2層→C層。	323号土坑に後出。
E区 AY-323	長方形 h・i-0	N-80°-E	340 × 50 68	1層→H層。1'では砂粒の混入多い。	322号土坑に先行。
E区 AY-324	長方形か k-0	N-83°-E	118 × ( 50) 22.5	2層→弱粘性でしまり欠く暗褐色土層。	325号土坑に先行する。
E区 AY-325	長方形 k-0	N-84°-E	240 × 46 29.5	1層→A層。	324号土坑に後出する。
E区 AY-326	長方形 k-0	N-87°-E	276 × 64 41	1層→A層。324号土坑に同じ。	325号土坑の南側に接するようにして並ぶ。
E区 AY-327	隅丸長方形 l-0	N-83°-W	140 × 80 31	埋没土は粒子の細かな弱粘性の暗褐色土層。	328号土坑と重複する。
E区 AY-328	隅丸長方形 l・m-0	N-8°-E	206 × 78 21	埋没土は灰色粘性土小ブロックを含む暗灰褐色土層。	327号土坑と重複する。
E区 AY-329	長方形 h-24・0	N-7°-W	140 × 108 32	埋没土(1層)は黒褐色土でバミスを含む。	330号土坑と同一遺構として調査したが、断面より本土坑が後出であった

番号	平面形 位置(グリッド)	長軸方位	長軸×短軸 深さ(cm)	埋没土の特徴 出土遺物	備考
E区 AY-330	隅丸長方形 h-24・0	N-7°-W	182 × 66 18	2層→暗褐色土層でカーボンを含む3層 →地山との区別の難しい褐色土層。	329号土坑に先行。13号掘立と重複。
E区 AY-331	円形 j-0		184 × 182 65.5	1層→砂質土。灰褐色土をブロック状に含む暗褐色土層。2層→壁の崩落土である暗黄褐色土層。	332号土坑と重複。底面不明瞭。
E区 AY-332	不整形 j・k-0	N-80°-E	(300) × 44 44		331号土坑と重複。
E区 AY-333	長方形 k-0	N-83°-E	212 × 42 39.5	1層→A層。下層には斑鉄まじりのブロックを含む。	334号土坑と重複。
E区 AY-334	不整形長方形 k-0・1	N-	124 × 62 39	2層→A層。333号土坑との区別難しい。バミスは大粒で量も多い。	
E区 AY-335	不整形 k-1		14.5	4層→H層。大粒のバミスの混入多い。	重複する複数の土坑の可能性あり。336号土坑に先行。10号掘立と重複。
E区 AY-336	長方形 k-1	N-81°-E	172 × 62 17	3層→H層。灰黄色砂質土をブロック状に含む。	335号土坑に後出する。
E区 AY-337	長方形 k・1-0	N-	120 × 82 41.5	埋没土はA層でカーボン粒を含む。	
E区 AY-338	長方形 k・1-0	N-78°-E	226 × 72 79.5	1層→暗黄褐色土層。混入物雑多で細分可能。2層では灰褐色土ブロックが下層ほど多い。	
E区 AY-339	円形 l-1		130 × 120 37.5	2層→A層。2'は灰褐色土シルト質土をブロック状に含む。	340号土坑に先行する。
E区 AY-340	不整形長方形 k・1-1	N-75°-E	400 × 46 22	1層→A'層。1'は混入物少ない。	339号土坑に後出する。
E区 AY-341	隅丸長方形 l-0	N-85°-E	118 × 46 33	5層→A層で黒色味強い。	343号土坑に先行する。
E区 AY-342	l-0・1		28		343号土坑に先行すると思われる。
E区 AY-343	隅丸正方形 l-0・1	N-76°-W	150 × 140 68	3層→H層。3'に灰褐色土小ブロック含む。4層→地山の灰黄色土主体。	341・342号土坑に後出し、344・345号土坑と重複する。
E区 AY-344	l-0・1	N-82°-W	(148) × (74) 62	2層→黒褐色砂質土層。カーボンを若干含む。	345号土坑に先行し、343号土坑と重複する。
E区 AY-345	l・m・n-1	N-80°-W	(194) × 70 43.5	1層→H層。	344号土坑に後出し、343号土坑と重複する。
E区 AY-346	不整形 j・k-1		138 × (110) 24	1層→小ピットか。2層→H層。2'は黄褐色土ブロックの混入多い。	ピット群に先行か。プラン不明瞭で底面も不整。10号掘立と重複。
E区 AY-347	不整形長方形 k-1	N-0°	190 × 114 40	1層→H層で2層には黄褐色土がまじる。3層→A層。4層→C層。5層→B層。	重複する2基の土坑か。10号掘立の区域内にある。
E区 AY-348	長方形 n・o-1	N-90°	98 × 64 7	埋没土は地山の灰黄色土主体で黒色土がまじる。	底面は不整で凹凸強い。
E区 AY-349	隅丸長方形 g-0	N-0°	130 × 100 20	埋没土はH層でバミス・シルト等の混入物多い。	底面には細かな凹凸あり。13号掘立と重複する。
E区 AY-350	隅丸長方形 f-0	N-80°-E	(174) × 82 70	混入物の多さで分層した基本的に同一層。1層は暗黄褐色。2層は暗褐色を呈す。	351号土坑に先行。13号掘立と重複。
E区 AY-351	隅丸長方形 f-0	N-0°	136 × 86 39	1層→A層でブロック状のシルト質土を含む。2層→混入物の少な暗褐色土層。	350号土坑に後出。
E区 AY-352	隅丸長方形 g-0・1	N-0°	106 × 78 20.5	1層→粒子の細かな暗褐色土層で灰褐色のシルトを含む。1'ではシルト多い。	
E区 AY-353	長方形 f-1・2	N-0°	206 × 126 45.5	1層→A層。2層は灰黄色土の混入多い。3層→黒褐色粘性土層。	13号掘立と重複する。
E区 AY-354	隅丸長方形 h-0・1	N-8°-W	254 × 40 15	2層→非粘性の黒褐色土層。	355号土坑に先行。
E区 AY-355	不整形長方形 g・h-1	N-83°-E	306 × 64 18	1層→H層。1'では砂粒の混入少ない。2層→暗黄褐色砂質土層。	354号土坑に後出。底面は砂質土中にある。
E区 AY-356	隅丸長方形 f-1	N-6°-W	196 × 86 30.5	1層→A層でカーボン粒がまじる。1'では黄褐色土ブロックやや多い。	357号土坑に後出すると思われる。
E区 AY-357	長方形か f・g-1	N-85°-W	98 × 72 7		356号土坑に先行すると思われる。
E区 AY-358	隅丸長方形 h-1	N-75°-W	210 × 54 35	1層→粒子の細かな弱粘性土層。2層は黒色味が強い。	
E区 AY-359	長方形 f-2・3	N-3°-E	212 × 70 30.5	1層→暗黄褐色土層。2層→暗褐色土層で斑鉄まじる。	360号土坑の東側に隣接。

番号	平面形 位置(グリッド)	長軸方位	長軸×短軸 深さ(cm)	埋設土の特徴 出土遺物	備考
E区 AY-360	不整形長方形 f-2	N-3°-W	140 × 56 49.5	1層→A層。2層→黒褐色土層で砂質土をブロック状に含む。	
E区 AY-361	不整形 e-2		166 × 70 56	埋設土は暗黄褐色砂質土で底面付近は黒色味強い。	
E区 AY-362	長方形 f-1・2	N-6°-W	402 × 56 28	埋設土は灰黄色土小ブロックを含む暗褐色土層。	
E区 AY-363	隅丸長方形 g-2		176 × 102 46.5		
E区 AY-364	g-3		160 × 142 46.5		
E区 AY-365	長方形 g-2		126 × 104 14		365・366号土坑は調査時に1基としたが、プランより2基に修正。
E区 AY-366	長方形か g-2	N-78°-W	100 × ( 76) -		365号土坑と重複する。
E区 AY-367	隅丸長方形 h-3		238 × 84 17	埋設土は層土。カーボンを含む。	
E区 AY-368	隅丸長方形 g-3・4	N-11°-W	290 × 46 22	埋設土はH層土。下層でしまり欠く。	ピットとの重複多い。11号掘立と重複。
E区 AY-369	隅丸長方形 j-2・3	N-11°-W	250 × 70 23.5	埋設土はやや砂質でしまりある暗褐色土層。	底面は不明瞭。
E区 AY-370	隅丸長方形 f・g-3	N-78°-E	352 × 70 44.5	埋設土はH層。374号土坑との区別は難しい。	374号と軸方向を同じにして直線的に重複する。本遺構が後出か。
E区 AY-371	長方形 j-2	N-77°-E	300 × 62 18	埋設土はパミス・灰褐色シルト等雑多な混入物の多い暗褐色土層。	
E区 AY-372	隅丸長方形 h・i-2	N-77°-E	20	埋設土はH層。	ピット状の遺構に後出する。
E区 AY-373	長方形か g-2	N-80°-W	140 × - 18	1層→H層。2層→A層で地山の灰褐色砂質土ブロックがまじる。	370・374号土坑と重複する。
E区 AY-374	隅丸長方形 g・h-2・3	N-78°-E	(344) × ( 56) 18	埋設土はH層。砂質土をブロック状に混入する。	370・373・375号土坑と重複する。
E区 AY-375	長方形か g-3		- × 78 14	1層→暗灰褐色土層。1'はシルト質土のブロックが大粒。	370・374号土坑と重複する。
E区 AY-376	隅丸長方形 h・i-3	N-87°-E	274 × 56 19.5	埋設土はB層でカーボン粒を含む。	12号掘立と重複する。
E区 AY-377	隅丸長方形 i-2	N-9°-W	248 × 56 44	2層→A層でシルトブロックを含む2'ではしまり欠く。	378号土坑に先行すると思われる。
E区 AY-378	隅丸長方形 i-2	N-77°-E	348 × 66 18	埋設土は377号土坑2層に近似するが本土坑の方が黒色味強い。	377号土坑に後出すると思われる。
E区 AY-379	長方形 k-2	N-77°-E	276 × 76 24.5	1-1'層は380号土坑の1・1'に対応するが混入物がきわめて多い。	380号土坑に先行、381号土坑と重複。
E区 AY-380	不整形長方形 k-2	N-13°-W	242 × ( 44) 32	1層→H層。黄褐色土の混入が1'で少ない。2層→シルト質の暗灰褐色	379・381号土坑に後出する。土層。
E区 AY-381	不整形長方形 k-2	N-13°-W	266 × ( 40) 36	3層→B層土。4層→黒褐色土層。5層→380号土坑1'にはほぼ同じ。	380号土坑に先行、379号土坑と重複。
E区 AY-382	長方形 l-1・2	N-81°-E	196 × 64 23.5	1層→地山粘性土を多量に含んだ暗灰褐色土層。	383号土坑に後出する。
E区 AY-383	不整形長方形 l-1・2 m-2	N-9°-W	330 × 54 14.5	2層→A層。焼土・カーボン等を少量含んでいる。	382号土坑に先行する。
E区 AY-384	隅丸長方形 l・m-5	N-12°-W	240 × 46 18	埋設土は粒子のやや細かな暗褐色土層。	
E区 AY-385	楕円形 l・m-2	N-77°-E	(140) × 60 18.5	3層→A層。4層→灰黄色の砂粒の多い暗灰褐色土層。	386号土坑に先行する。底面は不明瞭。
E区 AY-386	長方形 m-2・3	N-11°-W	256 × 54 59	1層→暗褐色土層で上層ではパミス下層ではカーボン粒を含む。	385・387号土坑に後出する。
E区 AY-387	長方形 m-2・3	N-11°-W	420 × 48 34.5	2層→混入物の少ない暗褐色土層。	386号土坑に先行する。
E区 AY-388	隅丸長方形 l-3・4	N-87°-E	230 × 68 70	1層→砂質土を小ブロック状に含む暗褐色土層。1'は2層との漸移層。2層→しまり欠く暗褐色土層。	底面は砂質土中にある。12号掘立と重複。
E区 AY-389	隅丸長方形 l-2・3	N-6°-W	150 × 96 17	埋設土は灰色粘土ブロックを含む暗褐色土層。	底面は平坦。

番号	平面形 位置(グリッド)	長軸方位	長軸×短軸 深さ(cm)	埋没土の特徴 出土遺物	備考
E区 AY-390	隅丸長方形 l-2・3	N-11°-W	(280)×50 50.5	1層→H層。2層→しまり欠く黒褐色砂質土層で2'はカーボン粒含む。	
E区 AY-391	長方形 k-2 l-1・2	N-78°-E	260×48 35	埋没土はバミス・粘性土ブロックを含んだ暗褐色土層。	14号掘立と重複する。
E区 AY-392	隅丸長方形 m-1・2	N-15°-W	214×44 23.5	埋没土はH層。	
E区 AY-393	長方形 m-4・5	N-12°-W	264×60 31.5	1層→A層で焼土を散見する。1'は地山の灰黄色土がまじる。	
E区 AY-394	隅丸長方形 i・j-3・4	N-11°-W	324×46 31	1層→暗褐色土層で下層ほど灰褐色土の混入多い。2層には地山の褐色	土ブロックが多い。
E区 AY-395	隅丸長方形 i-3 j-3・4	N-10°-W	420×58 37	1層→A層。1'には灰褐色土が多く1'にはバミス少ない。	394号土坑の東側に軸方向を同じにして隣接している。12号掘立と重複。
E区 AY-396	長方形 j-4・5	N-6°-W	486×88 19.5	埋没土はA層でカーボン等を含む。	33号住に後出する。12号掘立と重複する。
E区 AY-397	楕円形 i-4	N-90°	102×70 17	1層→A層、1'は混入物少なく1'は灰色粘性土がまじる。2層→斑鉄の	見られる粘性土。12号掘立と重複。
E区 AY-398	隅丸長方形 i-4・5	N-12°-W	246×100 15	2層→A層。小ブロック状のシルト質土をやや多く含んでいる。	
E区 AY-399	長方形 i-4・5		136×106 43	1層→A層。1'には黄褐色土をブロック状に含んでいる。	398・400号土坑に後出する。
E区 AY-400	i-4・5 j-4	N-8°-W	164×(86) 10	1層→A層。2層→暗黄褐色土層で弱粘性土と砂質土との混合土層。	399号土坑に先行、398号土坑と重複。
E区 AY-401	長方形 i-5・6	N-17°-W	(162)×60 8	3層→しまり欠く黒褐色土層。	402号土坑に後出する。
E区 AY-402	隅丸長方形 i-5	N-79°-E	228×72 40	4層→A層。カーボン粒・焼土粒を散見する。4'層→A'層。	401・404号土坑に先行する。12号掘立と重複する。
E区 AY-403	隅丸長方形か i-5	N-70°-E	(84)×60 20	2層→A層。カーボン粒を少量含む。	404号土坑に先行する。
E区 AY-404	不整楕円形 i・j-5	N-16°-W	158×66 33	1層→H層。黄褐色土ブロックを含む。	402・403号土坑に後出。
E区 AY-405	不整形 j-6	N-18°-W	146×78 24	埋没土はH層土。	
E区 AY-406	隅丸長方形 i・j-6	N-21°-W	102×42 17	2層→A層。	407号土坑に先行する。
E区 AY-407	長方形 j-6	N-7°-W	186×96 42.5	1層→A'層。1'は混入物少ない。	406号土坑に後出する。
E区 AY-408	長方形か h・i-5	N-6°-W	(126)×48 49	1層→A層でしまりやや欠く。1'は混入物少ない。	南側は調査区域外。
E区 AY-409	j・k-7		(134)×(90) 27		
E区 AY-410	方形か k-7		10		
E区 AY-411	長方形か k-7	N-60°-E	(156)×42 11.5		
E区 AY-412	i-6		82	2層→H層。2'層は混入物少ない。	南西側は調査区域外。413号土坑に先行する。
E区 AY-413	長方形か i-6		(78)×72 19	1層→H層で混入物少ない。	南西側は調査区域外。412号土坑に後出する。
E区 AY-414	不正方形 k-4	N-10°-E	72× 8	3層→B層。	415号土坑に先行する。
E区 AY-415	長方形 k-4	N-10°-E	264×90 31.5	1層→H層。1'は黒色味強い。	414・416・417号土坑に後出する。12号掘立の区画内にある。
E区 AY-416	長方形か k-4	N-10°-E	-×102 14.5	4層→415号土坑1'層に近似する。	415号土坑に先行する。
E区 AY-417	長方形 k-4	N-85°-E	138×92 62.5	2層→地山灰黄色土の混入多い暗黄褐色土層。	415号土坑に先行する。
E区 AY-418	方形か k-4		13		415・417号土坑と重複する。12号掘立の区画内にある。
E区 AY-419	隅丸長方形 k・l-3・4	N-80°-E	178×70 32	5層→A層。5'では混入物やや多い。	420号土坑に後出する。



番号	平面形 位置(グリッド)	長軸方位	長軸×短軸 深さ(cm)	埋没土の特徴 出土遺物	備考
E区 AY-420	k-4		88 × - 29	6層→A層でやや黒色味をおびる。	調査時には419号土坑と同一と扱った。
E区 AY-421	長方形 k・1-4	N-11°-E	168 × 88 68	9層→暗黄褐色砂質土層。9'は弱粘性でしまり欠く。	422・423号土坑に先行する。
E区 AY-422	隅丸長方形か k・1-4	N-11°-E	- × (90) 47	8層→A層。8'は混入物少ない。	
E区 AY-423	長方形 k・1-4	N-82°-E	194 × 100 60.5	7層→H層。カーボン粒を含む。7'ではシルト質土の混入やや多い。	421・422号土坑に後出する。12号掘立の区画内にある。
E区 AY-424	隅丸長方形 k・1-5	N-71°-W	124 × 104 58.5	1層→A層土でやや砂質。1'には黄褐色土がまじる。2層→粘性土と地山砂質土の混合土。	底面と壁下半は砂質土中にある。12号掘立と重複。
E区 AY-425	隅丸長方形か k-5	N-80°-E	(202) × (68) 41	1層→H層土。下層ほど混入物が多い。2層→地山にやや近い暗黄褐色砂質土層。	425~430号土坑は重複し合う一群で不明瞭な部分が多い。12号掘立と重複する。
E区 AY-426	k-5		41		調査時に425号と同一としたが掘り上がりから別遺構として分けた。
E区 AY-427	長方形か k-5	N-80°-E	(120) × 102 50.5	埋没土はA層土。	428号土坑に後出か。
E区 AY-428	長方形か k-5	N-15°-W	(46) × 88 37.5	埋没土は427号と近似するがブロック状の灰黄色土の混入多い。	427号土坑に先行か。
E区 AY-429	長方形 k-5	N-5°-W	160 × (86) 57.5		425・427・430号土坑と重複。
E区 AY-430	長方形 k-5	N-4°-W	168 × 110 79.5	1層→H層土。灰黄色砂質土ブロックを含むが下層ほど細かい。2層→黒褐色土層。3層→暗灰褐色土層。	
E区 AY-431	長方形 k-5・6	N-8°-W	176 × 124 39.5	1層→灰黄色砂質土ブロックを含む暗褐色土層。	432号土坑に後出。発掘調査時には1基の土坑として扱う。
E区 AY-432	長方形 K-6	N-8°-W	222 × 86 31	2層→A層。3層は黄褐色土ブロック・カーボンを含む。4層はピットか	431号土坑に先行。
E区 AY-433	隅丸長方形 K・1-6	N-78°-E	174 × 120 56.5	3層→焼土・カーボン粒のまじる非粘性暗褐色土層。	434・435号土坑に先行する。
E区 AY-434	長方形か 1-6			1層→暗黄褐色土層。灰黄色土小ブロックを含み1'で混入物多い。	433号土坑に後出し、435号土坑と重複する。
E区A Y-435	不整形 1-6	N-85°-W	120 × (108) 26.5		433号土坑に後出し、434号土坑と重複する。
E区 AY-436	隅丸長方形 k-6	N-13°-W	192 × 108 37	1層→灰褐色粘性土を小ブロック状に含む暗褐色土層。1'は黒色味強い。	
E区 AY-437	長方形 k-6 1-6・7	N-7°-W	300 × 78 44.5	1層→やや砂質の暗灰褐色土層。2層→混入物少なくしまり欠く暗褐色土層。	
E区 AY-438	正方形 n-4		(116) × 122 22	1層→A層。	439号土坑に後出する。
E区 AY-439	n-4		- × 86 13	2層→A'層。	438号土坑に先行する。
E区 AY-440	長方形か n-4	N-14°-W	(112) × - 43	4層→H層で下層にカーボン粒まじる。	441号土坑に先行、442号土坑と重複する。12号掘立と重複する。
E区 AY-441	方形か 1-4	N-16°-W	96 × (82) 45	3層→H層で440号土坑との区別難しい。	440号土坑に後出、442号土坑にも後出か。
E区 AY-442	長方形 1-4	N-72°-E	170 × 102 60		440・441号土坑・12号掘立と重複する。
E区 AY-443	隅丸長方形 m-4	N-9°-W	154 × 130 12.5	埋没土はA層に近くパミス等の混入物多い。	
E区 AY-444	楕円形 1・m-5	N-85°-E	170 × 102 42	埋没土は暗褐色土層で下層は漸移的に地山の褐色砂質土に近づく。	底面は砂質土中にある。
E区 AY-445	長方形 m-6	N-87°-E	150 × 66 25.5	1層→パミスの混入の多い暗褐色土層で1'はやや砂質。	
E区 AY-446	m-7		196 × 78 23	1層→B層。	447号土坑に後出する。
E区 AY-447	m-7		176 × 52 17.5	2層→A層。	446号土坑に先行する。
E区 AY-448	長方形 1-6	N-79°-E	154 × 102 45.5	1層→A層で焼土・カーボンを含む。2層→砂質土をブロック状に含む暗灰褐色土層。	
E区 AY-449	隅丸長方形 m-5・6	N-12°-W	160 × (110) 41	1層→A層。1'は混入物少ない。	451号土坑に後出している。

番号	平面形 位置(グリッド)	長軸方位	長軸×短軸 深さ(cm)	埋没土の特 徴 出土遺物	備考
E区 AY-450	方形か l・m-6	N-76°-E	(44)×96 15.5	4層→混入物の少ない黒褐色砂質土層。5層→地山との区別難しい粘性土層。斑鉄あり。	451号土坑に後出する。
E区 AY-451	長方形 m-5・6	N-12°-W	220×120 66	2層→B層。3層→灰黄色土小ブロックを含む。黒褐色土層で3は混入物多い。	449号土坑に先行し、450号土坑に後出する。
E区 AY-452	楕円形 m-7	N-71°-E	98×80 15	1層→A層。2層には黄褐色土の混入多い。	
E区 AY-453	隅丸長方形 l-6・7	N-11°-W	232×80 44	1層→暗褐色粘性土層。2層には灰褐色土をブロック状に含む。3層は地山と区別難しい灰黄色砂質土。	
E区 AY-454	長方形 m-7	N-10°-W	142×102 81.5	1層→灰黄色土をブロック状に含む暗褐色土層でブロックの大ききで分層可能。2層→H層。	
E区 AY-455	長方形 m-7	N-78°-E	120×58 19	1層→A層。2層は地山の灰黄色粘性土主体で2は1層土との混合土。	
E区 AY-456	隅丸長方形 m・n-8	N-80°-E	308×42 31	埋没土はH層で1→1'へ向かって灰褐色土の混入が多くなる。	
E区 AY-457	長方形 n-7・8	N-11°-W	320×42 46	1層→H層。2層→B層。	458号土坑・27号溝に後出する。
E区 AY-458	n-7・8	N-75°-E	(94)×88 19.5		457号土坑に後出する。
E区 AY-459	t・u-7	N-63°-E	(116)×94 27	1層→A層でカーボン等の混入物多い。	東側は調査区域外。
E区 AY-460	長方形 q・r-9	N-71°-E	304×56 42	埋没土はA'層。	
E区 AY-461	長方形 r-9 s-8・9	N-70°-E	378×58 64	埋没土はA'層で、上方ほど混入物多い。	オーバーハング気味の壁だったと思われる。
E区 AY-462	隅丸長方形 s-8・9 t-8	N-72°-E	306×68 53.5	1層→A'層。1'は混入物少ない。	調査時には1基の土坑として扱う。
E区 AY-463	長方形 s-8・9 t-8	N-72°-E	264×100 53.5	1層→A'層だが464号土坑より混入物少ない。1'は混入物まれ。	462号土坑に先行する。
E区 AY-464	隅丸長方形 o-7	N-46°-W	104×46 64	1層→A層土。1'は黒色味をおびる。	底面は不明瞭。
E区 AY-465	円形 s-10		102×96 27	1層→A層。1'は黒色味強い。	
E区 AY-466	長方形 t・u-8	N-70°-E	388×66 55.5	1層→H層。1'は混入物少なく黒色味をおびる。	底面は平坦。
E区 AY-467	長方形 r-9 s-9・10	N-10°-W	256×84 37	1層→A'層。下層ほど混入物多い。	
E区 AY-468	長方形 s-9・10	N-10°-W	312×84 38	1層→H層。2層→A'層。	
E区 AY-469	隅丸長方形 t-9	N-5°-W	198×74 29	1層→A層。1'に灰褐色土ブロック混入。	
E区 AY-470	隅丸長方形 t-9・10	N-8°-W	396×42 23.5	埋没土はH層。	
E区 AY-471	隅丸長方形 t-10・11	N-78°-E	290×40 24	埋没尾羽H層。大粒の灰褐色土ブロックを含む。	
E区 AY-472	隅丸長方形 t-11	N-77°-E	166×38 16	1層→H層でカーボンまじる。2層は地山との区別難しい灰黄褐色砂質土層。	
E区 AY-473	長方形か t-13	N-76°-E	-×36 16.5	1層→黄褐色粘性土層。2層→A'層。	底面は平坦。28号溝と重複する。
E区 AY-474	長方形 t・u-13	N-13°-W	122×62 16.5	埋没土はA'層土で大粒の黄褐色土ブロックが多い。	底面は平坦。
E区 AY-475	長方形 u-14	N-20°-E	112×70 17	1層→地山に近似した灰黄褐色土層 2層→H層で黄色味強い。	底面は平坦。
E区 AY-476	隅丸長方形 u-13	N-15°-E	(102)×(72) 21.5	1層→A'層。2層→地山との区別の難しい暗灰褐色土層。	28号溝に先行する。
E区 AY-477	隅丸長方形 t-15	N-17°-E	(86)×56 34.5	1層→H層。2層→混入物の少ない暗黄褐色砂質土層。層で混入物やや多	底面は平坦。
E区 AY-478	楕円形 u-15	N-0°	(122)×86 25	1層→A'層。2層→暗黄褐色砂質土層で混入物やや多い。	
F区 AY-479	c-16 d-16・17		20	1層→A層で混入物は少ない。1'は地山の黄褐色土まじる。	不明瞭。小ピット群に先行し、480号土坑に後出する。

番号	平面形 位置(グリッド)	長軸方位	長軸×短軸 深さ(cm)	埋設土の特徴 出土遺物	備考
F区 AY-480	c・d-16		21.5	2層→A層。2'には地山の黄褐色土ブロック多い。3層→C層。	不明瞭。小ピット群、479号土坑に先行する。
F区 AY-481	c・d-15		21	埋設土C層土。	不明瞭。30号溝に先行する。
F区 AY-482	隅丸方形 c・d-15	N-50°-E	112 × 94 21.5	1層→A層で混入物は少ない。2層→B層。	30号溝に先行する。481号土坑と重複する。
F区 AY-483	d-16	N-55°-E	102 × 78 31.5	2層→B層。焼土・カーボンを散見する。	484号土坑に先行し、485号土坑に後出する。
F区 AY-484	楕円形 d-16・17	N-22°-E	148 × (122) 29	1層→A層。	483号土坑に後出する。小ピットと重複する。
F区 AY-485	d-16		16	3層→A'層。混入物の粒子は細かい。	32号溝・483号土坑に先行する。31号溝と重複する。
F区 AY-486	d-16	N-90°	43	埋設土はA層土でカーボン粒を散見する。	31・30号溝と重複する。
F区 AY-487	楕円形 d-16	N-86°-E	94 × 70 13	埋設土はA'層。	
F区 AY-488	隅丸長方形 d・e-17	N-87°-E	(424) × 46 26.5	2層→H層で489号土坑に比べて混入物少ない。	489号土坑に先行する。32号溝に先行する。
F区 AY-489	隅丸長方形 d・e-17		280 × 46 33	1層→H層。	32号溝・488号土坑に後出する。
F区 AY-490	長方形 d-18	N-6°-W	160 × 106 21.5	1層→A'層。2層→混入物の少ない暗黄褐色土層。	30号溝に先行する。
F区 AY-491	d-17		20	3層→C層。	西側は調査区域外。492号土坑に先行する。
F区 AY-492	d-17	N-5°-W	110 × (40) 43.5	1層→A'層。1'は混入物大粒。2層→しまりないA層。2'はやや黄色味	西側は調査区域外。491号土坑に後をおびる。行する。
F区 AY-493	円形か d-18		96 × (60) 20.5	埋設土はA'層。	西側は調査区域外。
F区 AY-494	d-18	N-6°-W	48 × (26) 7.5	埋設土はA'層。	西側は調査区域外。
F区 AY-495	楕円形 d・e-18	N-33°-W	114 × 84 14.5		底面は不整。
F区 AY-496	不整形 f-21	N-22°-W	92 × 80 15	埋設土は地山に近似したA層土。	プランは不明瞭。
F区 AY-497	長方形 f-21	N-80°-E	260 × 80 57	1層→A層。2層→A'層で黄色味強い。2'は混入物がやや大粒になる。	
F区 AY-498	隅丸方形か d-19		13.5	6層→A層で混入物少ない。7層→A'層。8層→地山と区別難しい暗灰	498～507・509号土坑は30号溝西側褐色土層。に重複して並んでいる。
F区 AY-499	隅丸方形か d-20		20	4層→A層。5層→A'層。	500号土坑に先行し、498号土坑に後出する。
F区 AY-500	長方形か d-20		13	2層→A'層。	501号土坑に先行し、499号土坑に後出する。
F区 AY-501	d-20		13	1層→B層。	500・502号土坑に後出する。30号溝と重複する。
F区 AY-502	d-20・21		25	3層→A層。	501号土坑に先行する。30号溝と重複する。
F区 AY-503	楕円形か d-21		30.5	5層→B層。	504号土坑に先行する。
F区 AY-504	d-21		47.5	4層→C層。4'では黄褐色土粒を少量含む。	503・505号土坑に後出する。
F区 AY-505	d-21・22		32	6層→A'層で、6'は混入物やや少ない。	
F区 AY-506	d-22		21	1層→A層。	508号土坑に後出する。
F区 AY-507	不整形 d-22	N-82°-E	(52) × 60 21	3層→B層で焼土散見する。	30号溝・508号土坑に先行する。
F区 AY-508	d-22	N-88°-W	290 × (100) 25.5	2層→A'層で焼土散見する。2'は黄色味をおびている。	506号土坑に先行し、507号土坑に後出する。
F区 AY-509	不整形 d-18・19	N-4°-W	220 × (104) 25	1層→A'層。2層→A層。3層→シルト質土のブロック。	西側は調査区域外。重複する2基の土坑の可能性あり。

番号	平面形 位置(グリッド)	長軸方位	長軸×短軸 深さ(cm)	埋没土の特徴 出土遺物	備考
F区 AY-510	隅丸長方形 g-21	N-15°-E	152 × 110 44.5	1層→C層でやや砂質。1'は黒色味強い。	
F区 AY-511	円形 e・f-22		142 × 124 12	埋没土はC層土でピット状の窪み部分は黄色味が強い。	34号溝に後出か。小ピットと重複の可能性。底面不整。
F区 AY-512	円形 f・g-21・22		84 × 78 8.5	埋没土はA層土で496号土坑と同じ。	34号溝と重複する。
F区 AY-513	隅丸長方形 i-20	N-84°-E	182 × 50 18.5	1層→A層。1'層→A'層。	
F区 AY-514	隅丸長方形 i-20	N-11°-E	150 × 76 25	1層→A層。1'は黒色味やや強い。	
F区 AY-515	不整隅丸長方形 j-21	N-50°-W	124 × 60 23	1層→H層。1'層には黄褐色土小ブロックを含む。	
F区 AY-516	不整円形 i-21	N-19°-W	80 × 66 13	埋没土はA層でやや黒色味強い。	
F区 AY-517	長方形 i-21	N-12°-E	106 × 70 26.5	埋没土は灰色粘性土と暗褐色土の混合土層。	518号土坑と重複する。
F区 AY-518	隅丸長方形 i・j-21	N-88°-W	580 × 44 18		溝とした方が良い遺構かもしれない。517号土坑と重複。
F区 AY-519	円形 g-22・23		108 × (94) 13		
F区 AY-520	長方形か j-21	N-39°-W	(72) × 64 16	1層→A層。2層は地山との区別の難しい暗黄褐色土層。	不明瞭で底面も不整。35号溝と重複する。
F区 AY-521	円形 i-23・24		80 × 74 14	埋没土はA層土。	
F区 AY-522	不整円形 i-23	N-59°-W	108 × 96 13	埋没土はA層土で521号土坑と同じ。	
F区 AY-523	不整隅丸長方形 h-22	N-75°-E	172 × 54 21.5	埋没土はA層土で521号土坑と同じ。	
F区 AY-524	隅丸長方形 j-22	N-6°-E	80 × 46 20	1層→A層で灰褐色粘性土小ブロックまじる。1'では黄褐色土粒まじる。	
F区 AY-525	隅丸長方形 h・i-22	N-85°-W	68 × 46 38.5	1層→A'層。上層は焼土・カーボン含み、下層はしまりなくボソボソ。	34号溝に先行する。
F区 AY-526	円形 l-24		142 × 138 33.5	1層→A層。1'層→A'層。	
F区 AY-527	円形 k・l-24		144 × 134 22.5	埋没土はA層土。	526号土坑と形状が類似し、同土坑の西側1.6mに並んでいる。
F区 AY-528	長方形 m-24・0	N-4°-E	196 × 74 -	1層→A層。1'層→A'層。	
F区 AY-529	不整長方形 k・l-0・1	N-10°-W	250 × 108 14	埋没土はA層土で528号土坑A層に同じ。	
F区 AY-530	不整円形 i-1	N-39°-E	148 × 134 28	埋没土はA層土。	
F区 AY-531	円形 i・j-2		148 × 136 27	埋没土はA'層土。	
F区 AY-532	円形 k-3		144 × 138 61.5	1層→A'層。2層→H層。	
F区 AY-533	長方形か s-4		(116) × 84 16.5	1層→A層。2層→B層で底面直上は特に混入物多い。	東側半分は調査区域外にある。
F区 AY-534	不整円形 k-3		158 × 138 47	1層→A'層。2層→A層。	35号溝と重複する。
F区 AY-535	長方形 q-3・4		170 × 104 31		35号溝と重複する。底面やや不整。

大館馬場遺跡

番号	平面形 位置(グリッド)	長軸方位	長軸×短軸 深さ(cm)	埋没土の特徴 出土遺物	備考
F区 OT-1	楕円形か p・q-7	N-30°-E	(189)×(157) 84		1号溝に先行する。
F区 OT-2	楕円形か p・q-7	N-35°-E	(82)×60 17.5		
F区 OT-3	長方形 s-8	N-81°-E	190×108 91.5	1層→F層でカーボン粒を含む。1'は混入物少ない。2層→C層。3層→B層。	1号溝に先行する。重複する2基の土坑の可能性あり。
F区 OT-4	正方形か a・u-7	N-52°-E	(116)×113 13.5	1層→B層で底面付近にシルト質土をブロック状に含む。	5号土坑に後出か。
F区 OT-5	長方形か t・u-7	N-49°-E	-×126 19	2層→A層。3層→B層で焼土粒を散見する。	4号土坑に先行か。6号土坑に後出する。
F区 OT-6	楕円形か t・u-7	N-51°-E	(176)×132 87.5	4層→灰色シルト質土。砂質土の混合土層。5層→細礫まじりの砂質土層。	5号土坑に先行。8号土坑に後出する。7号土坑にも後出か。
F区 OT-7	楕円形か t・u-7		29	1層→しまりの強い暗灰褐色弱粘性土層。7'は混入物少ない。	6号土坑に先行する。
F区 OT-8	t・u-7	N-70°-E	-×113 23.5	6層→弱粘性土層。上層で灰色味、下層で黄色味の強いシルト質土ブロックを含む。	6号土坑に先行か。
F区 OT-9	v・w-7	N-55°-E	(100)×88 41.5		
F区 OT-10	v・w-7		(168)×(114) 50		
F区 OT-11	隅丸長方形 v-6・7	N-88°-E	160×60 38	1層→B層。2層→G層。	12号土坑に後出。
F区 OT-12	隅丸長方形 v-6・7	N-4°-W	261×217 27.5	3層→A層。3'は混入物少ないが明度高い。	11号土坑に先行。
F区 OT-13	隅丸長方形か v-6・7	N-3°-E	(92)×152 63.5		
F区 OT-14	長方形か t・u-8	N-13°-W	258×156 57	1層→A層。1'は混入物少ない。2層→G層。	底面に細かな凹凸あり。
F区 OT-15	正方形 u・v-7・8	N-86°-E	178×160 74		
F区 OT-16	隅丸長方形 u-8	N-1°-E	189×102 17	1層→A層。カーボン粒含む。1'は混入物少ない。2層→B層。シルト質土多い。	
F区 OT-17	隅丸長方形 v・w-9	N-88°-W	240×146 63	1層→G層で下層ほどシルト質土は小粒になる。2層→A層。3層→B層。	
F区 OT-18	隅丸長方形 w-8	N-2°-E	194×72 16		
F区 OT-19	楕円形 u-10	N-83°-E	126×82 21	埋没土はA層土。	
F区 OT-20	隅丸長方形 u-8・9	N-84°-W	270×114 25.5		
F区 OT-21	u-9・10 w-9	N-74°-E	159×133 71	埋没土はB層土。	重複する2基の可能性あり。
F区 OT-22	t・u-10	N-70°-E	(118)×66 25.5	1層→A'層。2層→B層で混入物はやや少ない。	23号土坑に後出。
F区 OT-23	u-10	N-80°-E	(104)×110 11	3層→A層。4層→B層。	22号土坑に先行。
F区 OT-24	t-9	N-10°-E	123×77 26.5	埋没土はG層土。	不明瞭で底面も凹凸多い。
F区 OT-25	長方形 u・v-9・10	N-13°-E	183×100 29	3層→A層。4層→C層。5層→F層。	27号土坑に先行。
F区 OT-26	u・v-9・10	N-60°-E	123×100 24		27号土坑と重複。
F区 OT-27	長方形か u・v-9・10	N-17°-E	250×124 18	1層→A層。カーボン粒散見。2層→F層。2'は混入物やや多い。	25号土坑に後出。26号土坑と重複。
F区 OT-28	w-8・9	N-88°-W	340×100 23.5	1層→A層。1'層→A'層。2層→B層。	
F区 OT-29	長方形か u・v-12	N-81°-E	282×99 56		5号掘立と重複する。

番号	平面形 位置(グリッド)	長軸方位	長軸×短軸 深さ(cm)	埋没土の特徴 出土遺物	備考
F区 OT-30	u・v-12		32		5号掘立と重複する。
F区 OT-31	長方形 t-12	N-5°-E	246 × 138 46	4層→G層。	32号土坑に先行する。
F区 OT-32	隅丸長方形 t-12	N-90°-E	146 × 76 44	1層→G層。1'は混入物多い。2層→1-3の漸移層。3層→地山黒色土の混入多い黒褐色土層。	31号土坑に後出する。
F区 OT-33	隅丸長方形 t・u-11	N-84°-W	124 × 98 27.5	1層→A'層。1'は混入物細かい。2層→G層。3層→B層。	3層は先行するピット埋設土か。
F区 OT-34	長方形 t-13	N-88°-E	120 × 76 29		
F区 OT-35	t-11	N-63°-E	124 × 48 37.5	1層→A'層。1'層→A層。	重複する2基の土坑か。
F区 OT-36	隅丸長方形 t-10	N-72°-W	90 × 66 49.5	1層→G層。2層→A層。	37号土坑に後出する。
F区 OT-37	長方形か t-10	N-4°-W	144 × 106 29.5	3層→G層で混入物多い。	36号土坑に先行する。38号土坑と重複する。
F区 OT-38	長方形か t-10	N-70°-W	94 × 72 20	4層→F層で地山との区別難しい。	37号土坑と重複する。
F区 OT-39	隅丸長方形 s・t-13	N-83°-E	(230) × 98 37		
F区 OT-40	長方形 r・s-12	N-89°-W	136 × 69 36.5	1層→B層。2層→A'層。	
F区 OT-41	s-11・12		(94) × 99 18	3層→A'層。4層→G層。	42号土坑に先行する。
F区 OT-42	長方形か s-11・12	N-88°-E	129 × 69 32.5 51.5	1層→B層。2層→A層。	41号土坑に後出する。底面は二段。
F区 OT-43	円形 s-12		144 × 148 55.5	1層→A'層。2層→G層。	
F区 OT-44	長方形か x-8・9	N-3°-E	(180) × 104 23	5層→F層。	45号土坑に先行する。
F区 OT-45	隅丸長方形 x-9	N-22°-W	266 × 126 23.5	1層→F層。2層→G層。3層→C層。7層→C'層。	
F区 OT-46	長方形か x-8・9	N-4°-E	226 × (70) 10		
F区 OT-47	x-9	N-27°-E	98 × 70 25	1層→F層。	
F区 OT-48	x・y-9	N-24°-W	90 × 68 34		
F区 OT-49	w・x-8	N-47°-W	260 × (112) 61	4層→F層。下層ほどシルト質土が大粒になる。5層→黒褐色粘性土。	50号土坑に先行する。重複する数基の土坑の可能性あり。
F区 OT-50	w-8	N-44°-E	130 × 110 59	1層→A'層。1'層→A層。	49・51号土坑に後出する。
F区 OT-51	隅丸長方形 w-8	N-30°-W	144 × 106 37	2層→G層。2'は黒色味をおびる。	50号土坑に先行し、52号土坑に後出する。
F区 OT-52	隅丸長方形 w・x-8・9	N-88°-W	(176) × 128 39	3層→F層。	51号土坑に先行する。
F区 OT-53	長方形 u-10	N-3°-E	260 × 210 27.5	4層→B層。	54号土坑に後出し、56号土坑と重複する。
F区 OT-54	u-10・11	N-69°-W	130 × (78) 19	8層→A層。	53・56号土坑に先行し、55号土坑に後出する。
F区 OT-55	v-10・11	N-70°-E	(90) × (68) 22	9層→G層。	54・56号土坑に先行する。
F区 OT-56	u-10・11	N-63°-E	(160) × 104 28	5層→G層。5'は混入物大粒で量も多い。6層→A層。	57号土坑に先行し、54・55・58号土坑に後出する。53号土坑と重複する。
F区 OT-57	隅丸長方形 v-10	N-10°-W	234 × 144 35	1層→A層。	56・58号土坑に後出する。
F区 OT-58	隅丸長方形 v-10	N-88°-E	226 × 70 36	7層→B層で混入物は少ない。	56・57・59号土坑に先行する。
F区 OT-59	隅丸長方形 v-10	N-9°-W	138 × 72 29	2層→B層。3層→G層。	58号土坑に後出する。

番号	平面形 位置(グリッド)	長軸方位	長軸×短軸 深さ(cm)	埋設土の特徴 出土遺物	備考
F区 OT-60	長方形 w・x-9	N-80°-E	200 × 132 49.5	1層→B層に近い人為的埋め戻し土	底面は平坦。
F区 OT-61	隅丸長方形 w-9・10	N-6°-W	182 × 88 24	埋設土はG層土。	
F区 OT-62	隅丸長方形 v-11	N-20°-W	116 × 100 44	4層→F層。	63号土坑に先行する。
F区 OT-63	隅丸長方形 v-11	N-12°-W	(130) × 50 21	1層→A層。2層→B層で2'は混入物多い。3層→シルト質土主体の暗黄褐色土層。	62号土坑に後出する。
F区 OT-64	楕円形か w・x-10	N-28°-W	122 × 92 18.5	1層→A'層で、1'は混入物多い。	重複する2基の土坑の可能性。
F区 OT-65	楕円形 v・w-11	N-17°-W	112 × 77 39.5	1層→A'層でカーボン粒まじる。2層→B層。	
F区 OT-66	長方形 w-11	N-86°-E	112 × 56 12	1層→A層。2層→A'層。	68号土坑に後行し、67号土坑と重複する。
F区 OT-67	隅丸長方形 w-11	N-85°-E	154 × 66 16	3層→A層でカーボン粒含む。3'はシルト質土ブロックの混入やや多い。4層→シルト質土。	68号土坑に後出し、66号土坑と重複する。
F区 OT-68	隅丸長方形 w-11	N-86°-E	200 × 124 16	5層→A層。6層→A'層。	65・66号土坑に先行する。
F区 OT-69	隅丸長方形 x-10	N-85°-E	78 × 30 19	1層→C層。2層→多量のカーボンを含む黒色土層で焼土散見。	底面は東側へ低く傾斜している。
F区 OT-70	円形 v-13		110 × 118 50.5	1層→F層。2層→A層。3層→C層。	
F区 OT-71	長方形 x-13	N-12°-W	180 × 72 32	1層→C層で1'はシルトブロックまじる。2層→B層。	
F区 OT-72	円形 w-13		106 × 107 39		
F区 OT-73	楕円形か v-11	N-82°-E	167 × 101 45	1層→B層でカーボン粒を含む。2層→C層。	
F区 OT-74	長方形か v-12・13 w-13	N-11°-W	152 × 106 57.5	1層→G層。2層→B層。3層→弱粘性の暗褐色土でシルト質土ブロックを含む。	小ピットと重複。
F区 OT-75	隅丸長方形 v-13	N-16°-W	120 × 88 48	1層→A'層。1'層→A層。	
F区 OT-76	u-14	N-46°-W	98 × ( 58) 35	4層→A層。	77号土坑に後出する。
F区 OT-77	u-14	N-40°-W	120 × 78 53	3層→B層。	76号土坑に先行する。
F区 OT-78	u-14	N-83°-E	69 × 66 38	1層→A層。1'層→A'層。	
F区 OT-79	楕円形 u-14	N-74°-E	74 × 60 39.5		
F区 OT-80	隅丸長方形 v-14・15	N-8°-E	( 66) × 50 35	3層→F層。3'はシルト質土小ブロックを含む。	81号土坑に先行する。
F区 OT-81	v-15	N-66°-E	96 × 80 48	1層→B層。1'は混入物が大粒になる。2層→A'層で粘性強い。	80号土坑に後出する。
F区 OT-82	正方形か v-15	N-3°-W	(128) × 126 47	1層→B層。2層→A'層。	83号土坑に後出する。
F区 OT-83	長方形か v-15	N-5°-W	( 86) × 128 21	3層→A'層。4層→C層。	82号土坑に先行する。
F区 OT-84	v-15	N-35°-E	( 50) × 55 7		82号土坑と重複する。
F区 OT-85	隅丸長方形 v-14・15	N-15°-W	236 × 124 28		
F区 OT-86	不整形 y-2		124 × 114 48	1層→B層で1'はシルトブロックが小粒になる。	6号掘立に先行する。
F区 OT-87	隅丸長方形 v-12	N-9°-W	142 × 106 54		88号土坑と重複する。
F区 OT-88	長方形 v-12	N-80°-E	156 × 108 52	埋設土は暗(黄)褐色弱粘性土の単一層。	5号火葬土坑に先行する。87号土坑と重複する。
F区 OT-89	不整形楕円形 w-15	N-54°-W	140 × 124 18.5	1層→B層。1'は地山との混合土層。	

番号	平面形 位置(グリッド)	長軸方位	長軸×短軸 深さ(cm)	埋没土の特徴 出土遺物	備考
F区 OT-90	長方形 w-16	N-10°-W	140 × 92 12	埋没土はA層で焼土、カーボンを含む。	井戸群の中にあり、7~10号井戸に隣接している。
F区 OT-91	長方形 x-17・18 y-17	N-85°-W	(273) × 59 21.5		2号溝と重複する。
G区 OT-92	円形 a-14		130 × 124 69	1層→C層。1'にはシルトブロック混入。2層→A'層。	
G区 OT-93	隅丸長方形 b・c-13	N-86°-W	240 × 140 19	1層→A'層で1'は混入物多い。2層→B層。	
G区 OT-94	隅丸長方形 c・d-15	N-89°-E	147 × 92 22	1層→B層でカーボン散見。2層→浮き上がった地山黄褐色土ブロック	
G区 OT-95	長方形 f-17	N-0°	232 × 62 33	3層→A層。3'はA'層。4層→B層。	96号土坑に先行か。
G区 OT-96	長方形 f-17	N-0°	192 × 128 53	1層→B層。1'は混入物多い。2層→暗灰褐色土層。	95号土坑に後行か。
G区 OT-97	円形か e-16	N-48°-W	190 × ( 90) 46.5	1層→暗褐色砂壤土。2層→A'層。3層→しまりの強い暗褐色土層。	北東側半分は調査区域外。
G区 OT-98	長方形 f-16	N-2°-W	(132) × 58 25	1層→B層。2層→A層でしまり強い。2'は混入物や多い。	北側は調査区域外。掘り直しの可能性。99号土坑と重複する。
G区 OT-99	長方形 f-16	N-87°-E	(150) × 60 23.5	3層→B層。	東側は調査区域外。98号土坑と重複する。
G区 OT-100	隅丸長方形 e-16・17	N-4°-E	317 × 98 35		
G区 OT-101	隅丸長方形 a・b-14	N-87°-E	168 × 41 39.5	1層→A層。1'層→A'層。	
G区 OT-102	長方形か f-18	N-90°-E	126 × 86 28	7層→B層。8層→G層。9層→F層で104号土坑埋設土。	103号土坑に先行し、104号土坑に後出する。
G区 OT-103	隅丸長方形 e・f-18	N-0°	182 × 166 84	3層→A層。4層→F層。5層→カーボン粒の多い暗褐色土層。6層→G層。	
G区 OT-104	隅丸長方形 e-17 f-18・19	N-3°-W	342 × 66 34.5		103・105号土坑と重複する。
G区 OT-105	楕円形か e-17 f-18	N-81°-E	248 × 170 43	1層→A'層。2層→暗褐色砂質土層でしまり強い。2'にシルト質土ブロックまじる。	106号土坑と共に2号溝と重複する。
G区 OT-106	楕円形か e-17	N-81°-E	(190) × 130 37.5	105号土坑と同じ。	105号土坑に先行するようだが断面からは確認できなかった。
G区 OT-107	長方形 d-17	N-86°-E	174 × 38 8		2号溝底より検出した。底面は平坦。
G区 OT-108	楕円形か e・f-19	N-6°-E	178 × 114 16		底面はやや不整。
G区 OT-109	隅丸長方形 f-20	N-1°-E	158 × 58 8	埋没土はシルトブロックのまじるA層。	
G区 OT-110	円形 h-21		136 × 126 42	1層→B層に近い暗灰褐色土層。2層→C層。	底面はやや平坦。
G区 OT-111	円形 f-22		146 × 144 35.5	1層→A層。1'にはシルト質土ブロック多い。	
G区 OT-112	長方形 g-19	N-3°-W	216 × 92 16	埋没土は大粒シルトブロックの多い暗褐色土層。	
G区 OT-113	円形 l-22		118 × 112 45	1層→B層。カーボン粒含み1'で特に多い。1'はシルトブロック。2層→しまりのない暗褐色土層。	フクロ状を呈している。
G区 OT-114	円形 t-5		96 × 90 18	1層→A層でカーボン粒散見。2層→暗灰褐色粘性土層。	
G区 OT-115	隅丸長方形 s・t-4	N-0°	120 × 110 48	1層→A'層。2層→しまりの強い黒褐色粘性土層で2'はシルトブロック含む。3層→黄褐色シルト質土層。	
G区 OT-116	楕円形 t-8・9	N-85°-E	72 × 64 19	1層→H層。2層→A層。	
G区 OT-117	長方形 d-15	N-87°-E	163 × 80 22		
G区 OT-118	隅丸長方形 c-20	N-7°-W	118 × 48 56	1・3層→A層。2・4層には細かなシルト質土ブロック混入。	
G区 OT-119	長方形 c-20	N-5°-W	96 × 48 43.5	1層→A層。2層→B層。	底面はやや不整。



番号	平面形 位置(グリッド)	長軸方位	長軸×短軸 深さ(cm)	埋没土の特徴 出土遺物	備考
G区 OT-120	円形 e・f-21・22		168 × 156 45	1層→A層。1'はA'層。2層には細かなシルトブロック混入。	
G区 OT-121	隅丸長方形 f-23	N-1°-W	274 × 106 82.5	3層→A'層。4層→C層。	120号土坑の北側10cmの位置に隣接する。
G区 OT-122	楕円形 u-9	N-70°-E	90 × 76 25	1層→A'層。2層→A層。	
G区 OT-123	楕円形か u-8	N-17°-E	112 × 94 18	埋没土はA層。	底面は上げ底状になる。
G区 OT-124	楕円形 w-10	N-77°-E	120 × 102 53.5	1層→A'層。下層へ向かうほど混入物は大きめで量も増す。	
G区 OT-125	円形か w-6		106 × ( 62) 34.5	1層→A層。2層→B層。2'は混入物多い。	
G区 OT-126	楕円形 y-9・10	N-13°-E	122 × 98 9・41.5	1層→非粘性黒褐色土層。2層→1・3の漸移層。3層→B層。	
G区 OT-127	楕円形 w-7	N-33°-W	72 × 62 17	1層→A'層でカーボン粒を含む。1'は混入物多い。	
G区 OT-128	不整円形 w-6		108 × 100 36.5	1層→B層。2層→A'層。	
H区 OT-129	円形 a-14		106 × 100 62.5	1層→B層。1'は混入物少ない。	
H区 OT-130	円形 c-10		98 × 96 47	1層→A'層。2層→A層。3層→暗灰褐色粘性土の混入多い。	

阿久津宮内遺跡

番号	平面形 位置(グリッド)	長軸方位	長軸×短軸 深さ(cm)	埋没土の特徴 出土遺物	備考
H区 AK-1	円形 o・p-0・1		130 × 122 49	1層→H層で1'はH'層。2層→C層。	
H区 AK-2	長方形 n・o-23	N-81°-E	274 × 62 12	埋没土はB層の単一層。	
H区 AK-3	長方形か q・r-22・23	N-7°-W	(112) × 95 23	1層→H'で1'はH'層。	北側半分は調査区域外。
H区 AK-4	隅丸長方形 m・n-1	N-0°	274 × 78 29	1層→B層。1'は混入物多い。2層→E層で地山との区別難しい。	
H区 AK-5	隅丸長方形 n-24・0	N-5°-W	313 × 81 47.5	1層→B層。1'は混入物多い。2層→E層。	
H区 AK-6	隅丸長方形 n-1・2	N-9°-E	260 × 78 42	1層→H層。1'層→H'層。2層→C層。	
H区 AK-7	長方形 m-21	N-9°-W	184 × 62 34	1層→B層。1'は混入物多い。2層→E層。	重複する2基の土坑の可能性あり。
H区 AK-8	隅丸長方形 n-1・2	N-6°-W	282 × 77 36	1層→H層。1'層→H'層。	
H区 AK-9	長方形 m-1・2	N-8°-W	234 × 98 30.5	1層→B層。1'は混入物少ない。	
H区 AK-10	隅丸長方形 o-2	N-90°-E	225 × 66 39	1層→H層。2層→A層。	
H区 AK-11	長方形か m-1・2	N-1°-W	100 × 64 32	1層→H層で1'はH'層。	小ピット状の重複遺構あるが不明瞭
H区 AK-12	隅丸長方形 o・p-2	N-0°	229 × 69 20	埋没土はH層で南側ほど混入物少ない。	
H区 AK-13	円形 p-2		114 × 108 66	1層→C層。1'は2層との漸移層。2層→B層。	
H区 AK-14	隅丸長方形 o・p-3・4	N-87°-E	210 × 76 48	1層→H層。1'層は混入物少ない。2層→H'層。	
H区 AK-15	隅丸長方形 r・s-0・1	N-89°-E	220 × 95 36	埋没土はH層土の単一層。	
H区 AK-16	長方形 r・s-1	N-7°-W	76 × 60 41.5	1層→C層。1'層→C'層。	
H区 AK-17	隅丸長方形 r-1・2	N-4°-E	217 × 97 53	1層→H'層。2層→C層。3層→B層。	
H区 AK-18	隅丸長方形 q・r-2・3	N-15°-W	216 × 114 32.5	1層→H層。1'層→H'層。	
H区 AK-19	隅丸長方形 r・s-2・3	N-85°-E	228 × 132 44	1層→B層。2層→C層。	
H区 AK-20	円形 t-3		158 × 150 32	1層→H層で1'では混入物少ない。2層→B層。	
H区 AK-21	円形 t-1・2		125 × 122 43	1層→H'層。2層→C層。	
H区 AK-22	隅丸長方形 s-4	N-80°-E	305 × 100 32.5	1層→H層で1'は混入物少ない。2層→H'層。3層→C'層。	
H区 AK-23	隅丸長方形 u・v-4	N-87°-W	268 × 100 47	1層→H層。2層→H'層。3層→C層。	
H区 AK-24	隅丸長方形 t・u-8	N-85°-E	206 × 61 35	1層→H層。1'はややしまり欠き、1'は混入物少ない。	
H区 AK-25	楕円形 w-6	N-13°-W	130 × 92 16	埋没土はH'層土。	
I区 AK-26	楕円形 b・c-6	N-80°-E	(195) × 139 59.5	1層→H層。2層→B層で2'ではシルト質土の混入多い。	重複する2基の土坑の可能性あり。
I区 AK-27	不整形円形 b-7		128 × 117 29.5	1層→H層で1'ではシルト質土の混入多い。	
I区 AK-28	隅丸長方形 g・h-12	N-81°-W	170 × 84 16	1層→H層。2層→A層。	底面はシルト質土で細かな凹凸あり
I区 AK-29	不整形円形 d-17・18		119 × 105 36		

番号	平面形 位置(グリッド)	長軸方位	長軸×短軸 深さ(cm)	埋没土の特徴 出土遺物	備考
I区 AK-30	円形 l-17		78 × 80 21		
I区 AK-31	不整形円形 f-15・16		129 × 116 24		
I区 AK-32	円形 l-20		124 × 119 20		
I区 AK-33	円形 p-21・22		180 × 176 48.5	1層→H'層。2層→B層。	
I区 AK-34	円形 s・t-22・23		173 × 166 33		
I区 AK-35	円形 q-23		121 × 111 28	1層→H'層。2層→B層。	
I区 AK-36	円形 v・w-6		166 × 162 48.5	1層→H'層で1'はH層。 2層→黒褐色弱粘性土層。	
I区 AK-37	円形 s-23・24		120 × 116 24		底面平坦。
I区 AK-38	楕円形か t・u-7		140 × (48) 16		南西側の大半は調査区域外。
I区 AK-39	楕円形か k-21		180 × - 54		8号井戸・40土坑に先行だが 関連する施設の可能性あり。
I区 AK-40	不整形円形 k-21		133 × 128 70		39号土坑に後出する。
I区 AK-41	隅丸長方形 p-20	N-3° -E	260 × 87 39		底面平坦。
I区 AK-42	長方形 y-6・7	N-5° -E	452 × 120 55	1層→H'層。2層→黒褐色弱粘性土層。 3層→地山と区別難い黒色土層。	
I区 AK-43	長方形 x-7・8 y-7	N-7° -E	(434) × 91 55	42号土坑に同じ。	
J区 AK-44	不整形 h・i-10	N-78° -W	224 × 140 24	1層→G層でカーボン粒散見。 2層→F層。	1基の土坑と思われる。
J区 AK-45	円形 f-11・12		182 × 172 28	埋没土はH'層土。	攪乱著しく不明瞭。
J区 AK-46	円形 e-11		85 × 90 13	埋没土はG層土。	7号溝と重複。
J区 AK-47	隅丸長方形 g-15・16	N-10° -W	276 × 141 34	1層→H'層。 2層→黒褐色弱粘性土層。	
J区 AK-48	長方形か b-14	N-10° -W	134 × 96 11	埋没土はH層土。	
J区 AK-49	円形 i・j-16		108 × 115 16	1層→H層。 2層→黒褐色弱粘性土層。	
J区 AK-50	隅丸長方形 h-14	N-90° -E	191 × 108 39	1層→H'層。2層→G層。	底面は著しく不整。
J区 AK-51	円形 p-17		97 × 90 29	埋没土はG層土。	攪乱著しく不明瞭。
J区 AK-52	円形 k・l-17		168 × 157 40	1層→H'層。	深さ4~10cmのピット状の落ち込みを持つ。
J区 AK-53	不整形円形 m-16・17		160 × 148 32	2層→黒褐色弱粘性土層。	
J区 AK-54	不整形円形 j-17		90 × 81 20	1層→H層。1'層→H'層。2層→地山に近似した黒褐色弱粘性土層。	上層に小礫の出土多い。

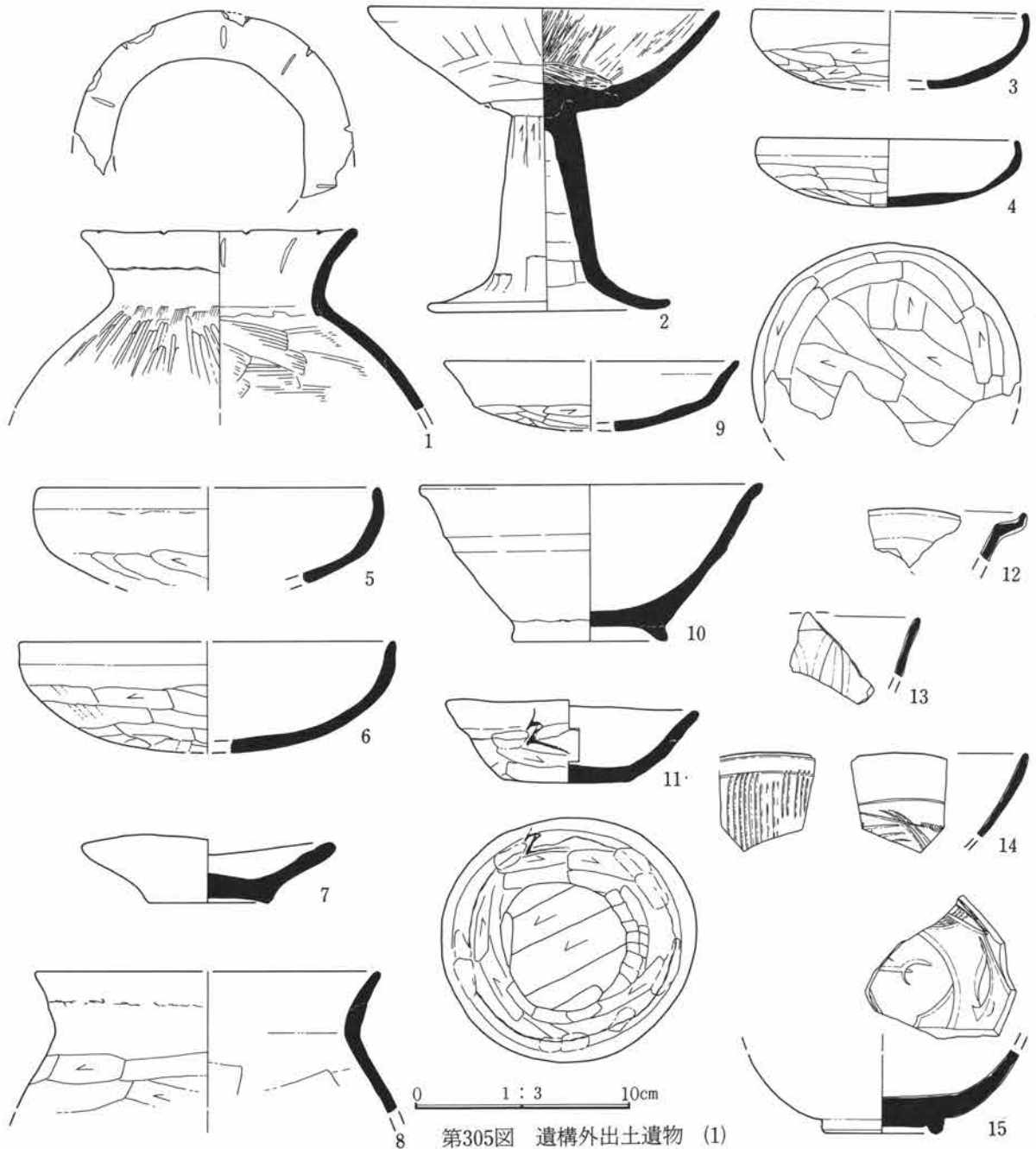
## 10 遺構外の遺物

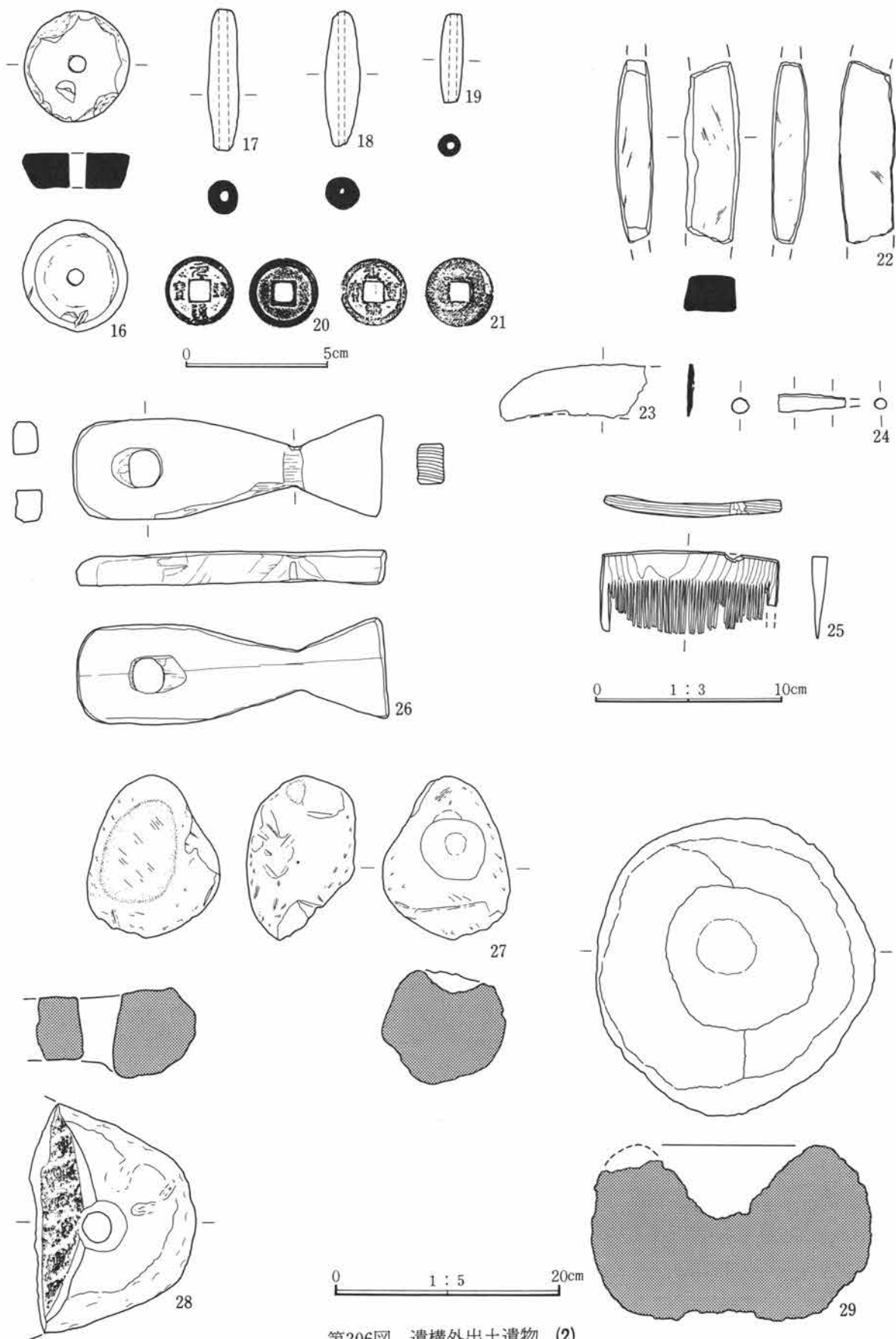
(第305・306図 PL-81)

表採等の遺構外の遺物、遺構に伴わない遺物と、調査段階で所属する遺構が不明となってしまった遺物についてこの項で一括した。完形に近い遺物および注目される遺物に限定した。

1～11は土器類で7以外は古代の遺物である。土師器の出土はこの他にも極めて多く、ごく一部の図

示となった。12～15は舶載青磁でいずれも表採品である。舶載磁器類はその他にも表採細片があった。25・26は安養寺森西遺跡の旧I区内井戸出土の木器で所属不明のものである。28は武蔵型と呼ばれる石臼の破片で、この型の臼類の出土は本遺跡では少ない。紡錘車、古銭、土錘の出土品はこの項による補足図示で全てである。





第306図 遺構外出土遺物 (2)

## (2) 氾濫層下の調査

### 11 安養寺森西遺跡出土の縄紋時代出土遺物

縄紋時代遺物の量はきわめて少なく、本遺跡の主体となるものではない。大館馬場遺跡、阿久津宮内遺跡では1点も出土しなかった。また、石器の出土は3遺跡を通じて確認できなかった。

出土状況を見ると、後の時代の溝や包含層に混じって出土している。土器自体も摩滅が多く、器面の劣化が見られることから、縄紋時代の集落などの遺構は周辺に求めた方が良さそうである。

以下、出土した土器を観察してみよう。

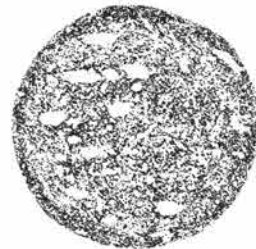
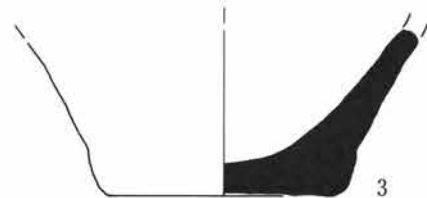
1の土器は、E区の氾濫層下畠の最下層で出土した5片を接合した。深鉢の胴部が球形をするようなカーブを持つ破片である。表面の摩滅は少ないほうで、単節LRの斜行縄紋を施文している。内面は、へら状の工具によるなで痕が見られる。暗褐色をしているが、水流の影響か表面に泥が付着して取れない。胎土には、石英まじりの細かい砂粒を含む。

2の土器は深鉢の底部破片で、F区氾濫層上面で出土した2片を接合した。外底に木葉痕を持つ。内面には、へら状の工具によるなで痕が見られる。全体に水流の影響を受けたため摩滅が著しい。色調は、明黄褐色である。水没していたためか、鉄分等を多く含み重くなっている。胎土には、輝石まじりの細かい砂粒を含む。

3の土器も深鉢の底部で、20号溝に混入していた。外底には網代痕を持つ。この土器も、水流の影響で全体に摩滅が著しく、鉄分等を含み重くなっている。色調は、明赤褐色である。胎土には、黒色の小石・長石等を多く含む。

図示した以外に橋状把手部分の小破片があるが、摩滅が著しかった。

これらの土器は、縄紋の施文方法や木葉痕、網代痕などから縄紋時代後期のもので、氾濫によって本遺跡へ運ばれたものと考えられる。



0 1 : 3 10cm

第307図 縄紋時代出土遺物

## 12 弥生時代の遺構と遺物 (第308～311図 PL-83・84)

阿久津宮内遺跡の北隅、H区g・h-22～23グリッドの周辺は、現状では平坦地であるが、古墳時代以前は地山がやや高い地点であったようである。洪水によるシルト質土の堆積も見られなかった。ここは近年には土取りをしゴミの廃棄場所とし、焚火を頻繁に行うなど、遺構の遺存には極めて条件の悪い場所であった。

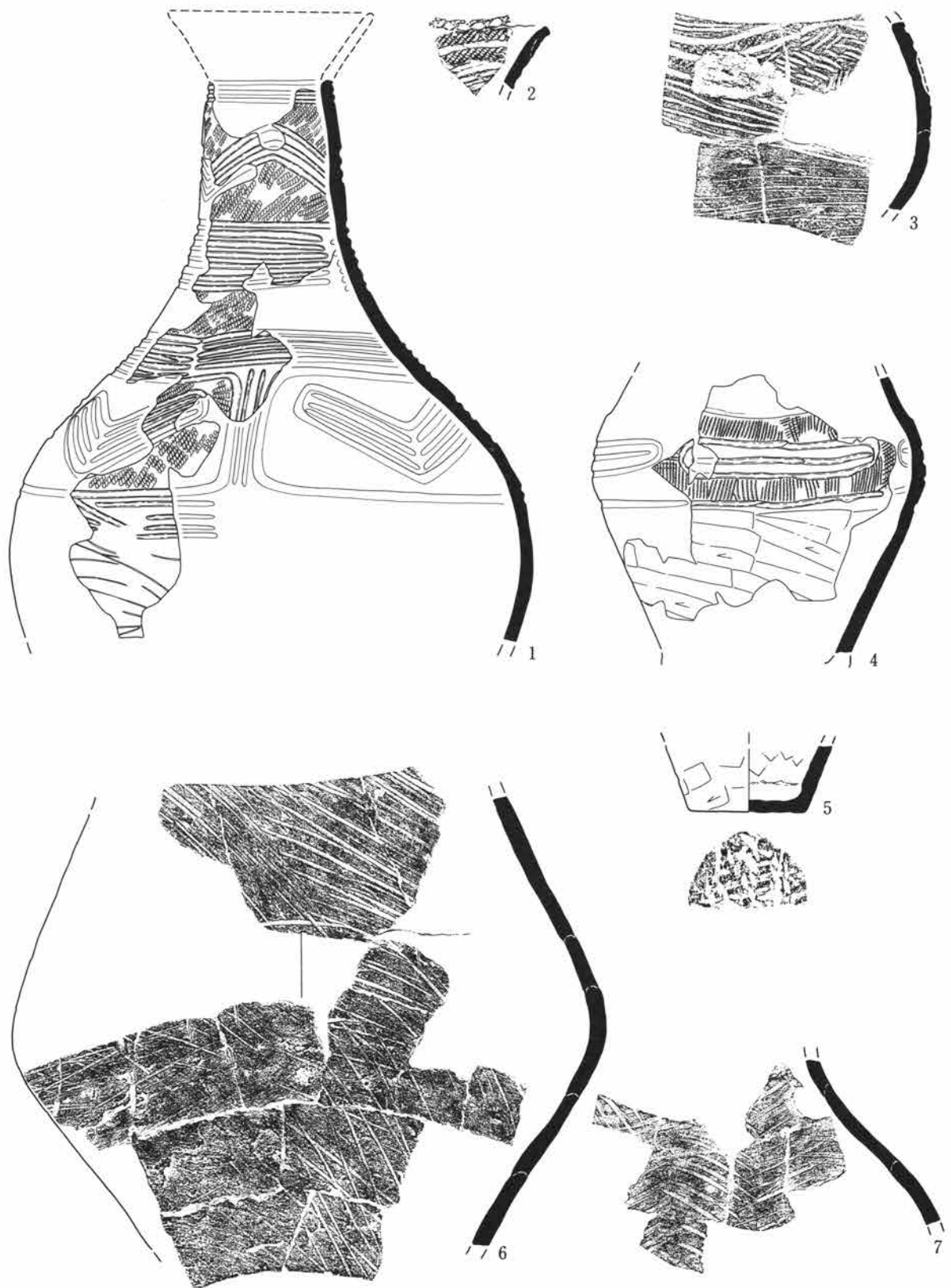
古墳時代畠の痕跡を精査中、弥生時代の遺物が出土しはじめた。多量の石器や剥片を伴っており、住居等の遺構確認に努め、遺物は極力ドットを記録し、セクションベルトを残して掘り進めたが遺構はみつからなかった。柱穴・壁溝等の痕跡はなく、特に焚火の痕跡のため焼土やカーボン粒の散布範囲を正確に把握できなかったこと、地床炉の確認ができなかったことが障害となった。遺物ドットの密集箇所2地点を住居の可能性のある地点として発掘現場での処理を終えたが、整理作業での接合資料確認により(第335～337図)、地点を離れた接合関係が極めて多かったことから、調査地点は住居跡となる可能性は小さいと判断した。しかし、石器の接合資料が多いことから、石器製作址であった可能性は否定できない。

### 土器 (第308～311図)

出土した土器は総数約500点でこのうち37点を図示した。いずれも弥生時代中期のもので、壺・甕・鉢などのセットが確認できた。特に甕類では内面にススの付着するもの(22・25・27など)があり、住居内で使われたと考えられるものが含まれている。また、ローリングを受けたものがないことから、集落が近接して存在していると推定できる。付近は利根川の自然堤防状の微高地であったと考えられ、ここに集落立地が求められよう。

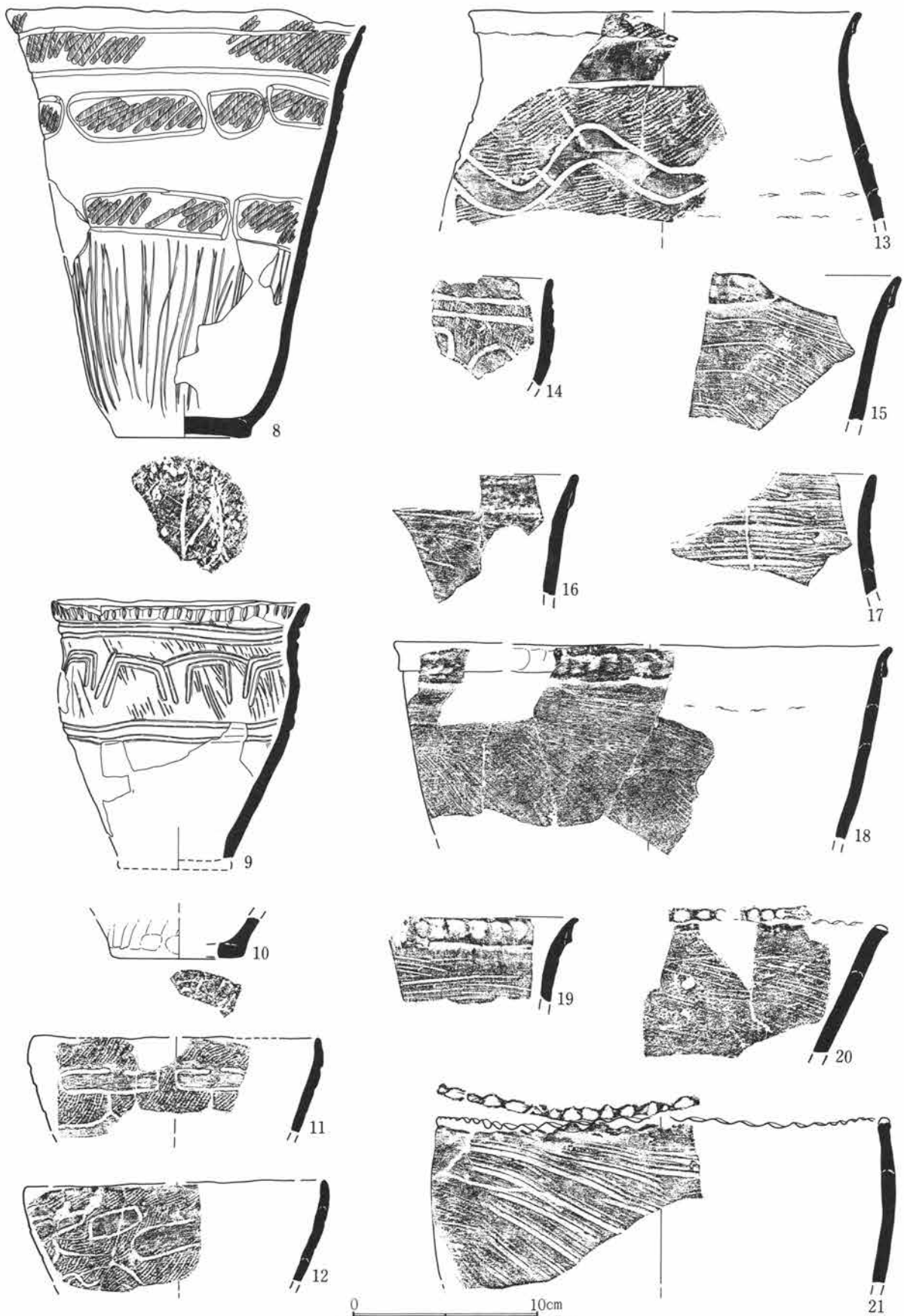
出土土器を概観すると、1・13のような東海系のもの、4・14・33・34のような東北系のもの、8のような東関東系のものが混在している。この時期の遺跡の土器様相を示すものとして注目されよう。こ

の中で圧倒的に出土量が多かったのが条痕文を有す土器で、口縁は外面を折り返し、指頭状の圧痕を加えるのが特徴的であった。縄文時代の伝統を残す在地的な土器と位置づけられるかもしれない。

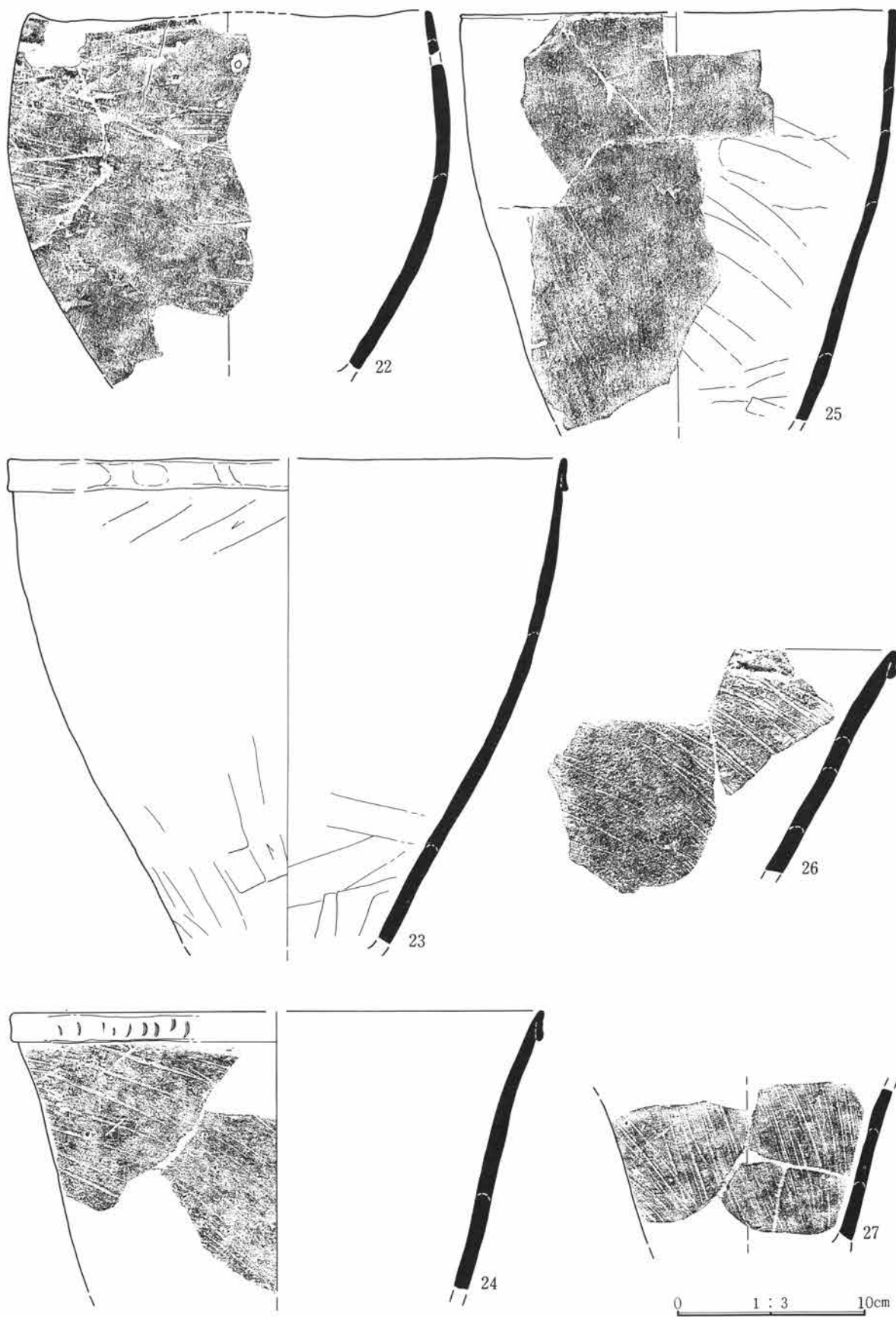


第308図 弥生時代出土土器 (1)

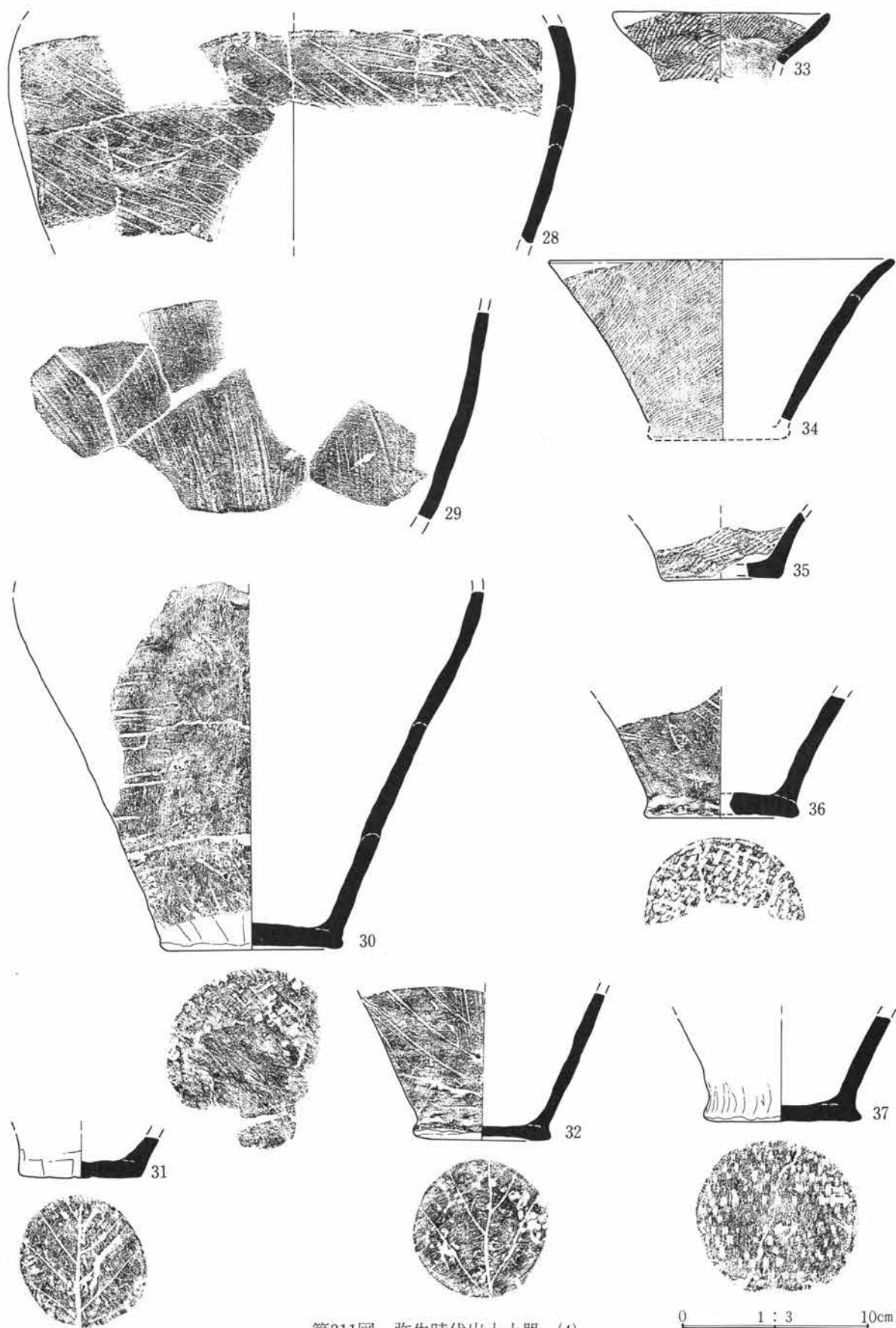




第309図 弥生時代出土土器 (2)



第310図 弥生時代出土土器 (3)



第311図 弥生時代出土土器 (4)

0 1 : 3 10cm

## 出土石器

出土石器は、阿久津宮内遺跡北端のG区・H区に分布していた。出土石器は弥生時代中期後半の土器に伴い出土しており、これ以外の時期の土器は全く見られないことから、所属時期の判明した良好な資料と判断されよう。

石器は正確な出土位置の不明な資料を含め、総計600点が出土している。出土石器は剥片と碎片が88% (523点) と大部分を占め、圧倒的に多い。組成の主たる構成器種には石鏃 (13点)、削器 (2点)、

加工痕ある剥片 (24点)、使用痕ある剥片 (7点) が組成するほか、敲石 (3点) や凹石 (1点)、台石 (1点) が組成に加わる。石鏃は概して搬入資料が多く、その他の石器が小形剥片の剥離に伴う廃棄資料と把え得る状況とは対照的な在り方を呈する。出土石器には概ね11種の石材が見られ、黒色安山岩が375点 (62、5%)、黒色頁岩が191点 (31、8%) と2種類の石材で95%を占める (3表～6表を参照)。石器石材の在り方は赤城山麓の石材構成に近い様相

第3表 石器の組成と石材

石器組成			石材組成		
①	剥片 59.26%	碎片 22.19%	黒色安山岩 33.48%	黒色頁岩 58.99%	①
①	石鏃 3.36%	石核 6.17	珪質頁岩 2.25%	砂質頁岩 0.28	
	削器 0.28	敲石 0.84	チャート 1.12	点紋頁岩 0.28	
	加工痕有る剥片 5.62	凹み石 0.28	① 黒曜石 0.28	石英閃緑岩 0.28	
	使用痕有る剥片 1.69	台石 0.28	ホルンフェルス 1.69	流紋岩 0.28	
			細粒安山岩 1.12		

第4表 器種別石材組成

石鏃 12点	① 黒色安山岩 8.3%	② 珪質頁岩 8.3	③ 砂質頁岩 8.3	敲石 3点	黒色安山岩 100%
削器 1点	黒色安山岩 100%			凹み石 1点	流紋岩 100%
加工痕有る剥片 20点	黒色安山岩 55%	黒色頁岩 40%	①	台石 1点	石英閃緑岩 100%
① ① ①	① ① ①	① ① ①	① ① ①	剥片 210点	① ① ①
使用痕有る剥片 7点	黒色安山岩 33%	黒色頁岩 47%		① 珪質頁岩 2.36%	① 細粒安山岩 1.89
				点紋頁岩 0.46	
石核 22点	① 黒曜岩 4.5%	黒色安山岩 77.2%	黒色頁岩 18.2%	① ①	① ①
				① 珪質頁岩 2.5%	① ①
				チャート 1.3	

を呈するものとも思える反面、黒色安山岩を多く用いる点は注意を要す。概して、石材選択は製作器種に大きく左右され、また、石材の入手事情などにもかかわるため断定は困難だが、赤城山麓の遺跡では黒色頁岩を用いる例が多い。石鏃から打製石斧まで多種多様な器種に用いる黒色頁岩は、群馬県内では最適石材と評価できよう。弥生時代中期後半の石材構成を知る良好な例は赤城山麓や遺跡周辺にはないこと、さらには、先にも述べた通り、石材の構成は製作器種・意図、及び、石材の入手・供給事情などにもかかわるため、この遺跡の石材構成の在り方が単なる时期的な特徴か地域的な特徴か、黒色安山岩を多く用いる理由が問われねばならない。類例に乏しく出土資料の評価は難しいわけだが、所属時期の明確な資料を得た点では成果は極めて大きい。

接合作業の結果、46例153点（接合率は25.5%に達している）の接合資料を得た。石器群の分布域に重なるようかく乱が見られ、遺物の欠落は著しい。この点を考え併せるなら、先に示した25%を越える接合率は決して低い数値ではない。石材構成、及び、

作出器種の関係把握は充分ではなく不明だが、遺跡製作の石器に関して言えば、石鏃を除く大部分は、遺跡で製作・廃棄した極めて同時性の高い資料と判断されよう。

石鏃（第312図1～4・313図5～10 PL-85）典型的形態を呈する石鏃は、6点（第312図1～4、第313図5・6）が出土したほか、石鏃の頭部破片（9）や刃部再生に伴う破片（10）が各々1点ずつ出土している。石鏃には機能部が三角形状を呈するもの（1）や、機能部が丸い形状を呈するもの（2～4）が出土している。後者には明確な「抉り」を加えるもの（2）と明確な「抉り」を持たずやや開く側縁形状を呈するもの（3・4）が見られ、若干形状が異なる。石材はホルンフェルス4点と最も多く、次に頁岩系石材が続く。縄文時代後期以後の石斧に多く用いる細粒安山岩は1点と少なく、また、余り使用されない黒色安山岩も石鏃の刃部破片だが、1点が出土している。

1～6の石鏃は母岩も大きく異なり、完成状態、

第5表 石器の組成と石材（位置不明）

石器組成				石材組成			
①	剥片 27.46%	碎片 68.44%		黒色安山岩 68.03%	黒色頁岩 29.51%		①
	石鏃 0.41%	石核 1.23		細粒安山岩 1.23%			
①	削器 0.41	礫 0.41		① 砂質頁岩 0.82			
	加工痕有る剥片 1.64			珪質準片岩 0.41			

第6表 器種別石材組成（位置不明）

器種	点数	石材組成
石鏃	1点	細粒安山岩 100%
石核	3点	黒色安山岩 33.3% 黒色頁岩 66.7%
削器	1点	黒色安山岩 100%
剥片	67点	黒色安山岩 50.75% 黒色頁岩 49.25%
加工痕有る剥片	4点	黒色安山岩 25% 黒色頁岩 75%
碎片	167点	黒色安山岩 77.24% 黒色頁岩 20.36% ① 細粒安山岩 砂質頁岩

或は、素材の状態に遺跡に持ち込まれ加工・使用・廃棄した可能性が指摘されよう。また、分類に若干問題を残す7・8も、石鍬の製作意図を強く感じる黒色頁岩・接合資料—1（第330図）の評価次第で、遺跡製作の石鍬の存在を示唆する資料とも見られ、注意しておきたい。

第312図1は、中央付近に最大幅を有する石鍬。三角形状に近い機能部を持ち、着柄部は直線的で、上端より1/3を過ぎた所から緩く開き機能部へ続く。長軸からみた断面形状は反り気味で、片側が膨らむ。幅広の大形剝片を用い、主に側縁部分に粗い加工を施し作出している。風化が著しいため刃部の摩耗は明確には観察できない。刃部の加工状態からみて、刃部の再生は顕著ではなく、概して使用頻度は低い、と思える。出土資料には同一母岩は見られないことから、搬入資料と判断されよう。

2は、機能部の中央付近に最大幅を有する石鍬。機能部は概して丸く、着柄部は直線的で、上端より1/3を過ぎた所から強く開き機能部へ続く。長軸からみた断面形状は反り気味で、片側が膨らむ。幅広の大形剝片を用い、着柄部分の加工を比較的丁寧に施す反面、その他の部分の加工は粗い。着柄部分にはヒモヅレが著しく、また、刃部の摩耗も著しい。出土資料には同一母岩が見られないことから、搬入資料と判断されよう。

3は、機能部の中央付近に最大幅を有する石鍬。機能部は概して丸い。側縁の形状は左右で異なり、右側の側縁は直線的、左側の側縁は緩く開く。長軸からみた断面形状は反り気味で、片側が膨らむ。幅広の大形剝片を用い、側縁部分に粗い加工を施す。刃部には著しい加工の痕跡は見られない。風化が著しく不明だが、刃部形状からみてそれほど使用頻度は激しくない。出土資料には同一母岩が見られないことから搬入資料と判断されよう。

4は、機能部の中央付近に最大幅を有する石鍬。上端部分の欠損に伴い側縁部分の再生を試みているため不明だが、元々は丸い機能部を有するものと推定されよう。長軸からみた断面形状は上下対称の

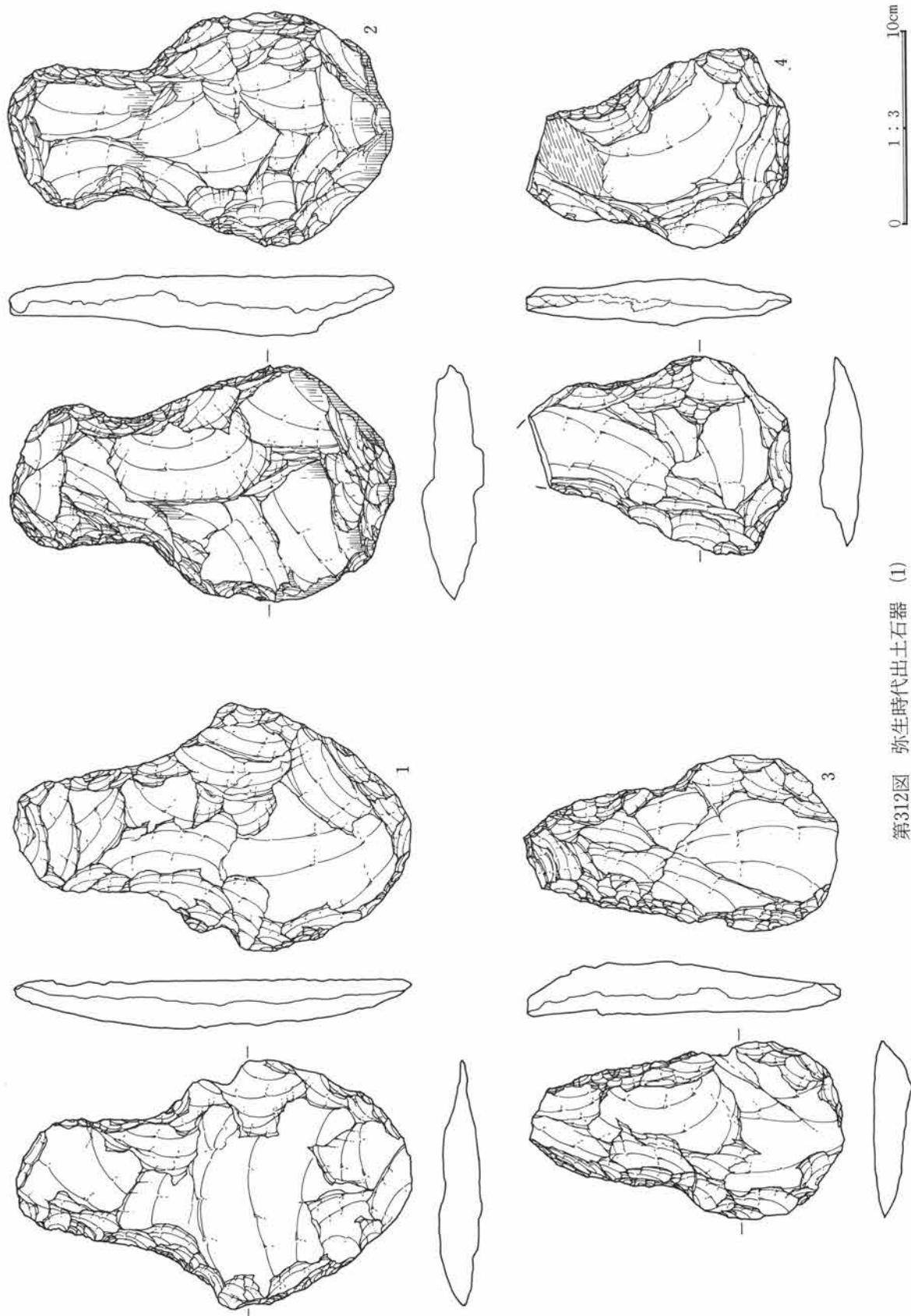
形状を示す。幅広の大形剝片を用い、周辺部分に粗い加工を施す。刃部の摩耗は風化が激しく明確ではない。出土資料には同一母岩が見られないことから、搬入資料と判断されよう。

第313図5は、中央付近に浅い「抉り」を持つ石鍬。機能部は素材の縁辺を加工することなく用いる。礫面を大きく残す幅広の大形剝片を用い、やや粗い加工を左右の側縁に施す。側縁形状は左右で異なり、左側縁は直線的、右側縁は弱く抉れる。上端部分は節理で大きく破損しており、側縁の加工段階で欠損した可能性が高い。出土資料には同一母岩が見られないことから、搬入資料と判断されよう。

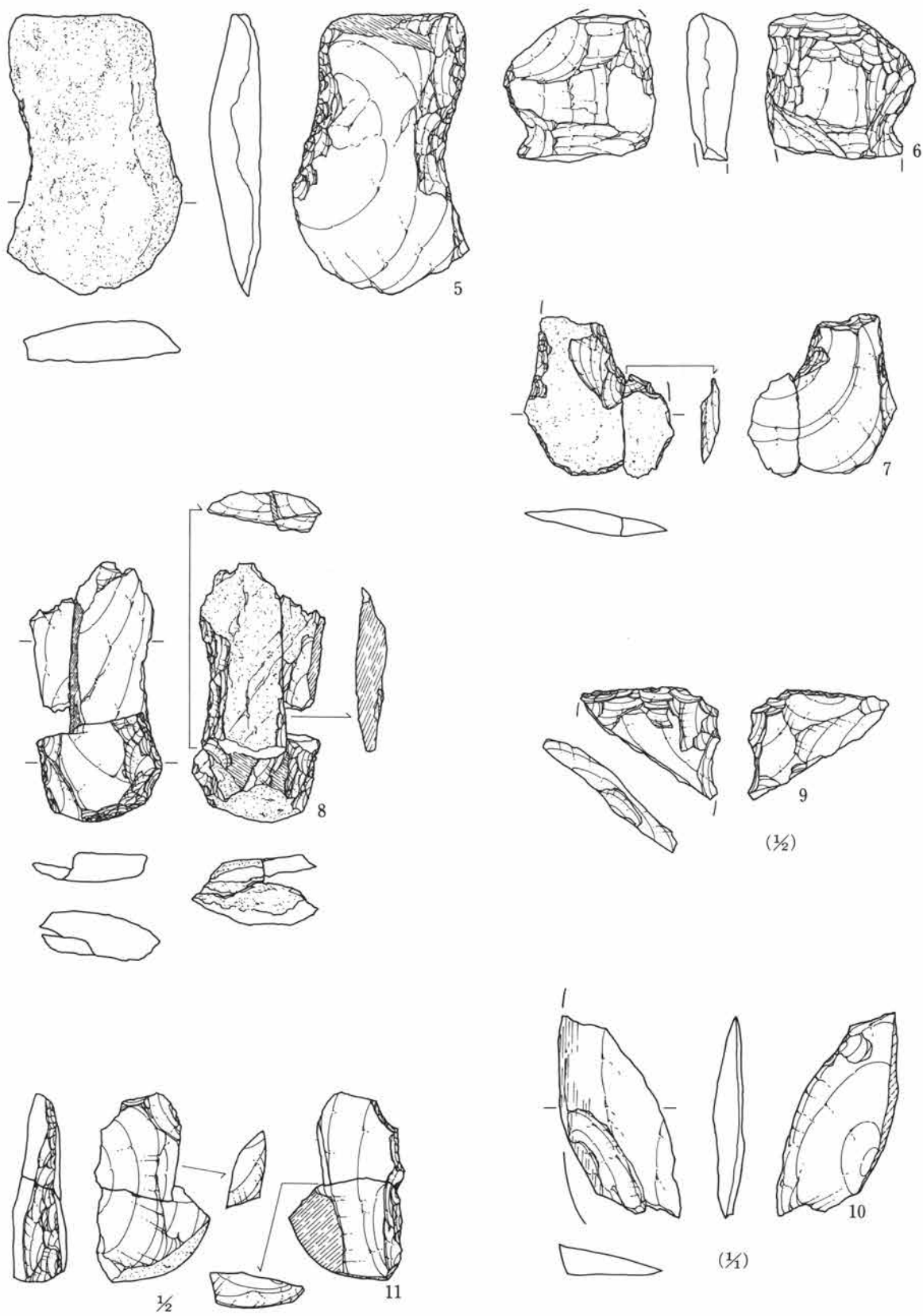
6は、下端部分を大きく欠損する石鍬。残存部分の形状からみて、上端に偏る位置に「抉り」を持つ、第312図2に近いタイプの石鍬と思える。残存部分からみる限り、やや肉厚で10cmを越える大形の石鍬と推定可能な反面、「抉り」部分では剝離が加わり、著しく薄い状態を呈しており、再生破損した可能性も残している。出土資料には同一母岩が見られないことから、搬入資料と判断されよう。

7は、製作の過程で側縁から破損した石鍬の接合資料（接合資料、黒色頁岩—2）。分類が妥当か疑問だが、形状、及び、加工状態からここでは便宜的に石鍬に分類した。剝片は薄く、そのため意図的に剝片端部を折り取り加工を進め製作したもの、と判断している。加工は左右の側縁部分に集中しており、表裏両面に粗い加工を加え、直線的な側縁を作り出している。また、加工は上端部分にも施され、加工は粗く形状作出も未熟な感が強い。刃部に連続する微細な剝離は刃部の形状を整える剝離と見られ、弧状の刃部を作出している。

8は、製作の過程で節理部分から破損した石鍬の接合資料（接合資料、チャート—1）。7と同様に、分類が妥当か疑問だが、形状、及び、加工状態からここでは便宜的に石鍬に分類した。やや厚い大形の剝片を用い、周辺部分に粗い剝離を加える。剝離の段階で節理部分で大きく破損しており、多分に製作途上で製作を放棄している可能性が強い。石材性状



第312図 弥生時代出土石器 (1)



0 1 : 3 10cm

第313図 弥生時代出土石器 (2)



からみた場合、石鋏には最も適当ではない石材を用いる本例は、石鋏の習作とも思える。

9は、石鋏の破片。破損資料でもあり形状は不明だが、側縁には浅い「抉り」が見られ、頭部破片の可能性が高い。破損部分の縁辺は鋭い反面で、残存部分の縁辺には弱い摩耗が見られ、上下が反転する可能性を残している。

10は、側縁部分の表裏両面とも著しく摩耗する石鋏の再生剥片。摩耗は側縁の剥離が見えないほど進んでおり、石鋏の激しい使用状況を良く示している。

#### 削器（第313図11）

第313図11は、部分的に礫表皮を残す幅広剥片を用いる。剥離は剥片の打面部分に集中しており、粗く鈍い角度の剥離を左側縁に施す。本例は中央部分で大きく破損している。

#### 加工痕ある剥片（第314図12～22 P L-85）

24点が出土している。やや幅広の横長剥片を用い、剥片端部に剥離を加える例が多い。概して製作意図の不明な例が多く、また、製作途上で破損する例が多い。剥離は概して粗く、打面部分に集中して施す例（12・16）、全周するよう剥離を施す例（14・18）、剥片端部に粗い剥離を施す例（20・22）が存在する。以上の通り、出土資料には製作意図が不明で評価が難しい中で、台形に近い形状の整う剥片を用い剥離を加える例（13・19）が少数存在する。時代背景を考えた場合、本例は形態的に収穫具に位置づけるものとも想定されよう。19は台形に近い剥片の側縁、及び、剥片端部に浅い剥離を加え形状を整え、機能部を作出している。21は剥離は粗く製作意図が不明な資料だが本例に近い形状、剥離状態を有する。

なお、13は、石鋏の主要石材・ホルンヘルスを用いる例。礫表皮を大きく残す。石鋏は搬入状態で出土する例が多数を占めるわけだが、石鋏の入手形態・製作実態を把握するうえでも注意しておきたい。

#### 使用痕ある剥片（第315図24～28 P L-85）

7点が出土している。剥片形状と使用部位の関係は通常の例に従い、縦長の場合には左右の側縁部分を、横長の場合には剥片端部を使用している。ここでは、代表的な例を図示した。

出土資料には、やや幅広の剥片を用いる例が多い。概して形状の整う例は少なく、「便宜的使用」に供した例が多い中で、24には収穫具と評した前図19に近い機能・用途を与え得る資料と思える。形状は概ね台形状を呈し、剥片端部を機能部に供している。取り上げ段階に大きく破損した剥片端部には使用で生じた微細な剥離が見られ、剥片形状からみてほぼ連続的に使用痕が生じていた可能性が高い。

#### 剥片（第315図29～31、第316図32 P L-86）

277点が出土した。接合資料（第319～329図を参照）に示した通り、出土剥片は小形・横長の剥片が多く、概して形状の整う例は少ない。出土資料の示す剥片の在り方は「便宜的石器」の色彩が濃く目的剥片の形状は不明だが、ここでは主に剥離の段階を特徴的に示す例を採り上げ、図示した。

第315図29は、幅広の横長剥片。打面部分には礫面を大きく残し、比較的形状の整う剥片端部を持つ。

30は、幅広の横長剥片。剥片上部には微細な剥離が集中しており、他の剥片とは大きく異なる。石材も細粒安山岩を用いており、石鋏の製作に伴う調整剥片の可能性が高い。

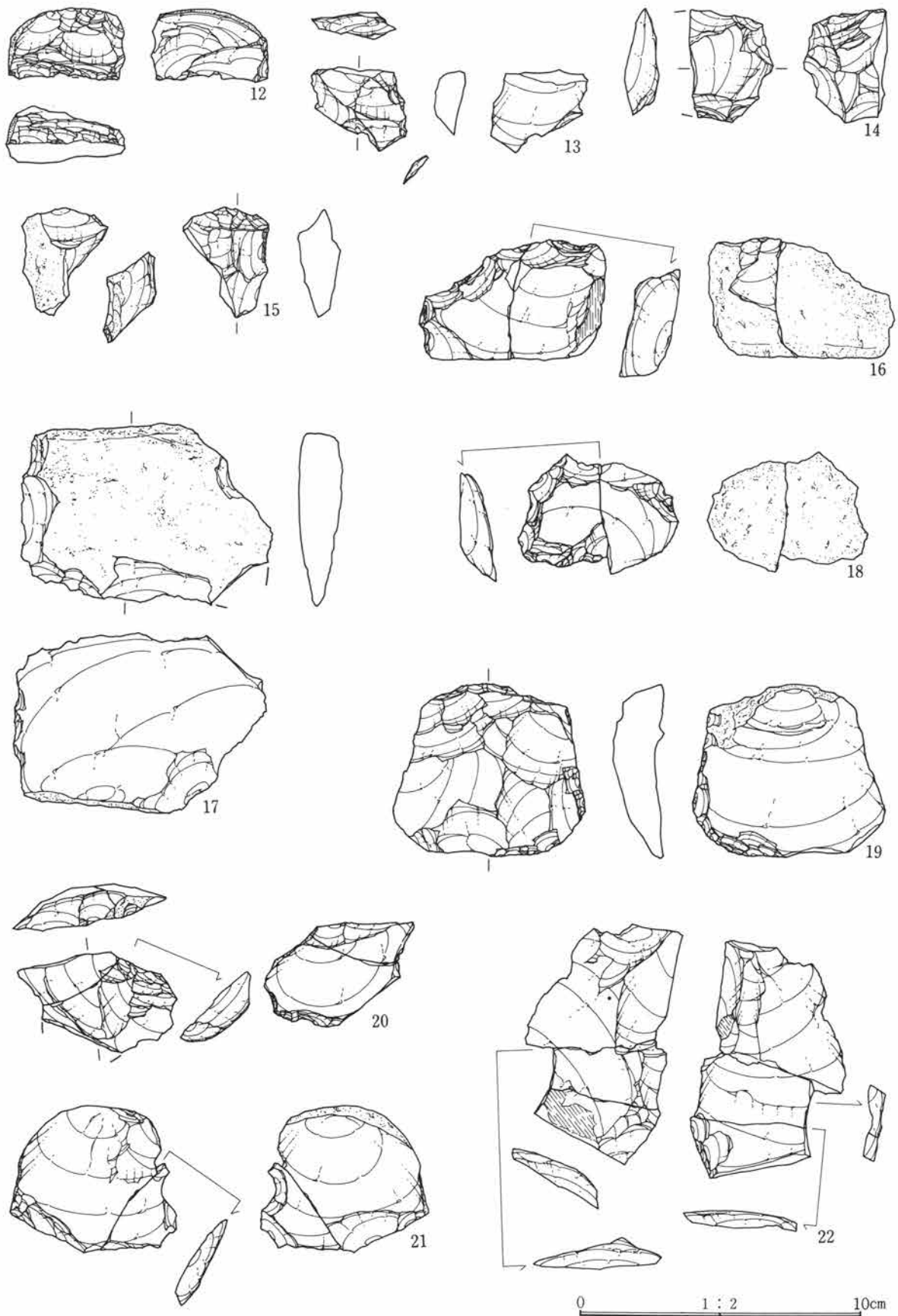
31・32は、礫面を大きく残す。断面形状は厚く、剥片剥離初期の打面作出に伴う剥片の可能性が高い。

#### 敲石（第316図33・34 P L-86）

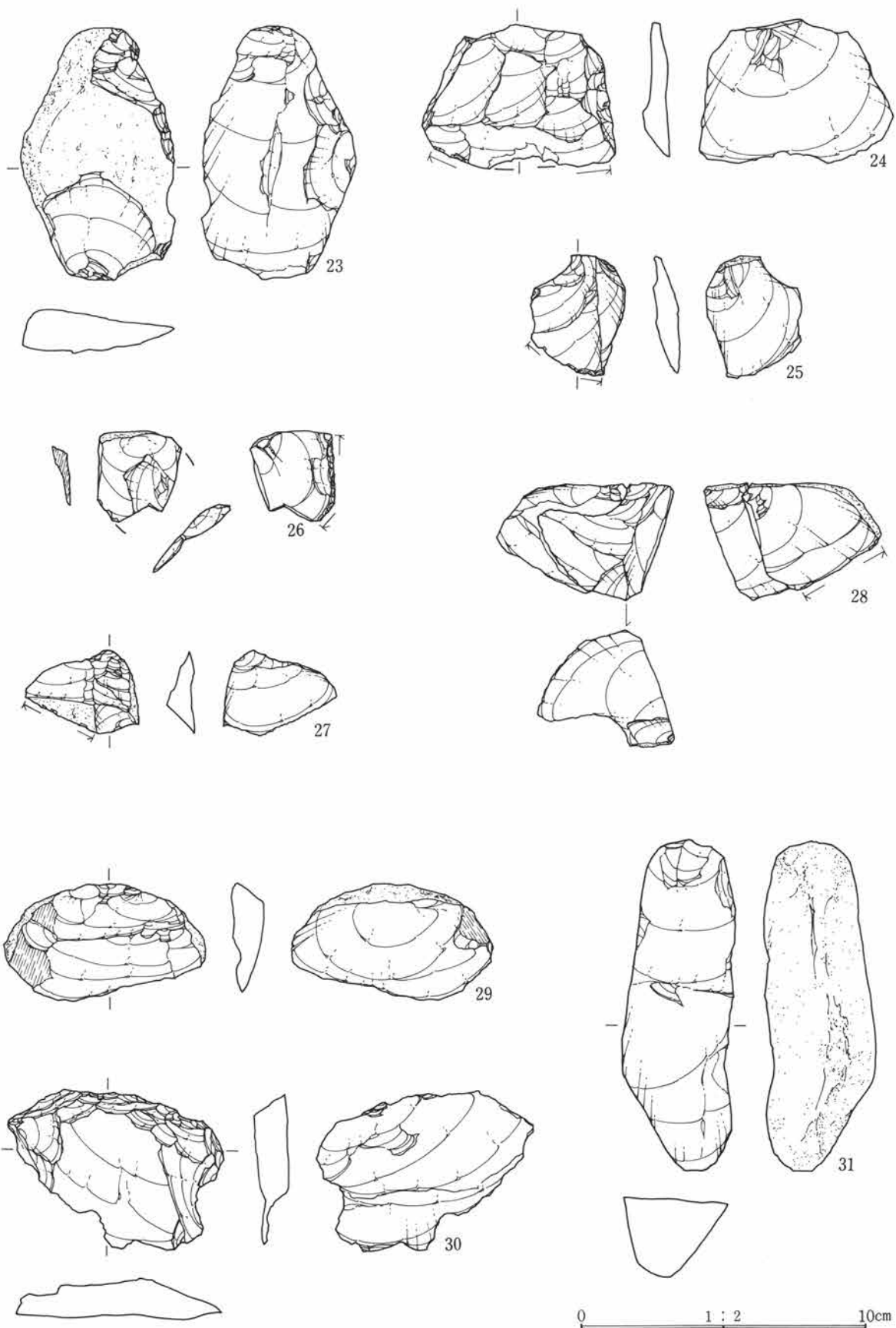
3点が出土しており、総て黒色安山岩を用いる。33は概して小形で、摂理で破損している。34は敲石の破片で、小口部分で加撃した際に破損している。

#### 凹石（第316図35 P L-86）

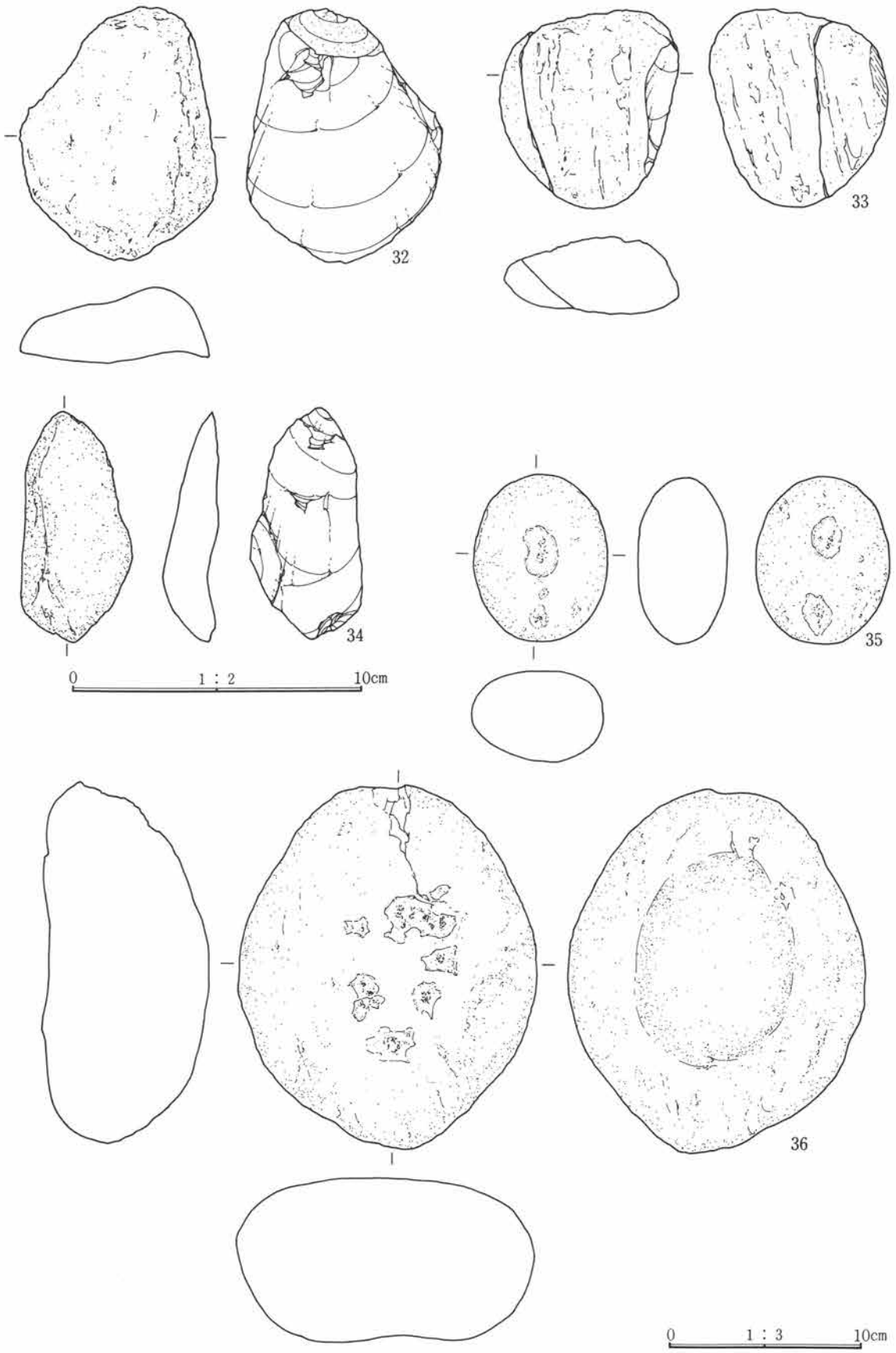
1点が出土している。表裏両面、及び、側縁に著しい集合打痕が存在する。この打痕は上下両端に近い位置にも見られ、若干分類に疑問も残る。



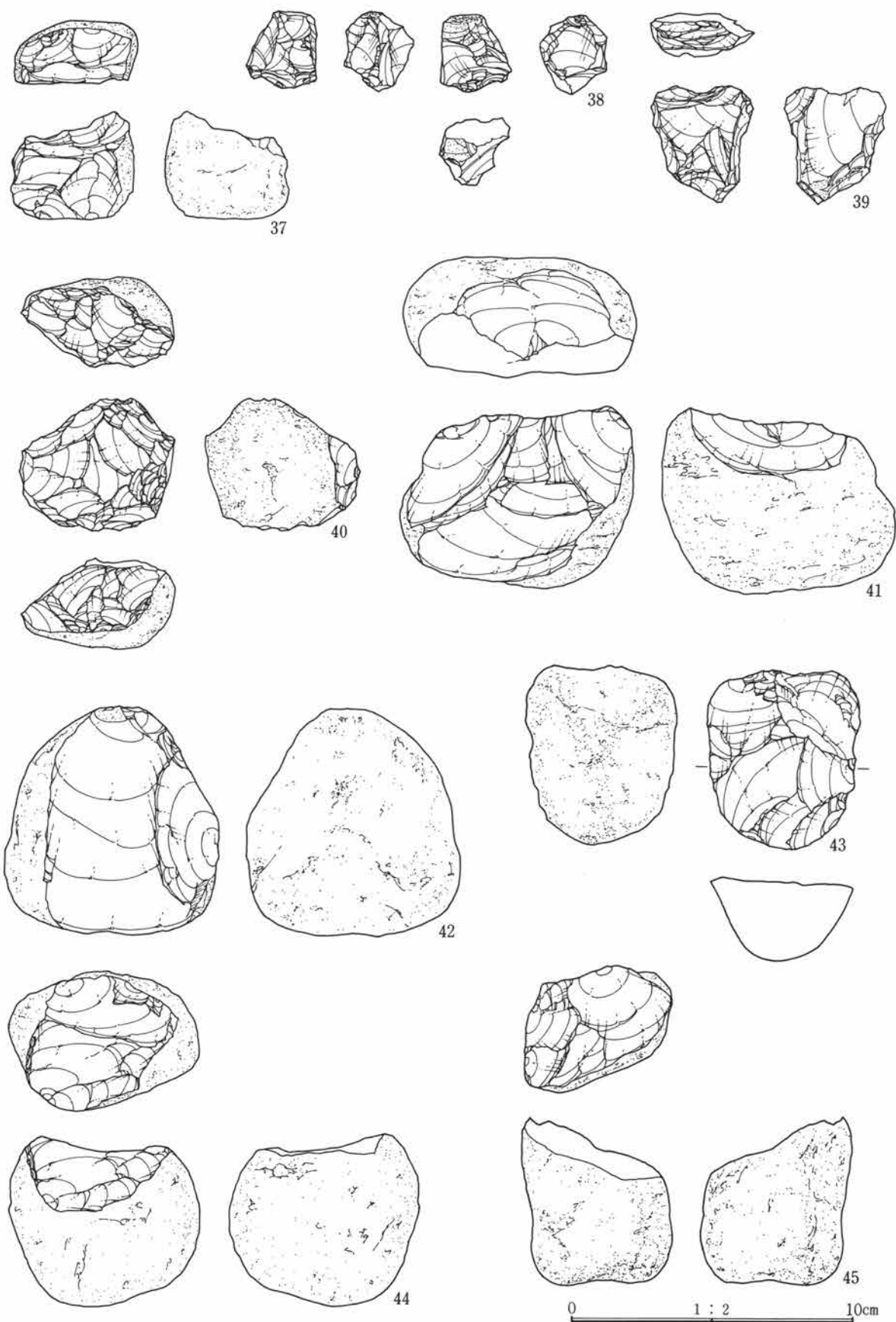
第314図 弥生時代出土石器 (3)



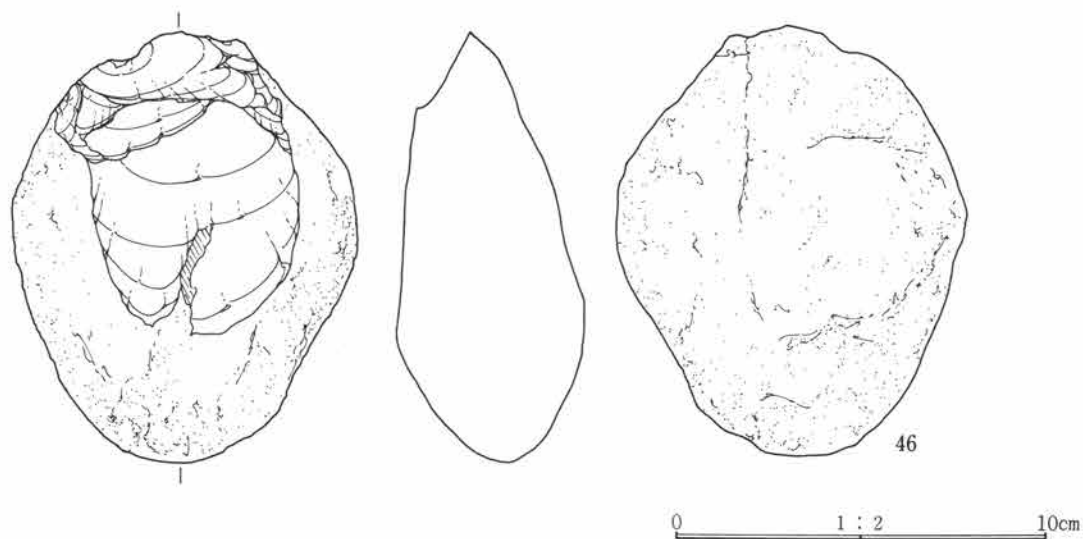
第315図 弥生時代出土石器 (4)



第316図 弥生時代出土石器 (5)



第317図 弥生時代出土石器 (6)



第318図 弥生時代出土石器 (7)

#### 台石 (第316図36)

1点が出土している。大形の円礫で、礫面には打痕が著しいほか、裏面には石皿に似た凹部が見られ、若干摩耗しているようにも見える。

#### 石核 (第317図37～45・第318図46 PL-86)

25点が出土している。ここでは接合関係の見られない資料を掲載した。石核形状の示す剥片剥離の在り方は多様で、剥離初期の状態を示す例、剥離が進み複数の箇所で行う例、打面を固定する例、打面を頻繁に移動する例など、複雑な様相を呈している。

37は、裏面に礫面を大きく残す厚い大形剥片を用いた石核。剥片剥離作業は二ヶ所で行われ、幅広の小形剥片を剥離している。黒色安山岩。

38は、上下両端に礫面を残す小形石核。剥片剥離作業は表裏両面、及び、左右の側縁で行われ、小形の剥片を剥離している。剥片剥離は上下両端の礫面に打点が限定され進行する。出土資料には、本例を除き黒曜石は見られない。

39は、大形剥片を用いた石核。剥片剥離は上端、及び、左右の側縁で行われ、小形剥片を剥離する。

40は、裏面に大きく礫面を残す石核。石核には、原石を分割した際の平坦な面が部分的に残る。剥片

剥離は礫面から行われ、左右の側縁、表裏両面の順に剥離が進む。作出剥片は小形・横長の剥片が多い。

41は、裏面に礫面を大きく残す石核。礫面の残存形状からみて、原石は拳大の円礫と想定されよう。また打面にはバルブが部分的に残り、このことから原石を分割せず石核を作出したもの、と言える。概して、剥片剥離は初期段階を示しており、やや幅広の横長剥片を剥離している。

42は、裏面に礫面を大きく残す石核。礫面の残存形状からみて、原石は拳大の円礫と想定されよう。石核には剥離痕跡が全く見られないことから、分割・剥離されないまま放棄・出土したもの、と言える。

43は、裏面に礫面を大きく残す石核。剥片剥離は周辺の礫面から90°の打面転移を伴い行われ、小形・横長の剥片を剥離している。

44は、拳大よりやや小形の円礫を用いた石核で、剥離は礫の小口部分で展開する。剥離は初期段階で終了しており、「試し割り」の状態に近い。

45は、棒状の礫を用いた石核。剥離は90°の打面転移を伴い、小形・横長の剥片を剥離している。

46は、礫面を大きく残す扁平な礫を用いた石核。剥離は礫の小口部分で行われ、小形・横長の剥片を剥離する。

## 接合資料

### 黒色安山岩—3 (第319・320図 PL-87)

15点の剥片からなる接合資料。大形の原石を二分して挙大の石核を二つ獲得している。剥片剥離作業は90°の打面転移を行い展開しており、作出剥片は概して幅広の剥片が多い。接合資料、及び剥片に残る剥離方向から判断して、上面や左右両端から剥離を行う場合が圧倒的に多く、石核下端から剥離を行う場合は極めて少ない。残存石核は不明だが、接合状況よりみてこれ以後の剥離は難しい、と思える。

### 黒色安山岩—4 (第320図 PL-87)

4点からなる接合資料。剥離作業は上下両端、及び、左右両端から頻繁な打面転移を行い展開する。作出剥片は概して縦長の剥片が多い。剥片には礫面を大きく残し、剥離の初期段階を良く示している。1は裏面を粗く加工するほか、右側縁には小剥離を部分的に施し刃部を作出している。全般的に、剥片は点状打面を呈しており、打面管理は良好な部類に属す。

### 黒色安山岩—5 (第321図 PL-87)

9点からなる接合資料。大形の原石を二分して石核を二つ獲得している。この種の石材は比較的平坦に分割が可能だが、接合資料は外に大きく膨らみ割れている。このため、石核上端や側縁を剥離せず、まず大きく膨らむ部分の剥離を進めた可能性が高い。即ち、石核形状に即して作業面に近い石核正面・左の礫の\*上から剥離作業を進めたのである。以後の剥離作業は打点を大きく左右に振り後退するよう進み、作出剥片の形状は概して幅広の剥片を多く剥離している。4は比較的形状が整う剥片だが、剥片の端部がヒンジ状を呈しており使用することなく破棄した可能性が想定されよう。1は先にも述べた通り分割段階で大きく内側に抉れており、このため剥離を放棄したものとも思える。

### 黒色安山岩—1 (第322図 PL-87)

3点からなる接合資料。挙大よりやや大きな原石を二分して用いる。1の石核は分割したのち、礫の小口部分と下端部分で剥離が展開する。小口部分の

剥離は打面作出(礫面の除去)の後に、下端部分の剥離は打面を作出することなく行われ、小形・横長の剥片を剥離している。2の石核は分割段階で中央付近でより破損した可能性が高い。2の石核は剥片剥離が充分可能だが剥離の痕跡は見られない一方、2の石核に接合する3には明瞭なバルブが見られ、剥離を多少なりとも試みた、と推定できよう。

### 黒色安山岩—2 (第323図 PL-87)

2点からなる接合資料。挙大よりやや大きな原石を二分して用いる。1は分割段階で末端がヒンジ状を呈した石核で、礫の小口部分でバルブを除去するよう打撃を加え幅広の剥片を剥離している。以後の剥離は全く見られない。2は石核の上端で3枚の、下端で5枚の薄い小形・横長剥片を剥離している。両者とも未だ剥片剥離は充分可能で、石核の形状を整える程度で剥離の初期段階で終了しており、1・2の石核は遺跡に搬入され剥離することなく石核を廃棄した可能性が高い。

### 黒色安山岩—16 (第324図 PL-87)

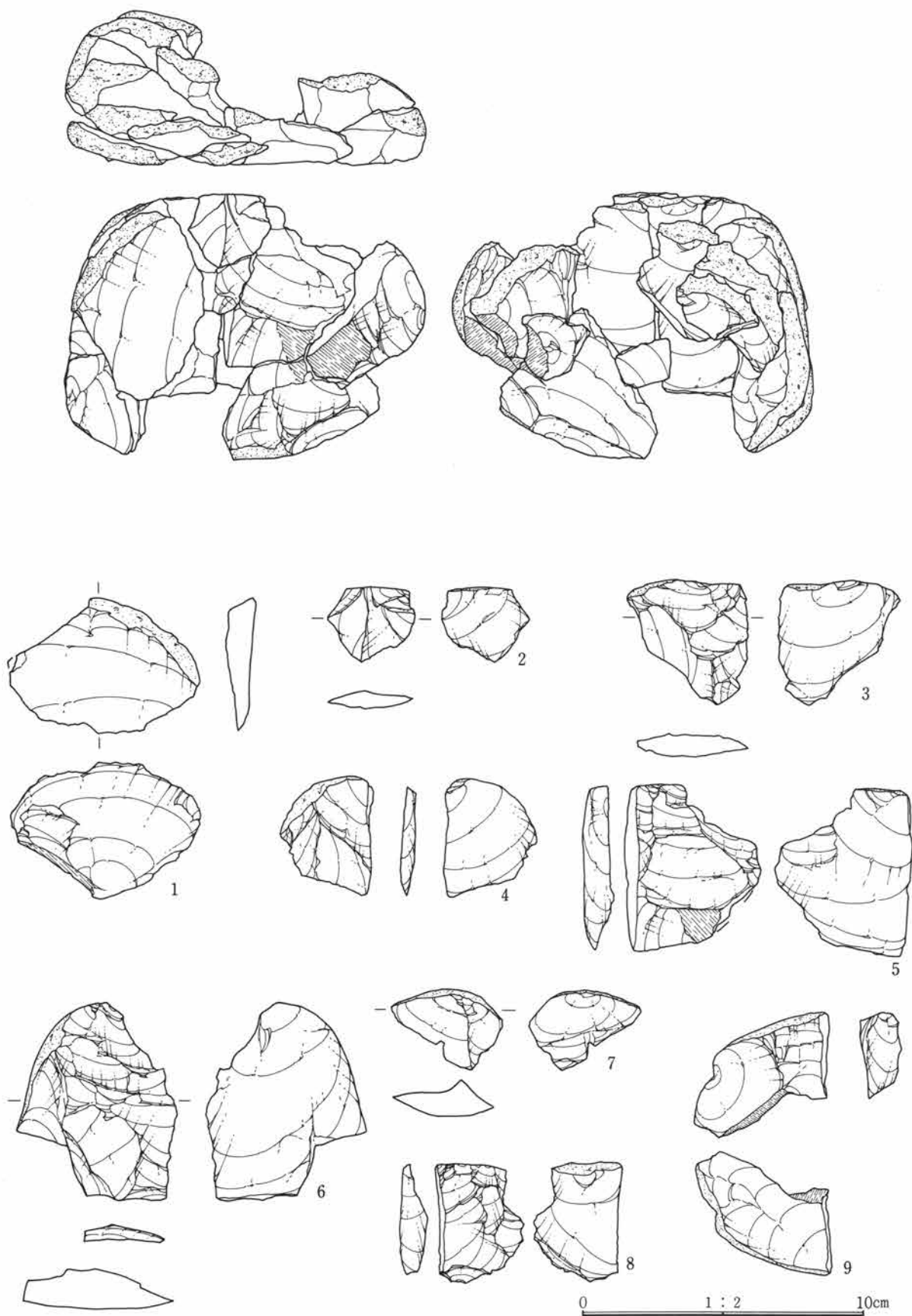
5点からなる接合資料。上下両端に打面を持ち、概して大形の剥片を剥離している。大きく礫面を残す剥離初期の剥片は比較的大形で下端から剥離され、石核(5)に転用、小形横長剥片(4)を剥離している。1は3~5に折れる剥片で、側縁に浅い加工を施している。「折れ」と加工の新旧は不明だが、加工は接合部分に重複しており、この部分に関してのみ加工段階の破損と判断できよう。2・3は両者とも剥離段階で破損している。

### 黒色頁岩—5 (第324図 PL-87)

2点からなる接合資料。裏面に大きく礫面を残す。正面には大きく摂理が広がり、剥離の初期段階で放棄している。剥離作業は上下両端から行われ、剥離途上で石核内部の著しい摂理が判明したため、石核を放棄した可能性が高い。

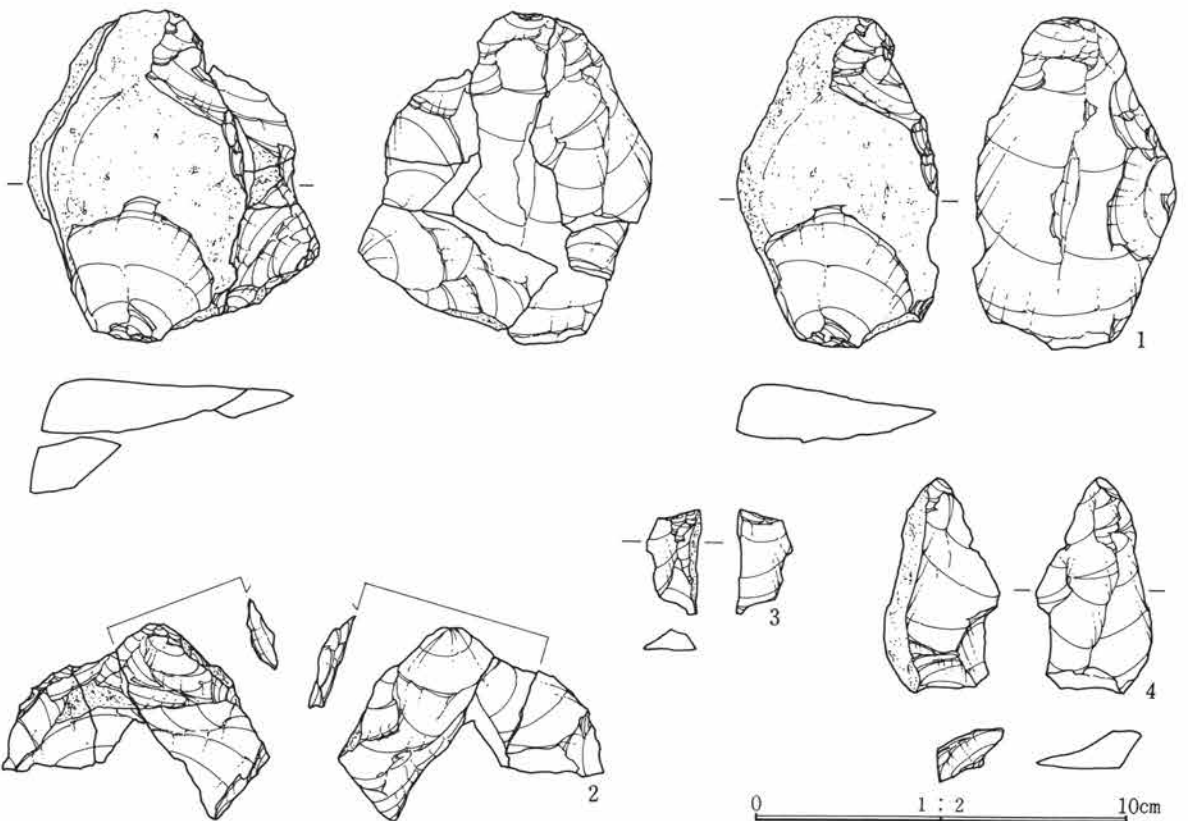
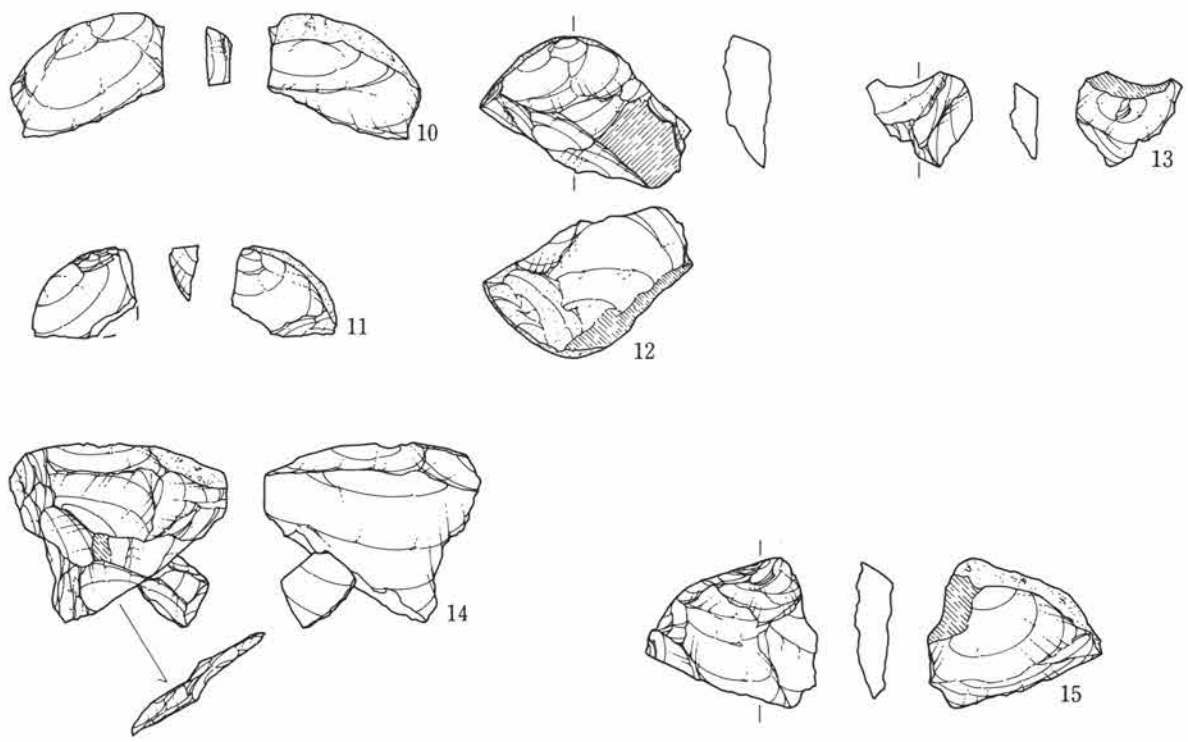
### 黒色安山岩—13 (第324図 PL-87)

2点からなる接合資料。石核下端に大きく礫面を残す。剥離作業は頻繁な打面転移を繰り返しており、斜め後方に石核を消費している。2の石核は残核の

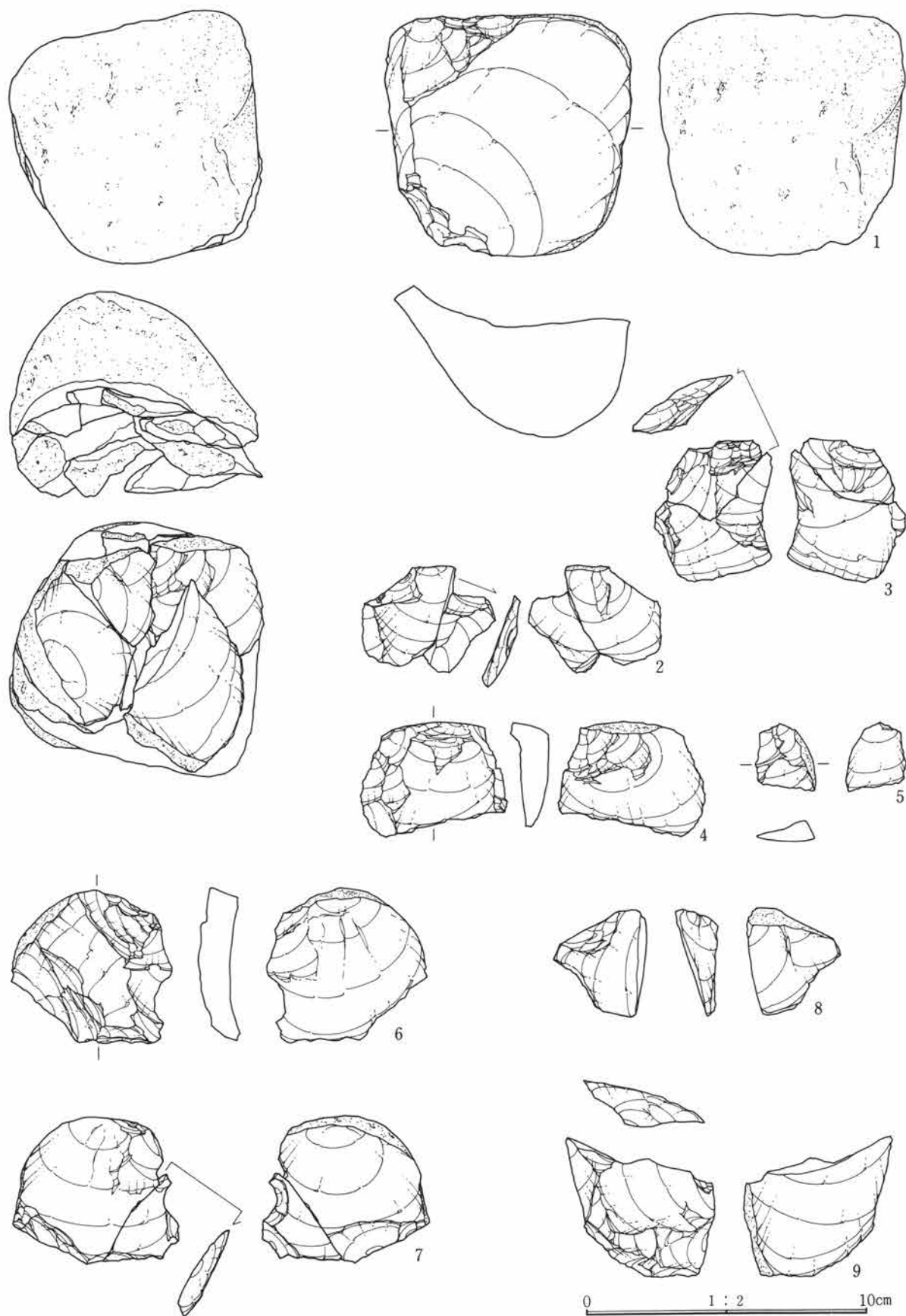


第319図 接合資料-1

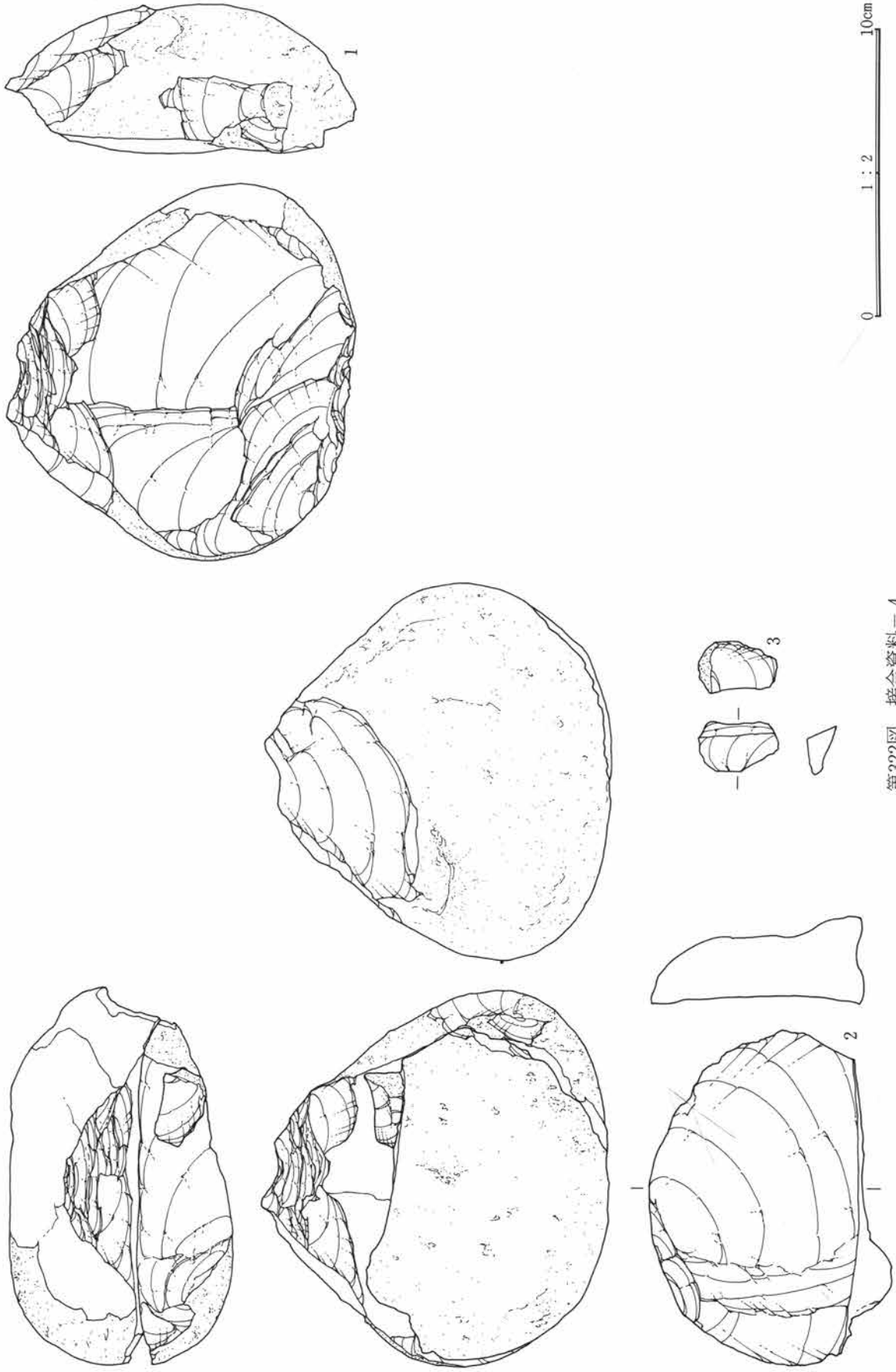




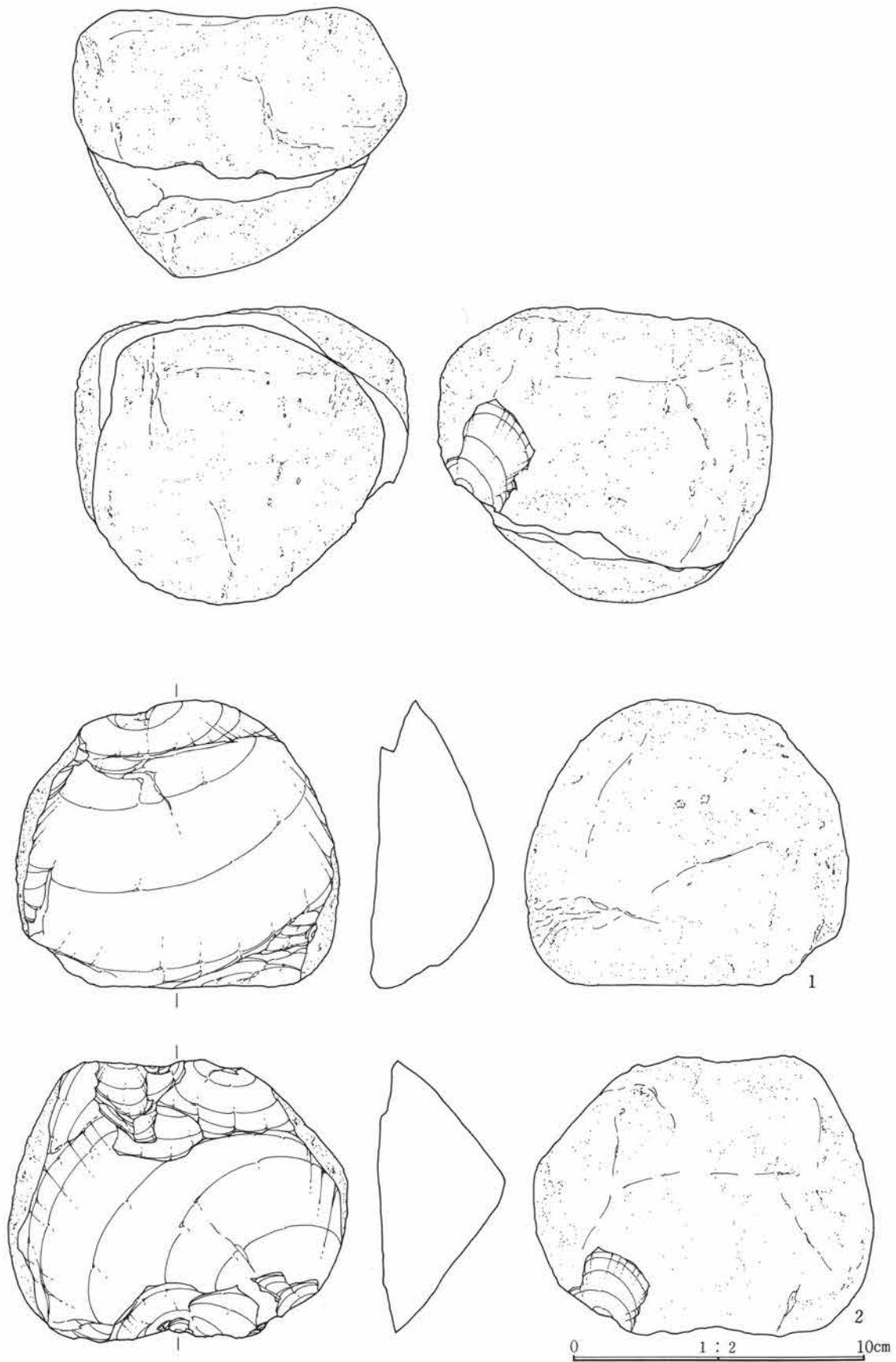
第320図 接合資料-2



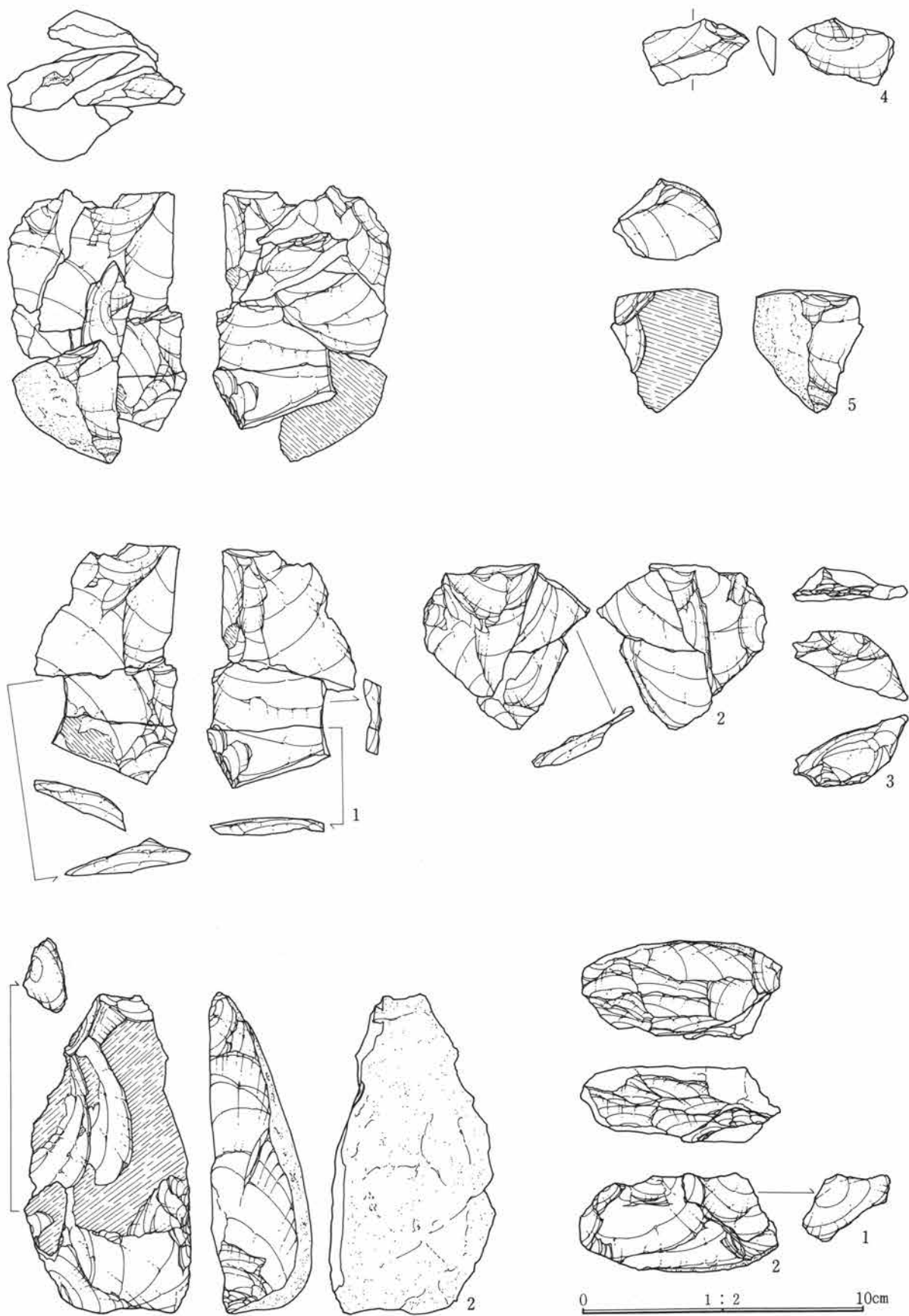
第321図 接合資料-3



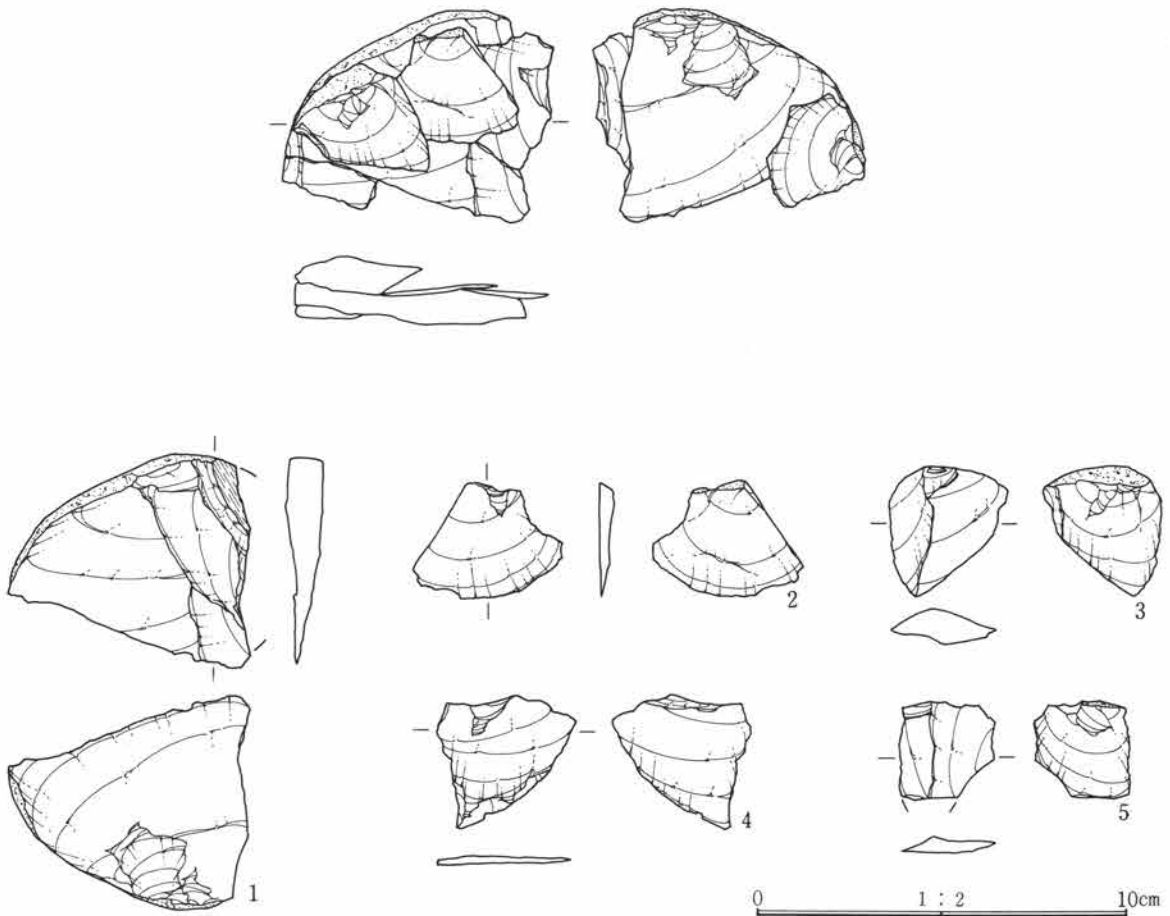
第322図 接合資料-4



第323図 接合資料-5



第324図 接合資料-6



第325図 接合資料-7

最終形状を良く示している。

黒色頁岩—10 (第325図 PL-88)

5点からなる接合資料。原石を分割して二分したのち、各々の石核で剥離した剥片が接合している。剥離作業は礫面を打面に展開され、幅広の横長剥片を剥離している。1は剥離段階で打点部分から破損しており、2は1の剥離で生じたバルバースカーとも思える。

黒色安山岩—8 (第326図 PL-88)

3点からなる接合資料。剥離作業は礫面を打面に、打点を大きく左右に振り後退している。作出剥片は概して幅広で横長の剥片が多い。

黒色頁岩—4 (第326図 PL-88)

4点からなる接合資料。裏面には大きく礫面を残す他、上端部分には摂理が大きく広がり、以上の礫面、及び、摂理の在り方から接合資料は、原石を1/4程度に分割している可能性が高い。剥離作業は

表裏両面とも見られ、石核正面では上下両端から剥離を行う他、左右両端でも剥離が展開している。下端部分の剥離は張り出した石核端部の調整に伴う剥離の可能性が高い。

黒色安山岩—9 (第327図 PL-88)

3点からなる接合資料。礫面を打面に剥離が進む。作出剥片の形状は、概して幅広の剥片が多い。剥離作業は若干だが打点を左右に振り後退するよう展開している。

黒色頁岩—7 (第327図 PL-88)

2点からなる接合資料。礫面を打面に、打点を大きく左右に振り剥離が進む。作出剥片の形状は小形・横長剥片が多い。資料的制約から詳細は不明だが、剥片端部には石核の平坦部分が良好な状態で取り込まれ、原石を開始する初期段階に生じる大形剥片を石核に用いている可能性が極めて高い。

黒色頁岩—8 (第327図 PL-88)

2点からなる接合資料。平坦な礫面を打面に剥離が進む。作出剥片の形状は概して幅広の剥片が多い。

黒色安山岩—7 (第328図)

5点からなる接合資料。剥離作業は上端部分から開始している。1の剥片は剥離段階で打点部分から破損している。以後、剥離は左側に移り、礫面を打面に2～4の剥片を剥離している。2～4は摂理を共有しており、同時に剥離した可能性を残している。2の剥片は剥離したのち、打面部分に剥離を加えて直線的刃部を作出している。

黒色安山岩—12 (第328図 PL-88)

2点からなる接合資料。裏面に礫面を大きく残す厚い大形剥片を石核に用いる。剥離途中で摂理部分から大きく破損している。剥離作業は破損した後も続いており、小形・横長の剥片を剥離している。

黒色頁岩—11 (第328図 PL-88)

2点からなる接合資料。上下両端に礫面を残しており、棒状の原石を石核に用いる。剥離作業は主に上端の礫面から展開され、打点を若干左右に振り進む。1の剥片の裏面には粗い剥離を部分的に施す。

黒色頁岩—12 (第328図 PL-88)

2点からなる接合資料。礫面を大きく残す剥離の初期段階に生じる剥片で、剥離の際に打点部分から破損している。

黒色頁岩—9 (第328図 PL-88)

2点からなる接合資料。上面に礫面を大きく残す厚い大形剥片を石核に用いる。剥離作業は打点を大きく左右に振り展開しており、2の剥片の端部には連続的に使用痕が生じている。

黒色安山岩—17 (第329図 PL-88)

2点からなる接合資料。裏面に大きく礫面を残す大形剥片を石核に用いる。剥離作業は下端から主に展開するほか、若干だが側縁でも剥離を行う。1の剥片は上端部分から剥離した小形剥片で、以後の剥離を放棄している。

黒色頁岩—13 (第329図 PL-88)

2点からなる接合資料。裏面に礫面を大きく残す大形剥片の打面部分に剥離を加えている。目的剥片

の剥離とはみえない反面、加工は概して粗く、明確な形状作出、或は、刃部の作出を意識しているともいえない。分類は便宜的と言え、検討を要す。

黒色安山岩—11 (第329図 PL-88)

3点からなる接合資料。裏面に礫面を大きく残す大形の剥片を石核に用いる。剥離作業は礫面を打面に、求心的剥離が展開する。作出剥片の形状は、概して幅広の剥片が多い。剥離途上で石核は大きく破損している。

黒色安山岩—18 (第329図 PL-88)

2点からなる接合資料。裏面に大きく礫面を残す大形の剥片で、剥片の周縁部分に浅い剥離を施す。剥離の途中で剥片は大きく破損しており、その後も剥離を試みている。破損以後の剥離は以前の剥離と比べ粗く、目的は達成されないまま石器を放棄したもの、と思える。剥片形状、及び、剥離の在り方は黒色安山岩—11、黒色頁岩—13に類似する点も多く、検討を要する。

黒色頁岩—15 (第329図 PL-88)

2点からなる接合資料。剥片は上端の礫面を打面に剥離され、剥片の端部に粗いノッチ状の剥離を加える。接合部分は剥離段階で割れた可能性が高い。

黒色安山岩—15 (第329図 PL-88)

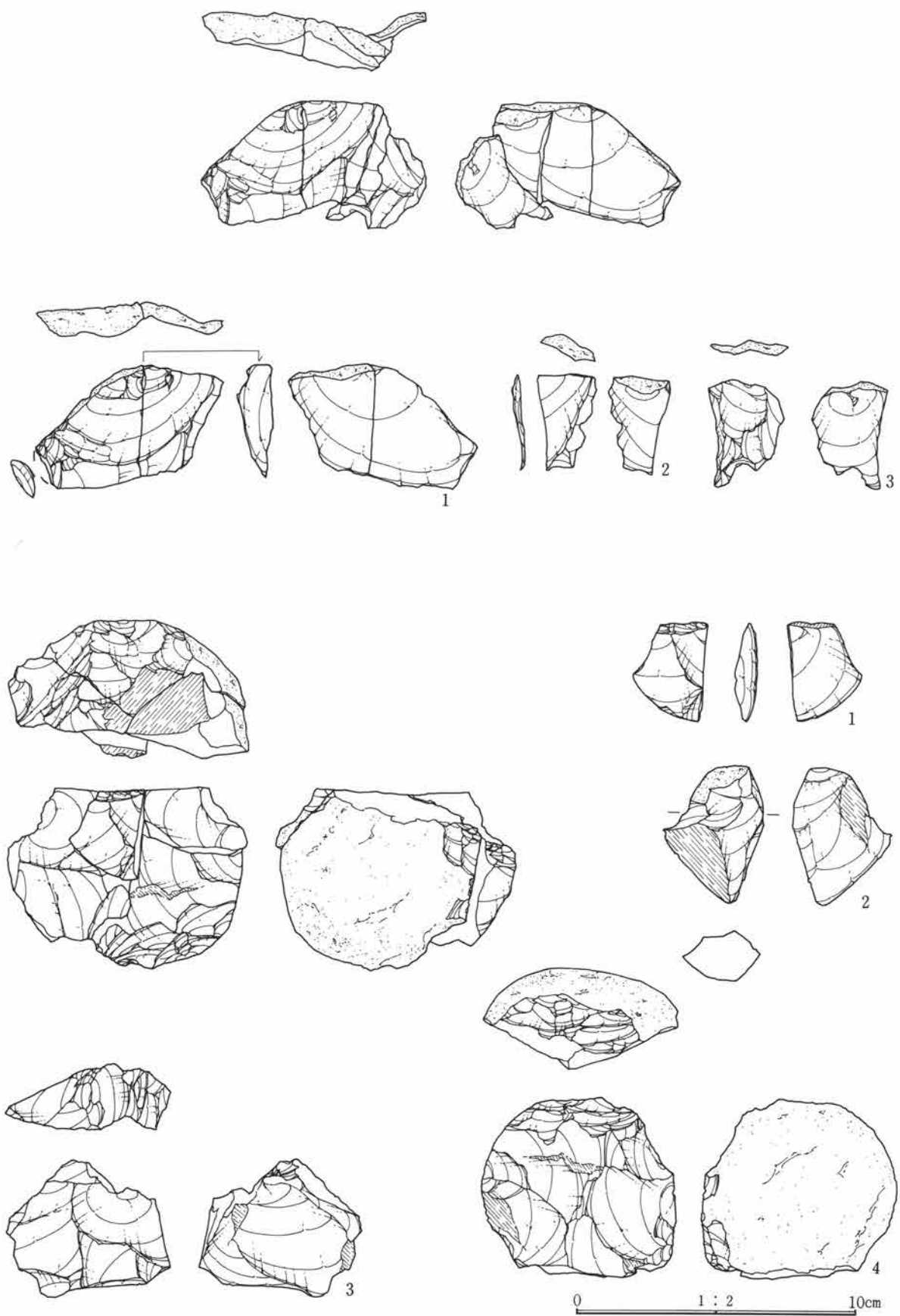
2点からなる接合資料。裏面に礫面を大きく残す大形剥片を石核に用いる。剥離作業は礫面を打面に展開しており、幅広の小形剥片を剥離している。剥離の途中で石核が破損したため、その後の剥離を放棄した可能性が高い。

チャート—1 (第329図 PL-88)

3点からなる接合資料。表面に礫面を大きく残す大形剥片を用いる。右側縁は欠損するため不明だが、左側縁は側縁加工が連続して施され、加工の在り方は打製石斧の側縁加工に極めて近い。

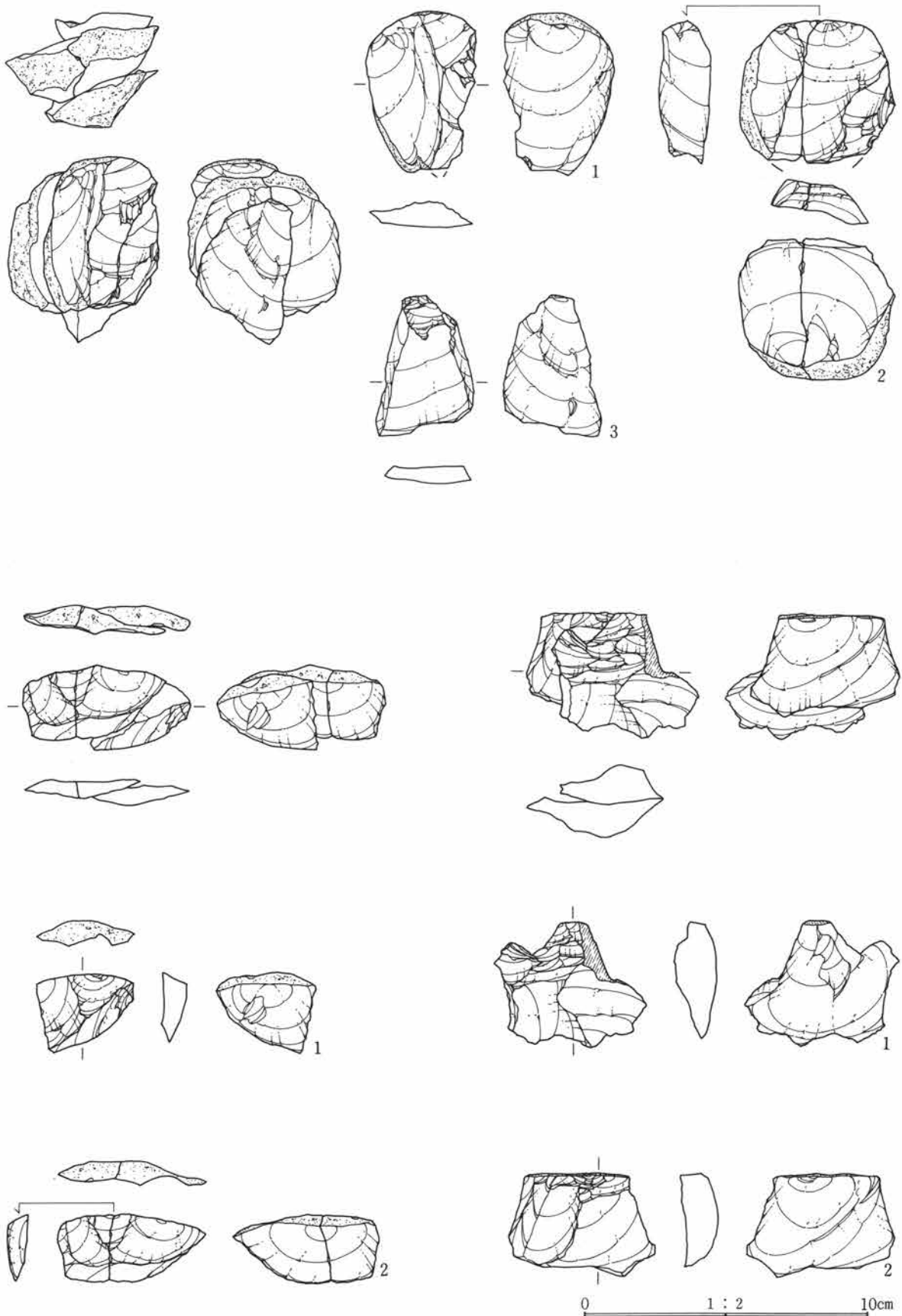
黒色頁岩—1 (第330図 PL-88)

7点からなる接合資料。表面に礫面を大きく残す大形剥片を用いる。接合状態・加工状況から石鍬の製作状況を示す例と思える。接合資料は厚い側縁の剥離に失敗して放棄した可能性が高い。

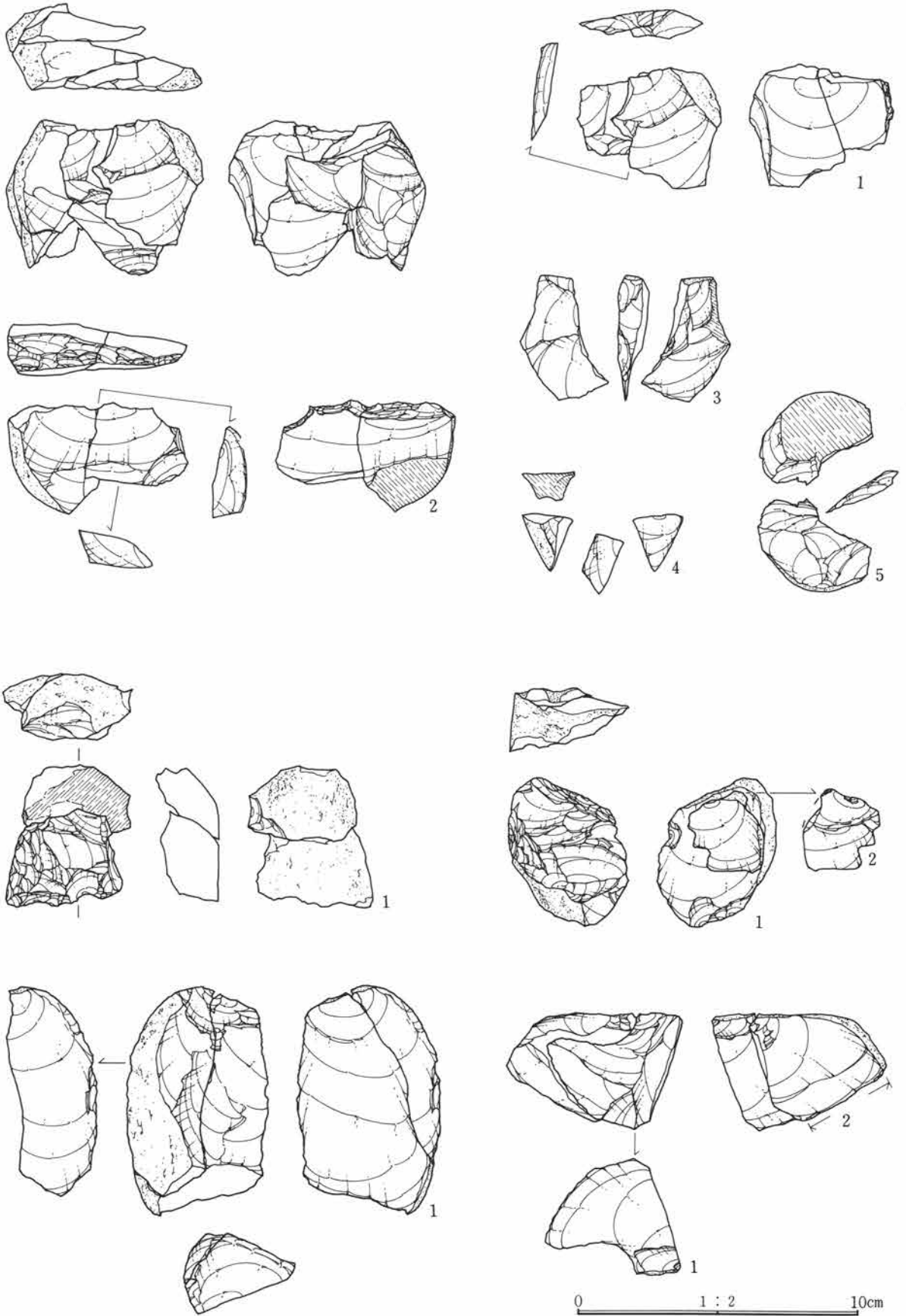


第326図 接合資料-8

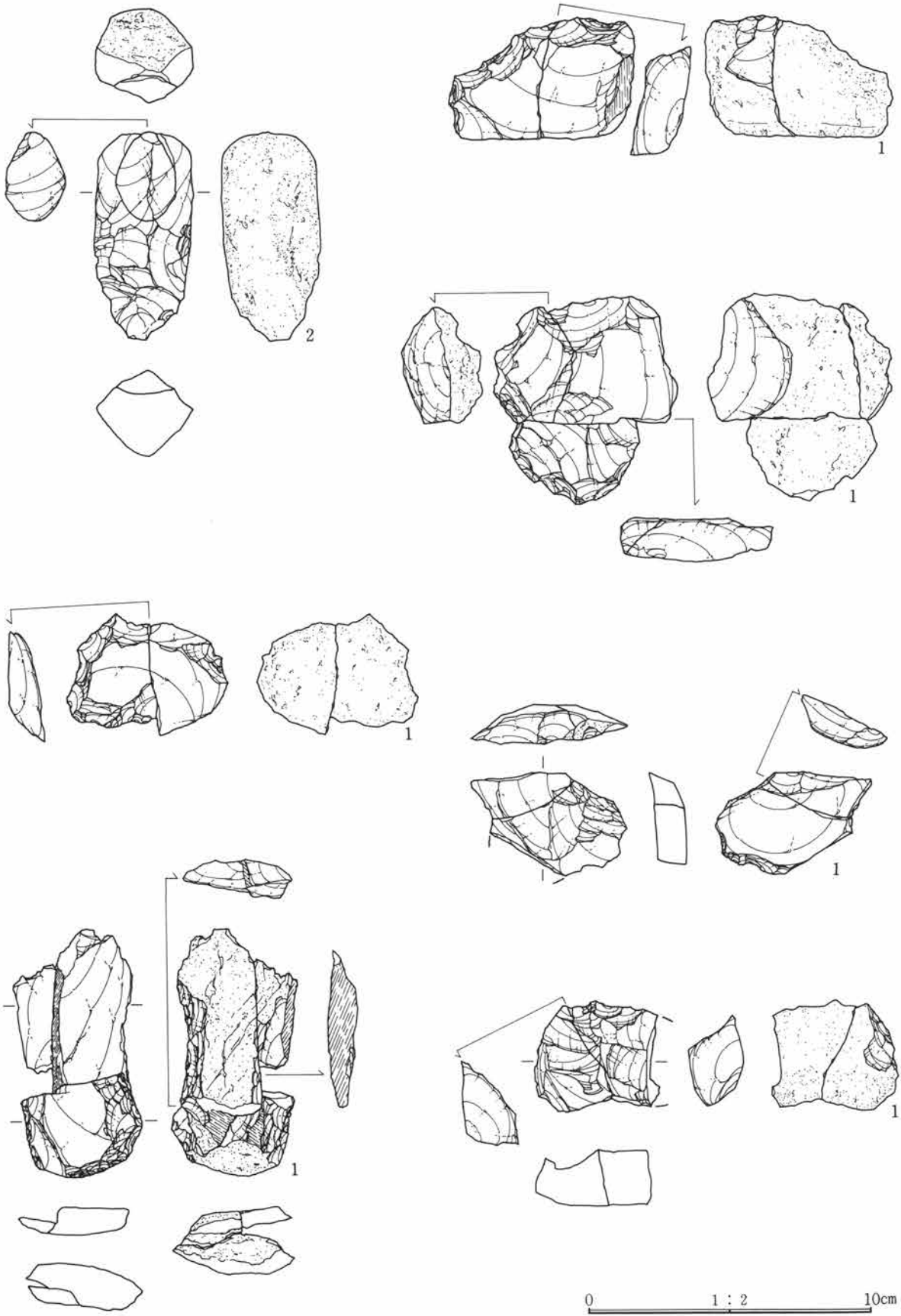




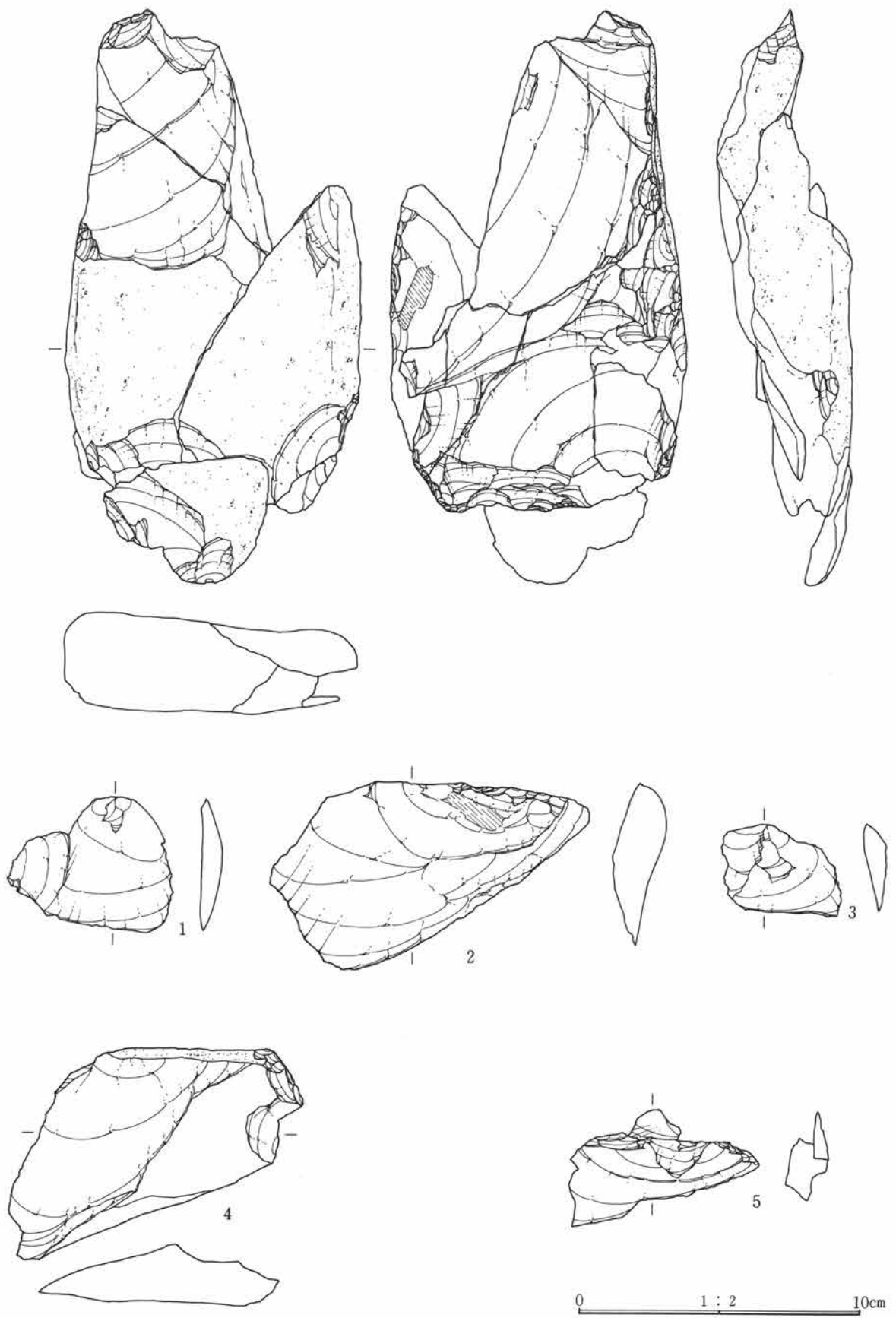
第327図 接合資料-9



第328図 接合資料-10



第329図 接合資料-11



第330図 接合資料-12

## 遺物分布

該期遺物の分布する地点は攪乱が激しく、遺物の分布・組成には不明な点を残している。攪乱は表土から-50cmまで達し、該期遺物の包含層を大きく壊していた。農道を隔てて接する大館馬場遺跡-1mで古墳時代の畠を、宮内遺跡（該期遺物の分布地点より南の地点）では-50cmで古墳時代の畠が確認され、遺跡の北には浅い谷が入り込む様相を呈していることから、遺物は南東に延びる台地部分に分布した可能性が高い、と推定している。土器と石器の分布は概ね一致しており、平面分布・垂直分布（第331・332図を参照されたい）とも大きな差は見られない。

### 石器の分布（第331・332図）

石器は総計600点（出土位置の不明な石器・244点を含む）が出土している。石器分布の希薄な地点がgラインに見られ、分布域は調査区の外に広がる様相を呈している。現状では、主たる石器の分布はgラインより東に広がる。分布には粗密が見られ、i-21G（ここでは集中地点No1と以下仮称する）・h-21G（集中地点No2）・g-21G（集中地点No3）・g-21G（集中地点No4）・f-21G（集中地点No5）付近に石器が集中分布している。これより他の地点の分布は散漫で、石器の集中分布する状況は見られない。現状で、石器は30cm~50cmの幅を以て出土している。調査段階では遺構（住居）の存在を前提に調査を進め、柱穴・炉・床面の検出に努めた。調査段階では遺構認定する決定的根拠は得られないまま遺物のみ取り上げ調査を終えているため、ここでは地形を勘案してコンタに直交・平行する軸で遺物の垂直分布（第332図）の在り方を検討した。先にも述べた通り攪乱で逸した遺物も多く不明だが、遺物の垂直分布を見る限り、出土状況は住居や土坑の存在を示す流れ込み等を示す状況にはない。出土状況からみて、周辺には住居や土坑の存在も想定が可能だが、ここでは遺物の廃棄地点と把握理解しておきたい。

## 器種別分布（第334図）

器種別に見た石器の分布状況は、各々の集中地点で若干相違する様相を示している。gラインより東の各々の地点には、石鍬や石核・加工痕ある剥片・使用痕ある剥片が出土しており、この点では基本的に器種組成は一致する。が、台石や敲石は集中地点No.3に偏在しており、他の地点には見られない。また、gラインより西の地点には、石鍬や台石・敲石が見られないなど器種組成の相違が指摘されよう。散漫な分布を示す地点にも石鍬その他の石器が分布しており、分布と器種の明確な相関関係は指摘できない。

## 石材別分布（第333図）

石材別に見た石器の分布状況は、各々の地点とも黒色安山岩を主に黒色頁岩を従に組成する点で、著しく大きな石材組成の差は見られない。石材組成の差が生じる原因は石鍬や凹み石、台石・敲石の組成の有無で決まるようにもみえ、分布と石材の明確な相関関係は指摘できない。なお、集中地点No.4には他の地点と大きく異なる。黒色頁岩の分布は1点と極めて少ない。

## 接合資料の分布（第335・336図）

接合資料は46例を確認している。資料点数が多く、ここでは石材別に分けて図示した。gラインを挟む接合資料は1例（黒色安山岩-1）のみ確認され、その他の接合資料はgラインの東側に分布している。以下に、主たる接合資料の分布状況の概要を記す。

### ・集中地点No.5の接合資料

なし

他の集中地点、及び、他の地点の接合資料

黒色安山岩-1（g-20G）

### ・集中地点No.4の接合資料

黒色安山岩-2・29

他の集中地点、及び、他の地点の接合資料

黒色安山岩-12（集中地点No.1）

チャート-1（e-22G・h-20G）

### ・集中地点No.3の接合資料

なし

他の集中地点、及び、他の地点の接合資料

黒色安山岩—27 (集中地点No. 1)

黒色安山岩—21 (集中地点No. 2)

黒色頁岩—8 (h—21G)

・集中地点No. 2の接合資料

なし

他の集中地点、及び、他の地点の接合資料

黒色安山岩—9 (h—20G・i—20G)

黒色安山岩—17 (i—20G)

黒色頁岩—16 (集中地点No. 1)

・集中地点No. 1の接合資料

黒色安山岩—7・13・19・22・23

黒色頁岩—14・15

他の集中地点、及び、他の地点の接合資料

黒色安山岩—3 (i—20G・h—21G・22G)

黒色安山岩—5 (h—21G・i—22G)

黒色安山岩—8 (h—22G)

黒色安山岩—25 (h—20G・i—20G)

黒色頁岩—7 (i—23G)

黒色頁岩—12 (i—20G)

接合資料の分布状況には下記の傾向が指摘されよう。まず第一には、No. 1の集中地点を除き、集中地点の接合資料は極めて少ないこと、第二には他の地点で接合する資料には移動する明確な理由が乏しいこと、同様に接合点数の多い集中地点No. 1の黒色安山岩も移動する適当な理由が明確ではない。

土器の分布 (第331・332図)

土器は、498点 (出土位置不明の土器を除く) が出土している。gラインを挟み分布域は東西に分離され、また、分布域は部分的に路線外に延びるなど、概ね石器の分布傾向に似た分布状況を呈している。石器分布に比べ土器分布の濃淡は乏しく、集中分布の認定は難しい。敢えていうなら、東側の土器分布には比較的範囲の狭い分布が密集したようにもみえ、個体単位の廃棄も想定が可能な状況を呈している。土器の分布範囲は、先に示した石器の集中地点とは厳密な意味では重複せず、No. 1とNo. 5を除いて他の地点には重複関係は指摘できない。現状で、土

器は30cm～50cmの幅を以て出土している。垂直分布 (第332図) では若干石器より上位に出土するようにも見える点で廃棄段階の差も考慮するべきだが、現状では言及できない。

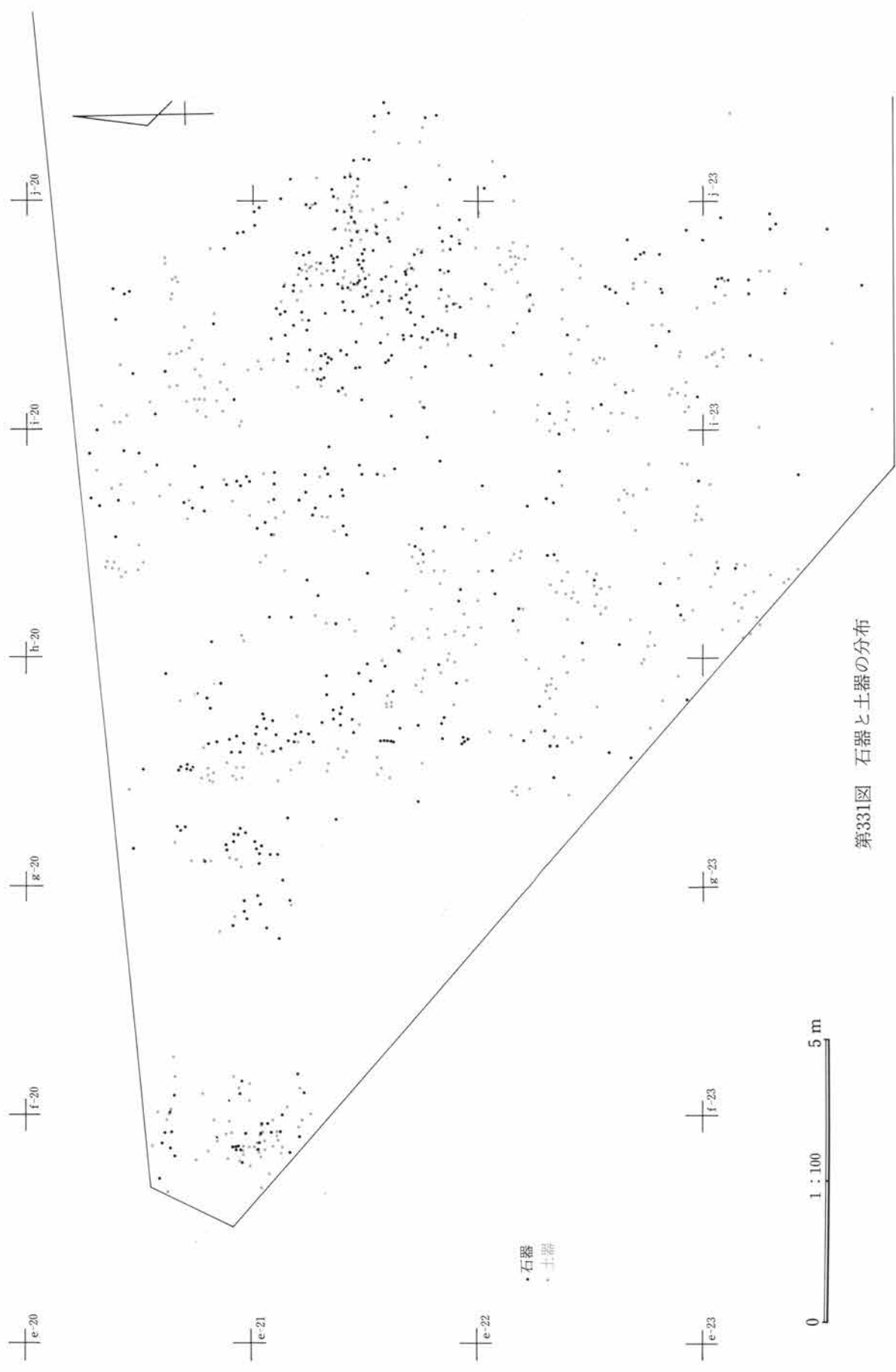
接合資料の分布 (第337図)

接合資料には、比較的狭い範囲で接合するもの、これとは逆に比較的広い範囲で接合するもの、土器分布の見られない地点を挟み接合するもの、の三者が存在している。以下に、壺・甕類に分け分布状況を記していきたい。

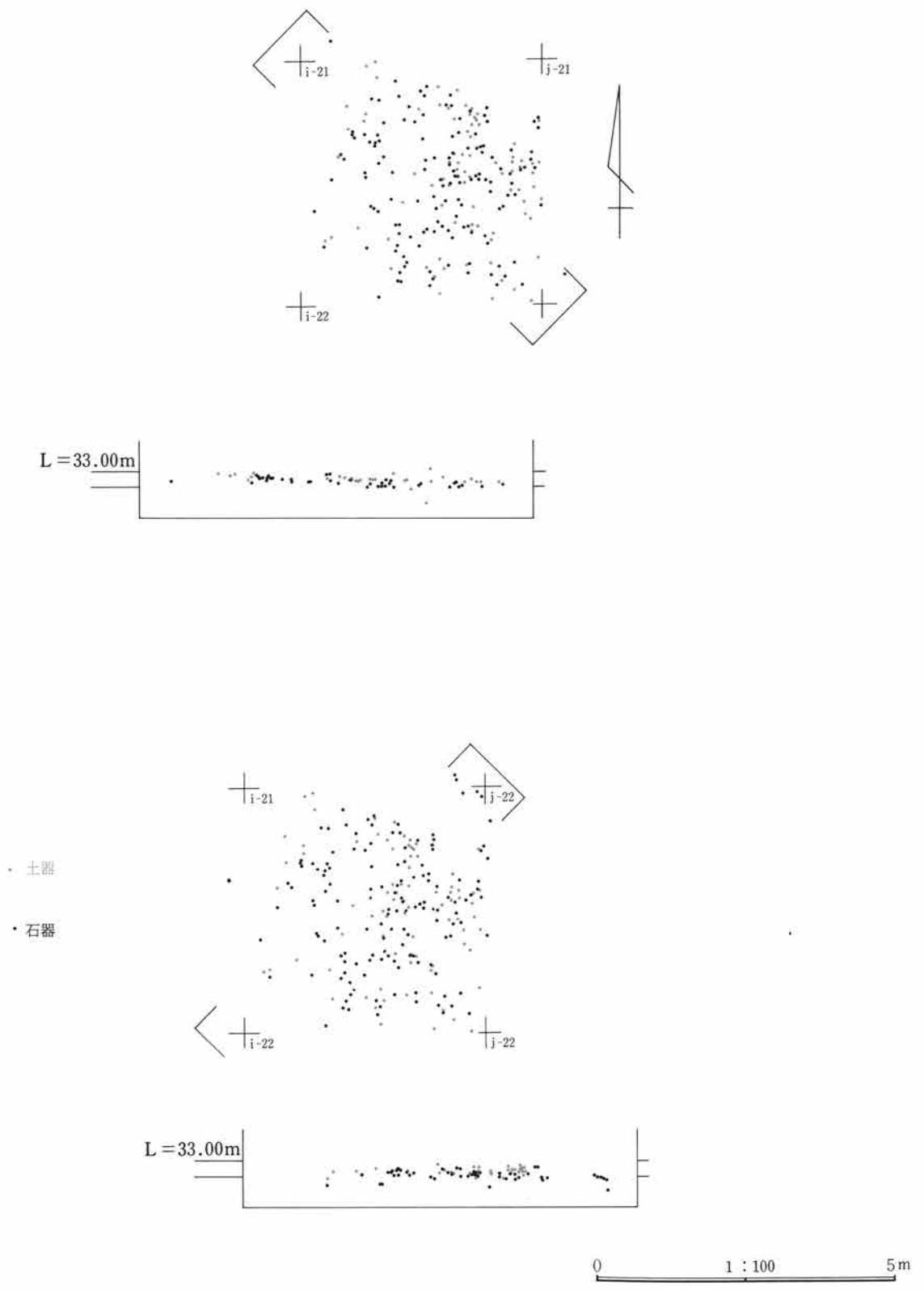
壺形土器には、比較的広い範囲で接合する例が多く、狭い範囲で接合する例は少ない。1 (第308図) が後者の例で、3.0m×1.5mの範囲 (i—21G・j—21G) で接合している。6も比較的狭い範囲 (2.0m×1.5m、h—20G・i—20G) に出土した土器の接合だが、他の地点 (h—21G・i—21G・j—22G) に接合が及び比較的広い範囲で接合している。同様に、3もi—22G・i—23Gに、7もg—22G・h—21G・h—22Gに接合が及び、比較的広い範囲で接合している。

甕類は狭い範囲の接合が少なく、比較的広い範囲で接合する例が圧倒的に多い。特に、西側の地点に大部分が分布 (e—21G) した9 (第309図) は、f—20G・g—20G・g—21G・h—20G・h—22Gの資料とも接合しており、分布は極めて広い範囲に及んでいる。16点の土器片が接合した23 (第310図) や8点が接合した28 (第311図) も、それぞれ主たる分布域 (23はi—22Gに主たる分布域を持ちh—22Gの土器片と、28はi—20Gに主たる分布域を持ちg—21Gの土器片と接合) の他の地点に出土した土器片と接合しており、極めて広い範囲に接合が及んでいる。

以上の接合状況は、単なる住居間接合とも単純な廃棄行為ともいえない複雑な遺跡の形成過程を示す可能性が高い。

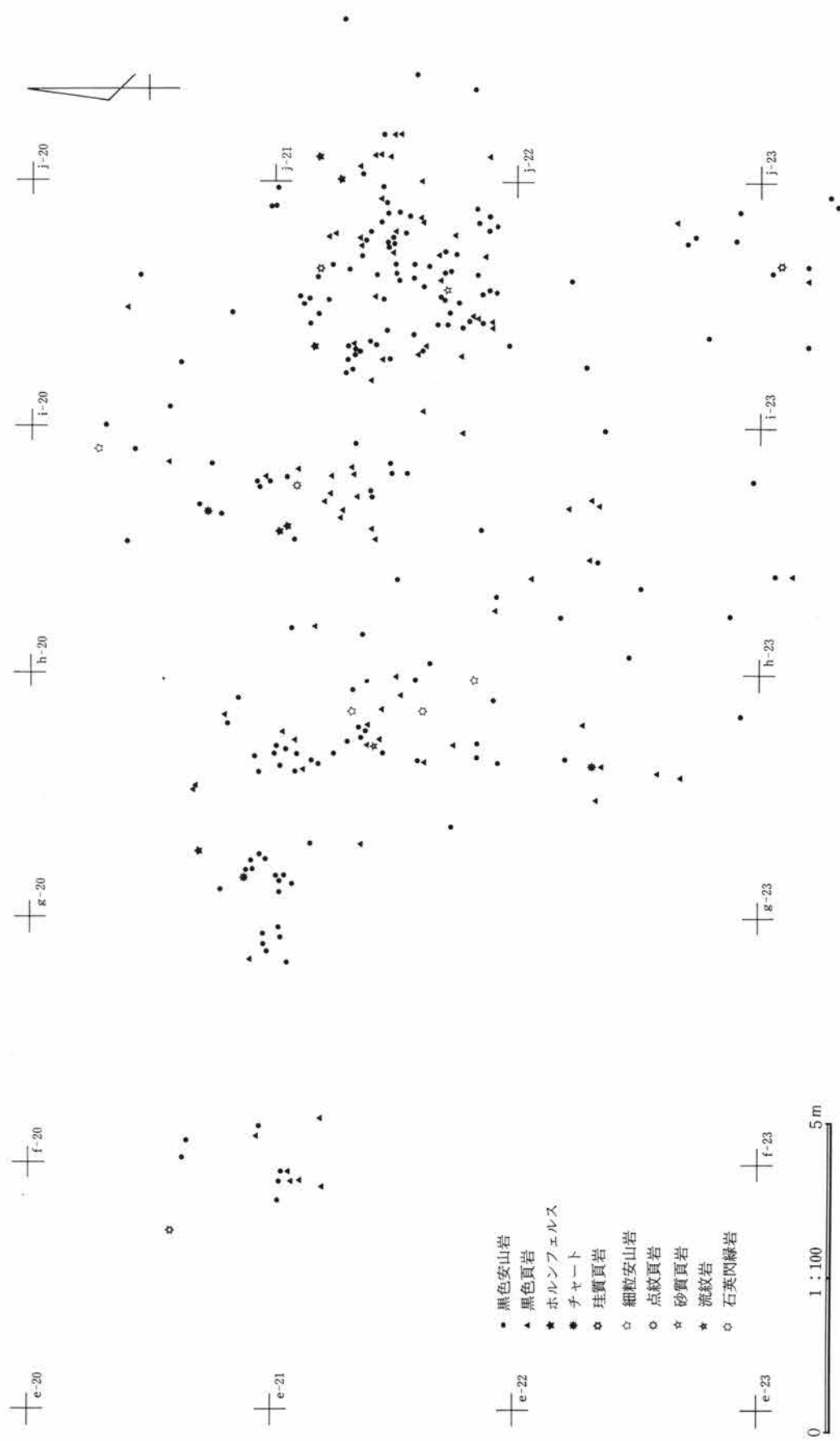


第331図 石器と土器の分布

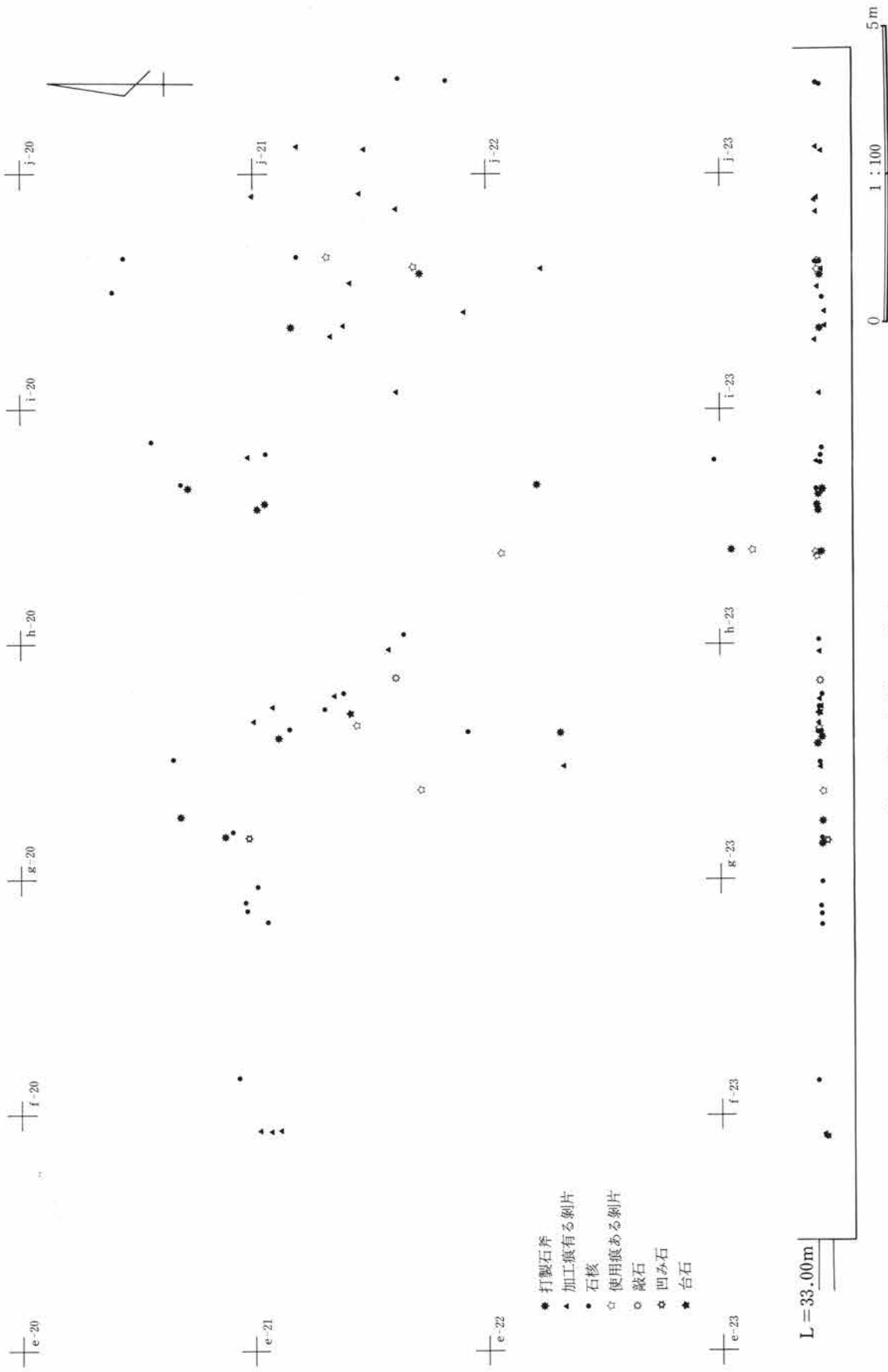


第332図 土器と石器の垂直分布図



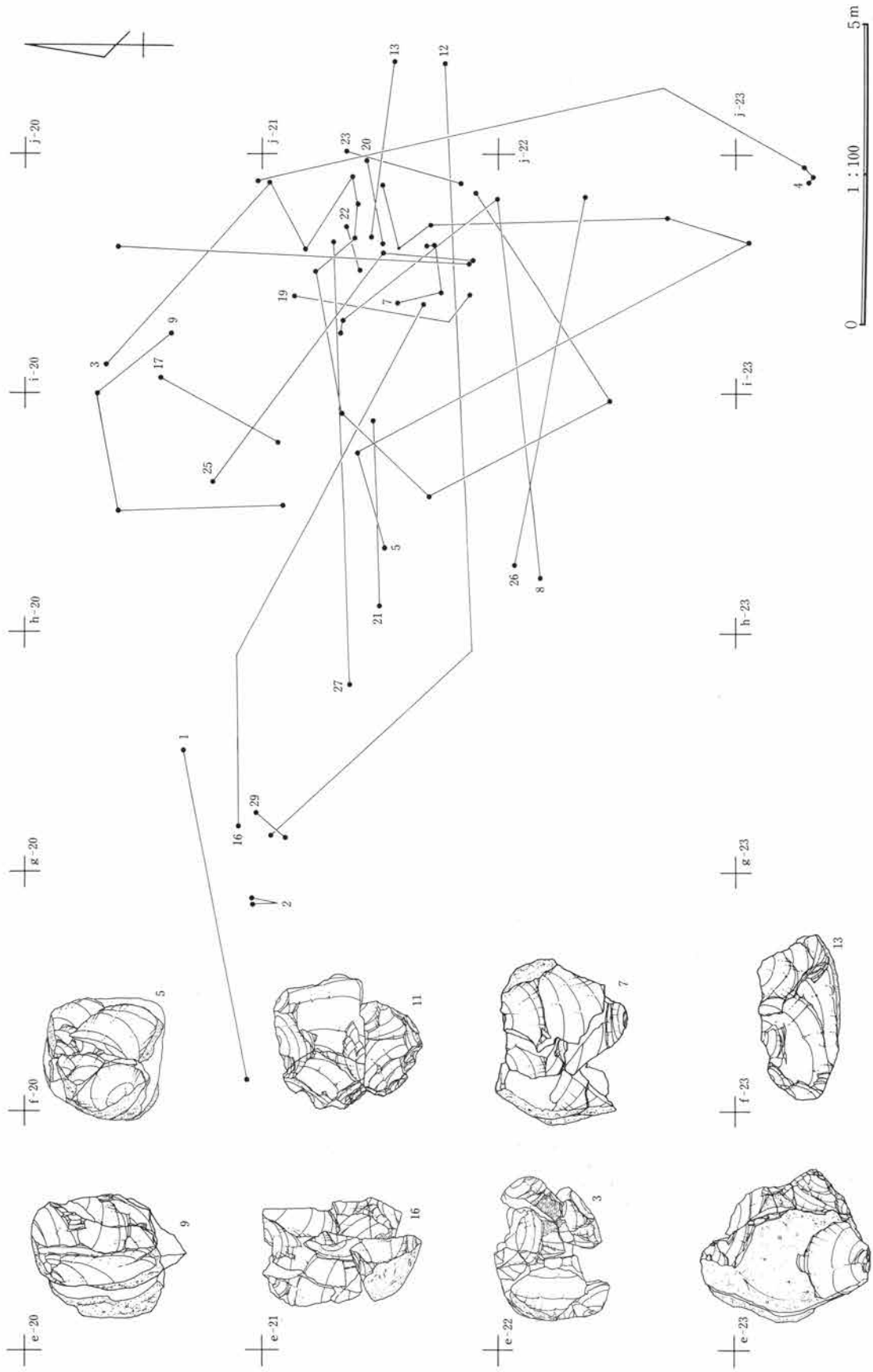


第333図 石材別分布

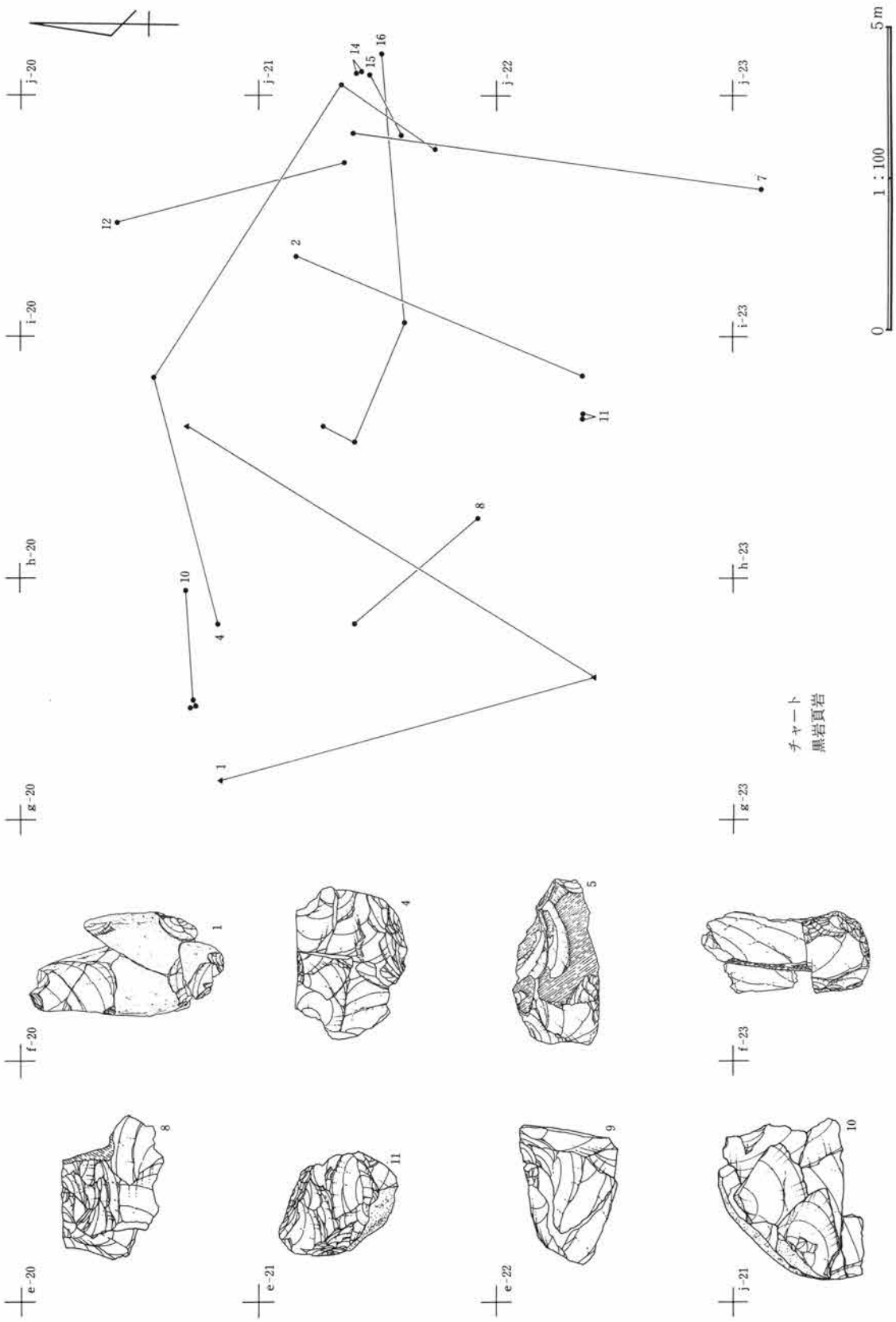


- ★ 打製石片
- ▲ 加工痕有る剥片
- 石核
- ☆ 使用痕ある剥片
- 敲石
- △ 凹み石
- ★ 台石

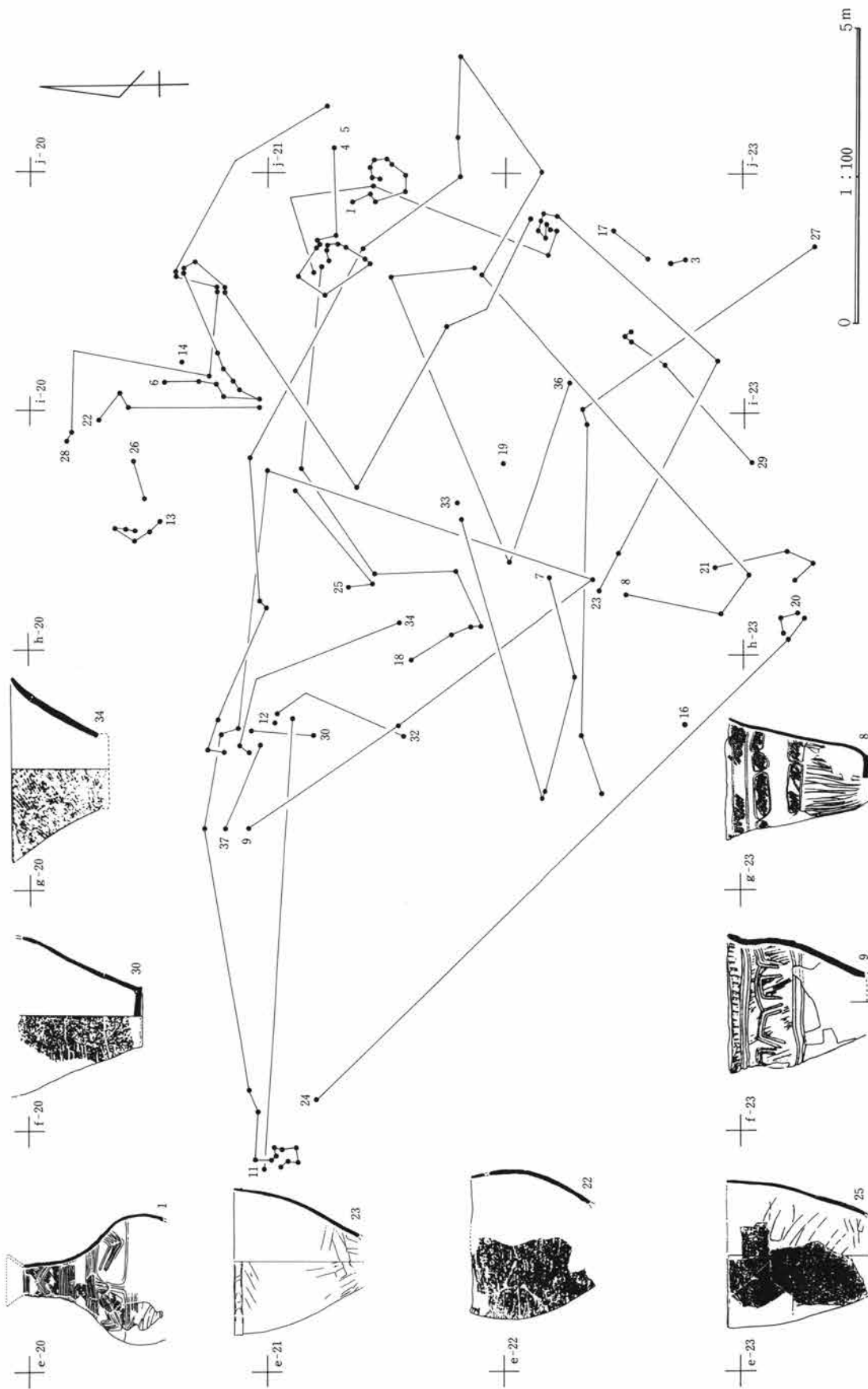
第334図 石器の分布



第335図 接合資料の分布 (黒色安山岩)



第336図 接合資料の分布 (チャート・黒色頁岩)



第337図 接合資料の分布 (土器)

第7表 石器計測値一覧

挿図番号	出土位置 グリッド	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	重さ (g)	石材
第312図-1	g-21	石 鋏	20.3	12.6	543.0	ホルン
2	h-21	石 鋏	19.6	11.8	647.0	珪 頁
3	h-21	石 鋏	16.0	9.0	349.0	ホルン
4	g-20	石 鋏	13.3	9.7	311.0	ホルン
第313図-5	i-21	石 鋏	13.9	8.8	257.0	砂 頁
6	h-20	石 鋏	8.2	7.5	162.7	ホルン
7	h-22 i-21	石 鋏	8.1	7.5	75.0	黒 頁
8	g・h-20・22	石 鋏	12.9	6.2	188.0	チャート
9	h-22	石 鋏	3.7	4.7	10.0	細 安
10	h-23	石 鋏	3.8	1.6	2.4	黒 安
11	i-21	削 器	6.2	3.8	41.0	黒 安
第314図-12	g-21	加 剥	4.1	2.5	19.7	黒 安
13	i-22	加 剥	2.7	3.2	8.6	黒 安
14	i-21	加 剥	3.8	4.3	5.0	黒 安
15	i-21	加 剥	3.7	3.0	11.7	黒 安
16	e-21	加 剥	6.3	9.4	62.0	黒 頁
17	j-21	加 剥	6.2	8.8	98.0	ホルン
18	e-21 g-20	加 剥	6.0	8.4	29.0	黒 安
19	i-21	加 剥	6.0	6.7	66.3	黒 安
20	i・j-21	加 剥	8.1	5.4	22.9	黒 頁
21	h-21	加 剥	7.2	5.7	49.0	黒 安
22	i-21・22	加 剥	8.3	4.9	43.5	黒 安
23	i-20	加 剥	8.7	5.4	77.4	黒 安
第315図-24	g-21	使 剥	4.9	5.7	28.8	黒 安
25	i-21	使 剥	4.2	3.2	11.6	黒 頁
26	i-21	使 剥	3.1	2.8	8.9	黒 頁
27	h-23	使 剥	2.9	3.9	8.4	黒 頁
28	h-22	使 剥	6.0	6.0	13.9	黒 頁
29	g-21	剥 片	4.0	7.0	27.7	黒 頁
30	g-21	剥 片	5.6	7.3	45.5	細 安
31	j-22	剥 片	11.4	3.9	14.0	珪 頁
第316図-32	g-20	剥 片	6.5	6.7	161.0	黒 安
33	s-3	敲 石	10.8	9.0	140.6	黒 安
34	g-21	凹 石	8.4	6.8	37.0	石 閃
35	g-20	敲 石	7.7	3.7	51.7	黒 安
36	g-21	台 石	18.4	15.2	390.0	流紋岩
第317図-37	h-22	石 核	3.8	4.3	47.0	黒 頁
38	m-23	石 核	3.9	3.6	12.0	黒曜石
39	i-21	石 核	3.5	4.0	20.7	黒 安
40	i-20	石 核	5.3	4.7	95.3	黒 安
41	h-21	石 核	6.3	8.2	260.0	黒 安
42	h-20	石 核	7.7	7.9	299.0	黒 安
43	f-21	石 核	5.2	6.2	119.0	黒 安
44	f-21	石 核	5.9	6.7	22.4	黒 安
45	g-21	石 核	5.7	5.3	152.0	黒 安
第318図-46	h-20	石 核	11.4	9.3	572.0	黒 安

「器種」の欄の略号は次のことを示す。

加剥：加工痕ある剥片 使剥：使用痕ある剥片

「石材」の欄の略号は次のことを示す。

黒安：黒色安山岩 黒頁：黒色頁岩 ホルン：ホルンフェルス

珪頁：珪質頁岩 砂頁：砂質頁岩 細安：細粒安山岩

石閃：石英閃緑岩

第8表 石器の接合資料

挿図番号	遺物番号	出土位置	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	重さ (g)
第319図	黒色安山岩-3					
1	i-21	剥片	4.8	6.7	27.4	
2	不明	剥片	2.6	3.0	4.0	
3	h-21	剥片	4.3	4.3	12.9	
4	i-21	剥片	4.1	3.2	10.9	
5	i-21	剥片	5.9	4.8	24.6	
6	i-20	剥片	6.9	5.7	50.0	
7	h-21	剥片	2.7	3.8	8.6	
8	i-21	剥片	3.1	4.1	14.4	
9	i-21	剥片	4.4	4.7	32.0	
第320図	10	不明	剥片	3.3	4.1	14.0
11	不明	剥片	2.4	2.8	5.0	
12	i-21	剥片	5.6	4.0	25.9	
13	不明	剥片	2.5	2.8	3.0	
14	i-21	剥片	4.7	5.8	32.4	
15	h-22	剥片	4.0	4.6	17.1	
	黒色安山岩-4					
1	i-20	加剥	8.7	5.4	77.4	
2	i-23	剥片	5.1	7.2	17.8	
3	i-21	碎片	2.8	1.5	2.6	
4	i-23	剥片	5.7	3.0	20.2	
第321図	黒色安山岩-5					
1	i-21	石核	8.5	8.7	15.0	
2	i-21	剥片	3.5	4.1	11.3	
3	i-22	剥片	4.7	3.9	22.7	
4	i-21	剥片	4.0	5.2	22.0	
5	i-21	碎片	2.4	2.2	2.6	
6	i-21	剥片	5.4	5.7	40.1	
7	h-21	剥片	5.1	5.8	46.0	
8	不明	剥片	3.7	3.3	12.0	
9	i-23	剥片	4.9	5.3	41.3	
第322図	黒色安山岩-1					
1	g-20	石核	12.1	12.9	944.0	
2	f-20	石核	8.4	11.5	317.0	
3	f-20	碎片	2.1	2.6	4.0	
第323図	黒色安山岩-2					
1	f-20	石核	9.0	11.0	58.6	
2	f-20	石核	9.3	11.6	61.2	
第324図	黒色安山岩-16					
1	i-21	加剥	8.3	4.9	43.5	
2	不明	剥片	5.7	5.9	34.0	
3	不明	剥片	2.5	4.0	13.0	
4	h-21	剥片	2.4	3.7	4.3	
5	g-20	石核	4.4	3.1	43.7	
	黒色頁岩-5					
1	g-21	碎片	.5	2.6	1.0	
2	g-21	石核	5.9	11.2	264.0	
	黒色安山岩-13					
1	i-21	剥片	1.9	3.6	4.5	
2	j-21	石核	3.4	6.9	78.6	
第325図	黒色頁岩-10					
1	g-20	剥片	5.6	(6.5)	7.0	
2	g-20	剥片	3.0	4.0	1.0	
3	g-20	剥片	3.5	3.2	27.0	
4	g-20	碎片	3.6	3.7	2.2	
5	g-22	剥片	(2.6)	2.6	2.7	

挿 号	遺物 番号	出土 位置	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	重さ (g)
第326図 黒色安山岩-8						
	1	i-21	剥片	4.2	6.6	31.8
	2	i-22	剥片	3.3	2.0	37.0
	3	i-21	剥片	3.7	3.7	4.0
黒色頁岩-4						
	1	i-21	剥片	3.4	2.7	6.5
	2	g-20	剥片	4.8	3.5	26.2
	3	j-21	剥片	4.7	5.8	44.0
	4	h-20	石核	6.3	6.8	167.1
第327図 黒色安山岩-9						
	1	h-20	剥片	5.5	3.8	23.9
	2	i-h-20	剥片	5.0	5.4	56.5
	3	h-21	剥片	4.9	3.4	12.6
黒色頁岩-7						
	1	i-21	剥片	3.0	3.5	66.3
	2	i-23	剥片	2.4	5.4	4.2
黒色頁岩-8						
	1	h-21	剥片	4.3	5.3	24.0
	2	g-21	剥片	3.5	5.2	24.0
第328図 黒色安山岩-7						
	1	i-21	剥片	4.3	5.0	20.9
	2	i-21	削器	3.8	6.2	41.0
	3	i-21	剥片	4.4	3.2	9.0
	4	不明	碎片	2.0	.8	2.0
	5	i-21	剥片	3.2	4.0	14.0
黒色安山岩-12						
	1	j-g-21	石核	5.0	4.7	50.9
黒色頁岩-11						
	1	h-21	剥片	4.6	4.5	28.0
	2	h-22	剥片	2.8	2.3	3.0

挿 号	遺物 番号	出土 位置	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	重さ (g)
第328図 黒色頁岩-11						
	1	h-21	剥片	4.6	4.5	28.0
	2	h-22	剥片	2.8	2.3	3.0
黒色頁岩-12						
	1	i-21・22	剥片	7.8	5.0	78.6
黒色頁岩-9						
	1	不明	剥片	4.1	4.8	10.0
	2	h-22	使剥	4.8	3.7	13.0
第329図 黒色安山岩-17						
	1	i-20	剥片	3.0	2.2	5.0
	2	h-21	石核	7.2	3.3	71.1
黒色頁岩-13						
	1	e-21	加剥	4.1	6.4	56.6
黒色安山岩-11						
	1	i-20・21	石核	7.0	6.4	62.7
黒色安山岩-18						
	1	e-21	加剥	4.1	5.6	29.0
黒色頁岩-15						
	1	i-j-21	加剥	3.6	5.5	22.9
チャート-1						
	1	g-20・22	石鋏	12.8	6.1	189.2
黒色安山岩-15						
	1	g-21・22	石核	3.6	4.4	35.7
第330図 黒色頁岩-1						
	1	不明	剥片	4.7	5.8	15.0
	2	j-21	剥片	6.6	11.3	107.2
	3	不明	剥片	3.2	4.2	6.0
	4	i-21	剥片	7.4	10.3	146.0
	5	i-20	剥片	3.2	6.8	16.0

第9表 石器の組成

石材・器種

石 材	石 鋏	削器	加工痕ある剥片	使用痕ある剥片	石核	剥片	碎片	敲石	凹石	台石	礫	合 計
黒色安山岩		1	11	2	17	116	59	3				209
黒色頁岩	3		8	5	4	84	16					120
珪質頁岩	1					5	2					8
チャート	3						1					4
黒曜石					1							1
ホルンフェルス	4		1				1					6
細粒安山岩						4						4
砂質頁岩	1											1
点紋頁岩						1						1
石英閃緑岩									1			1
流紋岩										1		1
合 計	12	1	20	7	22	210	79	3	1	1		356

石材・器種 (位置不明)

石 材	石 鋏	削器	加工痕ある剥片	使用痕ある剥片	石核	剥片	碎片	敲石	凹石	台石	礫	合 計
黒色安山岩		1	1		1	34	129					166
黒色頁岩			3		2	33	34					72
細粒安山岩	1						2					3
砂質頁岩							2					2
珪質準片岩											1	1
合 計	1		4		3	67	167				1	244

### 13 氾濫層下豎穴住居

OT-1号住居跡 (第338・339図 PL-89)

位置 a・b-11・12グリッド 氾濫層下、標高33.0mの畝下遺物散布地点として調査した。他地点の遺物散布地と比べ、甕類が豊富なおえ、散布範囲が豎穴住居状であった。炉や柱穴等の施設が確認できなかったが、発掘調査段階で豎穴住居と判断した。住居の想定範囲を破線で図示したが、遺物ドットと少

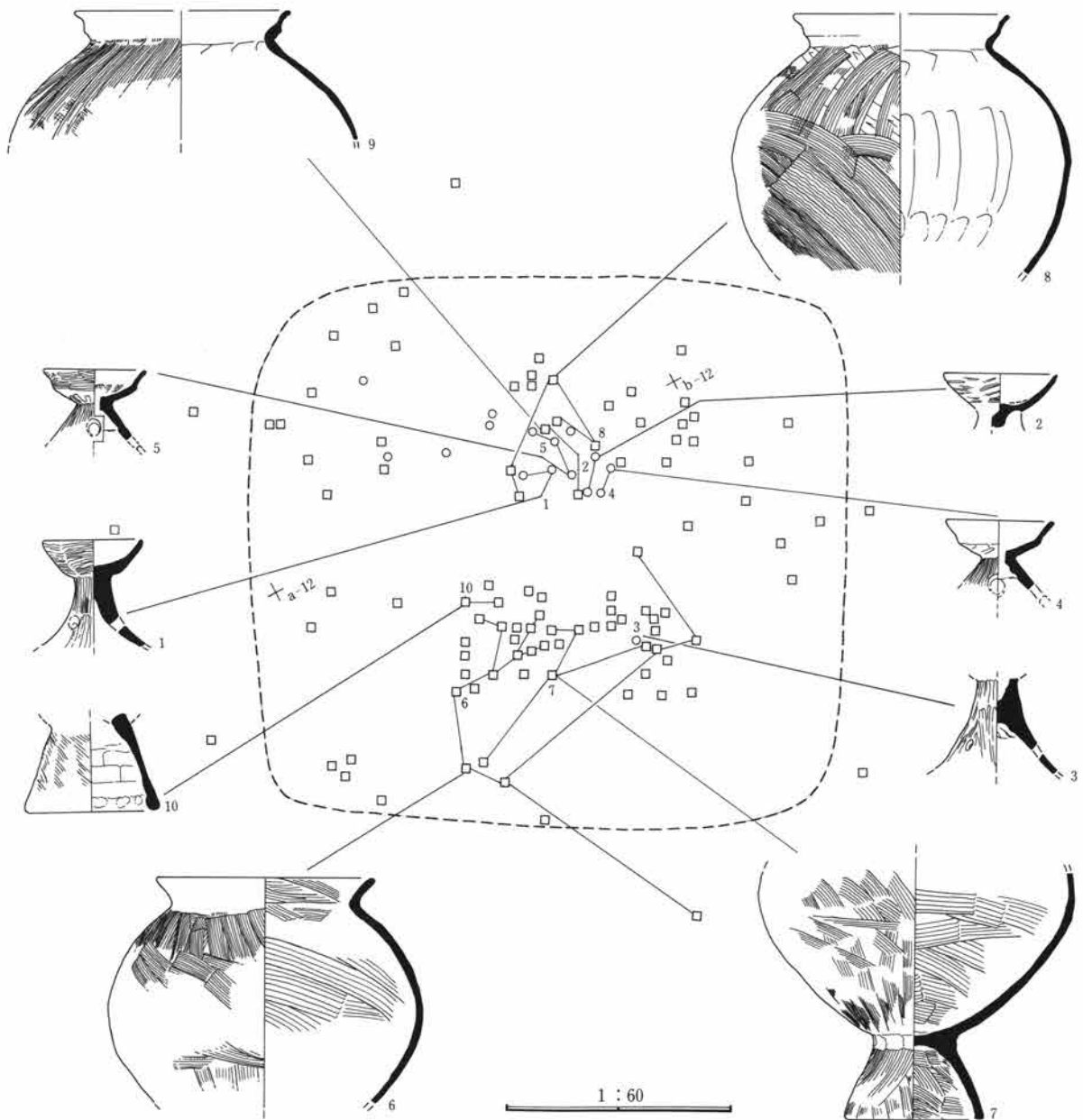
量の散布物以外の根拠はない。非常に不明瞭であるが、本遺跡群にあって唯一の古墳時代前半の豎穴住居とした。

長軸方向 N-62°-W

床面積 (22.5m<sup>2</sup>)

形態 古式土師器を出土する住居通有の隅丸長方形を想定復元した。隅丸部分の根拠はない。

規模 長辺4.9m、短辺4.4m



第338図 OT-1号住居跡遺物出土状態



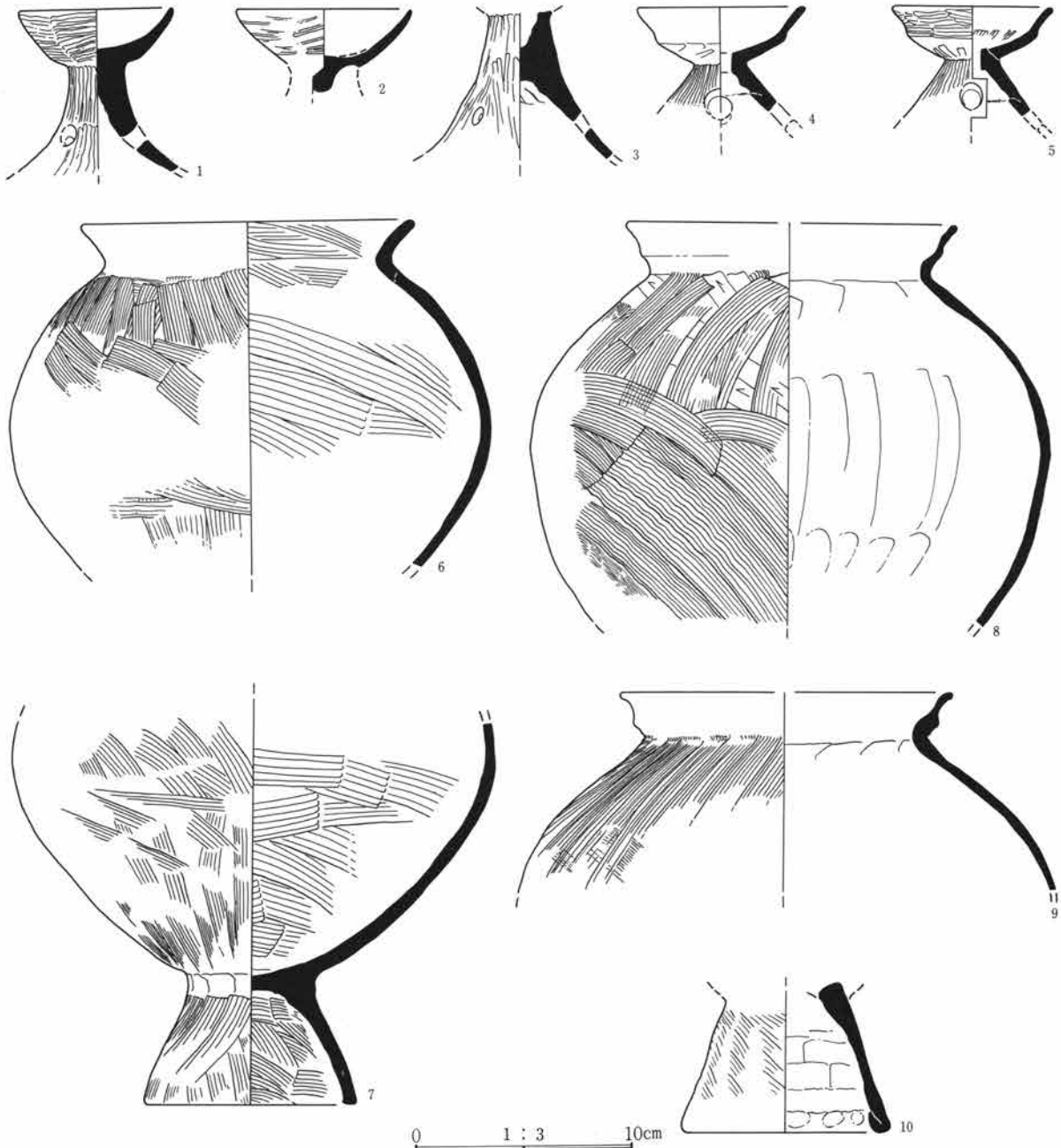
炉 残存状態の良い甕類の出土位置が住居中心と推定できる付近に集中していた。

内部施設 確認できない。

床 硬化面や貼り床の痕跡等は確認できなかった。カーボン粒の散布が多い面を捉えたが、想定した床面下からは遺物の散布がなく、面としての把握には誤りはなかったと考えている。

遺物の出土状態 10点を図示した。高杯・器台と甕に偏ったが、他の破片も傾向は同じである。破片も含め、遺物は想定床面の直上から10cm以内での出土である。

時期 4世紀。



第339図 OT-1号住居跡出土遺物

## 14 氾濫層下畠 (第340～357図 PL-90～94)

古墳時代の洪水によって運ばれたシルト質の氾濫土層下の広範囲に畠跡のあることは、阿久津宮内遺跡G区での発見であった。基本土層調査のための試掘坑断面からシルト質土層直下に黒色土層があり、この層にはカーボン粒が多く含まれていた。平安時代までの第1面調査が終了したのち、重機によるシルト質土除去により、畠面は容易に確認できた。ここでは、畠の縁辺にある道状の区画がみつまっている。

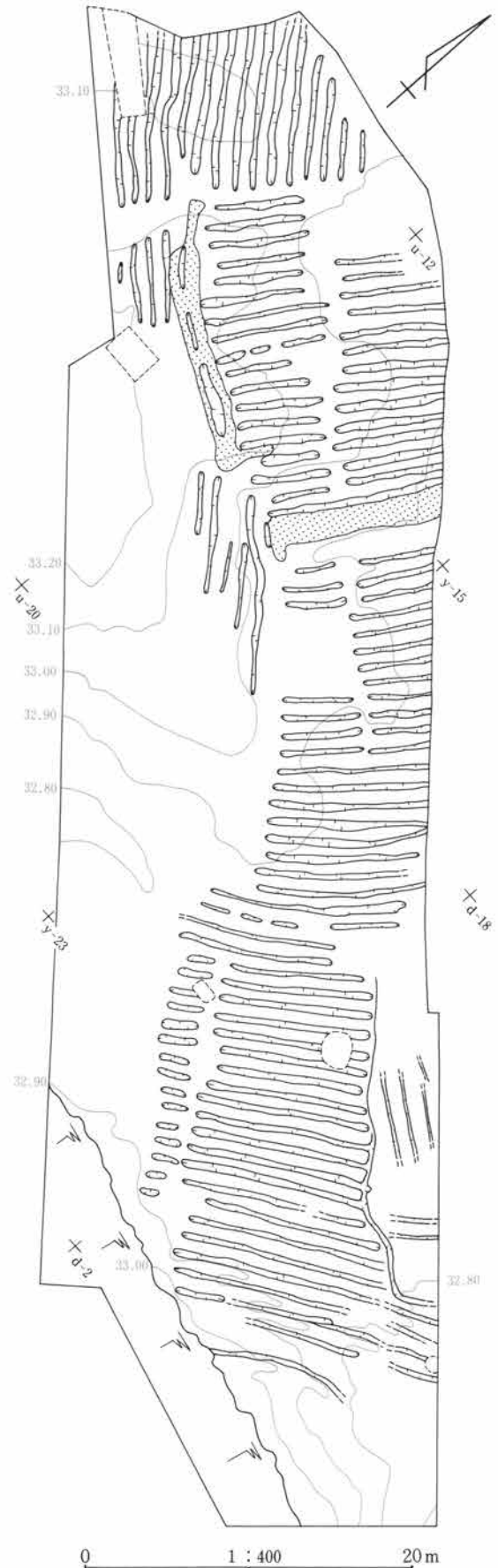
この後、上面を大きく削平されていた大館馬場遺跡の一部や旧流路によって削られた安養寺森西遺跡のA区・D区南半などを除き、各遺跡全体を覆うシルト質の洪水堆積層の下からは畝立てされた明瞭な畠の跡が相次いで発見された。安養寺森西B区から阿久津宮内遺跡まで約800m以上にわたって畠跡が残存していたが、安養寺森西遺跡以北の石田川まで、早川左岸の自然堤防状の台地全域に畠は広がっていたものと思われる。

特に、大館馬場遺跡のG区では、重複した畠が同一面にみられ、耕作地を移動して連作を避ける農法が明らかになった。このことから、これらの畠が同時存在ではないことが判った。

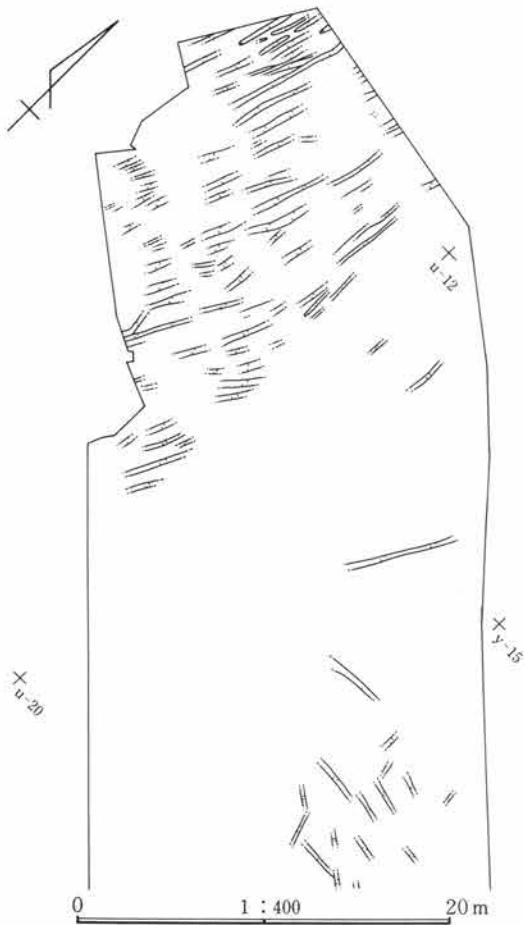
なお、安養寺森西遺跡では、畠のプラント・オパール分析を実施した(第IV章-1参照)。畝の上面と下面、および畝の無い部分の3地点の差異を明らかにすることを目的とした。資料が少なく十分な検討ができなかったが、イネのプラント・オパールは少量であるが畝上面でのみ検出された。イネ栽培の可能性とともに、敷き藁のような状態も想定できるかもしれない。プラント・オパールではキビ属が目される。

### 安養寺森西遺跡の畠跡

畠跡が確認できた西端にあたるC区9-12グリッド付近以西は、初年度の調査部分で畠跡に気付かなかった地域である。しかし、深堀りによる基盤層確



第340図 AY-C・D区氾濫層下第1面畠

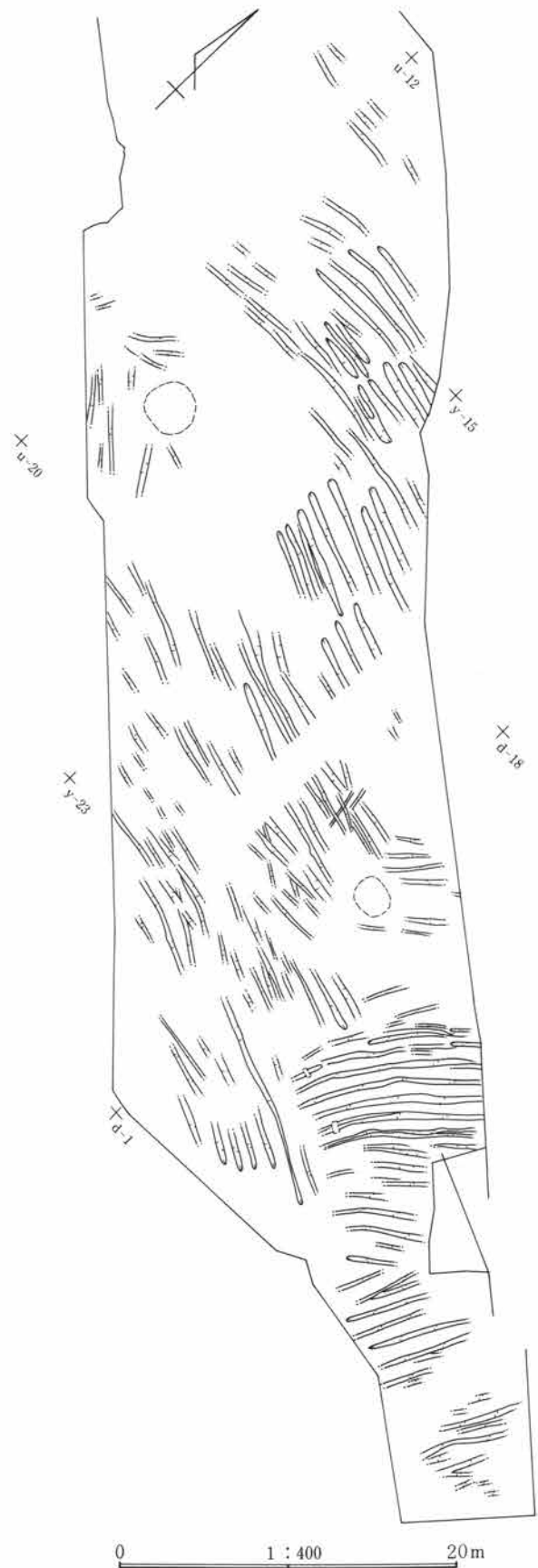


第341図 AY-C区氾濫層下第2面畠

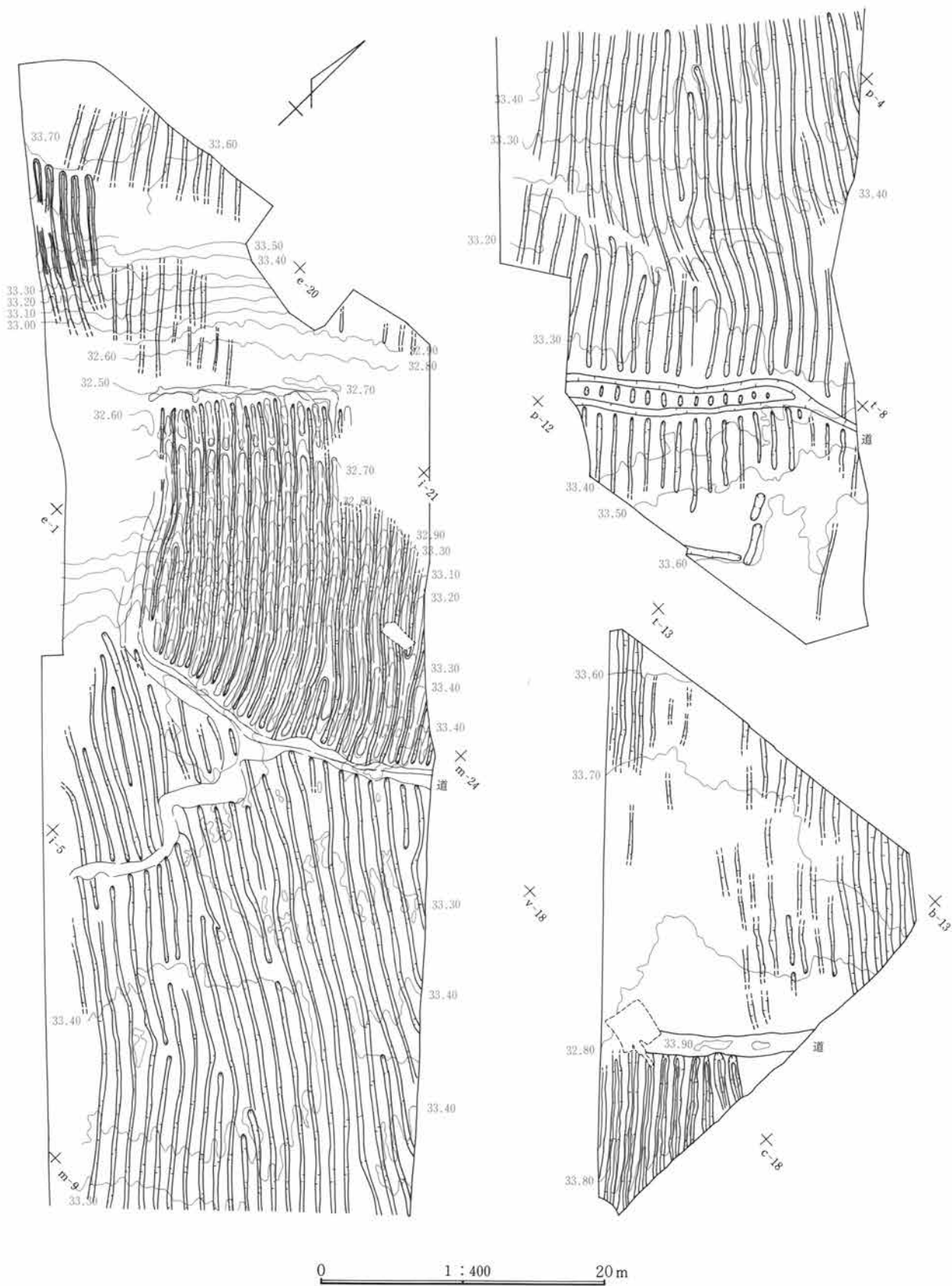
認調査では、ここが旧流路跡の砂礫層であり、中世以前の遺構が存在しないことが判っている。未調査のまま失った部分は比較的少ないと思われる。また、D区d-1グリッド以南も旧流路により削られた部分である。

第1面畠は北東と北西の2方向に畝立てされた畠が見つかった。重複は確認できなかったが、残存状態の良い北東方向の畠が出土するものと考えた。なお、第340図のトーン部分は通路状の高まりを検出した範囲である。

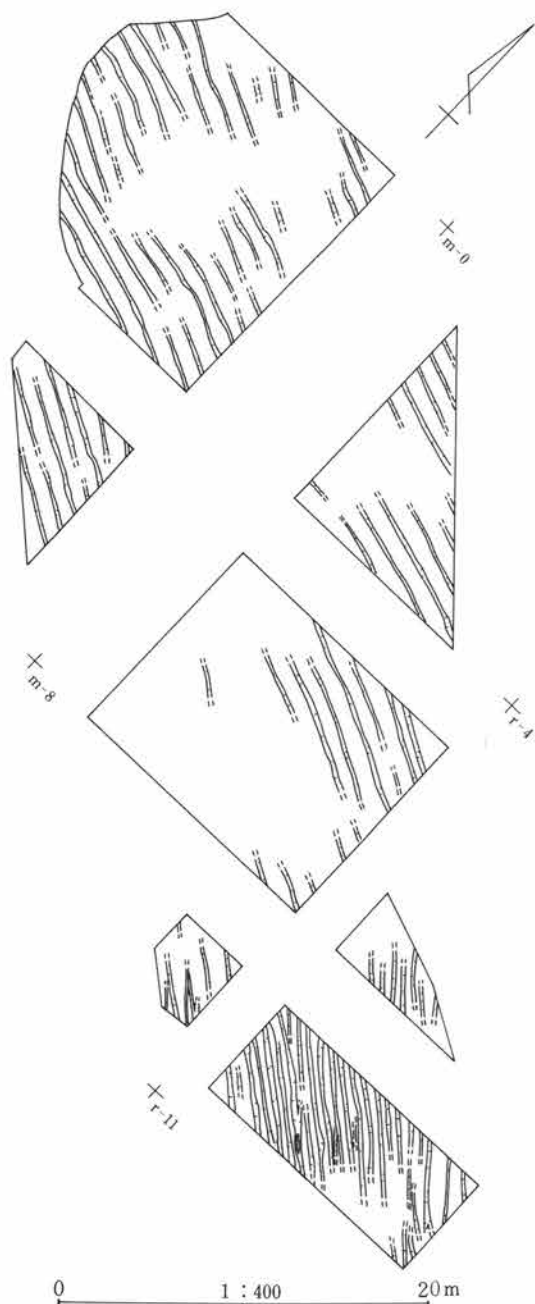
この畠の下はC区で2面目、C区からD区にかけて広い範囲で3面目の畠跡を確認した。若干黒色味を帯びたシミ状のもので、耕作痕とすべきものであろう。



第342図 AY-C・D区氾濫層下第3面畠

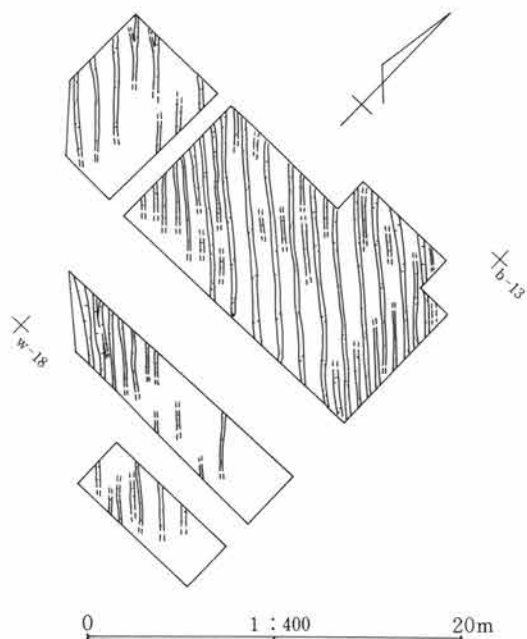


第343図 AY-E·F区氾濫層下第1面島



第344図 AY-E区氾濫層下第2面畠

E区のf-22グリッド付近は幅約20mの範囲で比高差1mを越える窪みの部分であった。第1面畠はこの窪みに直交するように、北西方向に畝立てした明瞭なものであった。この窪みから南東側へ向かって大館馬場遺跡の北西隅まで約240mの長さで畠跡は続いていた。この間の面積は約5000m<sup>2</sup>で安養寺森西遺跡から阿久津宮内遺跡までの3遺跡の第1面畠跡中、50%が連続して見つかった。

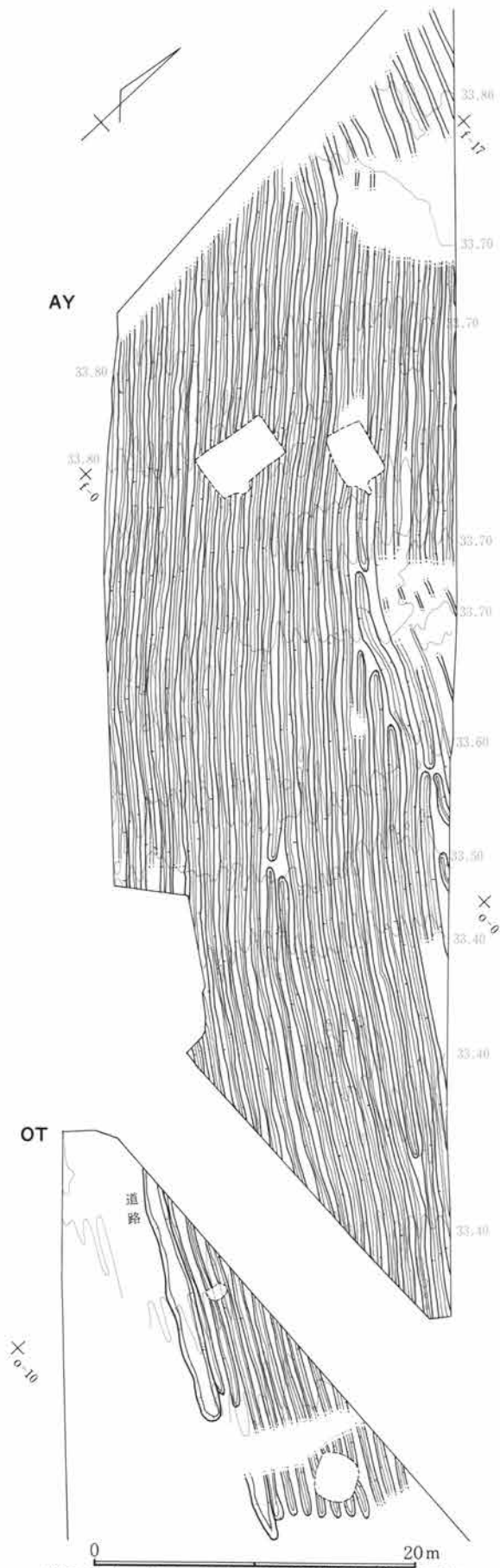


第345図 AY-E・F 氾濫層下第2面畠

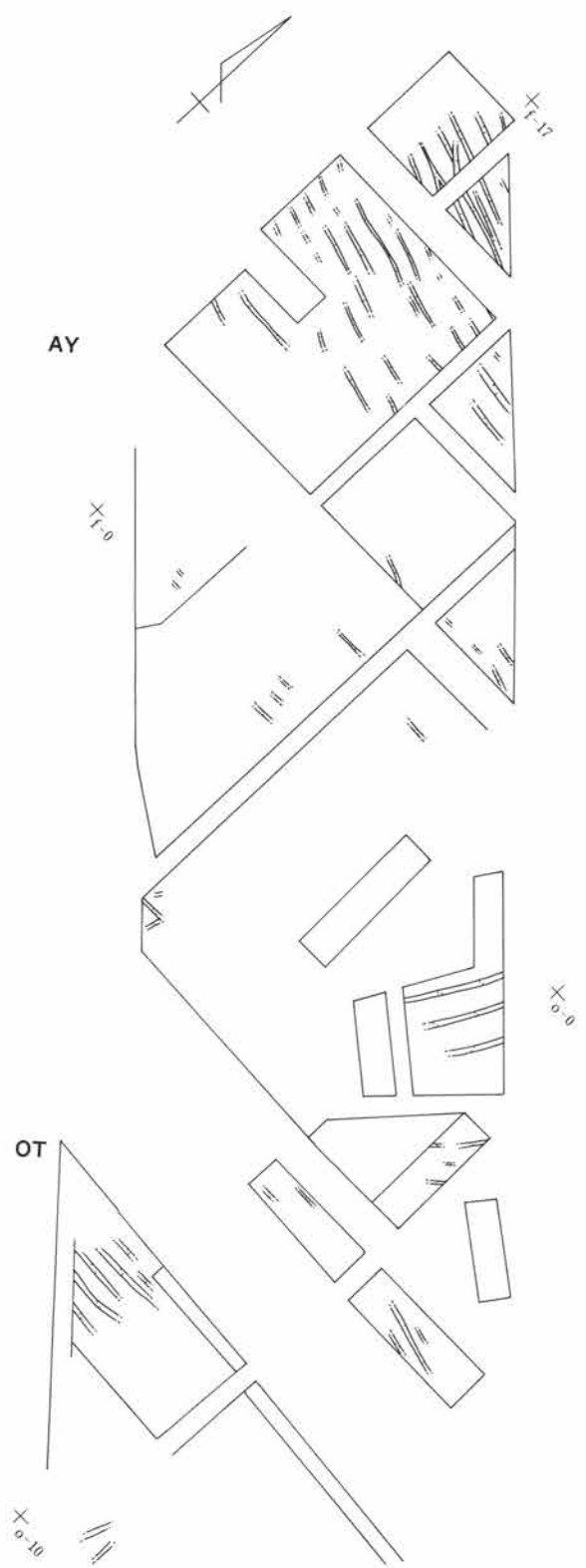
E区の窪地周辺は湧水が著しく、調査環境はきわめて悪かった。反面、畝の遺存状態は良好で、窪地南東側には畝頂部まで旧状を残していた。この部分の畝の高さは6~11cmで、高さ3cm前後の他の地点からは際立っていた。この区画を囲うように、通路状の平坦面があった。g-21からe-23グリッド南側では32.6mコンタに沿うように幅30cm前後の不明瞭な平坦面であった。f-0からh-2で東側に折れ、m-0グリッド付近を通して調査区域外へ続く通路は幅40~60cmでやや広がった。北東側に隣接する畠の畝下端より3cm前後高いレベルにあった。この通路の南東側は畝の残存状態が悪くなることから、両者の畠には時間差のあるものと考えられる。なお、畝間は両者とも58cm前後であった。

j-2グリッド北隅からクランクしながら南側へ走る通路と、s-9グリッド付近で二股に分れる通路は1~3cm前後のわずかな窪みとして確認できた部分で、畠跡に後出するものと思われる。

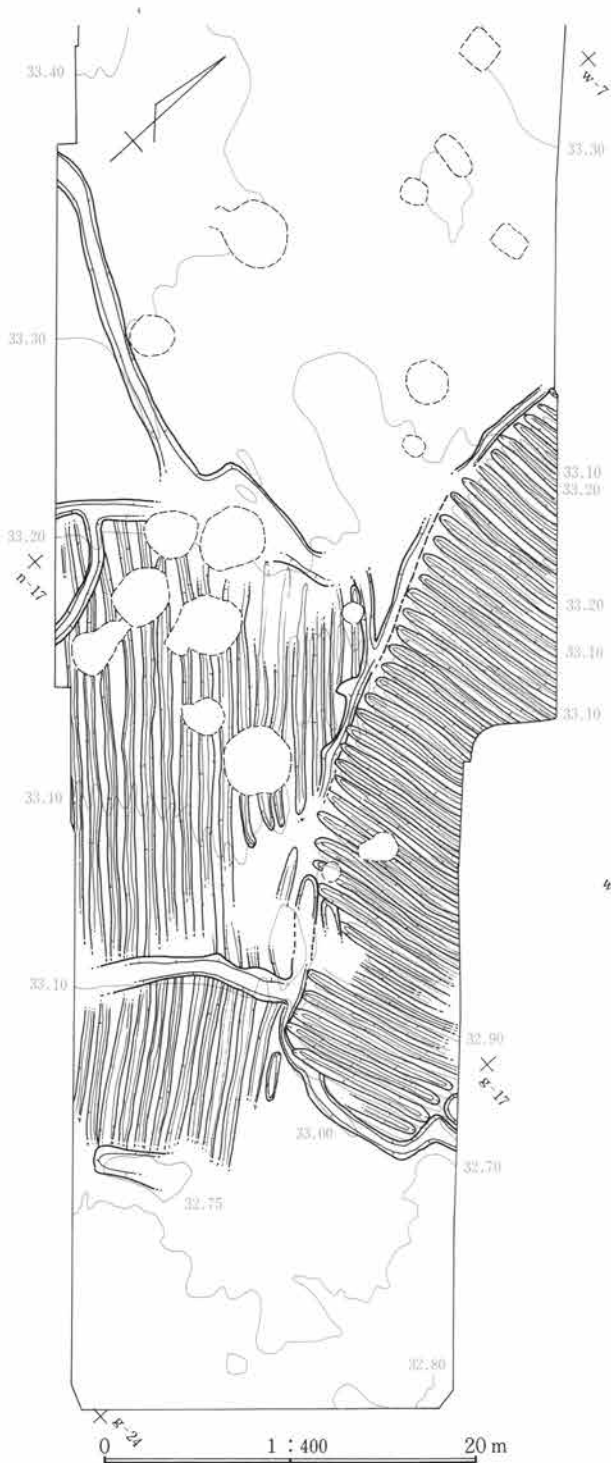
y-19からb-16グリッド付近へを通り調査区域外へ続く通路は幅70~80cmで、2cm前後の高まりとして確認できた部分がある。この通路の南側の畠跡は残存状態がやや良好となる。



第346图 AY·OT-F区氾濫層下第1面畠

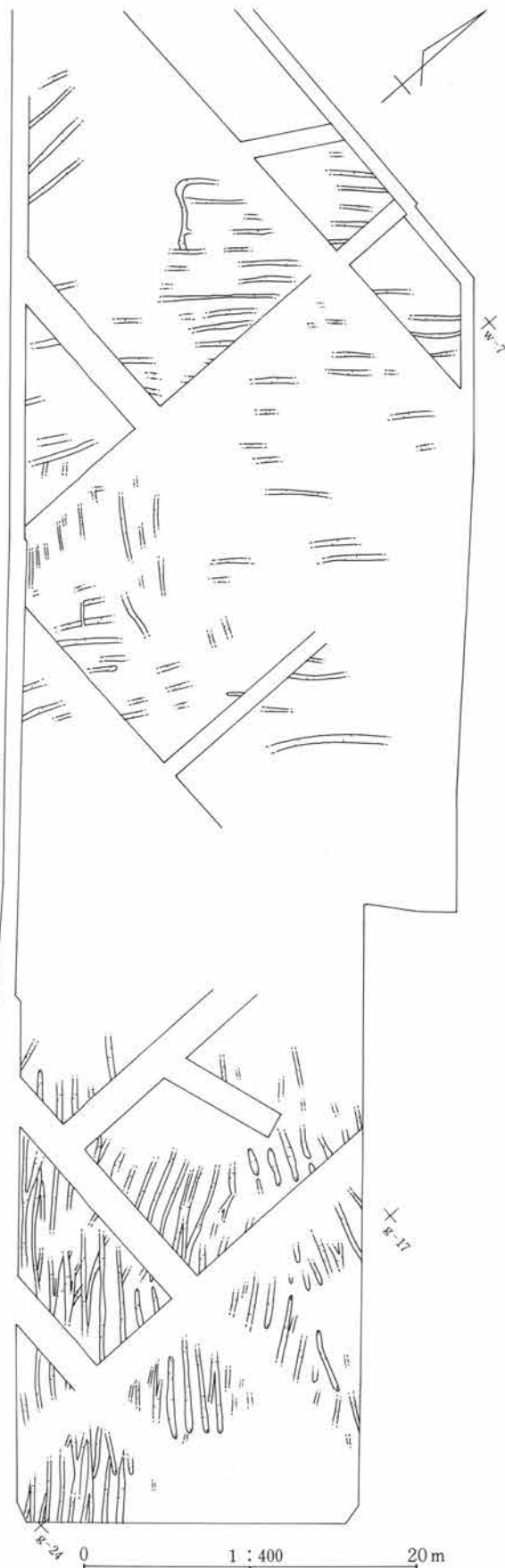


第347图 AY·OT-F区氾濫層下第3面畠

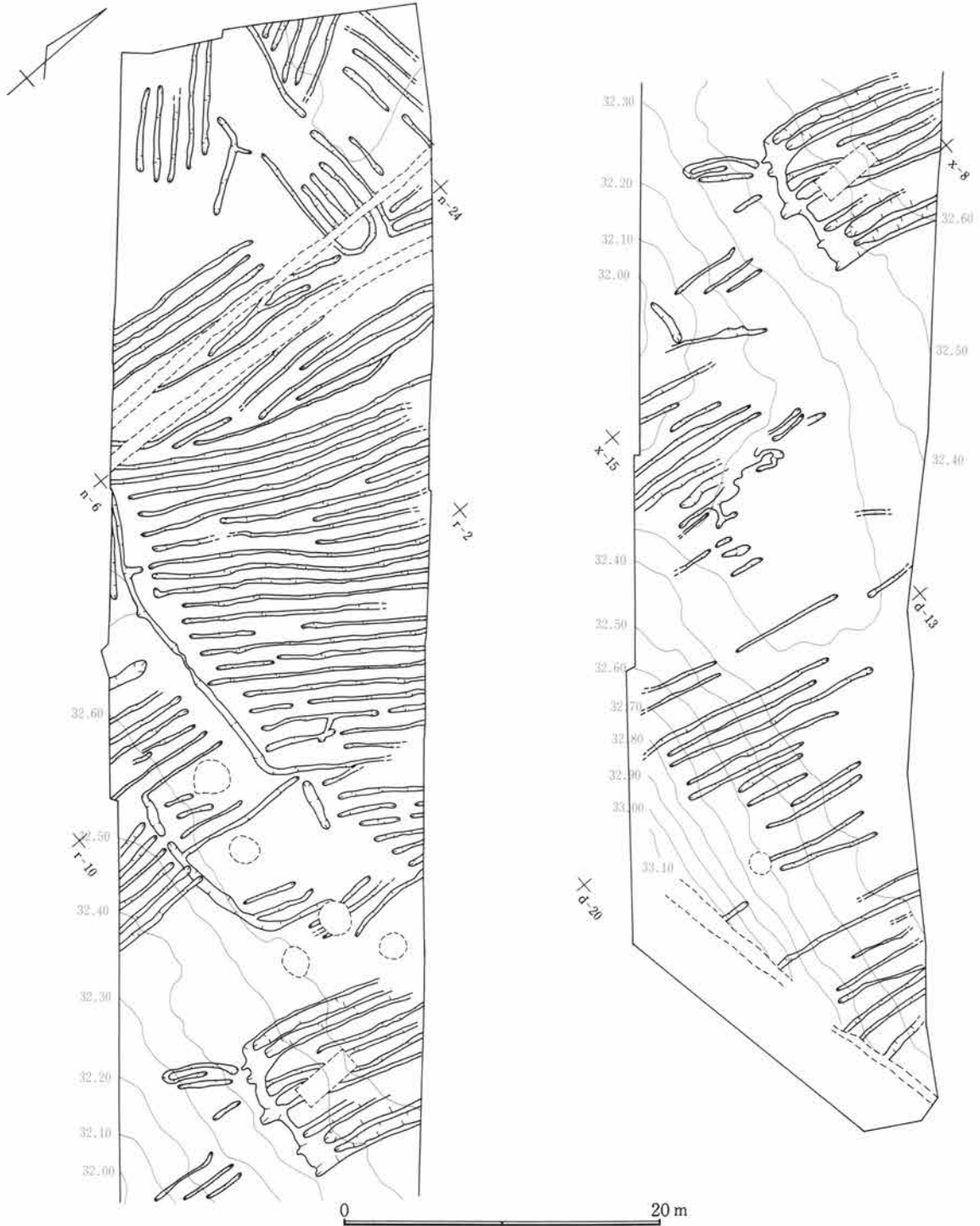


第348図 OT-F・G区氾濫層下第1面畠

大館馬場遺跡の畠跡 F区c-17グリッドを中心とする一画は、畠の重複が良好に現れた地点である。南西側の畝高2~11cmの畠の上に、北東側の畝高13~18cmの畠が重複して作られている。畝間は両者とも50cm前後と変わらない。この2枚の畠の北西・南東の両側では第1面畠は見つかっていないが、下



第349図 OT-F・G区氾濫層下第3面畠

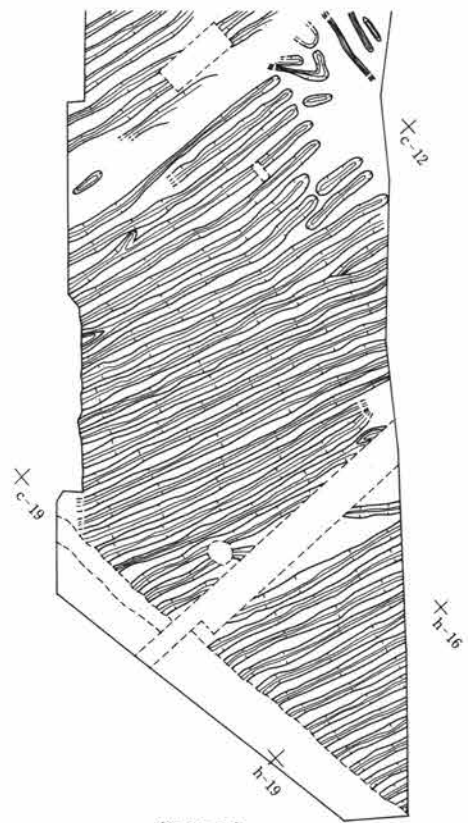


第350図 OT-G・H区氾濫層下第2面畠

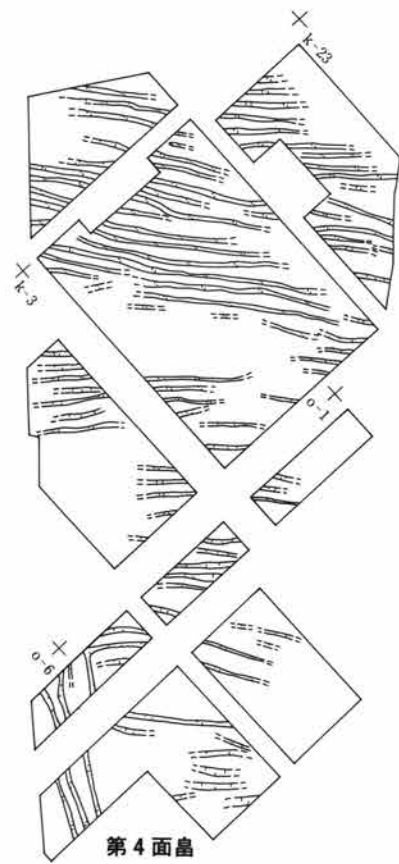
面には畠の痕跡が続いている。第3面とした畠は畠間にFAを散見できた面で、F区g-18グリッドを中心とする畠跡が残存状態が良かった。G区r-7グリッドを中心とする区画は、FA検出のためやや掘り過ぎてしまった部分である。

阿久津宮内遺跡の畠跡 I区f-12グリッド付近の畠跡は表土上面からの深さ40cm前後の高さで見つかった。畠の高さは6~9cmで畠上端は削り取られたように平らな部分が多かった。畠跡を巡るように見つかった通路は幅40~50cm、深さ3~5cm前後の窪みとして確認できた。なお、畠の範囲確認のため





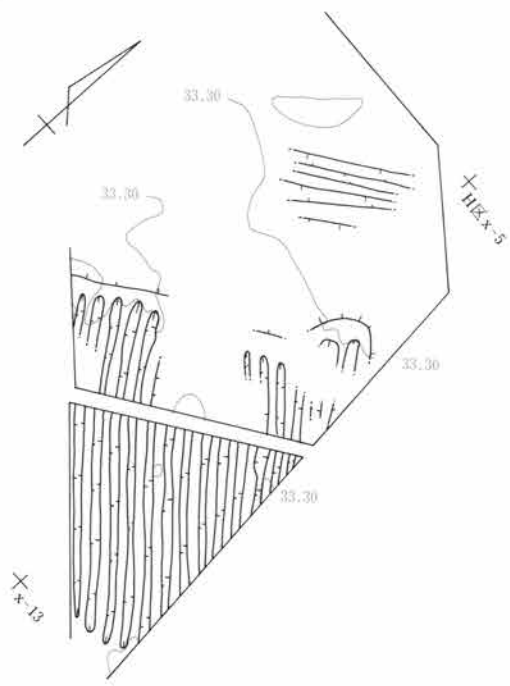
第3面島



第4面島

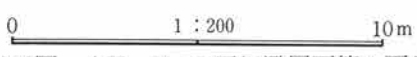
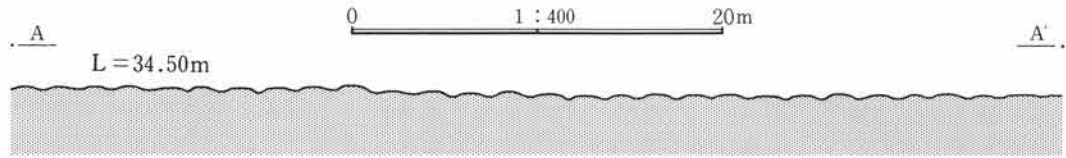
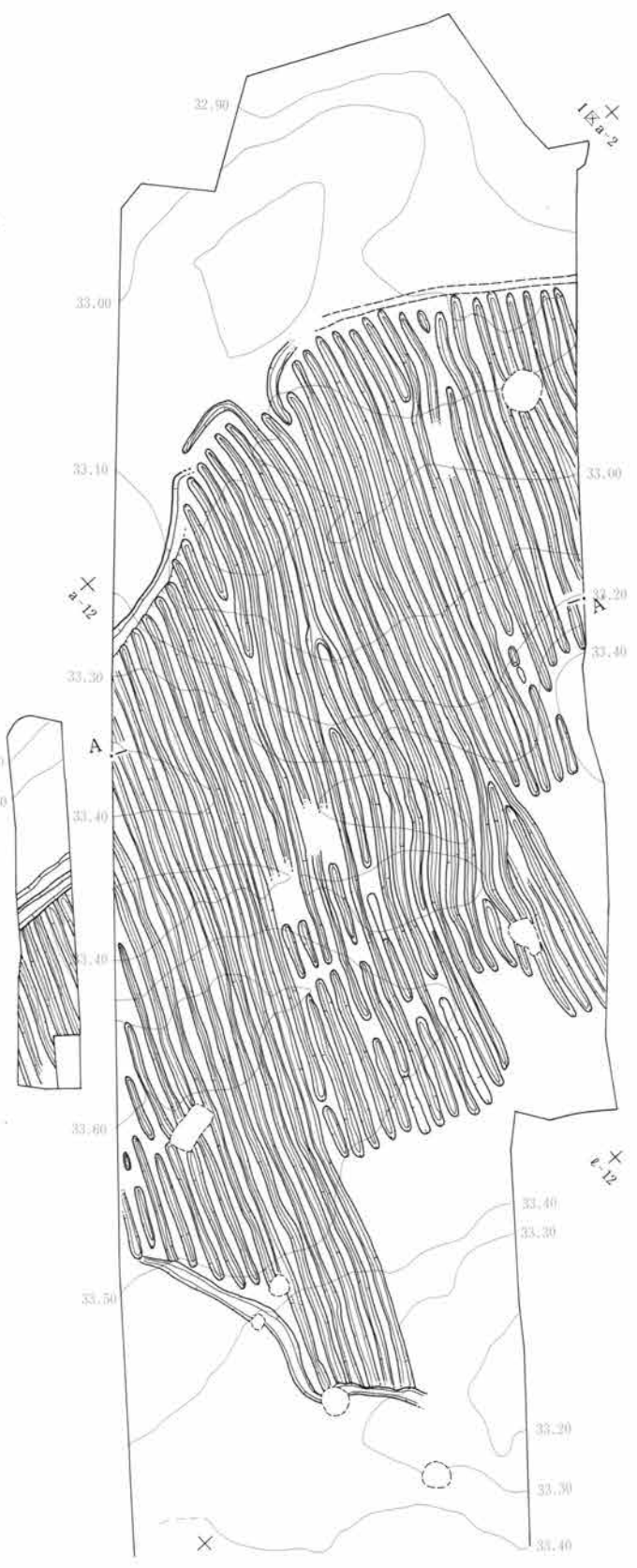
0 1:400 20m

第351図 OT-G・H区氾濫層下第3面島およびOT-H区氾濫層下第4面島

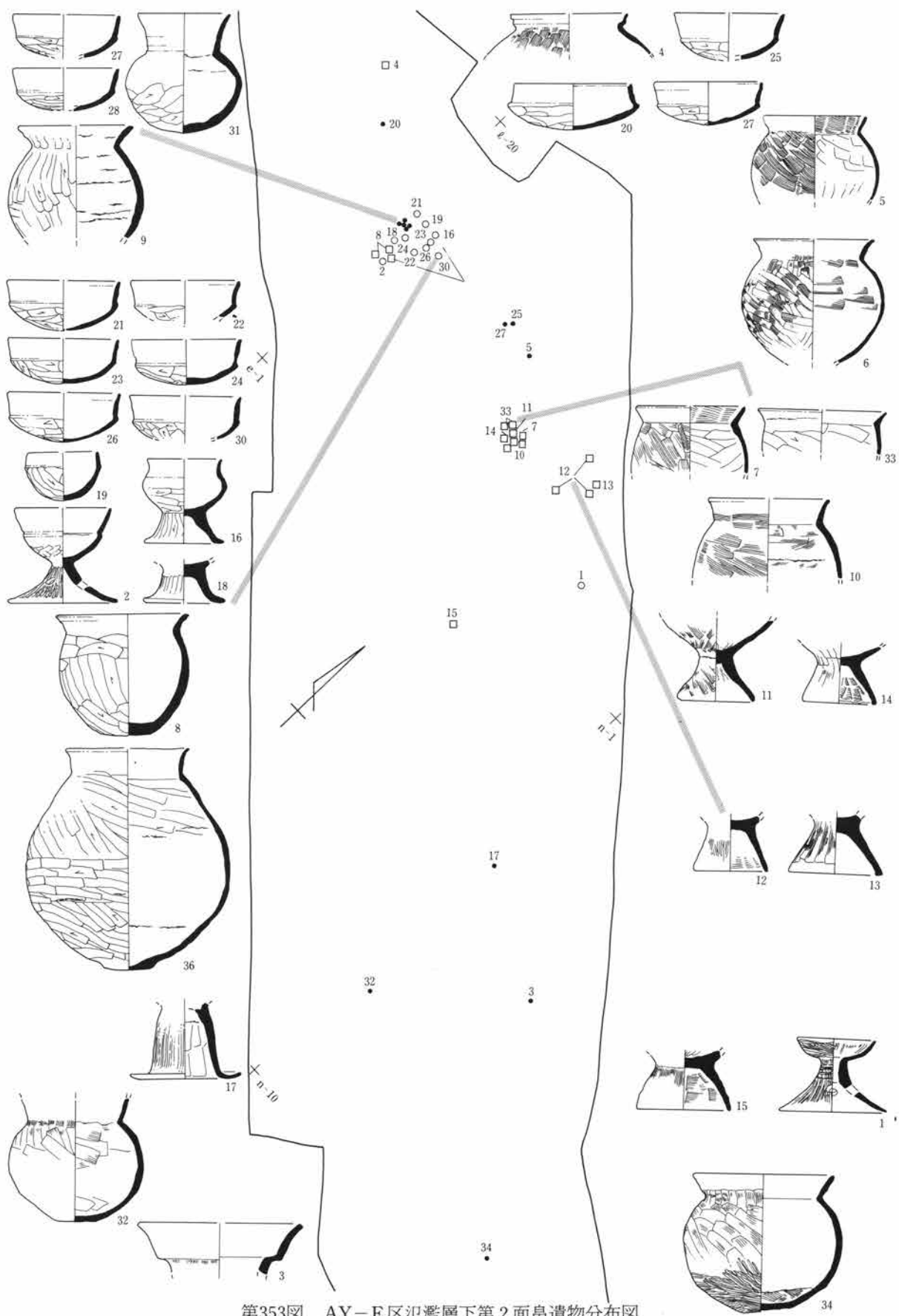


南西側に隣接する通学路を切り回して調査を行った。

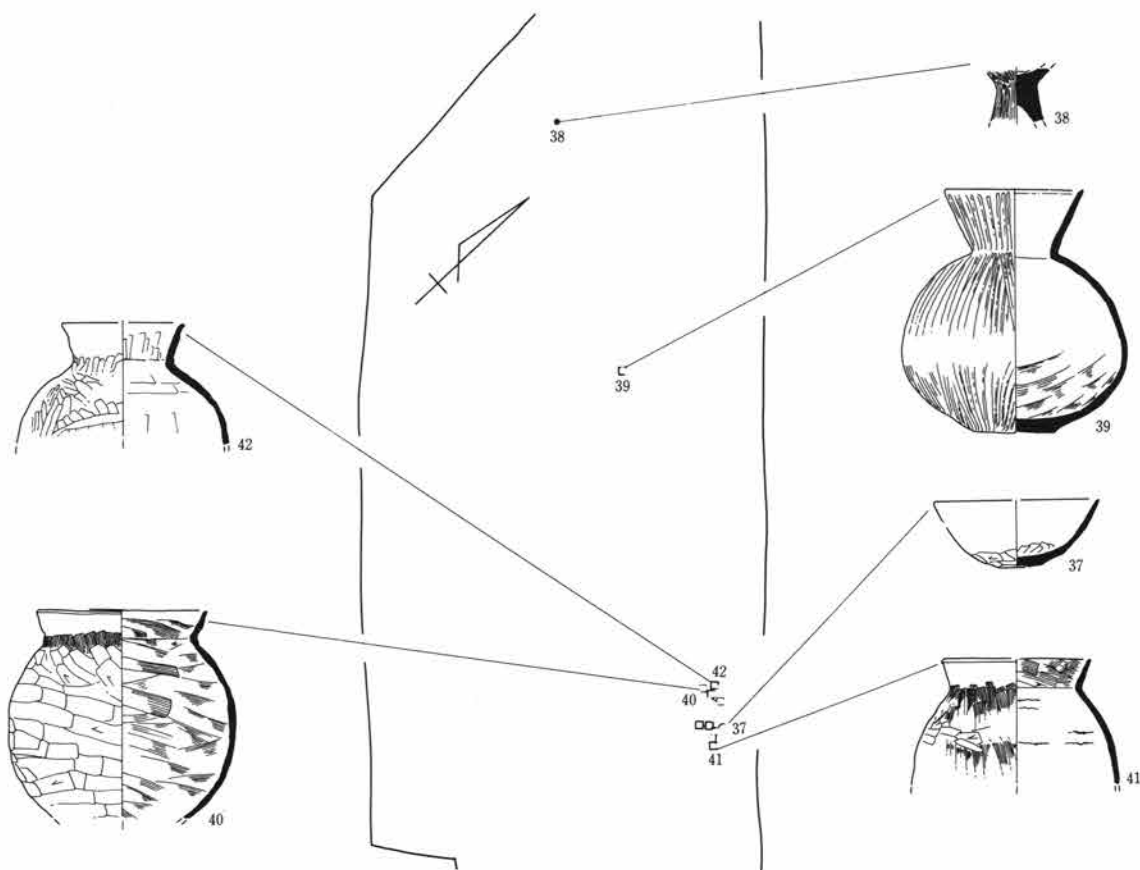
阿久津宮内遺跡の氾濫層下畠跡は、3つの遺跡の中では最初に見つかったものである。第1面畠の調査後は断面による下層の確認調査に移り、面的な調査を行わなかったため、さらに下層にある畠の存在は見落としてしまった。安養寺森西遺跡や大館馬場遺跡同様、2面以下の畠跡が存在していたと思われる。



第352図 AK-H・I区氾濫層下第1面畠



第353图 AY-E区泥濘層下第2面畠遺物分布图



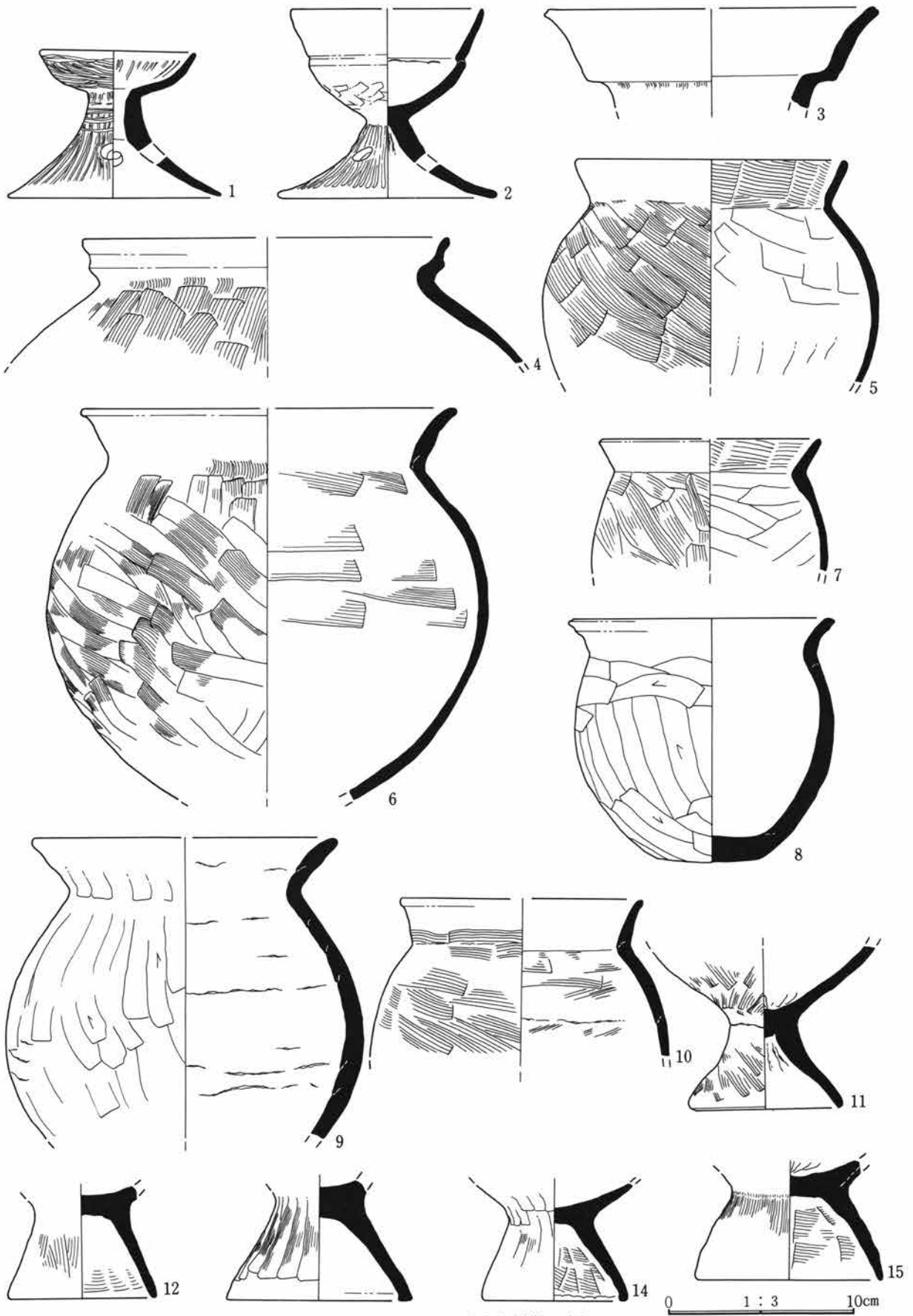
第354図 AY-F区氾濫層下第2面畠遺物分布図

#### 出土遺物について

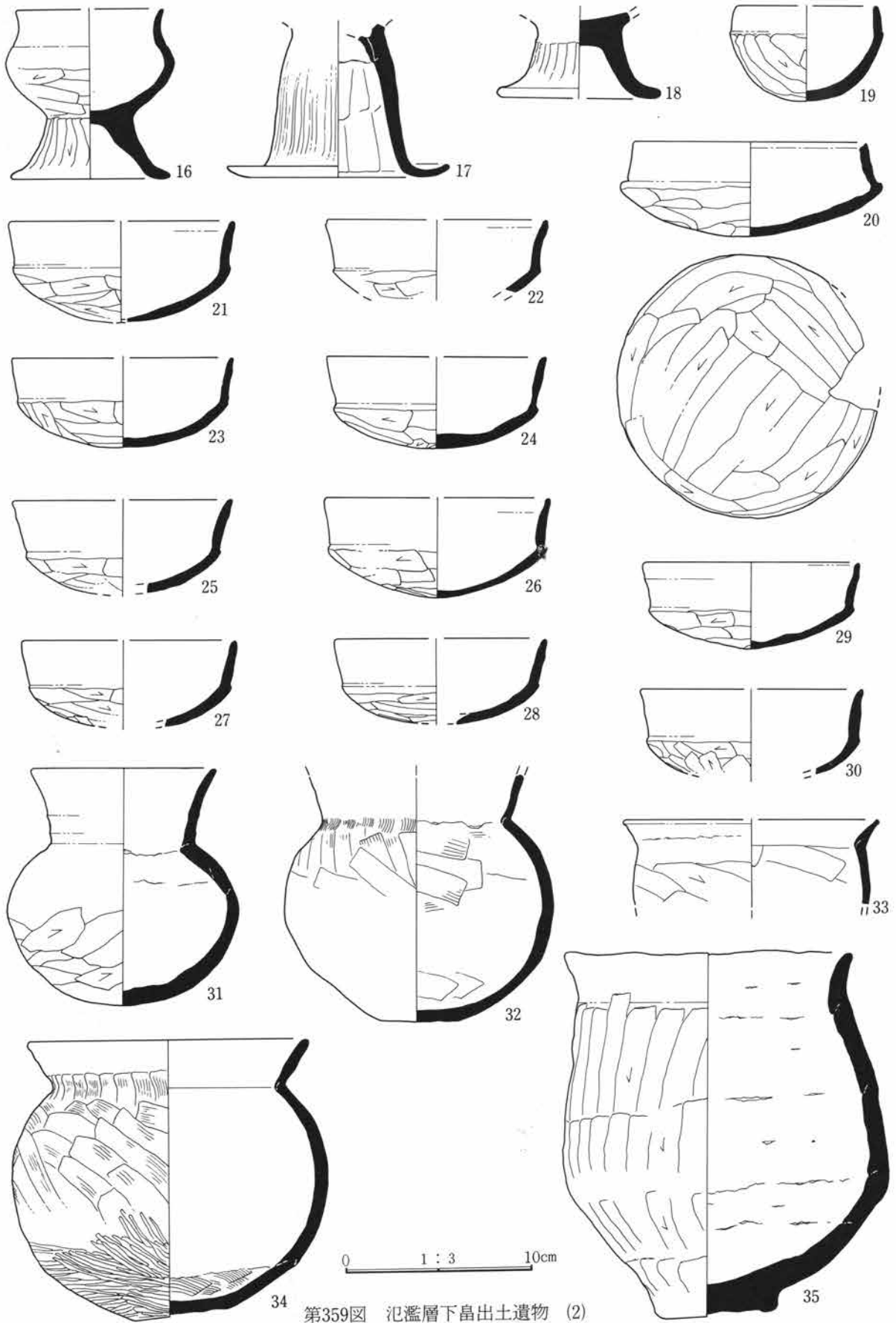
氾濫層下の畠耕作土内からは、畠という性格に比してきわめて多量の土師器を出土した。このうち、竪穴住居を想定し前頁（本文368頁）で扱った大館馬場遺跡b-12グリッド周辺以外で遺物の出土の多かった安養寺森西遺跡の2地点について、第353・354図にドットを示した。なお、遺物分布図の縮率は畠平面図と同じ1/400である。遺物ドットには杯類に○、甕類に□、その他の器類に●を使用した。

鬼高期の遺物を集中出土したのはE区の窪地内に限られていた。遺物は第1面畠の直下から出土したものが多かったが、一部畠上面で確認できたものもあった。ここでは杯類の分布が特に顕著であり、祭祀的な性格が想定できるかもしれない。該期の遺物が他の地点から出土していないことから、畠が居住域から離れていたことも類推できよう。

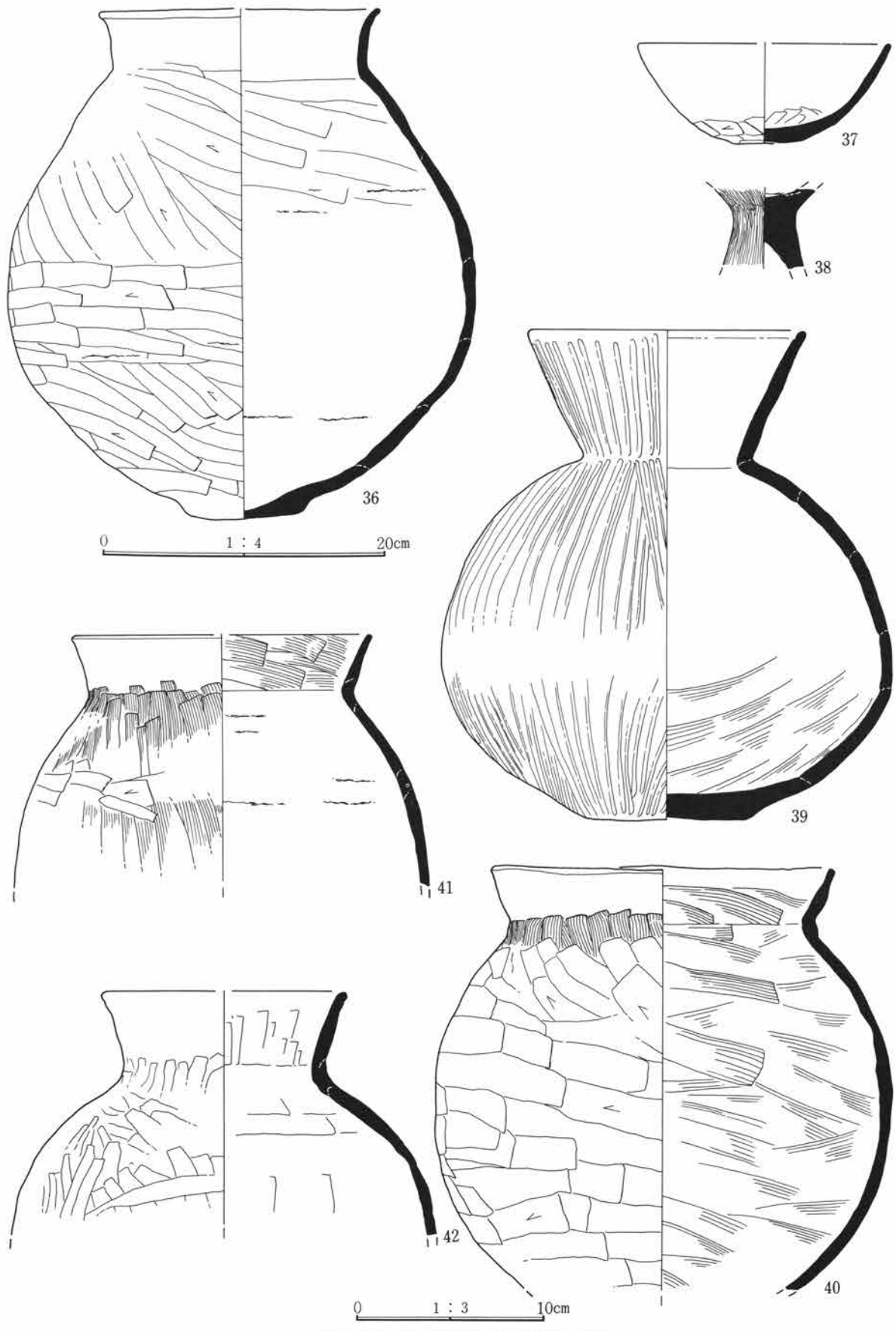
その他の遺物は石田川期のものが多い。第2面畠以下の面の調査時に出土したものが大半で、甕類の比率が高い。鬼高期とは逆に、居住域が近接していたか、あるいは畠が居住域上に営まれたと類推できよう。



第355图 沱濞層下畠出土遺物 (1)



第359図 氾濫層下畠出土遺物 (2)



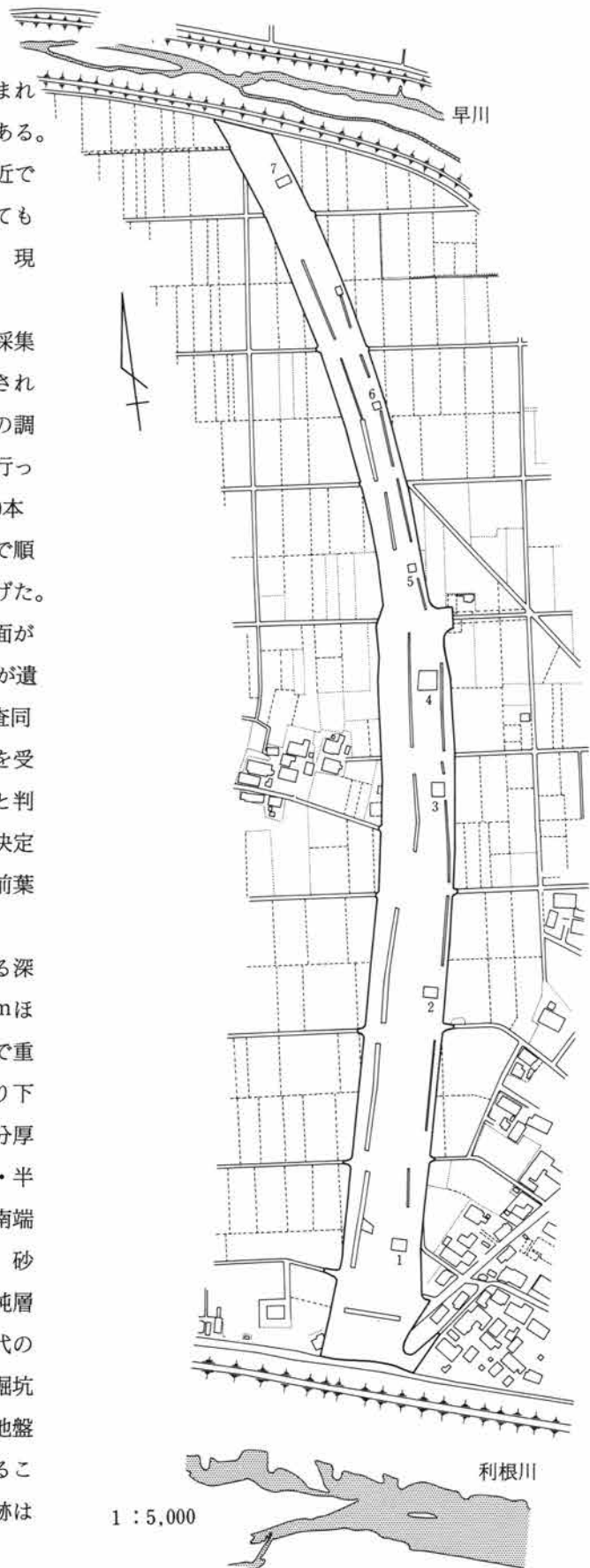
第357図 沱濫層下島出土遺物 (3)

### (3) 武蔵島地区の試掘調査

武蔵島地区としたのは、利根川と早川に挟まれたS T No 3～49の長さ約900mの低地部分である。海拔は第1試掘坑付近34.3m、第6試掘坑付近で33.6mである。阿久津宮内遺跡の西隅と比べても比高差はあまりない。大字武蔵島地内にあり、現状では畠地となっていた。

この地区は、遺跡分布調査で土師器破片が採集され、JK-01島耕地・早川附遺跡と命名されていた。昭和60年4月より、安養寺森西遺跡の調査に平行して全域にわたってトレンチ調査を行った。トレンチは路線内の両脇に2本ずつ、計20本を設定した。表土を重機で剥がした後、人力で順次遺構確認面を探して地表下1mまで掘り下げた。さらに西側のトレンチを拡幅し、砂質土の壁面が保持できる限界の深さ1.5mまで調査を続けたが遺構は確認できなかった。この調査でも分布調査同様に数片の土師器を採集したが、ローリングを受けたものであり、他地点から流れ込んだものと判断した。土師器片は薄手の甕の胴部で、時期決定はできなかったが、古墳時代末から平安時代前葉に該当するものであった。

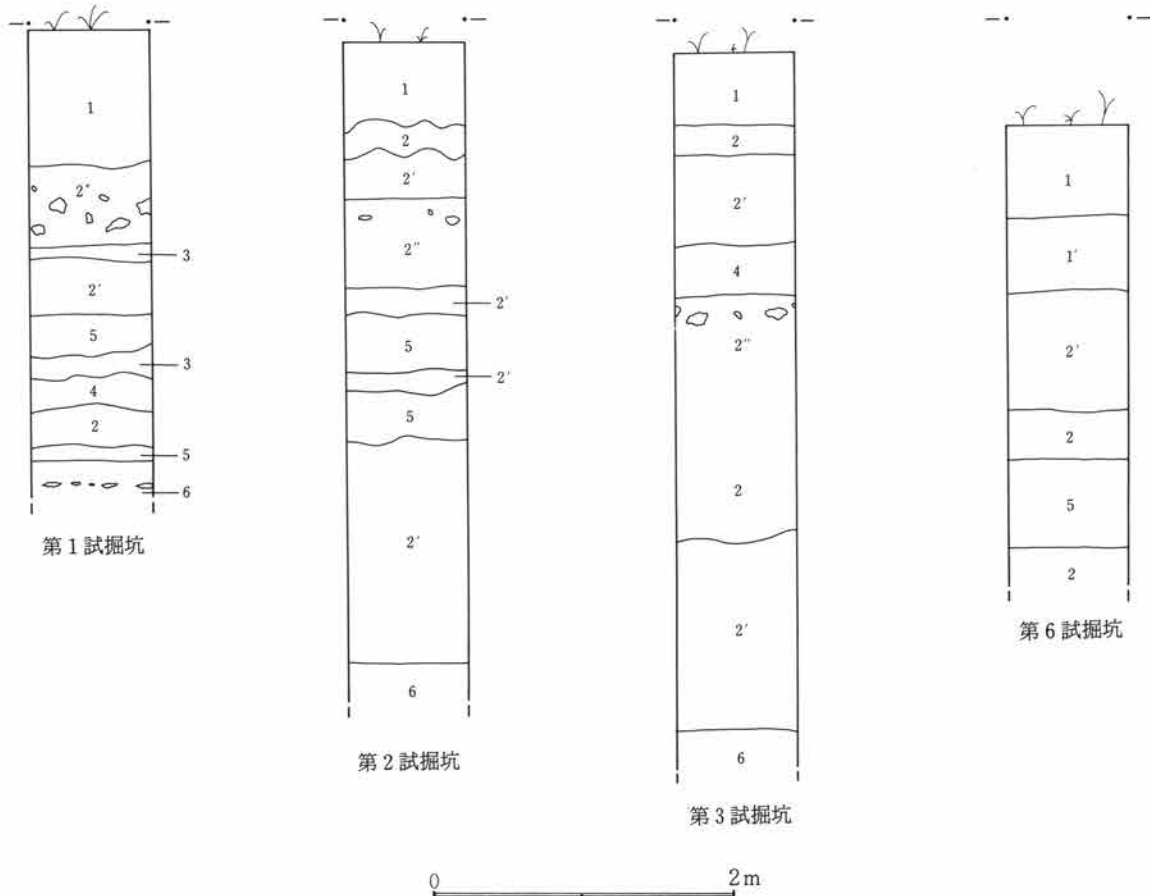
さらに調査範囲の東隅の8地点で重機による深掘り試掘調査を付け加えた。調査坑は1辺8mほどのグリッドを設定し、互層を1枚ずつ剥いで重機の足場も下げながら、深さ3m以上まで掘り下げていった。その結果、一帯は砂が互層状に分厚く堆積した所で、畠の断面や水田の可耕土壌・半鉄層も存在しないことを確認した。しかし、南端にある第1試掘坑の地表下3.1mの高さから、砂礫層の間に挟まれたAs-C層を検出した。純層またはそれに近い状態であり、縄文・弥生時代の遺跡がこの下に存在する可能性が残った。試掘坑は利根川堤防に隣接していて湧水が激しく、地盤もきわめて軟弱で、この下まで調査を続行することはできなかったが、調査可能な範囲では遺跡は存在しないことがわかった。



第358図 武蔵島地区試掘範囲図



L = 34.30m



第359図 土層柱状図

8地点の深掘りの土層柱状図のうち、4地点を図示した。砂壤土を緩やかな傾斜を保ちながら掘り下げたため、図は模式化している。土層説明は下記のとおりである。

1層 表土。砂質土。

1'はシルト質土がまじる。

2層 砂粒。粒径は細砂サイズに近い。

2'はシルトの混合土層。

2''にはAs-Aが不規則にまじる。

3層 細砂層。

4層 粗砂層。

5層 シルト質土層。

6層 砂礫層。礫は拳大の河原石である。

As-Aは二次堆積したもので5mm前後のやや大粒のものが目立った。A'と6層が第1～3試掘坑間で対比できるものだが、他の層の堆積順序は一定でなかった。

As-Cは第1試掘坑の6層上面に見られたものだが、この層は湧水の著しい層で深掘りができなかった。2・3試掘坑も精査が可能な3同様の堆積状態が確認できたものと思われる。

なお、遺物はA''層以下からの出土である。

## 第IV章 自然科学的分析

### 1 プラント・オパール分析

(有)古環境研究所

#### 1. はじめに

安養寺森西遺跡では、古墳時代氾濫層直下から畝状遺構が広範囲にわたって検出され、畑跡と見られていた。この調査は、プラント・オパール分析を用いて、同遺構で栽培されたイネ科作物の検討を行ったものである。

#### 2. 試料

昭和63年10月31日に現地調査を行い、A、Bの2地点で試料を採取した。第360図に、各地点の土層断面図と分析試料の採取箇所を示す。土層は1～4層に分層された。このうち、3層が古墳時代の氾濫層(F P混か?)、4層が畑状遺構が検出された土層である。試料は、これらの土層について、容量50ccの採土管を用いて採取した。試料数は計8点である。

#### 3. 分析法

プラント・オパールの抽出と定量は、「プラント・オパール定量分析法(藤原, 1976)」をもとに、次の手順で行った。

##### (1) 試料土の絶乾(105°C・24時間), 仮比重測定

試料土約1gを秤量, ガラスビーズ添加(直径約40 $\mu$ m, 約0.02g)

※電子分析天秤により1万分の1gの精度で秤量

##### (3) 電気炉灰化法による脱有機物処理

##### (4) 超音波による分散(150w・26KHz・15分間)

##### (5) 沈底法による微粒子(20 $\mu$ m以下)除去, 乾燥

##### (6) 封入剤(オイキット)中に分散, プレパラート作成

##### (7) 検鏡・計数

同定は、機動細胞珪酸体由来するプラント・オパール(以下、プラント・オパールと略す)をおもな対象とし、400倍の偏光顕微鏡下で行った。計数は、ガラスビーズ個数が300以上になるまで行った。これはほぼプレパラート1枚分の精査に相当する。試料1gあたりのガラスビーズ個数に、計数された

プラント・オパールとガラスビーズ個数の比率をかけて、試料1g中のプラント・オパール個数を求めた。

#### 4. 分析結果

プラント・オパール分析結果を第10表に示す。検出されたプラント・オパールの種類は次のとおりである。イネ科は、イネ, ヨシ属, ウシクサ族(ススキやチガヤなどが含まれる), シバ属の4分類群, タケ亜科は、A1a, B1タイプおよびその他、不明のものは、A, B, C, D, E, Fタイプおよびその他である。(各分類群の顕微鏡写真は紙面の都合で示せなかった。)

#### 5. 考察

畑状遺構が検出された4層では、計5試料について分析を行った。その結果、A地点の4層上部からイネのプラント・オパールが検出された。プラント・オパール密度は700個/gと微量であるが、直上の3層(古墳時代の氾濫層)ではまったく検出されないことから、上層や他所からプラント・オパールが混入した可能性は考えにくい。したがって、同層で稲作が行われていた可能性が考えられるが、その期間ごく短期間であったものと考えられる。

プラント・オパール分析で同定される栽培植物には、イネ以外にも、キビ族(ヒエやアワなどが含まれる)やジュズダマ属(ハトムギが含まれる)などがあるが、これらの分類群は検出されなかった。

なお、イネ科栽培植物の中には未検討のものもあるため、不明としたものの中にも栽培種に由来するものが含まれている可能性が考えられる。不明A, B, Cタイプ(顕微鏡写真参照)は、群馬県や長野県内で発掘された畑状遺構においても多く検出されており、その分布状況などから栽培種の可能性が考えられている。これらの分類群は4層の全試料から検出されたが、直上の3層では全く検出されなかった。したがって、4層の畑状遺構でこれらの分類群が生産されていた可能性が考えられる。これらの分

類群の給元植物の究明については、今後の研究課題としたい。

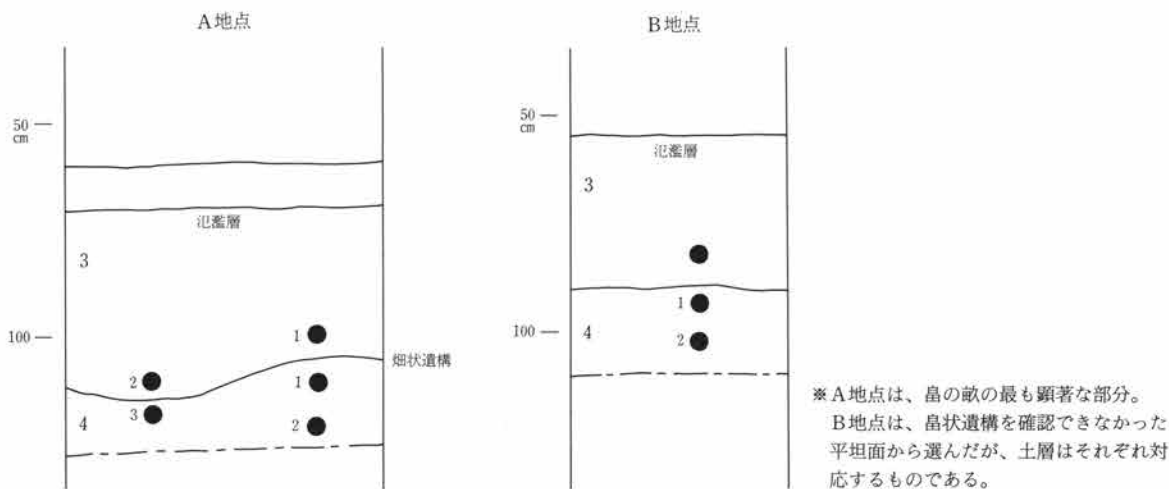
以上のように、同遺構ではイネが栽培されていた可能性が示唆されたが、その比重は小さかったものと推定される。イネ以外にも何らかのイネ科植物が栽培されていた可能性が認められたが、栽培植物種を特定するには至らなかった。なお、プラント・オパール分析で復原できる植生はイネ科植物に限定されるため、根菜類などの畑作物は対象外となっていることに留意されたい。(1989年2月)

参考文献  
 杉山真二・藤原宏志, 1987, 川口市赤山陣屋跡遺跡におけるプラント・オパール分析, 赤山-古環境 編-, 川口市遺跡調査会報告, 第10集, 281-298.  
 藤原宏志, 1976, プラント・オパール分析法の基礎的研究(1) -数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法-, 考古学と自然科学, 9:15-29.  
 藤原宏志, 1979, プラント・オパール分析法の基礎的研究(3) -福岡・板付遺跡(夜白式)水田および群馬・日高遺跡(弥生時代)水田におけるイネ(O.sativa L.)生産総量の推定-, 考古学と自然科学, 12:29-41.  
 藤原宏志・杉山真二, 1984, プラント・オパール分析法の基礎的研究(5)-プラント・オパール分析による水田址の探査-, 考古学と自然科学, 17:73-85.

第10表 プラント・オパール(植物珪酸体)の検出結果

分類群	試料番号								
	A地点					B地点			
	3-1	3-2	4-1	4-2	4-3	3	4-1	4-2	
イネ科									
イネ			7						
ヨシ属			7	13	6				
ウシクサ族	15		49	7	6		12	6	
シバ属					12			6	
タケ亜科									
A1aタイプ(ネザサ節など)	37	14	21	13	6	55	6	12	
B1タイプ(クマザサ属)	30	9	14	13	29	21	17	41	
その他	7		14	20	47	28	6	58	
不明									
Aタイプ(キビ族類似)			14	20	12		23	18	
Bタイプ(くさび型)			14	7	6		24	6	
Cタイプ			7	7	6		6	12	
Dタイプ			7		6		46	17	
Eタイプ		5	21	20	17		6	6	
Fタイプ(棒状珪酸体)	37	5	77	27		28	23	29	
その他	88	42	155	53	41	34	92	41	
プラント・オパール総数	214	75	407	200	194	166	261	252	

(単位:  $\times 10^2$  個/g)



第360図 土層断面図と分析試料の採取箇所

## 2 花粉分析

パリオ・サーヴェイ株式会社

### 1. 試料

試料は、尾島町阿久津宮内遺跡より採取された18点の内、No.1・2・4・5・8・11・14・17の8点を選択した。下記に各々の岩質を示す。

試料番号	岩質
1	灰オリーブ砂質シルト質粘土
2	褐色砂質シルト質粘土
4	〃
5	暗褐色シルト質粘土
8	〃
11	〃
14	〃
17	〃

### 2. 化石の抽出

花粉・孢子化石の抽出は、試料12g（湿重）を秤量し、48%HF処理－重液分離（ZnBr<sub>2</sub>・比重2.15）－アセトリシス処理－10%KOHの順に物理・化学処理を行った。残渣をグリセリンゼリーで封入し、検鏡した。

### 3. 分析結果及び考察

同定においては、プレパラート全域を走査した。

その間に出現したすべての分類群及びその個数を第11表に示した。図表中複数の分類群をハイフオンで結んだものは、分類群間の区別が明確でないものである。T.-C.は、イチイ科－ヒノキ科－イヌガヤ科を示す。

No.1では、マツ・スギ各属・イネ科などが出現したが、全体では68個と少ない。No.2からNo.17へと下部にいくほど花粉が少なく、No.17ではヨモギ属が18個出現したが、No.14では花粉・孢子は検出されなかった。

畑の畝より採取したNo.4・No.5は、ヨモギ属がわずかに検出されただけで、栽培植物を推定するような結果にはならなかった。

畑の堆積物であることから、大半の花粉は微生物及び酸化により分解・消失したものと考えられる。また、同層順試料で種子同定を行っているが、炭化種子が花粉より多く検出されているので参照されたい。花粉の外膜は、風化に対して極めて強靱な物質で形成されているが、酸化条件下では分解されてしまう。一般にローム層及び畑のような風化土壌は、酸化条件下にあるため花粉分析には不向きである。このような状況であることから、古植生などの推定は困難である。

第11表 花粉分析結果

Sample No.	1	2	4	5	8	11	14	17
Pinus subgen. Diploxylon	13	7						
Pinus (Unknown)	3							
Cryptomeria	11							
T.-C.	2							
Betula	1							
Alnus	1							
Quercus subgen. Lepidobalanus	2	1						
Quercus subgen. Cyclobalanopsis		1						
Ulmus - Zelkova	2				1			
Gramineae	15	9						
Chenopodiaceae	3	3						
Caryophyllaceae	1							
Thalictrum		1						
Cruciferae	3	2						
Artemisia	5	1	3	1	2	1		18
Carduoideae	2	1						
Unknown	2							
Pteridophyta	2	3			1			
Arboreal pollen	35	9	0	0	1	0	0	0
Nonarboreal pollen	29	17	3	1	2	1	0	18
Unknown	2	0	0	0	0	0	0	0
Fern spores	2	3	0	0	1	0	0	0
TOTAL	68	29	3	1	4	1	0	18

### 3 種子同定

パリノ・サーヴェイ株式会社

#### 1. 試料

試料は20cm四方深さ5cmの土壌で、No.1~4の4点である。七世紀ごろのものとされる畑の畝の上面より連続して採取されたもので、花粉分析試料No. 4, 5に相当すると思われる。試料は約3kg（湿重）あった。

#### 2. 方法

試料全量を数日間水に浸しておいたのち、手で軽く揉みほぐしながら流水中で篩別、0.5mm以上の残渣を室内で自然乾燥させ、再度篩別、双眼実体鏡下で種実を拾い出し、同定・計数した。同時に検出種実の拡大写真図版（PL-95下段）も作成した。

#### 3. 結果

検出された種実は炭化しており、大半は1mm未満の小粒のものが破片で、2mm以上のものは全く

検出されなかった。また種実以外の植物遺体もほとんど検出されず、細根と炭化材片がわずかに認められただけである。残渣中には褐鉄鉱（高師小僧）が多く認められた。検出された種実個体数を一覧表で示した（第12表）。

耕地、特に畑の土壌は、耕起や土壌生物の活動によって有機物の分解が進み、花粉を含めた植物遺体は残存しないことが多い。検出された種実は炭化していたため、この分解作用を免れたものであろう。これらの種実の炭化した過程は不明であるが、耕地面には生育しないブドウの種子がある。〔ブドウ（欧州種）の栽培は、12世紀末以降とされる〕ことから、他の場所から持ち込まれたものである確率はかなり大きいものとする。したがって、イネの存在は、必ずしもここで稲作（陸稲栽培）が行われていたことを示してはいないと考えている。

第12表 検出種実個体数

種名	試料番号	1	2	3	4
Oryza sativa (イネ)		2	2	2	1
Chenopodium album (アカザ)		5	1	4	4
Vitidaceae sp. (ブドウ科の一種)			1		
その他 (破片)		8	7	3	8
合計		15	11	9	13

(破片も1個にかぞえた)

## 4 樹種同定

藤根 久 (パレオ・ラボ)

### 1. はじめに

安養寺森西遺跡は、新田郡尾島町に所在する奈良・平安時代や中世あるいは近世（19世紀前半）の集落跡などからなる遺跡である。遺跡からは、近世の井戸跡が検出され、この井戸の中から200点前後の木製品が出土している。ここでは、これら木製品の樹種について検討する。

### 2. 樹種の記載と結果

ここで樹種の検討を行った試料は、井戸から出土した木製品187点についてである。これらは、群馬県埋蔵文化財調査事業団において、プレパラートの作成が行われた。樹種の同定は、これら標本を光学顕微鏡下で40～400倍の倍率で観察を行い、現生標本との比較により行う。以下に、標本の記載及び同定の根拠を述べ、第13・14表にその結果を示す。なお、プレパラートは、(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団に保管してある。

マツ属単維管束亜属 *Pinus* subgen. *Haploxyylon*  
マツ科 図版1a～1c.

放射仮道管、垂直および水平樹脂道、これを取り囲むエピセリウム細胞からなる針葉樹で、早材部から晩材部への移行はやや急である（横断面）。分野壁孔は、窓状で放射仮道管の内壁は平滑である（放射断面）。エピセリウム細胞以外は、放射仮道管を含め単列で1～11細胞高である（接線断面）。

以上の形質から、マツ科のマツ属単維管束亜属の材と同定される。マツ属単維管束亜属は、ヒメコマツ (*P. parviflora*) とチョウセンゴヨウ (*P. koraiensis*) がある。いずれも樹高30m、幹径1m前後に達する常緑針葉樹である。

マツ属複維管束亜属 *Pinus* subgen. *Diploxyylon*  
マツ科 図版2a～2c.

放射仮道管、垂直および水平樹脂道、これを取り

囲むエピセリウム細胞からなる針葉樹で、早材部から晩材部への移行は緩やかである（横断面）。分野壁孔は窓状で、放射仮道管の内壁は内側に向かって著しく突出している（放射断面）。エピセリウム細胞以外は、放射仮道管を含め単列で1～9細胞高である（接線断面）。

以上の形質から、マツ科のマツ属複維管束亜属の材と同定される。マツ属複維管束亜属は、本州・四国・九州に生育するアカマツ (*P. densiflora*) と海岸部に生育するクロマツ (*P. thunbergii*) があるが保存が悪いため識別できない。いずれも樹高30m、幹径1m前後に達する常緑針葉樹である。

モミ属 *Abies* マツ科 図版3a～3c.

仮道管および放射柔細胞からなる針葉樹材で、早材部から晩材部への移行は比較的緩やかである。また、早材部仮道管は大きく薄壁で、晩材部仮道管は厚壁で扁平でかつ狭い（横断面）。放射組織は、柔細胞からなり単列で2～30細胞高である（接線断面）。その分野壁孔はトウヒ型で1分野に1～2個存在する。また、放射組織の壁は厚く、じゅず状末端壁を有する（放射断面）。

以上の形質から、マツ科のモミ属の材と同定される。モミ属の樹木には、亜高山帯に分布するシラビソ (*A. veichii*) やオオシラビソ (*A. mariesii*)、暖帯から温帯にかけて分布するモミ (*A. firma*) などがある。いずれも樹高30m、幹径1mに達する常緑針葉樹である。

トウヒ属 *Picea* マツ科 図版4a～4c、5a～5c.

放射仮道管、垂直および水平樹脂道、これを取り囲むエピセリウム細胞からなる針葉樹で、早材部から晩材部への移行は緩やかである（横断面）。エピセリウム細胞以外は、放射仮道管を含め単列で2～20細胞高である（接線断面）。その分野壁孔は、トウヒ型で1分野に2～3個見られる（放射断面）。

以上の形質から、マツ科のトウヒ属の材と同定される。トウヒ属の樹木には、エゾマツ (*P. jezoensis*)

is) やその変種のトウヒ (*P.jezoensis* var. *hondeensis*) などがある。亜高山帯を中心に分布する樹高30mに達する常緑針葉樹である。

スギ *Cryptomeria japonica* (Linn. fil.) D. Don  
スギ科 図版6a~6c.

仮道管、樹脂細胞および放射柔細胞からなる針葉樹材で、早材部から晩材部への移行は緩やかである(横断面)。分野壁孔は、水平方向に長軸をもった典型的なスギ型で、1分野に2個見られる(放射断面)。放射組織は、柔細胞からなり、単列で2~16細胞高からなる(接線断面)。

以上の形質から、スギ科スギ属のスギの材と同定される。スギは東北から九州にかけて温帯から暖帯にかけて分布する常緑針葉樹である。

ヒノキ属 *Chamaecyparis* ヒノキ科 図版7a~7c  
仮道管、樹脂細胞および放射柔細胞からなる針葉樹材で、早材部から晩材部への移行は緩やかである(横断面)。分野壁孔は、ヒノキ型で、1分野に2~3個見られる(放射断面)。放射組織は、柔細胞からなり、2~9細胞高である(接線断面)。

以上の形質から、ヒノキ科のヒノキ属の材と同定される。ヒノキ属の樹木には、ヒノキ (*C. Obtusa*) とサワラ (*C. pisifera*) があり、ヒノキは本州、四国、九州の温帯に分布する樹高40m、幹径2mに達する常緑針葉樹で、サワラは、本州、九州の温帯に分布する樹高30m、幹径1mに達する常緑針葉樹である。

アスナロ *Thujopsis dolabrata* Sieb. et Zucc.  
ヒノキ科 図版8a~8c.

仮道管、樹脂細胞および放射柔細胞からなる針葉樹材で、早材部から晩材部への移行はやや緩やかで、樹脂細胞は晩材部に遍在する(横断面)。分野壁孔は、ヒノキ型あるいはトウヒ型で1分野に2~5個見られる(放射断面)。放射組織は、柔細胞からなり、1~8細胞高である(接線断面)。

以上の形質から、ヒノキ科アスナロ属のアスナロ

の材と同定される。アスナロは温帯を中心に分布する樹高30m、幹径80cmに達する常緑針葉樹である。

ネズコ *Thuja standishii* (Gord.) Carr.

ヒノキ科 図版9a~9c.

仮道管、樹脂細胞および放射柔細胞からなる針葉樹材で、早材部から晩材部への移行は緩やかで、柔細胞は年輪と平行して散在する(横断面)。分野壁孔は、小型のスギ型で1分野に2~6個見られる(放射断面)。放射組織は、柔細胞からなり、1~12細胞高である(接線断面)。

以上の形質から、ヒノキ科ネズコ属のネズコの材と同定される。ネズコは、温帯に分布する樹高30m、幹径1mの常緑針葉樹である。

ヤナギ属 *Salix* ヤナギ科 図版10a~10c.

中型の管孔が単独あるいは放射方向に2~3個複合して散在する散孔材である(横断面)。道管のせん孔は単一である。道管と放射組織との壁孔は、蜂巢状を呈している(放射断面)。放射組織は異性単列、3~13細胞高である。また、末端細胞は長く伸び平伏細胞からなる(接線断面)。

以上の形質から、ヤナギ科のヤナギ属の材と同定される。ヤナギ属の樹木には、日本において約40種程度あり、高木から低木までその大きさはさまざまである。ヤナギ属の樹木は、陽光の水湿地に生育する落葉広葉樹である。

ブナ属 *Fagus* ブナ科 図版11a~11c.

丸い小型の管孔がややまばらに散在する散孔材である(横断面)。道管のせん孔は単一あるいは数本の横棒からなる階段状である(放射断面)。放射組織は同性で、細胞幅の広い複合放射組織からなる(接線断面)。

以上の形質から、ブナ科のブナ属の材と同定される。日本に分布するブナ属の樹木には、温帯に生育するブナ (*F. crenata*) と中間温帯に分布するイヌブナ (*F. japonica*) の2種類があるが、材組織から

は識別できない。いずれも樹高25mに達する落葉広葉樹である。

クリ *Castanea crenata* Sieb. et Zucc.

ブナ科 図版12a~12c.

年輪のはじめに大型の管孔が1~3列並び、そこから徐々に径を減じた小管孔が火炎状に配列する環孔材である(横断面)。道管のせん孔は単一である(放射断面)。放射組織は、単列同性であり、時に2細胞幅で、2~21細胞高である(接線断面)。

以上の形質から、ブナ科クリ属のクリの材と同定される。クリは全国の暖帯から温帯にかけて分布する樹高20m、幹径1mに達する落葉広葉樹である。

ニレ属 *Ulmus* ニレ科 図版13a~13c.

年輪のはじめに大型の管孔が数個配列し、晩材部では小型の管孔が径を減じて斜めに配列する環孔材である(横断面)。道管のせん孔は単一である(接線断面)。放射組織は、異性4~6細胞幅、10~25細胞高である(接線断面)。

以上の形質から、ニレ科のニレ属の材と同定される。ニレ属の樹木には、中部地方以西の荒地などに生える樹高15m、幹径60cmに達するアキニレ(*U. parvifolia*)、北海道から九州にかけての平野部や山麓部で普通に生える樹高30m、幹径1mに達するハルニレ(*U. davidiana* Planch. var. *japonica*)や北海道に特に多く見られる樹高25m、幹径1mに達するオヒョウ(*U. laciniata*)がある。いずれも落葉広葉樹である。

ケヤキ *Zelkova serrata* (Thunb.) Makino

ニレ科 図版14a~14c.

年輪のはじめに大型の管孔が単独ないし2列に並び、早材部では小管孔が2~8程度集合して接線方向ないしはやや斜めに配列する環孔材である(横断面)。道管のせん孔は単一で、小管孔の内壁にはらせん肥厚が明瞭に認められる(放射断面)。放射組織は、異性1~6細胞幅、2~70細胞高からなり、大型の結

晶細胞が見られる(接線断面)。

以上の形質から、ニレ科のケヤキの材と同定される。ケヤキは暖帯から温帯にかけて分布する樹高35m、幹径2mに達する落葉広葉樹である。

エノキ属 *Celtis* ニレ科 図版15a~15c.

年輪のはじめに大型の管孔が1~2列並び、そこから径を減じた小管孔が早材部では多数集合して斜め方向に配列する環孔材である(横断面)。道管のせん孔は単一で、小管孔の内壁にはらせん肥厚が見られる(放射断面)。放射組織は、異性1~8細胞幅、3~5細胞高で、韌細胞をもつ(接線断面)。

以上の形質から、ニレ科のエノキ属の材と同定される。エノキ属の樹木には、本州以南の暖帯から亜熱帯に分布するエノキ(*C. sinensis*)や、温帯に分布するエゾエノキ(*C. jessoensis*)などがある。エノキは樹高20m、幹径1mに達する落葉広葉樹である。

ヤマグワ *Morus bombycis* Koidz.

クワ科 図版16a~16c.

年輪のはじめに大型の管孔が数列並び、そこから径を減じた小管孔が早材部で接線方向に数個複合して散在する環孔材である(横断面)。道管のせん孔は単一で、小管孔の内壁にはらせん肥厚が見られる(放射断面)。放射組織は、異性1~4細胞幅、2~29細胞高である(接線断面)。

以上の形質から、クワ科クワ属のヤマグワの材と同定される。ヤマグワは、温帯から亜熱帯にかけ広く分布する樹高12m、幹径60cmの落葉広葉樹である。

モモ *Prunus persica* Batsch

バラ科 図版17a~17c.

年輪のはじめにやや大型の管孔が1~3列ほど並び、そこから径を減じた小管孔が2~4個放射方向あるいはやや斜めに複合して散在する環孔性散孔材である(横断面)。道管のせん孔は単一で、その内壁には明瞭ならせん肥厚が認められる(接線・放射断面)。放射組織は異性で1~4細胞幅、4~33細胞高である



(接線断面)。

以上の形質から、バラ科サクラ属のモモの材と同定される。モモは中国北部原産であるが、日本には有史以前に渡来し、鑑賞用あるいは果樹として栽培され、一部野生状態で生えている。本種が日本に自生するという考えもある。

サクラ属 *Prunus* バラ科 図版18a~18c.

年輪のはじめにやや小型の管孔が並び、数個放射方向に複合して散在する散孔材である。道管は外側に向かって減少する傾向がみられる(横断面)。道管のせん孔は単一で、その内壁にはらせん肥厚がある。道管の内部にはガム状物質が詰まっている(放射断面)。放射組織は、異性で1~3細胞幅、2~27細胞高である(接線断面)。

以上の形質から、バラ科のサクラ属の材と同定される。サクラ属の樹木には、暖帯から亜熱帯にかけて分布する樹高25mに達するヤマザクラ (*P. jamasakura*) など数種類ある。

コクサギ *Orixa japonica* Thunb.

ミカン科 図版19a~19c.

小型の管孔が集合して雲紋状を呈する散孔材である(横断面)。道管のせん孔は単一で、かすかにらせん肥厚が認められる(放射断面)。放射組織は、異性1~2細胞幅、2~11細胞高である(接線断面)。

以上の形質から、ミカン科のコクサギの材と同定される。コクサギは本州以南の暖帯から温帯にかけて分布する落葉広葉樹(低木)である。

ウルシ科 図版20a~20c.

年輪のはじめに大型の管孔が1~2程度並び、晩材部では小型の管孔が単独または2~4個程度放射方向あるいは塊状に散在する環孔材である(横断面)。道管のせん孔は単一で、内壁にはらせん肥厚が見られる(放射断面)。放射組織は、異性1~2胞幅、3~36細胞高である(接線断面)。

以上の形質から、ウルシ科のヌルデの材と同定さ

れる。ヌルデは、温帯から亜熱帯にかけて分布する樹高7mに達する落葉広葉樹である。

トチノキ *Aesculus turbinata* Blume.

トチノキ科 図版21a~21c.

小型の管孔が単独または2~4個程度放射方向に複合し、やや密に散在する散孔材である(横断面)。道管のせん孔は、単一である。内壁にはらせん肥厚が見られる(放射断面)。放射組織は、同性単列まれに1~2細胞幅で4~13細胞高である。また、この樹種を最も特徴づけるリップルマーク(規則的な層階状配列)を示している(接線断面)。

以上の形質から、トチノキ科トチノキ属のトチノキと同定される。トチノキの樹木は、樹高30m、幹径2mに達する北海道から九州まで分布する落葉広葉樹である。

### 3. 考察

安養寺森西遺跡の近世井戸から出土する木製品187点は、20分類群の樹木が確認された。第14表には各木製品別の樹種を示す。

木製品別の樹種は、井戸枿材としてクリが最も多く、次いでアスナロ、ヌルデ、エノキ属、モモ、モミ属、ヤマグワ、サクラ属である。また、井戸枿材?においてもほぼ同様の樹種構成からなり、クリが最も多い。井戸枿材としてはクリ材を中心として比較的数々の樹種を利用していることが分かる。

板材あるいは板状材においても針葉樹が多く利用され、スギやモミ属が多く、他にマツ属単維管束亜属、アカマツなどのマツ属複維管束亜属、ヒノキ属、クリ、コクサギ、トチノキからなる。このうち、板材としてトチノキの材は珍しい。

桶側板類や底板類においても針葉樹が多く、スギ、ヒノキ属をはじめ、モミ属、トウヒ属あるいは広葉樹のクリからなる。

白や漆碗では、ブナ林の樹木であるブナ属やトチノキからなり、木地屋によって作られたものである。また、護符はいずれもヤナギ属の樹木により作られている。

第13表 木製品の樹種

No.	樹種	出土位置	器種
1	ネズコ	OT-12井戸 2	曲物底板
2	ケヤキ	OT-12井戸 3	曲物底板
3	ケヤキ	OT-12井戸 4	曲物底板
4	スギ	OT-12井戸 1	曲物側板
5	エノキ属	OT-13井戸 5	角柱状品
6	クリ	OT-13井戸 3	角柱状品
7	クリ	OT-13井戸 7	角柱状品
8	クリ	OT-13井戸 4	井戸枠
9	エノキ属	OT-13井戸 6	角柱状品
10	ヌルデ	OT-13井戸 2	井戸枠
11	ヌルデ	OT-13井戸 1	井戸枠
12	クリ	AY-7井戸 70	杭状品
13	クリ	AY-7井戸 84	不明
14	モミ属	AY-7井戸 10	底板
15	モミ属	AY-7井戸 95	板状品
16	モミ属	AY-7井戸 121	棒状品
17	モミ属	AY-7井戸 114	杭材か
18	モミ属	AY-7井戸 35	板状品
19	モミ属	AY-7井戸 23	板状品
20	モミ属	AY-7井戸 41	板状品
21	モミ属	AY-7井戸 32	板状品
22	クリ	AY-7井戸 76	杭状品
23	クリ	AY-7井戸 143	井戸枠
24	サクラ属?	AY-7井戸 159	杭材か
25	ヤマグワ	AY-7井戸 93	井戸材
26	ヌルデ	AY-7井戸 53	井戸枠
27	クリ	AY-7井戸 57	井戸枠
28	クリ	AY-7井戸 80	杭状品
29	サクラ属	AY-7井戸 156	井戸枠
30	ヌルデ	AY-7井戸 101	杭材か
31	ヒノキ属?	AY-7井戸 109	不明
32	ヤマグワ	AY-7井戸 100	杭材か
33	モモ	AY-7井戸 136	井戸枠
34	クリ	AY-7井戸 55	井戸枠
35	モモ	AY-7井戸 58	井戸枠
36	クリ	AY-7井戸 47	井戸枠
37	クリ	AY-7井戸 113	杭材
38	モミ属	AY-7井戸 65	角柱状品
39	サクラ属	AY-7井戸 96	杭状品
40	モミ属	AY-7井戸 34	板状品
41	モミ属	AY-7井戸 40	板状品
42	モミ属	AY-7井戸 26	板状品
43	モミ属	AY-7井戸 62	板材
44	モミ属	AY-7井戸 88	板材
45	クリ	AY-7井戸 25	板状品
46	クリ	AY-7井戸 119	杭材か
47	モミ属	AY-7井戸 115	板状品か
48	モミ属	AY-7井戸 130	井戸枠か
49	クリ	AY-7井戸 141	井戸枠
50	クリ	AY-7井戸 43	井戸枠
51	クリ	AY-7井戸 61	枠材か
52	エノキ属	AY-7井戸 148	井戸枠か
53	クリ	AY-7井戸 155	井戸枠
54	クリ	AY-7井戸 74	杭状品
55	クリ	AY-7井戸 83	杭状品
56	クリ	AY-7井戸 77	杭状品
57	クリ	AY-7井戸 97	杭状品
58	クリ	AY-7井戸 103	杭材か
59	サクラ属	AY-7井戸 71	角柱状品

No.	樹種	出土位置	器種
60	クリ	AY-7井戸 94	杭状品
61	ネズコ	AY-7井戸 132	曲物側板
62	スギ	AY-9井戸 55	栓
63	クリ	AY-9井戸 56	有孔細棒状品
64	トチノキ	OT-11井戸 1	臼
65	トチノキ	OT-11井戸 2	臼
66	ヒノキ属	AY-	曲物側板
67	エノキ属	AY-7井戸 161	井戸枠
68	クリ	AY-7井戸 48	井戸枠
69	クリ	AY-7井戸 54	井戸枠
70	エノキ属	AY-7井戸 44	井戸枠
71	エノキ属	AY-7井戸 59	井戸枠
72	クリ	AY-7井戸 45	井戸枠
73	ケヤキ	AY-7井戸 67	角柱状品
74	ニレ属	AY-7井戸 72	杭状品
75	エノキ属	AY-7井戸 56	井戸枠
76	クリ	AY-7井戸 60	井戸枠
77	ヌルデ	AY-7井戸 152	井戸枠
78	ヌルデ	AY-7井戸 140	井戸枠
79	ヌルデ	AY-7井戸 102	杭材か
80	ヌルデ	AY-7井戸 105	杭材か
81	クリ	AY-7井戸 160	不明
82	クリ	AY-7井戸 92	杭状品
83	エノキ属	AY-7井戸 52	井戸枠
84	ニレ属	AY-7井戸 49	井戸枠
85	クリ	AY-7井戸 75	板状品
86	クリ	AY-7井戸 46	井戸枠
87	エノキ属	AY-7井戸 64	角柱状品
88	クリ	AY-7井戸 78	板状品
89	ニレ属	AY-7井戸 124	杭状品か
90	クリ	AY-7井戸 50	井戸枠
91	クリ	AY-7井戸 51	井戸枠
92	クリ	AY-7井戸 85	板材か
93	クリ	AY-7井戸 104	杭材か
94	クリ	AY-7井戸 117	杭材か
95	トチノキ	AY-7井戸 24	厚板
96	トチノキ	AY-7井戸 131	不明
97	クリ	AY-7井戸 122	不明
98	スギ	AY-7井戸 42	板状品
99	スギ?	AY-7井戸 39	板状品
100	マツ属単維管束亜属	AY-7井戸 29	板状品
101	スギ	AY-7井戸 120	棒状品
102	スギ	AY-7井戸 8	底板
103	スギ	AY-7井戸 129	井戸枠か
104	スギ	AY-7井戸 27	板状品
105	スギ	AY-7井戸 28	板状品
106	スギ	AY-7井戸 133	板状品
107	スギ	AY-7井戸 33	板状品
108	クリ	AY-7井戸 73	杭状品
109	スギ	AY-7井戸 31	板状品
110	スギ	AY-7井戸 15	桶側板
111	スギ	AY-7井戸 16	桶側板
112	スギ	AY-7井戸 30	板状品
113	スギ		板状品
114	スギ	AY-7井戸 68	板状品
115	スギ	AY-7井戸 63	板材
116	クリ	AY-7井戸 91	不明
117	スギ	AY-7井戸 37	板状品
118	スギ	AY-7井戸 38	板状品

No.	樹種	出土位置	器種
119	トウヒ属	AY-7井戸 5	底板
120	ヒノキ属	AY-7井戸 9	底板
121	ヒノキ属	AY-7井戸 1	底板
122	モミ属	AY-7井戸 6	底板
123	モミ属	AY-7井戸 3	底板
124	ヒノキ属?	AY-7井戸 7	底板
125	スギ	AY-7井戸 20	桶側板
126	スギ	AY-7井戸 21	不明
127	ヒノキ属?	AY-7井戸 2	曲物底板
128	スギ	AY-7井戸 4	曲物底板
129	スギ	AY-7井戸 107	端材
130	ヒノキ属	AY-7井戸 111	不明
131	スギ	AY-7井戸 17	桶側板
132	スギ	AY-7井戸 13	桶側板
133	トウヒ属	AY-7井戸 18	桶側板
134	ヒノキ属	AY-7井戸 22	不明
135	スギ	AY-7井戸 11	桶側板
136	スギ	AY-7井戸 12	桶側板
137	クリ	AY-7井戸 66	板状品
138	スギ	AY-7井戸 110	端材
139	マツ属複雑管束亜属	AY-7井戸 125	板状品か
140	スギ	AY-7井戸 108	板状品か
141	ヒノキ属	AY-7井戸 14	桶側板
142	スギ	AY-7井戸 81	角柱状品
143	ヒノキ属	AY-7井戸 106	端材
144	スギ	AY-7井戸 89	板材
145	クリ	AY-7井戸 112	不明
146	コクサギ	AY-7井戸 87	不明
147	スギ	AY-7井戸 99	不明
148	スギ?	AY-7井戸 19	側板か
149	スギ	AY-7井戸 116	板状品か
150	アスナロ	AY-7井戸 153	井戸枠
151	アスナロ	AY-7井戸 154	井戸枠
152	アスナロ	AY-7井戸 126	井戸枠

No.	樹種	出土位置	器種
153	アスナロ	AY-7井戸 127	井戸枠
154	モミ属	AY-7井戸 128	井戸枠
155	クリ?	AY-7井戸 135	井戸枠
156	クリ	AY-7井戸 142	井戸枠か
157	クリ	AY-7井戸 139	井戸枠
158	クリ	AY-7井戸 137	井戸枠
159	クリ	AY-7井戸 149	井戸枠
160	クリ	AY-7井戸 145	井戸枠
161	クリ	AY-7井戸 158	不明
162	アスナロ	AY-7井戸 150	井戸枠
163	アスナロ	AY-7井戸 151	井戸枠
164	アスナロ?	AY-7井戸 144	井戸枠
165	アスナロ	AY-7井戸 147	井戸枠
166	アスナロ	AY-7井戸 157	井戸枠
167	アスナロ	AY-7井戸 134	井戸枠
168	クリ	AY-7井戸 82	井戸枠か
169	ヌルデ	AY-7井戸 79	不明
170	ヌルデ	AY-7井戸 86	不明
171	アスナロ?	AY-7井戸 36	板状品
172	クリ	AY-7井戸 123	井戸枠か
173	クリ	AY-7井戸 98	杭状品
174	クリ	AY-7井戸 118	井戸枠
175	モミ属	AY-7井戸 69	板状品
176	ヒノキ属?	AY-	曲物側板
177	トチノキ	AY-11井戸 16	蓋か
178	ブナ属	AY-11井戸 18	椀
179	ブナ属	AY-11井戸 19	椀
180	ブナ属	AY-11井戸 17	椀
195	ヤナギ属	AY-9井戸	護符
196	ヤナギ属	AY-9井戸	護符
197	ヤナギ属	AY-9井戸	護符
198	ヤナギ属	AY-9井戸	護符
199	ヤナギ属	AY-9井戸	護符
200	ヤナギ属	AY-9井戸	護符

第14表 木製品別の樹種

	井戸枠	杭状品	板状品	底板類	桶側板	曲物側板	曲物底板	漆椀	護符	角柱状品	その他	不明	合計
マツ属単維管束亜属			1										1
マツ属複雑維管束亜属			1										1
モミ属	2	1	12	3						1	1		20
トウヒ属				1	1								2
スギ	1		16	1	7	1	1			1	5	2	35
ヒノキ属				3	1	2	1				1	3	11
アスナロ	10		1										11
ネズコ						1	1						2
ヤナギ属									6				6
ブナ属								3					3
クリ	25	16	5							2	1	6	55
ニレ属	1	2											3
ケヤキ							2			1			3
エノキ属	6									3			9
ヤマグワ	1	1											2
モモ	2												2
サクラ属	1	2								1			4
コクサギ												1	1
ヌルデ	5	3										2	10
トチノキ											4	1	5
合計	54	25	36	8	9	4	5	3	6	9	12	15	186

## 5 人骨・獣骨

(群馬県立大間々高等学校 宮崎重雄)

### 火葬土坑出土の人骨

#### OT-4号

最大片27.4 8.7mmの体肢骨片、頭蓋片など多数の焼骨が存在。その中に、上肢第5指末骨(最大長14.1mm, 近位左右径5.3mm, 近位上下径4.7mm)、上肢末節骨(最大長10.0+mm, 近位左右5.6mm, 近位上下径4.9mm)、他に肢骨片4片がある。成人で、女性の可能性が考えられる。

#### OT-5号

最大片55.9 11.2mmの上腕骨を含む体肢骨片、頭蓋片など多数の焼骨が存在。その中に中節骨があり、一つは下肢の第3指~5指と想定される最大長13.7mm, 遠位関節面最大幅6.9mmの中節骨、もう一つは上肢と推定される最大長の24.0+mm, 遠位関節面最大幅9.2mmの中節骨である。

切歯の歯根があり、根尖部は完全に閉鎖している。犬歯または少臼歯の歯根もあり、これも根尖部は完全に閉鎖している。咬耗面は強く傾斜している。近遠心径4.8mm, 歯根長10.2mmである。成人で、性別不明である。

#### OT-6号

出土骨は焼骨で、ほぼ全身に渡っている。

脳頭蓋片は16片で、最大片は34.9mm 28.6mmである。下顎骨片は6片あり、歯槽の付いているものもある。うち一つは右下顎関節頭で、幅13.7+mm, 前後7.4mmで、成人のものである。切歯縫合は消失している。横口蓋縫合は外側部が消失し、50才前後と推定される。上顎臼歯の歯根も存在し、根尖部は完全に閉鎖している。肋骨片は5片あり、最大片は39.2mm 13.5mmある。

#### OT-1号

焼骨で、最大片は15.8mm 11.9mmである。黒色の炭化材多数含む。

年齢・性別などは不明である。

### 墓坑出土の人骨

#### OT-1号墓墳

平面は長軸100cm、短軸60cmの隅丸長方形で、長軸は南北方向にある。深さは10cmに満たない。人骨は西向きの横臥屈葬姿勢で埋存し、上肢は屈曲し、掌は顔面前部にある。

脳頭蓋全長が184,0mmもあるが、ナジオンブレグマ高141,8mm、脳頭蓋全長142,0mmは低い。

頭蓋骨は大きく、眉弓の隆起は顕著で、前額部は広報に傾斜し、上項線・外後頭隆起・乳様突起は良く発達している。頬骨弓は太くて大きく、下顎角の発達もよい。

咬合型はごく弱い鋏状咬合で、左上顎中切歯では切縁遠心半から遠心辺縁隆線にかけてごく細く象牙質が線状に露出している。観察される歯で見る限り、齶歯は存在しない。

左上顎第1大臼歯では4つの咬頭とも点状の象牙質が露出し、同第2大臼歯はエナメル質のみ咬耗されている。第3大臼歯の咬耗度は不明である。

脳頭蓋の外板では、冠状縫合・ラムダ縫合とも癒合を全くしていないか、癒合していたとしてもごく僅かである。

青年期後半から、壮年期前半の男性と推定される。

#### AY-1号墓墳

平面は長軸100cm、短軸68cmの不整形で深さ約25cm、軸方向は北西方向に大きく振れている。

発掘時には頸骨も発見された。現在は8本ほどの歯のみが観察可能である。上顎中切歯は切縁から近心辺縁隆線まで象牙質が露出している。弱い鋏状咬合をしていたと思われる。この中切歯の舌面窩はきわめて浅く、遠心歯頸部には歯垢がわずかに付着している。

齶歯は3本で、左上顎中切歯の近心歯頸部に歯髓腔には至らない齶蝕、右上顎犬歯と左上顎大臼歯近心歯頸部付近に歯髓腔に達する齶蝕がある。

左上顎第1大臼歯は咬耗面のほぼ全面に象牙質が露出し、左上顎犬歯では尖頭部を中心に象牙質が大

大きく露出している。年齢は壮年期から熟年期と思われる、性別は不明である。

#### A Y-4号墓壙

平面は長軸120cm、短軸70cmの隅丸長方形で、軸方向は南北、深さ約10cmである。人骨は剖出作業が未了で、観察される範囲は限定される。

大腿骨は栄養孔及び中央における骨体横径が28,8mm、27,5mm、栄養孔及び中央における骨体矢状径が24,5mm、27,0mmである。頸骨は栄養孔及び中央における骨体横径が20,9mm、19,6mm、栄養孔及び中央における骨体矢状径が34,5mm、26,6mmで、栄養孔における頸指数は60,6で扁平頸骨である。

頭頂部は平坦で、外後頭隆起はわりと顕著であるが、乳様突起、頸骨突起の発達はあまり良くない。

左下顎切歯は切縁に象牙質が帯状に露出し、咬耗面が水平に近く、鉗子状咬合であったことを伺わせる。

左下顎第1大臼歯は欠損し、歯槽縁が大きく凹湾している。おそらく、齶蝕により脱落したのであろう。左右の上顎第2大臼歯、第3大臼歯、右下顎第3大臼歯も欠損している。齶蝕または歯周病により脱落したのであろう。

右下顎中切歯、側切歯の唇側には歯石の付着が著しく、切歯付近の歯槽骨の吸収が進んでいて、歯槽縁の陥凹が起こっている。

上顎第1大臼歯では咬耗面のほぼ全面に、下顎第2大臼歯では帯状に、同第3大臼歯では点状に象牙質が露出している。

おそらく、壮年期後半から熟年期の女性の個体であろう。

#### A Y-7号墓壙

平面は長軸94cm、短軸64cmの楕円形で、長軸は南北方向にある。深さは約10cmほどである。人骨は西向きの横臥屈葬姿勢で埋存し、胸部には長径30cmの楕円形の礫が載せてある。

右大腿骨は中央径が26,0mm、同矢状径が20,8mmで、骨体中央断面指数は0,8である。

頭頂部が高く、外後頭隆起・頬骨弓の発達も良好で、眼窩も比較的大きい。

観察可能な歯で見る限り、齶歯は存在しない。上顎小臼歯には歯石の付着が目立つ。

咬合型は弱い鋏状咬合である。

右上顎第1大臼歯には点状の象牙質の露出があり、同第2大臼歯にはそれより小さな象牙質の露出がある。一方、右の上顎第2大臼歯の咬耗はエナメル質のみで、咬耗は象牙質に及んでいない。上顎、下顎とも第3大臼歯の萌出はない。

青年期の男性の個体と思われる。

#### A Y-5号墓壙

平面は長軸184cm、短軸48cm、深さ約10cmの隅丸長方形で、中央軸は南北方向にある。埋葬姿勢は不詳である。

頭蓋骨が残存しているが、保存状態はきわめて不良で、形態的な特徴はわからない。体幹、体肢骨も痕跡的にその存在が認められる。

検出された2本の歯は1片が下顎第3大臼歯と推定されるもので、咬耗が咬合面のほぼ全面におよび、エナメル質だけが咬耗されている。歯頸部は線状に齶蝕されている。もう1片の歯は大臼歯のように見受けられるが、歯種は不明である。壮年期の個体であろう。

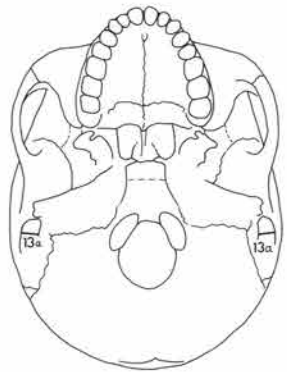
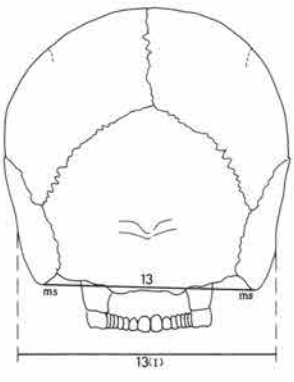
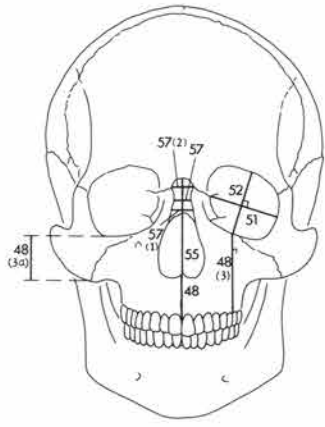
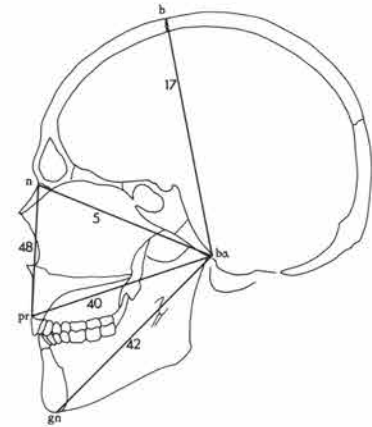
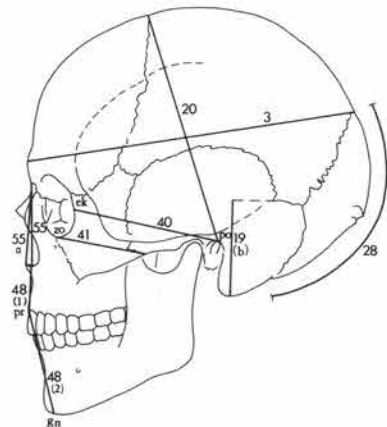
#### O T-2号墓壙

長軸100cm、短軸60cmの隅丸四角形で、南北方向に長軸を持つ。深さは10cmに満たない。人骨は西向きの横臥 屈葬姿勢で埋存し、体幹部はやや上向きになっている。左上肢は東側にあつて、体軸に沿って下方に伸び、右上肢は西側にあつて顔面前部で屈曲している。 脳頭蓋最大長がおおよそ170mmであり、頭蓋底長・ナジオン・プレグマ高・耳プレグマ高はそれぞれ102,7mm、143,0mm、131,0mmである。

観察できる8本の歯のうち5本が齶歯になっている。そのうち歯髓腔に達しているのが右上顎第1小臼歯と左上顎第1大臼歯の2本である。

安養寺遺跡頭蓋計測値

計測番号	計測部位	AY-7	OT-2	AY-4	OT-1
1	脳頭蓋最大長		170.0e	165.0e	184.0
2	グラベラ・イニオン長				182.0
3	グラベラ・ラムダ長				174.3
5	頭蓋底長	102.0e	102.7e		107.4e
13	乳様突起間幅	93.7			
13a	乳様突起幅	9.2	15.5	11.0	
13(1)	乳突部最大幅	119.4			
17	ナジオン・プレグマ高		143.0e	152.0	141.8
18	脳頭蓋全高				142.0
19b	乳突域最大高	27.3	21.7	21.7	
20	耳・プレグマ高		131.0	121.0	110.0
40	顔長	120.0e		132.0e	113.0e
41	側顔長	73.6		70.0	
41c	最大頬骨長			41.4	
42	下顔長	134.0 e		138.0e	108.0e
47	顔高	108.1		107.7	113.5
48	上顔高	55.7		61.8	58.3
48b	スプラオルビタレ・プロステイオン高				73.6
48c	ナジオン・切歯高				70.2
48(1)	歯槽部高	18.9		20.1e	
48(2)	下顔高	50.0e		55.4	59.8
48(3)	上顎骨最小高	38.4		43.2	42.0
48(3a)	頬骨区域高	21.8		21.7	
48(4)	頬骨高				22.5
51	眼窩幅	35.8		36.0	
52	眼窩高	33.9		31.7	
54	鼻幅			19.6	
55	鼻高	49.8		48.9	
55(a)	鼻全高	47.4		46.0	
57	鼻骨最小幅	6.5		6.4	
57(1)	鼻骨最大幅			9.0	
57(2)	鼻骨上幅	6.6			
65	下顎関節突起幅	110.0e			116.0e
66	下顎角幅	89.8			95.0
67	前下顎幅	44.8			49.2
68	下顎長	84.0		87.0	
69	オトガイ高	29.4		31.5	31.4
69(1)	下顎体高	30.3		29.8	28.7
69(2)	下顎体高(M2)	24.5			23.7
70	下顎枝高			49.0+	
70(2)	最小枝高	42.4			
71	下顎枝幅	35.8		35.1	34.1
80(1)	歯列弓幅				57.7
80(2)	白歯列長				41.8
80(3)	大白歯列長				29.1



ごく弱い鋏状咬合である。

左上顎第1大臼歯では咬合面のほぼ全面に象牙質が露出し、壮年期後半から熟年期の個体を示唆している。

犬歯や第1大臼歯などの歯の大きさは女性を思わせる。

参考・引用文献

馬場悠男(1981)「人骨計測法」『江藤盛治 人類学講座-別巻1』。雄山閣、東京。

Brothwell.D.R.(1981)『Digging up bones』  
British Museum of Natural History ,London.

藤田恒太郎(1949)「歯の計測基準について」  
人類学雑誌、61：27-32。

植原和郎・小泉清隆(1979)「歯冠近遠心径に基づく性別の判定-判別関数法による」。人類学雑誌 87：445-456。

河西秀智(1969)「日本人における智歯の統計的観察」(智歯の出現、発育、萌出の時期と頻度について) 口腔病理学雑誌、26：463-478。

上条雍彦(1994)『日本人永久歯解剖学』。アナトーム社、東京。

片山一道(1990)『古人骨は語る-骨考古学ことはじめ』。同朋社、東京。

北村宗一(1942)「歯牙萌出の時期及び順序に関する研究」。歯科学報、47：274-287、352-368。

森本岩太郎(1981)「日本古人骨の形態学的変異-扁平顎骨と蹲踞面」『小片 保編・人類学講座-日本人』。雄山閣、東京。

第15表 土抗出土人骨一覧

AY-4号墓坑

歯種	近遠心径	歯冠長	齶歯	歯石	咬耗部位・咬耗度	咬合型	備考
上顎切歯	右 2	6.5	8.0	なし		鉗子咬合	
	右 1	6.6	9.8	なし		鉗子咬合	
	左 1	4.8	7.1	なし	顕著	切縁に帯状に象牙露出。咬耗面は水平に近い。	歯槽の吸収が進み、歯槽縁の吸収が起こっている。
	左 2	8.8	7.2	なし	顕著	切縁に帯状に象牙露出。咬耗面は水平に近い。	歯槽の吸収が進み、歯槽縁の吸収が起こっている。

歯種	近遠心径	唇舌径	歯冠長	齶歯	歯石	咬耗部位・咬耗度
上顎犬歯	左	7.3	?	7.8		
下顎犬歯	右	6.8	?	8.7		
	左	6.9	?	8.6		
上顎小臼歯	右 2	6.4		8.1		
	左 1	6.7		7.0		
下顎小臼歯	左 1	7.1		7.2		
	2	6.9	7.9	5.1		
上顎大臼歯	左 1	9.2		5.3		5
下顎大臼歯	左 2	10.0		4.7		4+
	3	9.0		4.2		3-

AY-7号墓坑

歯種	近遠心径	唇舌径	歯冠長	エナメル形成不全症?	齶歯	歯石	咬耗部位・咬耗度	咬合型
上顎切歯	右 2	8.6	11.6		なし		切縁に線状の象牙質の露出あり。	弱鋏状咬合
	1	7.6	8.0				切縁に線状の象牙質の露出あり。	
上顎犬歯	右	7.8	10.4					
下顎犬歯	右	6.3	6.0					
上顎小臼歯	右 2	7.0	8.0	顕著		目立つ		
	1	6.3	6.0	顕著		目立つ		
上顎大臼歯	右 2	9.5	6.8				3+	
	1	9.3	6.7				3-	

AY-1号基坑

歯種		近遠心径	唇舌径	歯冠長	舌側面窩の分類	齲歯	歯石	咬耗部位・咬耗度	咬合型
上顎切歯	右	2	7.1	6.6	9.9			切縁に象牙質露出。	弱鉄状咬合
		1	8.3	7.2	11.6	4		遠心歯頸部に弱く切縁から近心辺縁隆線まで咬耗。象牙質露出。	弱鉄状咬合
	左	1	8.1	7.1	11.6	4		遠心歯頸部に弱く切縁から近心辺縁隆線まで咬耗。象牙質露出。	弱鉄状咬合
		2	7.1	6.4	10.1		近心歯頸部	切縁・近心・遠心隆線に象牙質露出。	弱鉄状咬合
上顎犬歯	右		6.0	9.4	6.6		近心歯頸部歯髓腔に達する齲蝕		
	左		7.7	8.0	8.4			高等部を中心に大きく象牙質露出。	
上顎小白歯	右	1	7.0	9.8	8.5				
上顎大白歯	左	1	8.9	10.8	7.4		近心歯頸部歯髓腔に至る	ほぼ全面象牙質露出。	

OT-2号基坑

歯種		近遠心径	唇舌径	歯冠長	舌側面窩の分類	齲歯	歯石	咬耗部位・咬耗度	咬合型
上顎切歯	右	2	7.0	6.3	9.6+		近心歯頸部・歯髓腔には至らず	切縁と遠心辺縁隆線に線から面状の象牙質が露出。	
		1	8.3	7.2	11.8+	4		切縁と近心辺縁隆線に線状の象牙質の露出。	
	左	1	8.2	7.0	11.5+	4	遠心歯頸部にC2あり歯髓腔に至らず 4.3 1.7mm		ごく弱い鉄状咬合
		2	7.1	6.4	9.0+			切縁に線状の象牙質の露出あり。	
上顎犬歯	左		7.6	8.2	8.1+			近心1/3に象牙質露出。	
上顎小白歯	右	2	6.0	9.3	6.8		遠心側歯頸部に線状の齲蝕	舌側の遠心側に広い線状の象牙質が露出。	
		1	7.2	9.6	8.5		金唇側に歯髓腔に至る齲蝕	舌側の遠心側に広い線状の象牙質が露出。	
上顎大白歯	左	1	8.8	10.9	6.4		近心歯頸部に歯髓腔に至る齲蝕あり。 5.1 2.7mm	5	

OT-1号基坑

歯種		近遠心径	唇舌径	歯冠長	棘突起の諸型	舌側面窩の分類	エナメル形成不全症?	齲歯	歯垢	咬耗部位・咬耗度	咬合型
上顎切歯	左	1	8.0	7.5	11.8		3	不明瞭	なし	切縁遠心半から遠心辺縁隆線にかけて象牙質がごく弱い線状に露出。	ごく弱い鉄状咬合
		2	7.0	?	?						
上顎犬歯	左		7.9							尖頭に象牙質露出。	
上顎小白歯	左	1	7.2							エナメル質のみの咬耗。	
		2	6.3							舌側咬頭に点状の象牙質露出	
上顎大白歯	左	1	9.6							4つの咬頭に点状の象牙質露出。	
		2	9.1							エナメル質のみに咬耗。	
		3	9.2							?	
下顎大白歯	左	1	10.4								
		2	10.4								
		3	9.0								



馬骨・馬歯について。

本遺跡で確認できた獣骨はすべてウマであった。このうち比較的遺存状態の良い3頭の歯について観察した。

### 1 AY-29号溝

中世遺構となる可能性のあるこの溝からは、1個体分のウマが出土している。調査時の写真から見ると、四肢を縛った状態で埋められたようだ。

歯は、上顎臼歯が4本、下顎臼歯が2本である。前臼歯列長を西中川・松元に照合すると、小型在来馬の値に相当する。すなわち体高があ115cm程度と考えられる。歯冠高から推定される年齢は8～9才で、牡馬である。犬歯の有無を確認できないため、性別は不明である。

### 2 OT-2号溝

この溝は時期不明で、上層埋没土内から4本の歯のみの出土である。

1同様に小型在来馬程度の大きさで、牡馬である。犬歯の有無を確認できないため、性別は不明である。

### 3 出土遺構不明

安養寺森西遺跡で、歯のみの出土である。

上顎臼歯が2本、下顎臼歯が2本出土している。小型から中型在来馬程度の馬格と思われる。年齢は9才前後で、性別は不明である。

引用・参考文献

西中川駿・松元光春(1991) 遺跡出土骨同定のための基礎的研究「古代遺跡出土骨からみたわが国の牛・馬の渡来時期とその経路に関する研究」。平成2年度文部省科学研究費補助金(一般研究B)研究成果報告書、164-188。

西中川駿・松元光春(1989) 日本在来馬の骨に関する形態計測学的研究「古代遺跡出土骨からみたわが国の牛・馬の起源、系統に関する研究—特に日本在来種との比較—」昭和63年度文部省科学研究費補助金(一般研究B)研究成果報告書、15-26。

Levine,M.A.(1982) The use of crown height measurements and eruption-wear sequence to age horse teeth.In Wilson,B.,Grigson,C.And Pane,S.,eds.,Ageing and Sexing animal bones from archaeological sites.BAR British Series. 109, 223-250.

第16表 馬歯一覽

1. AY-29号溝

上顎白歯

		第2前白歯	第3前白歯	第4前白歯	第1後白歯			第2前白歯	第3前白歯
齒冠長	咬合面	33.8	27.0	26.6	23.1	齒冠長	咬合面	30.1	26.1
〃	中央	32.7	26.3	24.4	22.6	齒冠幅	前葉咬合面	12.0	14.5
齒冠幅	咬合面	22.5	24.9	25.8	24.0	〃	後葉咬合面	10.6	15.1
〃	中央	21.4	24.2	25.2		齒冠高	頰側	33.6	45.0
原錐幅	咬合面	8.8	10.1	11.0	11.3	〃	舌側		41.7
〃	中央	8.4	10.3			下後錐谷長		5.6	9.8
齒冠高	頰側	40.2	50.0	53.0	46.0	下内錐谷長		16.5	15.1
〃	舌側		55.0	52.3	444.0	double knot長	咬合面	13.6	15.7
咬合面の傾斜	度	100°	90°	85°	82°	咬合面の傾斜	度	100°	80°
中附錐幅	頰側	4.4	4.4	41	2.9	下内錐幅		5.8	6.6

2. OT-2号溝

下顎白歯

		第4前白歯	第1後白歯	第2後白歯	第3後白歯
齒冠長	咬合面	24	23	23	26.1
〃	中央				
齒冠幅	前葉咬合面		12.6	12.6	12.1
〃	〃中央				
〃	後葉咬合面		12.3	10.7	10.3
下後錐谷長		9	8.4	8.4	8
下内錐谷長		12.6	10.1	10.5	11.8
double knot長	咬合面	14.1	13.1	12.4	11.3
下内錐幅		5.5	4.3	4.1	4.2

3. 出土遺構不明

上顎白歯

下顎白歯

		第2前白歯	第1後白歯			第3前白歯	第2後白歯
齒冠長	咬合面	34	23.6	齒冠長	咬合面	20.7+	25.4
〃	中央	32.6	24.3	〃	中央		25.5
齒冠幅	咬合面	22.8	24.6	齒冠幅	前葉咬合面		13.5
〃	中央		23.9	〃	〃中央		
原錐幅	咬合面	8.2	12.1	〃	後葉咬合面		
〃	中央		12.2	〃	〃中央		13.3
齒冠高	頰側	40	50.1+	齒冠高	頰側	46.4	46
〃	舌側	39.3		〃	舌側	45.5	46
咬合面の傾斜	度	98°		下後錐谷長		10.5	9.2
中附錐幅	頰側	4.3	4	下内錐谷長		10	
〃	舌側	4	4.8	double knot長	咬合面	18.2	14
				〃	中央	17.3	
				咬合面の傾斜		90°	75°
				下内錐幅			4.5

## 第V章 成果と問題点

### 1 遺跡変遷の概要

安養寺森西・大館馬場・阿久津宮内の3遺跡の発掘調査によって得られた最も古い遺物は縄文土器である。ただし、洪水によって流されてきたものと思われ、生活の痕跡とは認められない。

最初の住人の痕跡は、弥生時代中期の阿久津宮内遺跡である。住居跡を確認することはできなかったが、多量の遺物を出土した。甕類のあることから住居跡に隣接するものと思われる。石器の出土が豊富で、特に接合資料があったことから、石器製作址の可能性のある資料となった。

この後、古墳時代初頭、石田川期まで遺物は途切れる。大館馬場遺跡には氾濫層下からみつかった竪穴住居と思われる遺構がある。この時期の遺物は畠の耕作土内から広く出土している。畠の開墾が石田川期に行われたのか、この時期の集落廃棄後に作られたのか不明だが、あまり時間をおかないものと思われる。

畠の時期を決定できる資料にFAの降下面がある。FAの検出され面は限られていたが、耕作で鋤きこんだものではなく、直接降下したものと思われる。この時期は、かなり広い範囲に畠が作られたものと思われる。反面、居住域は離れていたようで、煮沸土器の出土は少ない。

氾濫による土砂の堆積はこの地域の景観を一変させたようだが、土地利用の様子では多くの情報を残した。大館馬場遺跡では畠残り重複が確認できた。畠を移動しながら、連作障害を避けるか、地味の回復を待つ工夫が見られる(註1)。氾濫の時期については確証が得られなかった。氾濫層土中に榛名山二ツ岳を給源とする角閃石が見られることからFAもしくはFPに伴うものであろうが、畠が連続して耕作されないことと洪水層からFA層まで間層のあることをから、FPの時期を想定するべきと考える。

安養寺森西遺跡の北西側で古墳時代末から平安時代前半にかけての集落が広がる。刻書のある紡錘車

や、奈良三彩片などの特殊遺物もみられる。平安時代後半は、竪穴住居が離れて散在する傾向があり、阿久津宮内遺跡にも2軒の住居がある。

鎌倉時代に方二町の館が築かれ、南北朝時代以降には安養寺となった。安政年間の絵図に残るように十二坊のある大規模な寺院である。火葬土坑群や、墓壇は中世のこの寺との関連で理解したい。しかし、江戸時代の井戸が多数みつかったことと、この絵図に見られる調査地域が畠地となっていることは符合しなかった。

「安政三年」(1856)の村絵図に安養寺地区の様子が明瞭に記されている。中世館跡を推測するうえで貴重な資料となったが、近世の集落については、調査の成果と必ずしも合致しなかった。館の西側、安養寺森西遺跡B・L区地点付近は多数の井戸があり、住居域を画すと思われる溝がある。出土遺物にも江戸時代後半のものが多かったが、絵図にはこの村落の痕跡は記されていない。

### 2 古代の特筆される遺物

AY-33号住居跡出土の紡錘車には「長鷹」「法嚴」等の刻書がみられた。またAY-15号住居跡出土の奈良三彩壺破片等の特殊遺物があり、官衙または寺院の付存在が示唆される資料である。

AY-3号住居跡出土の土錘の孔中から炭化した紐がみつかった。住居の屋根からつすようにして保管してあったものであろうか。その他にも土錘の出土は多く、13軒の住居から25点を出土した。まとめて出土する例は3号住居跡の7点が最多で、まとめて出土する例はない。網ごと住居の中に保管する性格の遺物ではないようであり、県内の他の遺跡でも同様の傾向であろう(註2)。このような出土のしかたは従来いわれている投網用の土錘としては不自然である。補修用の土錘を数個だけ住居内で管理し、定期的に見回る漁場で補修する仕掛け網的な用法が考えられよう。民俗例ではさし網と呼ばれるものがこれにあたる。(註3)



### 3 中世館跡と石造物

安養寺森西遺跡のD区で調査した溝跡は、形状および出土遺物から、中世の館を区画する掘跡と考えられる。かねてから、この遺跡の東側に位置する明王院（後述）の周囲には掘跡の痕跡があることから、中世の館跡と推定されていた。また、安政三（1856）年の「安養寺村絵図」を見ると、不動堂と大坊（現在の明王院）を中心に約二町四方の堀と土塁がめぐり、周囲には十一の坊（塔頭）や道・畑などが描かれており、調査で検出された溝跡は、まさにこの不動堂をめぐり堀の南西角にあたる部分と考えられ、本調査はこの絵図を裏付け、中世の館跡の存在を証明することとなった。

現在の明王院は、正式寺号を呑嶺山明王院安養寺と称し、寺伝によると寺は康平四（1061）年に源頼義により創建され、新田義重により中興、後に新田義貞が元弘三（1233）年に後醍醐天皇の勅命により七堂伽藍十二坊を再建したと伝えられる。また、寺の不動堂に安置された不動明王は、元弘三年の新田義貞による鎌倉攻めの折りに、山伏に変化して越後の新田一族に急を触れ回ったとの伝説から、「新田触不動」と称され、現在も親しまれている。この明王院の寺号や字名にも残る「安養寺」について考えてみたい。

安養寺の創建時期についての史料は寺伝の外に明らかではないが、長楽寺（新田郡尾島町世良田所在）に残る「長楽寺系図」によると、義貞の祖父基氏の弟貞氏には「安養寺律師」と付記され、また、「新田岩松系図」には基氏の兄快義（僧名）に「安養寺律師」と記されていることから、その所在地は明らかではないもの、鎌倉時代には既に「安養寺」が存在していたことは確かである。

後に安養寺の名は、「安養寺殿追善料所」（「長楽寺文書」）や「安養寺義貞跡」（「正本文書」）など新田義貞を示す名として史料に記されている。このように、安養寺は新田氏に縁の深い寺であり、後に新田義貞の代名詞ともなる寺であったことは史料から明らかである。

では、史料に記された「安養寺」と現在の明王院との関係はいかなるものであろうか。明王院を新田氏と結びつける史料として、寺に現存する源義助銘の板碑がある。この板碑は昭和八年に寺の境内より出土したもので、「康永元年」（1342年）の紀年銘と共に、「前刑部卿源義助」の名が刻まれている。この人物は、新田義貞の弟の脇屋義助であり、境内からこの板碑が出土したことは、この寺が義助と関係が深かったことを示している（註4）。また、安養寺森西遺跡の調査において、径30センチ程を測る大型の凝灰岩製五輪塔風輪（第303図参照）が出土しており、寺の境内に現存する大型の五輪塔地輪・水輪と対になるものであろう。この石材は笠懸村で産出する凝灰岩で、同種の石材を用いた建治二（1276）年銘の大型の宝塔が長楽寺の文殊山に現存し（重要文化財指定）、五輪塔の年代もこれに近く、新田氏関連の遺物と推定される。これら新田氏に関わる遺物が明王院の地に残されていることから考えて、その寺域は明らかではないが、「安養寺」は現在の明王院の地に存在していた可能性が高い。

前述のとおり、明王院の地は中世の館跡と推定される。ここで、明王院の前身が安養寺であるとすれば、館との関係が不可解となる。一般的に中世の館跡が、後に寺院となる例は知られており、新田荘内の例では反町館などがこれに当たる。しかし、明王院の場合は、前述の安政三年の「安養寺絵図」に見られるような伽藍配置と成った年代は明らかではないものの、館の推定年代である14世紀代には、少なくとも「安養寺」と呼ばれていた時期を含んでいるものと考えられる。では、館と安養寺との関係はいかなるものであろうか。これには、二通りの考え方ができる。ひとつには、安養寺がこの地に存在していたものの、既に廃寺となり、地名として「安養寺」の名が残り、この地へ館が造られ、後に明王院と成ったとの解釈。もうひとつには、安養寺は館の一部に存在し（堂宇か）、館の廃絶後に明王院と成ったとの解釈ができる。ここで問題となるのは、前述の脇屋儀助の供養板碑の存在である。義貞の弟の供

養板碑が館に造立されたと考えるよりは、館の中にあつた安養寺（堂）付近に造立されたと考える方が妥当ではないであろうか。このように考えると、安養寺は館の一部に堂宇として存在し、館の主は文書に記されるとおり、「安養寺義貞跡」、すなわち新田義貞であろうと考えられる。しかし、義貞の館跡は現在の太田市由良にあつたとされている。明王院に存在した館は移転されたものか、または、同時期に複数存在した義貞館のひとつであつたとも考えられる。

安養寺関係年表

1061年	源頼義 安養寺を創建（寺伝） 新田義重 安養寺を中興（寺伝） 「安養寺律師」貞氏（「長楽寺系図」） 「安養寺律師」快義（「新田岩松系図」）
1276年	長楽寺第五世住寺院豪、凝灰岩製宝塔造 このころ安養寺に同石製五輪塔造立される（地輪出土）
1301年	延慶三年銘板碑（出土品）
1333年	新田義貞 安養寺再建、七堂伽藍・十二坊建立（寺伝）
1342年	前刑部卿源義助銘板碑造立 足利尊氏 長楽寺に八木沼郷の一部を「安養寺殿追善料所」として寄進（「長楽寺文書」）
1350年	足利尊氏 岩松禅師頼宥に「安養寺義貞跡」所領を与える。（「正木文書」）
1361年	延文六年銘板碑（出土品）
1365年	貞治二二年銘板碑（出土品）
1463年	応康十年銘板碑（出土品）
1505年	永正二年銘板碑（出土品）
1856年	「安養寺村絵図」描かれる

#### 4 近世の遺構と遺物

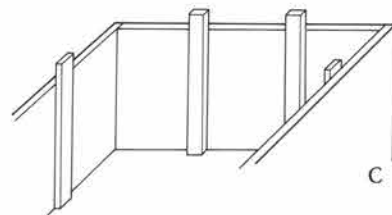
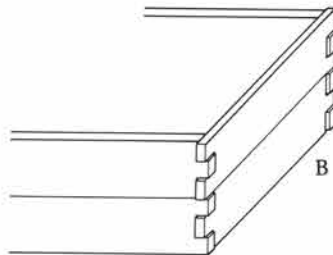
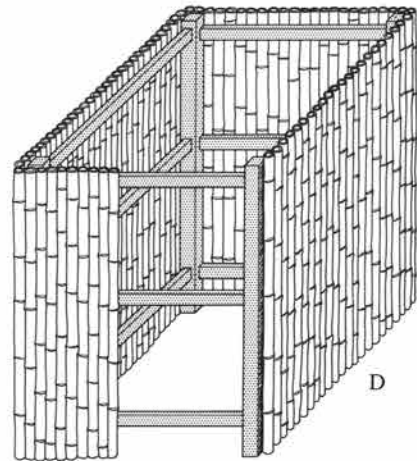
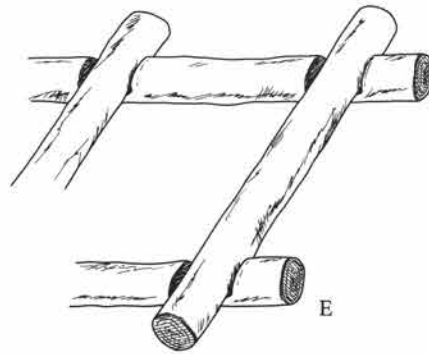
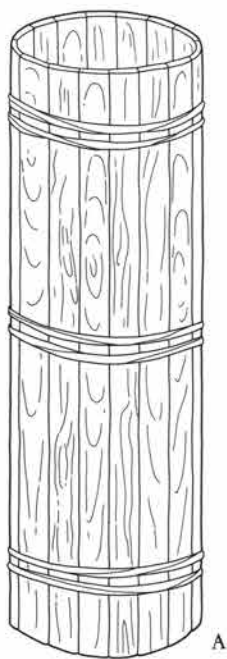
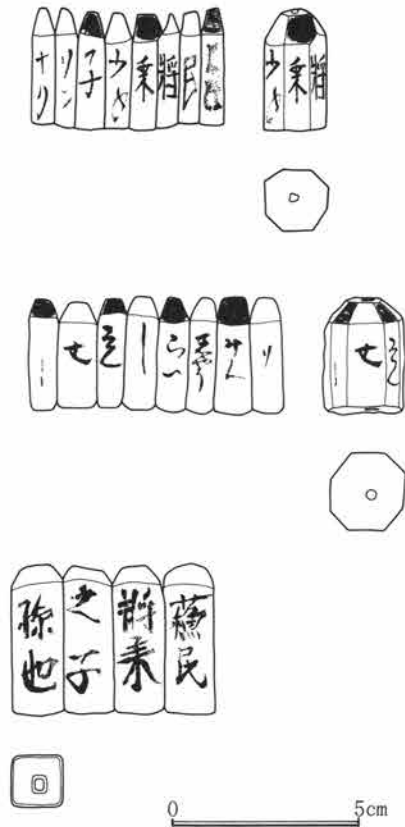
井戸は土坑について数多く調査された遺構であり、近世遺物の大半は井戸から出土したものである。

遺跡は伏流水の豊富な砂質土上にあり、地下水面までは浅く、現在でも付近の畑の灌漑には鉄パイプを5～6メートル打ち込むだけでポンプアップが可能である。ただし、井戸の掘削には壁面が脆いため、条件は悪い。特に掘削後にも壁面の保持には工夫が必要であつたはずである。崩落のため完掘できなかった井戸が多いが、想定復元した井戸枠の模式図を第362図下に示した（註5）。

Aとしたのは桶を埋設して井戸枠とするもので、桶に底板の圧痕が残る転用品（AY-1・11）と、底板の痕跡のない専用品（AY-9・11）がある。専用品は底面側内面を面取りしており、側面に木釘を使用するものが多い。AY-9・11には複数の桶を組み合わせて使用しているが、補修に加えたものようである。AY-11には転用品と専用品の両者がみられる。桶を使用する井戸からは近世遺物が出土しており、安養寺森西遺跡に限られている。板材で方形の井戸枠を作つたもので、ほぞ付きのものをB、ほぞなしのものをCとした。BC併用にAY-7、CにOT-13がある。竹や小枝で方形の井戸枠をつくるものをDとした。OT-10、AK-8・15などがあり、近世遺物の少ない区域の井戸である。なおAY-17はDの円形である可能性がある。その他に板碑を並べたAY-17、曲物を据えたと思われるOT-7、木臼を据えたOT-11などきわめて多彩な井戸枠がみられるが、阿久津宮内遺跡で顕著なように、井戸枠の見られないものが最も多い。

Eは桶使用の枠の外側に組まれたもので、井戸中段の平坦面に設けられていた。補修時の足場用のものと思われる。

AY-9号井戸底面から6点の蘇民将来護符が出土した。このうち図示可能な3点を示した。蘇民将来は尾島町長楽寺の北側にある八坂神社で配布されたものと地元では伝えられている。現在に残るとしては信濃国分寺が有名で、六角柱に「大福長者蘇民将来子孫人也」と記されている(註6)。本遺跡出土品は漢字・かな・カナの入り乱れる字種や、内容、四角柱・八角柱の形など統一性はみられないが、すべてヤナギ材を使用することでは一致している。いずれにも貫通孔がみられ、陸奥国分寺例のように紐を通し吊り下げる用途が考えられよう。なお、第362図上の実測図は保存処理後のもので、出土直後の状態より若干縮んでいる。



第362図 蘇民将来(上)と井戸模式図(下)

註

- 1 休閒農法と呼称されている。  
能登健 1993 「尾島町の水田と島を探る」  
『尾島町誌』
- 2 荒砥天之宮遺跡にまとまった出土例がある  
『荒砥天之宮遺跡』 1988 (財)群馬県埋蔵  
文化財調査事業団
- 3 『宍道湖の漁具・漁法』 宍道町教育委員会  
1989
- 4 真偽論争のあった学史上でも著名な板碑である。  
縣敏夫 1987 「板碑研究論争」『論争学説  
日本考古学』 雄山閣
- 5 古泉弘 1987 『江戸の考古学』  
ニュー・サイエンス社
- 6 『蘇民将来符』 上田市立 信濃国分寺  
資料館 1989



# 報告書抄録

フリガナ	アンヨウジモリニシセキ オオタチハイセキ アクツミヤウチセキ
書名	安養寺森西遺跡・大館馬場遺跡・阿久津宮内遺跡
副書名	一般国道17号(上武道路)改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告
シリーズ番号	第190集
編著者名	飯田 陽一
編集機関	(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
編集機関所在地	〒377 群馬県勢多郡北橋村下箱田784-2
発行年	西暦1995年3月

フリガナ 所収遺跡名	フリガナ 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
アンヨウジ モリニシ 安養寺森西	群馬県新田郡 尾島町安養寺	10481		36° 15' 21"	139° 18' 20"	1985.8~9 1987.11~ 1988.10~	26,700	道路建設
種別	主な時代	主名遺構		主な遺物			特記事項	
生産 居住 墓 その他	古墳 奈良平安 鎌倉 鎌倉室町 中近世	畠 竪穴住居39軒 館 掘立柱建物 墓坑7基 井戸21基 溝35条		土師器 土師器・須恵器・鉄製品・土錘 銅銭・鉄製品 木製品・陶磁器・土器・石製品 土器・陶磁器・石製品			方二町区画の館堀の一部	

フリガナ 所収遺跡名	フリガナ 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
オオタチ ババ 大館馬場	群馬県新田郡 尾島町大館	10481		36° 15' 10"	139° 18' 33"	1987.10 ~1988.3	8,100	道路建設
種別	主な時代	主名遺構		主な遺物			特記事項	
居住 生産 居住 墓 その他	古墳 鎌倉室町	竪穴住居1軒 畠 掘立柱建物 墓坑2基 火葬土坑6基 溝6条 井戸21基		土師器 土師器 銅銭 陶磁器・土器 陶磁器・木製品・土器・石製品				

フリガナ 所収遺跡名	フリガナ 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
アクツ ミヤウチ 阿久津宮内	群馬県新田郡 尾島町阿久津	10481		36° 15' 05"	139° 18' 40"	1985.4~8 1987.8~ 11	12,200	道路建設
種別	主な時代	主名遺構		主な遺物			特記事項	
居住 生産 居住 墓 その他	弥生 古墳 平安 中近世 中世 中近世	包舎層 畠 竪穴住居2軒 掘立柱建物2棟 墓坑1基 溝9条 井戸16基		弥生時代土器・石器 土師器・須恵器 土師器・須恵器			石器製作跡の可能性	

群馬県埋蔵文化財調査事業団  
発掘調査報告書第190集

安養寺森西遺跡  
大館馬場遺跡  
阿久津宮内遺跡  
(本文編)

一般国道17号(上武道路)改築工事に  
伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

平成7年3月20日 印刷

平成7年3月27日 発行



編集・発行／(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団

勢多郡北橘村大字下箱田784番地の2

電話(027)952-2511(代表)

印刷／上毎印刷工業株式会社